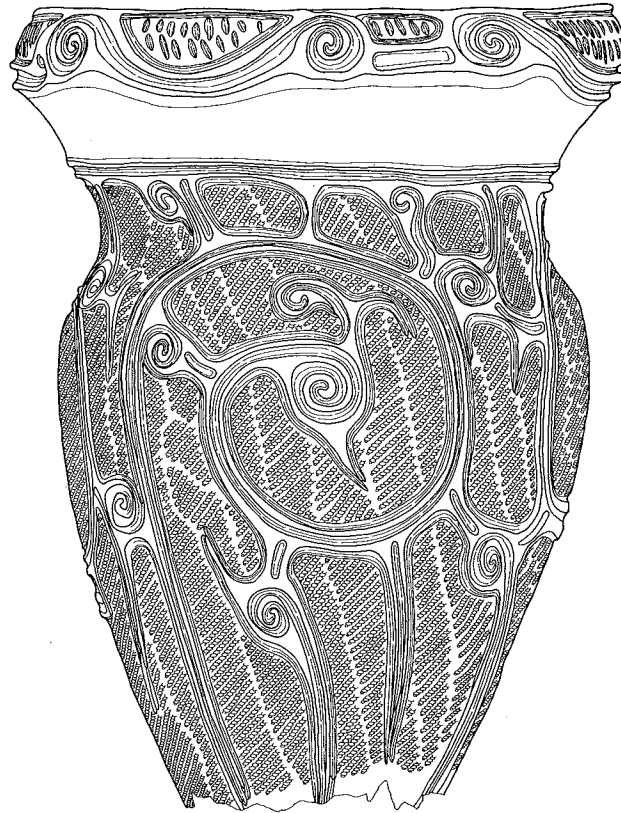


大館遺跡群

大館町遺跡

——平成6・7年度発掘調査概報——



1997. 3

盛岡市教育委員会

大館遺跡群

大館町遺跡

——平成6・7年度発掘調査概報——

1997. 3

盛岡市教育委員会

序 言

盛岡市の北西部、雫石川北岸の厨川地区は多くの埋蔵文化財を包蔵する地域として知られています。特に大館町・大新町を中核とする広範な大館遺跡群には、古くは約12,000年前の縄文時代草創期から約400年前の中世城館まで長期にわたる遺跡が残されています。

江戸時代には藩主の狩猟の場とされた事が古文書に記録されているように、昭和20年頃まで豊かな自然に恵まれた地域でしたが、近年の宅地化は地下に埋もれていた貴重な先人達の足跡にも影響を及ぼすに至りました。

この地域の調査は、昭和25年に小岩末治氏によって縄文時代から平安時代の遺跡として紹介されたのを始め、昭和50年にかけて岩手大学の板橋源教授や草間俊一教授により学術調査がおこなわれています。

昭和55年からは宅地造成や公共施設建設が本格化かつ大規模におこなわれるようになったため、盛岡市教育委員会が主体となり事前の調査を継続してきたものです。

この概報で報告する大館町遺跡第54次調査は調査地の遺構密度が濃い事から平成6年度と7年度にわけて実施したものです。調査の結果、縄文時代中期を主体とした多くの遺構・遺物が検出され、盛岡市周辺の縄文時代を知るうえでの貴重な成果をおさめる事ができました。

今後はこれまでの成果を踏まえ、遺跡の保存と空閑地の積極的な活用をはかることが郷土の歴史の理解の一助になるものと確信いたします。

最後になりましたが、調査を実施するにあたり御協力くださいました地権者並びに関係各位の皆様には厚く御礼申し上げます。

平成9年3月

盛岡市教育委員会

教育長 佐々木 初 朗

例 言

1. 本書は盛岡市大館町所在、大館遺跡群大館町遺跡第 54 次（平成 6・7 年度）発掘調査概報である。
2. 遺構の平面表示は、平面直角座標第 X 系を座標変換した調査座標で表示した。
 - ・調査座標軸方向 第 X 系に準ずる
 - ・調査座標原点 X-32,000.000 Y+24,000.000
3. 高さは標高値をそのまま使用した。
4. 土層図は堆積のあり方を重視し、線の太さによって堆積の違いをあらわした。

土層注記は層理ごとに本文に記載し、個々の層位については特記事項のない限り割愛した。なお層相の観察にあたっては『新版標準土色帖』（1994 小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業(株)発行）を参考にした。
5. 遺構挿図中のナンバーは遺物挿図ナンバーを表したものである。
6. 大館遺跡群の遺構記号及びナンバーは次のとおりとした。

	遺 構	記号	遺 構	記号		時 代	番 号
記 号	縦 穴 住 居 跡	R A	炉 跡	R F	番 号	縄 文 ～ 弥 生	1001～7999
	建 物 跡	R B	溝 跡	R G			
	柱 列 跡	R C	配 石 ・ 集 石	R H		古 代	8001～8999
	土 坑	R D	井 戸 跡	R I			
	縦 穴 跡	R E	そ の 他	R Z			
大館堤遺跡 1001～1999・大館町遺跡 2001～5999・大新町遺跡 6001～6999 小屋塚遺跡 7001～7999・前九年遺跡 7501～7999							

7. 遺構の挿図中、説明する当該遺構については実線であらわした。なお、説明遺構を掘り込む新期の遺構については二点鎖線であらわした。
8. 遺構の所属時期は、施設と床面からの出土土器と他遺構との重複関係をもって遺構時期とした。
9. 遺構及び遺物包含層からの出土石器、土製品、石製品及び木製品は出土層位を優先し、器種ごとにまとめた。また、埋土中からの遺構時期以降の土器も埋没過程での遺構遺物として扱ってあわせて掲図した。

なお、遺構時期以前の土器については遺構外遺物としてまとめた。
10. 本書の編集執筆は、教育委員会文化課文化財係似内啓邦・太田代由美子・神原雄一郎が担当し、八木光則・室野秀文・藤岡光男・菊池与志和・津嶋知弘・三浦陽一・黒須靖之・佐々木真史が補助した。
11. 本遺跡群調査関係で盛岡市教育委員会刊行の文献は次の 14 冊がある。
 - 『大館町遺跡－昭和 51 年度発掘調査報告』・1977
 - 『大館遺跡群（大新町遺跡・大館町遺跡）昭和 55 年度～平成元年度発掘調査概報』・1981～1990（10 冊）
 - 『大館遺跡群（大館町遺跡）平成 2～4 年度発掘調査概要』・1991～1993（3 冊）
12. 発掘調査に伴う出土遺物および諸記録は、盛岡市教育委員会に保管している。
13. 使用した地図は建設省国土地理院発行の 5 万分の 1「盛岡」の地形図である。

目 次

序 言

例 言

目 次

挿図目次

表 目 次

図版目次

I 調査経過

1. これまでの調査..... 1
2. 平成7・8年度の発掘調査体制..... 7

II 調査内容

1. 遺構の検出状況..... 8
2. 縄文時代の遺構と遺物 11
3. 古代以降の遺構 240
4. 遺物包含層 242
5. 調査のまとめ 273

挿 図 目 次

第 1 図	大館遺跡群の位置	1
第 2 図	大館遺跡群調査全体図	5・6
第 3 図	大館町遺跡第 54 次調査区全体図	9・10
第 4 図	R E 2201 竪穴跡、R D 2142～2144・2150 土坑	13
第 5 図	R D 2140 土坑	14
第 6 図	R E 2201 竪穴跡出土遺物出土状況	15
第 7 図	R E 2201 竪穴跡出土土器(1)	16
第 8 図	R E 2201 竪穴跡出土土器(2)	17
第 9 図	R E 2201 竪穴跡出土石器	18
第 10 図	R A 2216・2219 竪穴住居跡	19
第 11 図	R A 2197 竪穴住居跡(1)	21
第 12 図	R A 2197 竪穴住居跡(2)	22
第 13 図	R A 2197 竪穴住居跡出土土器	23
第 14 図	R A 2197 竪穴住居跡出土石器(1)	24
第 15 図	R A 2197 竪穴住居跡出土石器(2)	25
第 16 図	R A 2197 竪穴住居跡出土石器(3)・土製品	26
第 17 図	R A 2154・2198・2199 竪穴住居跡(1)	28
第 18 図	R A 2199 竪穴住居跡(2)	29
第 19 図	R A 2198 竪穴住居跡出土土器・石器	30
第 20 図	R A 2199 竪穴住居跡出土土器(1)	32
第 21 図	R A 2199 竪穴住居跡出土土器(2)	33
第 22 図	R A 2199 竪穴住居跡出土土器(3)	34
第 23 図	R A 2199 竪穴住居跡出土土器(4)	35
第 24 図	R A 2199 竪穴住居跡出土石器(1)	36
第 25 図	R A 2199 竪穴住居跡出土石器(2)	37
第 26 図	R A 2199 竪穴住居跡出土石器(3)	38
第 27 図	R A 2199 竪穴住居跡出土石器(4)	39
第 28 図	R A 2199 竪穴住居跡出土石器(5)	40
第 29 図	R A 2199 竪穴住居跡出土石器(6)・土製品・石製品、R A 2154 出土石器	41
第 30 図	R A 2190・2192 竪穴住居跡(1)	42
第 31 図	R A 2190・2192 竪穴住居跡(2)	43
第 32 図	R A 2190 竪穴住居跡出土土器(1)	45

第 33 図	R A 2190 竪穴住居跡出土土器(2)	46
第 34 図	R A 2190 竪穴住居跡出土土器(1)	47
第 35 図	R A 2190 竪穴住居跡出土土器(2)	48
第 36 図	R A 2190 竪穴住居跡出土土器(3)	49
第 37 図	R A 2190 竪穴住居跡出土土器(4)	50
第 38 図	R A 2190 竪穴住居跡出土土器(5)	51
第 39 図	R A 2190 竪穴住居跡出土土製品	52
第 40 図	R A 2192 竪穴住居跡出土土器・石器・土製品	54
第 41 図	R A 2200 竪穴住居跡	55
第 42 図	R A 2200 竪穴住居跡出土土器(1)	59
第 43 図	R A 2200 竪穴住居跡出土土器(2)	60
第 44 図	R A 2200 竪穴住居跡出土土器(3)	61
第 45 図	R A 2200 竪穴住居跡出土土器(4)	62
第 46 図	R A 2200 竪穴住居跡出土土器(5)	63
第 47 図	R A 2200 竪穴住居跡出土土器(6)	64
第 48 図	R A 2200 竪穴住居跡出土土器(7)	65
第 49 図	R A 2200 竪穴住居跡出土土器(8)	66
第 50 図	R A 2200 竪穴住居跡出土土器(9)	67
第 51 図	R A 2200 竪穴住居跡出土土器(10)	68
第 52 図	R A 2200 竪穴住居跡出土土器(11)	69
第 53 図	R A 2200 竪穴住居跡出土土器(1)	70
第 54 図	R A 2200 竪穴住居跡出土土器(2)	71
第 55 図	R A 2200 竪穴住居跡出土土器(3)	72
第 56 図	R A 2200 竪穴住居跡出土土器(4)	73
第 57 図	R A 2200 竪穴住居跡出土土器(5)	74
第 58 図	R A 2200 竪穴住居跡出土土器(6)	75
第 59 図	R A 2200 竪穴住居跡出土土製品	76
第 60 図	R E 2210 竪穴跡、R A 2214・2220・2221 竪穴住居跡(1)	77
第 61 図	R A 2220・2221 竪穴住居跡(2)	78
第 62 図	R A 2214 竪穴住居跡出土土器	79
第 63 図	R A 2214 竪穴住居跡出土土器・土製品	81
第 64 図	R A 2220 竪穴住居跡出土土器・石器・土製品	82
第 65 図	R A 2221 竪穴住居跡出土土器・土製品	83
第 66 図	R A 2207 竪穴住居跡	84
第 67 図	R A 2207 竪穴住居跡出土土器	85
第 68 図	R A 2207 竪穴住居跡出土土器(1)	86
第 69 図	R A 2207 竪穴住居跡出土土器(2)	87
第 70 図	R A 2209・2212 竪穴住居跡	89

第 71 图	R A 2209 竖穴住居跡出土土器	90
第 72 图	R A 2209 竖穴住居跡出土石器・土製品	91
第 73 图	R A 2212 竖穴住居跡出土土器(1)	92
第 74 图	R A 2212 竖穴住居跡出土土器(2)・石器・土製品	93
第 75 图	R A 2193・2196・2222 竖穴住居跡(1)	96
第 76 图	R A 2193・2196・2222 竖穴住居跡(2)	97
第 77 图	R A 2193 竖穴住居跡出土土器	98
第 78 图	R A 2193 竖穴住居跡出土石器(1)	99
第 79 图	R A 2193 竖穴住居跡出土石器(2)	100
第 80 图	R A 2193 竖穴住居跡出土石器(3)	101
第 81 图	R A 2193・2196 竖穴住居跡出土石器・土製品	102
第 82 图	R A 2218 竖穴住居跡	104
第 83 图	R A 2218 竖穴住居跡出土土器	105
第 84 图	R A 2218 竖穴住居跡出土石器(1)	106
第 85 图	R A 2218 竖穴住居跡出土石器(2)・土製品・石製品	107
第 86 图	R A 2185 竖穴住居跡	109
第 87 图	R A 2185 竖穴住居跡出土土器(1)	111
第 88 图	R A 2185 竖穴住居跡出土土器(2)	112
第 89 图	R A 2185 竖穴住居跡出土石器(1)	113
第 90 图	R A 2185 竖穴住居跡出土石器(2)	114
第 91 图	R A 2185 竖穴住居跡出土石器(3)	115
第 92 图	R A 2185 竖穴住居跡出土石器(4)	116
第 93 图	R A 2185 竖穴住居跡出土石器(5)	117
第 94 图	R A 2185 竖穴住居跡出土石器(6)	118
第 95 图	R A 2185 竖穴住居跡出土石器(7)	119
第 96 图	R A 2185 竖穴住居跡出土石器(8)	120
第 97 图	R A 2185 竖穴住居跡出土土製品	121
第 98 图	R A 2187・2194・2217 竖穴住居跡(1)	123
第 99 图	R A 2187・2194・2217 竖穴住居跡(2)	124
第 100 图	R A 2187 竖穴住居跡出土土器	124
第 101 图	R A 2187 竖穴住居跡出土石器(1)	125
第 102 图	R A 2187 竖穴住居跡出土石器(2)・土製品	126
第 103 图	R A 2194 竖穴住居跡出土土器	127
第 104 图	R A 2194 竖穴住居跡出土石器(1)	128
第 105 图	R A 2194 竖穴住居跡出土石器(2)・土製品	129
第 106 图	R A 2217 竖穴住居跡出土土器(1)	130
第 107 图	R A 2217 竖穴住居跡出土土器(2)	131
第 108 图	R A 2217 竖穴住居跡出土石器(1)	132

第 109 図	R A 2217 竪穴住居跡出土石器(2)	133
第 110 図	R A 2217 竪穴住居跡出土石器(3)	134
第 111 図	R A 2217 竪穴住居跡出土土製品	135
第 112 図	R A 2203 竪穴住居跡	136
第 113 図	R A 2203 竪穴住居跡出土土器	137
第 114 図	R A 2203 竪穴住居跡出土石器(1)	138
第 115 図	R A 2203 竪穴住居跡出土石器(2)	139
第 116 図	R A 2204 竪穴住居跡	140
第 117 図	R A 2204 竪穴住居跡出土土器(1)	141
第 118 図	R A 2204 竪穴住居跡出土土器(2)	142
第 119 図	R A 2204 竪穴住居跡出土石器(1)	143
第 120 図	R A 2204 竪穴住居跡出土石器(2)	144
第 121 図	R A 2204 竪穴住居跡出土石器(3)・土製品(1)	145
第 122 図	R A 2204 竪穴住居跡出土土製品(2)・石製品	146
第 123 図	R A 2205・2206・2208 竪穴住居跡(1)	148
第 124 図	R A 2205・2206・2208 竪穴住居跡(2)	149
第 125 図	R A 2205 竪穴住居跡出土土器・石器・土製品	150
第 126 図	R A 2206 竪穴住居跡出土土器	151
第 127 図	R A 2206 竪穴住居跡出土石器(1)	152
第 128 図	R A 2206 竪穴住居跡出土石器(2)・土製品	153
第 129 図	R A 2208 竪穴住居跡出土土器・石器・木製品	155
第 130 図	R A 2186 竪穴住居跡	156
第 131 図	R A 2186 竪穴住居跡出土土器(1)	157
第 132 図	R A 2186 竪穴住居跡出土土器(2)	158
第 133 図	R A 2186 竪穴住居跡出土石器(1)	159
第 134 図	R A 2186 竪穴住居跡出土石器(2)	160
第 135 図	R A 2186 竪穴住居跡出土石器(3)	161
第 136 図	R A 2186 竪穴住居跡出土石器(4)	162
第 137 図	R A 2186 竪穴住居跡出土土製品・石製品	163
第 138 図	R E 2188 竪穴跡(1)	166
第 139 図	R E 2188 竪穴跡(2)	167
第 140 図	R E 2188 竪穴跡出土土器(1)	168
第 141 図	R E 2188 竪穴跡出土土器(2)	169
第 142 図	R E 2188 竪穴跡出土土器(3)	170
第 143 図	R E 2188 竪穴跡出土土器(4)	171
第 144 図	R E 2188 竪穴跡出土石器(1)	173
第 145 図	R E 2188 竪穴跡出土石器(2)	174
第 146 図	R E 2188 竪穴跡出土石器(3)	175

第 147 図	R E 2188 竪穴跡出土石器(4)	176
第 148 図	R E 2188 竪穴跡出土石器(5)	177
第 149 図	R E 2188 竪穴跡出土石器(6)	178
第 150 図	R E 2188 竪穴跡出土石器(7)	179
第 151 図	R E 2188 竪穴跡出土石器(8)	181
第 152 図	R E 2188 竪穴跡出土石器(9)	182
第 153 図	R E 2188 竪穴跡出土石器(10)	183
第 154 図	R E 2188 竪穴跡出土石器(11)	184
第 155 図	R E 2188 竪穴跡出土石器(12)	185
第 156 図	R E 2188 竪穴跡出土土製品	186
第 157 図	R E 2188 竪穴跡出土石器製品・木製品	187
第 158 図	R A 2189 竪穴住居跡(1)	189
第 159 図	R A 2189 竪穴住居跡(2)	190
第 160 図	R A 2189 竪穴住居跡出土土器(1)	191
第 161 図	R A 2189 竪穴住居跡出土土器(2)	192
第 162 図	R A 2189 竪穴住居跡出土土器(3)	193
第 163 図	R A 2189 竪穴住居跡出土土器(4)	194
第 164 図	R A 2189 竪穴住居跡出土石器(1)	195
第 165 図	R A 2189 竪穴住居跡出土石器(2)	196
第 166 図	R A 2189 竪穴住居跡出土石器(3)	197
第 167 図	R A 2189 竪穴住居跡出土石器(4)	198
第 168 図	R A 2189 竪穴住居跡出土石器(5)	199
第 169 図	R A 2189 竪穴住居跡出土石器(6)	200
第 170 図	R A 2189 竪穴住居跡出土石器(7)	201
第 171 図	R A 2189 竪穴住居跡出土石器(8)	202
第 172 図	R A 2189 竪穴住居跡出土石器(9)	203
第 173 図	R A 2189 竪穴住居跡出土石器(10)	204
第 174 図	R A 2189 竪穴住居跡出土石器(11)	205
第 175 図	R A 2189 竪穴住居跡出土土製品(1)	206
第 176 図	R A 2189 竪穴住居跡出土土製品(2)・石製品	207
第 177 図	R A 2195 竪穴住居跡	209
第 178 図	R A 2195 竪穴住居跡出土土器(1)	210
第 179 図	R A 2195 竪穴住居跡出土土器(2)	211
第 180 図	R A 2195 竪穴住居跡出土石器(1)	212
第 181 図	R A 2195 竪穴住居跡出土石器(2)	213
第 182 図	R A 2195 竪穴住居跡出土石器(3)	214
第 183 図	R A 2195 竪穴住居跡出土土製品・石製品	215
第 184 図	R A 2202 竪穴住居跡(1)	217

第 185 図	R A 2202 竪穴住居跡(2)	218
第 186 図	R A 2202 竪穴住居跡出土土器	219
第 187 図	R A 2202 竪穴住居跡出土石器(1)	220
第 188 図	R A 2202 竪穴住居跡出土石器(2)	221
第 189 図	R A 2202 竪穴住居跡出土石器(3)・土製品	222
第 190 図	R A 2215 竪穴住居跡	225
第 191 図	R A 2215 竪穴住居跡出土土器(1)	226
第 192 図	R A 2215 竪穴住居跡出土土器(2)	227
第 193 図	R A 2215 竪穴住居跡出土土器(3)	228
第 194 図	R A 2215 竪穴住居跡出土石器(1)	229
第 195 図	R A 2215 竪穴住居跡出土石器(2)	230
第 196 図	R A 2215 竪穴住居跡出土石器(3)	231
第 197 図	R A 2215 竪穴住居跡出土石器(4)	232
第 198 図	R A 2215 竪穴住居跡出土土製品	233
第 199 図	R A 2215 竪穴住居跡出土石製品	234
第 200 図	R F 2191・2213・2223 炉跡	236
第 201 図	R F 2191 炉跡埋設土器	236
第 202 図	R D 2141・2145・2146～2149・2151・2152 土坑	239
第 203 図	R D 2151・2152 土坑出土土器・石器	239
第 204 図	R G 8706・8707 溝跡	241
第 205 図	遺物包含層、遺構外出土土器(1)	249
第 206 図	遺物包含層、遺構外出土土器(2)	250
第 207 図	遺物包含層、遺構外出土土器(3)	251
第 208 図	遺物包含層、遺構外出土土器(4)	252
第 209 図	遺物包含層、遺構外出土土器(5)	253
第 210 図	遺物包含層、遺構外出土土器(6)	254
第 211 図	遺物包含層、遺構外出土土器(7)	255
第 212 図	遺物包含層、遺構外出土土器(8)	256
第 213 図	遺物包含層、遺構外出土土器(9)	257
第 214 図	遺物包含層、遺構外出土土器(10)	258
第 215 図	遺物包含層、遺構外出土土器(11)	259
第 216 図	遺物包含層、遺構外出土土器(12)	260
第 217 図	遺物包含層、遺構外出土土器(13)	261
第 218 図	遺物包含層、遺構外出土土器(14)	262
第 219 図	遺物包含層、遺構外出土土器(15)	263
第 220 図	遺物包含層、遺構外出土土器(16)	264
第 221 図	遺物包含層、遺構外出土土器(17)	265
第 222 図	遺物包含層、遺構外出土土器(18)	266

第 223 図	遺物包含層、遺構外出土石器(1)	267
第 224 図	遺物包含層、遺構外出土石器(2)	268
第 225 図	遺物包含層、遺構外出土石器(3)	269
第 226 図	遺物包含層、遺構外出土石器(4)	270
第 227 図	遺物包含層、遺構外出土石器(5)	271
第 228 図	遺物包含層、遺構外出土石器(6)・土製品	272
第 229 図	検出遺構時期別変遷	275

表 目 次

表 1	大館町・大新町遺跡調査成果一覧(1)	2
表 2	大館町・大新町遺跡調査成果一覧(2)	3
表 3	大館町・大新町遺跡調査成果一覧(3)	4
表 4	大館町遺跡第 54 次調査検出竪穴住居跡、竪穴跡等一覧	276・277
表 5	大館町遺跡第 54 次遺構出土石器一覧(1)	284
表 6	大館町遺跡第 54 次遺構出土石器一覧(2)	285
表 7	大館町遺跡第 54 次遺構出土石器一覧(3)	286
表 8	大館町遺跡第 54 次遺構出土石器一覧(4)	287
表 9	大館町遺跡第 54 次遺構出土石器一覧(5)	288
表 10	大館町遺跡第 54 次遺構出土石器一覧(6)	289
表 11	大館町遺跡第 54 次遺構出土石器一覧(7)	290
表 12	大館町遺跡第 54 次遺構出土石器一覧(8)	291
表 13	大館町遺跡第 54 次遺構出土石器一覧(9)	292
表 14	大館町遺跡第 54 次遺構出土石器一覧(10)	293
表 15	大館町遺跡第 54 次遺構出土石器一覧(11)	294
表 16	大館町遺跡第 54 次遺構出土石器一覧(12)	295
表 17	大館町遺跡第 54 次遺構出土石器一覧(13)	296
表 18	大館町遺跡第 54 次遺構出土石器一覧(14)	297
表 19	大館町遺跡第 54 次遺物包含層出土石器一覧(1)	298

図 版 目 次

第 1 図版 大館遺跡群全景

第 2 図版 大館町遺跡第 54 次調査区全景

第 3 図版 R A 2185 ・ 2199 ・ 2203 竪穴住居跡、R E 2188 竪穴跡

第 4 図版 R A 2189 ・ 2190 竪穴住居跡

第 5 図版 R A 2185 ・ 2193 ・ 2197 ・ 2199 竪穴住居跡

第 6 図版 R E 2201 竪穴跡、R A 2202 ・ 2215 竪穴住居跡

第 7 図版 R A 2204 ・ 2205 ・ 2207 ・ 2212 竪穴住居跡

第 8 図版 R A 2207 ・ 2209 ・ 2212 ・ 2215 ・ 2220 竪穴住居跡、R G 8706 ・ 8707 溝跡

《遺物の表現について》

1. 土器

- a. 縄文時代早期に属する土器の実測図・拓本は1/2スケールとし、ほかは1/3スケールとした。
- b. 挿図の土器配列については、モチーフおよび施文技法でまとめた。
- c. 縄文時代の土器で隆線・沈線の表現は上端・下端の実線・破線で表し、陰影は表現していない。

2. 石器

- a. 剥片石器は2/3スケールとし、礫石器は1/3スケールとした。ただし、長大な礫石器は1/6スケールとしている。
- b. 石器の展開順序は、基本的には左に表面（本文では背面とする）、中央に右側縁、右に裏面（本文中では腹面とする一主要剥離面）を並べ、必要に応じて側縁および縦断面下に横断面を付け加えた。
- c. 挿図の配列は出土した層位順に配列し、さらに器種ごとにまとめた。
- d. 剥片石器の磨滅痕は網目スクリーントーンで示し、礫石器の自然面はドットで示した。

3. 土製品・石製品・木製品

- a. いずれも2/3スケールとした。
- b. 挿図の配列は出土した層位順とし、さらに器種ごとにまとめた。

☆なお、挿図中の記号番号は遺物の出土地点および出土層位を表している。

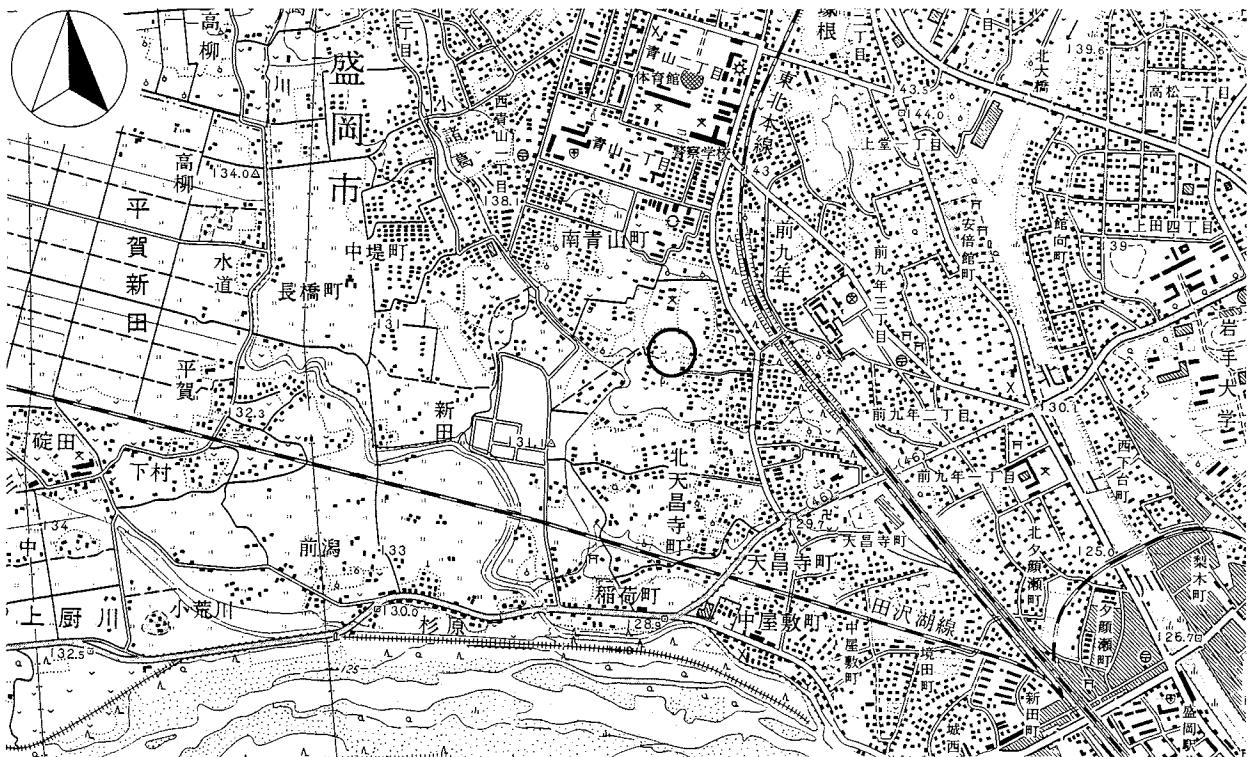
- (例) T 8 - B 10, B₁ ※1 遺跡全体を50 mメッシュで区切って大グリッドを設定し北西から西-東をA・B・C…のアルファベット、北-南は1・2・3…の数字を
↓ ↓ ↓ 付し、グリッドの呼称名はその組み合わせとした。
※1 ※2 ※3
- ※2 さらに50 mメッシュを2 mメッシュに分割し、小グリッドとした。北西から西-東をA~Y、北-南は1~25を付し、グリッドへの呼称名はその組み合わせとした。
- ※3 遺物の出土層位を表している。

I 調査経過

1. これまでの調査

大館遺跡群は盛岡市の北西部に位置し、雫石川北岸の火山灰砂台地南縁部に立地する。遺跡群は西から大館堤・大館町・大新町・小屋塚・前九年・館坂の6遺跡を包括したもので、当該地区における調査は大館町・大新町遺跡を中心に昭和55年度から調査を継続している。

大館町遺跡は、これまでの調査により東西約220m、南北約250mの範囲と推定されており、縄文時代中期中葉から後葉、東北地方の土器編年上のいわゆる大木8a・8b式期を主体とした竪穴住居跡群をはじめ、南端から西端部にかけては前期末葉から中期中葉の密度の濃い遺物包含層も確認されている。大新町遺跡は、大館町遺跡の東に隣接する台地に立地し、縄文時代草創期の爪形文土器群、早期前葉の竪穴住居跡及びこれに伴う押型文・沈線文土器が多量に出土したほか、中期の土坑（貯蔵穴）群や平安時代末期（11世紀頃）の竪穴・掘立柱建物跡等を検出している。大館町遺跡の東側に位置する小屋塚遺跡からは、中期の竪穴住居跡のほか、直径2mを越える円形のフラスコ形土坑（貯蔵穴）群が多数確認され、さらに東側に広がる前九年遺跡からも中期の竪穴住居跡が点在して検出されたほか、前期中葉の貝殻条痕文土器群、奈良時代の墓墳及び円形周溝跡などが確認されている。



第1図 大館遺跡群の位置(1:50,000)

大館町遺跡群の平成8年度までの調査成果を総括すると、精査した遺構は竪穴住居跡500棟余、竪穴20棟余、掘立柱建物跡15棟、土坑470基、溝跡17条などのほか遺物包含層がある。

遺跡名	次数	所在地	調査原因	面積	期間	検出遺構
大館町	1	大館町147-6	住宅新築	330㎡	55. 8.13~55.12. 6	縄文時代中期竪穴住居跡10棟 土坑12基、縄文時代遺物包含層 奈良時代竪穴住居跡1棟
大館町	2	大館町147-11	住宅新築	325㎡	55. 8.20~56. 7.27	縄文時代中期竪穴住居跡12棟 土坑6基、縄文時代遺物包含層 奈良時代竪穴住居跡1棟
大新町	3	大館町205-3	住宅新築	632㎡	56.10. 3~56.10.27	縄文時代土坑2基 早期~晚期遺物包含層
大新町	4	大新町205-3	住宅新築	520㎡	57. 4.21~57. 7.28	縄文時代中期竪穴住居跡2棟 土坑21基、縄文時代遺物包含層 平安時代竪穴住居跡3棟、建物6棟
大館町	5	大新町15-9	住宅新築	231㎡	57. 6.15~57. 8.13	縄文時代中期竪穴住居跡16棟 土坑21基
大館町	6	大新町3-5	住宅新築	230㎡	57. 6.18~57. 6.25	遺構なし、縄文時代土器数点出土
大新町	7	大新町205-8	住宅新築	196㎡	57. 6.18~57. 6.25	縄文時代中期竪穴住居跡2棟 土坑9基、早期遺物包含層
大館町	8	大新町16-1	宅地造成	589㎡	57. 9.13~57.10.22	縄文時代土坑7基
大館町	9	大新町16-1	宅地造成	400㎡	58. 4.11~58. 4.30	縄文時代中期竪穴住居跡2棟 土坑2基
大館町	10	大新町12-1	住宅新築	394㎡	58. 5. 6~58. 6.18	縄文時代中期竪穴住居跡4棟 竪穴4棟、土坑17基
大館町	11	大館町147-10	住宅新築	72㎡	58. 6.14~58. 7.30	縄文時代中期竪穴住居跡15棟 土坑5基、遺物包含層 奈良時代竪穴住居跡1棟
大館町	12	大新町16-1	宅地造成	720㎡	58. 9. 5~58.11.19	縄文時代中期竪穴住居跡1棟 竪穴3棟、土坑20基
大館町	13	大新町11-8 12-1	住宅新築	450㎡	58. 4. 9~59. 5.30	縄文時代中期竪穴住居跡3棟 竪穴3棟、土坑10基
大新町	14	大新町17-2	住宅増築	26㎡	59. 5. 7~59. 5.12	縄文時代早期遺物包含層
大館町	15	大新町16-1	宅地造成	726㎡	59. 7.16~59.10.22	縄文時代中期竪穴住居跡、竪穴 土坑
大新町	16	大新町2-5	住宅新築	77㎡	59.11.27~59.11.29	遺構なし。遺物僅少
大新町	17	大新町205-15	住宅新築	162㎡	60. 4. 8~60. 4.30	縄文時代土坑1基 早期遺物包含層
大新町	18	大新町10-11	住宅新築	15㎡	60. 5. 1~60. 5.18	縄文時代中期竪穴住居跡1棟 土坑1基
大新町	19	大新町5-14	住宅新築	332㎡	60. 6. 3~60. 7.30	縄文時代草創期~中期遺物包含層 中期土坑27基 平安時代溝跡2条
大新町	20	大新町205-39	住宅新築	174㎡	61. 8.28~61.10. 2	縄文時代早期遺物包含層 時期不明の柱穴

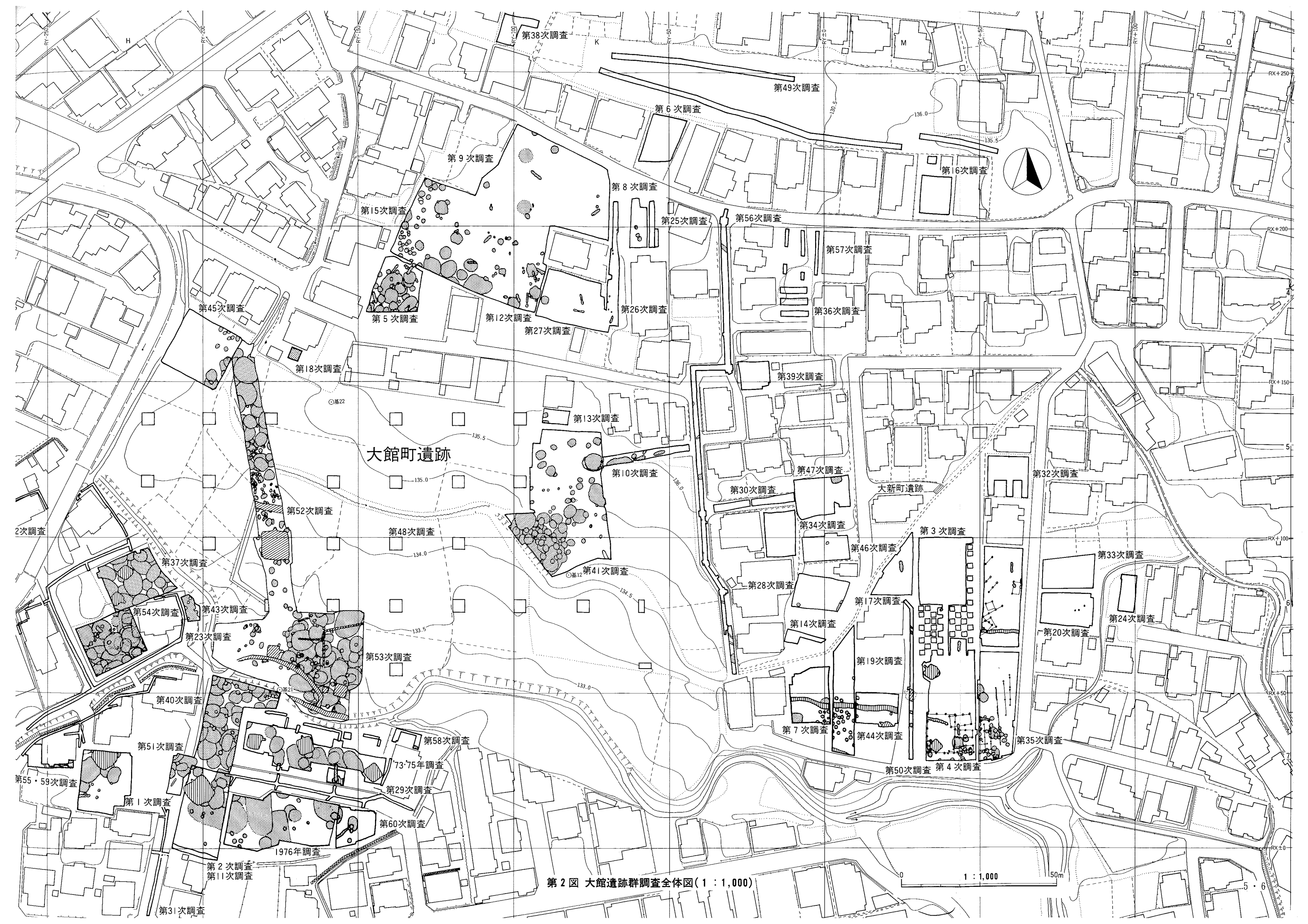
表1 大館町・大新町遺跡調査成果一覧(1)

遺跡名	次数	所在地	調査原因	面積	期間	検出遺構
大新町	21	大新町5-9	住宅新築	413㎡	61. 9.30~61.11.29	縄文時代草創期~早期遺物包含層 平安時代掘立柱建物跡5棟 柱列跡2列
大館町	22	大館町143-16	私設下水	72㎡	62. 4.13~62. 4.18	縄文時代中期遺物包含層
大館町	23	大新町7	私設下水	259㎡	62. 5.19~62. 8. 6	縄文時代中期竪穴住居跡37棟 土坑7基 奈良時代竪穴住居跡1棟、土坑4基
大新町	24	大新町3-10	住宅新築	60㎡	62. 6. 1~62. 6.10	縄文時代後期遺物包含層
大館町	25	大新町204-11	住宅改築	120㎡	62. 6.15~62. 6.17	縄文時代土坑3基
大館町	26	大新町16-15	私道整備	180㎡	62.10.15~62.10.24	縄文時代土坑2基
大館町	27	大新町16-52	住宅新築	320㎡	63. 4.13~63. 5.20	縄文時代土坑5基、小柱穴10口 遺物包含層
大新町	28	大新町17-31	住宅改築	161㎡	63. 5.24~63. 6.16	縄文時代土坑3基、小柱穴11個 遺物包含層
大館町	29	大新町6	私設下水	105㎡	63. 7. 9~63. 9.16	縄文時代中期竪穴住居跡11棟 遺物包含層 平安時代竪穴住居跡1棟、土坑1基
大新町	30	大新町13-8	私道整備	65㎡	63. 7.20~63. 7.26	縄文時代遺物包含層、小柱穴3口
大館町	31	大新町6	私設下水	66㎡	63.10. 5~63.10.29	縄文時代遺物包含層 古代溝跡1条
大新町	32	大新町205-39	住宅新築	133㎡	1. 4.10~ 1. 4.24	縄文時代早期~後期遺物包含層 時期不明の小柱穴8口
大新町	33	大新町5-9	住宅新築	169㎡	1. 4.19~ 1. 5.17	縄文時代早期~後期遺物包含層
大新町	34	大館町143-16	住宅改築	123㎡	1. 5.10~ 1. 6. 1	縄文時代土坑1基、遺物包含層
大新町	35	小屋塚5-10・ 11	住宅新築	401㎡	1. 5.23~ 1. 9.30	縄文時代早期・後期竪穴住居跡4 棟、中期土坑30基、早期~後期遺 物包含層、平安時代柱列跡5条
大新町	36	大新町16-6	住宅新築	57㎡	2. 9.10~ 2. 9.19	遺構なし。縄文土器数点出土
大館町	37	大館町143-9	住宅新築	302㎡	2. 5. 7~ 2. 8.31	縄文時代中期竪穴住居跡41棟 竪穴4棟、掘立柱建物跡2棟、土坑 12基、古代竪穴住居跡2棟
大新町	38	大新町8-13	住宅新築	121㎡	2. 9.10~ 2. 9.19	縄文時代中期土坑3基 遺物包含層
大新町	39	大新町14-1	住宅新築	133㎡	2. 9.18~ 2. 9.29	縄文時代土坑1基 早期遺物包含層
大館町	40	大館町147-10 ・16・18・19	住宅新築	497㎡	3. 4. 8~ 3. 8.31	縄文時代中期竪穴住居跡57棟 竪穴1棟、掘立柱建物跡2棟、土坑 16基、前期~中期遺物包含層
大館町	41	大新町12-1	住宅新築	419㎡	3. 5. 7~ 3. 9. 7	縄文時代中期竪穴住居跡13棟 竪穴2棟、土坑45基遺物包含層 古代の竪穴1棟、溝跡1条

表2 大館町・大新町遺跡調査成果一覧(2)

遺跡名	次数	所在地	調査原因	面積	期 間	検 出 遺 構
大新町	42	南青山町106-14	公民館新築	1,774㎡	3. 6. 24～ 3. 6. 28	遺構・遺物なし
大館町	43	大館町7-37	住宅増築	29㎡	3. 9. 6～ 3. 10. 9	縄文時代中期竪穴住居跡4棟 土坑2基、柱穴51口
大新町	44	大新町205-34	住宅新築	136㎡	4. 4. 13～ 4. 5. 11	縄文時代土坑4基、草創期～早期 遺物包含層、古代竪穴住居跡1棟、 溝跡1条
大館町	45	大新町213-1	住宅新築	380㎡	4. 5. 1～ 4. 8. 26	縄文時代中期竪穴住居跡5棟 墓壇10基、配石遺構2基 中期遺物包含層
大新町	46	大新町13-9	住宅新築	144㎡	4. 8. 17～ 4. 9. 18	縄文時代早期の遺物包含層
大新町	47	大新町17-25	住宅新築	196㎡	4. 8. 27～ 4. 10. 14	縄文時代早期竪穴住居跡1棟 早期の遺物包含層
大館町	48	大新町11-1他	宅地造成 (試掘)	432㎡	4. 12. 1～ 4. 12. 9	遺構密集区・遺物包含層を検出
大新町	49	大新町2-1 4-1	住宅新築	337㎡	5. 4. 26	遺構なし。縄文土器数点出土
大新町	50	大新町205-29	私設下水	37㎡	5. 6. 7～ 5. 6. 15	縄文時代中期土坑3基 古代の竪穴住居跡1棟
大館町	51	大館町147-3	住宅建築	23㎡	5. 6. 10～ 5. 6. 17	遺構多数、検出のみ
大館町	52	大館町11-1他	宅地造成	704㎡	5. 10. 12～ 5. 12. 22	縄文時代中期竪穴住居跡53棟 早期土坑2基、中期93基、奈良時代 竪穴住居跡2棟、溝跡2条
大館町	53	大館町11-1他	宅地造成	799㎡ 301㎡	6. 4. 11～ 6. 12. 9 7. 4. 10～ 7. 6. 25	縄文時代中期竪穴住居跡50棟 土坑59基、炉跡3基、配石2基、奈良 時代竪穴住居1棟、土坑2基、溝4条
大館町	54	大館町143-3	住宅新築	154㎡ 141㎡	6. 10. 11～ 6. 12. 9 7. 10. 5～ 7. 12. 5	縄文時代早期竪穴2棟、土坑5基 中期竪穴住居跡35棟、竪穴1棟、中～ 後期土坑8基、炉跡3基、古代溝跡2条
大館町	55	大館町147-2・ 7、141-7、148- 8	住宅新築	11㎡	7. 7. 3～ 7. 7. 7	縄文時代中期竪穴住居跡3棟 溝跡4条
大新町	56	大新町13-1・3 ・15・17、14-2 他	公共下水	165㎡	7. 10. 16～ 7. 11. 8	縄文時代中期竪穴2棟、土坑11基
大新町	57	大新町16-5・ 54	共同住宅 新築	70㎡	8. 5. 30	遺構・遺物なし
大館町	58	大館町145-7 他(6-20)	住宅増築	21㎡	8. 8. 21～ 8. 8. 29	縄文時代中期竪穴住居跡1棟 遺物包含層
大館町	59	大館町147-7 他	住宅増築	37㎡	8. 9. 2～ 8. 9. 12	縄文時代中期小柱穴45口 遺物包含層
大館町	60	大館町6-22	住宅新築	148㎡	8. 10. 28～ 8. 12. 6	縄文時代中期竪穴住居跡3棟 土坑3基、中期遺物包含層
合 計				16,816㎡		

表3 大館町・大新町遺跡調査成果一覧(3)



第2図 大館遺跡群調査全体図(1:1,000)

2. 平成7・8年度の発掘調査体制

総括	佐藤勝征	盛岡市教育委員会	文化課長
	大崎琢夫	〃	課長補佐
	佐藤和男	〃	文化財係長（平成7年度まで）
	阿部光雄	〃	副主幹兼文化財係長（平成8年度から）
事務	八木光則	〃	文化財主査
	吉田則子	〃	事務嘱託
事務・調査	千田和文	〃	文化財主査（平成7年度まで）
	似内啓邦	〃	文化財主任
	室野秀文	〃	文化財主事
	藤岡光男	〃	文化財主事
	菊池与志和	〃	文化財主事（平成8年度から）
	津嶋知弘	〃	文化財主事
	三浦陽一	〃	文化財主事
	神原雄一郎	〃	文化財主事
	黒須靖之	〃	文化財主事
	太田代由美子	〃	文化財調査員（平成7年度から）
	佐々木真史	〃	文化財調査員（平成8年度から）

また、調査の実施及び整理にあたり、下記の方々から多大な御援助と御協力をいただいた。御芳名を記して深く謝意を表します（敬称略）。

〈地権者〉太田英春

〈発掘調査〉浅利英克、阿部良子、五十嵐大輔、岩泉喜六、大宮安子、大森キヌ、小原愛子、川村昭三、菊池君雄、北村尚江、工藤繁子、工藤則子、工藤ミエ、佐々木弘睦、佐藤俊美、斎藤静子、斎藤セキ、斎藤登、堰合賢吉、白澤和子、駿河チヨ、谷藤貴子、田村仁八、西野作巳、野中蕃、福士タカ子、藤根静子、藤原美知子、松田昭夫、女鹿麗子

〈整理作業〉遺物実測—小松愛子、藤田友子、中島京子、鹿野奈保美、下平喜代美、高橋ツヤ、水野彰子
挿図作成—小松愛子、藤田友子、内山陽子、中島京子、鹿野奈保美、吉田貴美、三上良子、庄司民子、白澤和子、泉山紀代子、下平喜代美、村山伊津子、高橋ツヤ、藤原政人、藤沢幸子、北村尚江、三浦栄美、水野彰子、小杉道代、芦垣直樹、平澤祐子

II 調査内容

1. 遺構の検出状況

調査区の位置

大館町遺跡は、雫石川北岸の丘陵性台地の縁辺部に位置する。遺跡の中央部には、かなり広い畑地が残されているが、周辺部は宅地化している。遺跡の範囲は、東西220m、南北250mで、東端は縄文時代草創期・早期と古代を主体とする大新町遺跡と接している。大館町遺跡は、地形的に低地を取り込むものの、明確にその範囲は画すことができない。大館町遺跡はこれまでの調査から縄文時代中期（大木8a・8b式期）を主体とする大規模な集落である事が知られており、南面する緩やかな傾斜地全体を占地している。遺跡の南西部には、北西から南西方向へ蛇行しながら流れる小諸葛川が遺跡の西端になっている。川の中から南東方向へ一筋の低地が続いており、場所によっては南北の大きな段差となっている。なお、北岸は傾斜面となって台地北側に続くが、南岸は急激な傾斜となっている。

低地を含む遺跡中央部の調査として実施した第52・53次では、縄文時代の遺構が部分的に削平されているものの湧水がみられることから、諸葛川から派生した沢（小河川）が形成されていたとみられ、かつかなり古い時期に北岸の傾斜面は沢によって浸食を受けたものとみられる。

今回の概報で報告する第54次調査区は、遺跡の南西部に位置する。周辺はこれまでに1973年と1976年に実施した岩手大学の調査をはじめ、盛岡市教育委員会により第1・2・11・22・23・31・37・40・43・51・55・58・59・60次、計15地点の調査を実施している。特に、第54次の北側の住宅新築にともなう37次では竪穴住居跡41棟・竪穴跡4棟・掘立柱建物跡2棟・土坑12基を検出している。また、54次の周囲は下水管敷設にともなう23次調査を実施しており、その成果から相当量の遺構密集地区であることが判明している。このことから実施にあたっては調査対象面積331㎡を2分割し、調査座標R Y-230の南北線を境として西側の154㎡を平成6年度、東側の141㎡を平成7年度に調査した。

遺構の検出状況

今回の調査は、住宅新地区にともなう事前調査で、調査前の旧状が長年畑地であったため全域が約30～50cmの深い耕作土により攪乱されている。特に長芋など根菜類による攪乱が部分的に深く及んでいる箇所もあり、上層で検出された浅い掘り込みの遺構は残存状況がよくない。

第54次調査区で検出した遺構は、早期に属する竪穴跡2棟・土坑5基、中期（大木7～8b式期）に属する竪穴住居跡33棟・竪穴跡1棟・土坑5基・炉跡3基のほか、遺物包含層と後期の土坑1基、さらに古代以降の溝跡2条である。これらの検出遺構のうち特に縄文時代中期の遺構は重複が著しく全体形が残るものは少ない。

なお、今回検出した竪穴住居跡のうち、R A2154は37次で検出した遺構の南端部分、さらにR A2217・2218は、23次で検出したR A2120・2121はそれぞれ同一遺構と考えられるが、これ以外の遺構の共有関係は明確ではない。



第3図 大館町遺跡第54次調査区全体図

2. 縄文時代の遺構と遺物

RE2201 竪穴跡 (第4・6～9 図)

時期 縄文時代早期前葉～中葉 (白浜式期類似)。

位置 調査区西端部中央に位置する。

平面形 長楕円形を呈する。

主軸方向 平面形の長軸 (南北) を主軸とすると N29°W を示す。

規模 東西2.82m、南北 (主軸) 3.66～3.82m、検出面からの深さ0.22～0.28mをはかる。

重複関係 RA2185・2186・2197・2217・2218に切られる。

掘込面 既に削平されている。

検出面 RA2197床面。

埋土 自然堆積でA～Dの4層に大別される。

A層—多くのスコリア・少量のカーボンと粒～塊状の褐色土を含む黒褐色土。

B層—多くのスコリア・少量のカーボンと粒～塊状の褐色土をやや多く含む黒褐色土。

C層—多くのスコリア・少量のカーボンと粒～塊状の褐色土を多く含むしまりのよい黒褐色土。

D層—黒褐色土と暗褐色土の塊状混合土。

なお、C₃層は平面形の南側だけに堆積する層でやや灰色を呈している。

炉の状態 なし。

壁の状態 北壁と南壁は床面から緩やかに立ち上がり、東壁と西壁は直壁ぎみに立ち上がる。

床の状態 起伏があるものの傾斜はしていない。

柱穴 床面上や壁中に17口 (P1～17) のピットを検出している。なお、明確に柱痕跡が認められるピットはP1だけである。柱配置にも規則性は認められない。各ピットの床面からの深さはP1—0.21m、P2—0.34m、P3—0.25m、P4—0.22m、P5—0.13m、P6—0.17m、P7—0.26m、P8—0.06m、P9—0.08m、P10—0.13m、P11—0.03m、P12—0.07m、P13—0.07m、P14—0.09m、P15—0.15m、P16—0.08m、P17—0.14mをはかる。

出土遺物 (第6 図) 土器は床面及びC層に集中し、A・B層ではやや希薄な出土である。平面では竪穴中央部に各層とも遺物が集中する傾向にある。層位毎にみると床面からは貝殻・条痕文土器27点、無文土器3点、押型文土器と沈線文土器が各1点、不明が8点である。またC層からは貝殻・条痕文土器96点、無文土器3点、押型文土器と沈線文土器が各2点、不明が14点。A・B層から貝殻・条痕文土器25点、無文土器3点、押型文土器3点、沈線文土器が1点、不明が3点となっている。

石器はフレイクや自然石が主体でスクレイパーと砥石が床面から出土している。

土器 (第7・8 図) 1～3は口唇部が内削状となり口縁がやや外傾する深鉢である。1は横位の貝殻腹縁文を多条に施すもので、下半は縦位の磨きにより磨消される。2・3には横位の条痕が見られ、3には浅い沈線が斜位に数条施される。4～8は体部である。4・8は無文、5は底部付近の部位と思われ、数条の細沈線による文様が施される。6・7は横位の貝殻腹縁文を施すものである。9には条痕による器面調整が認められ、補修孔が穿たれる。

10～12は同一個体で、口縁がやや外傾する深鉢である。口唇部は丸みを帯びた平縁で刻目が施される。また口唇部に沿うように内面より円孔を穿ち、体部は全体的に磨消調整される。13～

15・17は口唇部に刻目が施され、口縁下に平行沈線を数条施すものである。16・19は丸みを帯びた平縁をもつ無文の口縁部で、口唇部には指頭圧痕が残される。18・20は口唇部がやや内削状となる口縁部で、斜位の貝殻腹縁文を施す。21～25・27～29は貝殻腹縁文を横位に押引くことによって沈線様の文様効果を表している。30～44は底部付近と思われる無文部である。

45・46は押引の貝殻腹縁文を磨消し、47・48は縦位の擦痕を残すものである。49～51は乳頭状を呈す尖底部である。52は指頭圧痕を磨消した無文部である。53は口縁部がややくびれる深鉢である。口唇部は内削状となる平縁で、口唇部下には内外1条の平行沈線が施される。口縁部～体部にかけて斜位の貝殻腹縁文を施すが、上位ほど施文間隔が密になる。54は平縁の口唇形状を呈し、横位平行沈線を密に施すものである。55は横回転の撚糸文を施すものである。

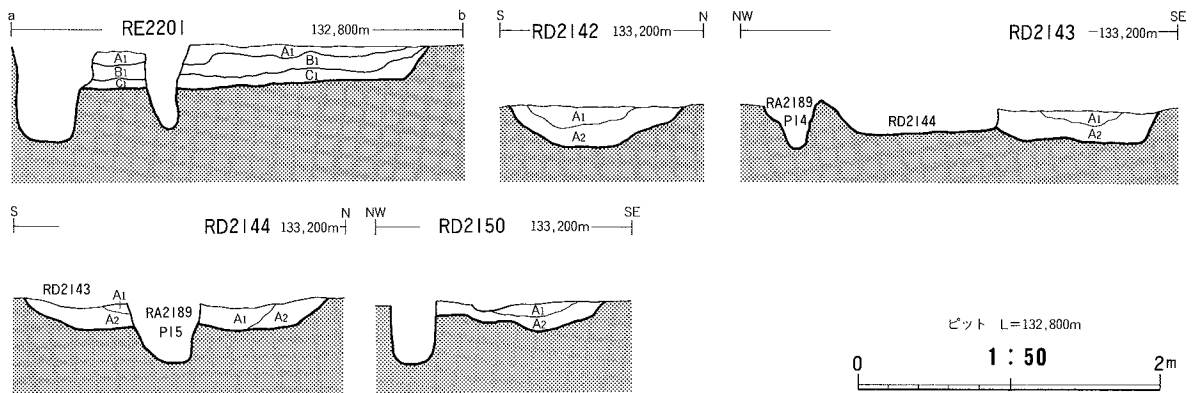
石 器 (第9図) 56は削器で、横長の剥片の末端に刃部を作出している。57は平基無茎鏃、58は凹基無茎鏃である。57は側縁調整で基部への調整はそれほど入念ではない。59は搔器で、ノッチ状の抉れが背面から施されている。

R D 2142土坑 (第4図)

時 期 縄文時代早期。 **位 置** 調査区北西、R E 2201の北側に位置する。
平面形 楕円形を呈する。 **長軸方向** およそN18° Eを示す。
規 模 長軸(南北)1.08m、短軸(東西)0.89m、検出面からの深さ0.26mをはかる。
重複関係 R A 2185に切られる。
掘込面 既に削平されている。 **検出面** R A 2185床面。
埋 土 自然堆積。
埋土(A層)は、多量のスコリアと粒～塊状の褐色土を含むしまりのよい暗褐色土。
壁の状態 底面から緩やかに立ち上がる。
底の状態 不整形な起伏がある。
出土遺物 なし。

R D 2143土坑 (第4図)

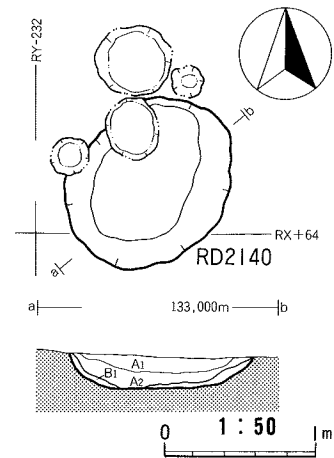
時 期 縄文時代早期。 **位 置** 調査区北西、R E 2201の北側位置する。
平面形 楕円形を呈する。 **長軸方向** およそW3.5° Nを示す。
規 模 長軸(東西)1.66m、短軸(南北)1.10～1.19m、検出面からの深さ0.18～0.20mをはかる。
重複関係 R A 2189、R D 2144に切られる。
掘込面 R A 2189により既に削平されている。 **検出面** R A 2189床面。
埋 土 自然堆積である。
A'層—多量のスコリアと粒～塊状の褐色土を含むしまりのよい暗褐色土。
壁の状態 東壁は直壁ぎみであるほかは、かなり緩やかに立ち上がる。
床の状態 やや起伏があるが平坦である。
出土遺物 なし。



第4図 RE2201竪穴跡、RD2142~2144・2150土坑

RD2144土坑 (第4図)

- 時期** 縄文時代早期。
位置 調査区北西、RE2201の北側に位置する。
平面形 楕円形を呈する。 **長軸方向** およそN3.5°Wを示す。
規模 長軸(南北)1.43m、短軸(東西)1.17m、検出面からの深さ0.15～0.17mをはかる。
重複関係 RA2189に切られる。
掘込面 既に削平されている。 **検出面** RA2189床面。
埋土 自然堆積。
A層-多量のスコリアと粒~塊状の褐色土を含むしまりのよい暗褐色土。



第5図 RD2140土坑

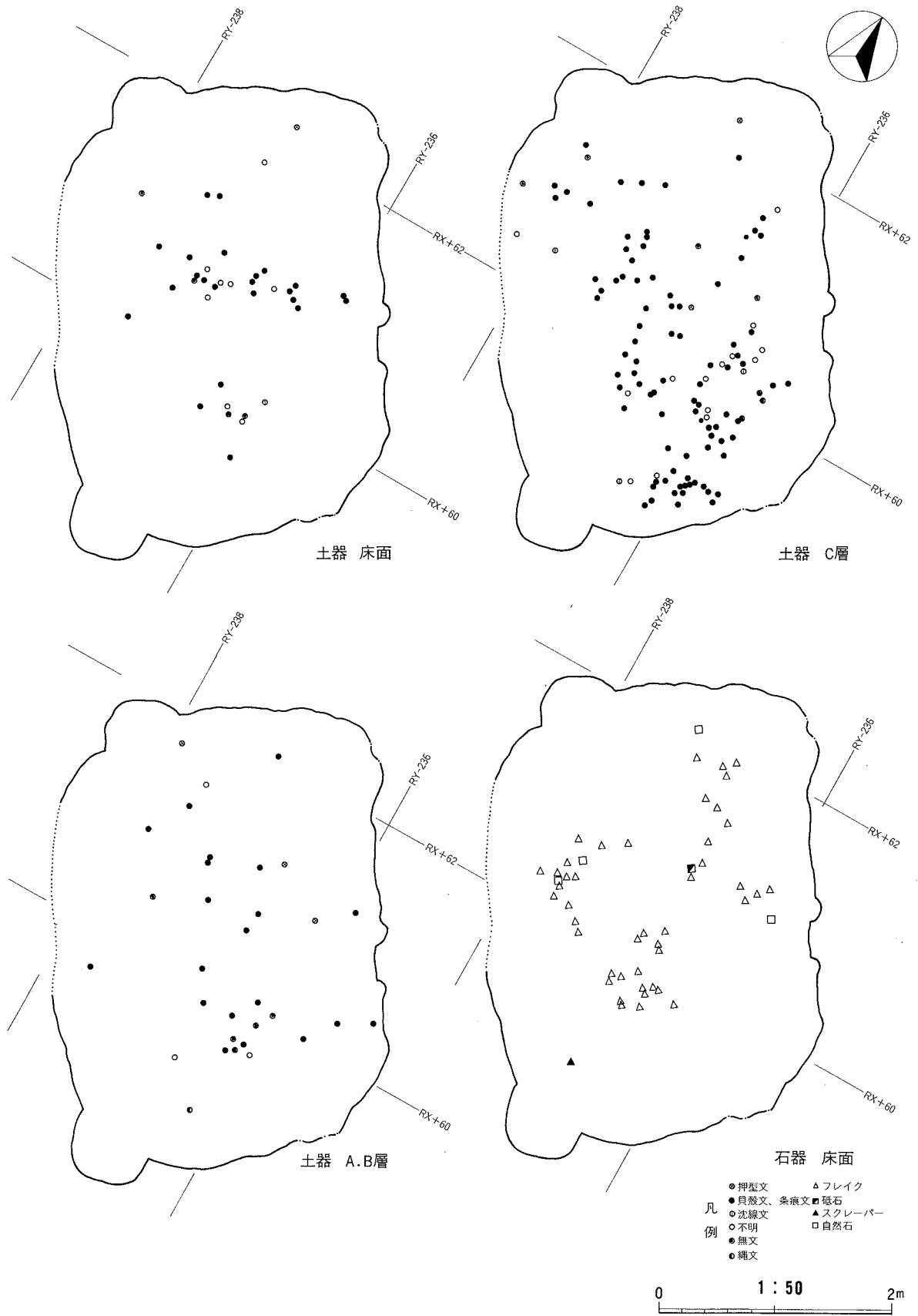
- 壁の状態** 底面からかなり緩やかに立ち上がる。
床の状態 起伏がある。
出土遺物 なし。

RD2150土坑 (第116~122図)

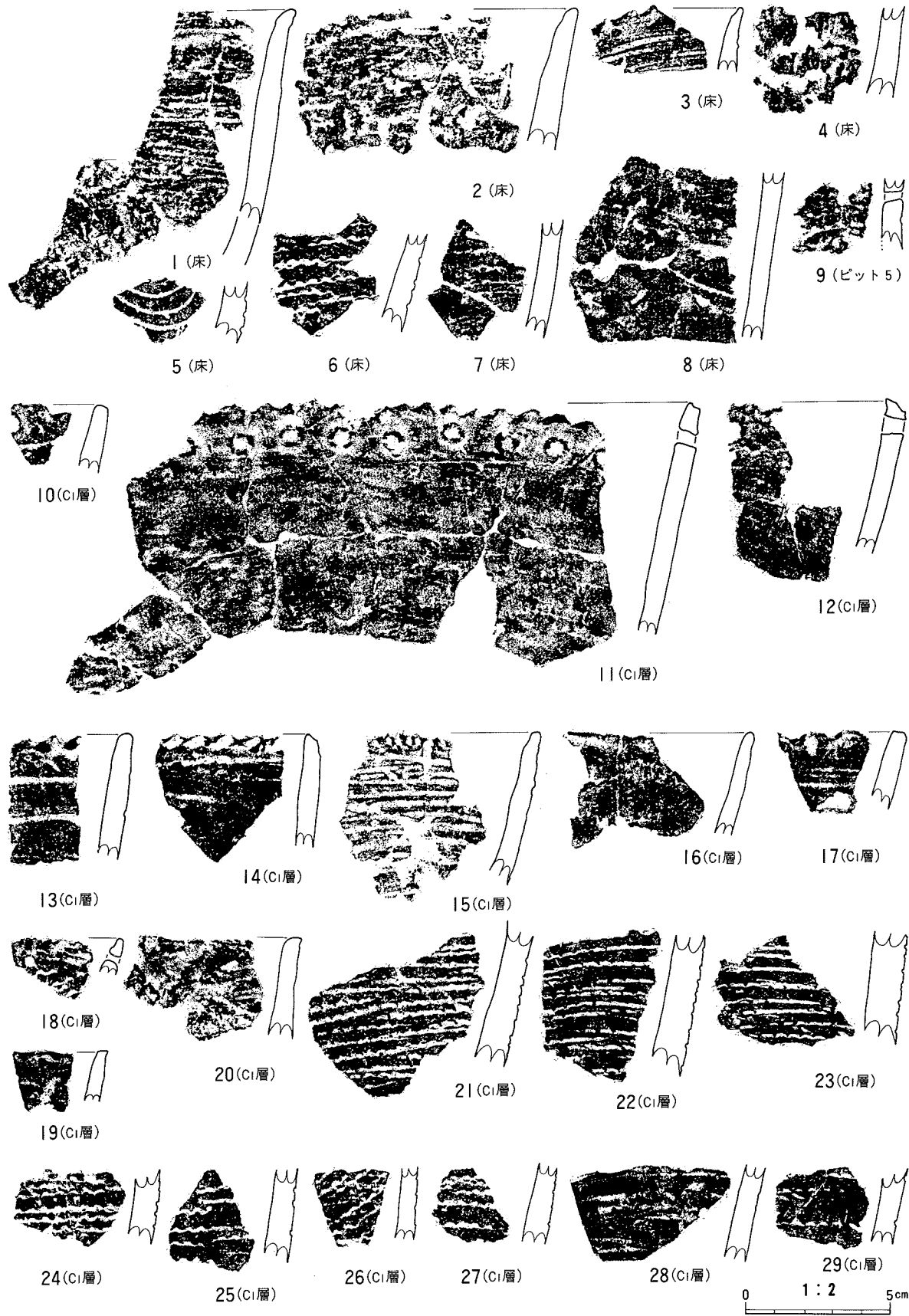
- 時期** 縄文時代早期。 **位置** 調査区北西、RE2201の北側に位置する。
平面形 不整楕円形を呈する。 **長軸方向** 不整形のため不明。
規模 長軸(南北)1.20~1.32m、短軸(東西)0.90~1.20m、検出面からの深さ0.09~0.18mをはかる。
重複関係 RA2189に切られる。
掘込面 既に削平されている。 **検出面** RA2189床面。
埋土 自然堆積。
A層-多量のスコリアと粒~塊状の褐色土を含むしまりのよい暗褐色土。
壁の状態 底面中央からかなり緩やかに立ち上がる。
床の状態 起伏がある。
出土遺物 なし。

RD2140土坑 (第5図)

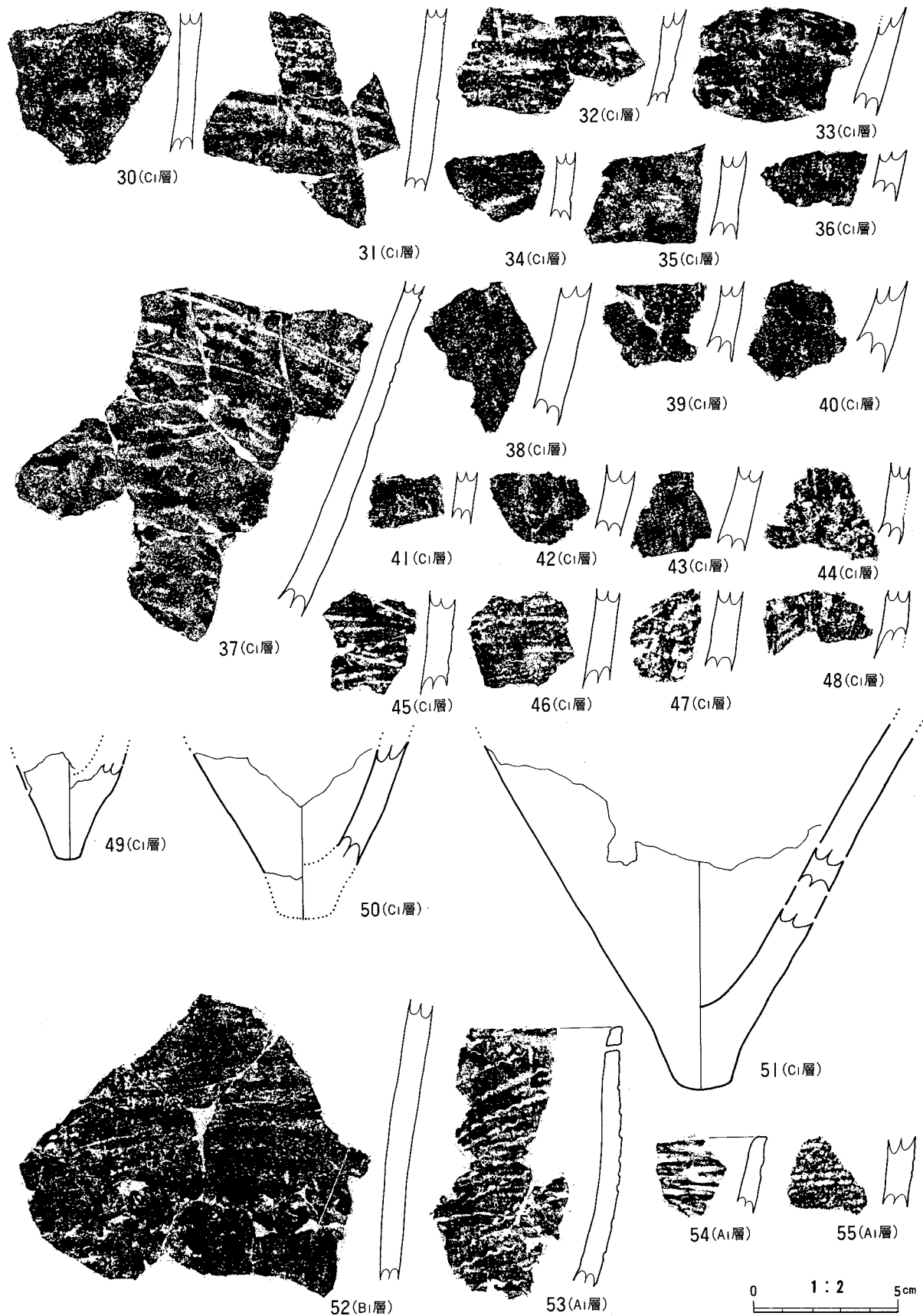
- 時期** 縄文時代早期。 **位置** 調査区中央に位置する。
平面形 楕円形を呈する。 **長軸方向** N38°Eを示す。
規模 長軸(南北)1.22m、短軸(東西)0.98m、検出面からの深さ0.18~0.22mをはかる。
重複関係 RE2188に切られる。
掘込面 既に削平されている。 **検出面** RE2188床面。
埋土 自然堆積。
A層-多量のスコリアと粒~塊状の褐色土を含むしまりのよい暗褐色土。
壁の状態 底面からかなり緩やかに立ち上がる。
床の状態 ほぼ平坦である。
出土遺物 B層から体部に平行沈線を施す縄文土器が1点出土している。



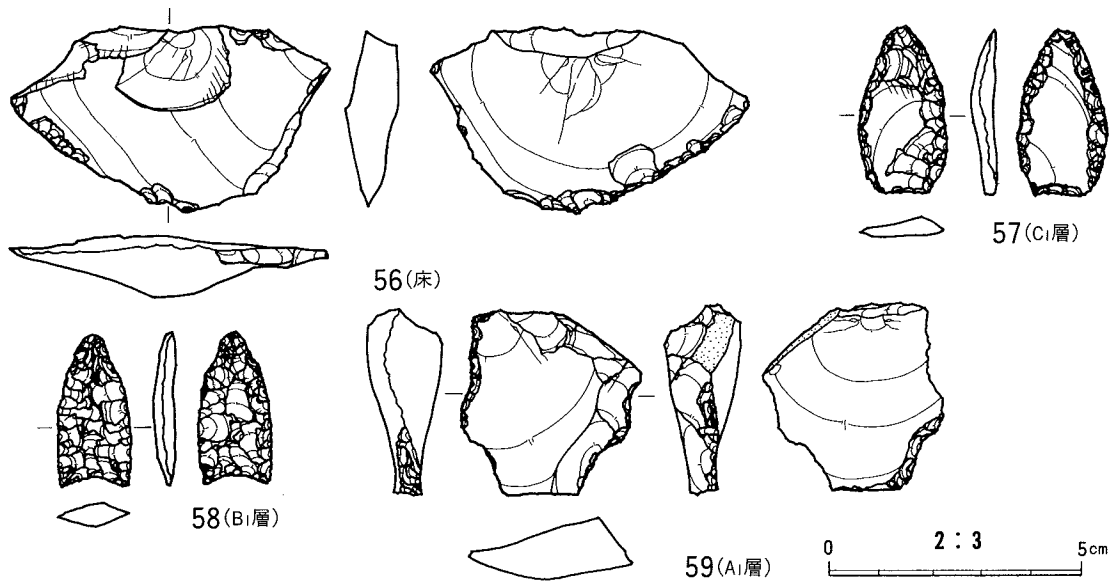
第6図 RE2201竪穴跡出土遺物出土状況



第7図 RE2201竪穴跡出土土器(1)



第 8 図 RE2201 豎穴跡出土土器 (2)



第9図 RE2201 竪穴跡出土石器

R A 2216 竪穴住居跡 (第10図)

時期 縄文時代中期 (大木 8 a - 1 式期以前)。

位置 調査区北東隅に位置する。

平面形 長方形を呈する。

長軸方向 N85°W を示す。

規模 平面形の東側が調査区外に広がるが、柱配置から東西3.8m、南北3.1m程である。

重複関係 R A 2199・2200 に切られ、R A 2219 を切る。

検出面 耕作土 (I a 層) 及び遺物包含層 (II b 層) 直下。

埋土 自然堆積で、粒~塊状の黄褐色土と暗褐色土を含む黒褐色土。

炉の状態 未検出。なお、平面形中央の炉に相当する位置にはピット (P 5) がある。

壁の状態 削平されている。

床の状態 ほぼ平坦である。

周溝 検出した周溝は幅0.06~0.17m、深さ0.01~0.31mをはかる。

柱穴 床面上に6口 (P 1~6) のピットを検出している。このうち、支柱穴を構成するピットはP 1~5の5口で基本的に四角形の配置を呈する。なお、P 5は床面中央に位置し、太い柱痕跡をもつ。各ピットの直径と床面からの深さは、P 1 - 0.24・0.54m、P 2 - 0.32・0.59m、P 3 - 0.27・0.42m、P 4 - 0.24・0.43m、P 5 - 0.80・0.93m、P 6 - 0.52・0.11mをはかる。埋土は柱痕跡 (C 層) がしまりのない暗褐色土を主体としており、掘方埋土 (D 層) は黄褐色土と暗褐色土の塊状混合土である。

出土遺物 P 1・5 から縄文時代中期中葉 (大木 7・8 a 式期) の土器が26点出土しているがいずれも小片である。石器はP 5 からフレイクが3点出土している。

R A 2219 竪穴住居跡 (第10図)

時期 縄文時代中期 (大木 7 式期以前)。

位 置 調査区北東隅に位置する。

平面形 方～長方形を呈する。

主軸方向 N67.5°Eを示す。

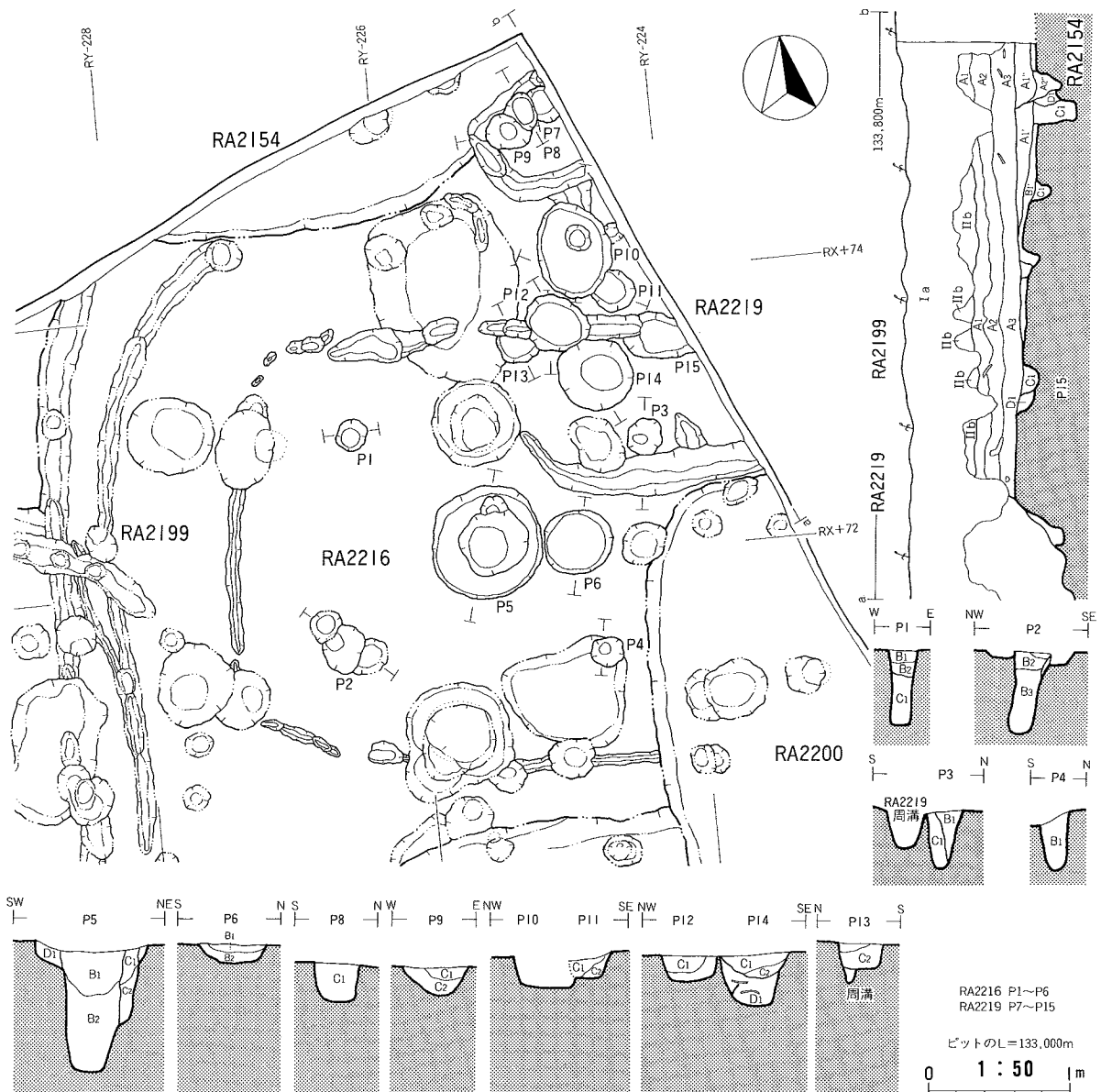
規 模 平面形の東側は調査区外に広がる。調査区内で検出した規模は東西3.36m、南北1.3mをはかる。

重複関係 RA2154・2199・2216・2200に切られる。

検出面 RA2154・2199・2216床面。

埋 土 自然堆積で埋土（A'層）は黒褐色土を主体とする。なお、B'層は床構築土（貼床）で黄褐色土と暗褐色土の塊状混合土である。

炉の状態 明確な炉は未検出であるが、平面形の北端のP7～9を取り囲む溝は石囲炉の炉石の抜き取りとも考えられるが火床面など燃焼した痕跡は確認できない。

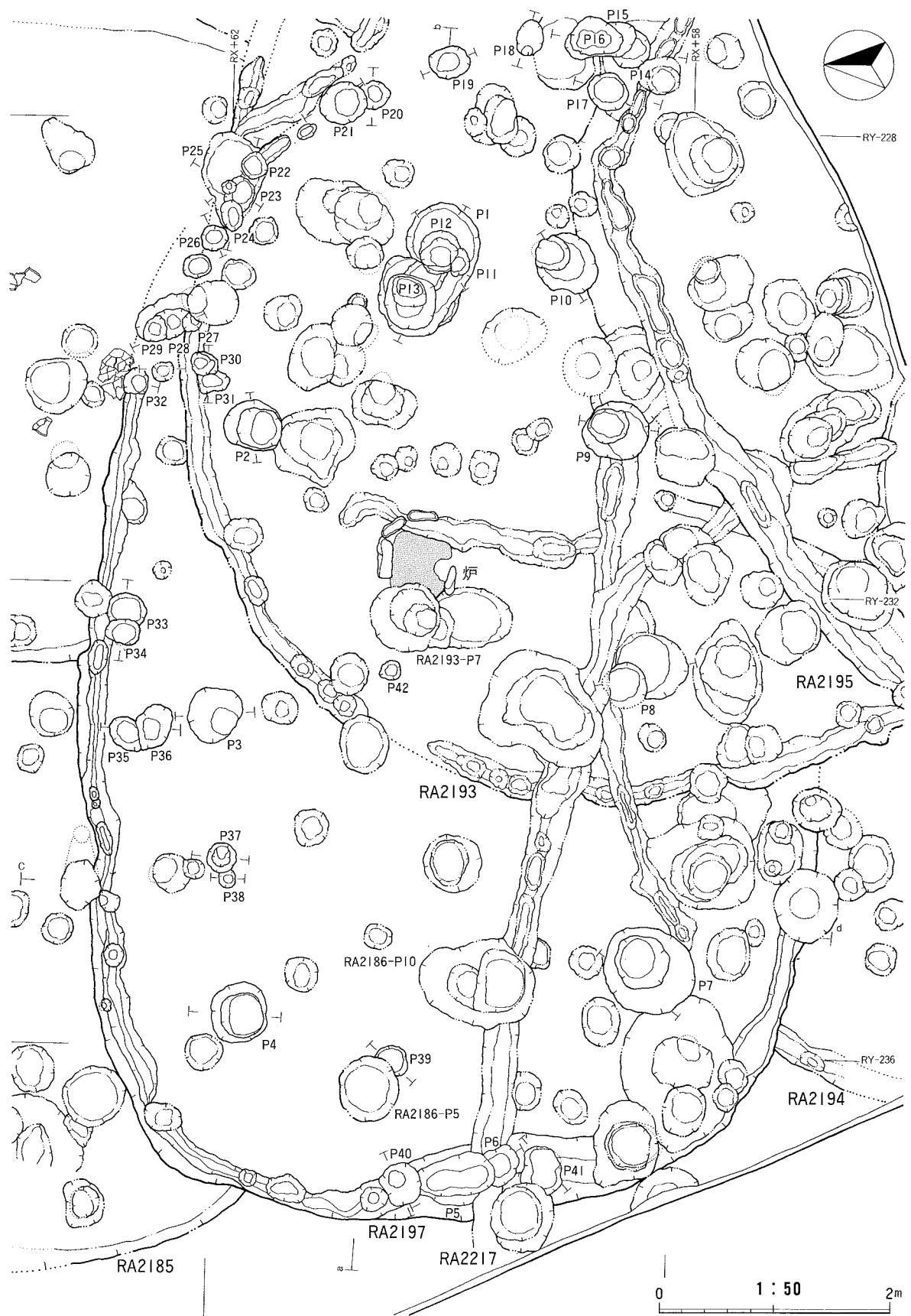


第10図 RA2216・2219竪穴住居跡

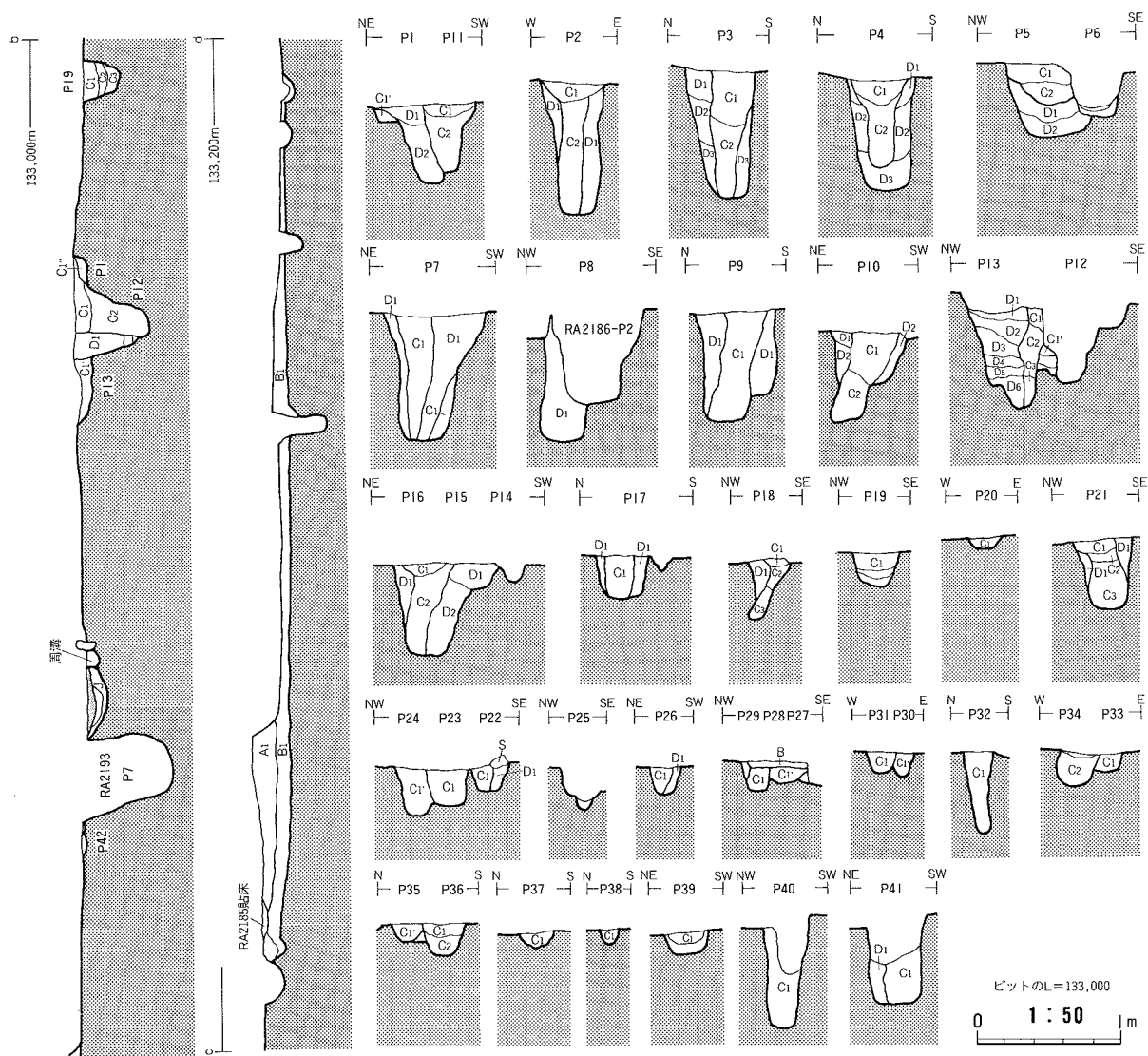
- 壁の状態** 削平されているため残存していない。
- 床の状態** 北側に傾斜しているものの平坦である。
- 周溝** 平面形の南側に検出している。幅0.08～0.34m、深さ0.21～0.32mをはかる。
- 柱穴** 床面上に8口（P7～15）のピットを検出している。主柱穴を構成するピットは明確ではなく、いずれも浅い土坑状を呈する。各ピットの直径と床面からの深さはP7-0.26・0.21m、P8-0.28・0.28m、P9-0.24・0.20m、P10-0.68・0.22m、P11-0.30・0.21m、P12-0.49m、P13-0.30・0.18m、P14-0.54・0.39m、P15-0.50・0.12mをはかる。なお、柱痕跡が認められたのはP7とP15だけである。埋土は柱痕跡がしまりのない暗褐色土。掘方は黄褐色土と黒褐色土の塊状混合土でP8～14は掘方様の埋土である。
- 出土遺物** 出土土器はいずれも小片である。石器は安山岩製の砥石の破片1点と剥片が5点出土している。

RA2197竪穴住居跡（第11～16図）

- 時期** 縄文時代中期（大木8a-1式期以前）。 **位置** 調査区南西に位置する。
- 平面形** 隅丸長方形を呈する。 **主軸方向** N88.5°Eを示す。
- 規模** 重複する遺構により東側は切られるが、東西10.3m、南北6.4m程である。
- 重複関係** RA2185・2186・2188・2193・2217・2218に切られ、RE2201、RA2222を切る。
- 検出面** 重複する住居跡の床面。
- 埋土** 自然堆積でA～Bの2層に大別される。
A層-粒状の褐色土をわずかに含む黒褐色土。
B層-粒～塊状の褐色土をやや多く含む軟質の黒褐色土。
- 炉の状態** 東西中軸線上で平面形中央に石囲炉を1基検出している。平面形の西端はRA2193のP7に切られ、また、東端は時期不明の周溝に切られているが全体形は長方形を呈すると思われる。炉石は自然円礫2個が残存し、さらに抜き取り痕跡2カ所が認められる。規模は東西0.72m以上、南北0.68mをはかる。火床面は厚さ10cmの炉構築土の上面に5cmの厚さに焼けている。
- 壁の状態** 平面形北西側から南西側にかけて壁が残存しており、周溝から直壁ぎみに立ち上がる。
- 床の状態** 部分的に起伏があるものの平坦である。
- 柱穴** 床面上に41口（P1～41）のピットを検出している。このうち、主柱穴を構成するピットはP1～4・8～12・17・21・40・41の14口で、亀甲形の配置である。なお、棟持柱に相当するP1・11・12・13は重複が認められる。これらのピットには直径0.2～0.3mの柱痕跡が認められる。床面からの各ピットの深さはP1-0.54m、P2-0.92m、P3-0.88m、P4-0.77m、P5-0.50m、P6-0.32m、P7-0.85m、P8-0.62m、P9-0.75m、P10-0.63m、P11-0.47m、P12-0.54m、P13-0.82m、P14-0.14m、P15-0.18m、P16-0.60m、P17-0.30m、P18-0.41m、P19-0.23m、P20-0.07m、P21-0.49m、P22-0.18m、P23-0.25m、P24-0.33m、P25-0.13m、P26-0.20m、P27-0.10m、P28-0.16m、P29-0.16m、P30-0.15m、P31-0.14m、P32-0.56m、P33-0.12m、P34-0.23、P35-0.13m、P36-0.22m、P37-0.10m、P38-0.10m、P39-0.15m、P40-0.71、P41-0.54mをはかる。
- 出土遺物** 土器は、埋土が大きく削平されているためいずれも小片である。床面からは小形の深鉢が出土しただけで、他はピットや埋土からの出土である。



第11図 RA2197豎穴住居跡(1)



第12図 RA2197竪穴住居跡(2)

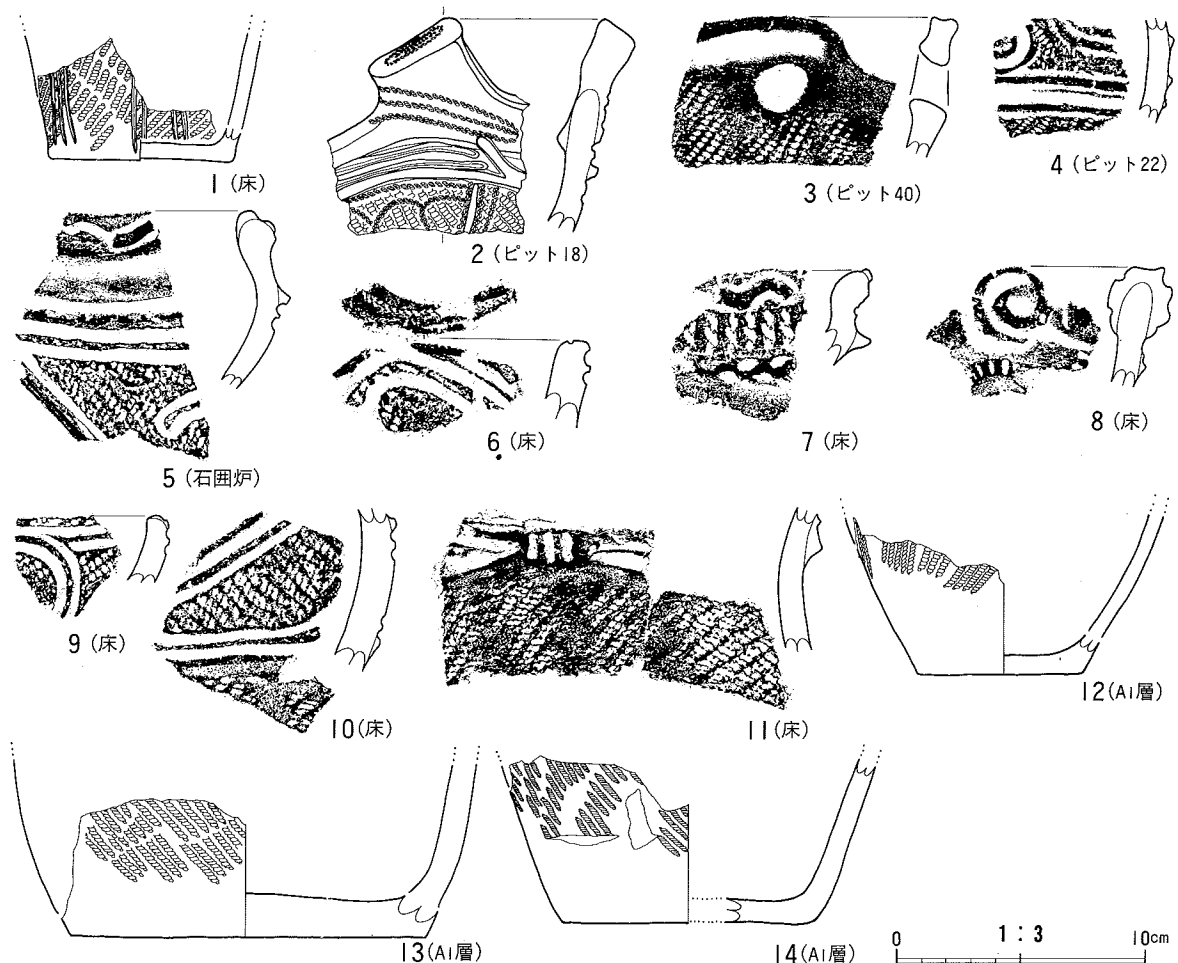
土 器(第13図) 1は深鉢底部で2条1組の沈線が垂下する。地文にRL単節縄文が縦位に施される。2は弁状突起をもつキャリパー形深鉢の口縁部である。把手部には原体圧痕文を押圧、口縁部上半には隆沈線が施される。3は弁状突起を有すキャリパー形深鉢で、RL単節縄文が縦位に施文される。4・5はキャリパー形深鉢の口縁部で、4は隆沈線による文様、5は沈線による文様が施される。6～8は深鉢の口縁部で、6は沈線による文様が施される。7は波状隆線と交互刺突される隆線が横位に施され、隆線間には縦位の原体圧痕文が押圧される。8は波頂部に隆線による渦巻文が施される。9～11は隆沈線による文様が施されるキャリパー形深鉢口縁～体部にかけての各部位である。12～14は地文のみの深鉢底部である。

石 器(第14～16図28～33) 15は搔器である。背面上部の調整は器面中央まで及んでいるが、刃部の末端部は一次剥離の鋭い縁辺を利用した形状である。

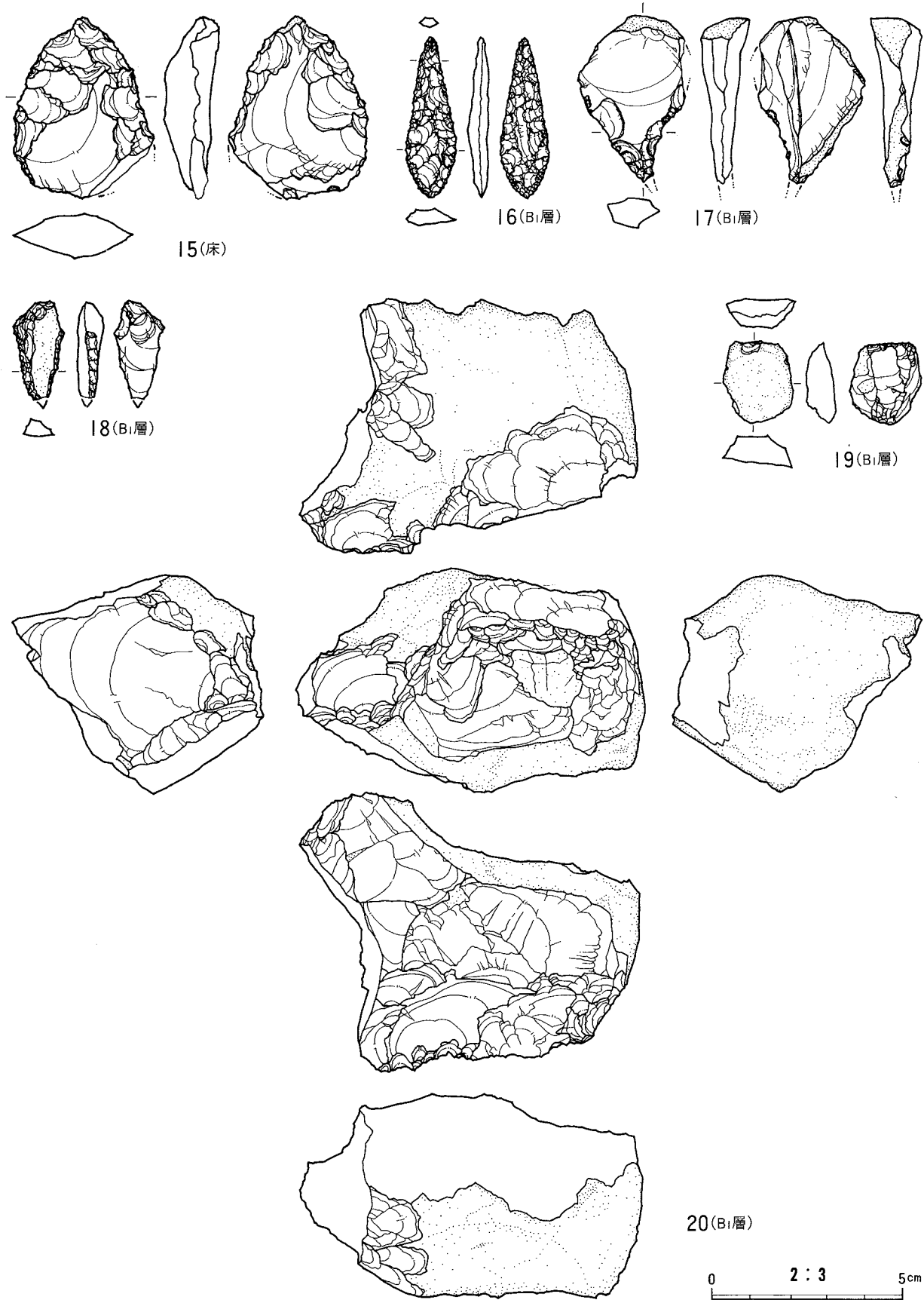
16は凸基無茎鏃で両面調整され、ほぼ左右対称の整った形状を呈する。

両面とも上半部に衝撃をうけた際の剥離痕がある。16・17は石錐で、16は腹面の節理面を断面三角形の錐部の一辺とする。17も素材剥片の形状をあまり変えずに、周辺に急斜度の調整を施したもので、尖端を欠損する。19は楔形石器で、機能部の幅が狭い下端の方に細かい剥離が集中する。上下端ともに鋭角である。20の石核は打面をほぼ固定して剥片剥離を行っている。21は凹基無茎鏃で、右側辺は稜の出入りが大きい。22~24は石匙であるが、22のつまみ部の抉れはさほど顕著ではない。刃部は弧状で、背面下端右側の縁辺には刃こぼれが連続している。23は石匙として完成された形状の背面の山なりの形に、この素材剥片が石核から剥離された時の石核の稜を残す。また、背面右側辺から底辺にかけては刃部再生により、その剥離凹面になるほど剥離回数が重ねて行われている。この部分の縁辺には細かい刃こぼれが多い。24はつまみ部の調整が腹面から施されているが、欠損した背面左側辺に使用痕が残っている事と、連続した調整がない事から、一般的な石匙とは異なったものと考えられる。25の筥状石器は、頭部と刃部の一部を欠損しているが、全面にわたって調整が加えられている。26は敲石で端部に敲打痕が集中している。27は敲打磨石、28は凹石である。凹み部は浅く、面的に広がる。29は両端部に敲打痕をもつ敲石で、擦痕もある。30・32は全面が磨面の磨石、31は砥石である。33は敲打磨石で、使用面は僅かである。

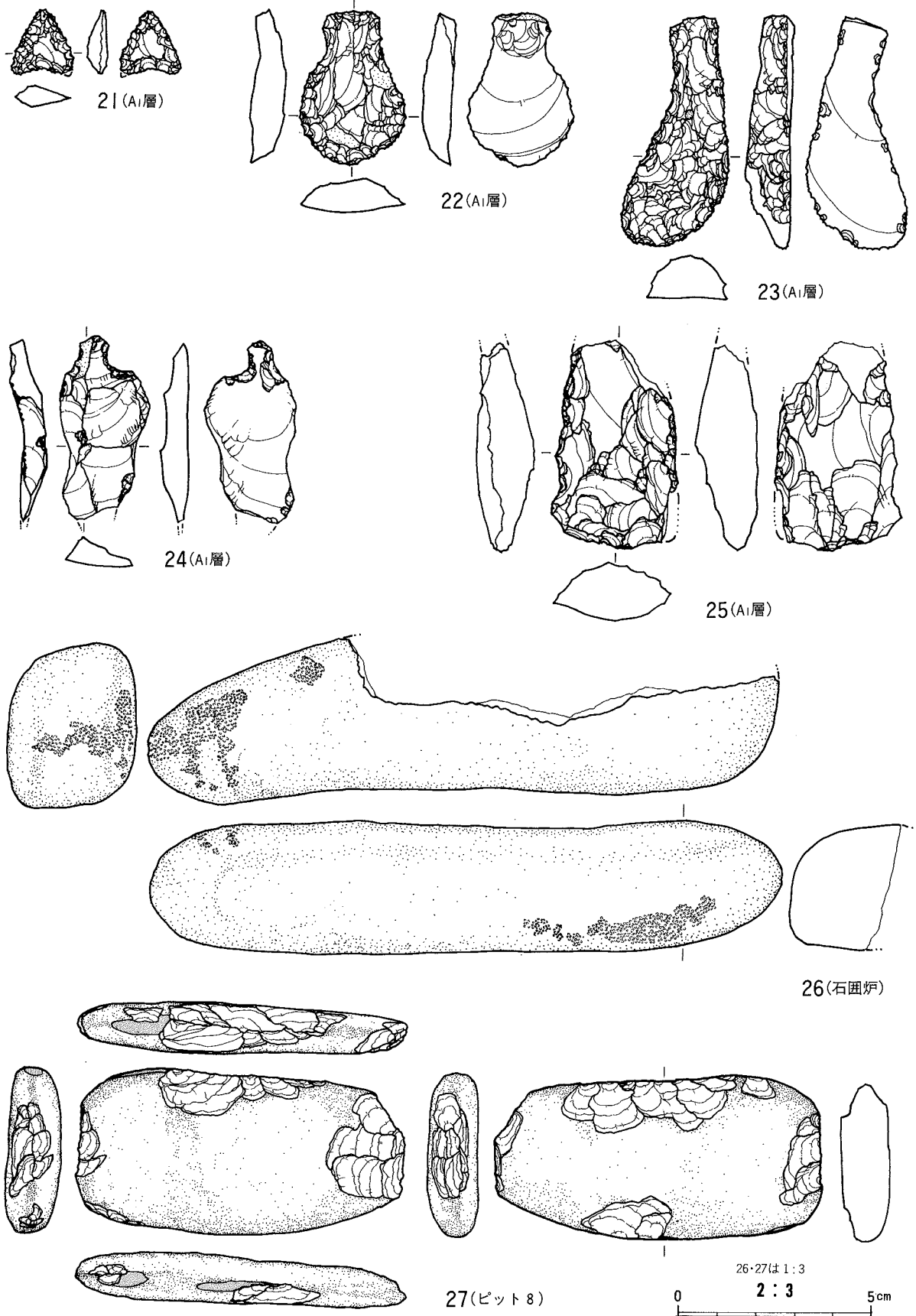
土製品（第16図34・35） 34は土玉、35は土製円盤である。



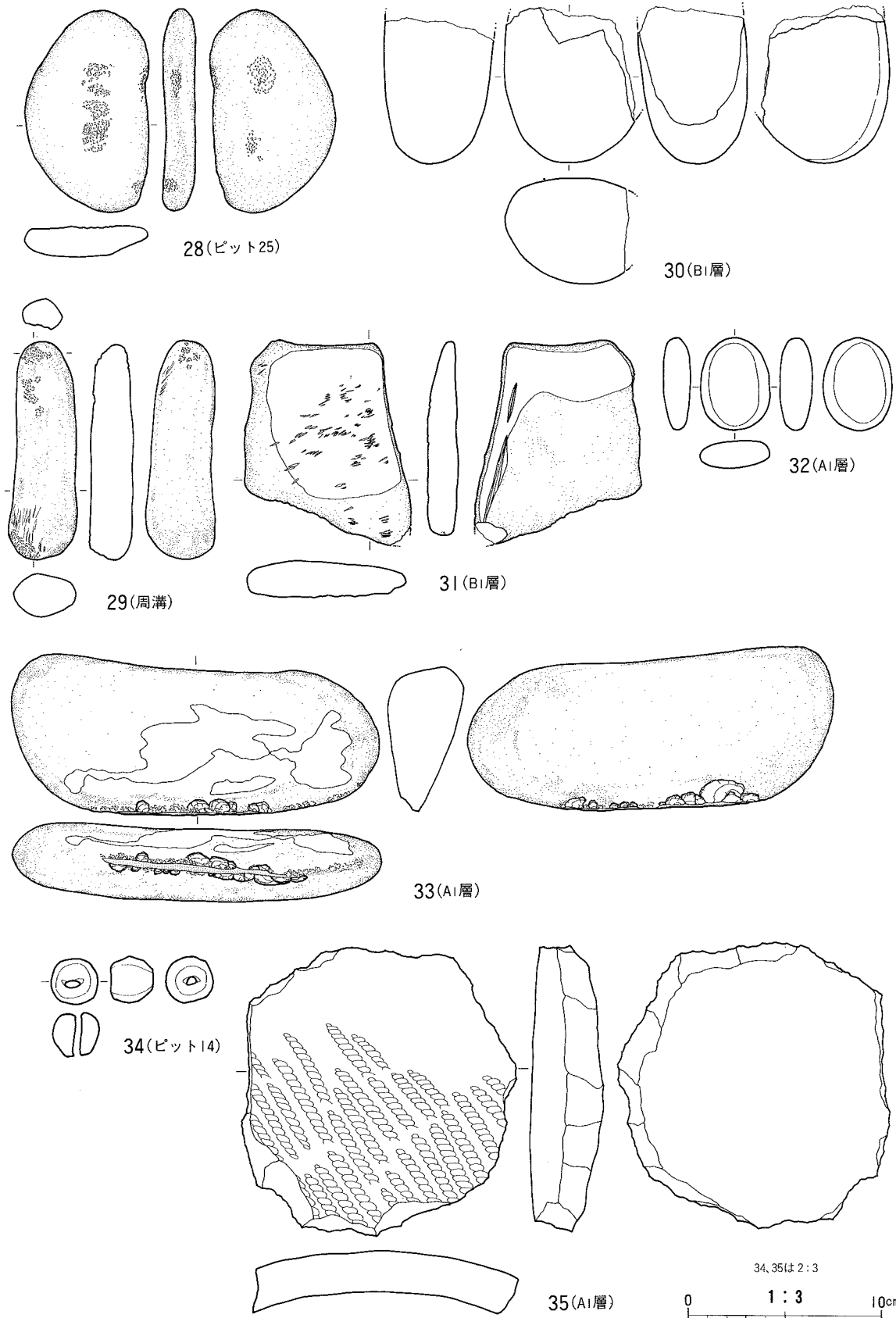
第13図 RA2197 竪穴住居跡出土土器



第14圖 RA2197豎穴住居跡出土石器(1)



第15図 RA2197 竪穴住居跡出土石器(2)



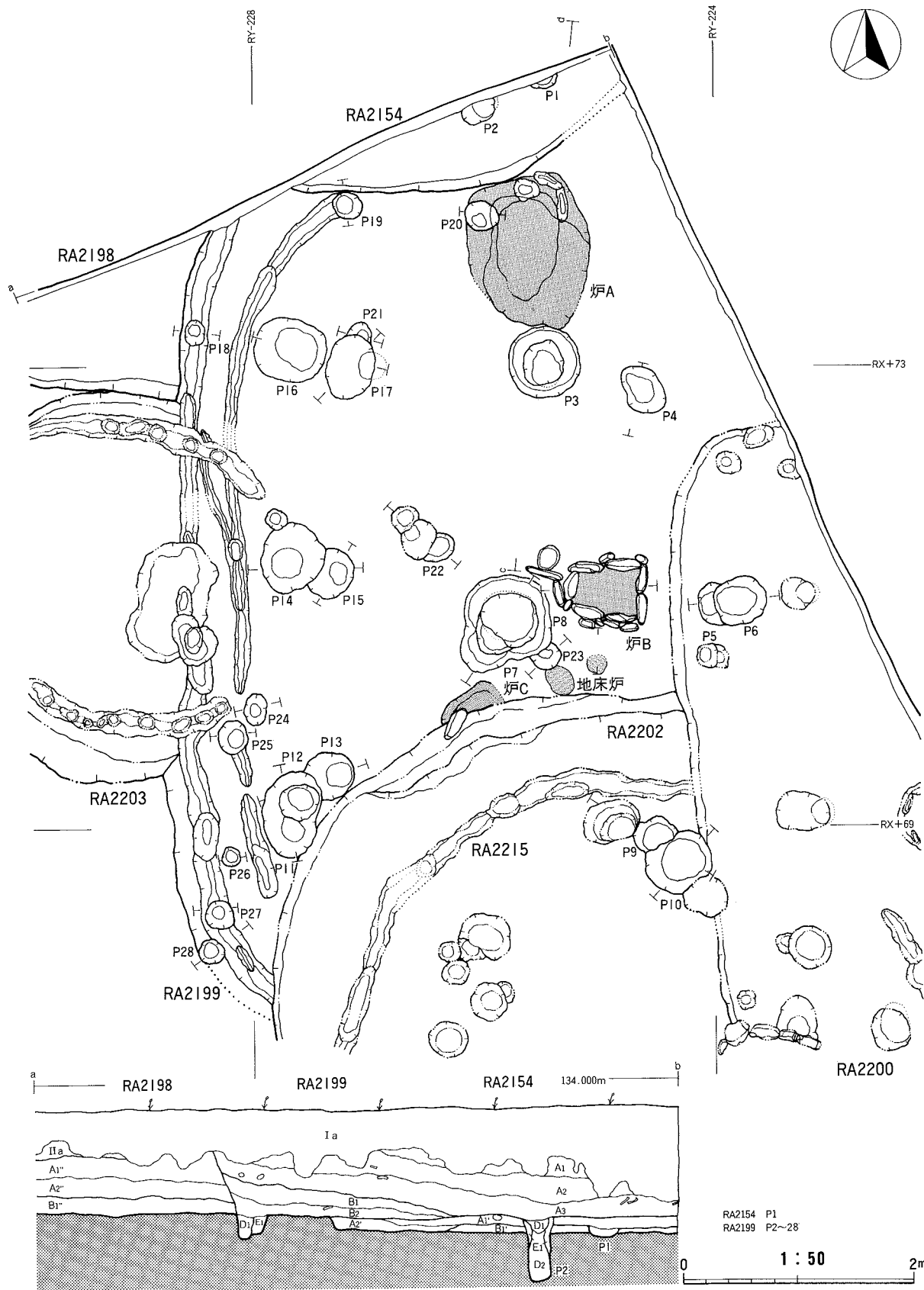
第16図 RA2197竪穴住居跡出土石器(3)・土製品

R A2154 竪穴住居跡 (第17・29図)

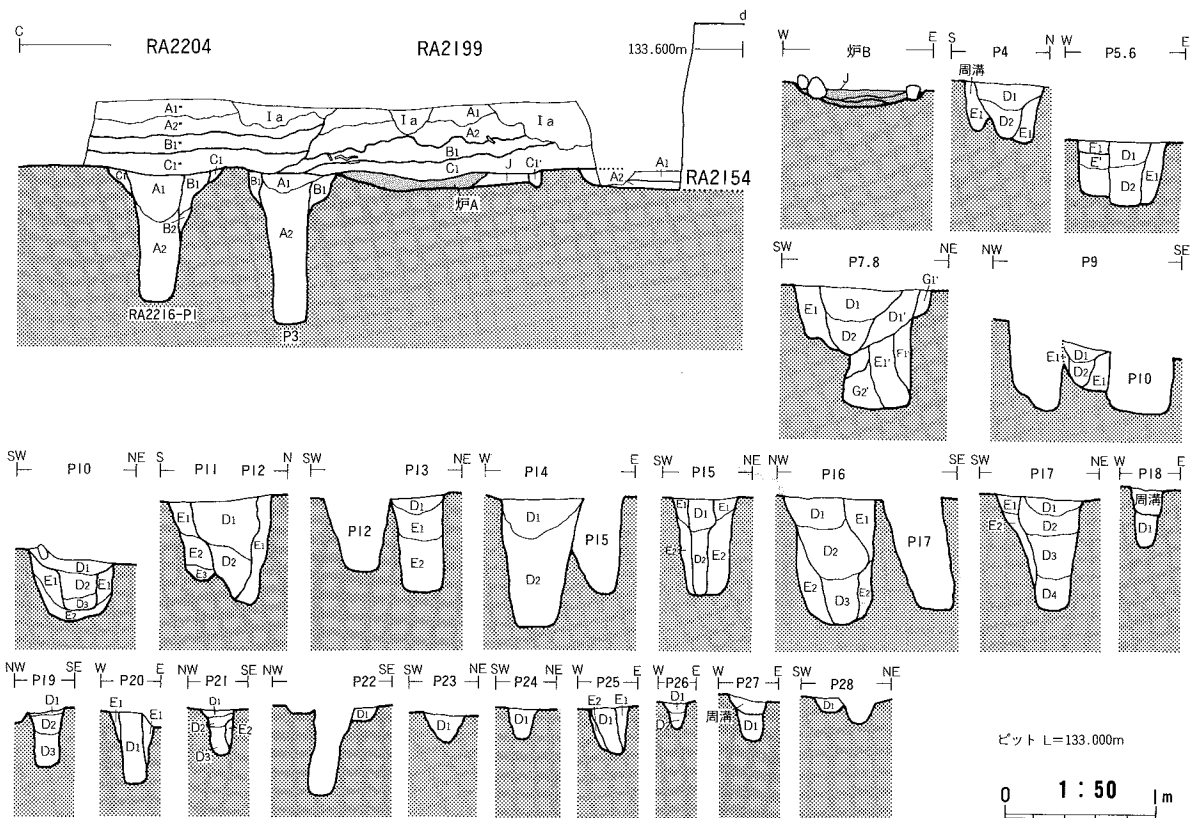
- 時 期** 縄文時代中期 (大木7式期)。 **位 置** 調査区北東隅に位置する。
- 平 面 形** 全体形の大部分は調査区外に広がっており、第37次調査で検出している。楕円形を呈する。
- 主軸方向** N10° Eを示す。 **規 模** 東西5.9m、南北7.9m (長軸)をはかる。
- 重複関係** R A2199に切られ、R A2219を切る。 **検出面** R A2199床面。
- 埋 土** 自然堆積。埋土 (A'層) は塊状の黄褐色土を多く含む黒褐色土である。B'層は塊状の黄褐色土による床構築土 (貼床) である。
- 炉の状態** 調査区外 (第37次調査) で石囲炉1基と地床炉1基を検出している。
- 壁の状態** 床面から直壁ぎみに立ち上がる。
- 床の状態** 床構築土 (B'層) の起伏が顕著で床面中央部が高くなっている。
- 柱 穴** 調査区内床面上に1口 (P1) のピットを検出している。床面からの深さは0.06mである。
- 出土遺物** 土器は埋土から15点出土しているが、いずれも小片である。石器は石匙・石斧・石皿が各1点のほかフレイクや自然礫が7点出土している。
- 石 器 (第29図83)** 83は縦型の石匙である。背面両側辺とつまみ部に自然面を残し、側面観が湾曲している。

R A2198 竪穴住居跡 (第17・19図)

- 時 期** 縄文時代中期 (大木8a-1式期、円筒上層C式期以前)。
- 位 置** 調査区北東に位置する。
- 平 面 形** 不明。 **主軸方向** 不明。
- 規 模** 不明。調査区内で検出した規模は東西1.8m以上、南北1.5m以上。
- 重複関係** R A2199・2203に切られる。
- 検出面** 耕作土 (I a層) 及び遺物包含層 (II a層) 直下。
- 埋 土** 自然堆積でA''・B''の2層に大別される。
A''層—スコリアを多く含み、しまりのある黒褐色土。
B''層—スコリアを含む粒~塊状の暗褐色土。
- 炉の状態** 未検出。
- 壁の状態** 床面から直壁ぎみに立ち上がる。
- 床の状態** ほぼ平坦である。
- 柱 穴** 未検出。
- 出土遺物** 床面からはなく、いずれも埋土から出土している。
- 土 器 (第19図1~4)** 1は垂直に近い弁状突起をもつ深鉢口縁部である。原体圧痕文を加飾する隆線が弁状突起から嚮状に施文され、隆線間は爪形状刺突が充填される。2は浅鉢口縁部で原体圧痕文を施文する。3・4はキャリパー形深鉢頸部~体部にかけての部位で、3は沈線、4は隆沈線による文様が施される。
- 石 器 (第19図5~7)** 5は両面調整石器であるが、背面に若干自然面を残す。平面観で稜の出入りがあり、細部調整は部分的に施されている。6は凹基無茎鏃、7は削器である。6は先端部を欠損している。両側辺からの調整は急斜度、脚部は左右非対称である。7は縦長剥片に周縁調整を施し、刃部を作出している。



第17図 RA2154・2198・2199竪穴住居跡(1)



第18図 RA2199竪穴住居跡(2)

RA2199竪穴住居跡(第17・18・20~29図)

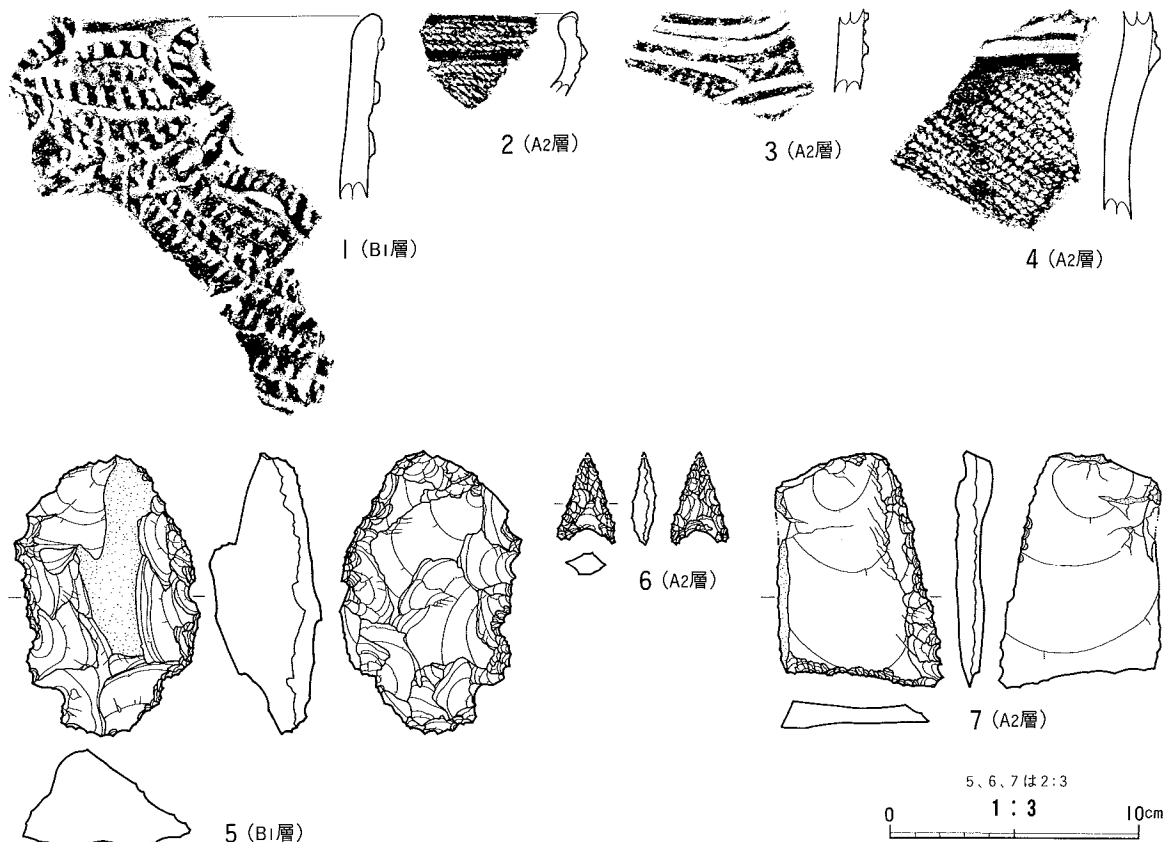
- 時期** 縄文時代中期(大木8a-1式期)。 **位置** 調査区北東隅に位置する。
- 平面形** 長方形を呈する。 **主軸方向** ほぼ真北方向を示す。
- 規模** 平面形の西側以外は重複する遺構に切られる。推定される規模は、南北を長軸とした場合8.0m、東西5.8mをはかる。
- 重複関係** RA2200・2202・2203・2204・2215に切られ、RA2154・2198・2216・2219に切られる。
- 検出面** 耕作土(I a層)直下及び重複する竪穴住居跡の床面。
- 埋土** 自然堆積でA・Bの2層に大別される。
 A層-スコリアを少量含み、しまりのある黒褐色土。
 B層-スコリアを少量含む粒~塊状の堅い暗褐色土。
- 炉の状態** 平面形北端に地床炉1基(炉A)、東西中軸線上に石囲炉1基(炉B)、石囲炉の南西に地床炉1基(炉C)、さらにこの東側に小規模な地床炉2基を検出している。炉Aは長軸1.35m、短軸1.06mをはかり、火床面の熱浸透層の厚さは0.10mをはかる。炉Bは大小16個の自然円礫で構築している。長軸は0.8m、短軸0.66mをはかり、熱浸透層の厚さは0.12mをはかるが、火床面には2時期認められる。炉CはRA2202により切られており全体形は明確ではない。残存する規模は長軸0.58m、短軸0.3mで熱浸透層は0.02m程でさほど焼けていない。東側に隣接する小規模な地床炉2基は楕円形を呈し、厚さ0.01m程の熱浸透層が認められる。
- 壁の状態** 周溝から直壁ぎみに立ち上がる。
- 床の状態** ほぼ平坦である。

周溝 平面形の西側に検出した2条の周溝の新旧は明確ではないが、後述するピットの重複関係から外側の周溝が新期の可能性がある。規模は外側の周溝が幅0.15～0.22m、床面からの深さ0.04～0.25mをはかる。また、内側の周溝は幅0.09～0.20m、深さ0.06～0.12mをはかる。

柱穴 床面上に26口のピット（P3～28）を検出している。このうち支柱穴を構成するピットはP3～17の14口でいずれも柱痕跡が認められる。重複のあるピットでは、いずれも外側のピットが新期である事から周溝も平面形の拡張にともなって構築されたと考えられる。

各ピットの床面からの深さは、P3-0.98m、P4-0.40m、P5-0.42m、P6-0.42m、P7-0.43m、P8-0.79m、P9-0.30m、P10-0.39m、P11-0.52m、P12-0.70m、P13-0.62m、P14-0.84m、P15-0.62m、P16-0.83m、P17-0.72m、P18-0.38m、P19-0.38m、P20-0.47m、P21-0.30m、P22-0.10m、P23-0.18m、P24-0.20m、P25-0.30m、P26-0.17m、P27-0.26m、P28-0.14mをはかる。

土器(第20～23図) 1はC字状突起をもつキャリパー形深鉢である。口縁部文様帯には渦巻を加えた波状文が沈線により施され、頸部には一条の隆沈線が横走する。地文にはRL単節縄文が縦位に施文される。2・6はキャリパー形深鉢の口縁部で、隆沈線による渦巻を伴う波状文が施される。3はやや外傾する深鉢の口縁部で、隆線による渦巻文を施文する。4は波状口縁をもつ深鉢口縁部で、口縁に沿って原体圧痕文が施文され、波頂下には原体圧痕による渦巻文が施される。5・7は浅鉢の口縁部で、口唇部下に狭い無文帯を設けている。8・9は口縁が内湾する深鉢口縁部で、8には沈線の文様が、9にはRL単節縄文を施す。10は沈線による胸骨文が施文される。



第19図 RA2198竪穴住居跡出土土器・石器

11は内湾する深鉢口縁部で、口唇部下には幅の広い隆線による文様が施される。12はLR単節縄文、13はLR単節縄文が施される深鉢口縁部である。14はC字状の隆帯を組み合わせた中空の把手状装飾部である。15は口縁が外傾する深鉢である。口縁は波状を呈し、口縁部文様帯下部に4条の横位平行沈線を施文し、底部にかけては3条1組の沈線を垂下させている。地文はRLR複節縄文を斜位に施文する。16~18はやや外傾する深鉢である。16は口縁部文様帯上部に波状の隆線を施し、下位には3条の横位平行沈線を施文している。17は口縁部文様帯上部に2条の横位平行沈線、下位には弧状の沈線を施すしている。18は波状口縁をもつ深鉢口縁部で、RL・LR単節縄文を施文する。19は上部に隆沈線によるS字状文が施され、体部文様帯との間に3条の横位平行沈線が横走する。体部は横位に展開する渦巻文が沈線により描く。

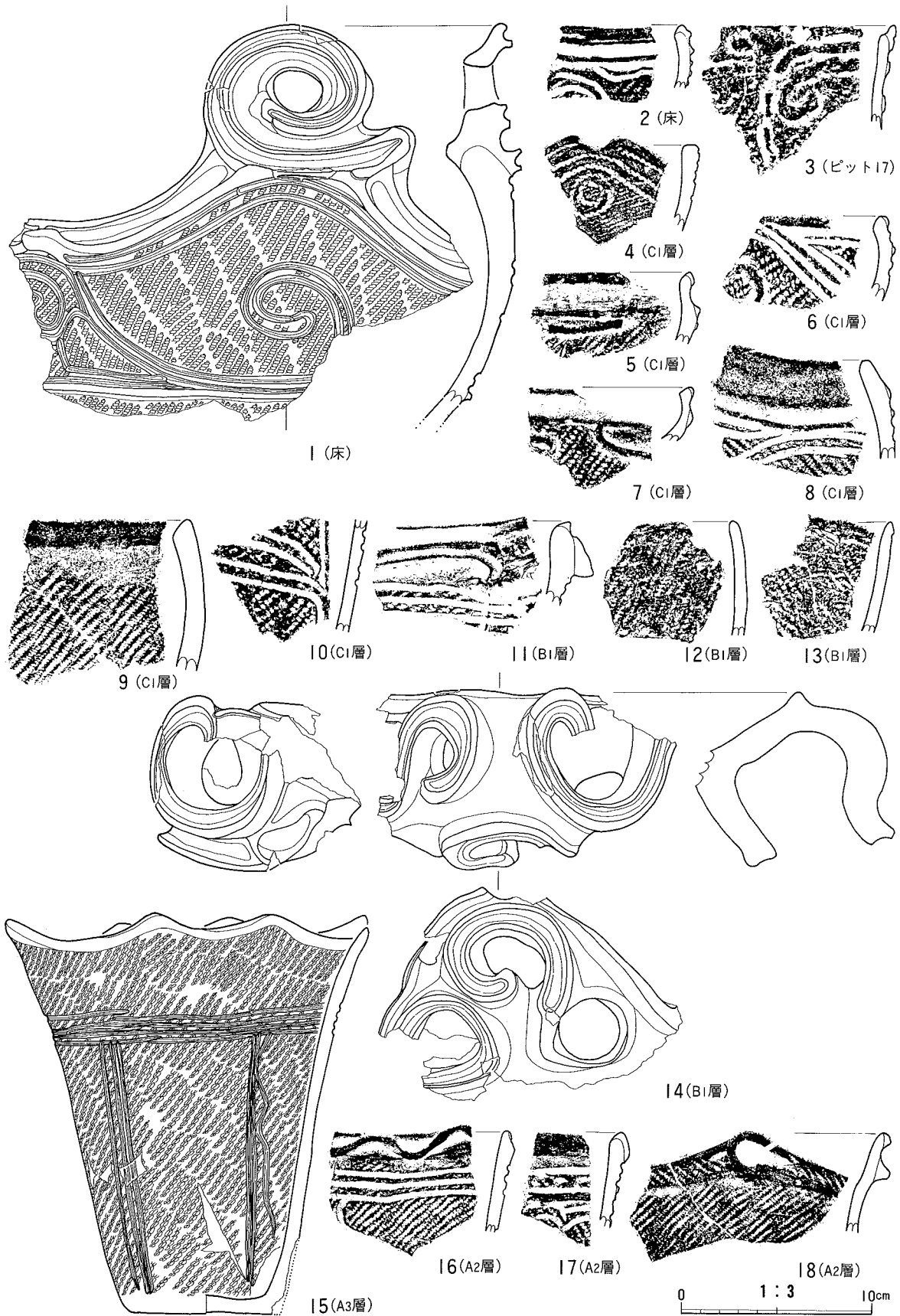
20~25はキャリパー形深鉢である。20の口縁部文様帯は上部1条、下部2条の隆沈線により区画され、区画内は隆沈線による波状文が横走する。口縁部文様帯の地文はRL単節縄文を横位回転押捺することにより右下りとなり、体部はRL単節縄文を縦位に施文する。21は口縁部文様帯上位に隆線による小渦巻文を施し、下位にクランク状の文様を施文する。体部文様帯上部には5条1組となる横位平行沈線が2段にわたり施文され、下部には沈線による懸垂文と弓状の文様が施される。22の口縁部文様帯は上部1条、下部2条の隆沈線により区画され、区画内は隆沈線による波状文が横走し、さらに波頂下に三角形の区画を設けている。23・24は孔のあるC字状突起をもち、口縁部文様帯には沈線による波状文を施す。25は頸部~体部にかけての部位で、口縁部文様帯下部には横走する2条1組の隆沈線が、体部上位には有棘をもつ横位平行沈線を施す。26・32は口縁が内湾する深鉢である。27~29は口縁がやや外傾し、複合口縁をもつ深鉢である。31は深鉢体部で3条1組の横位平行沈線が施される。33~35は浅鉢口縁部で、33には原体圧痕による文様が施される。36は口縁部文様帯に隆線による横位区画帯が設けられ、さらに横位区画を分断する縦位の隆線両辺に小渦巻文を配する浅鉢である。37は弁状突起を有し、体部上半が緩く屈曲する深鉢である。弁状突起から垂下する沈線を基点に、横位のレンズ状文が配置され(胸骨文)地文にはRLR複節縄文を縦位に施す。38は体部が屈曲する深鉢で、RL単節縄文を縦位に施す。39・40は口縁部文様帯を隆沈線により区画するキャリパー形深鉢である。39は区画内に波状の沈線を施し波頂部に渦巻を有する。体部は39・40ともにRL単節縄文を縦位に施すものである。

石 器 (第24~29図73~75) 41~45は削器、46は楔形石器、47・48は籠状石器である。47は楕円形を呈し、下半部に細かい調整が集中する。49は石核、50~52は石鏃である。52は凸基有茎鏃で、鏃身下端から基部にかけてアスファルトの付着が認められる。53~57は削器、58・59は搔器である。60は、裁断面は形成されていないが、下端はつぶれ、上面観は丸ノミ状を呈している楔形石器である。61は石核である

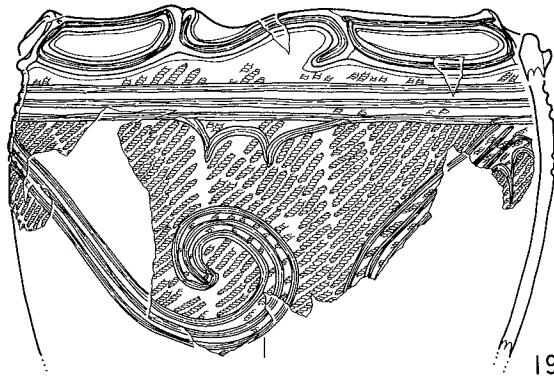
62は敲打磨石、63は石皿、64は磨石である。65は磨製石斧で、基部が破損しており体部に剥落がある。66・67は敲打磨石、68~70は敲石である。71は礫器で、扁平な礫に刃部を作出している。72は全面磨面の磨石である。73~75は敲石で三点ともに長礫を用いたもので、擦痕を伴う。

土 製 品 (第29図76~80) 76は土製円盤、77は中央部に穿孔のある土製品で、78・79はミニチュア土器、80は土偶である。

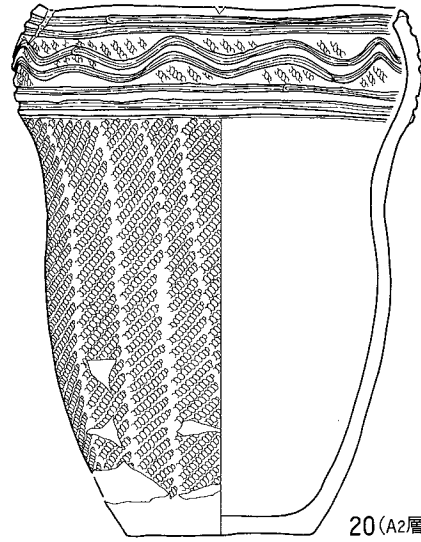
石 製 品 (第29図81・82) 81は全面を磨いてある。82は穿孔されており孔の周辺は磨かれている。



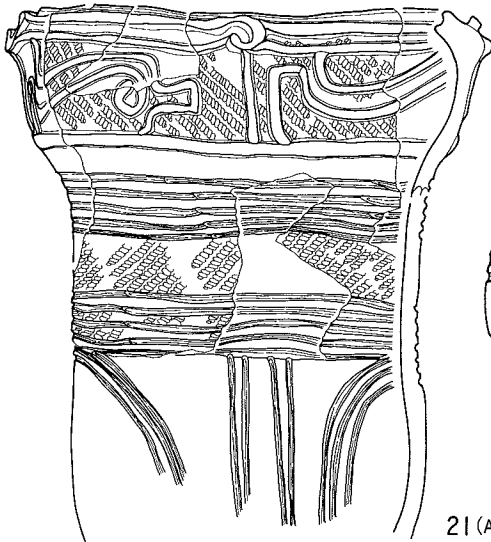
第20図 RA2199 竪穴住居跡出土土器(1)



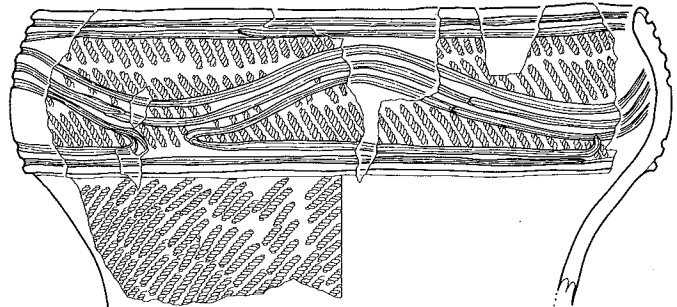
19(A2層)



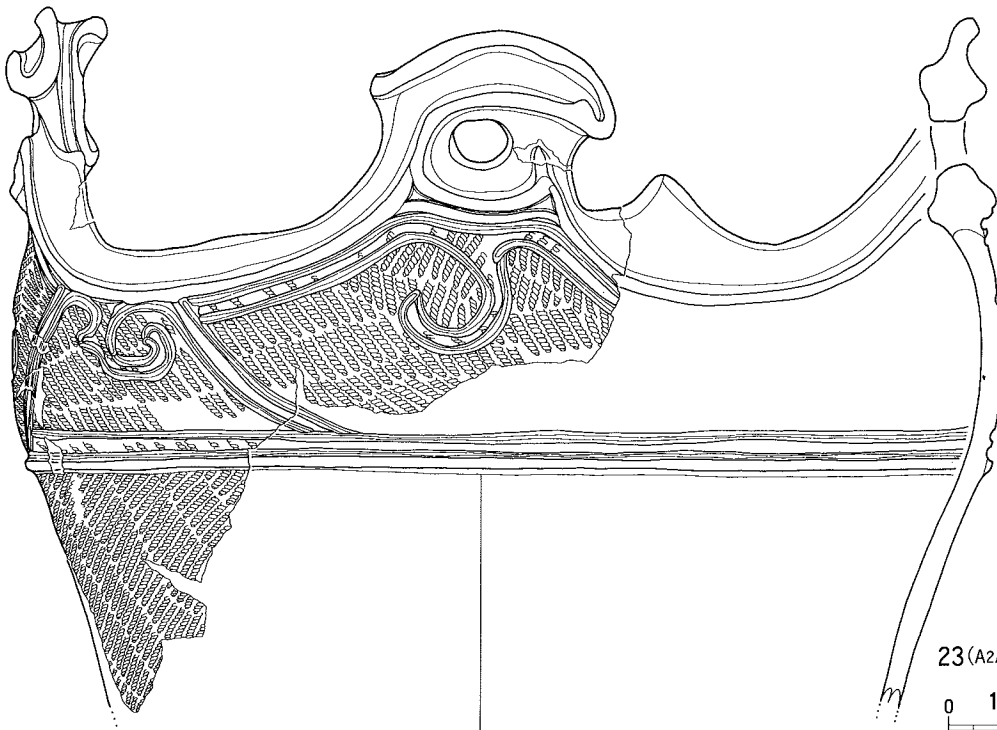
20(A2層)



21(A2層)



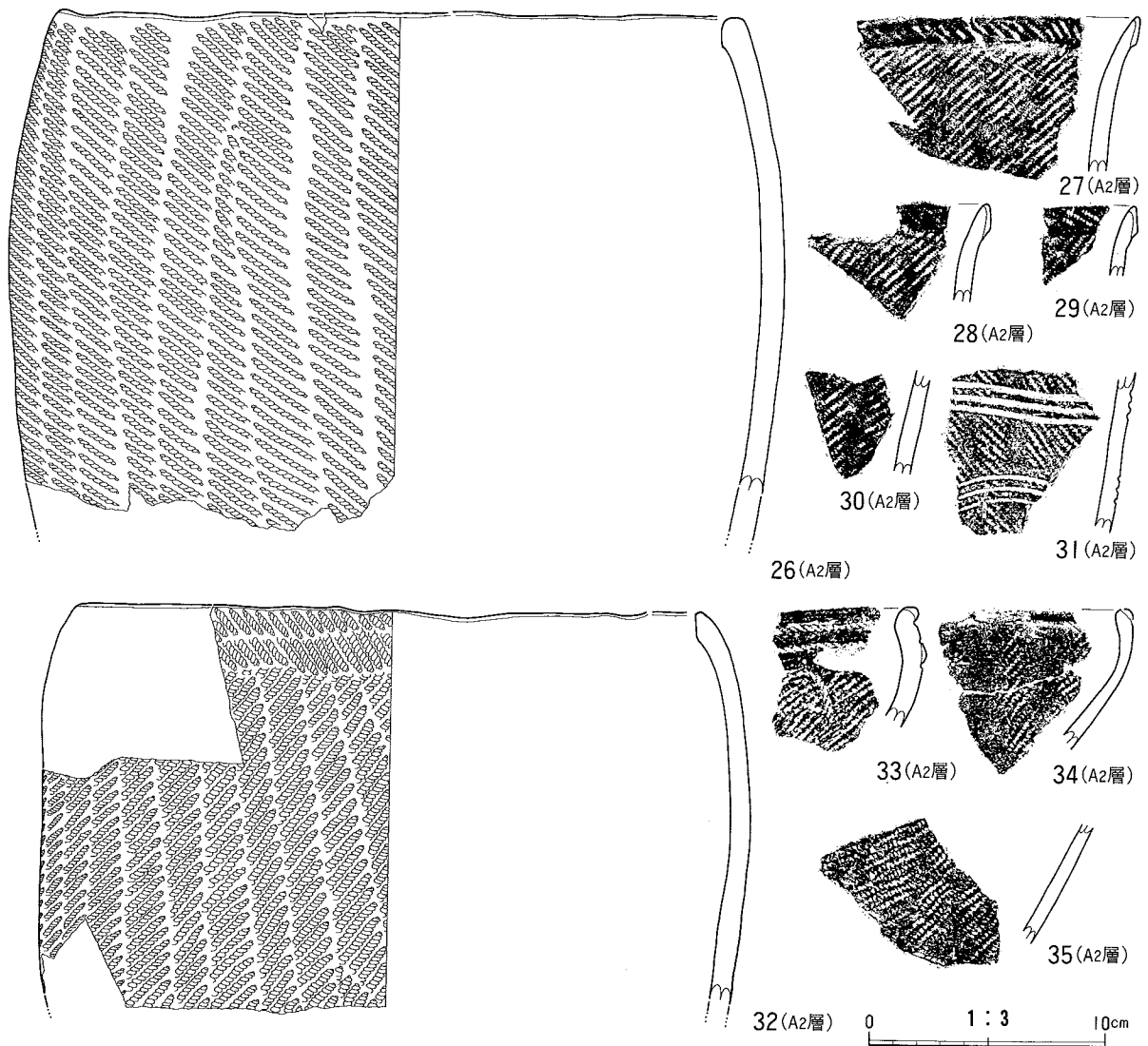
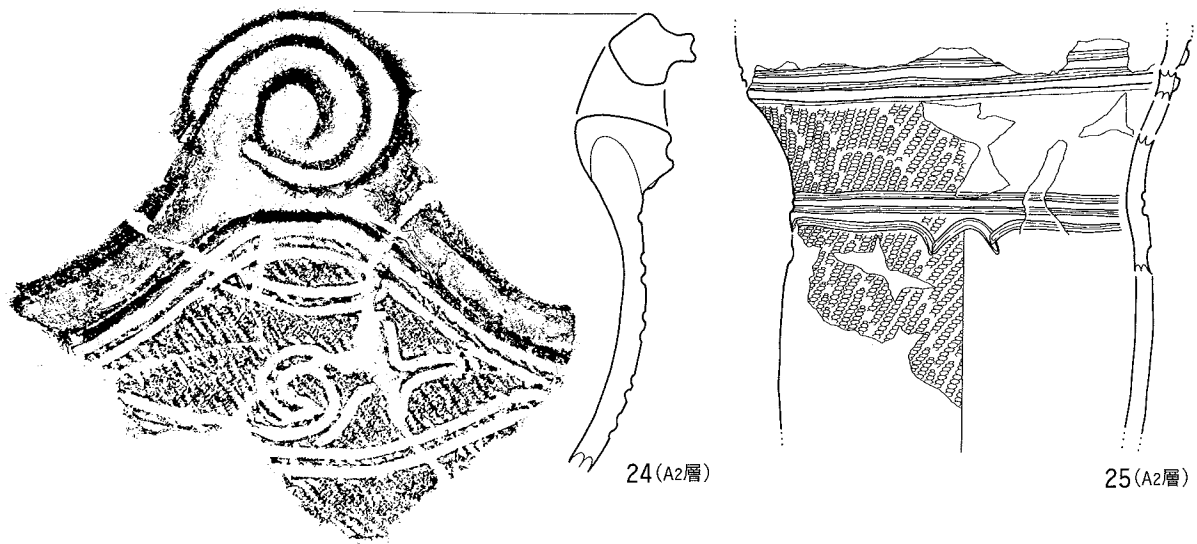
22(A2層)



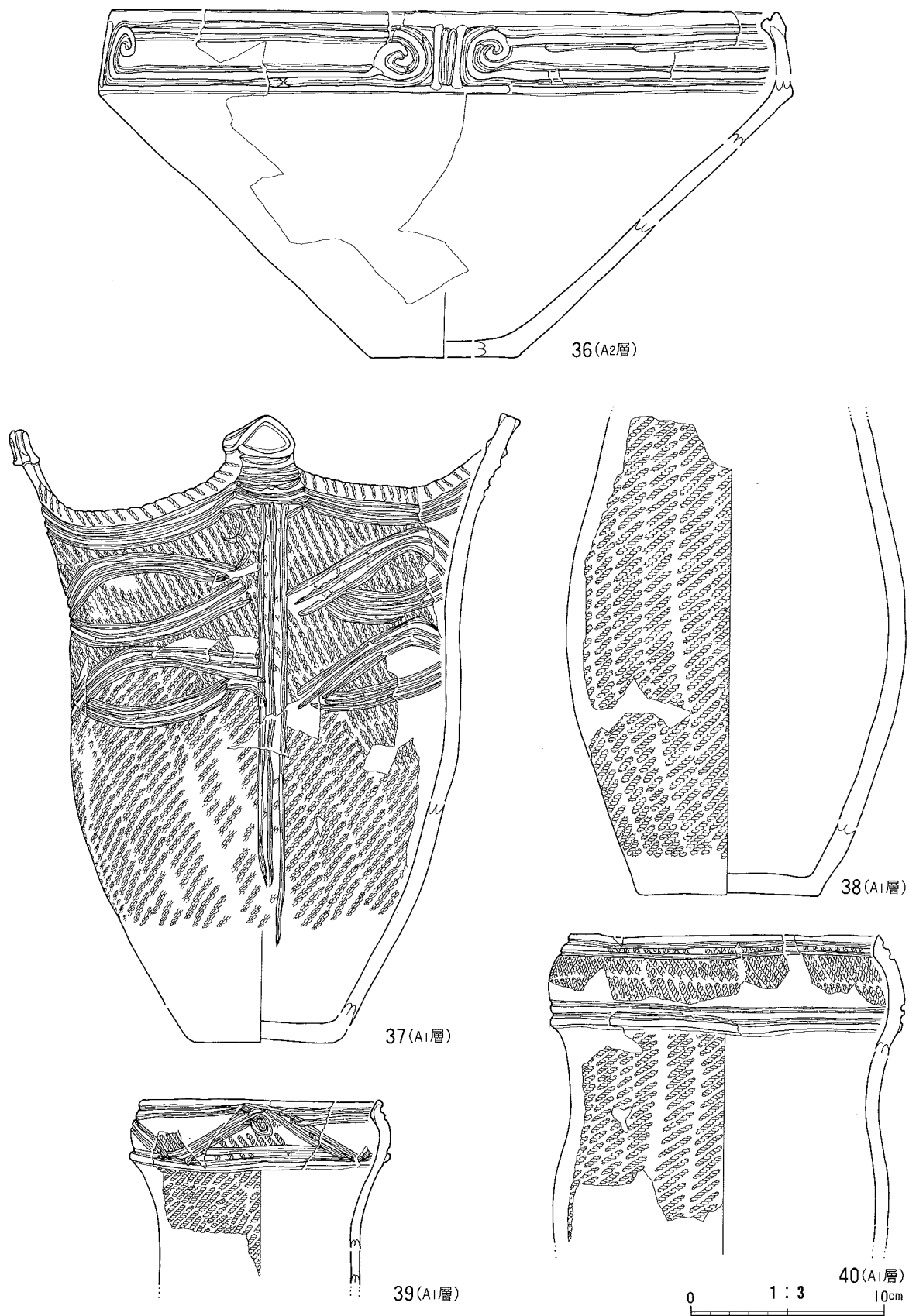
23(A2層)

0 1:3 5cm

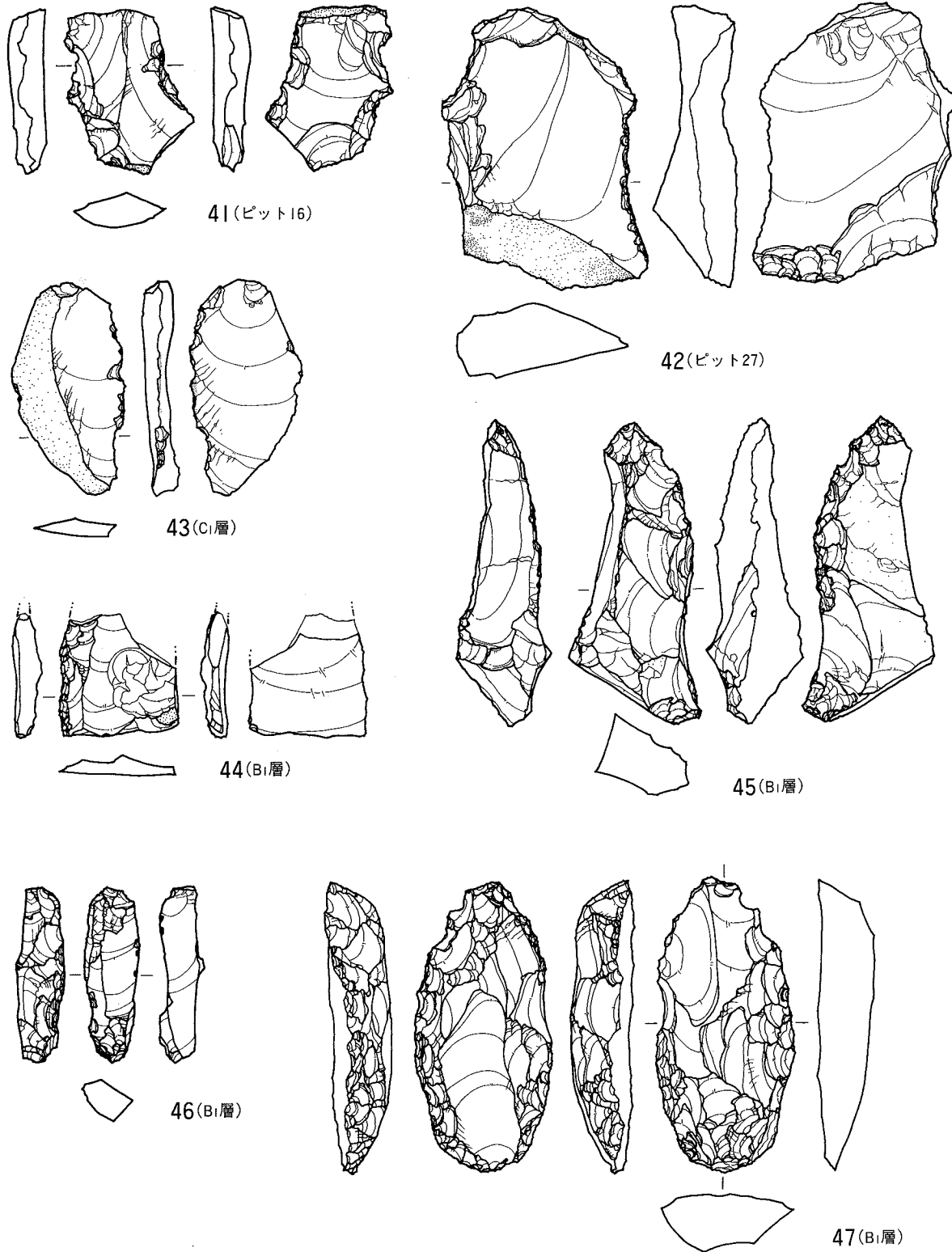
第21圖 RA2199豎穴住居跡出土土器(2)



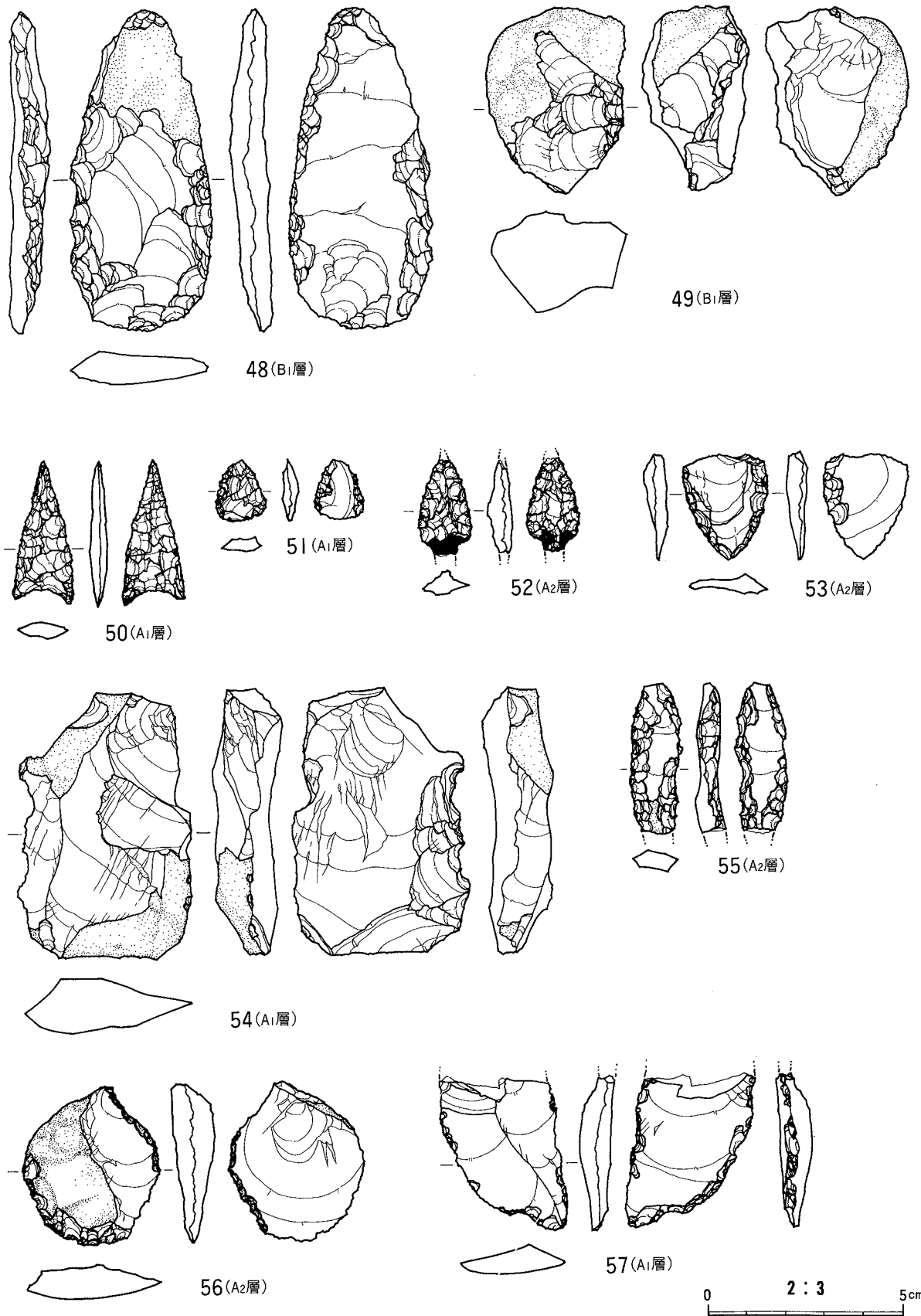
第22図 RA2199竪穴住居跡出土土器(3)



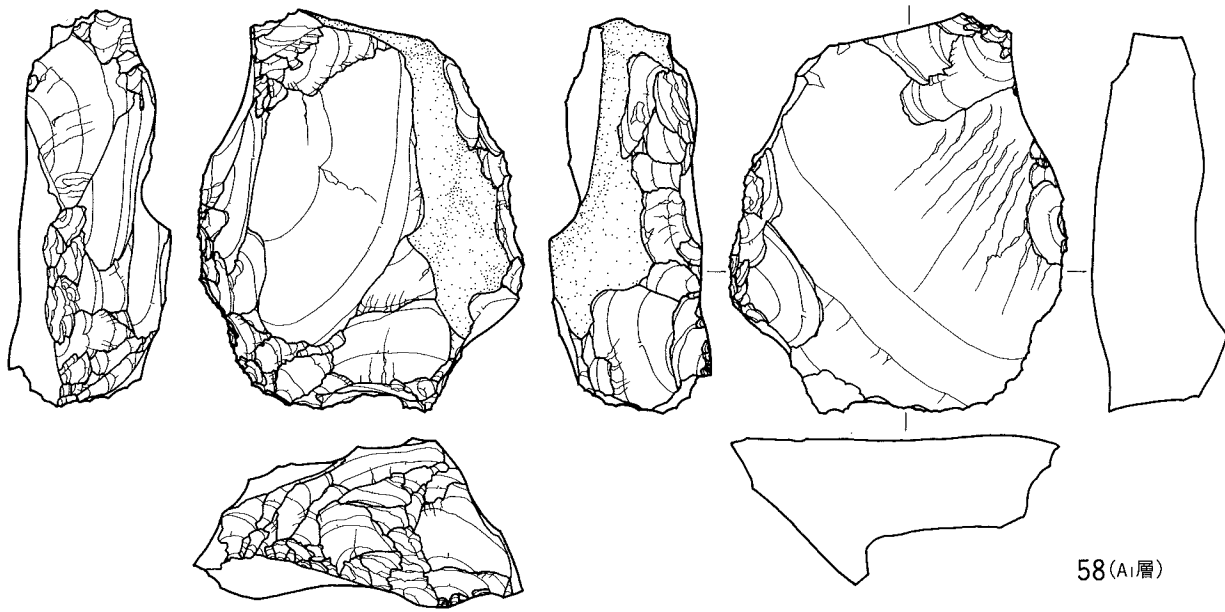
第23図 RA2199豎穴住居跡出土土器(4)



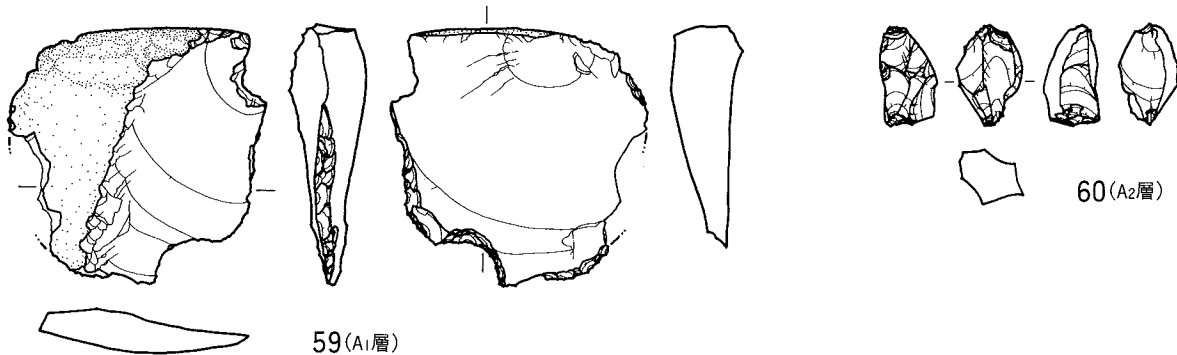
第24図 RA2199 竪穴住居跡出土石器(1)



第25図 RA2199竪穴住居跡出土石器(2)

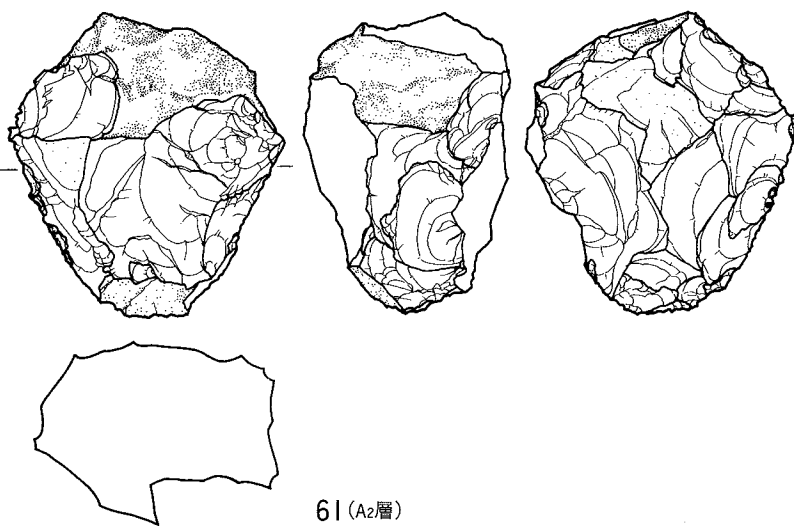


58(A₁層)

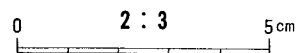


59(A₁層)

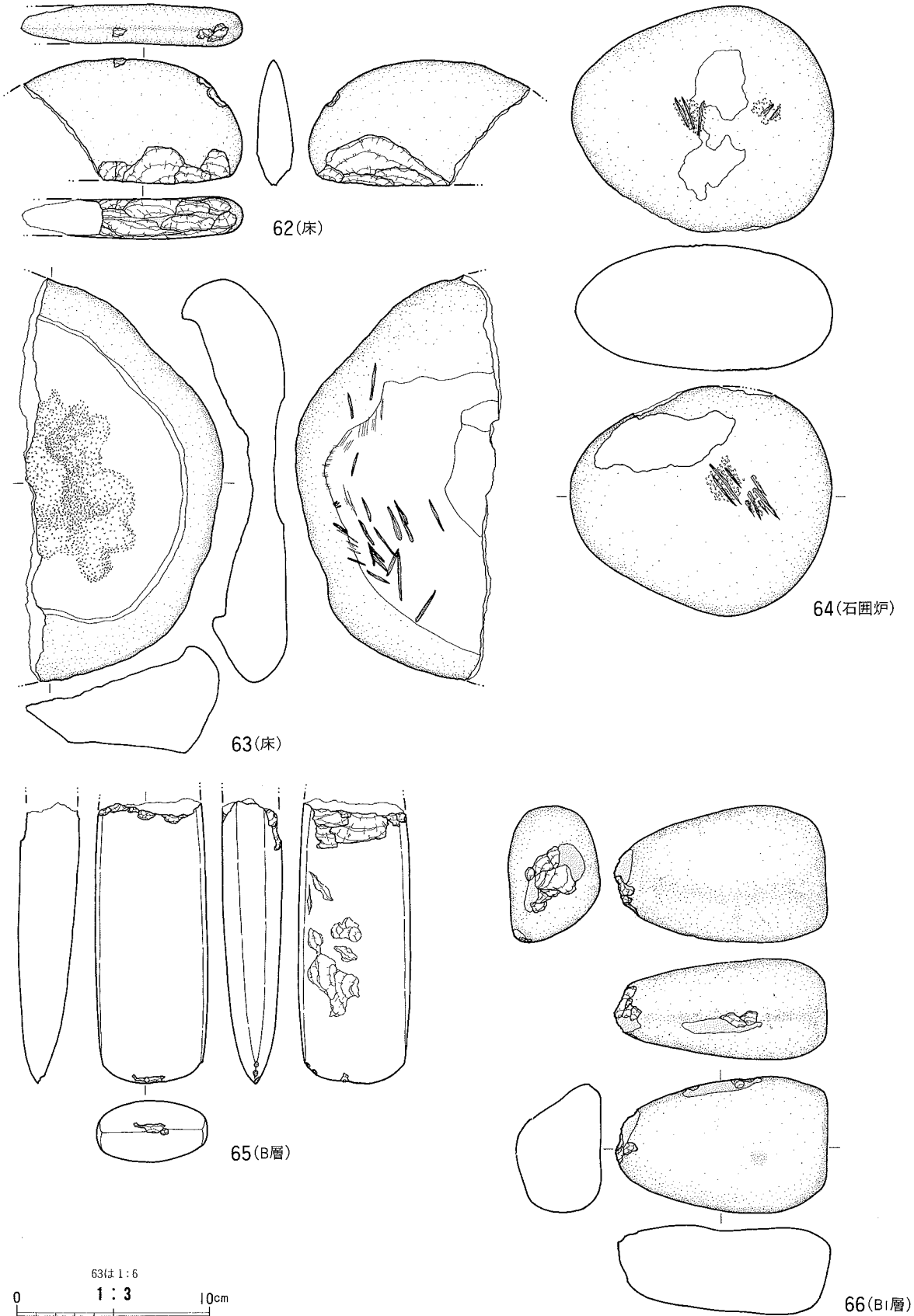
60(A₂層)



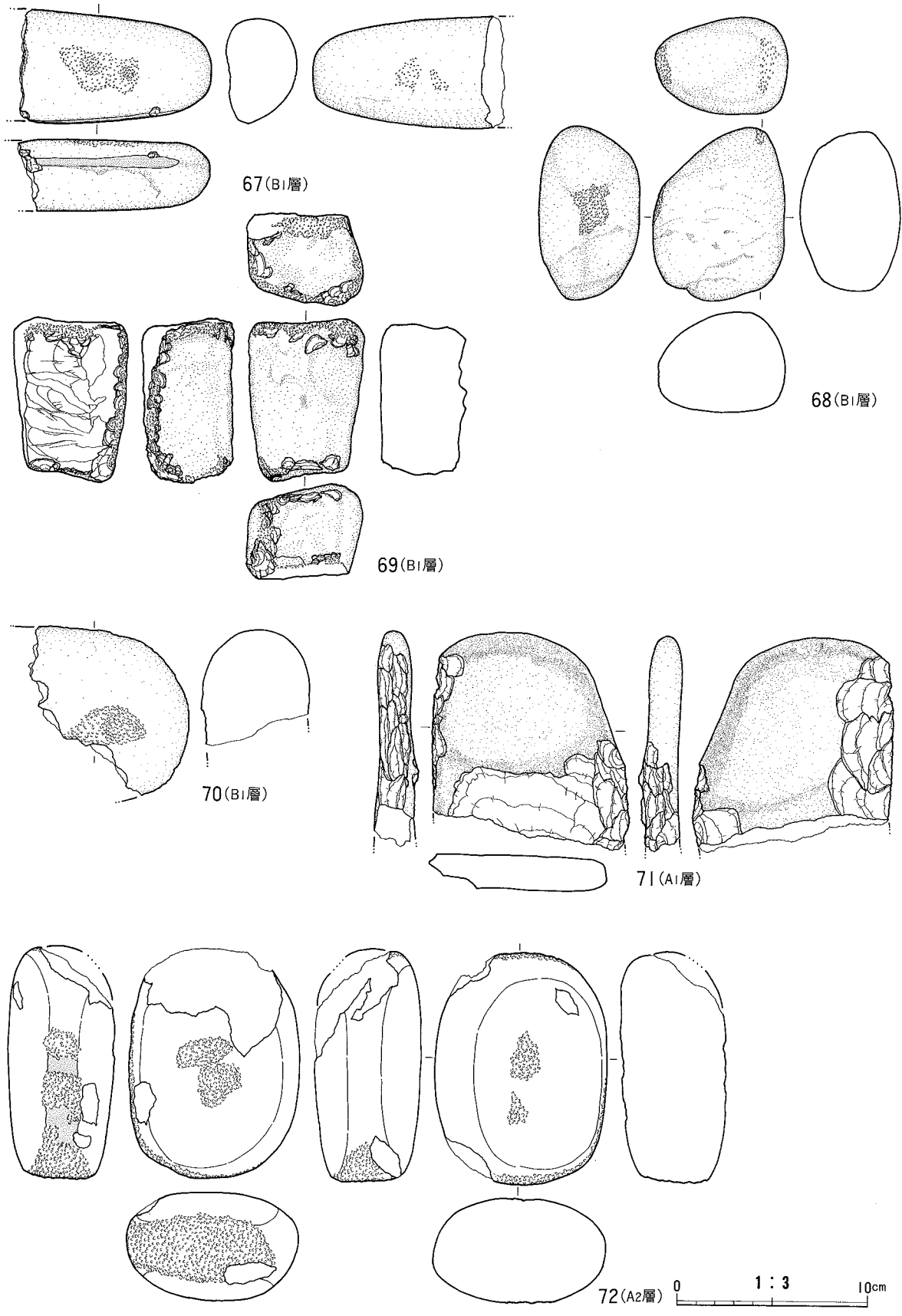
61(A₂層)



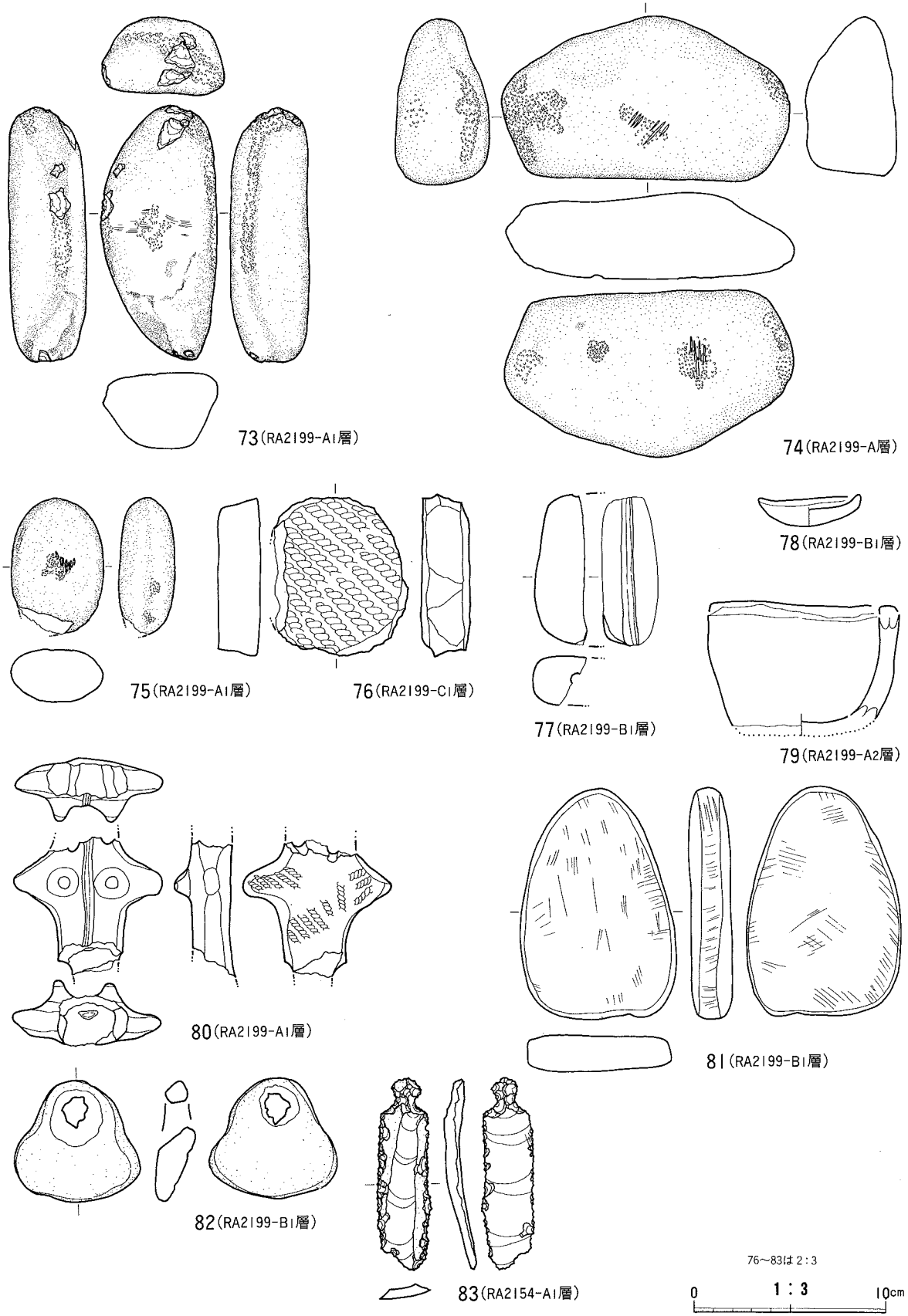
第26圖 RA2199豎穴住居跡出土石器(3)



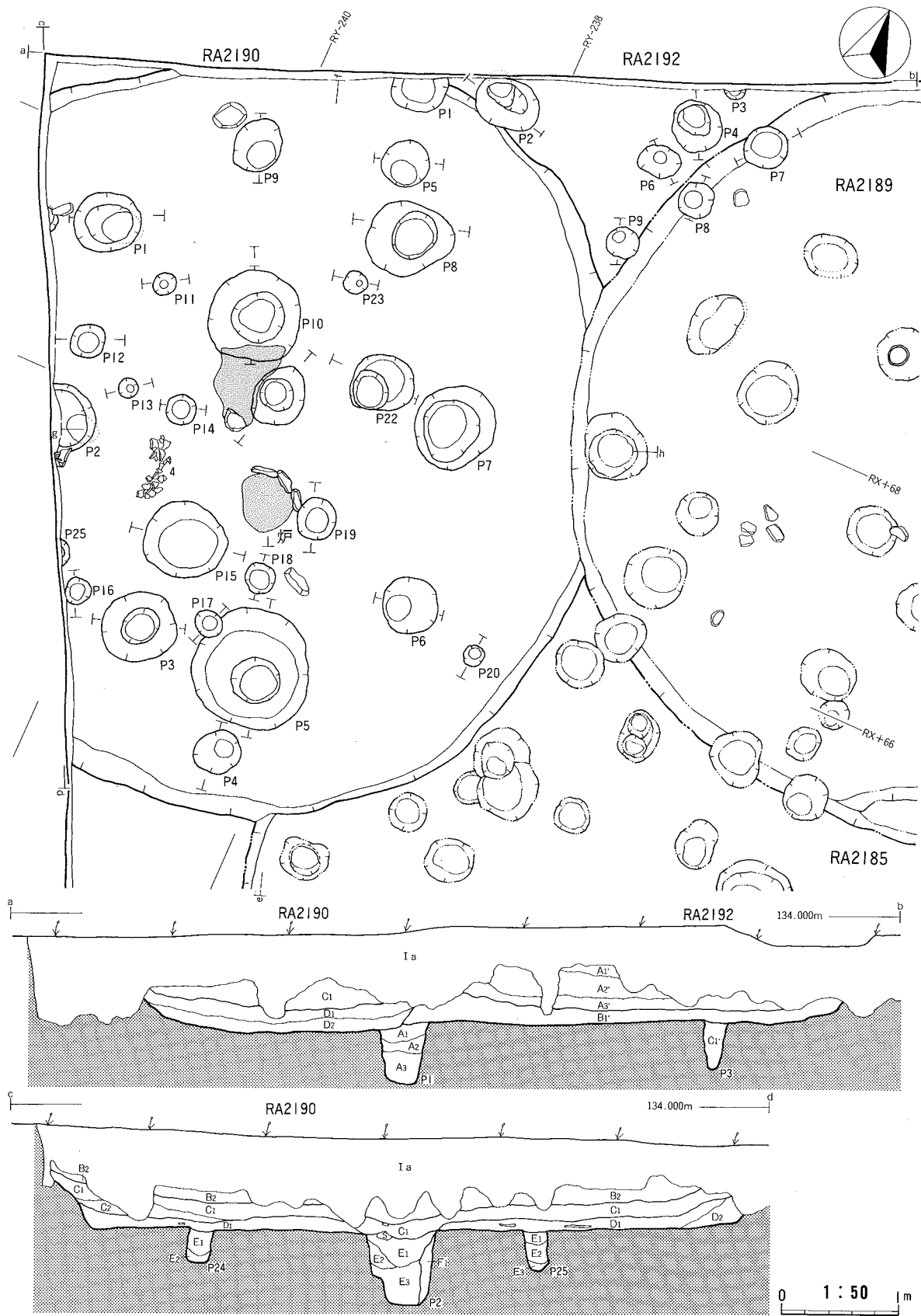
第27図 RA2199竖穴住居跡出土石器(4)



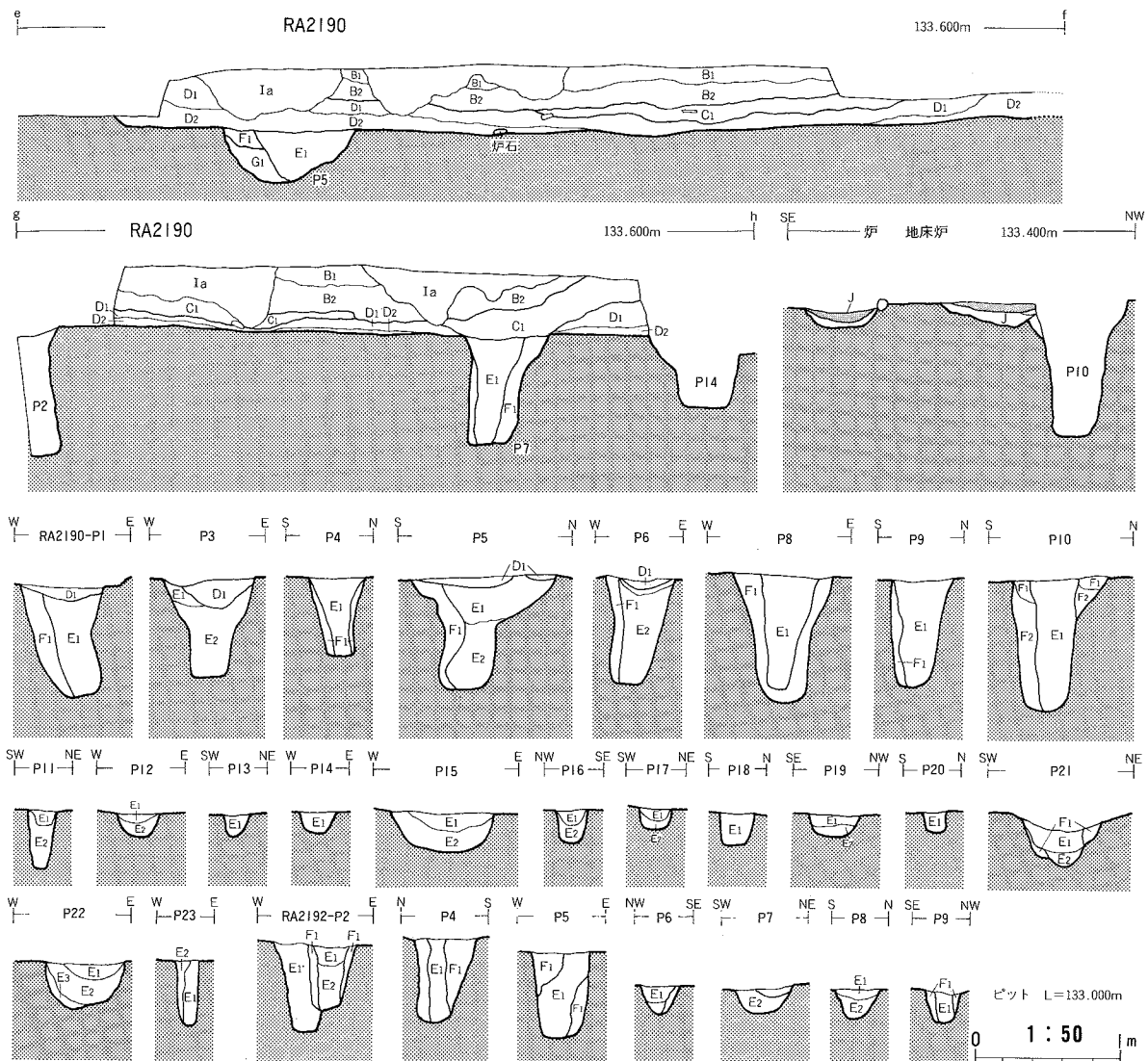
第28図 RA2199竪穴住居跡出土石器(5)



第29図 RA2199竪穴住居跡出土石器(6)・土製品・石製品、RA2154出土石器



第30図 RA2190・2192竪穴住居跡(1)



第31図 RA2190・2192竪穴住居跡(2)

R A 2190竪穴住居跡 (第30～39図)

- 時 期 縄文時代中期(大木8a-2式期)。 位 置 調査区北西隅に位置する。
- 平 面 形 円形を呈する。
- 主 軸 方 向 W67°Nを示す。
- 規 模 全体形の西壁と北壁の一部は調査区外に広がる。復元される規模は南北(長軸)6.6m、東西(短軸)6.1mで、残存する壁高は最大0.58mをはかる。
- 重 複 関 係 R A 2185・2189に切られ、R A 2192と R D 2142・2150を切る。
- 掘 込 面 耕作土(I a層)直下。
- 埋 土 自然堆積で層相の違いにより、A～Dの4層に大別される。
- A層-粒状の褐色土とカーボンを微量に含むやや軟質の黒褐色土。
 - B層-粒～塊状の褐色土とカーボン・スコリアを微量に含むしまりのよい黒褐色土。
 - C層-粒～粉状の褐色土とスコリアを微量に含むしまりのよい黒褐色土。
 - D層-粒～粉状の明黄褐色土とスコリア粒をわずかに含むしまりのよい褐色土。

炉の状態 南北中軸線上や南寄りに石囲炉1基と北寄りに地床炉1基を検出している。石囲炉は自然円礫の炉石3個が残存しており、さらに炉の南側の床面上に炉石1個が散乱している。平面形は楕円形を呈し、規模は0.48×0.42mをはかる。熱浸透層の厚さは0.06m程である。地床炉の火床面は不整形を呈する。規模は0.74×0.55mをはかり、火床面の熱浸透層の厚さは0.05m程である。なお、浸透層下面はやや起伏のある構築面となっている。

壁の状態 床面から直壁ぎみに立ち上がる。

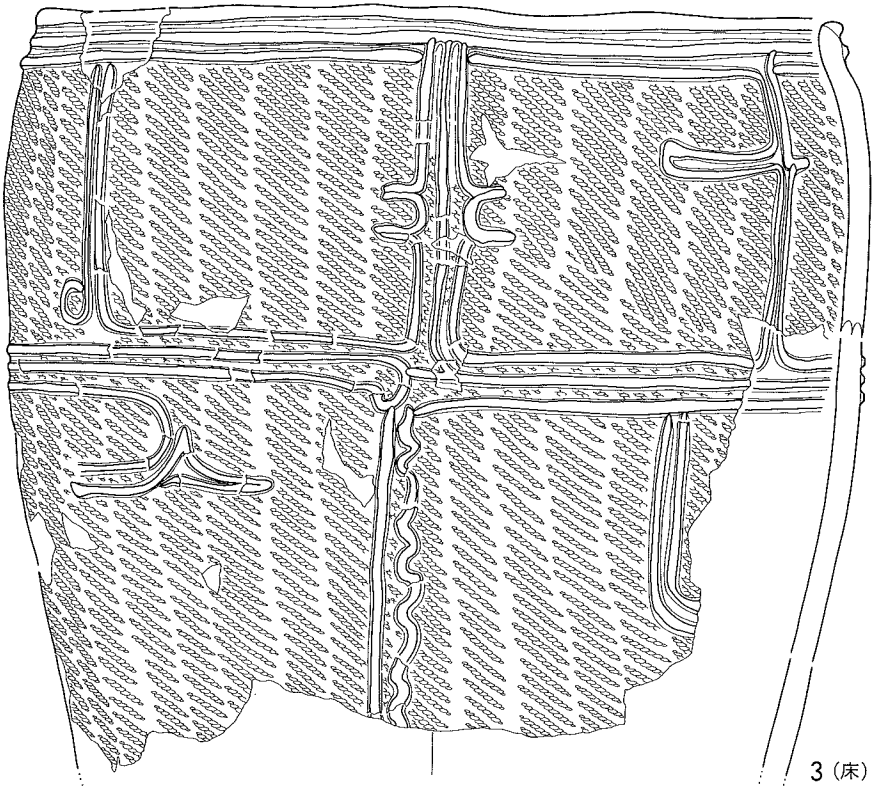
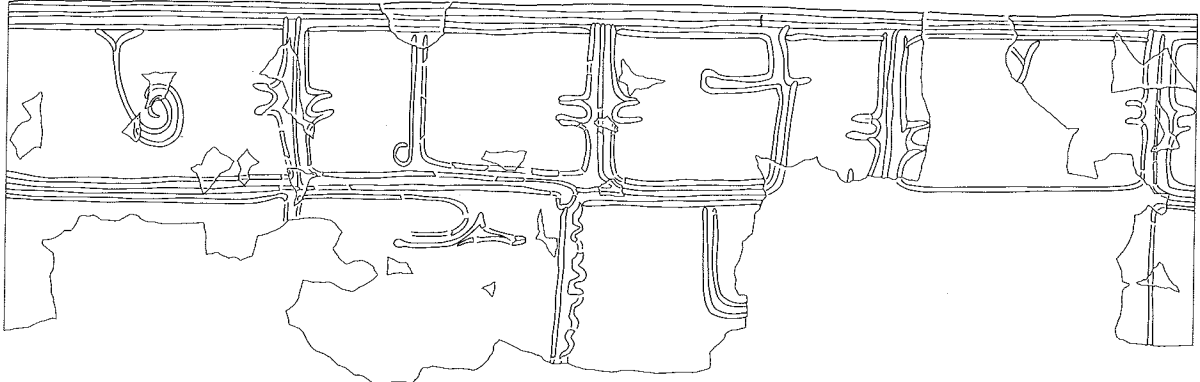
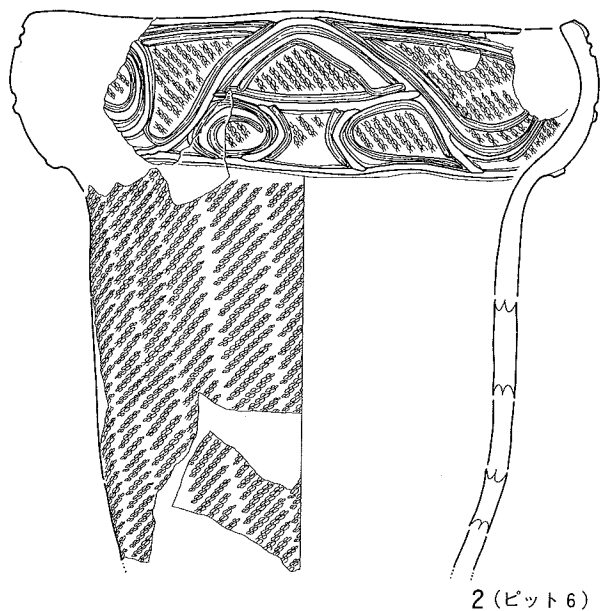
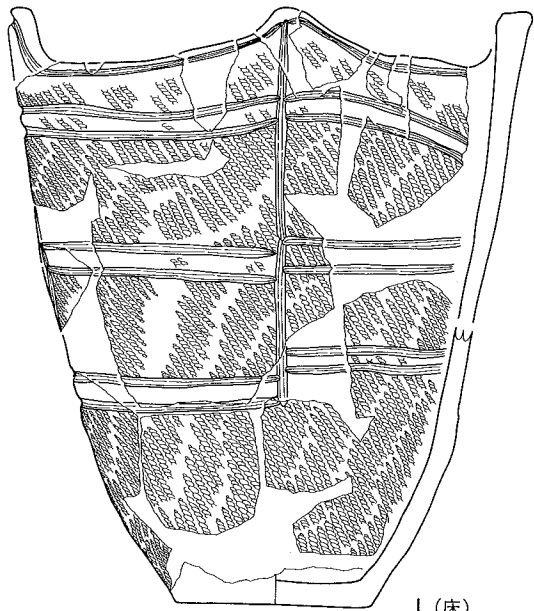
床の状態 ほぼ平坦である。

柱 穴 床面上に23口のピット（P1～23）を検出している。このうち支柱穴を構成するピットはP1～3・5～10の9口で亀甲形の配置を呈する。床面からの深さは、P1-0.74m、P2-0.62m、P3-0.67m、P5-0.77m、P6-0.72m、P7-0.72m、P8-0.88m、P9-0.72m、P10-0.90mをはかる。柱痕跡は0.24～0.34mをはかる。埋土は柱痕跡（E層）が暗褐色土を主体とし、掘方（F層）は黒褐色土と黄褐色土の塊状混合土である。その他は小規模なピットで深さは、P4-0.54m、P11-0.40m、P12-0.15m、P13-0.15m、P14-0.14m、P15-0.24m、P16-0.23m、P17-0.12m、P18-0.22m、P19-0.14m、P20-0.15m、P21-0.26m、P22-0.32m、P23-0.44mをはかる。

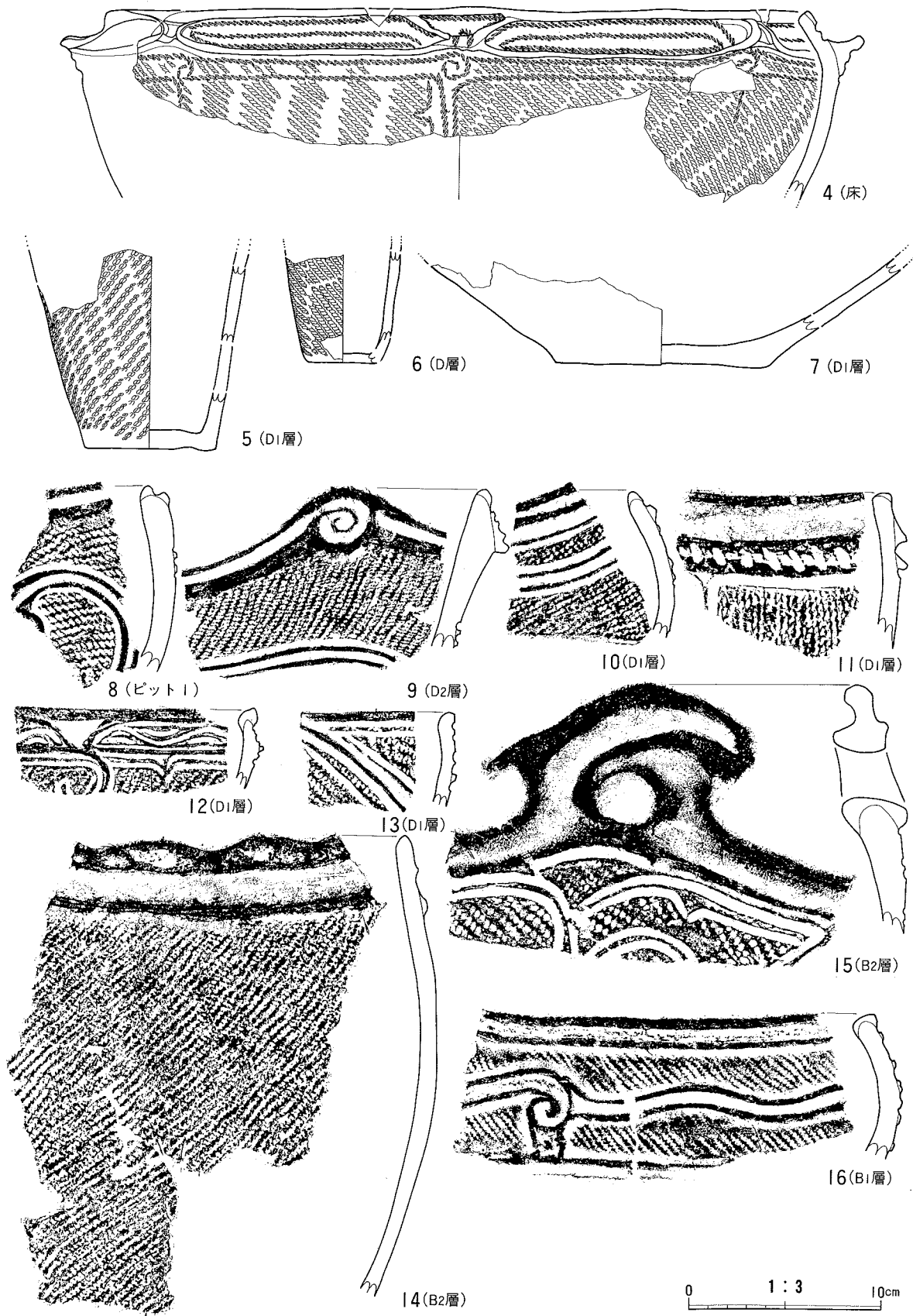
土 器 (第32・33図) 1は波状口縁をもつ深鉢である。波頂部より垂下する沈線により体部上半は縦割区画され、区画内を2条1組の横位平行沈線（胸骨文）が3段にわたり施文される。地文はLR単節縄文を縦位に施す。2は口縁部文様帯を隆沈線により区画するキャリパー形深鉢である。区画内には隆沈線による波状文と渦巻文が施文される。体部にはRLR複節縄文が縦位に施される。3は口縁が内湾する深鉢である。口縁上部に3条の隆線が施され、下位は隆線による方形の区画文が施される。地文はLR単節縄文を縦位に施すものである。4は底部を欠く浅鉢、7は無文の浅鉢底部である。4の口縁上端は隆線によってレンズ状に区画され、区画内に原体圧痕文が施される。体部上半は原体圧痕による渦巻が施され、渦巻部より原体圧痕を垂下させるものである。

地文はLR単節縄文を縦位に施すものである。5・6は深鉢底部で、5はRLR複節縄文を、6はLR単節縄文を縦位に施す。8・11・14は口縁が内湾する深鉢である。8は隆沈線による大形の渦巻文を施し、11は口縁上部に横走する隆沈線に刻目を施すものである。14はRL単節縄文を縦位に施文するものである。9は波状口縁の波頂部に隆沈線による渦巻文を加飾するものである。破片下端には隆沈線による文様が見られる。地文はRL単節縄文を縦位に施すものである。10・13・15・16はキャリパー形深鉢の口縁部である。10は波状口縁をもつもので、隆沈線による波状文が施される。地文はRLR複節縄文を縦位に施す。13は隆沈線による波状文を施文し、地文はRLR複節縄文を横位に施すものである。15は孔のあるC字状突起をもつもので、口縁部文様帯は沈線によるクランク？状の文様が施される。地文はRL単節縄文を横位に施すものである。16は隆沈線で横位に区画された口縁部文様帯である。区画内は曲線状の隆沈線末端に小渦巻文を加飾する文様が施される。また小渦巻と下位の横位平行隆沈線は2条1組の隆線によって連結される。地文はRLR複節縄文を横位に施すものである。

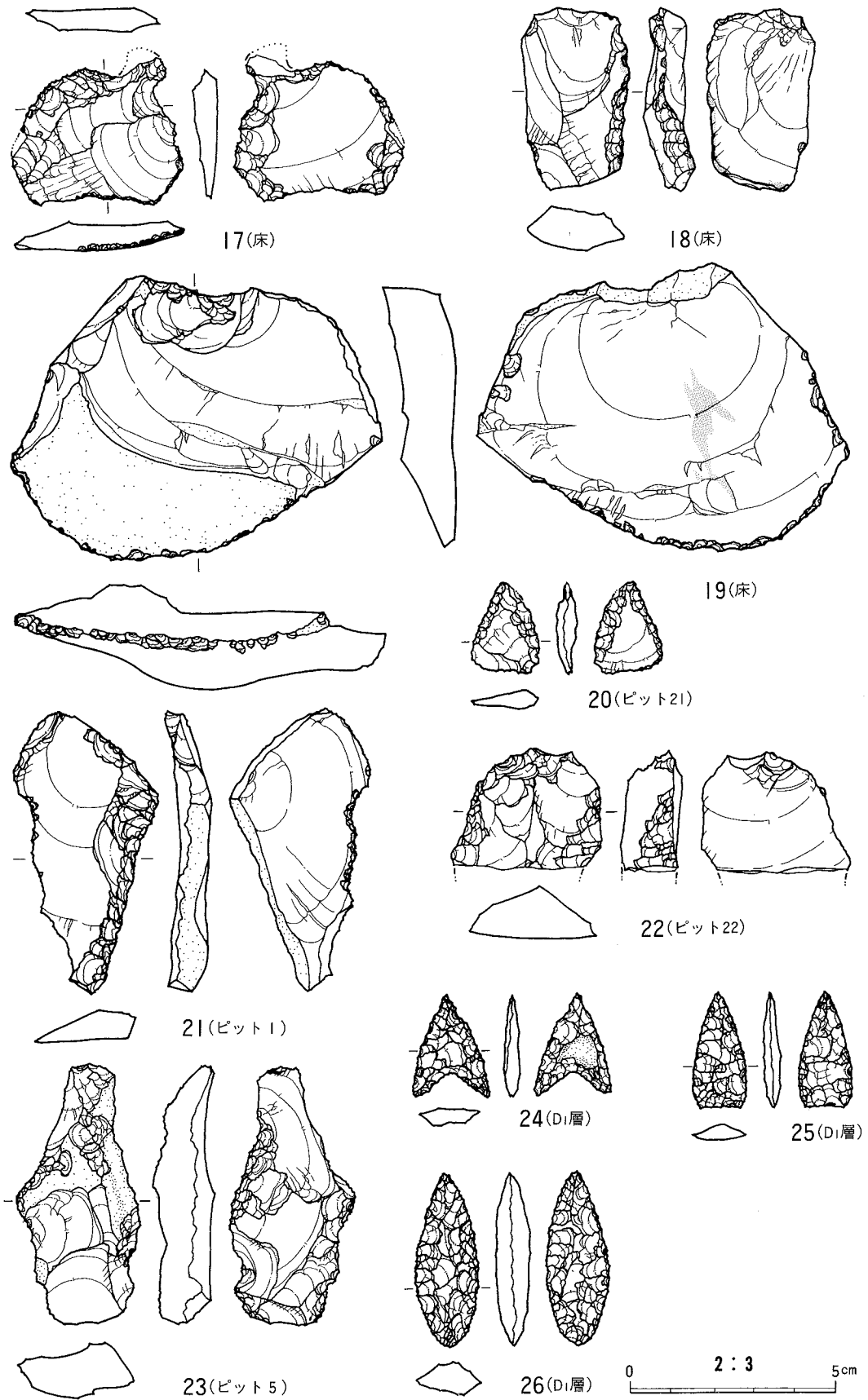
石 器 (第34～38図) 17は石匙である。つまみ部は背・腹両面からの調整により作出されているが、腹面から破損している。刃部はつまみ部に直角の位置ではないが、横型の石匙である。18は削器である。19は搔器で器面に対して垂直に近い角度で調整されている。打面調整がおこなわれ腹面には



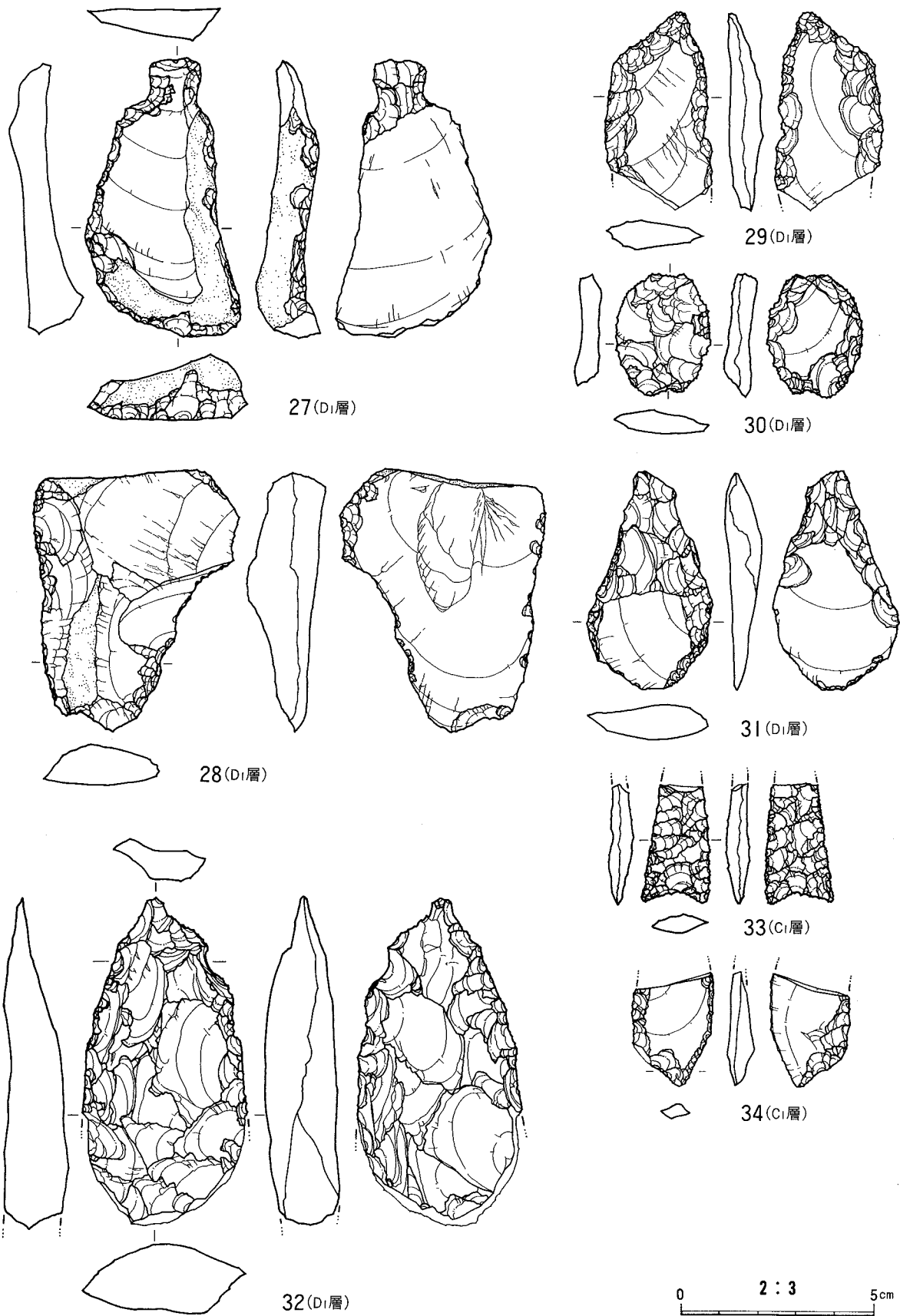
第32図 RA2190竪穴住居跡出土土器(1)



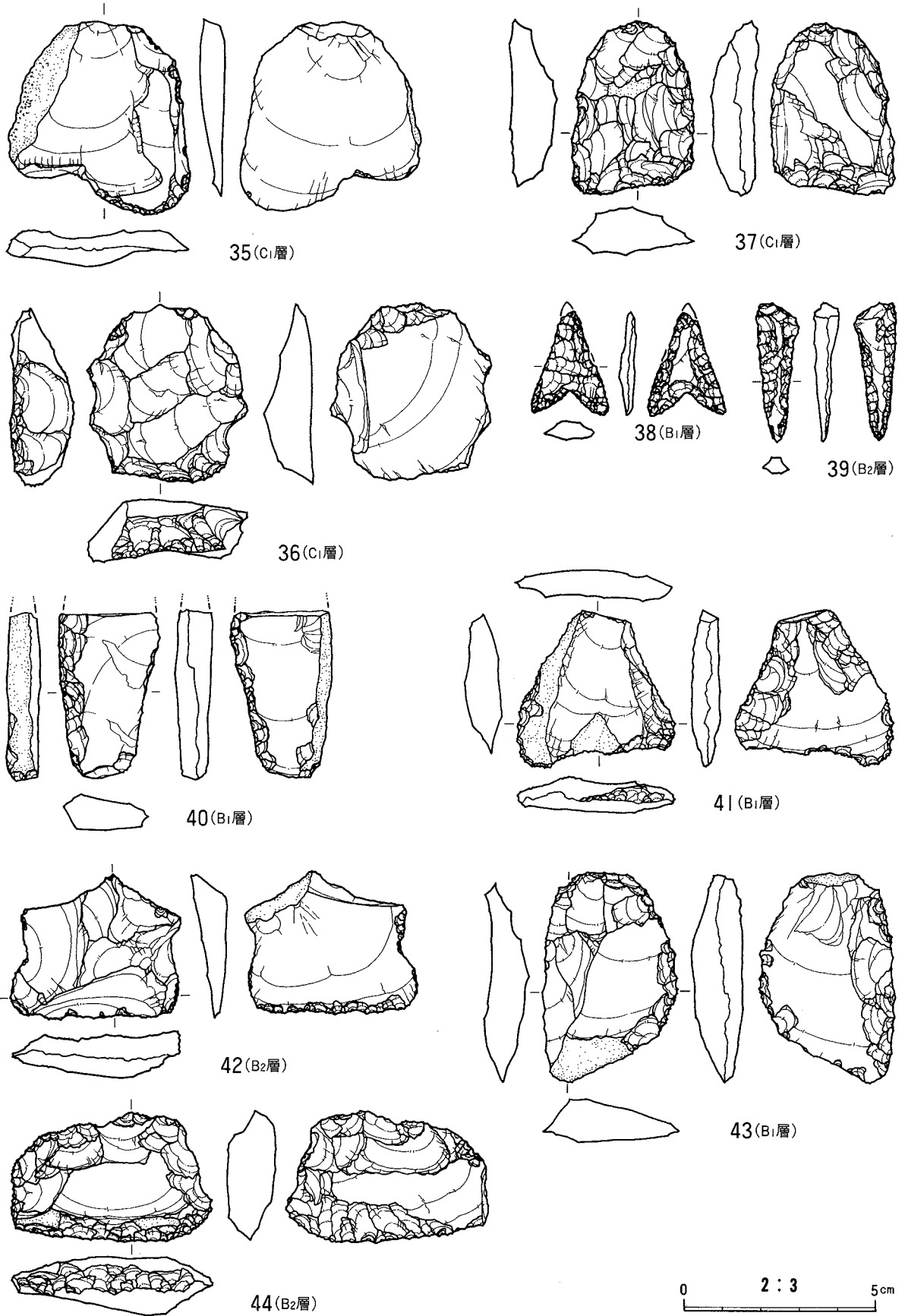
第33図 RA2190竪穴住居跡出土土器(2)



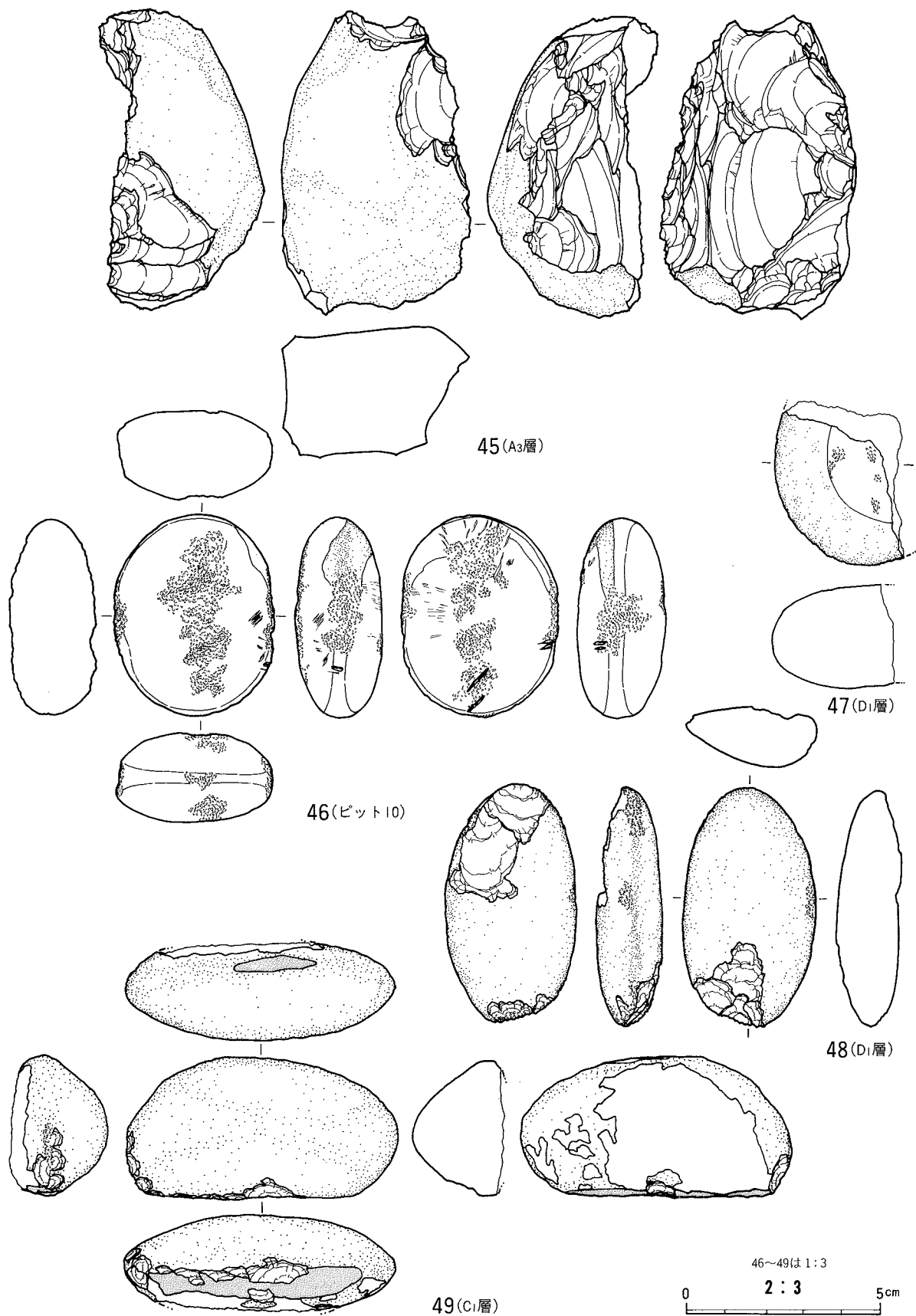
第34図 RA2190竪穴住居跡出土石器(1)



第35圖 RA2190豎穴住居跡出土石器(2)

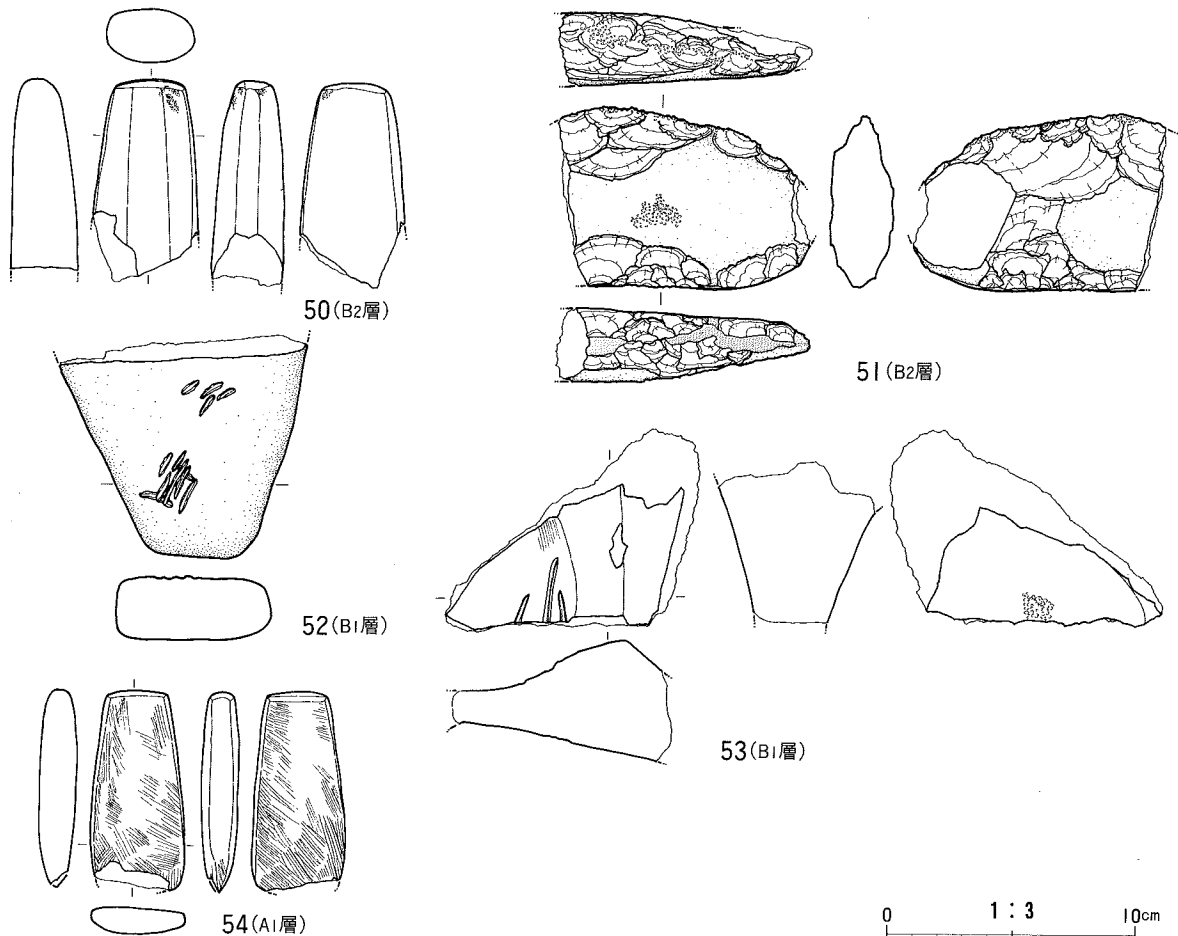


第36图 RA2190竖穴住居跡出土石器(3)

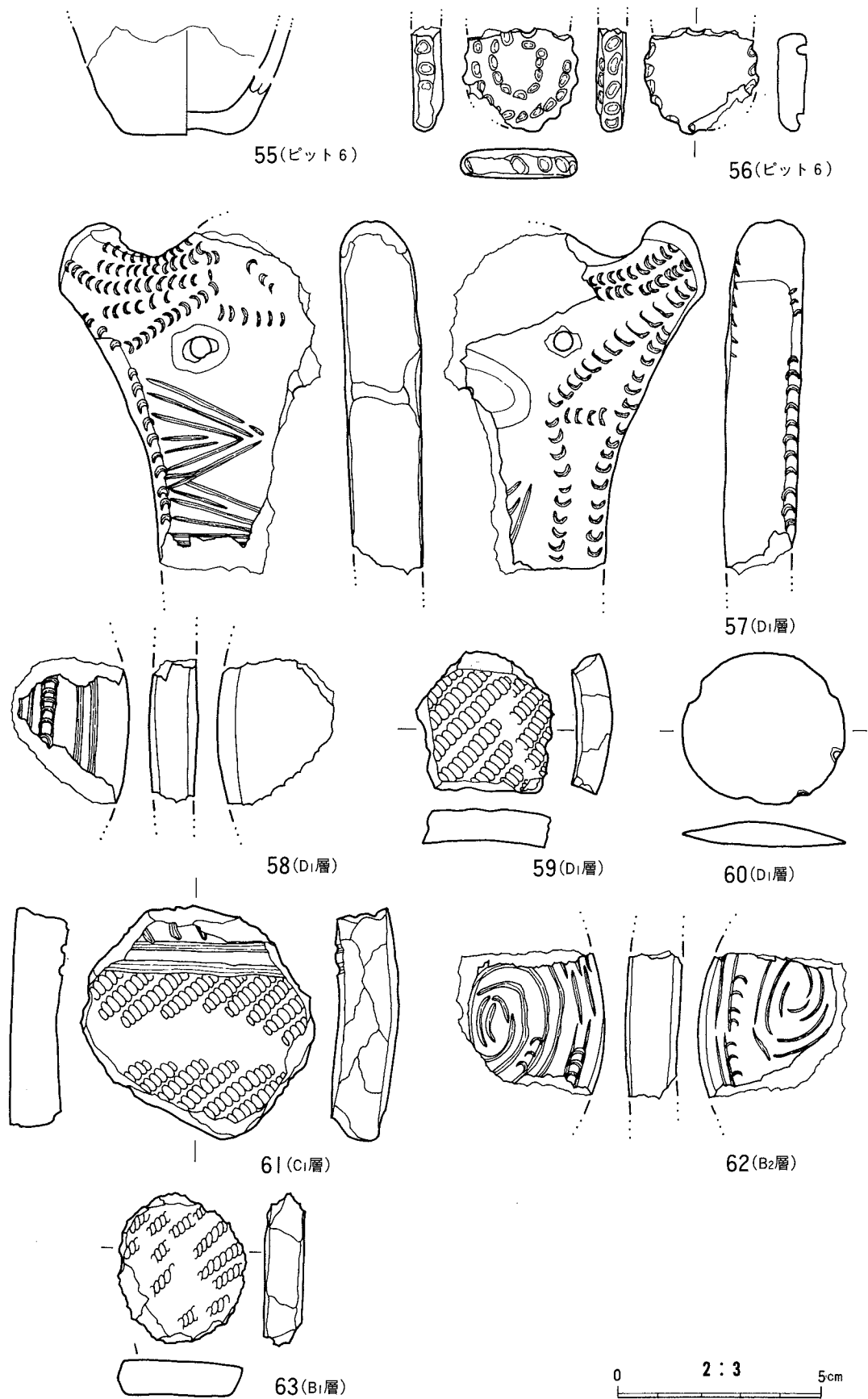


第37図 RA2190 竪穴住居跡出土石器(4)

光沢が見られる。20は平基無茎鏃で、基部は調整されておらず、素材剥片の末端のままである。先端部が破損した為、廃棄されたものと思われる。21は削器で、刃潰しのための打面調整がまずおこなわれてから剥片剥離作業に移り、腹面右側辺が刃部として使われている。22の削器は下半部が欠損しており、その後新しく調整は加えられていないことから、破損後廃棄されたと考えられる。23は石核、24は凹基無茎鏃、25は平基無茎鏃、26は凸基無茎鏃である。27の縦型の石匙は、素材剥片の分厚い下半部は自然面を残したままであり、両側辺の鋭い刃部とは異なって搔器様の急斜度の調整が施されている。つまみ部は他の部分に比べて薄い。腹面はつまみ部以外は調整されていない。28～30は削器、31・32は筥状石器である。28は背・腹両面の縁辺を短い単位で交互に調整している。29は周縁調整が施されているが下半部が欠損している。31は第一次離面の縁辺を刃部としており、細かい刃毀れが見られる。33は凹基無茎鏃で先端部が欠損している。34・35は削器、36は搔器である。34は背面の両側辺の縁辺に細かい調整を施している。36は背面底辺が刃部となっており、縁辺はつぶれ、微小な剥離が並んでいる。37は筥状石器で、背面には自然面、腹面には古い剥離面が残されている。38は凹基無茎鏃であるが、他のものに比して脚部が長い。先端部が欠損している。39は石錐、40～43は削器である。41は末端に調整を施している。44は搔器で、横長の剥片の末端を調整し刃部としている。45は片面調整石器である。



第38図 RA2190竪穴住居跡出土石器(5)



第39図 RA2190 竪穴住居跡出土土製品

46・47は磨石で、いずれも敲打痕を伴う。48は敲石で、礫の両端に衝撃剥離が見られる。49は敲打磨石で、敲打磨面が二面形成され、小剥離を伴う。50は磨製石斧の基部～体部で、表面には二条のくっきりした稜線が見られる。51は敲打磨石で、両端を破損している。敲打磨面は一面にだけ形成されているが、やや不定形を呈する。52・53は砥石である。53は表裏両面を利用した砥石である。54の磨製石斧の刃部には使用時の擦痕、体部には整形擦痕を残す。

土製品 (第39図) 55はミニチュア土器、56は垂飾品である。前面と側面に円形の刺突を有し、上半部に欠損しているが貫通孔がある。57は土偶で、上半と肩(上腕)を表現していると考えられる。表・裏面に半截竹管による刺突文と鋸歯状に配された沈線文が描かれる。59～61・63は土製円盤、58・62は土版ないし土偶である。どちらも大半を欠損しており、平行沈線や渦状の沈線文による施文がなされている。

R A 2192 竪穴住居跡 (第30・31・40図)

時期 縄文時代中期 (大木8 a - 2 式期)。

位置 調査区北西、R A 2189と2190の中間に位置する。

平面形 不明。

主軸方向 不明。

規模 不明。

重複関係 R A 2189・2190に切られる。

検出面 耕作土 (I a 層) 直下及びR A 2189・2190床面。

埋土 自然堆積で層相の違いによりA'・B'の2層に大別される。

A'層-粒～塊状の褐色土とスコリアを微量に含むしまりのよい黒褐色土。

B'層-粒～粉状の明黄褐色土とスコリア粒をわずかに含む褐色土。

炉の状態 未検出

壁の状態 調査区北端のR A 2189との重複部でわずかに検出しており、ほぼ直壁ぎみに立ち上がっている。

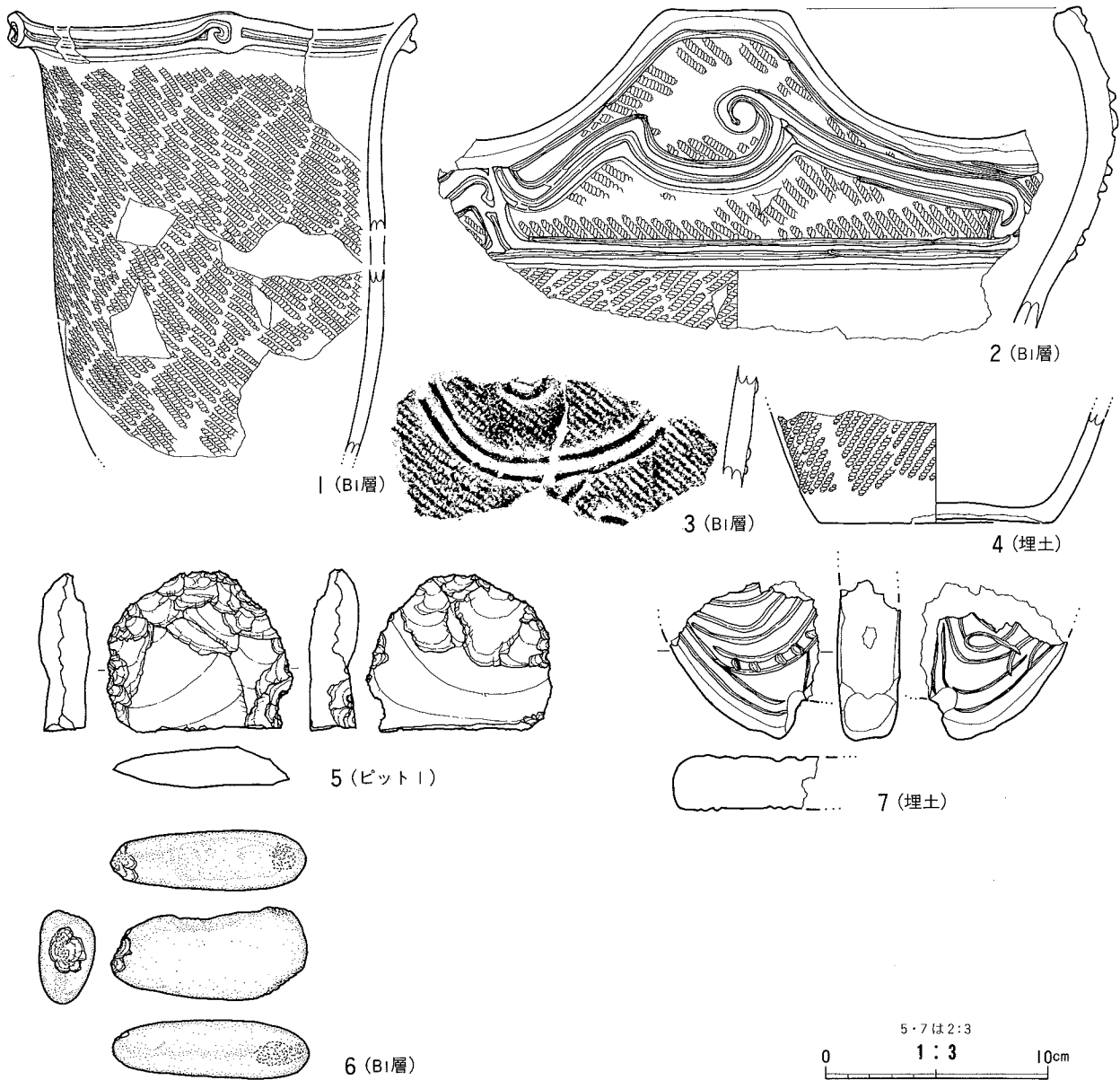
床の状態 ほぼ平坦である。

柱穴 床面及び重複する住居の床下面で9口のピット (P 1～9) を検出している。このうちP 1・2・4・5は規模が大きく柱痕跡を持つことから支柱穴を構成する可能性がある。なお、P 2は新旧の重複を持つ。各ピット掘方の直径と床面からの深さなどの規模はP 1-0.50・0.53m、P 2-0.54×0.44・0.60m、P 3-0.18・0.43m、P 4-0.42×0.44・0.58m、P 5-0.38・0.56m、P 6-0.26×0.38・0.18m、P 7-0.33×0.38・0.17m、P 8-0.28×0.30・0.20m、P 9-0.30・0.20mをはかる。埋土はC層が暗褐色土を主体とし、D層は黒褐色土と黄褐色土の塊状混合土である。

土器 (第40図1～4) 1は小波状口縁をもつ深鉢である。波頂部下には隆線による小渦巻文を配し体部はLR単節縄文を縦位に施すものである。2は幅の広い弁状突起をもつものである。突起部には隆沈線による渦巻文を配する。体部はRL単節縄文を縦位に施す。3は隆線による大渦巻文を施す深鉢体部で、地文にはLR単節縄文を施す。4は深鉢底部でRL単節縄文を縦位に施文する。

石器 (第40図5・6) 5は削器である。素材剥片の上半部に調整を加え、刃部を形成している。背面右側辺にはノッチ状の抉れが作出されている。6は敲石で、礫の両端に敲打痕と剥離痕を有する。

土製品 (第40図7) 7は土偶の一部と思われる。表裏両面に沈線文を配している。



第40図 RA2192 竪穴住居跡出土土器・石器・土製品

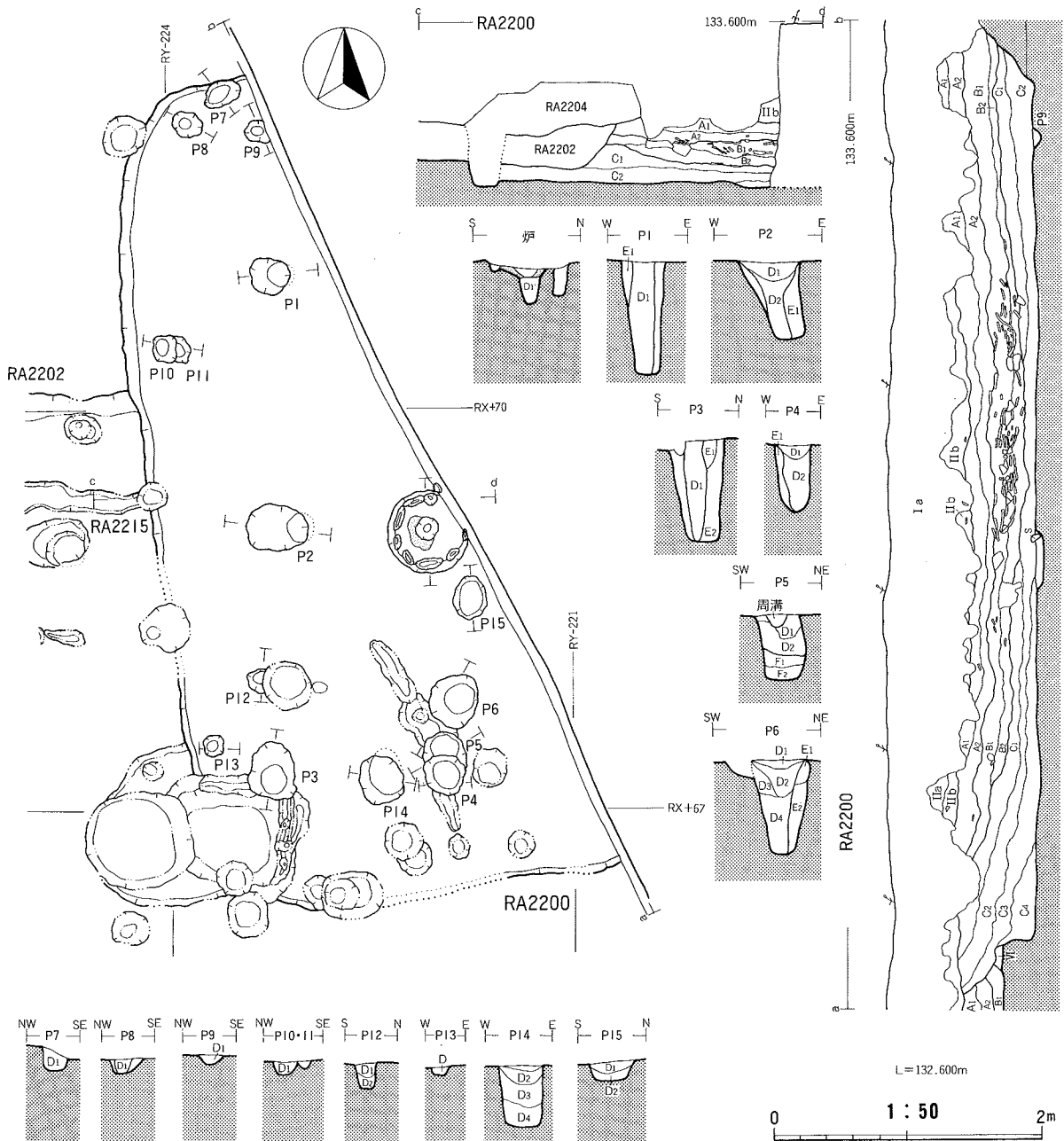
RA2200 竪穴住居跡 (第41~59図)

- 時期 縄文時代中期 (大木 8 a - 2 式期)。 位置 調査区北東に位置する。
- 平面形 長方形を呈する。 主軸方向 ほぼ真北を示す。
- 規模 東西4.0~4.2m、南北 (主軸) 推定直径6.3mをはかる。
- 重複関係 RA2202・2204・2215に切られ、RA2199・2219を切る。
- 検出面 遺物包含層 (II a・b層) 直下。
- 埋土 自然堆積で層相の違いにより、A・B・Cの3層に大別される。
 A層 一粒~塊状の褐色土をわずかに含む黒褐色土。
 B層 一粒状の黒褐色土と焼土・カーボン粒を多く含む褐色土。なお、B1層には土器が多く含む。
 C層 一粒状の褐色土とスコリア・カーボン粒をわずかに含む黒褐色土。C1層は白色粘土を含む。

炉の状態 平面形中央からやや南寄りに炉を1基検出している。炉石は既に抜き取られており、8口の痕跡から円形に配置されていたものである。規模は径0.6mをはかる。火床面は、炉の内部に径0.25m内外で不整形な範囲に認められ、小ピットに切られている。熱浸透層は厚さ8cm程で強く焼けている。なお、火床面下面にはやはり小ピットが重複している。

壁の状態 検出した平面形のほとんどが他の住居跡と重複しているため、壁の残存状況は良くないが、重複のない調査区東側の観察では、本来南壁は床面から段を有して立ち上がるのに対して、北壁は緩やかに立ち上がっている。

床の状態 ほぼ平坦である。



第41図 RA2200竪穴住居跡

柱 穴 床面上に15口（P 1～15）のピットを検出している。なお、P 4と5は重複している。これらのうち主柱穴を構成するピットは、P 1～6・14の7口である。床面からの深さはP 1-0.84m、P 2-0.57m、P 3-0.76m、P 4-0.49m、P 5-0.49m、P 6-0.70m、P 14-0.46mをはかる。柱痕跡はP 1～4・6に認められ、太さは0.15～0.20mをはかる。その他のピットはいずれも小規模で、深さはP 7-0.17m、P 8-0.11m、P 9-0.06m、P 10-0.09m、P 11-0.05m、P 12-0.19m、P 13-0.06m、P 15-0.14mをはかる。

出土遺物 床面からの出土遺物は僅かで、B層に集中する。この出土状況は意図的に廃棄された状況を示す。

土 器 (第42～52図) 1・4～6・10はキャリパー形深鉢である。1は口縁部文様帯下部～底部にかけてのもので体部上半が屈曲し、口縁部文様帯は隆沈線による波状文が施され、体部はRL単節縄文を縦位に施文するものである。4はRL単節縄文が施されるもので、口縁部文様帯は横位、体部は縦位に施文するものである。5・6は口縁部文様帯に隆沈線による波状文を施し、波状文に沿って沈線を施す。口縁部文様帯の地文は横位LR単節縄文を、体部は縦位に施すものである。10はクランク状に隆線を施し、隆線の区画内は弧状に沈線が施される。2は深鉢底部で、LR単節縄文を縦位に施文するものである。3は口縁が外傾する深鉢口縁部で、S字状突起をもつものである。口縁部文様は隆線をレンズ状に施すもので、地文は縦位の櫛目文が施される。9はRL単節縄文を縦位に施す深鉢上半部である。11・17は底部を欠くキャリパー形深鉢である。11は刻目をもつ小突起をもち、口縁部文様帯には隆線による波状文、波の起伏部に渦巻文を加飾するものである。体部はRL単節縄文を縦位に施すものである。17は沈線による波状文を施すもので、体部にはRL単節縄文を縦位に施す。12は波状口縁をもつ深鉢で、口縁に沿って3条1組の横位平行沈線を施す。13は口縁が内湾する深鉢で隆線による文様が施される。14は口縁に無文帯をもつ深鉢である。15・16はLR単節縄文を施すキャリパー形深鉢の口縁部である。18～21は孔のあるC字状突起をもつキャリパー形深鉢である。18は隆線を波状に施し、波頂部から下位の平行隆線に縦位の隆線で連結するものである。口縁部文様帯及び体部はLR単節縄文を縦位に施すものである。19は突起間に立体的な渦巻文を配し、隆沈線を波状に施すものである。波状区画内には区画線と連結する渦巻文が施文され、体部にはRL単節縄文が縦位に施される。20は突起間にS字状の隆線を貼付するもので、口唇～口縁部間は横位の原体圧痕文を施す。口縁部文様帯は隆沈線を波状に施すもので、波状区画内には区画線と連結する渦巻文と弧状の文様が交互に施文される。体部はRL単節縄文が縦位に施される。21は口縁部文様帯の波状文が区画内の渦巻文と連結するもので、体部にはRL単節縄文が縦位に施される。22は口縁が内湾する深鉢で、刻目を加飾する隆線と小渦巻文が施される。体部は沈線による横位平行沈線、波状の懸垂文が施される。地文はLR単節縄文が縦位に施文される。23は口縁が外傾する深鉢で、RL単節縄文を斜位に施す。24は底部が欠ける無文のキャリパー形深鉢である。25は頸部が僅かに屈曲する深鉢で、体部は無節の縄文が縦位に施される。26は小形のキャリパー形深鉢である。口縁から底部にかけてLR単節縄文を縦位に施文する。27・28は口縁に橋状の把手をもつもので、頸部には2条の隆線が施され、地文はRL単節縄文を縦位に施す。28は把手を連結する隆線に刻目を加飾するものである。

29～35・38～40・43～45・48・49～52・63～66・68・69・71～73・78・81はキャリパー形深鉢の口縁～体部にかけてのものである。29は口縁に孔のある4つのS字状突起をもち、口縁部文様帯には隆沈線による渦巻文を横位に連結させながら施文する。地文にはLR単節縄文を縦位に施

すものである。30は孔のあるS字状突起をもち、隆沈線による波状文と連結する渦巻文が施される。31は孔のあるS字状突起をもち口縁部文様帯に隆沈線による波状文が施され、地文にR L R 複節縄文が縦位に施文される。32は孔のあるやや崩れたS字状突起をもち、33はO字状の突起をもち、口縁部文様帯は突起部下に施される円文を中心に、4つの区画文を施すものである。また突起部には短い隆線の貼付が見られる。34はS字状突起をもち、口唇部直下には2条の刺突列が施される。口縁部文様帯は隆沈線による区画文が施され、地文にはL R 単節縄文が縦位に施文される。35はS字状突起をもち口縁部文様帯には隆沈線による渦巻文が施される。地文にはR L 単節縄文が縦位に施文される。36は小突起をもち浅鉢である。突起下に配される渦巻文より襷状に隆沈線が施される。地文にはR L R 複節縄文を横位に施文する。37は弁状突起をもち深鉢である。突起部には隆線の貼付が見られ、体部文様帯上部には沈線による5条1組の文様区画が見られる。地文にはR L 単節縄文を縦位に施文する。38は口縁部に隆線によるS字状貼付文を施すキャリパー形深鉢の口縁部である。S字状貼付文より垂下する2条の隆沈線は口縁部文様帯を区画するものと思われ、区画内には波状文と思われる文様が施される。地文にはR L 単節縄文が縦位に施文される。39は波状口縁の波頂部にS字状の貼付文を施すものである。口縁部文様帯には隆線による渦巻文を中心とした襷状の隆線が施される。地文にはR L R 複節縄文が縦位に施文される。40は口縁部文様帯に隆沈線による波状文が施されるもので、地文にはR L 単節縄文が縦位に施文される。41は口縁が外傾する深鉢で口縁部には隆線によるS字状の貼付文が施文される。42は口縁部にS字状の貼付文が施文される深鉢で下部には沈線による文様が施文される。地文にはR L 単節縄文が縦位に施文される。43は波頂部に孔のあるS字状突起をもち、口縁部文様帯には隆沈線による波状文が施され、波状区画内には渦巻文などが施される。体部にはR L 単節縄文が縦位に施文される。44は口縁が大きく開くキャリパー形深鉢で、波頂部にはS字を組合わせた突起がつけられる。口縁には3条の原体圧痕列が施され、口縁部文様帯には隆沈線による波状文が施され波状内には渦巻文が施される。地文にはR L R 複節縄文が横位に施文される。45は口縁部文様帯に隆沈線による波状文を施すもので、体部にはR L 単節縄文を縦位に施文する。46は隆線による渦巻文を施す深鉢で、地文にはL R 単節縄文が縦位に施文される。47は横位の隆線を2条貼付する深鉢で、地文にはR L 単節縄文が縦位に施文される。48・49は口縁部文様帯に沈線による波状文を施すもので、体部にはR L 単節縄文を縦位に施文するものである。50は口縁部がやや狭まる深鉢である。体部にはL R 単節縄文を縦位に施文するものである。51は隆沈線による波状文と矢状の文様が加飾されたものである。体部はL R 単節縄文を縦位に施す。52は口縁部文様帯に隆沈線による波状文を施すもので、地文にはL R 単節縄文を縦位に施文する。53は口縁が内湾する深鉢で隆沈線による渦巻文が施され、地文にはL R 単節縄文を縦位に施文する。55は口縁が内湾する浅鉢で、体部にはR L 単節縄文を縦位に施す。56は口縁が内湾する深鉢で、体部にはR L 単節縄文を縦位に施す。57・58は同一個体の深鉢体部で、隆線上には刻目が施され地文の縄文（R L 単節）は磨消される。59～62は同一個体の深鉢体部で、沈線による胸骨文が施され、地文はR L 単節縄文を縦位に施すものである。63は口縁部文様帯に横位展開する渦巻文が施されるもので、地文はR L 単節縄文を横位に施文する。64は口縁が内湾する浅鉢で、地文はR L 単節縄文を縦位に施文する。65は隆沈線による渦巻文が横位に展開して施文される。地文はR L 単節縄文を縦位に施文する。66は口縁部にC字を組合わせた立体的な突起をもち深鉢である。

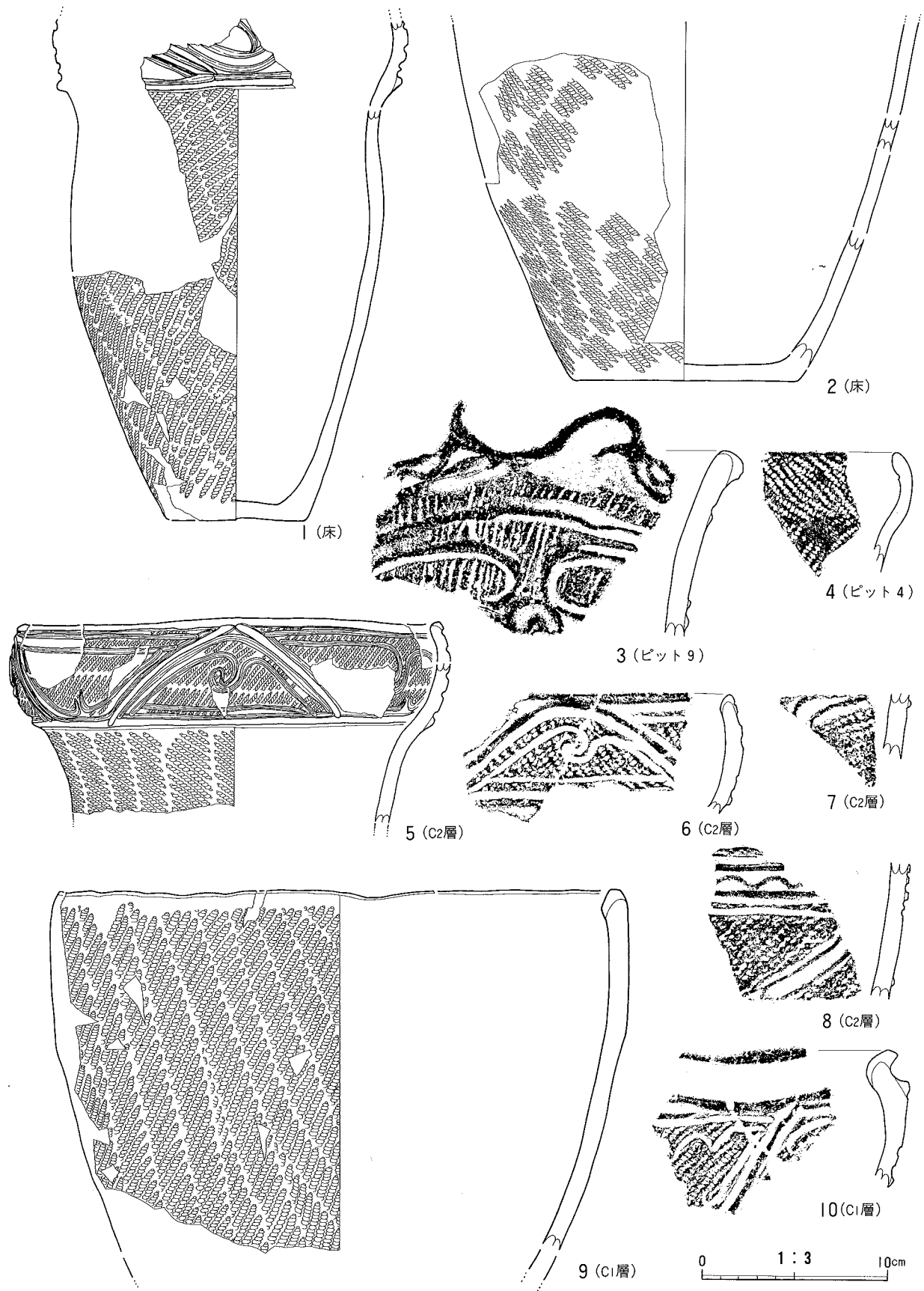
67は口縁部に把手をもつ深鉢である。把手間には縦位の原体圧痕文を施文する。68は隆線による波状文が施され、波状部より横位に渦巻文が加飾され、体部にはL R単節縄文が縦位に施文される。69は口縁部文様帯に隆線による区画文が施され、体部にはR L単節縄文が縦位に施される。

70は横位の隆線を施す体部である。71は波頂部に幅の広い弁状突起をもつキャリパー形深鉢で、口縁部文様帯には波状文が施され、波状部より横位に渦巻文が加飾され、体部にはR L単節縄文が縦位に施文される。72はS字状突起をもつもので、地文にL R L復節縄文を縦位に施す。73・81は口縁部文様帯に波状沈線を施すもので、体部はR L単節縄文を縦位に施すものである。74は狭い口縁部文様帯をもつもので、文様帯には隆線による波状文が貼付され、体部にはR L単節縄文を縦位に施す。75は立体的なS字状把手部である。76は口縁部にS字状の隆線を貼付するもので、体部にはR L単節縄文を縦位に施すものである。77は深鉢体部で、隆線による連結する渦巻文が施され、地文にはL R単節縄文を縦位に施す。78はキャリパー形深鉢の口縁部で、沈線による波状文が施されるものである。79は底部を欠く浅鉢で、口縁部には原体圧痕による渦巻文が施され体部には隆線による渦巻文が施される。80は隆線による曲線状の文様が施される深鉢である。

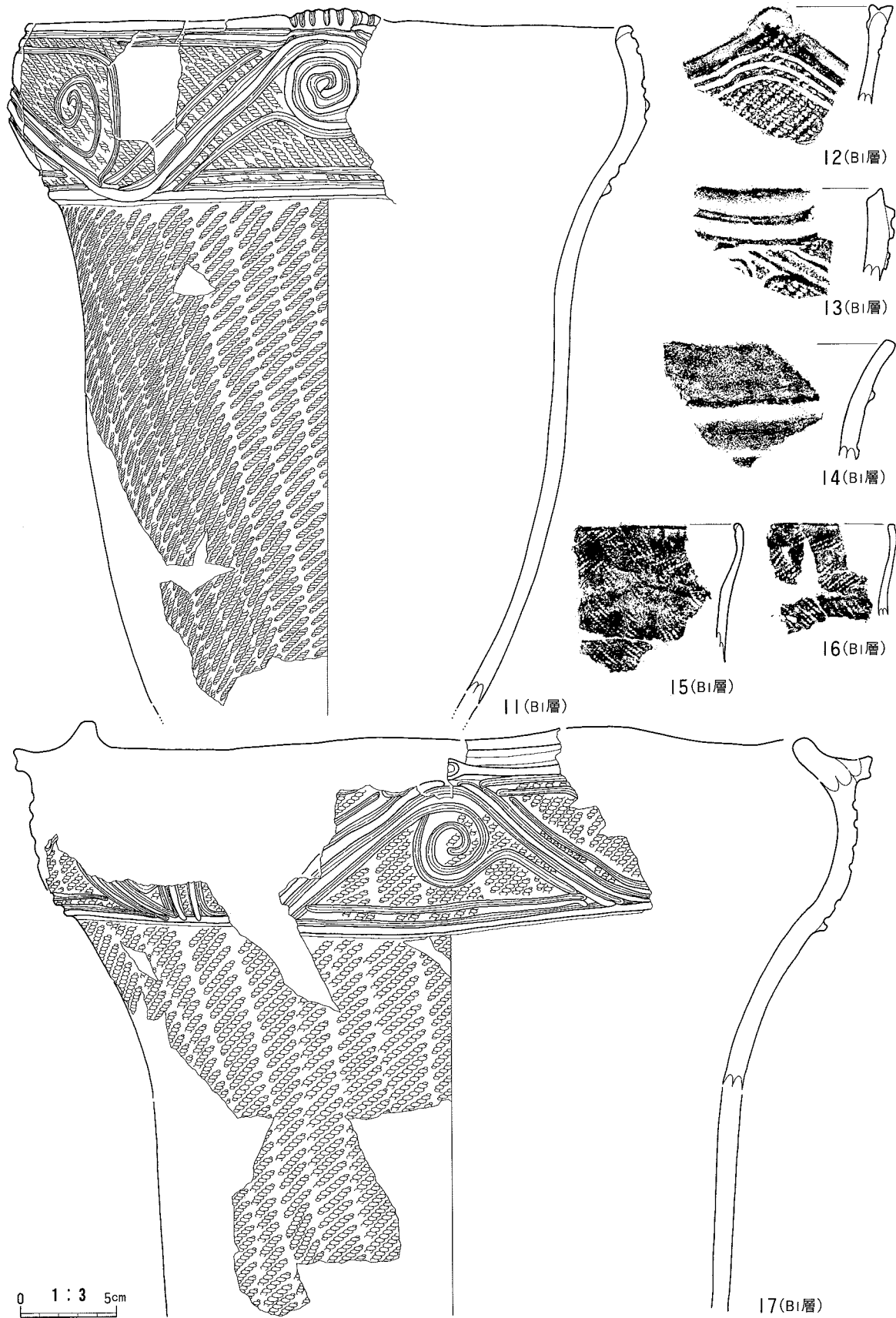
石器 (第53～58図) 82は削器である。打面を除く両側辺を両面調整し、刃部としたものである。83は搔器で、ほぼ円形に整形されている。縁辺は弧状を呈し、細かい剥離が並ぶ。84の篋状石器は基部を欠損したものである。刃部のフルーティングはあまり発達していないが、両面を丁寧に調整している。85は石錐で、背面を調整したもの、86は縦型の石匙である。背面右側辺に剥離を施し刃部とし、左側辺には細かい刃こぼれが見られる。87～90は削器である。87は、背面に自然面を残しているが、第一次剥離の際の打面を折りとったあとで調整を加えている。89は背面下端がややつぶれており、刃部と考えられる。第一次剥離の際のバルブは除去されている。90は背面左側辺に突出部が作出されている。背面と打面に自然面が残っている。91は石核で、著しい打面転移はされず打点が稜上を線状に移動するにとどまっておき、打面調整が行われている。

92は凹石で表裏両面に凹み部が形成され、側面にも敲打痕が見られる。93は砥石で、全面にわたって溝が数条めぐっている。砥石としての使用の前に磨かれている。94は敲石である。95～98は敲打磨石である。95は周囲を整形剥離し、不定形の敲打磨面に小剥離と敲打痕を伴う。96・97の敲打磨面は幅が狭く、小剥離はほとんど伴わない。長礫が破損したもので、97には鼠歯状痕が見られる。98は偏平な面に擦痕をもつ。99～101は敲石である。99は小形の偏平な礫を用い、側面を使用している。100は溝状の痕跡も有する。102・103は凹石で、ともに素材中央部に凹み部をもつ。104・105は擦痕をもつ礫である。106～108は敲打磨石である。106は周囲に敲打痕と小剥離がめぐり、発達した敲打磨面が形成されている。107は楕円形の礫の側面を使用したもの、108は両端を欠損している。109・110は敲石で端部が機能部であるが、剥離痕は縦位の断面図より、刃部ではなく衝撃による剥離と思われる。111・112は石皿で、111は裏面に自然面を残している。表面が機能面と思われるが、裏面も磨かれている。112は大部分を欠損し、中央に近い部分が残存している。擦痕も見られる。113～115は敲打磨石で、三点とも剥離整形されている。小剥離が伴い、敲打磨面は不定形を呈する。115は破損面を敲打磨面としている。116は敲石で、側面も使用している。117は石皿で、部分的に自然面を残す。

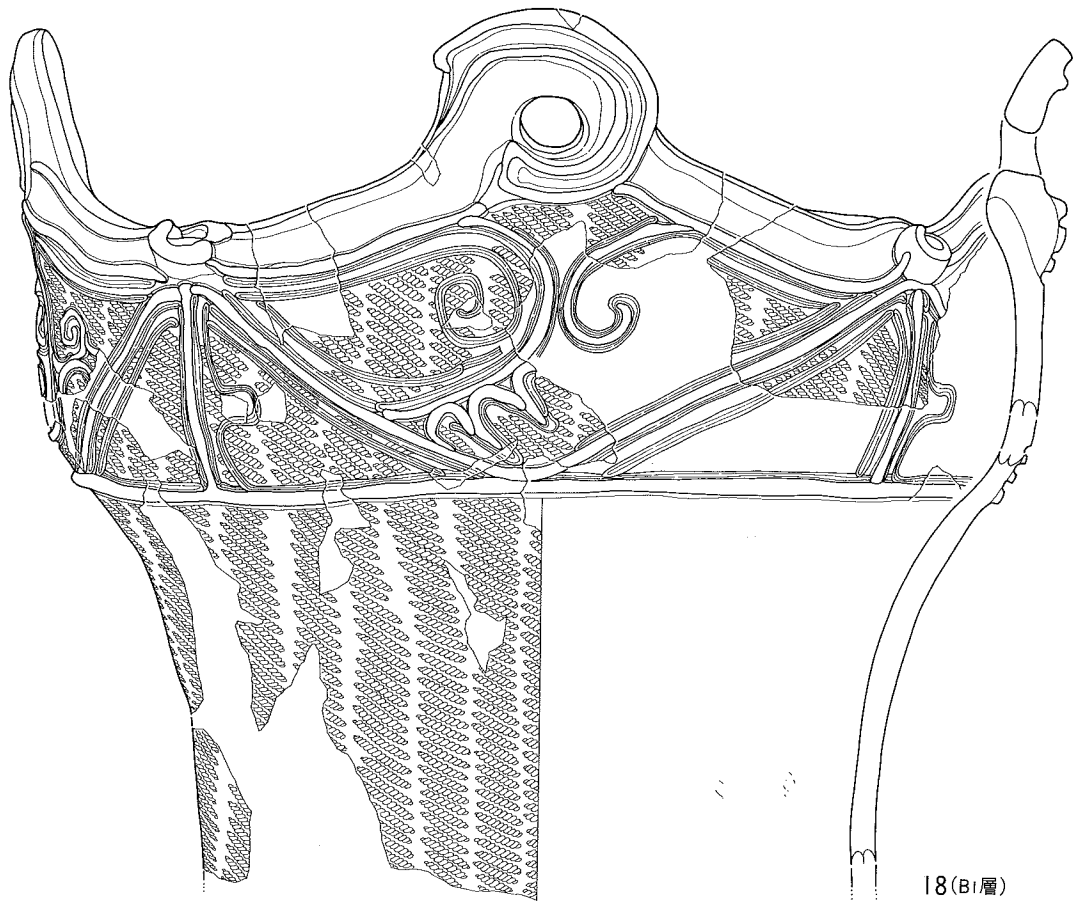
土製品 (第59図) 118の土製円盤は比較的大形で、斜縄文と沈線文が施されている。119～121はミニチュア土器である。121は外面に調整痕が見られる。



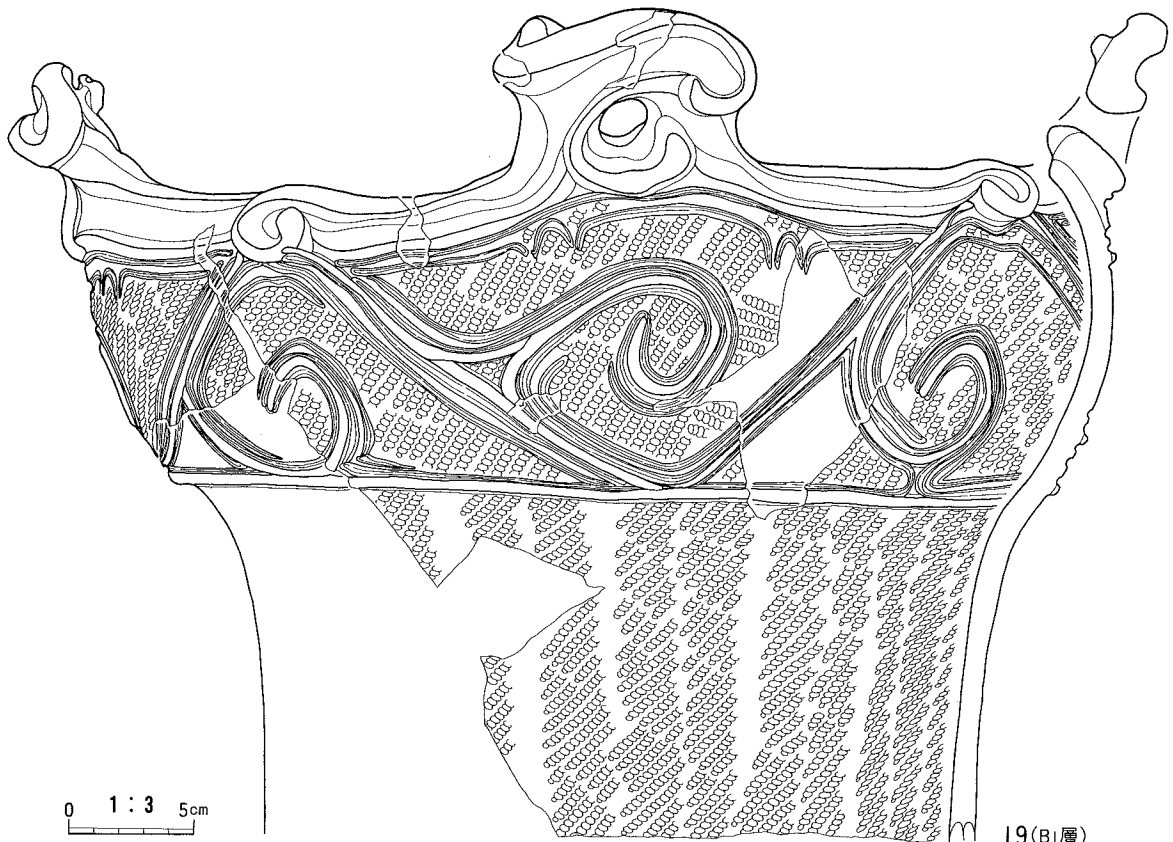
第42図 RA2200竪穴住居跡出土土器(1)



第43図 RA2200豎穴住居跡出土土器(2)

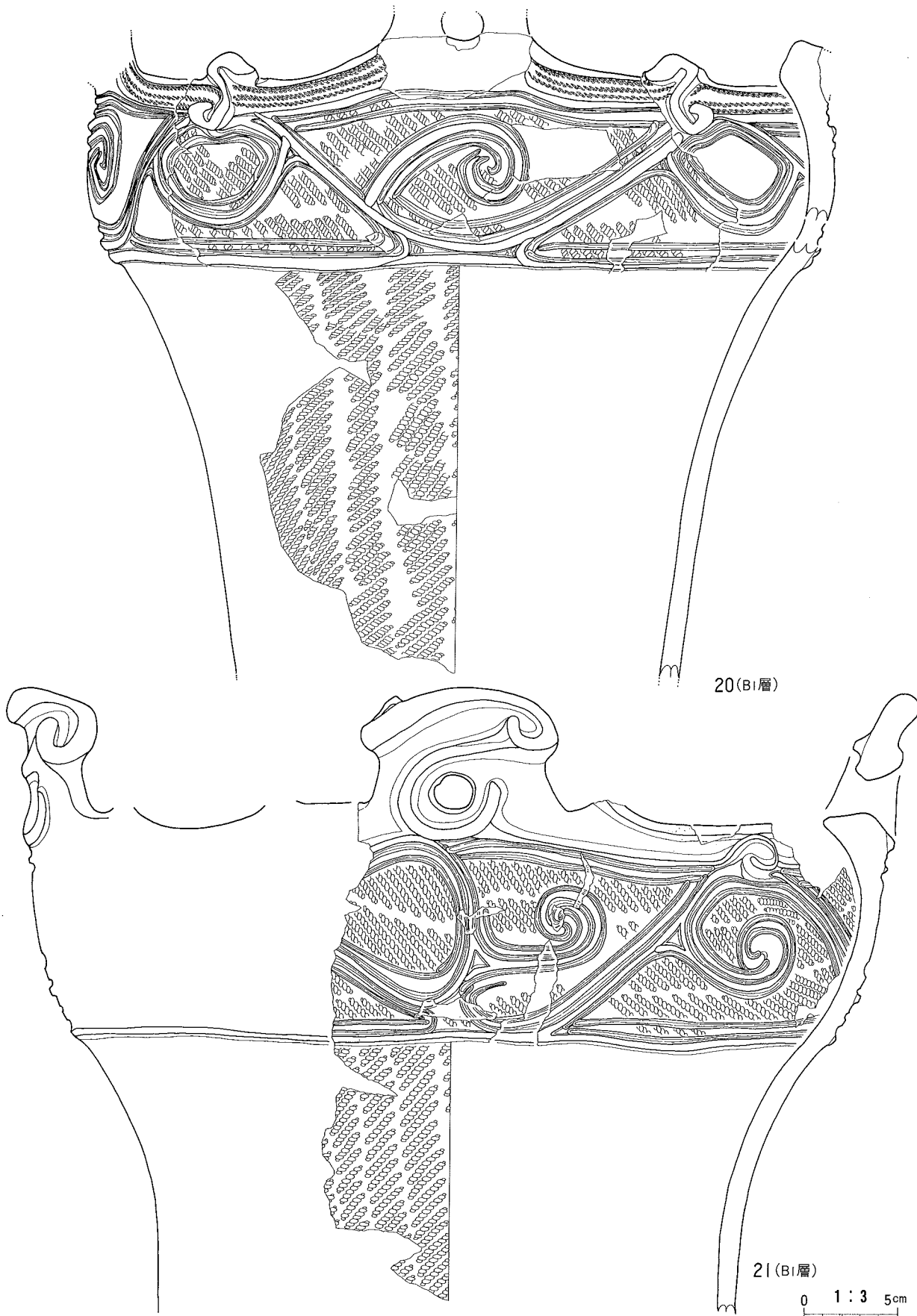


18(B1層)

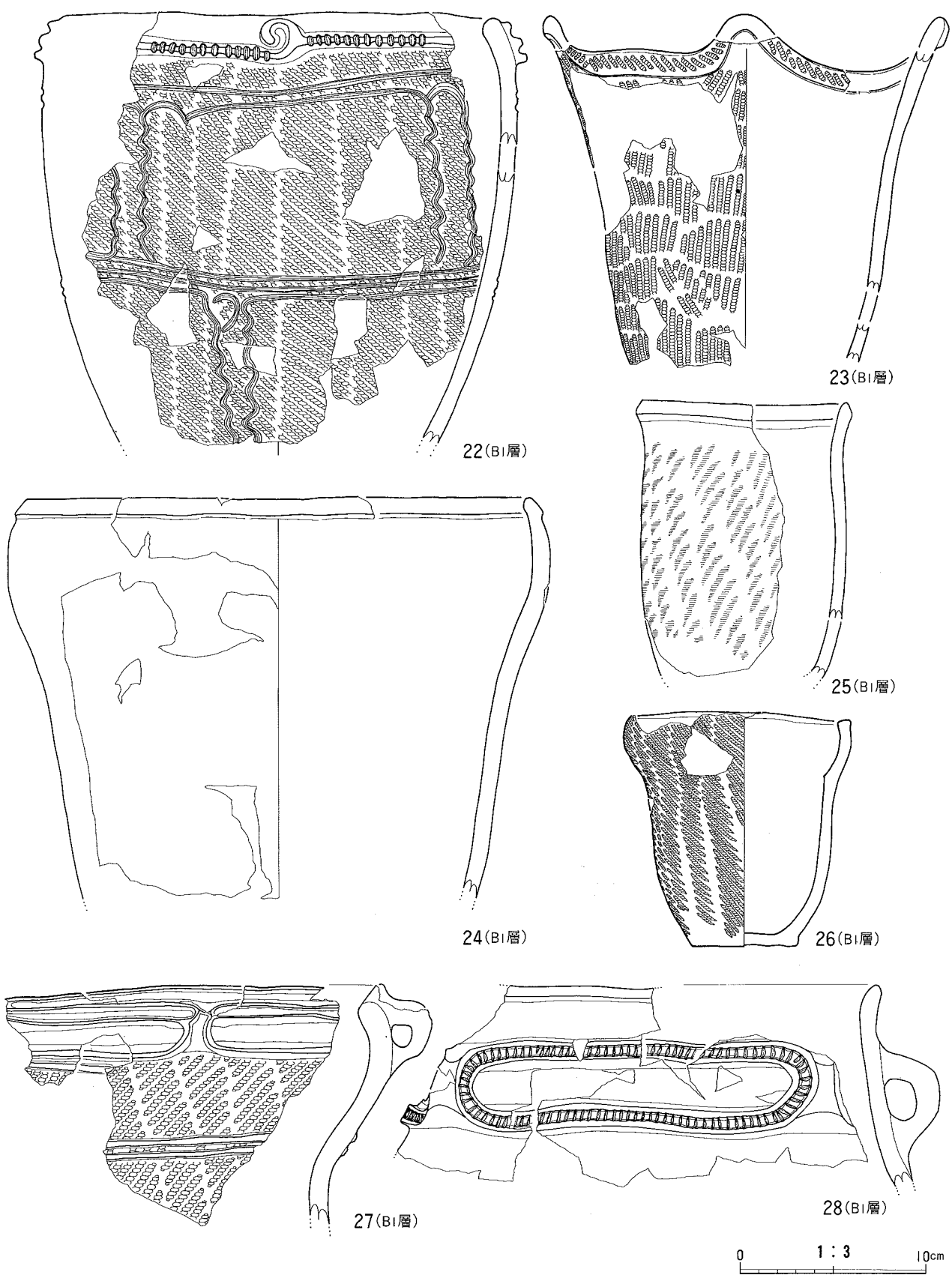


19(B1層)

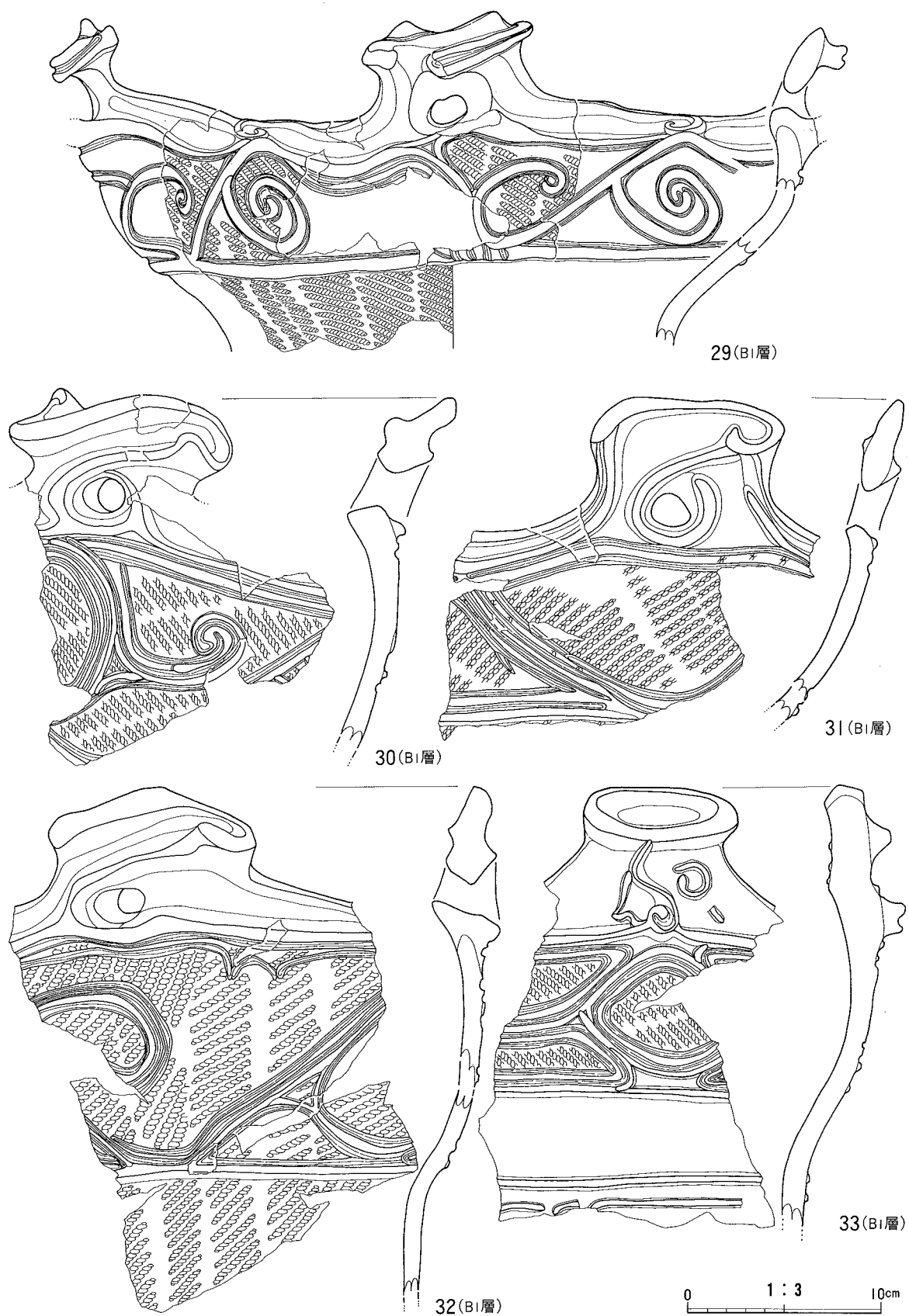
第44図 RA2200竪穴住居跡出土土器(3)



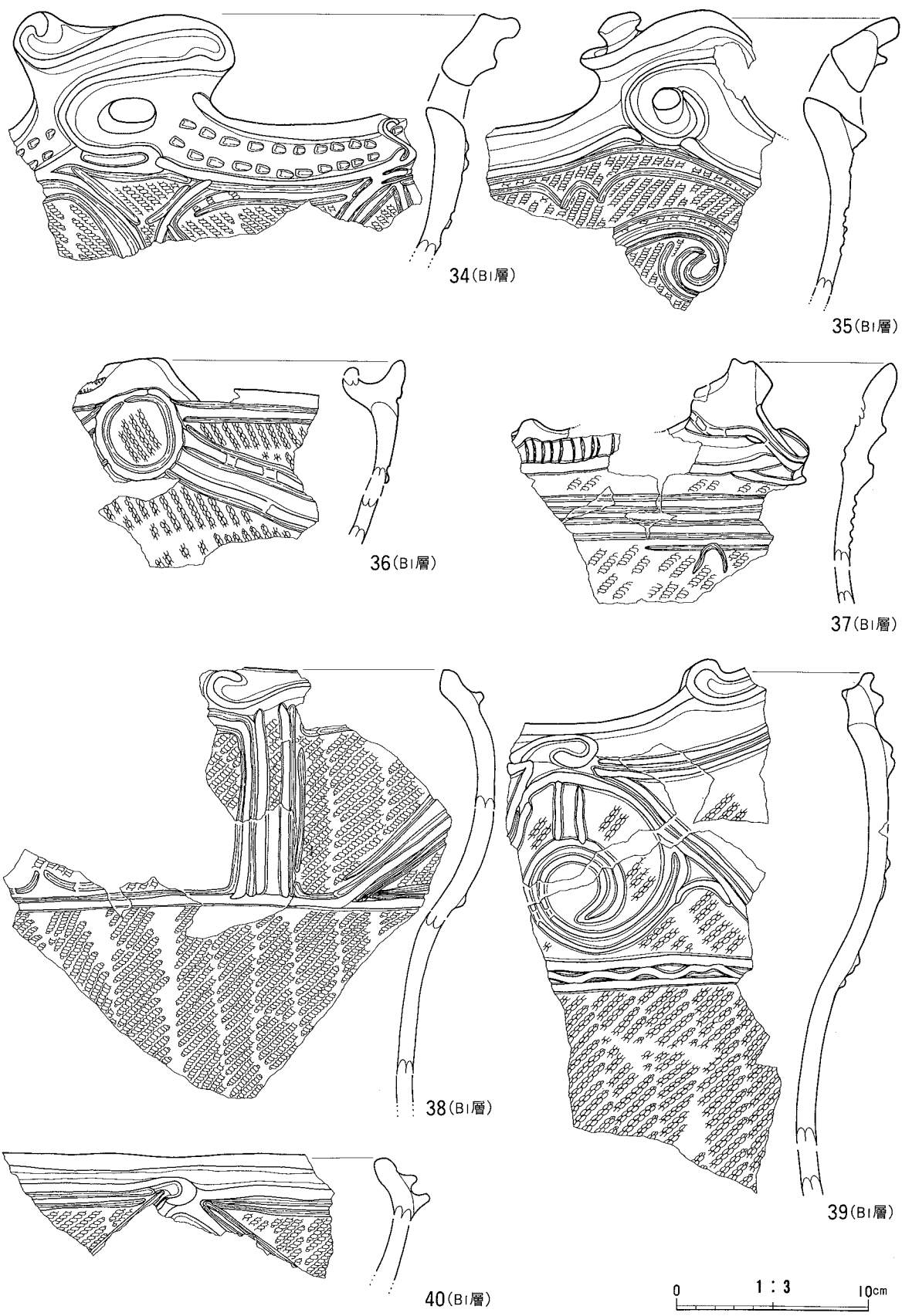
第45図 RA2200竪穴住居跡出土土器(4)



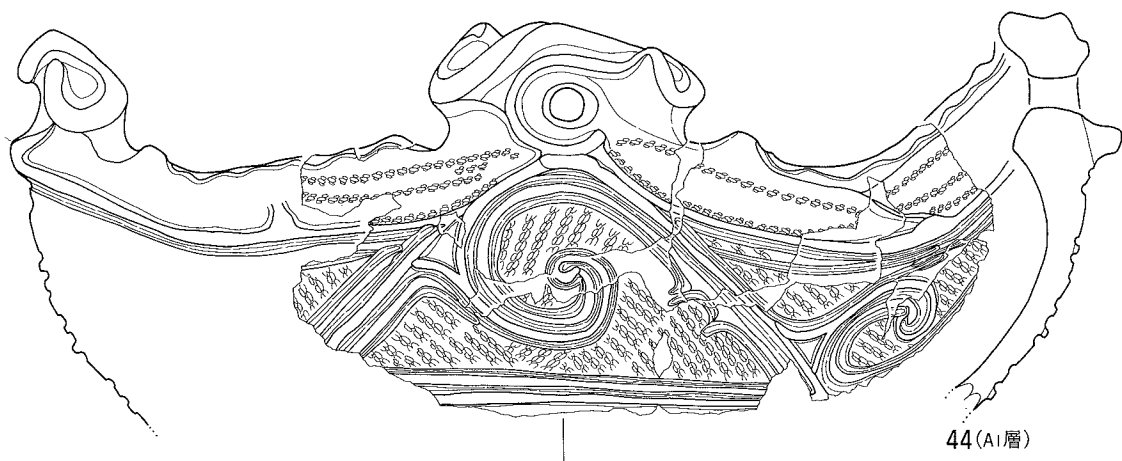
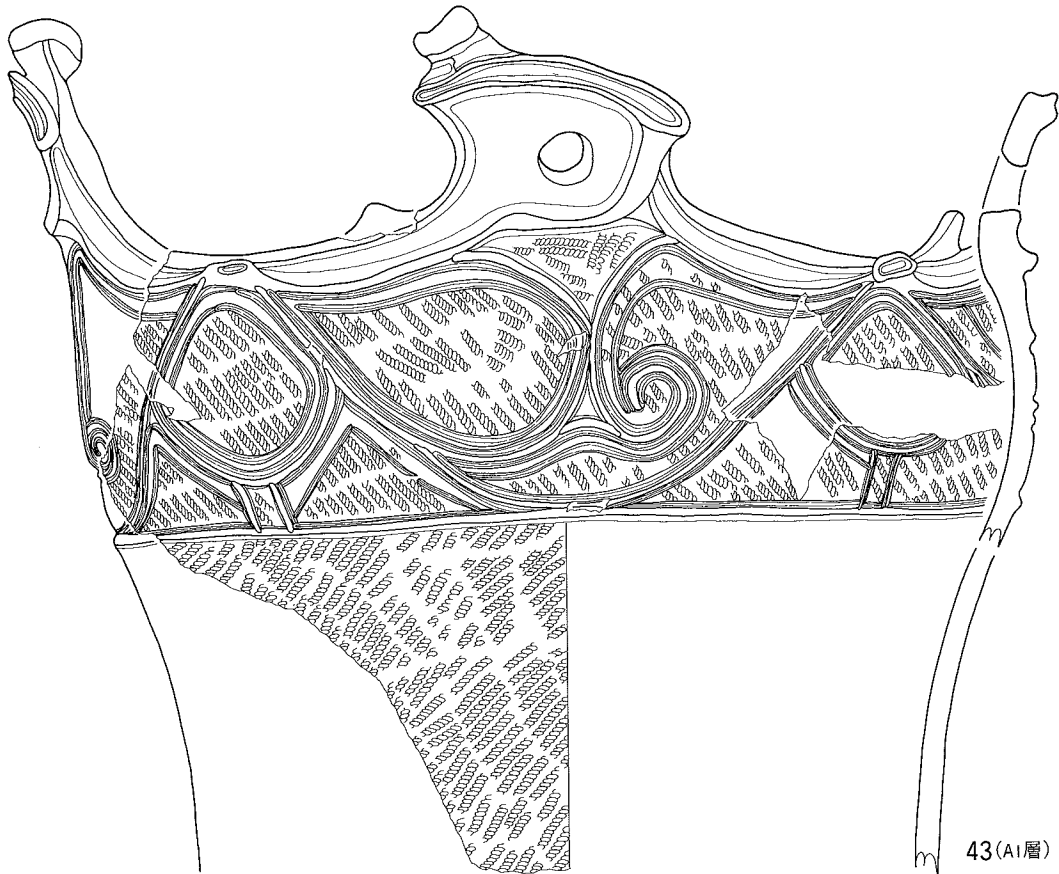
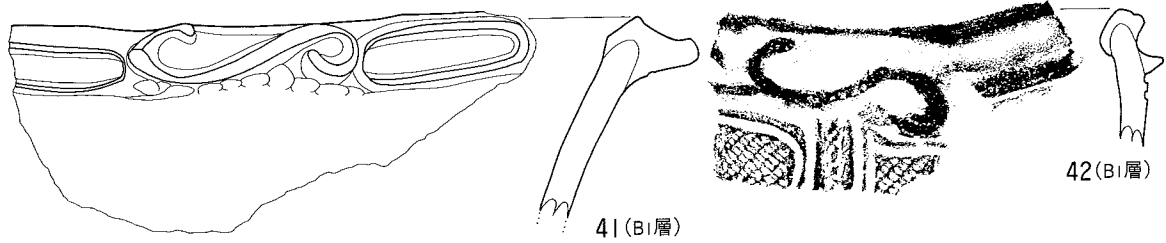
第46図 RA2200竪穴住居跡出土土器(5)



第47図 RA2200竪穴住居跡出土土器(6)

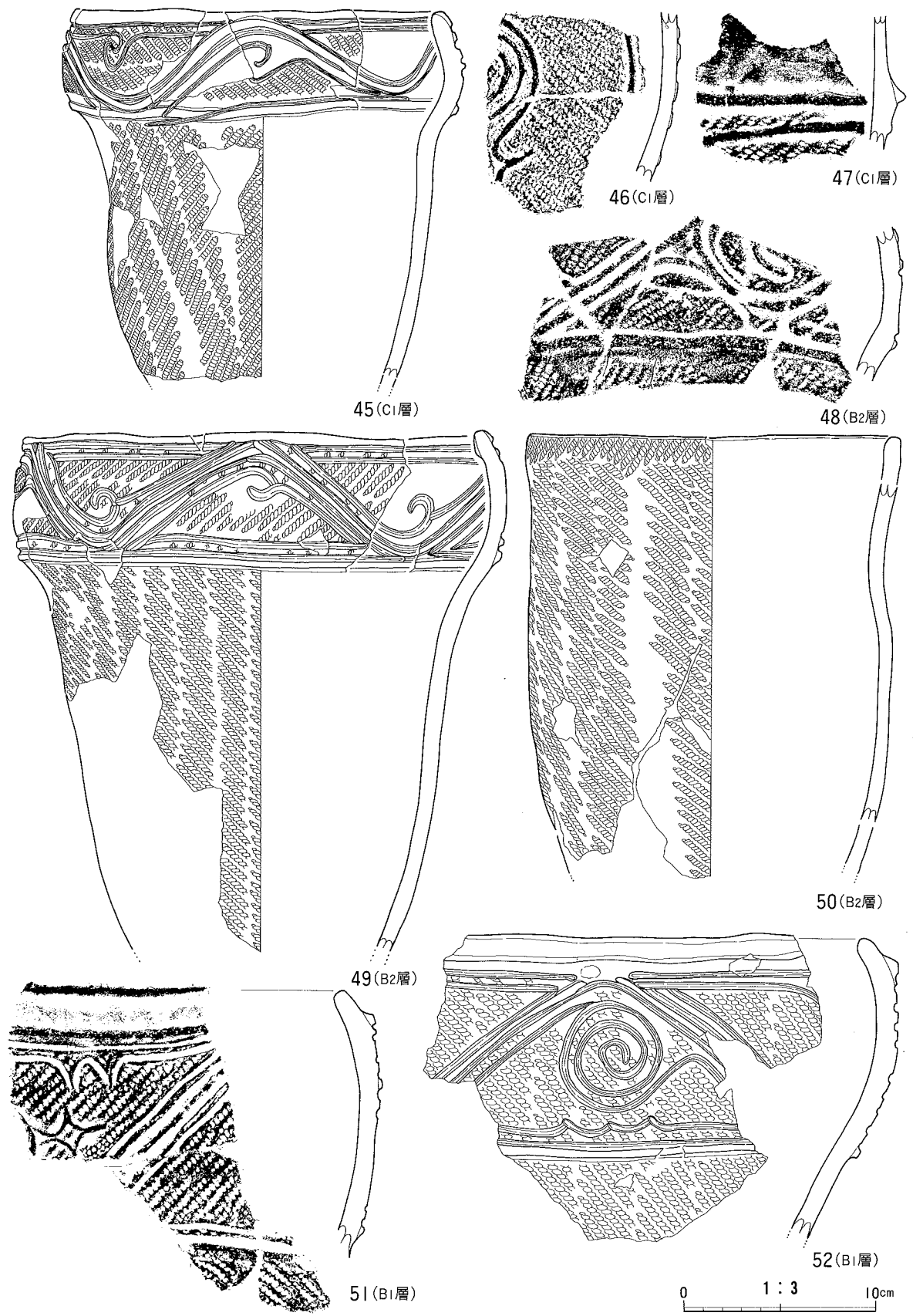


第48図 RA2200竪穴住居跡出土土器(7)

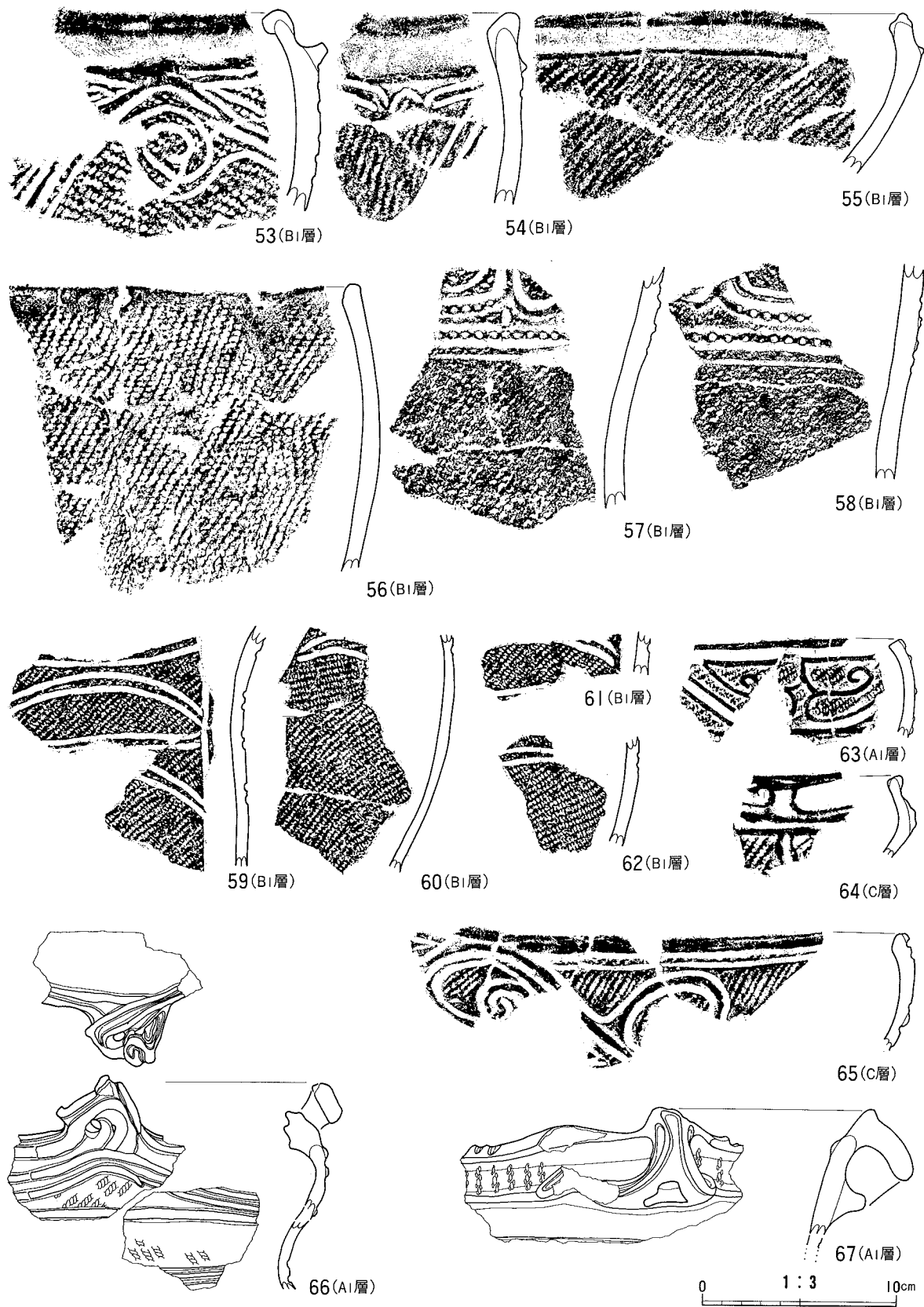


0 1:3 10cm

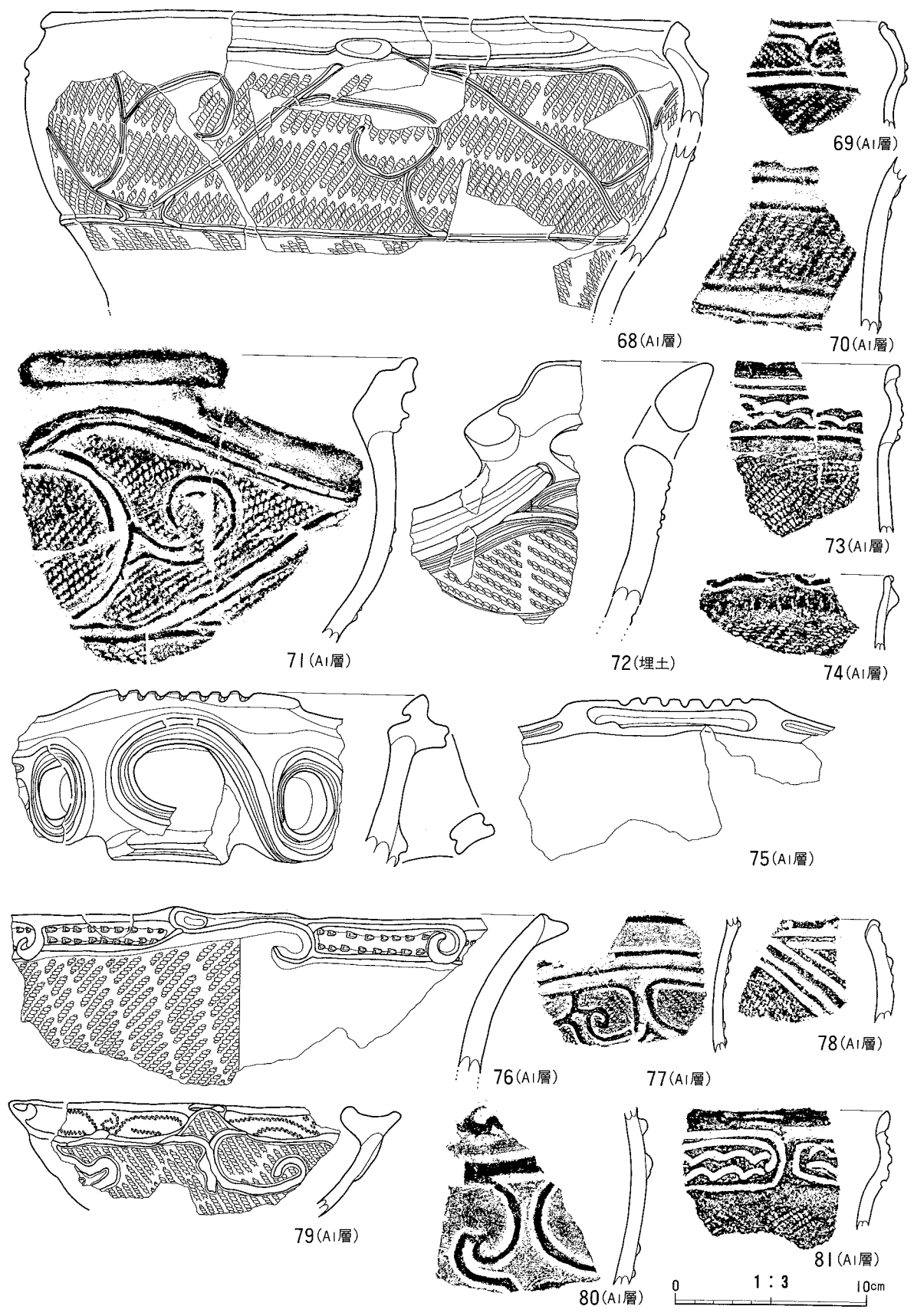
第49圖 RA2200豎穴住居跡出土土器(8)



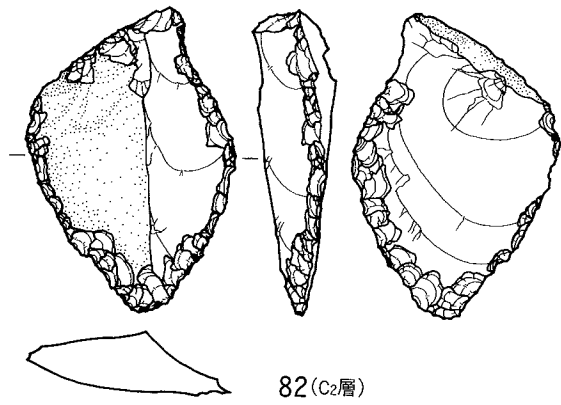
第50図 RA2200竪穴住居跡出土土器(9)



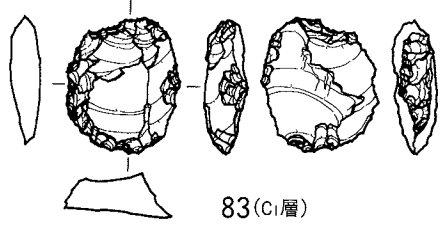
第51図 RA2200豎穴住居跡出土土器(10)



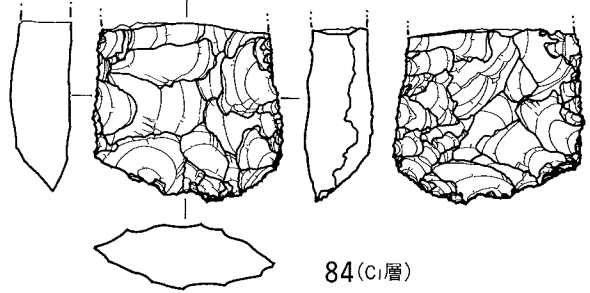
第52図 RA2200竪穴住居跡出土土器(11)



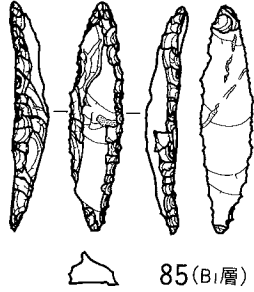
82(C₂層)



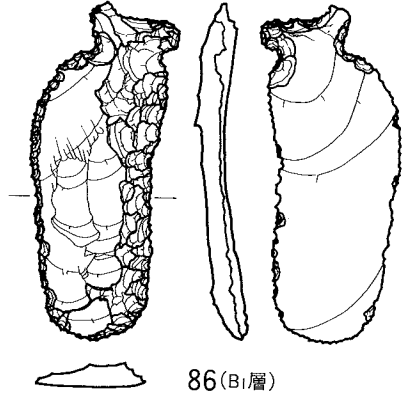
83(C₁層)



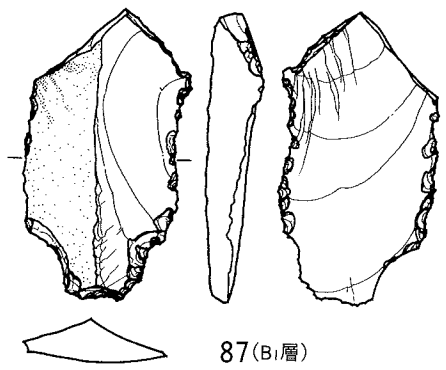
84(C₁層)



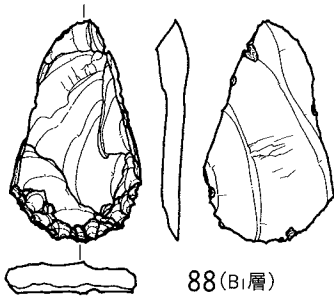
85(B₁層)



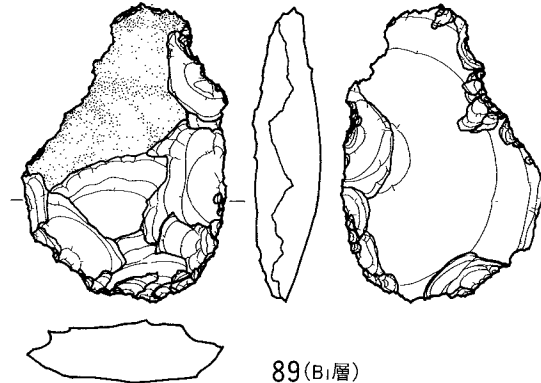
86(B₁層)



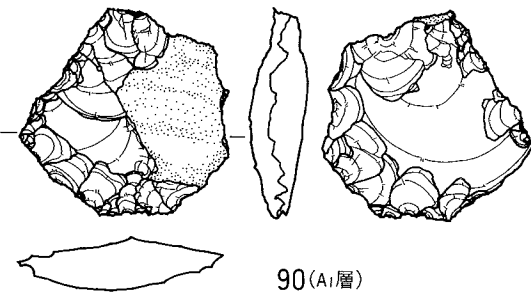
87(B₁層)



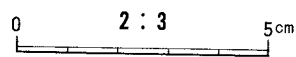
88(B₁層)



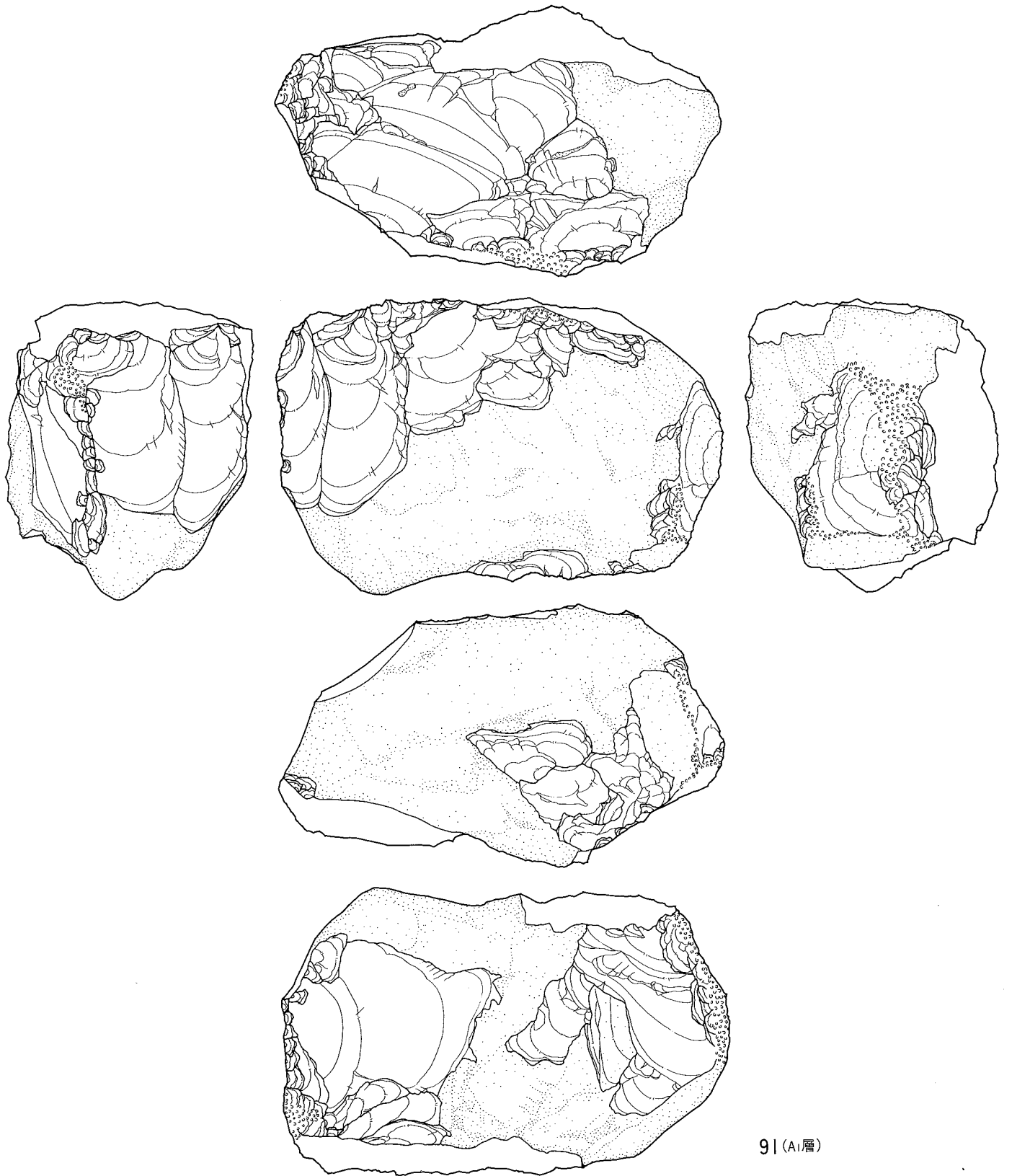
89(B₁層)



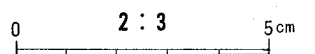
90(A₁層)



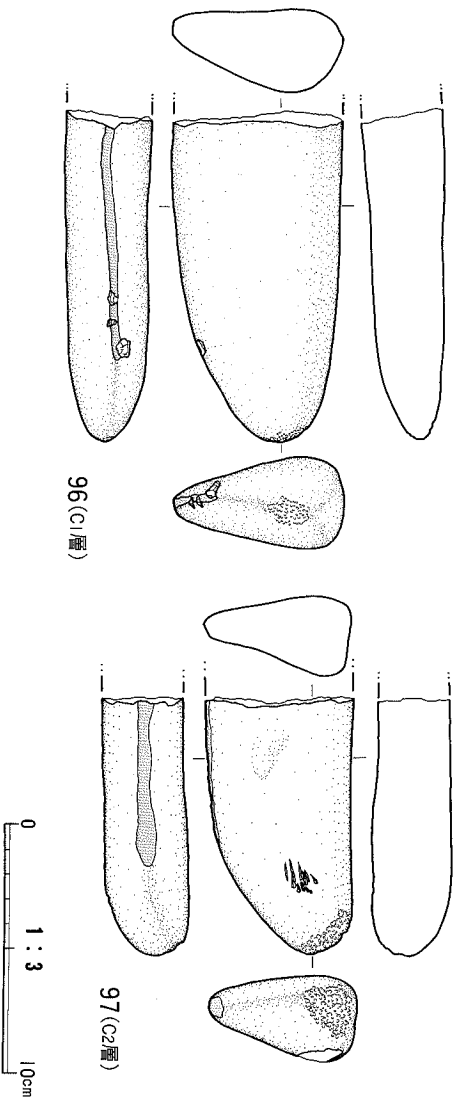
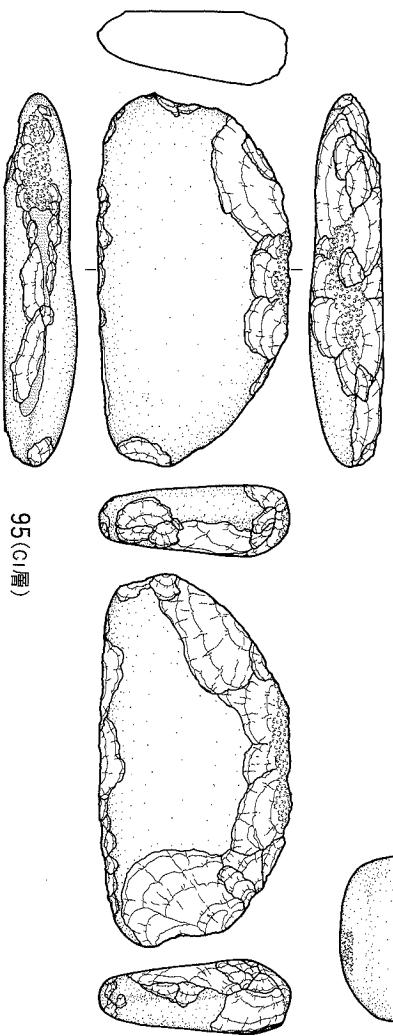
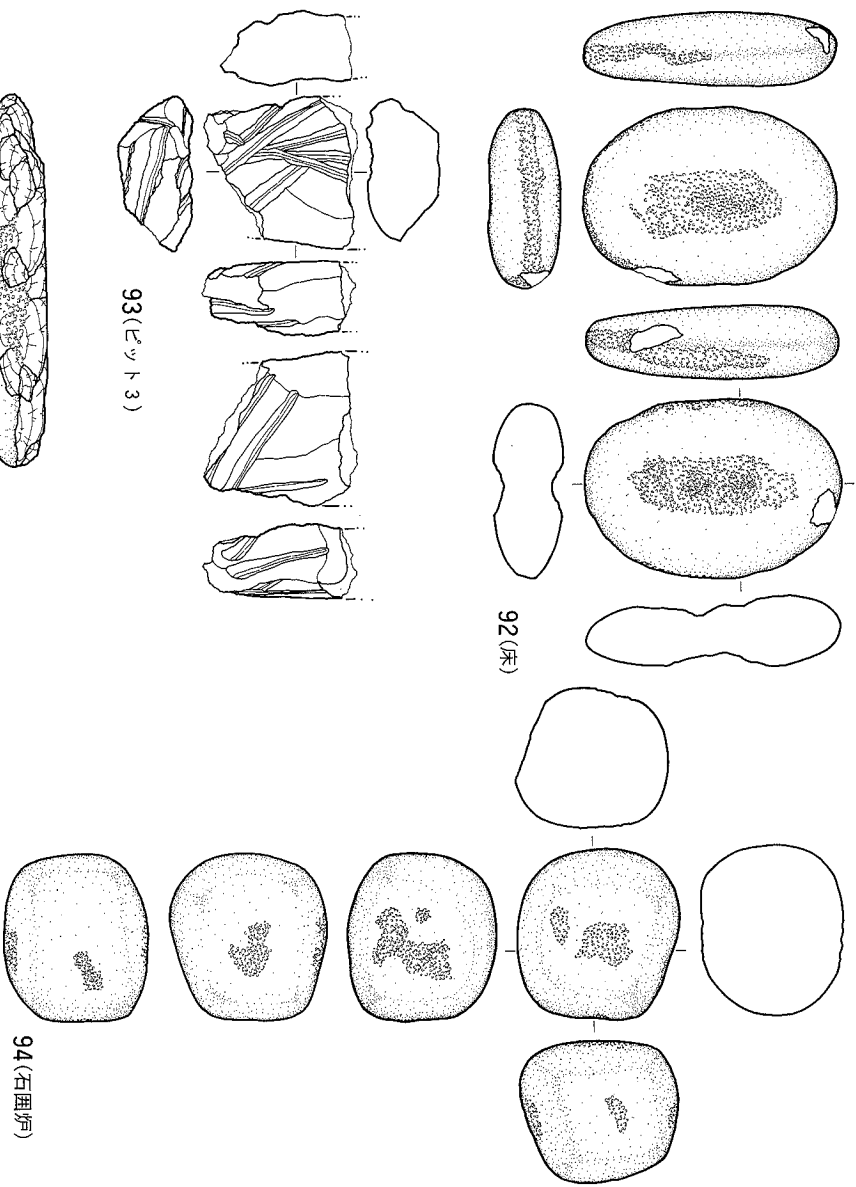
第53圖 RA2200豎穴住居跡出土石器(1)



9 | (A) 層

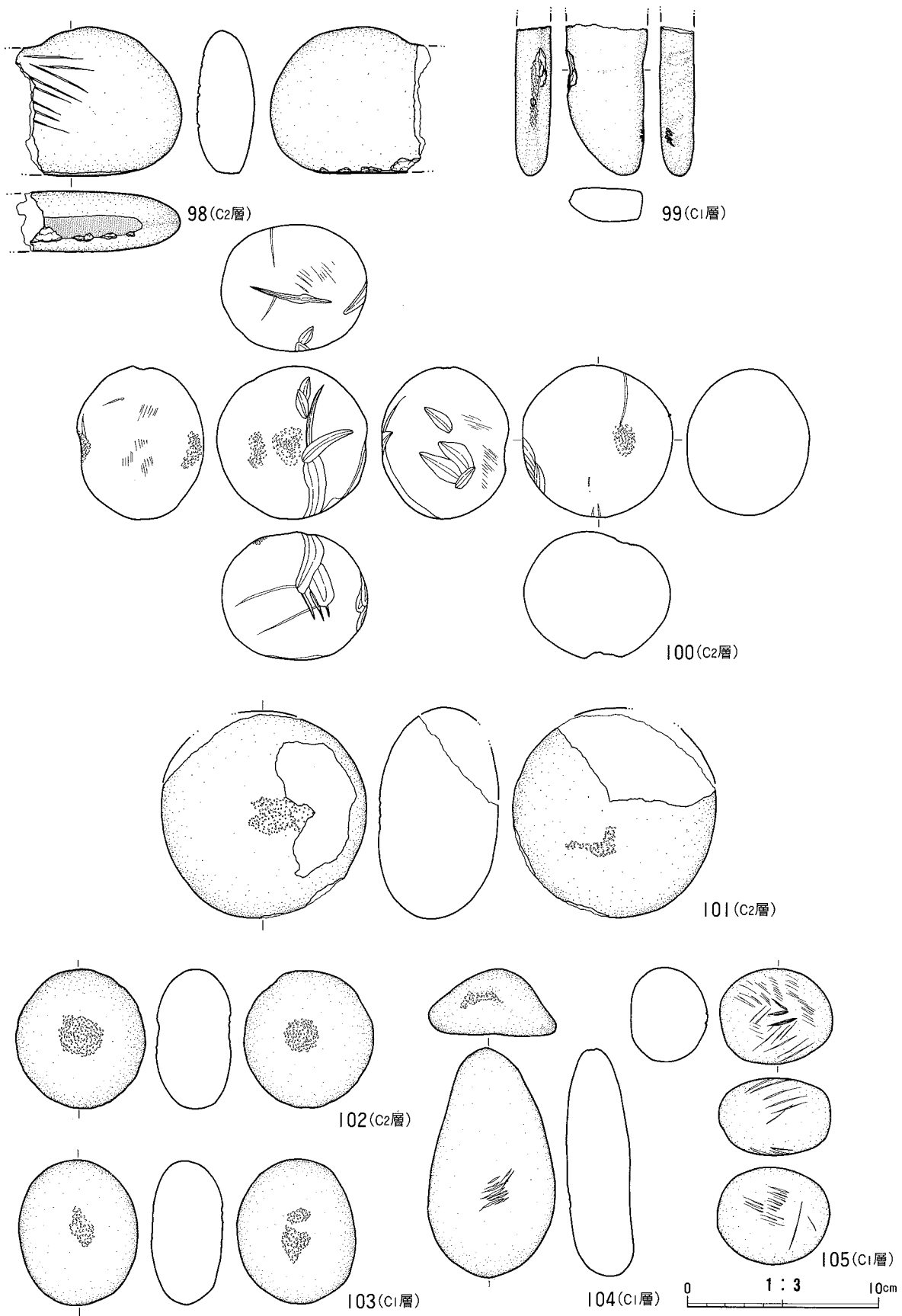


第54図 RA2200 豎穴住居跡出土石器(2)

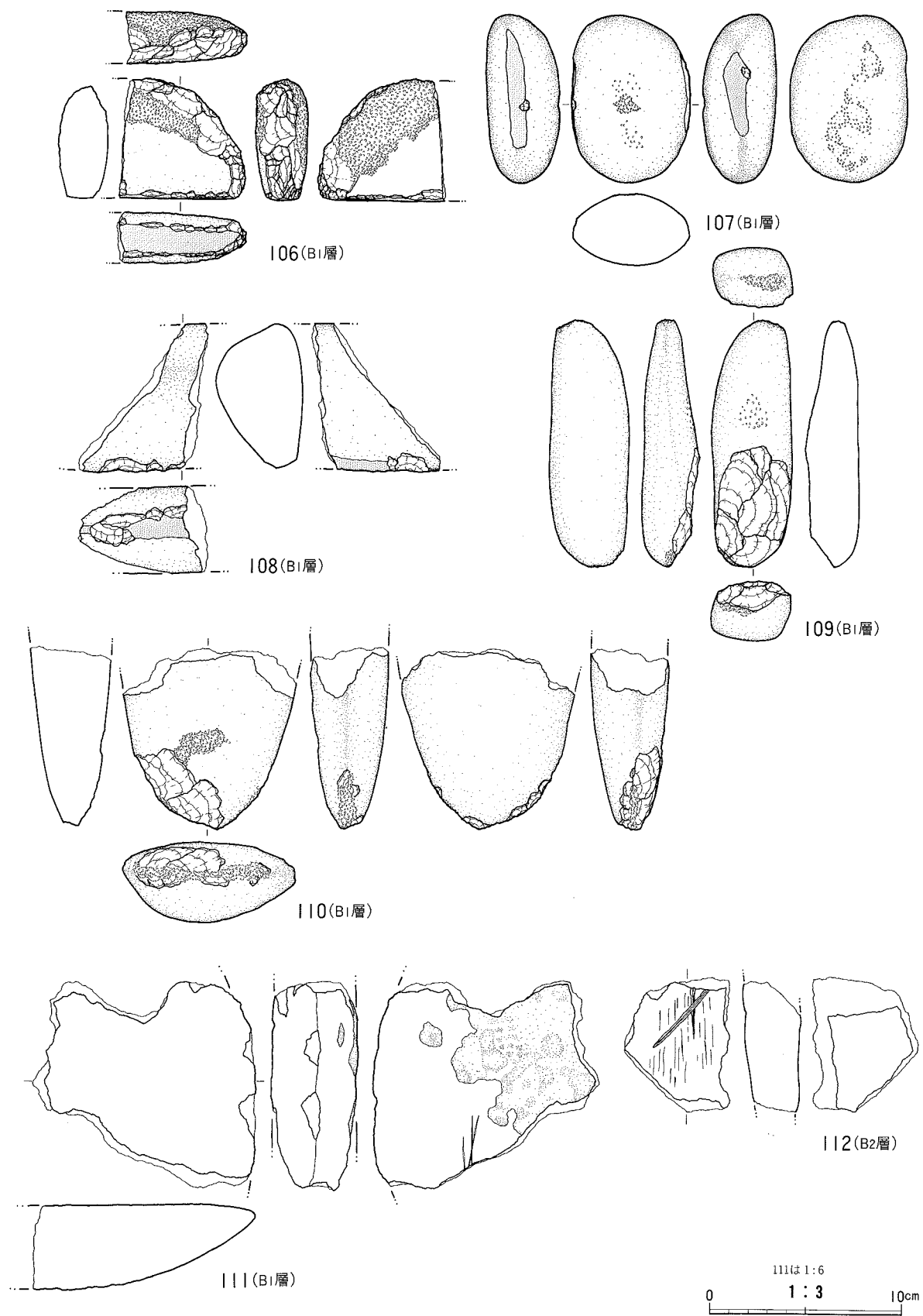


0 1 : 3 10cm

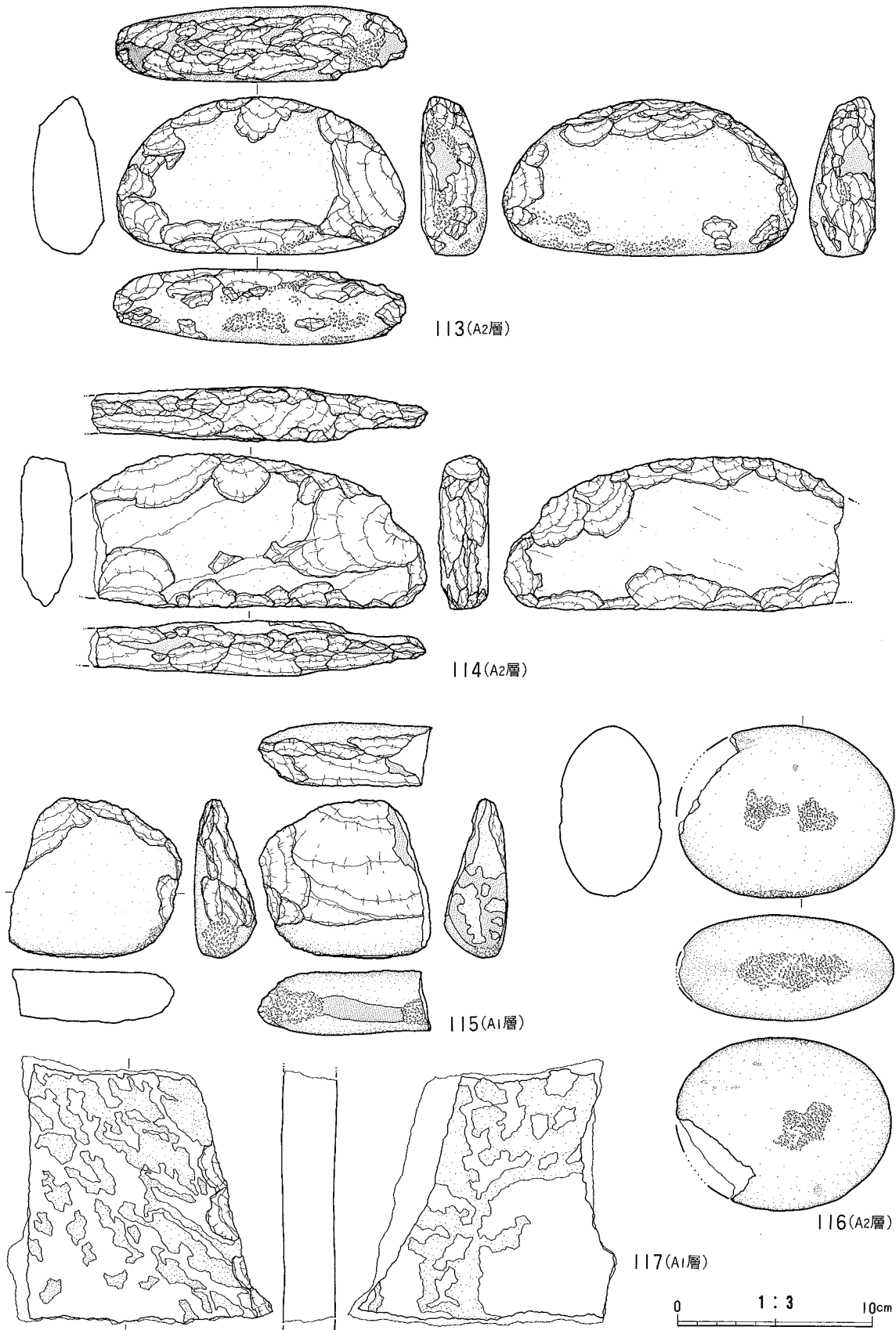
第55図 RA2200竪穴住居跡出土石器(3)



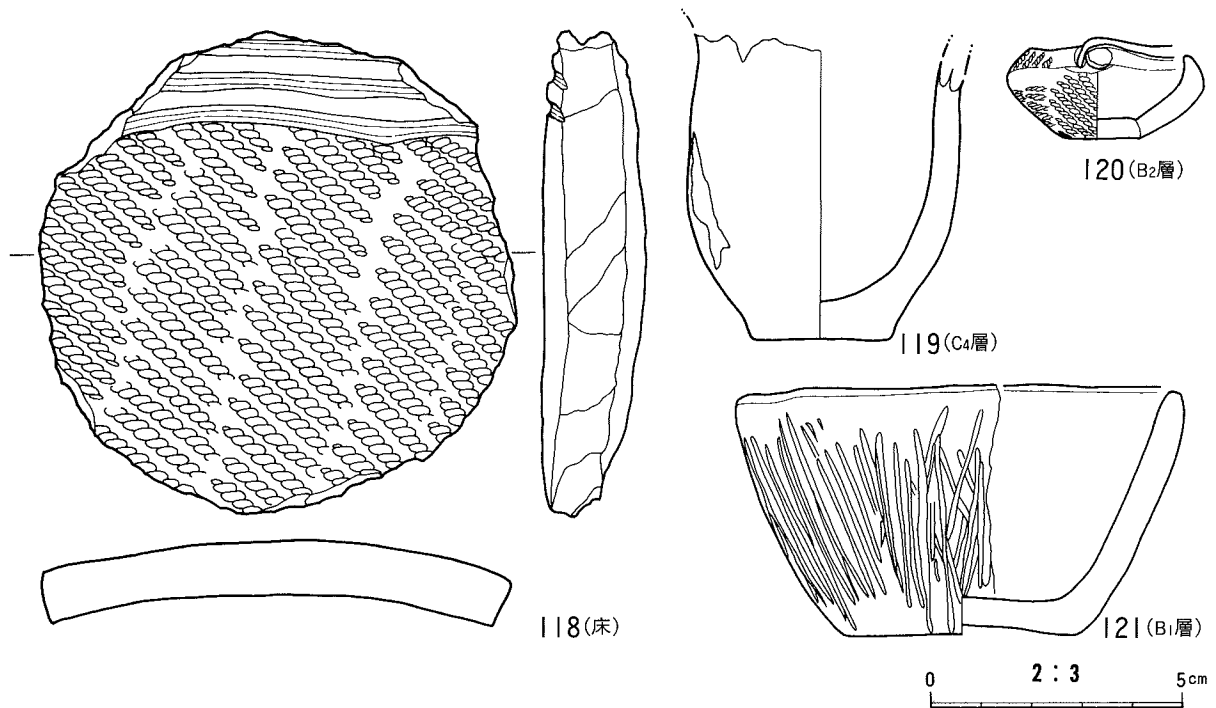
第56図 RA2200竪穴住居跡出土石器(4)



第57図 RA2200竪穴住居跡出土石器(5)



第58図 RA2200竪穴住居跡出土石器(6)



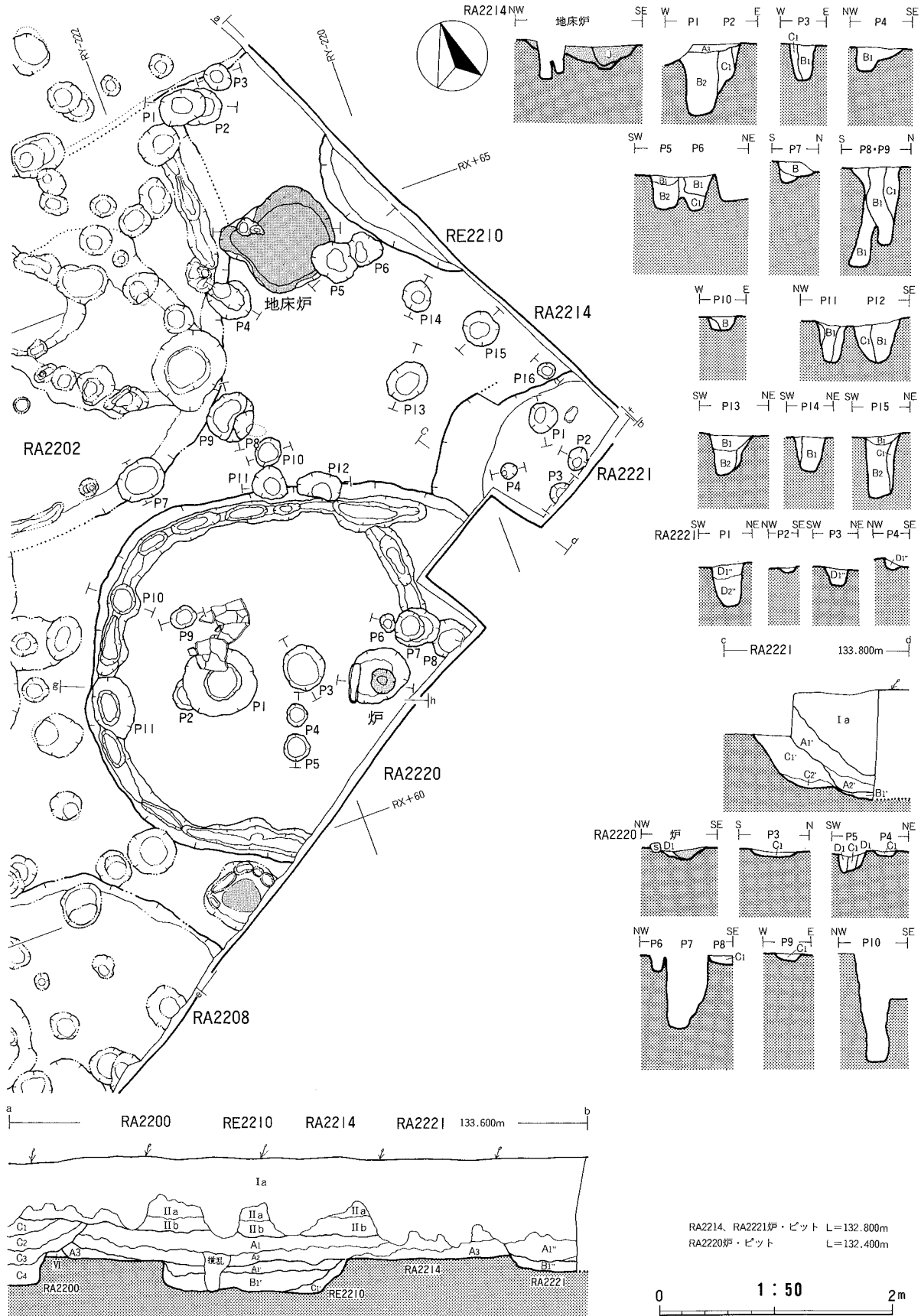
第59図 RA2200竪穴住居跡出土土製品

R E 2210竪穴跡 (第60図)

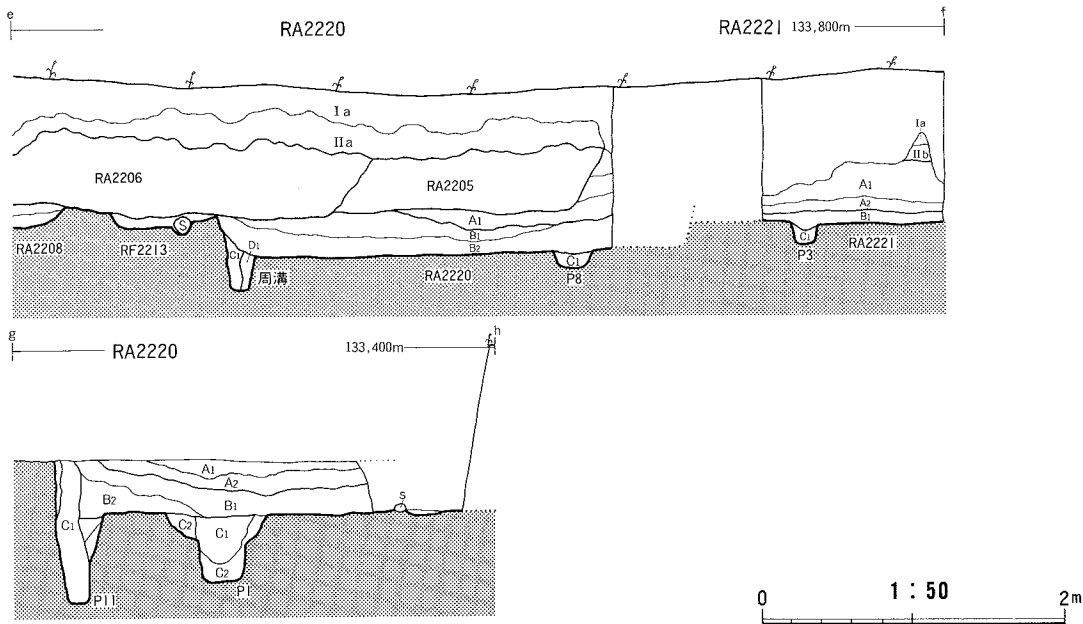
- 時 期 縄文時代早期。 位 置 調査区南東に位置する。
- 平 面 形 全体形の大半が調査区外のため不明。 主軸方向 不明。
- 規 模 不明。調査区内では東西0.36m、南北1.67mを検出している。
- 重複関係 RA2214に切られる。
- 掘 込 面 既に削平されている。
- 検 出 面 RA2214床面。
- 埋 土 自然堆積でA～Cの3層に大別される。
 A層—粒～塊状の褐色土とスコリアを多量に含む暗褐色土で堅くしまりがよい。
 B層—粒～塊状の褐色土とスコリアをやや多く含む堅くしまりがよい黒褐色土。
 C層—粒～塊状の暗褐色土とスコリアを多量に含む堅くしまりがよい褐色土。
- 炉の状態 未検出。
- 壁の状態 北壁はほぼ直壁で、南壁はゆるやかに立ち上がる。
- 床の状態 部分的に起伏があるものの平坦である。
- 柱 穴 未検出。

R A 2214竪穴住居跡 (第60～63図)

- 時 期 縄文時代中期 (大木8 a - 2式期以前)。
- 位 置 調査区南東に位置する。
- 平 面 形 不明。
- 主軸方向 不明。



第60図 RE2210竪穴跡、RA2214・2220・2221竪穴住居跡(1)



第61図 RA2220・2221竪穴住居跡(2)

規模 不明。

重複関係 RA2202・2205・2215・2220・2221に切られ、RA2210を切る。

掘込面 既に削平されている。

検出面 耕作土(Ia層)及び遺物包含層(IIa・b層)下面。

埋土 自然堆積。埋土(A層)は、粒~塊状の褐色土を多く含む堅くしまりのある黒褐色土でスコリアを多く含む。なお、A3層は塊状の褐色土を多量に含む暗褐色土である。

炉の状態 検出した床面上中央に平面形が瓢箪形を呈する地床炉1基が位置する。規模は、長軸1.02m、短軸0.93mをはかる。熱浸透層の厚さは0.18mで火床面は2時期認められる。

壁の状態 重複する遺構に切られているため残存していない。

床の状態 ほぼ平坦である。

柱穴 床面上に15口(P1~15)のピットを検出しているが、支柱穴を構成するピット明確ではない。各ピットの床面からの深さはP1-0.63m、P2-0.32m、P3-0.30m、P4-0.21m、P5-0.28m、P6-0.28m、P7-0.17m、P8-0.87m、P9-0.68m、P10-0.11m、P11-0.32m、P12-0.40m、P13-0.34m、P14-0.30m、P15-0.53mをはかる。埋土はB層が暗褐色土を主体とし、C層は黒褐色土と黄褐色土の塊状混合土である。

土器 (第62図) 1は口縁がやや外傾する深鉢で、口縁部には交互刺突による文様が施され、体部には沈線とRL単節縄文が施される。2は波状口縁をもつ深鉢で、体部にはLR単節縄文が縦位に施される。3はRLR複節縄文を縦位に施すもので、破片上部には隆沈線による文様が見られる。4はRLR複節縄文が縦位に施される深鉢口縁部で、上部には隆線の貼付が見られる。5はRL複節縄文を横位に施す深鉢口縁部である。6はRLR複節縄文を縦位に施すものである。7~11はキャリパー形深鉢の口縁部及び周辺部位である。11は口縁があまり膨らまないもので、口縁部文様帯には幾何学状の文様が施される。

石器 (第63図12~19) 12は石匙である。横型の石匙で、背面のほぼ全周にわたり調整がなされている。刃部縁辺には、二段にわたって剥離があり、より外側の剥離が内側の剥離を切っている。13の削器は、側面の節理面を残すなど、粗雑なつくりである。14・15の削器は主に二側辺に調整を加えている。

16は上下端を除いた全面磨石、17・18は敲石、19は敲打磨石である。19は敲打磨面に直交し、厚さを半分にするような向きに破損したものが接合した資料で、破損の方向が他の敲打磨石とは異なっている。

土製品 (第63図20) 20は土製円盤である。斜縄文が施されている。

RA2220 竪穴住居跡 (第60・61・64図)

時期 縄文時代中期 (大木8a-2式期)。

位置 調査区南東に位置する。

平面形 長楕円形を呈する。

主軸方向 P1と地床炉を長軸線とした場合、W21°Nを示す。

規模 全体形の東端は調査区外に広がるが、復元される規模は東西 (長軸) 4.0m、南北3.3m程である。

重複関係 RA2205・2213に切られ、RA2221を切る。

掘込面 既に削平されている。

検出面 RA2205・2206床面。

埋土 自然堆積でA・Bの2層に大別される。

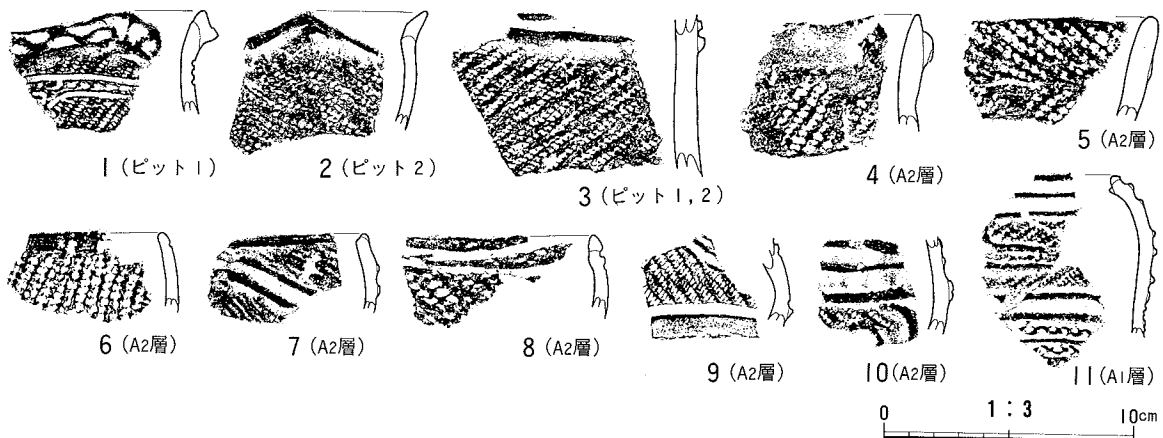
A層 一粒~塊状の黒褐色土と焼土粒・カーボンを含む黒褐色土で、土器を多く含む。

B層 一粒~塊状の黒褐色土と多くのスコリアを含む堅くしまりがある黒褐色土。

炉の状態 東西中軸線上東端に1基検出している。平面形の西端に焼けた自然円礫が1個検出されただけで、炉の周囲には炉石の抜き取られた痕跡はない。規模は0.58×0.50mをはかり、やや不整な円形を呈する。火床面は0.22mの円形の範囲に認められたが、さほど焼けていない。

壁の状態 周溝から直壁に立ち上がる。

床の状態 ほぼ平坦である。

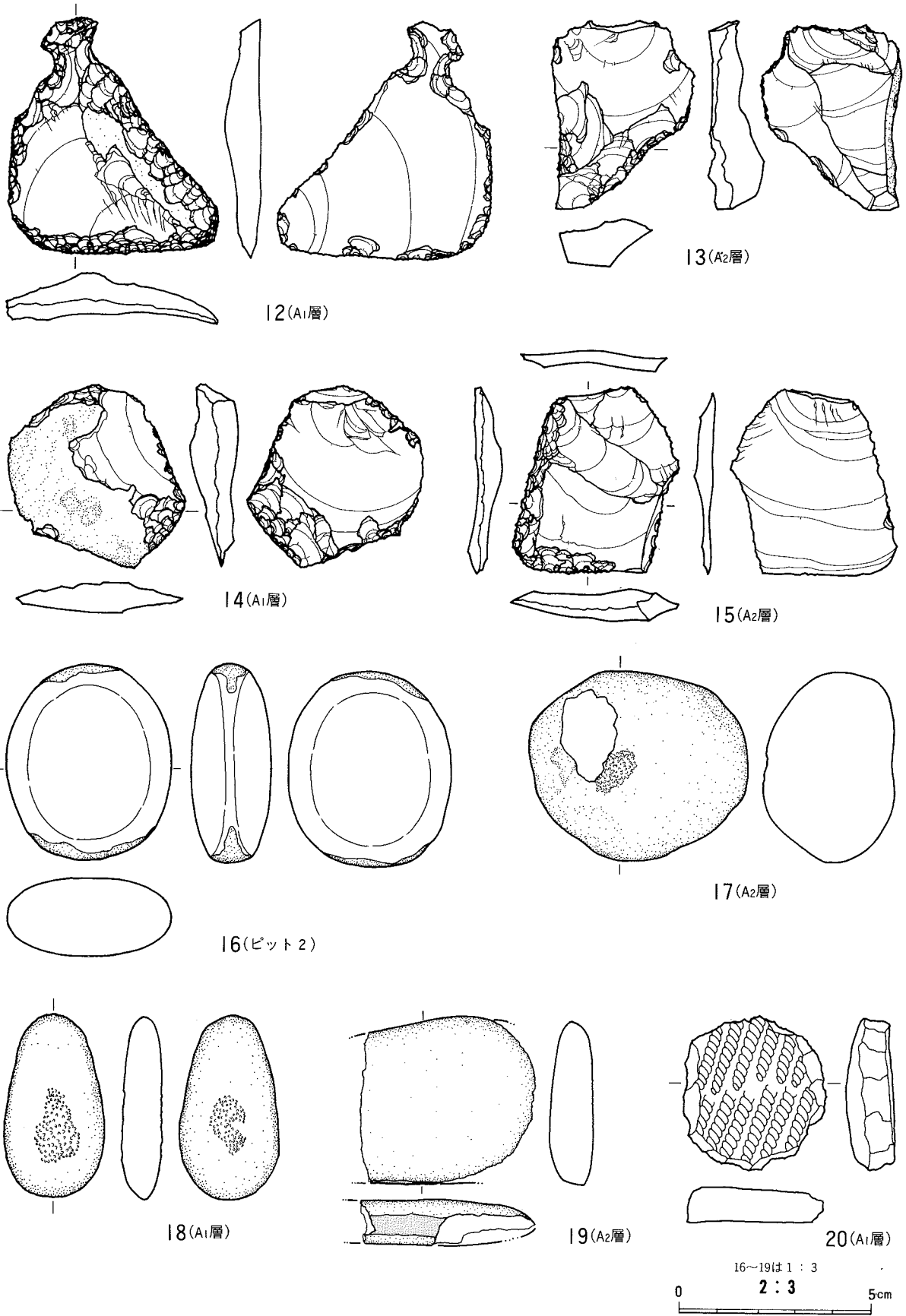


第62図 RA2214 竪穴住居跡出土土器

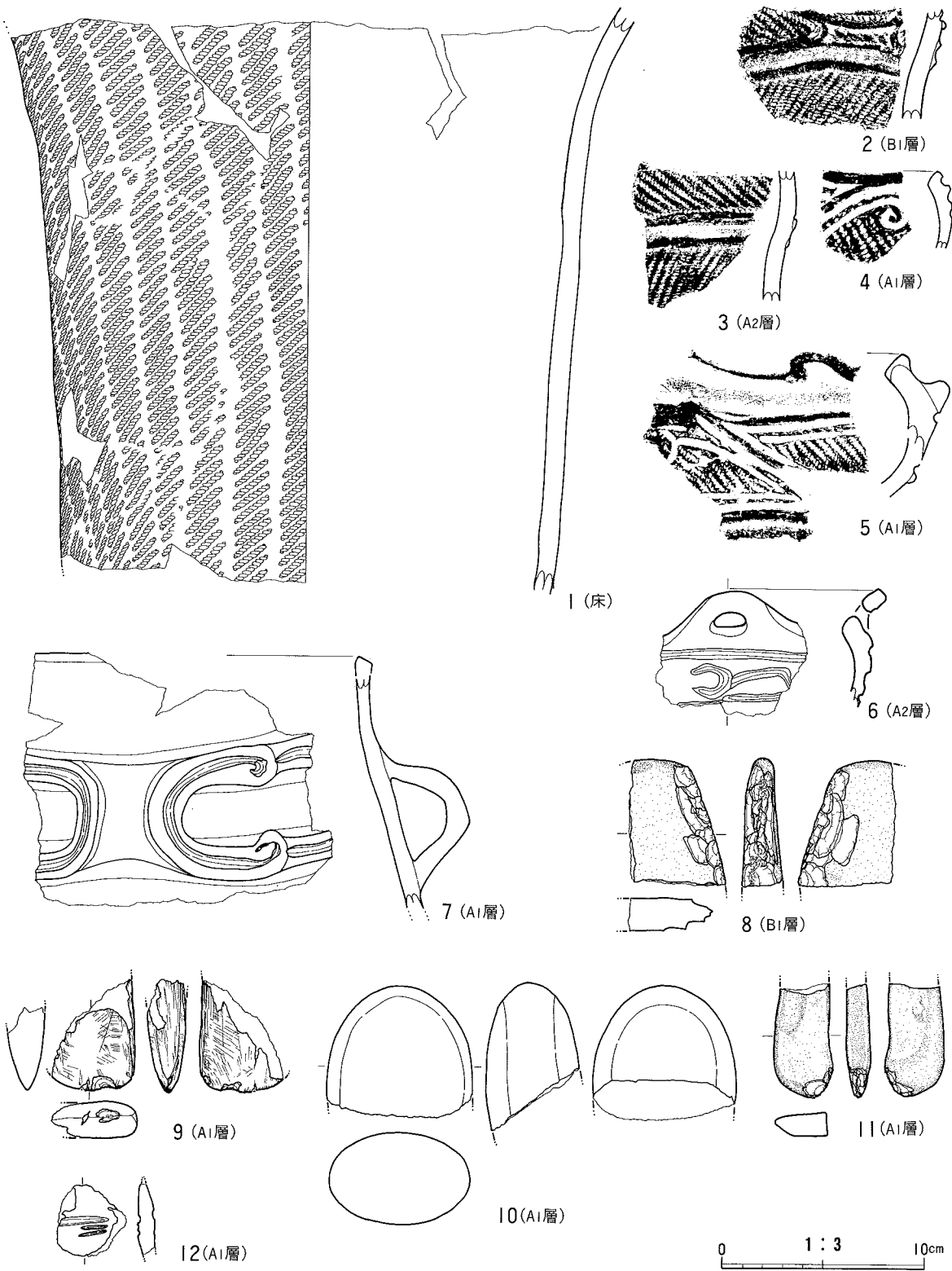
- 周溝** 小ピットを連ねた様な平面形を呈する。規模は幅0.15～0.32m、床面からの深さ0.12～0.33mをはかる。
- 柱穴** 床面上に9口（P1～9）と周溝内に2口（P10・11）のピットを検出している。このうち、主柱穴を構成すると思われるピットはP1・7・10・11の4口で、長方形の配置を示す。
 なお、規模の大きいP1は棟持柱を構成するものとみられる。各ピットの深さはP1-0.40m、P2-0.12m、P3-0.04m、P4-0.04m、P5-0.17m、P6-0.14m、P7-0.62m、P8-0.07m、P9-0.05m、P10-0.54mをはかる。柱痕跡は、検出したP1が0.30m、P11は0.18mをはかる。埋土（C層）は柱痕跡が暗褐色土を主体とし、掘方（D層）が黒褐色土と黄褐色土の塊状混合土である。
- 土器**（第64図1～7）1はキャリパー形深鉢の体部で、RL単節縄文が縦位に施される。2～5はキャリパー形深鉢の口縁部及び周辺部位である。5は口縁にS字状の隆線を貼付するもので口縁部文様帯には隆沈線による波状文が施され、地文にはRL単節縄文を横位に施す。6は孔のある突起をもつもので、沈線による文様が施される。7は樽形土器の口縁部で、橋状の把手をもつ。
- 石器**（第64図8～12）8は偏平な礫の一侧辺に両面から調整を加え、刃部を作出した礫器である。9は磨製石斧の刃部～体部で、全体に擦痕が見られる。10は全面磨面の磨石、11は小形の長礫の一端に剝離痕をもつ敲石である。12は両面に溝状の凹みを有する砥石である。

R A 2221 竪穴住居跡（第60・61・65図）

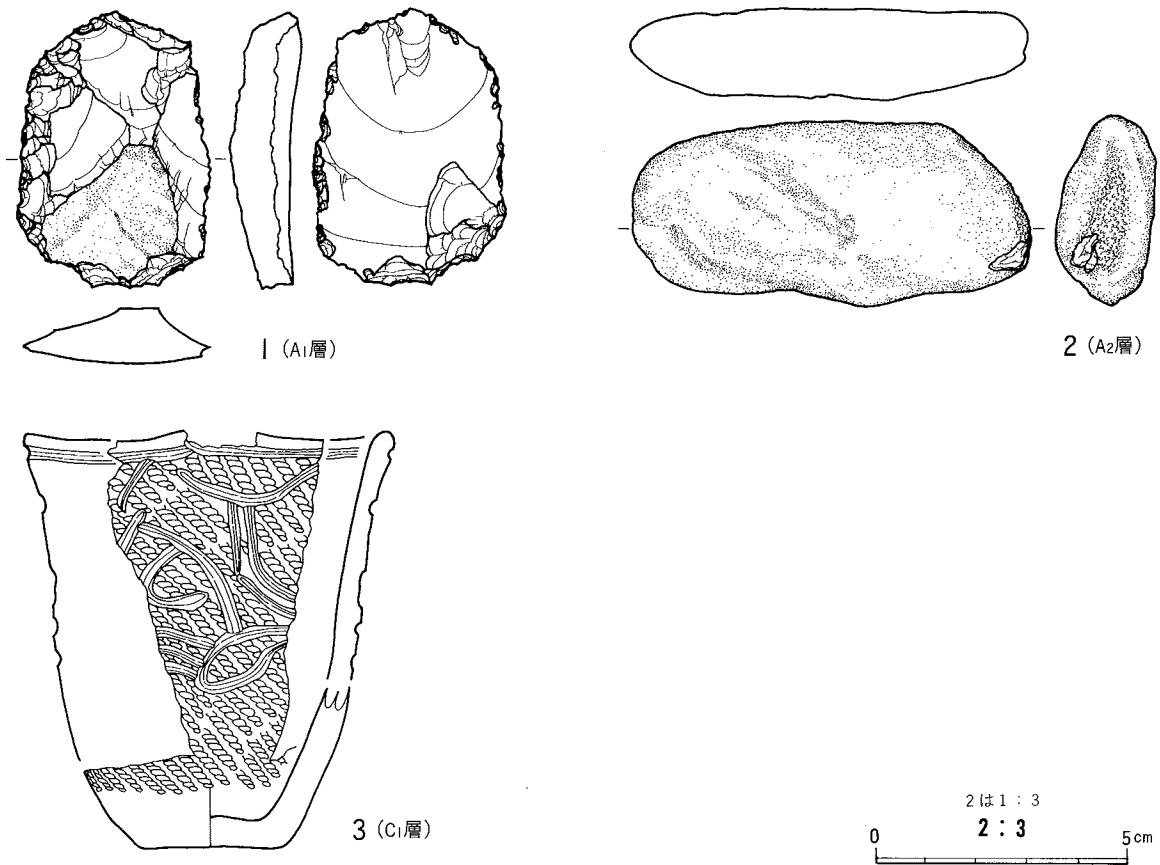
- 時期** 縄文時代中期（大木8a-2式期以前）。
- 位置** 調査区南東隅に位置する。
- 平面形** 不明。
- 主軸方向** 不明。
- 規模** 全体形は調査区外に広がる。検出した規模は、東西1.6m、南北1.2mをはかる。
- 重複関係** R A 2220に切られ、R A 2214を切る。
- 掘込面** 既に削平されている。
- 検出面** 耕作土（I a層）直下。
- 埋土** 自然堆積でA''～C''の3層に大別される。
 A''層-粉～粒状の褐色土をわずかに含むしまりのない黒色土。
 B''層-粒～塊状の褐色土をやや多く含む黒褐色土。
 C''層-粉～塊状の褐色土を多く含むしまりのない黒褐色土。
- 炉の状態** 未検出。
- 壁の状態** 床面から緩やかに立ち上がる。
- 床の状態** 部分的に起伏がある。
- 柱穴** 床面上に4口（P1～4）のピットを検出している。各ピットの床面からの深さはP1-0.37m、P2-0.04m、P3-0.14m、P4-0.10mをはかり、P1以外は小規模なピットである。
- 石器**（第65図1・2）1は割器で、素材剥片に湾曲はほとんどなく、バルブもあまり発達していない。背面左側辺に刃部を作出している。2は敲石で、長軸方向に敲打痕が見られる。
- 土製品**（第65図3）3はミニチュア土器で、沈線文が描かれている。



第63図 RA2214 竪穴住居跡出土石器・土製品



第64図 RA2220竪穴住居跡出土土器・石器・土製品



第65図 RA2221竪穴住居跡出土石器・土製品

R A 2207竪穴住居跡（第66～69図）

時 期 縄文時代中期（大木8a-2式期以前）。

位 置 調査区東半部の中央に位置する。

平 面 形 新旧2時期（旧期-A期、新期-B期）あり、当初の平面形を拡張している。
平面形はともに楕円形を呈する。

主軸方向 N12° Eを示す。

規 模 A期-東西2.90m、南北3.40m。
B期-東西3.44m、南北4.62mをはかる。

重複関係 R A 2188・2202・2205・2215に切られる。

掘込面 既に削平されている。

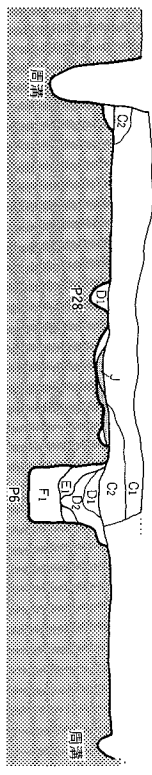
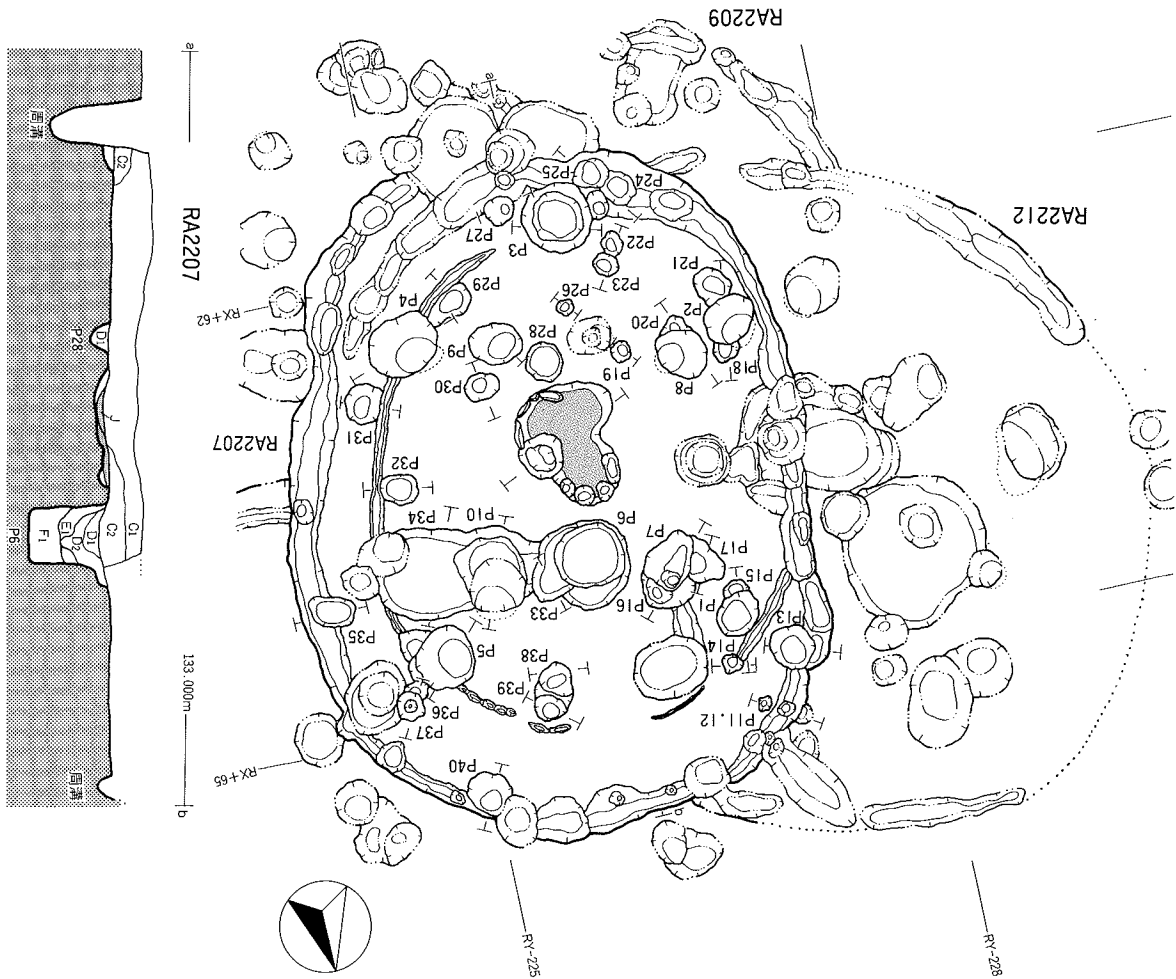
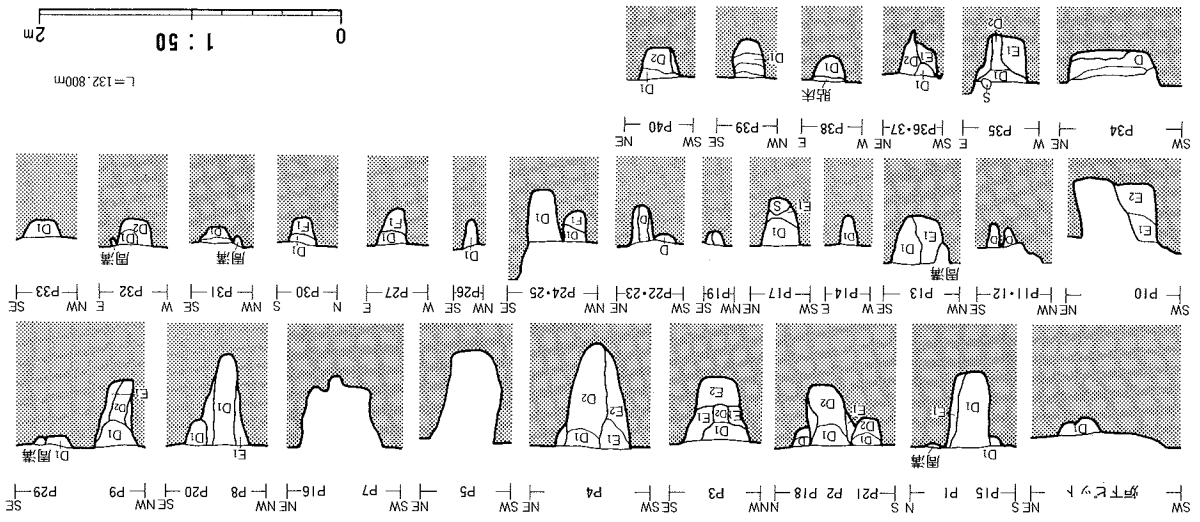
検出面 重複する遺構の下面。

埋 土 自然堆積である。埋土（C層）は小塊状の褐色土をやや多く含む黒褐色土である。

炉の状態 全体形の南北軸線上でやや南寄りに石囲炉を1基を検出した。A・B期とも同じ位置で石囲炉を踏襲している。火床面は2時期あり、新期のものは平面形の南側を使用している事から、北側がA期、南側がB期の平面形である。

A期の炉石は既に抜き取られており、4口の抜き取り穴を検出している。規模は長軸0.85m、短軸0.40mで、楕円形を呈する。熱浸透層の厚さは0.04mをはかり、堅く焼けている。

第66図 RA2207竪穴住居跡



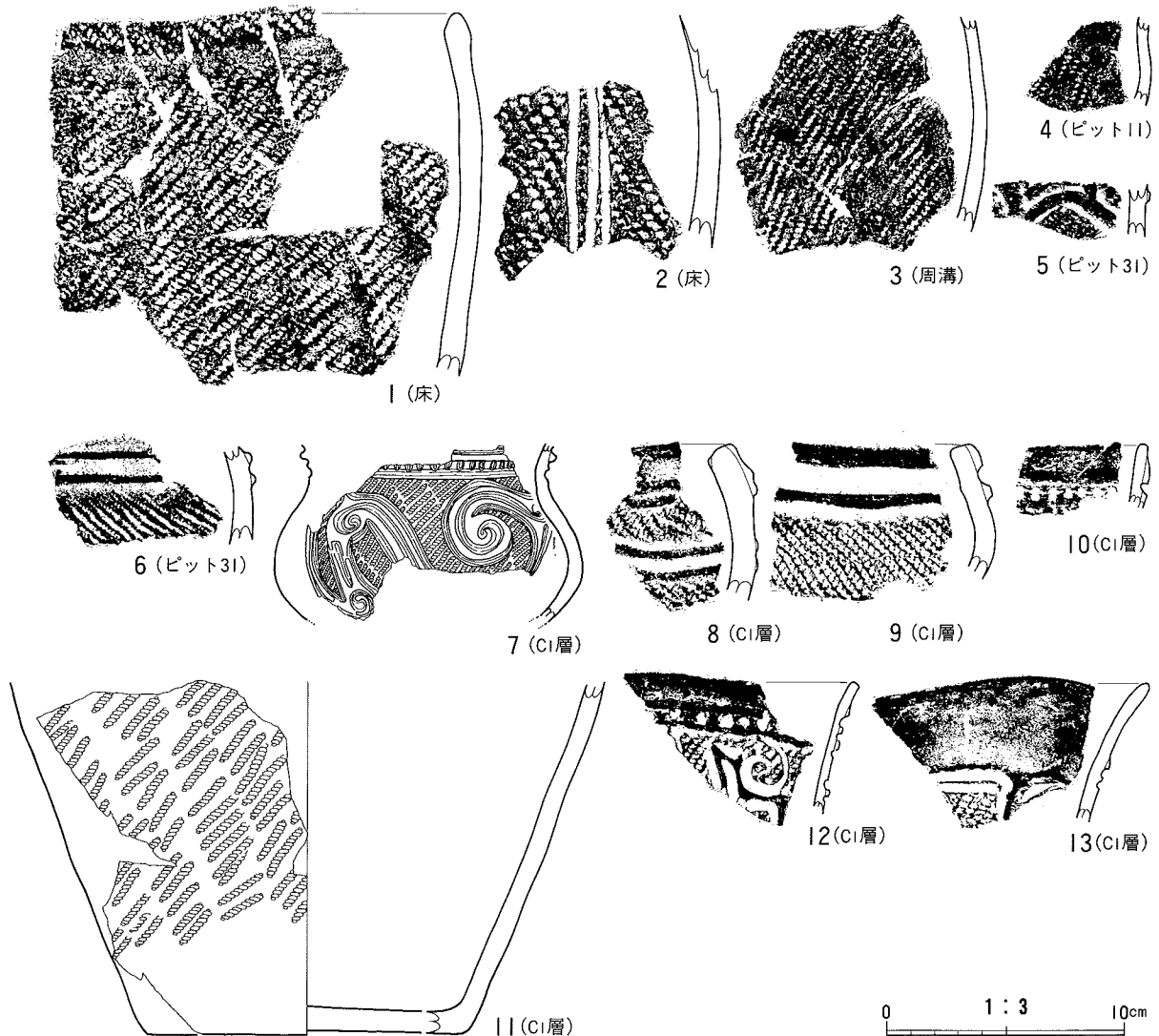
B期の炉は、平面形南端に炉石が4個残存している。規模は長軸0.71m、短軸0.45mをはかる。熱浸透層は厚さ0.04m程で、やや軟質である。

壁の状態 A・B期とも壁は残存していない。

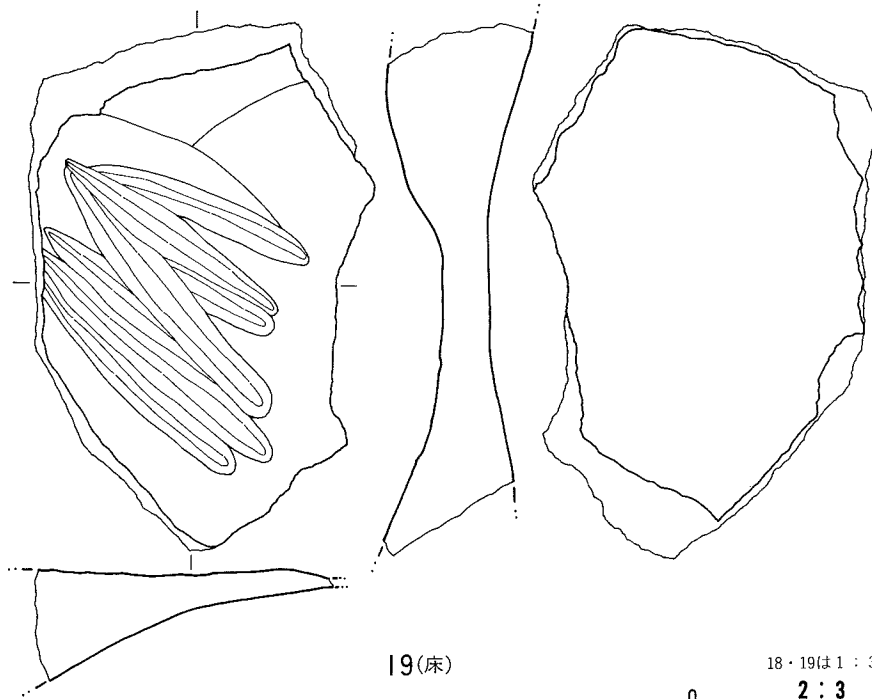
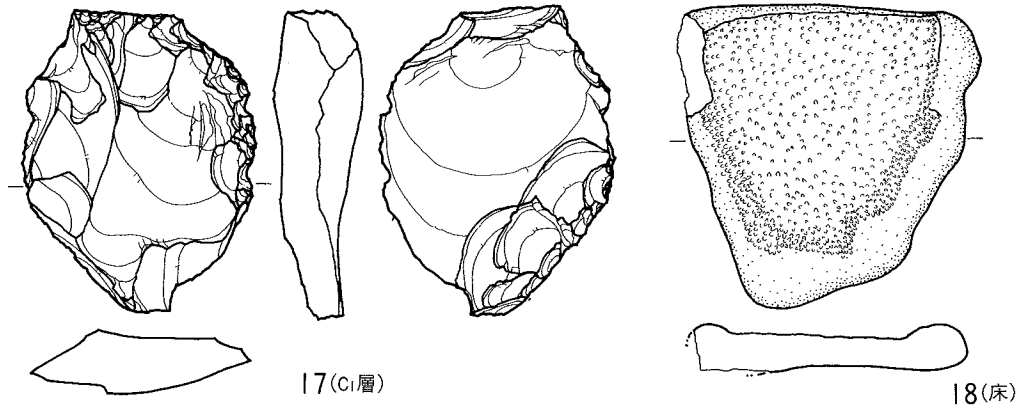
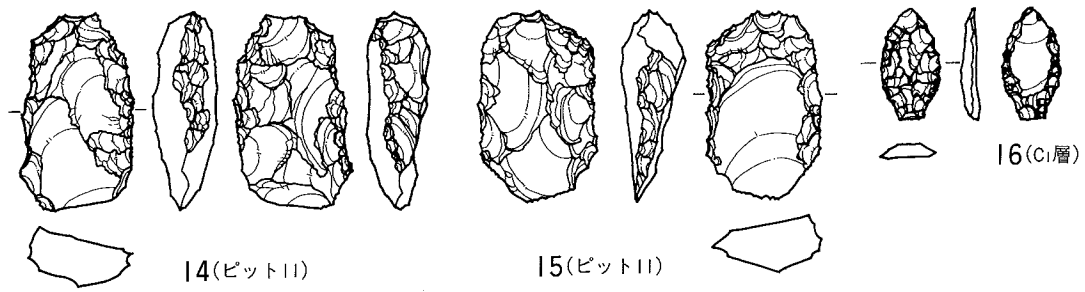
床の状態 A・B期の床面に高低差は認められず、ほぼ平坦である。

周溝 A期—平面形の南西側はB期と重複している。規模は幅0.05～0.10m、深さは0.03～0.05mをはかる。B期—幅0.15～0.30m、床面からの深さ0.27～0.42mをはかる。

柱穴 床面上に40口（P 1～40）のピットを検出している。このうち、A期平面形の支柱穴を構成するピットはP 7～10の4口で長方形の配置を呈する。床面からの深さは、P 7—0.35m、P 8—0.59m、P 9—0.42m、P 10—0.41mをはかる。B期平面形の支柱穴を構成するピットはP 1～6・39の7口で亀甲形の配置を呈する。床面からの深さはP 1—0.49m、P 2—0.39m、P 3—0.42m、P 4—0.69m、P 5—0.62m、P 6—0.52m、P 39—0.25mをはかる。なお、P 6は棟持柱を構成する可能性がある。その他のピットは比較的小規模でA・B期のいずれの時期にもなうものか

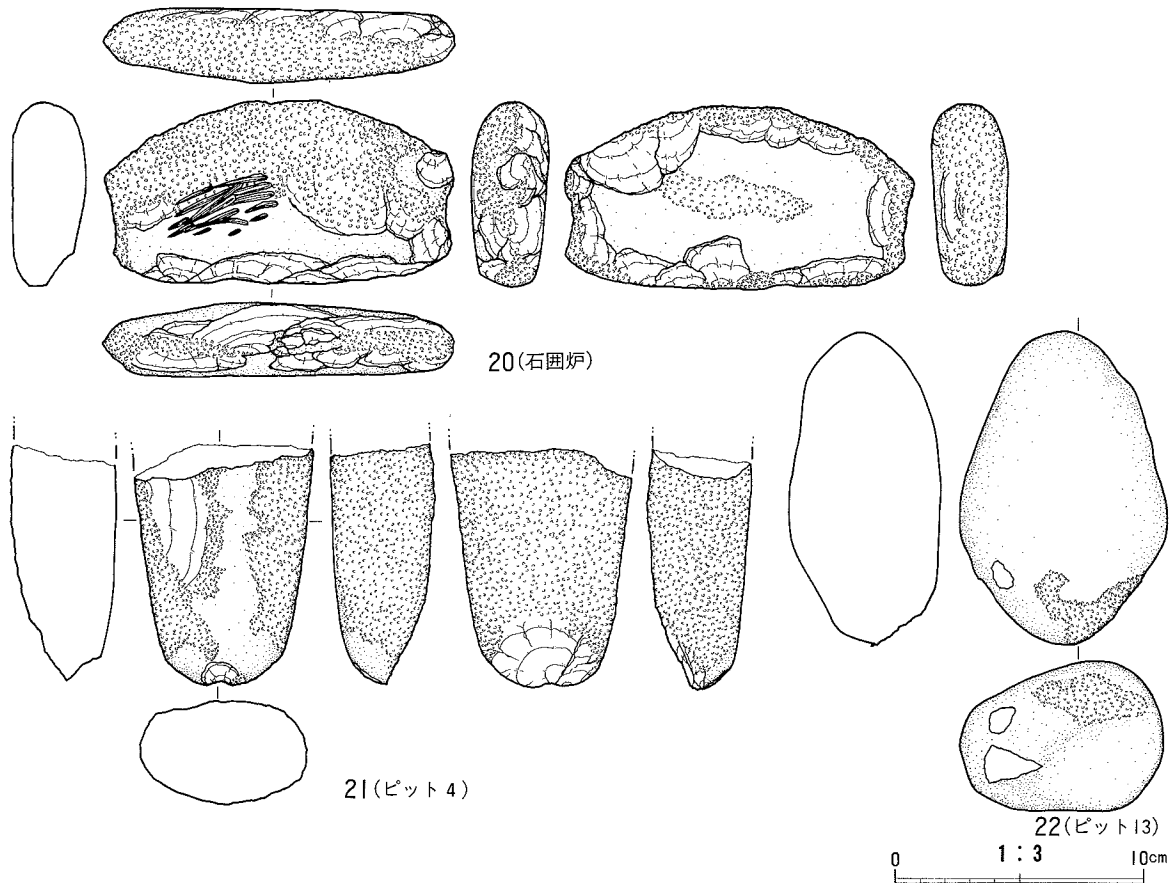


第67図 RA2207 竪穴住居跡出土土器



18・19は1:3
0 2:3 5cm

第68図 RA2207 竪穴住居跡出土石器(1)



第69図 RA2207竪穴住居跡出土石器(2)

判然としない。床面からの深さはP11-0.15m、P12-0.15m、P13-0.32m、P14-0.20m、P15-0.06m、P16-0.37m、P17-0.32m、P18-0.13m、P19-0.07m、P20-0.16m、P21-0.18m、P22-0.05m、P23-0.25m、P24-0.19m、P25-0.34m、P26-0.18m、P27-0.23m、P28-0.12m、P29-0.20m、P30-0.18m、P31-0.13m、P32-0.16m、P33-0.12m、P34-0.22m、P35-0.31m、P36-0.24m、P37-0.29m、P38-0.18m、P40-0.20mをはかる。

土器(第67図) 1は口縁が内湾する深鉢で、RL単節縄文を縦位に施す。2は3条1組の沈線による懸垂文で、地文にはLRL複節縄文を縦位に施すものである。3は深鉢体部でRL単節縄文が縦位に施される。4はRL単節縄文が縦位に施され、5・6は隆線による文様が施される。7は頸部が屈曲する深鉢で、体部には隆沈線による連結する渦巻文が施される。8・9は口縁が内湾する深鉢で、10は刺突文を有する深鉢口縁部である。11はRL単節縄文を縦位に施された深鉢底部である。12・13は口縁が大きく外反する深鉢で、体部には隆沈線による小渦巻文・懸垂文が施される。

石器(第68・69図) 14・15は両面調整石器で、ともに形状が似る。比較的古い剥離面を残す。16は凸基有茎鏃で、腹面は周縁調整。17は削器で腹面に調整を施し、打面の除去を行っている。

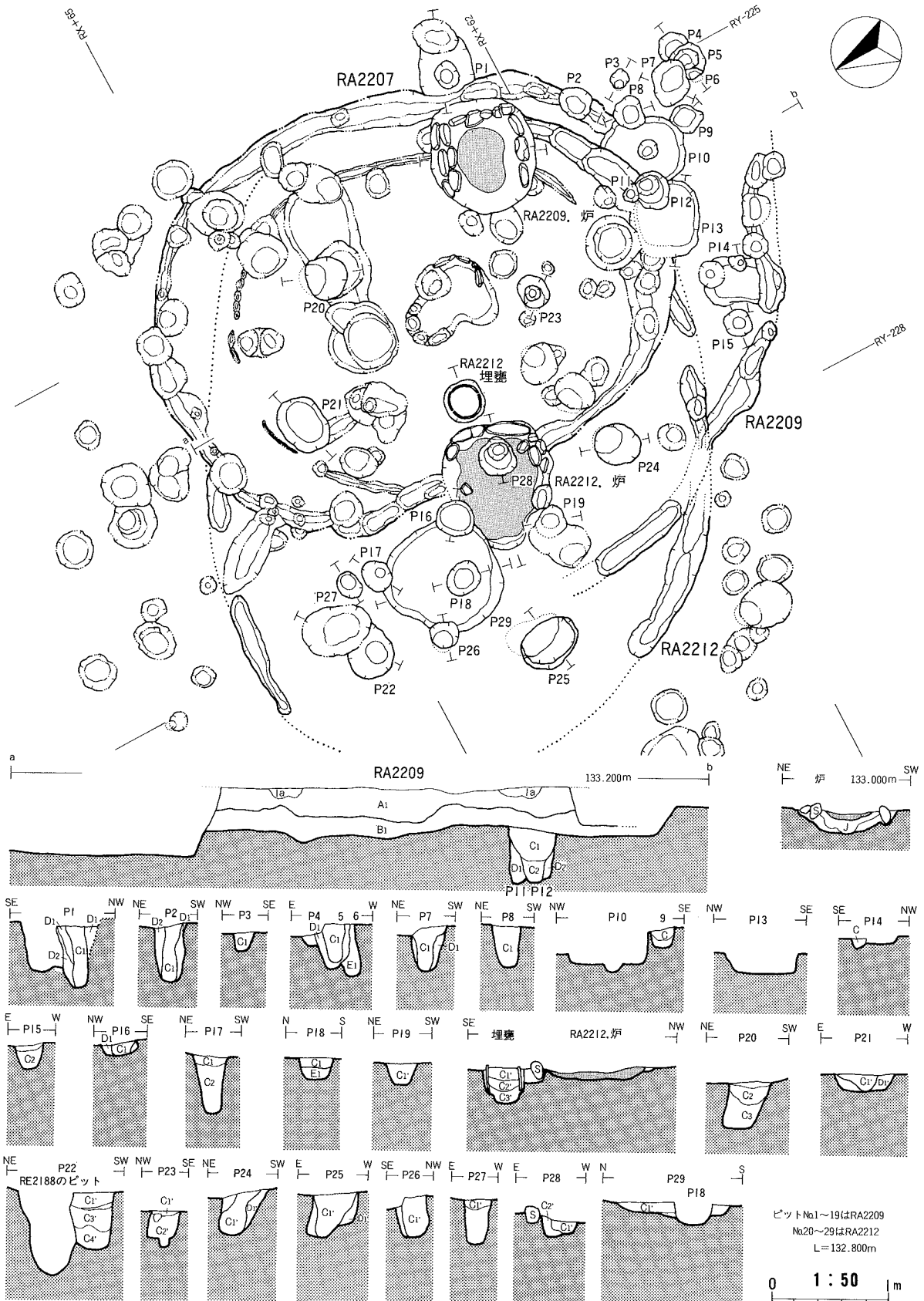
18は石皿で、縁が形成され、機能面には敲打痕を伴う。19は石皿である。両面ともに使用されている。20の敲石は周囲に敲打痕を有する。側面は剥離によって大きく形を変えているが、表裏両面は自然面が残る。敲打痕のあとに、溝状の浅いくぼみが形成されている。21も全体的に敲打痕をもつ敲石である。22は端部を使用した敲石である。

R A 2209 竪穴住居跡 (第70～72図)

- 時期** 縄文時代中期 (大木 8 a - 2 式期以降、8 b - 1 式期以前)。
- 位置** 調査区東半部中央に位置する。
- 平面形** 楕円形か。
- 主軸方向** 不明。
- 規模** 炉を全体形の中央として推定した場合、長軸 (東西) 7.6m、南北5.0mをはかる。
- 重複関係** R A 2188・2202・2205・2215に切られ、R A 2193・2207・2211・2212を切る。
- 掘込面** 既に削平されている。
- 検出面** 耕作土 (I a 層) 及び重複する遺構の底面。
- 埋土** 自然堆積で層相の違いにより、A・Bの2層に大別される。
A層一粒～塊状の褐色土を含む黒褐色土で、カーボン・焼土粒をやや多く混入する。
B層一粒～塊状の褐色土を含む黒褐色土カーボン・焼土粒は少量混入する。
- 炉の状態** 推定される全体形のほぼ中央に石囲炉を1基検出している。自然円礫14個をコの字形に配置しており、全体形は楕円形を呈する。西側には炉石が検出されていないが、当初から無かったか確認できない。火床面は炉石の内部に長軸0.54m、短軸0.43mの楕円形の範囲に検出している。熱浸透層は厚さ0.04m程で堅く焼けている。この熱浸透層の下面には黄褐色土を混入する黒色土が構築されている。
- 壁の状態** 検出したのは南西側だけで、床面から緩やかに立ち上がる。
- 床の状態** 床下面の軟弱な R A 2209 埋土に影響され起伏がある。
- 柱穴** 床面上に多くのピットを検出しているが、支柱穴を構成する配置は判然としない。
- 遺物状況** 土器は埋土から349点の破片が出土しているが、いずれも小片である。石器は68点出土しているが、剥片や自然礫が9割を占めている。
- 土器 (第71図)** 1は立体的な山形状突起を有す深鉢口縁部で、口縁部文様帯には横位に展開される渦巻文が施される。地文には、R L 単節縄文が縦位に施される。2はキャリパー形深鉢の口縁部で、口縁部文様帯には小渦巻文が施される。3・4は深鉢体部で、3は沈線による弧文。4には懸垂文が施される。
- 石器 (第72図 5～12)** 5は削器、6は搔器である。6は背面に自然面を残す。7の搔器は背面末端に調整を加え、刃部としている。この素材剥片は、打面転移が激しく行われた石核から剥離されている。8・9は凸基有茎鏃で、9は鏃身下半部にアスファルトが付着している。10の石匙は、つまみ部は挟れた部分だけ両面から周縁調整を施す。下半部を欠損している。11は腹面左側辺に刃部を持つ削器である。やや光沢が見られる。
12の敲打磨石には、敲打磨面とは異なる対面に敲打痕が見られる。
- 土製品 (第72図13)** 13は土偶上腕部である。沈線が施されている。

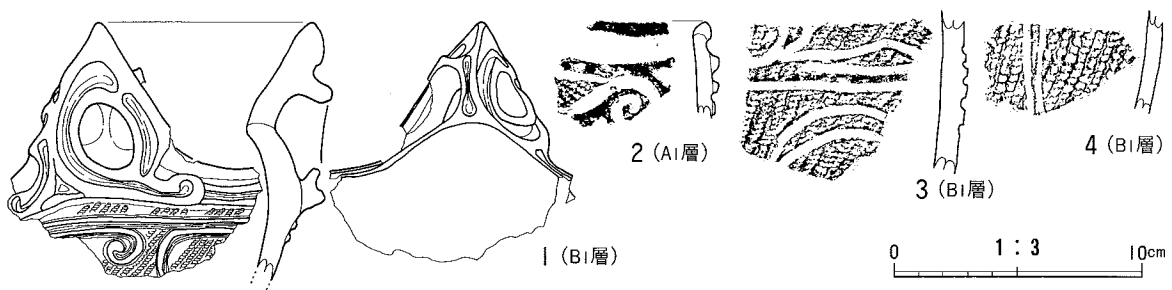
R A 2212 竪穴住居跡 (第70・73・74図)

- 時期** 縄文時代中期 (大木 8 a - 2 式期)。
- 位置** 調査区東半部中央に位置する。
- 平面形** 全体形の南東部と西側は重複する遺構により削平されているが、ほぼ楕円形を呈する。

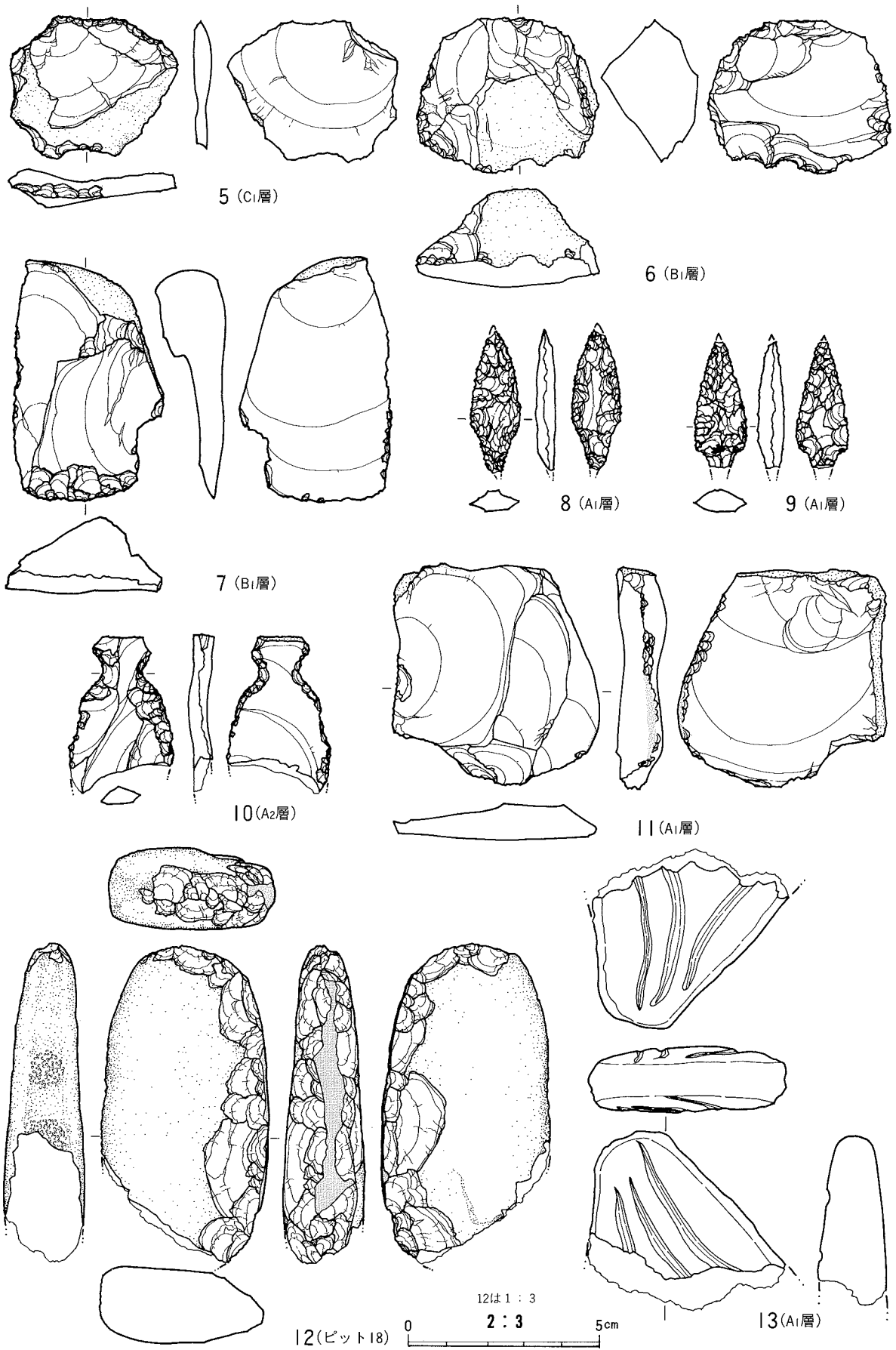


第70図 RA2209・2212竪穴住居跡

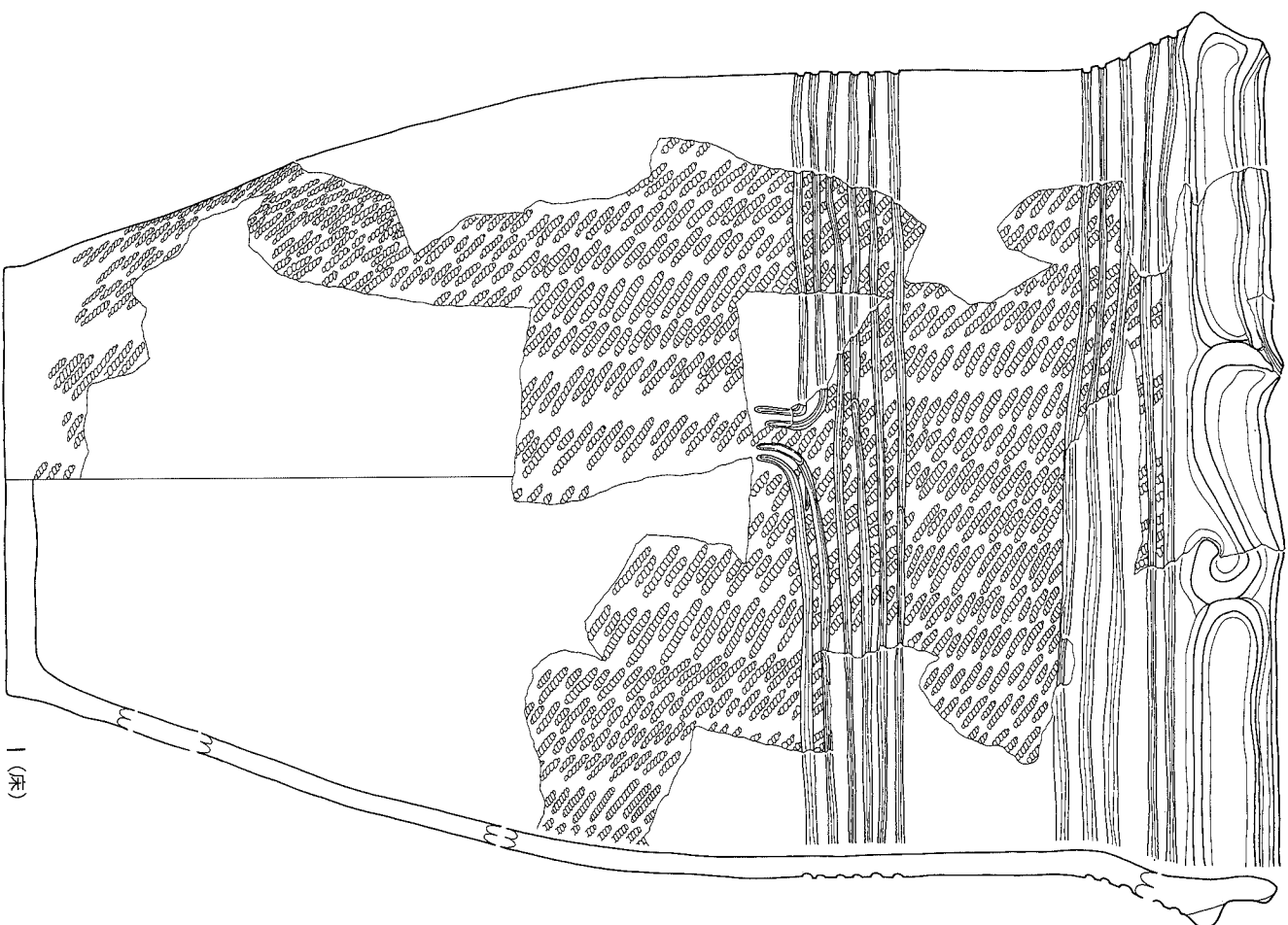
- 主軸方向 E27° Sを示す。
- 規 模 東西4.3m、南北（主軸）推定5.2mをはかる。
- 重複関係 RA2188・2193・2202・2205・2215・2223に切られ、RA2207を切る。
- 掘込面 既に削平されている。
- 検出面 耕作土（I a層）下面及び重複する遺構床面。
- 埋 土 周溝及びピットの埋土だけが残存している。
- 炉の状態 東西中軸線上からやや西寄りに楕円形を呈する石囲炉1基を検出している。平面形の東側から南東隅にかけて自然円礫を配置した焼けた炉石9個を検出している。規模は長軸1.06m、短軸0.96mをはかる。この炉の内部全面が火床面となっており、熱浸透層は厚さ9cm程で堅く焼けている。
- 埋 甕 床面のほぼ中央に位置する。直径0.36mの円形のピットに埋設している。炉として使用した痕跡はなく、埋土は黒褐色土を主体としている。
- 壁の状態 削平されている。
- 床の状態 削平されている。
- 柱 穴 床面上におおくのピットを検出している。このうち支柱穴を構成するピットは4口（P20・22・23・25）の4本柱の配置であるが、P21と24を加えた6本柱の構造の可能性も指摘できる。各ピットは床面が削平されているため、本来の深さは明確ではないが、検出面からの深さはP20-0.38m、P21-0.14m、P22-0.48m、P23-0.30m、P24-0.32m、P25-0.35mをはかる。柱痕跡は各掘方で検出しており、直径は0.25~0.35cmをはかる。
- 遺物状況 土器は小片が9点出土している。石器は6点出土しており、図示したほかに砥石の破片がある。
- 土 器（第73・74図） 1は口縁部にS字状把手をもち緩く屈曲する深鉢である。口縁部文様帯と体部は5条の横位平行沈線によって区切られ、体部上半部にも6条の横位平行沈線が施される。地文はLR単節縄文が縦位に施されるものである。2・6は橋状の把手をもつ深鉢で、2の把手部下には棘を有す小渦巻文が施される。3は孔のある弁状突起で、逆C字状の文様が施される。4は口縁がやや内湾する深鉢上半部で、RL単節縄文が縦位に施されるものである。
- 5はC字状突起をもつ深鉢口縁部である。7は口縁が大きく開く浅鉢でRLR複節縄文が縦位に施される。
- 石 器（第74図8・9） 8は長礫の中央部に凹み部をもつ凹石である。9は二面を機能面とする砥石で、側面には擦痕も見られる。
- 土 製 品（第74図10） 10は棒状の土製品で、下端がくぼみ上方に向かって広がる形状のものである。



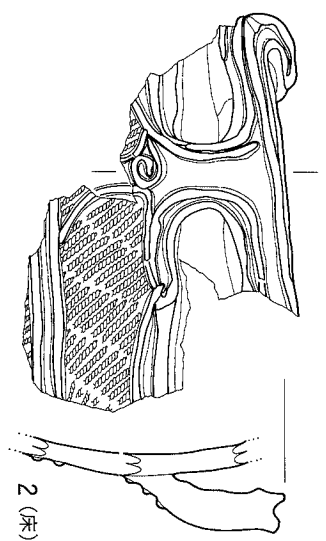
第71図 RA2209竪穴住居跡出土土器



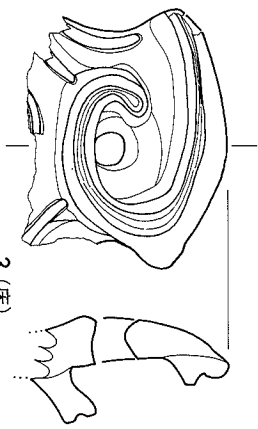
第72図 RA2209 竪穴住居跡出土石器・土製品



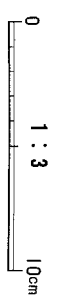
1 (床)



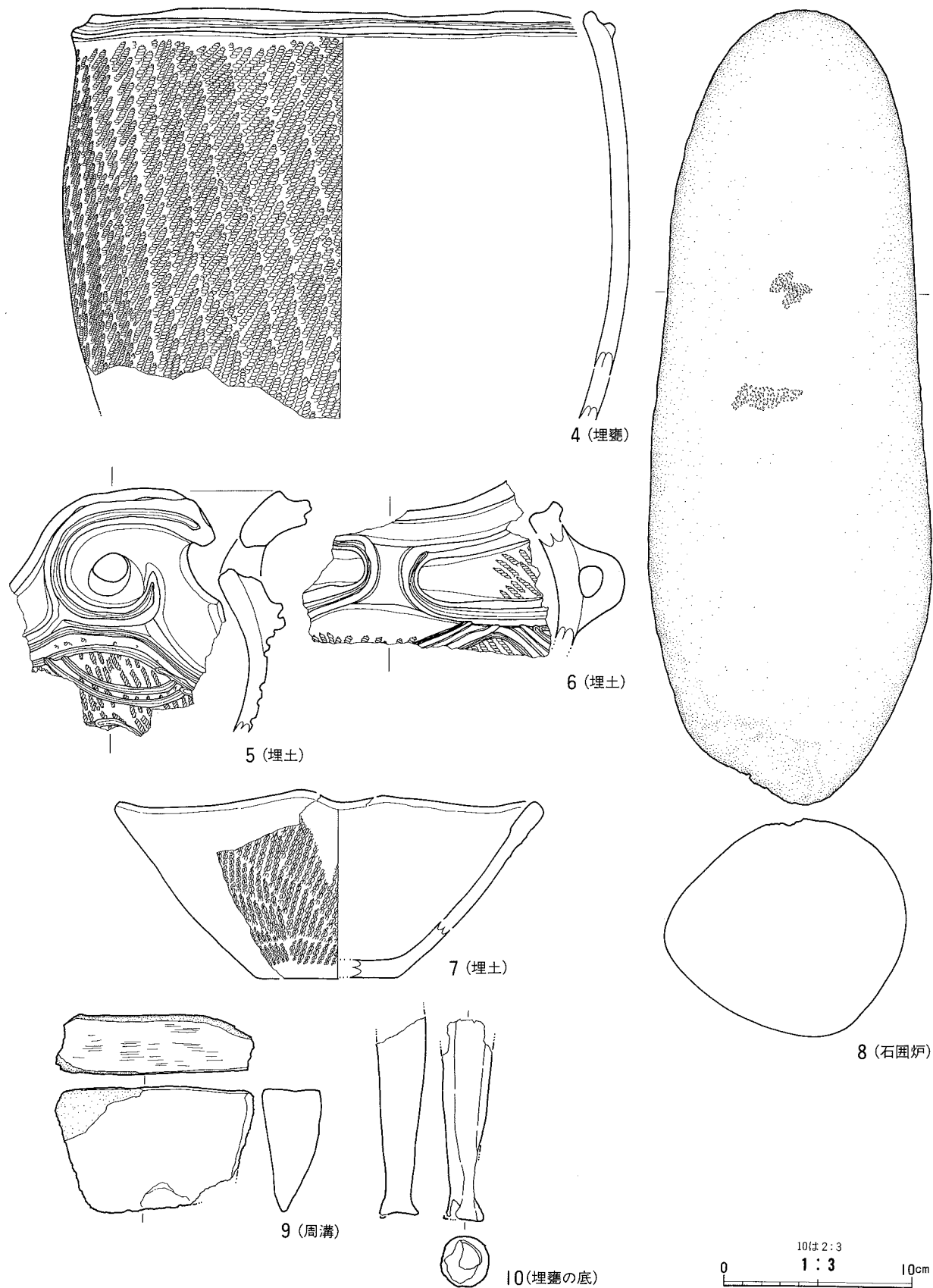
2 (床)



3 (床)



第73图 RA2212竖穴住居跡出土土器(1)



第74図 RA2212 竪穴住居跡出土土器(2)・石器・土製品

R A 2193 竪穴住居跡 (第75～81図)

- 時 期** 縄文時代中期 (大木 8 b - 2 式期)。 **位 置** 調査区南西に位置する。
- 平 面 形** ほぼ楕円形を呈する。 **主軸方向** ほぼ真東を示す。
- 規 模** 平面形の東端は重複する遺構により切られ、また南側は調査区外に広がるため全体形は明確ではないが、およそ東西 (長軸) 9.0m、南北7.8mをはかる。
- 重複関係** R A 2185・2186・2188・2193・2194・2206・2209に切られ、R A 2196・2197・2207・2208・2212・2218・2222を切る。
- 検 出 面** 耕作土 (I a 層) 及び重複する遺構の床面。
- 埋 土** 自然堆積で層相の違いにより、A・Bの2層に大別される。なお、C層は床構築土 (貼床) である。
A層一粒状の黄褐色土と焼土・カーボンをわずかに含む黒褐色土。
B層一粒～塊状の黄褐色土と焼土・カーボンをわずかに含む暗褐色土。
- 炉の状態** 東西中軸線上から東寄りに石囲炉1基とこの北側に隣接して地床炉を1基、さらに全体形の西端に埋甕炉を1基検出している。石囲炉は平面形の南側をR A 2195に切られているが、全体形は長方形を呈する考えられる。自然円礫15個が残存している。規模は長軸1.15m、短軸0.68m以上をはかる。この炉の内部全面が火床面となっており、熱浸透層は厚さ10cm程で堅く焼けており、火床面は2時期検出された。また、地床炉は、平面形は楕円形を呈し長軸0.70m、短軸0.55mをはかる。火床面は大きく2時期認められる。熱浸透層は8cm程の厚さで堅く焼けている。埋甕炉はR A 2217の周溝に北半部を切られている。直径0.45cmのピットに深鉢を埋設して炉としているが、火床面は甕内部の0.10m程の小規模な範囲にだけ認められ、浸透層も0.02mとさほど焼けていない。
- 壁の状態** 壁は重複する遺構に削平されており残存していない。
- 床の状態** ほぼ平坦で、構築土 (C層) が貼られている。
- 柱 穴** 床面上にR A 2196・2222を合わせを多くのピットを検出している。主柱穴を構成するピットは南側が調査区外に広がるものの、P 1・3～7・8～10・12のピットで構成される。その配置は変形な亀甲形を呈する。各ピットの床面からの深さは、P 1-0.81m、P 3-0.41m、P 4-0.97m、P 5-0.79m、P 6-0.61m、P 7-0.70m、P 8-0.79m、P 9-0.70m、P 10-0.45m、P 12-0.82mをはかる。なお、P 10と12は棟持柱と考えられる。検出した柱痕跡は0.26～0.38cmをはかる。
- 土 器 (第77図)** 1は底部を欠くキャリパー形深鉢である。口縁部文様帯には孔のある三角状把手をもち、把手間は隆沈線による区画文が施され、さらに区画間を小渦巻文によって加飾させたものである。体部に施される渦巻文は2条1組の隆沈線によって連結される。地文はR L R 複節縄文を縦位に施すものである。2は口縁がやや内湾する深鉢で、R L R 複節縄文が施文される。3は膨らみをもつ深鉢体部で、隆沈線による渦巻文が施される。4・5は口縁が外反する深鉢で、口縁部より体部上半にかけて無文帯が設けられ、体部には沈線による小渦巻文・懸垂文が施される。6・8は深鉢体部で、6は懸垂文間に楕円区画が設けられ、さらに小渦巻文を加飾するものである。7は吊手状の把手が付く浅鉢で、口縁下に隆沈線による小渦巻文を配し、さらに隆沈線を垂下させるものである。9は深鉢底部から体部下半にかけてのもので、連結する渦巻文と懸垂文が施される。地文はR L 単節縄文を斜位に施すものである。10は口縁が大きく外反する深鉢で、2条1組の横位平行沈線によって数段に文様帯が区画される。地文はL R 単節縄文が縦位に施される。11・12は口縁が外反する深鉢で、沈線による渦巻文・懸垂文、12には有棘小渦巻文が施される。

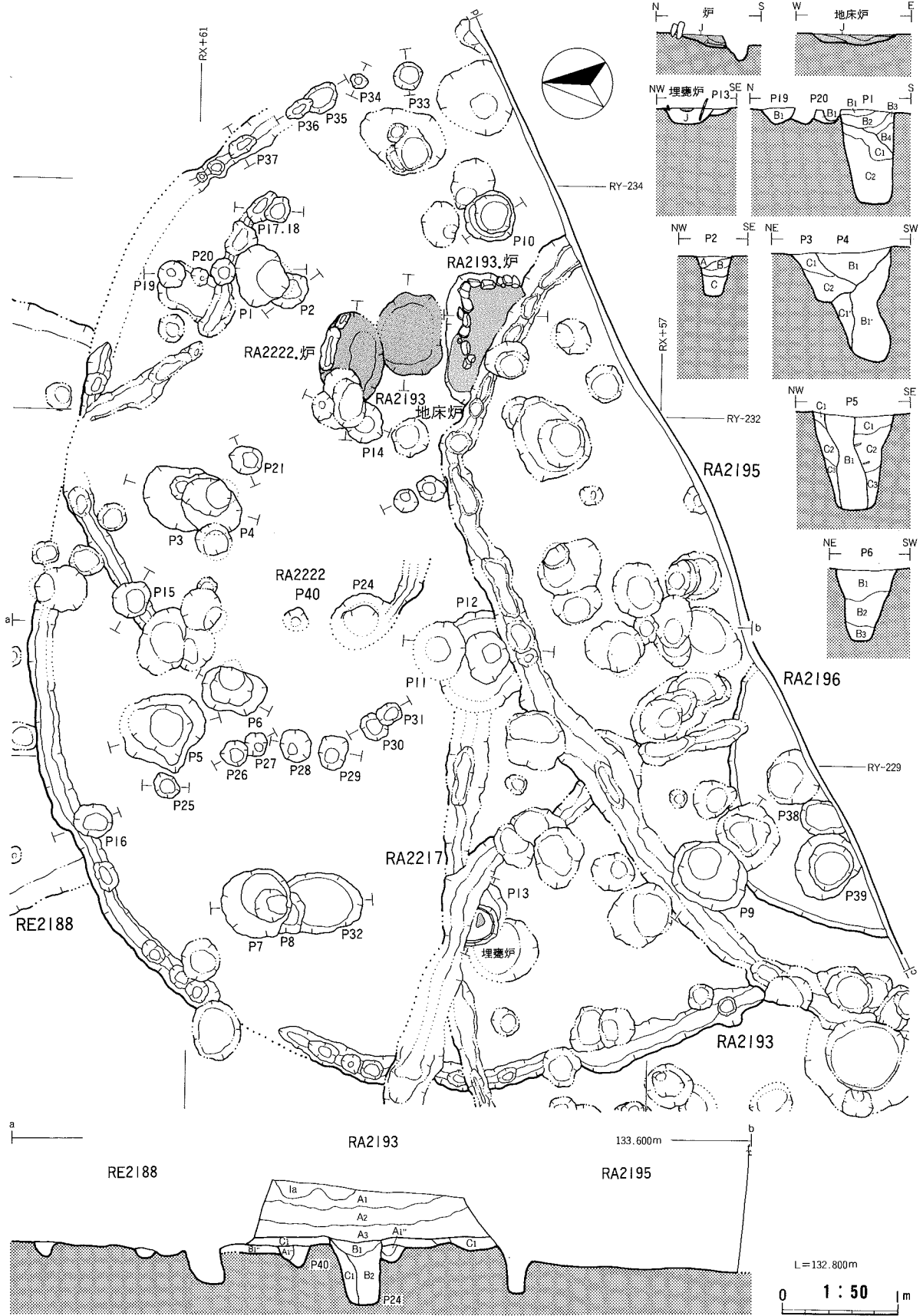
石器(第78～81図) 13・14は、搔器である。14は両面を周縁調整したもので、全体が楕円形に整形されている。15・17は削器で、15は突出した辺を両面調整により作出している。16は篋状石器で、基部まで丁寧に両面調整されている。18は凸基有茎鏃で、鏃身上半部に欠損があり、若干自然面が残る。基部は厚さが薄いため、先端部に比べて調整が疎である。19は削器である。背面上半部に深さのある剥離面があり、その末端は階段状を呈する。20の凸基有茎鏃の基部には、アスファルトの付着が見られる。21はあまり顕著ではないが、つまみ部の作出が認められるので石匙とした。両面周縁調整されている。22は搔器で刃部は弧状に作出されている。23の削器は、腹面右側辺に連続的に調整を施している。24は両面調整石器で、全体的に摩滅している。25の平基有茎鏃は、背面基部右側とその裏面が新しい剥離面(破損か)で構成されている。26～28は削器、29は搔器である。29は素材剥片に湾曲があり、部分でかなり厚みも異なっているが、末端が刃部である。30・31は凸基有茎鏃である。30は基部と先端部を欠損しており、また平面と側面の厚みがほとんど変わらない。32の削器は、調整が加えられている刃部も、その後の使用によってつぶれている。33は両面調整石器、34は片面調整石器である。33は刃部と考えられる部分はなく、形状も左右非対称である。34は背面左側辺に調整を加えている。35は石匙のつまみ部であり、調整は背・腹面ともにつまみ部の方へむかって連続的に施されている。

36は敲打磨石である。敲打磨面は一面で、全周に小剥離と敲打痕が見られ、全体が半月形に整形されている。37は磨製石斧の基部～体部で、体部には擦痕が見られる。刃部は破損しているが、その面に敲打磨面が見られる。側面は特に入念な研磨作業が行われている。38は敲打磨石である。大形の礫を素材としているが、機能面はわずかである。39は磨製石斧の基部～体部で、体部下半部～刃部は一度の衝撃で大きく破損している。40は砥石で溝状の条痕が見られる。41の敲打磨石は幅のある敲打磨面が形成されている。42も敲打磨石であり、断面形が三角形の礫素材の最も角度が狭い辺を敲打磨面として使用している。小剥離により剥ぎとられていった縁辺のうち残った分が敲打磨面を形成しており、面的な広がりは見られない。43は円礫の側面に敲打痕をもつ敲石である。44は礫の短軸方向に剥離を施した礫石錘である。抉れはそれほど発達していない。45は偏平礫の端部に鼠歯状痕をもつもので、敲石としての用途が考えられる。46は整形時の敲打痕が若干残って研磨されているものの、側面に小剥離が見られ敲打痕を伴うことから、敲石と思われる。47・48も敲石で、わずかに敲打痕が観察される。49は石皿で、縁が形成され、機能部と縁の境には敲打痕が見られる。

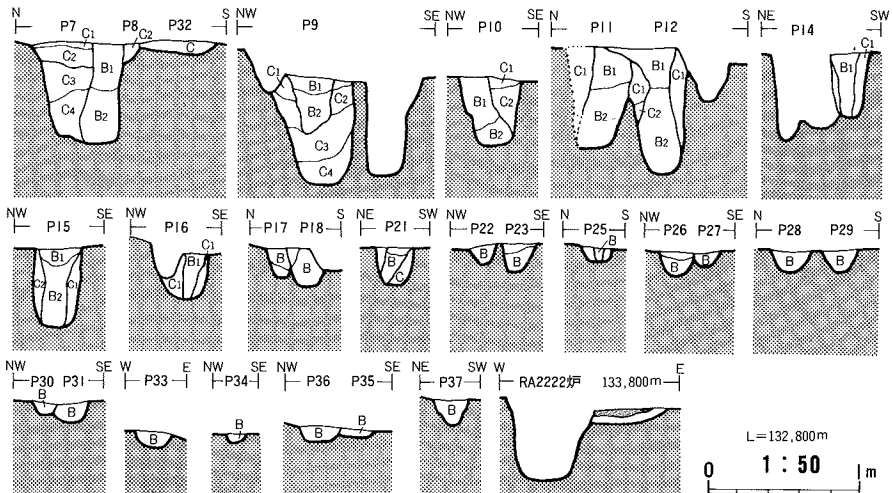
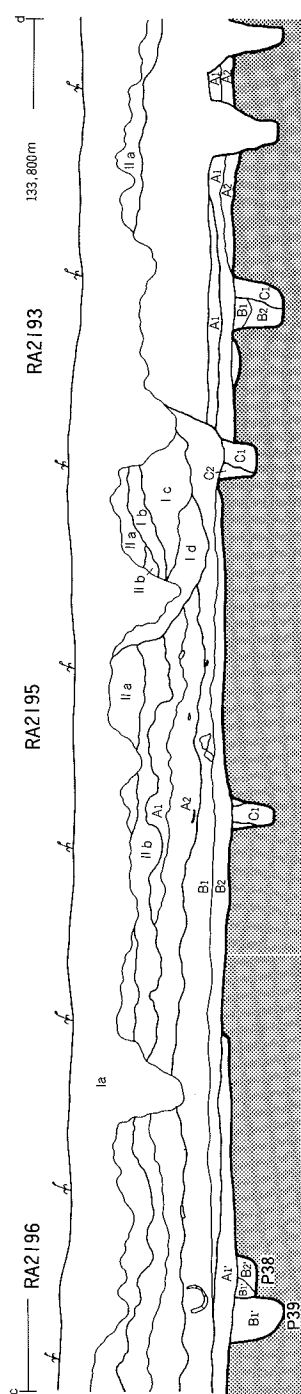
土製品(第81図50～53) 50・51は土製円盤である。52は中央部に溝状の条痕をもつ土製品、53はミニチュア土器で沈線が施されている。

R A 2196 竪穴住居跡(第75・76・81図)

時期 縄文時代中期(大木8b-1式期)。 位置 調査区南西に位置する。
平面形 方～長方形を呈する。
主軸方向 不明。
規模 全体形の南半部は調査区外に広がる。調査区内で検出した規模は東西2.3m、南北1.2mをはかる。
重複関係 R A 2193・2195・2217に切られる。
検出面 R A 2195床面。



第75図 RA2193・2196・2222竖穴住居跡(1)



第76図 RA2193・2196・2222竪穴住居跡(2)

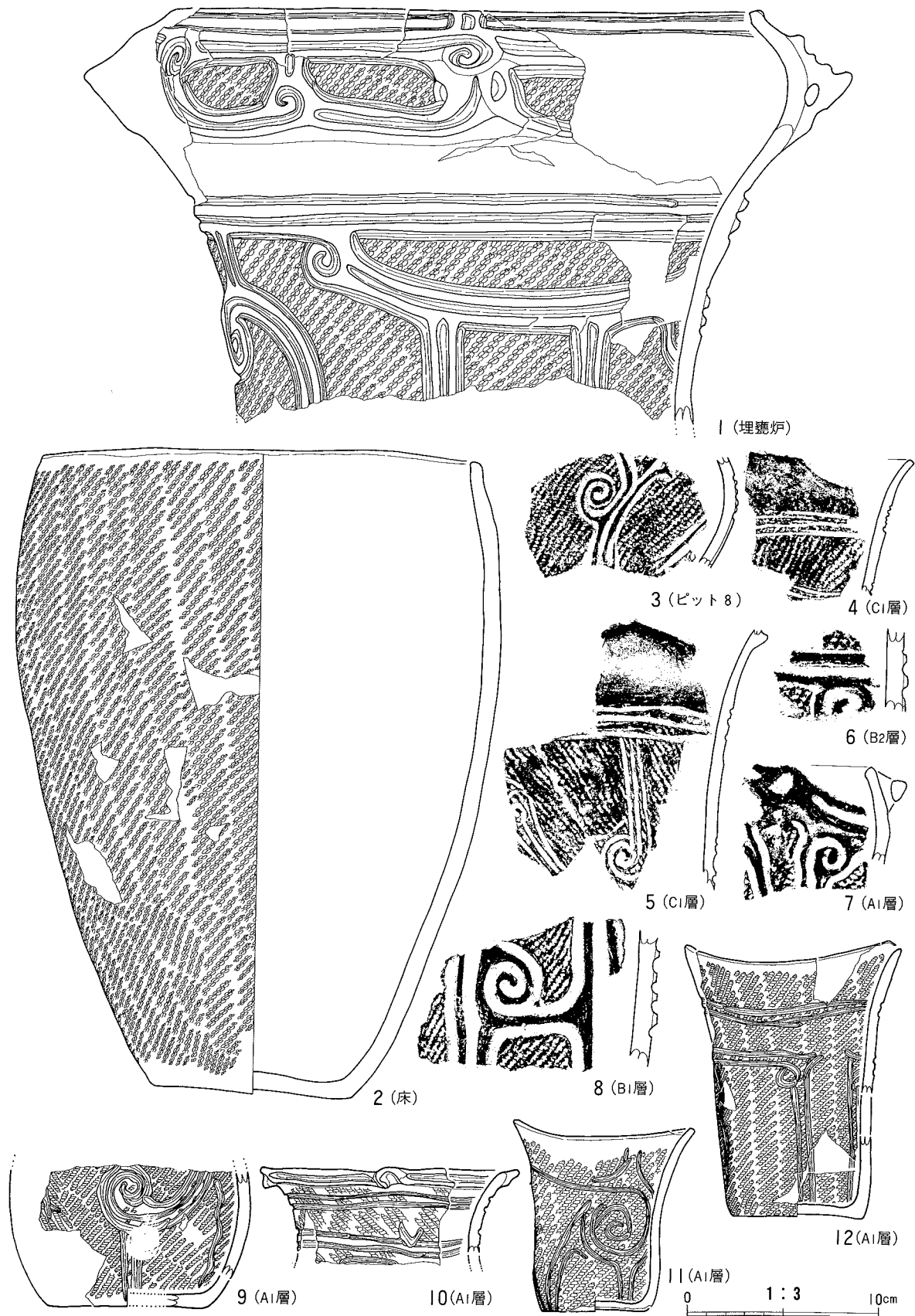
- 埋土** 自然堆積で、埋土(A'層)は黒褐色土を主体とする。
- 炉の状態** 未検出。
- 壁の状態** 検出面から床面までの深さは0.06~0.10mをはかる。壁は床面から直壁ぎみに立ち上がる。
- 床の状態** ほぼ平坦である。
- 柱穴** 床面上に2口(P38・39)のピットを検出している。床面からの深さはP38-0.13m、P39-0.34mをはかる。柱痕跡は認められず、埋土(B'層)は黒褐色土と黄褐色土の混合土である。
- 石器** (第81図54) 54は背面に自然面を残し、腹面と側面に調整を施した搔器である。側面の縁辺と腹面には光沢が見られる。

RA2222竪穴住居跡(第75・76図)

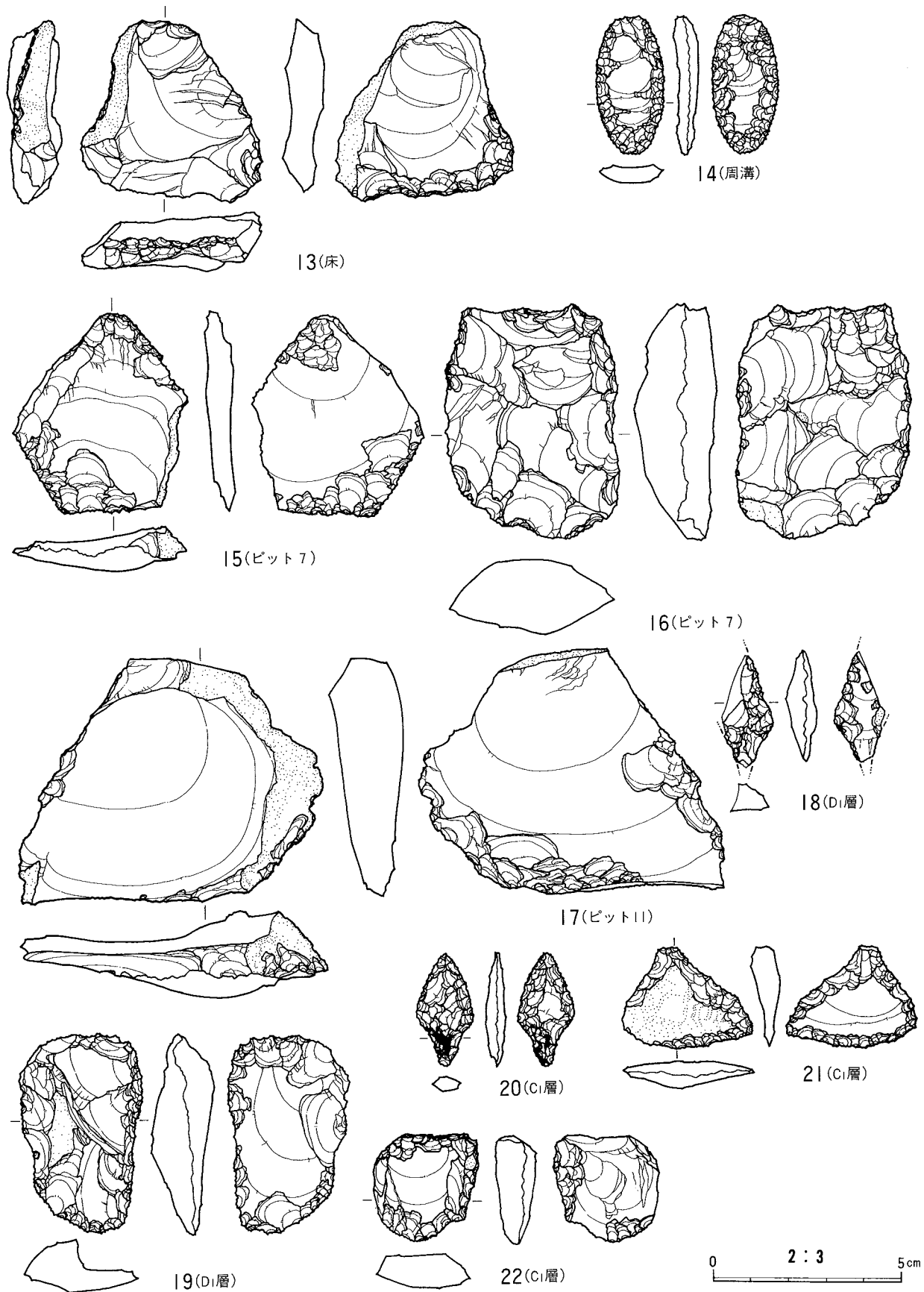
- 時期** 縄文時代中期(大木8a-1式期以前)。
- 位置** 調査区南西に位置する。 **平面形** 不明。
- 主軸方向** 不明。 **規模** 不明。
- 重複関係** RA2193・2197に切られる。
- 検出面** RA2193床構築土下面。 **埋土** 既に削平されている。
- 炉の状態** RA2193地床炉の北側に炉1基を検出している。平面形は長楕円形を呈しており西端はRA2206のピットに切られている。なお、

平面形北端に炉石を抜き取った様な浅いピット2口を検出しており石囲炉の可能性はある。規模は、長軸(東西)0.86m、短軸0.56m、熱浸透層は厚さ0.04m程で表層だけが強く焼けている。

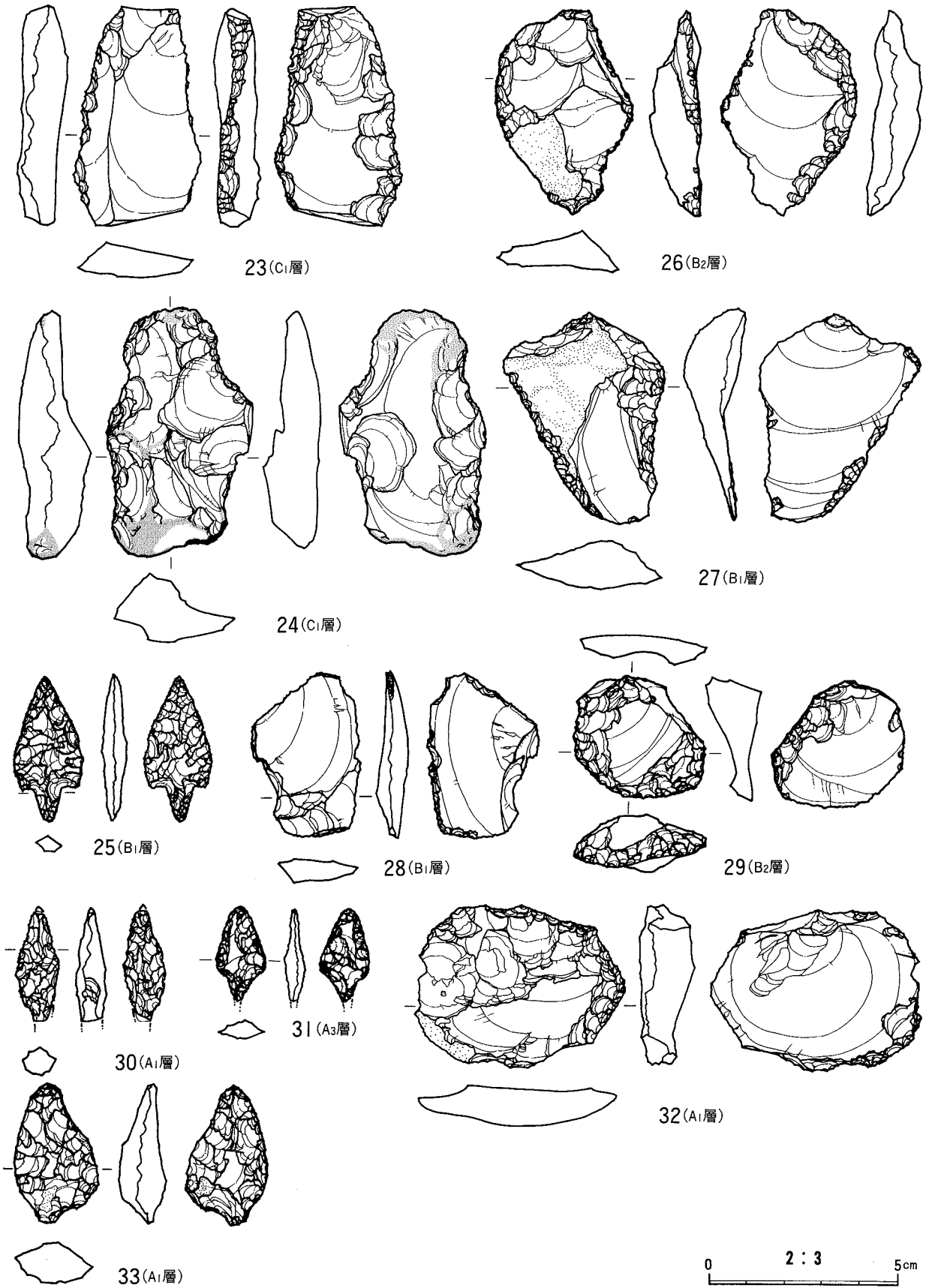
- 壁の状態** 既に削平されている。 **床の状態** 既に削平されている。
- 周溝** 平面形北西と南西に相当する位置に検出している。規模は幅0.10~0.20m、深さは0.05~0.15mをはかる。埋土は黒褐色土を基本としている。
- 柱穴** この住居跡にともなうピットとして1口(P40)のピットを検出している。検出面(RA2193床構築土下面)からの深さはP40-0.18mをはかる。柱痕跡は認められず黒褐色土を埋土としている。



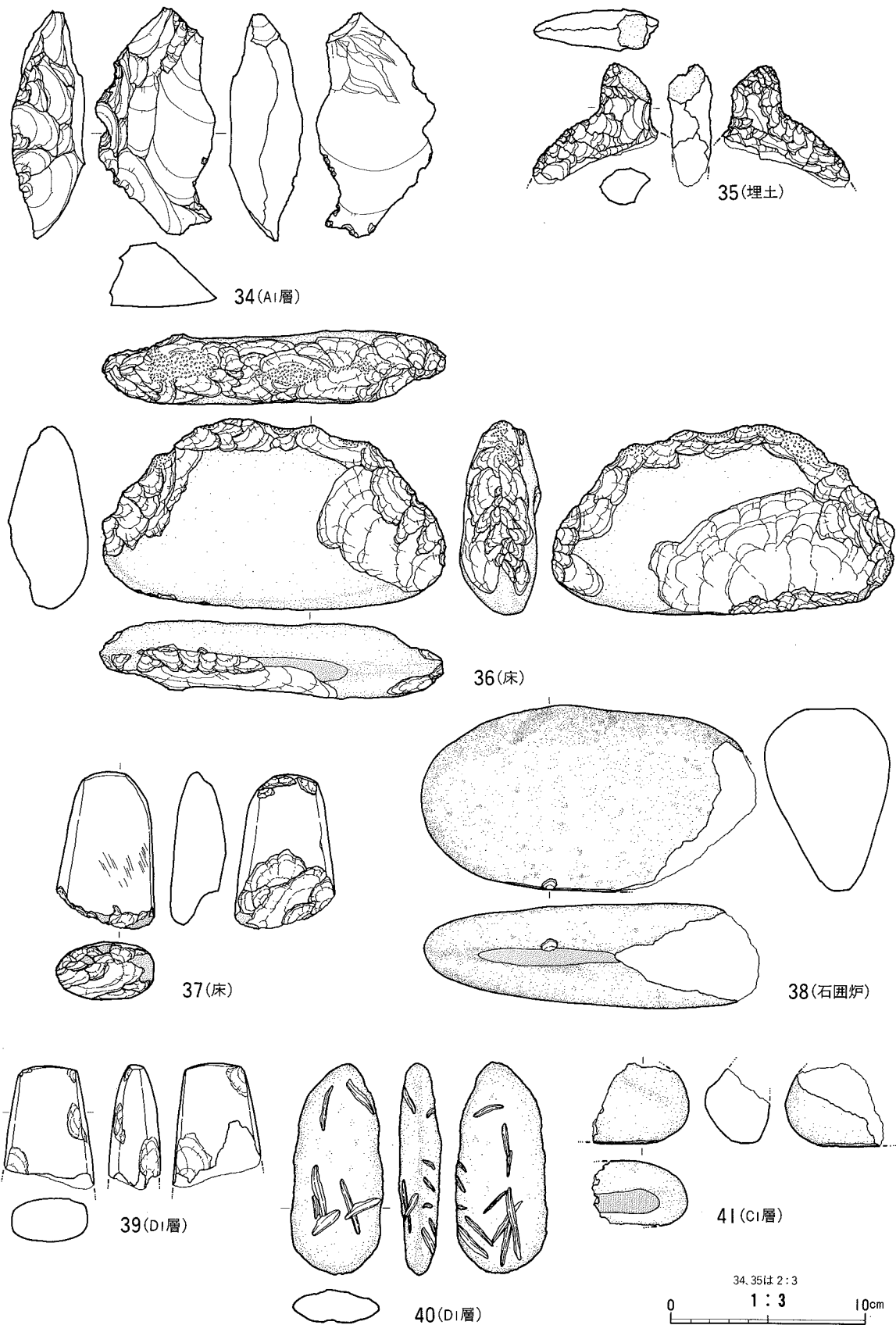
第77図 RA2193竪穴住居跡出土土器



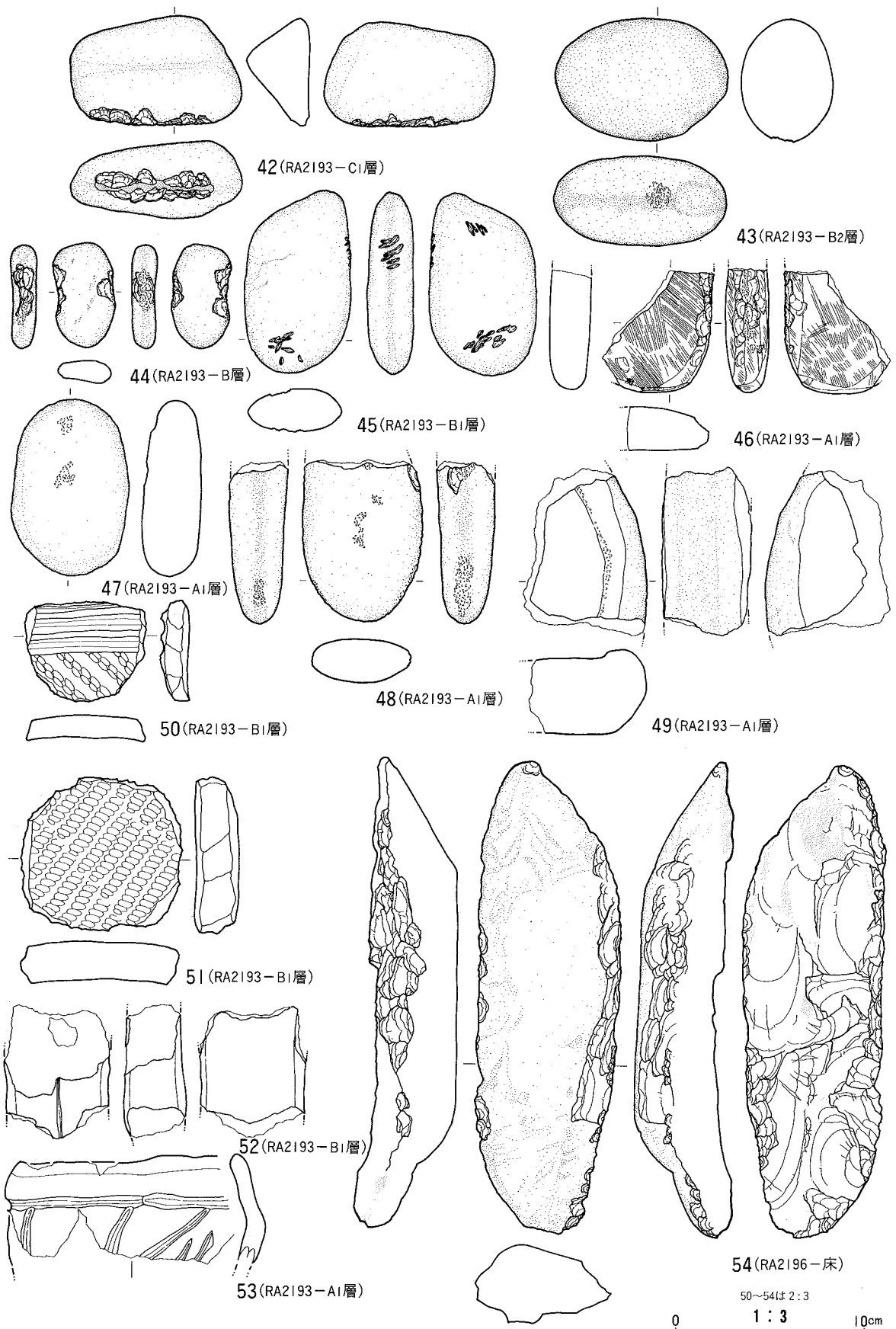
第78図 RA2193竪穴住居跡出土石器(1)



第79図 RA2193竪穴住居跡出土石器(2)



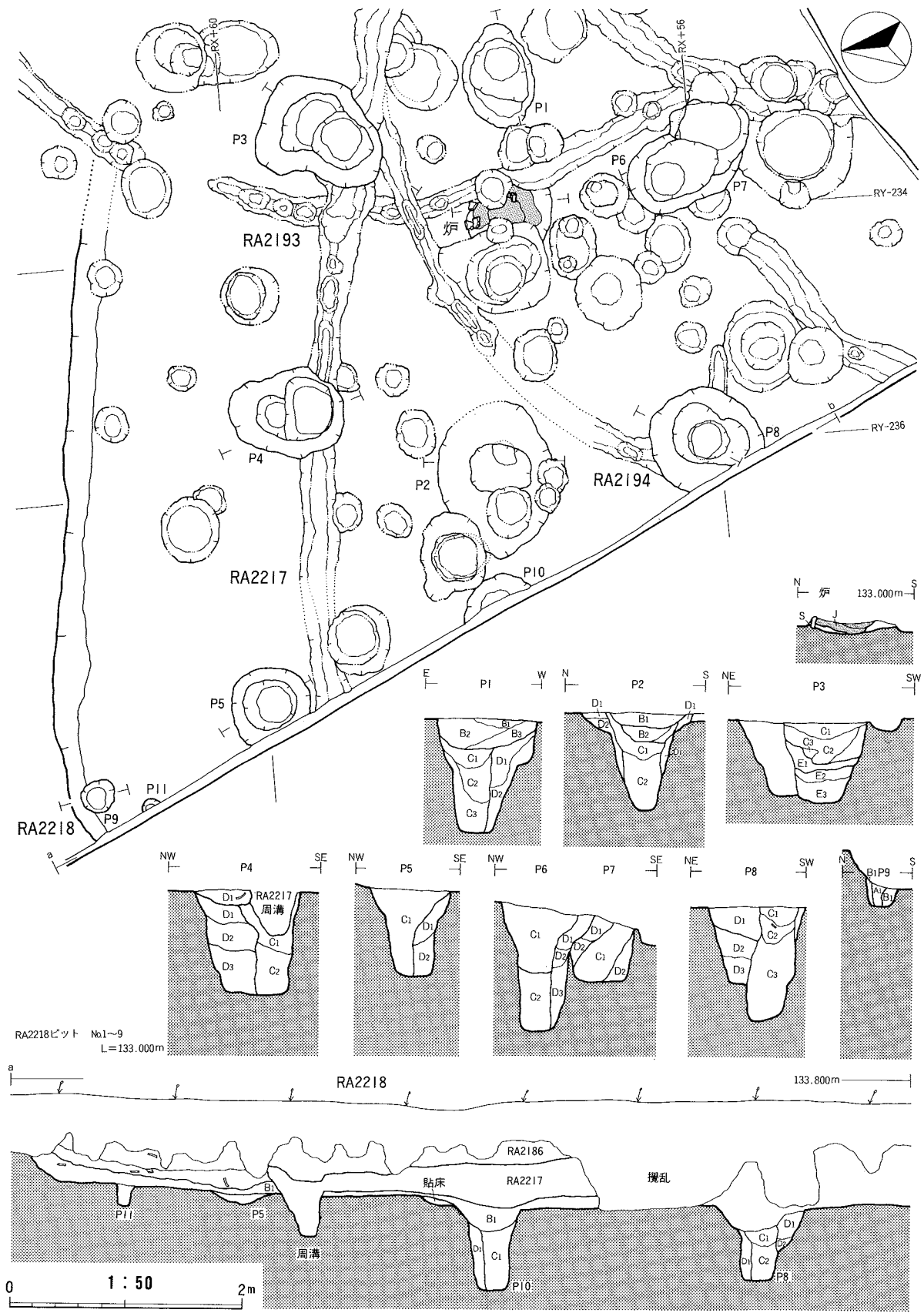
第80図 RA2193竪穴住居跡出土石器(3)



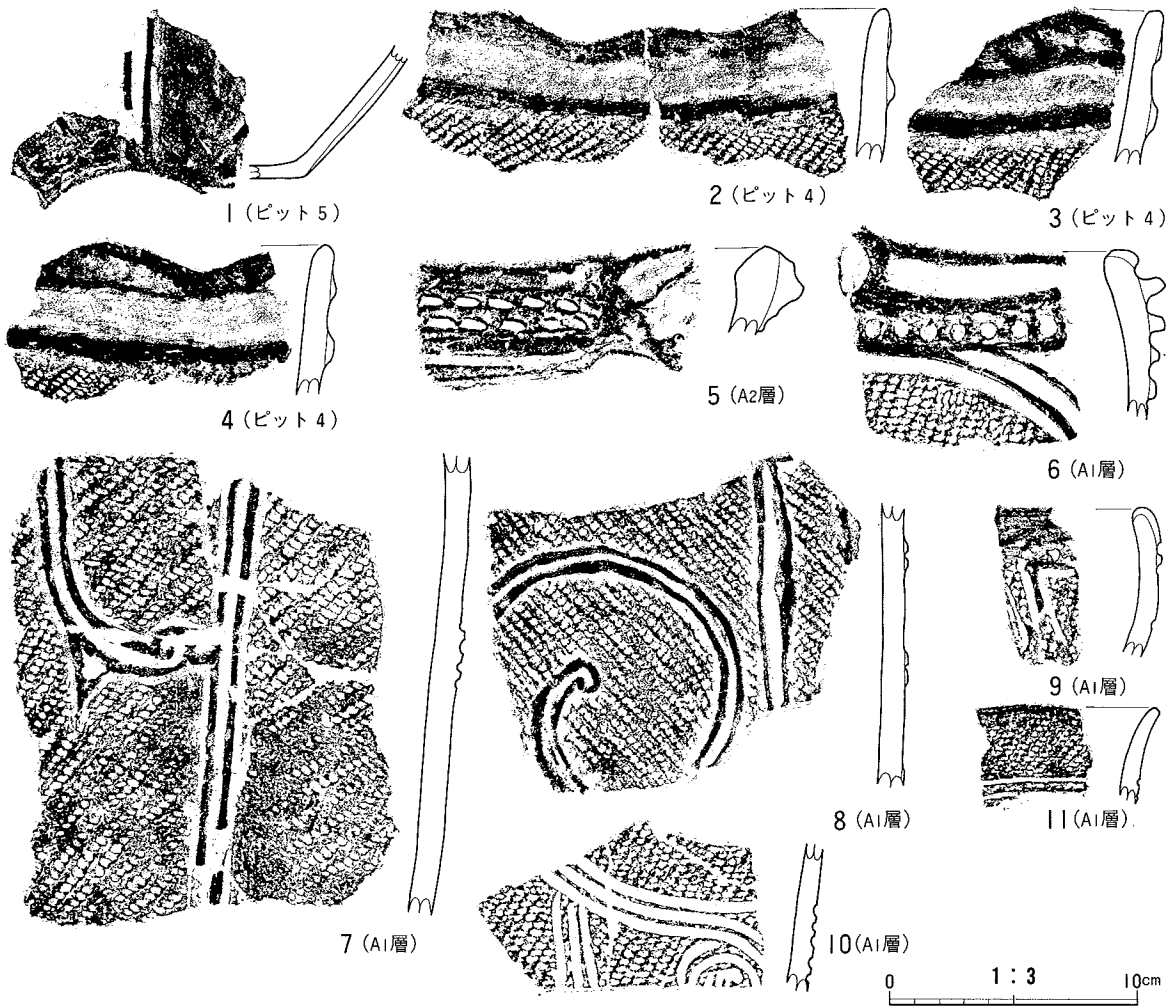
第81図 RA2193・2196竪穴住居跡出土石器・土製品

R A 2218 竪穴住居跡 (第82~85図)

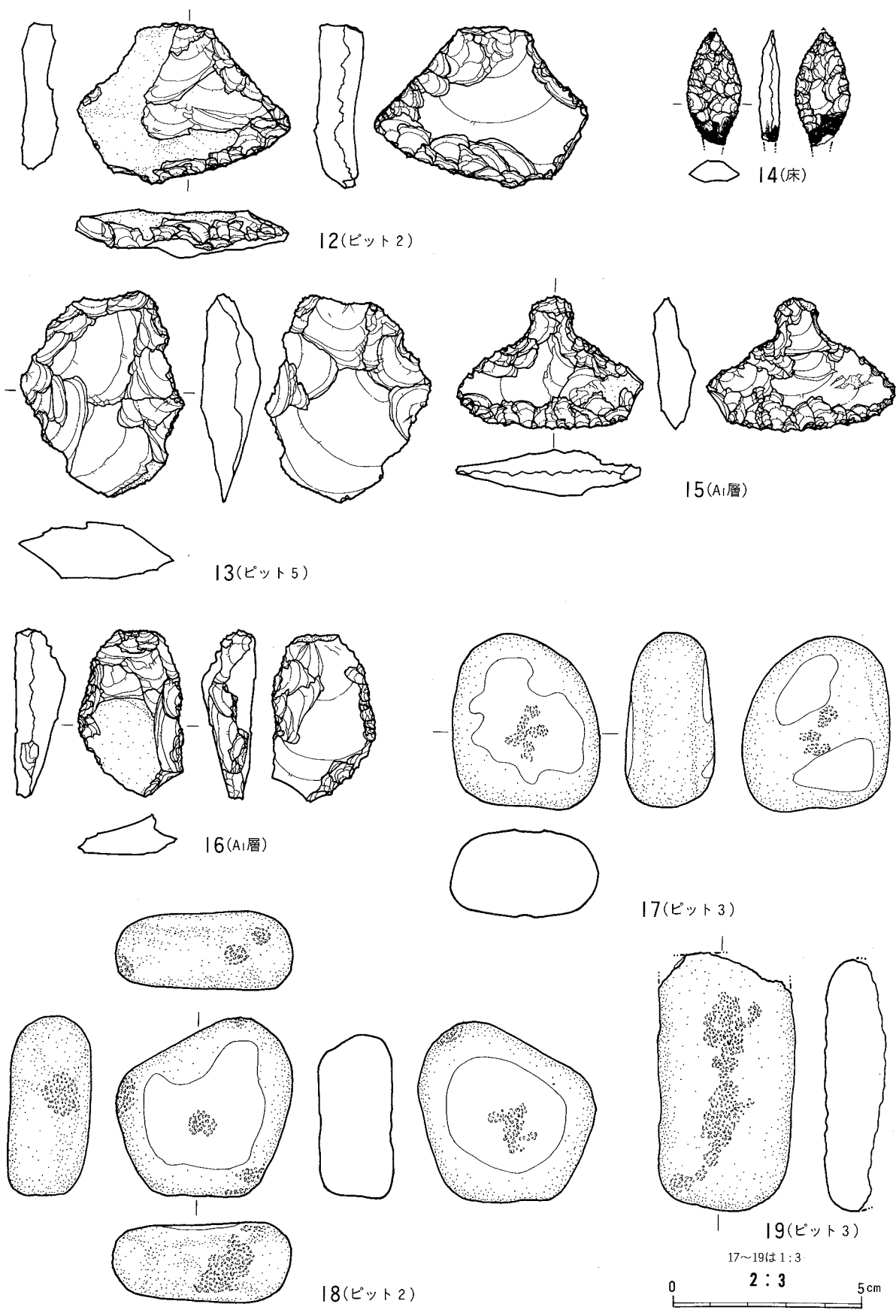
- 時期** 縄文時代中期 (大木 8 a - 2 式期以降、8 b - 1 式期以前)。
- 位置** 調査区南西に位置する。 **平面形** ほぼ長方形を呈する。
- 主軸方向** E 6° S を示す。
- 規模** 全体形の西半部は調査区外に広がっており、調査区内での規模は東西 (長軸) 約 7.0 m、南北約 6.55 m をはかる。なお、23 次で検出した R A 2121 が、2218 と同一遺構の可能性があり、その成果と主柱穴の配置から復元される規模は、東西 (長軸) 約 9.75 m、南北約 7.7 m をはかる。
- 重複関係** R A 2186・2193・2194・2195・2217 に切られ、R A 2197・2209、R E 2201 を切る。
- 掘込面** 既に削平されている。
- 検出面** 重複する住居跡の床面。
- 埋土** 自然堆積で層相の違いにより、A・B の 2 層に大別される。
A 層 - 粒~塊状の褐色土をやや多く混入する黒褐色土でスコリア・カーボン・焼土粒を少量含む。
B 層 - 塊状の褐色土を多く含むまりのよい黒褐色土でスコリア・カーボン・焼土粒を少量含む。
- 炉の状態** 東西中軸線上、床面中央から東寄りに石囲炉 1 基を検出している。平面形の西端を R A 2217、東端を R A 2194 のピットに切られているため全体形は不明である。南北 0.72 m で、自然円礫 5 個が残存している。熱浸透層は厚さ 0.09 m 程で、堅く焼けた火床面は 2 時期認められる。
- 壁の状態** 検出したのは北側だけで、床面から緩やかに立ち上がる。
- 床の状態** 床面が残存するのは R A 2193 より北側だけで、ほぼ平坦である。
- 柱穴** 床面上に 10 口 (P 1~10) のピットを検出しており、柱配置は亀甲形を呈する。床面及び検出面からの深さは P 1 - 0.97 m、P 2 - 0.83 m、P 3 - 0.68 m、P 4 - 0.90 m、P 5 - 0.74 m、P 6 - 1.08 m、P 7 - 0.55 m、P 8 - 0.98 m、P 9 - 0.16 m、P 10 - 0.68 m をはかる。柱痕跡は 0.30 m 程である。
- 土器 (第83図)** 1 は隆沈線による懸垂文が施された深鉢底部である。2~4 は小波状口縁をもつ深鉢口縁部で波状下には無文帯を設け、体部より R L 単節縄文を縦位に施すものである。5 は刺突が施される深鉢口縁部である。6 は口縁部に刺突が施される深鉢口縁部で、刺突下には隆沈線による大渦巻文が施され、地文には R L R 複節縄文が縦位に施される。7・8 は隆線による渦巻文・懸垂文が施される深鉢体部で、7 は R L 単節縄文、8 は L R 単節縄文が縦位に施されるものである。9 は口縁が内湾する深鉢で、隆沈線による渦巻文・懸垂文が施される。地文は R L R 複節縄文を縦位に施すものである。11 は外反する深鉢口縁部で、R L R 複節縄文が縦位に施される。10 は沈線による渦巻文・懸垂文が施される深鉢体部で、R L R 複節縄文を縦位に施している。
- 石器 (第84・85図20~22)** 12 は搔器、13 は両面調整石器である。13 は両面を亀甲形に調整している。14 は凸基有茎鏃で、基部にアスファルトの付着が見られる。15 は横型の石匙、16 は削器である。17・18 は磨石とともに敲打痕を伴い、19 は凹石である。20・21 は敲打磨石である。いずれも剥離整形を行っている。21 は破損後、その面も敲打磨面として使用している。22 の敲石は、長礫の中央部に浅い敲打痕がある。
- 土製品 (第85図23~25)** 23 はミニチュア土器、24 は土製円盤である。25 は大半を欠損する土偶である。裏面には短沈線により鋸歯状の文様が施され、上部に二箇所穿孔されている。
- 石製品 (第85図26)** 26 は上下を欠損しているが、全面が平滑に丁寧に研磨され、穿孔されていることから垂飾品と考えられる。



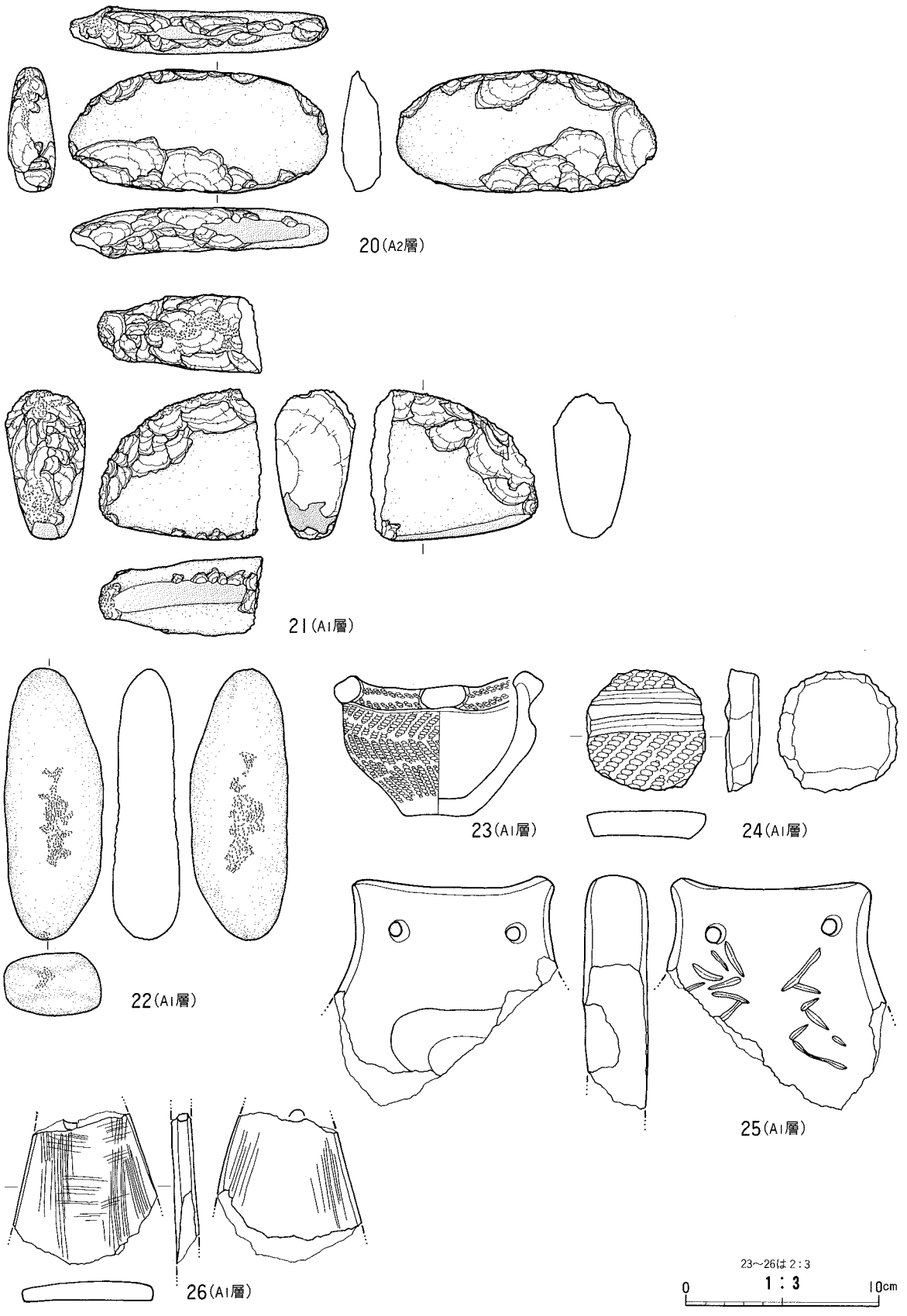
第82図 RA2218 竖穴住居跡



第83図 RA2218 竪穴住居跡出土土器



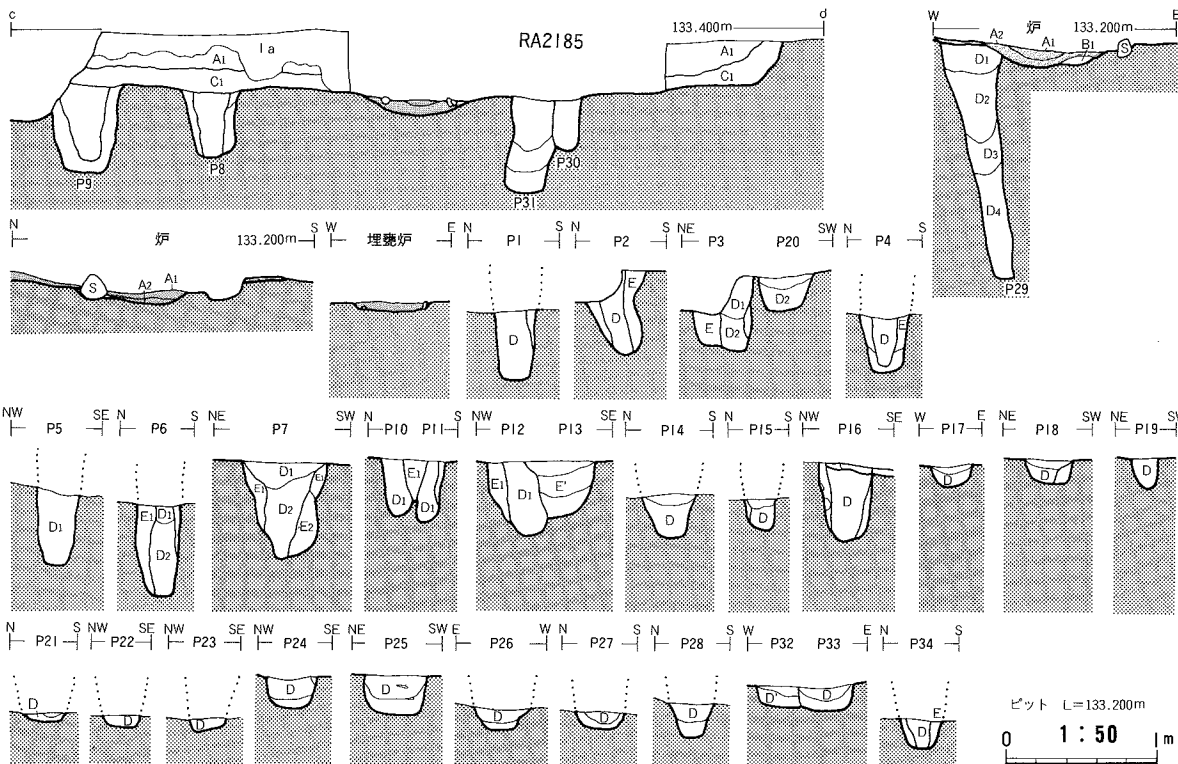
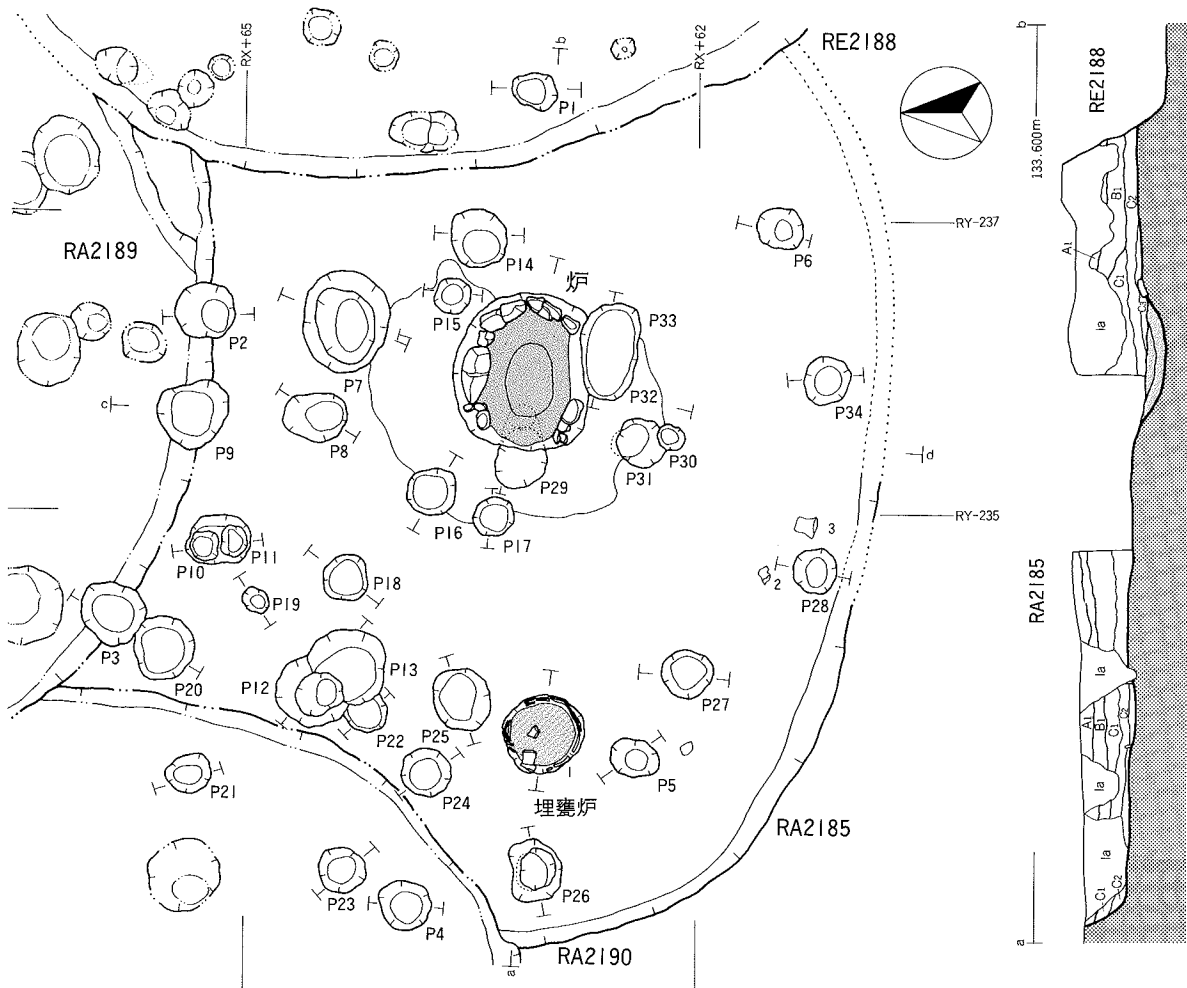
第84図 RA2218 竪穴住居跡出土石器(1)



第85図 RA2218竪穴住居跡出土石器(2)・土製品・石製品

RA2185竪穴住居跡（第86～97図）

- 時期** 縄文時代中期（大木8b-3式期）。 **位置** 調査区西半部の中央に位置する。
- 平面形** 長楕円形を呈する。 **検出面** 耕作土（Ia層）直下。
- 主軸方向** P1と石囲炉、さらにP29と埋甕炉とP26を主軸とした場合、E1°Nを示す。
- 規模** 重複する遺構により切られるが、東西6.2m、南北4.7m程である。
- 重複関係** RA2188・2189に切られ、RA2190・2193・2197・2218、RE2201、RD2142・2143・2150を切る。
- 埋土** 自然堆積でA～Cの3層に大別される。各層ともしまりはさほど良くない。
A層—粒状の褐色土とスコリアを微量に混入する黒褐色土。
B層—塊状の黒褐色土をやや多く混入する暗褐色土。
C層—粉～粒状の褐色土をわずかに混入する黒褐色土。
- 炉の状態** 東西中軸線上でやや東寄りに石囲炉1基、西端の床面上に埋甕炉1基を検出している。石囲炉は自然円礫15個を楕円形に配置している。規模は長軸（東西）1.04m、短軸（南北）0.90mをはかる。熱浸透層の厚さは0.13mで堅く焼けている。埋甕炉は直径0.54mのピットに深鉢を埋設している。このピットの深さは床面から0.05mと浅いが甕内部は堅く焼けている。
- 壁の状態** 壁が残存しているのは平面形南西側だけで、床面から緩やかに立ち上がる。
- 床の状態** 部分的に起伏があるものの平坦である。
- 柱穴** 床面上に34口（P1～34）のピットを検出している。このうち、支柱穴を構成するピットはP1・8・12・26・27・29・31の7口で、亀甲形の配置である。なお、P1・26と最も深いP29は棟持柱を構成するものとみられる。P1・4・5・6・14・15・21～23・26～28・34の13口は重複する竪穴住居跡の床面で検出している。各ピットの床面からの深さ、及び復元される深さはP1—0.74m、P2—0.55m、P3—0.49m、P4—0.64m、P5—0.74m、P6—0.88m、P7—0.62m、P8—0.42m、P9—0.57m、P10—0.36m、P11—0.39m、P12—0.49m、P13—0.37m、P14—0.49m、P15—0.44m、P16—0.49m、P17—0.13m、P18—0.15m、P19—0.20m、P20—0.22m、P21—0.30m、P22—0.33m、P23—0.36m、P24—0.18m、P25—0.27m、P26—0.36m、P27—0.33m、P28—0.40m、P29—1.56m、P30—0.33m、P31—0.60m、P32—0.15m、P33—0.16m、P34—0.44mをはかる。
- 土器（第87図）** 1～3・5は口縁が大きく外反し、外反部に無文帯を設ける小形深鉢である。2・3は無文帯と体部文様帯間に刺突列を施し、1・5は沈線によって区切られるものである。1は中央部に渦巻文を施し、渦巻から隆沈線を垂下させるものである。2・3は有棘渦巻文から隆沈線を垂下させるものである。4は口縁が内湾する深鉢上半部である。口縁には1条の刺突列が施され、体部には隆沈線による小渦巻文・大渦巻文が施される。6は口縁が大きく外反し、外反部から文様が施文されるものである。体部には隆沈線による連結文・渦巻文と渦巻文から垂下する懸垂文から構成される文様帯である。7・8は口縁に刺突列を施す深鉢口縁部で、隆沈線による渦巻文が施される。9・10は沈線による円文・懸垂文が施される深鉢体部である。11は台部に孔をもつ器台で、上盤部が台部より張り出すものである。12は口縁が内湾する浅鉢で、口縁部文様帯には隆沈線による円文・楕円区画文が交互に施文される。13は口縁が内湾する浅鉢で、口縁部文様帯には隆沈線による渦巻文・楕円区画文が交互に施文される。14は体部下半部が膨らむ深鉢で、隆沈線による大渦巻文を中心に小渦巻文を連結させるものである。15・22は口縁が内湾する深鉢で、体部文様帯



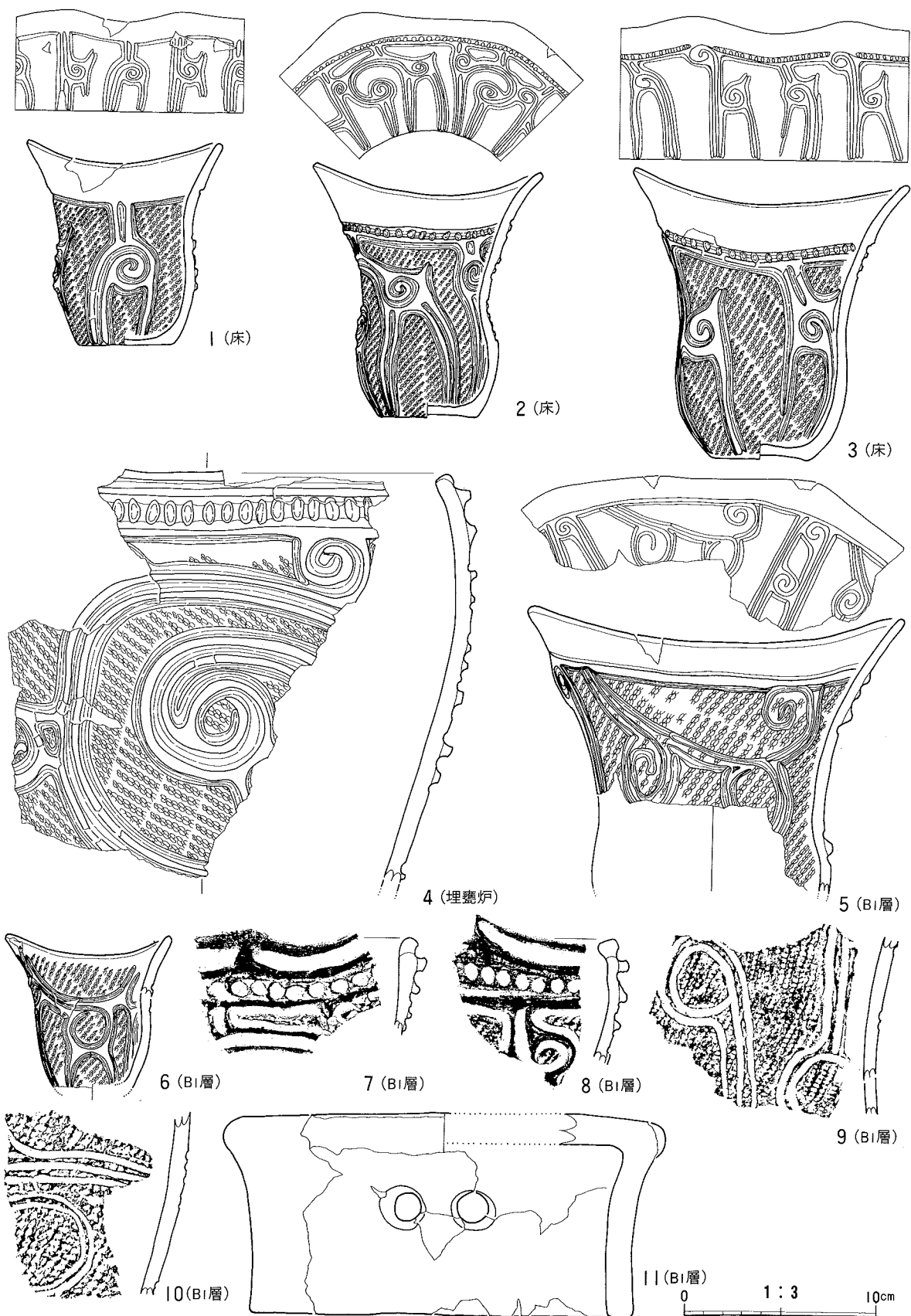
第86図 RA2185竪穴住居跡

上部に隆沈線による小渦巻文を配し下半に懸垂文を施す。16は渦巻状把手をもつキャリパー形深鉢で、口縁部文様帯の把手間には刺突列、体部には隆沈線による有棘渦巻文を大胆に描く。

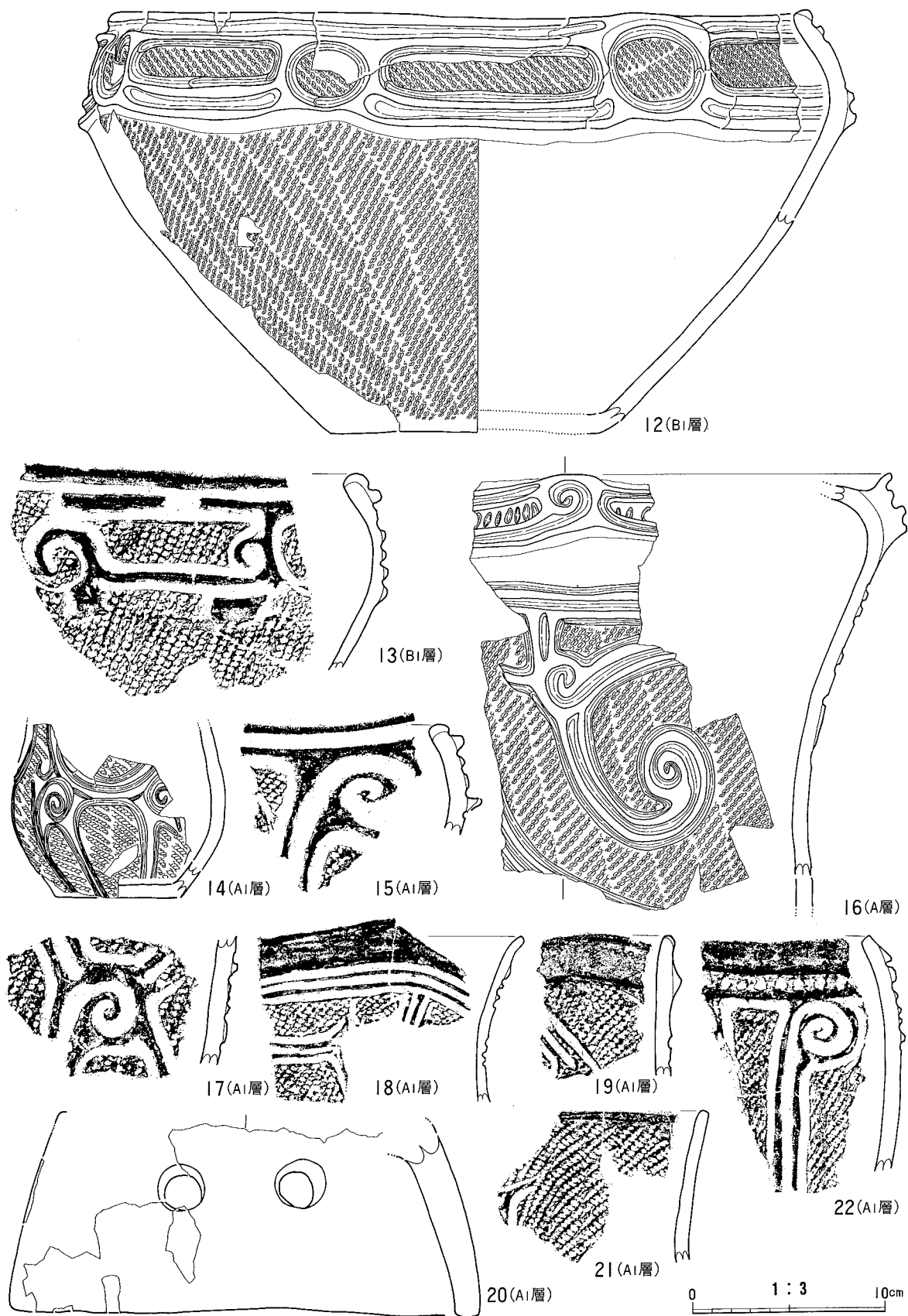
石器 (第89～96図) 23・24は籠状石器である。23は腹面から基部を欠損している。刃部は弧状を呈し、背面は特にフルーティングが発達している。24は横長剥片を用いてその主要剥離面の縁辺を刃部としたトランシェ様の籠状石器である。25は凹基無茎鏃で背面先端から左側辺にかけて大きく破損している。26はつまみ部の調整がされていることから石匙である。この石匙の刃部となる底辺は、素材剥片の末端であるがもともと小形の剥片を用いて製作されている。27・29は削器で、29は剥片というよりはチップを素材としたもので、湾曲が激しいが、腹面左側辺に調整を加え刃部としている。28の搔器は背面の凸面を剥ぎ取り、打面を除去し、刃部を背面と直交する角度に作出していることから、着柄の可能性も考えられる。30の両面調整石器は、部分的に古い剥離面を残しているため利器としての使用には適さず、製作途上のものと思われる。31は楔形石器、32は両面調整石器である。33は削器で打面調整が行われ、バルブを除去し、鋭利な末端に調整を加えたものである。34・35は搔器で、35は板状に剥離しやすい石質のために、刃部の破損が激しく背面右側辺には敲打痕がある。打製よりも磨製石器とした方に適した石材である。36は籠状石器で刃部を破損している。37は石核で、ある面を打面として完全に使用した後で次の面に移る方法で剥片剥離作業がおこなわれている。38・39は凸基有茎鏃で、38は周縁調整され、鏃身下半部から基部へはゆるやかに移行している。39は基部付近にアスファルトの付着があり、平面で稜線の出入りが激しい。40は断面三角形の石錐で、機能部である錐部はわずかな残存である。41は縦型の石匙で、二側辺に調整が施されており、つまみ部は平面形がほぼ円形に整えられている。42～45は削器である。42は背面右側辺が刃部である。44は末端に残った自然面とその裏側の腹面を調整している。46・47は籠状石器で、46の刃部は急斜度調整により作出されている。47は残存部がわずかで、基部と刃部を欠損する。48は両面調整石器の一部で未成品が破損したものである。49～51は石核で、自然面を多く残しているが、打面はほぼ固定されている。

52は敲打磨石で、平坦な表裏面には敲打痕と溝状の条痕をもち、また破損した面を敲打磨面として使用している。敲打磨面には小剥離を伴う。53は礫器で、直線状に作出した刃部は稜がややつぶれている。縁辺ほど細かい剥離が多い。54は全面磨面の磨石であり、裏面は平坦である。55は凹石で、両面ともに範囲の大きな凹み部が形成されている。凹部は中央部分ほど深さのある摺鉢状を呈する。56は砂岩製の砥石であり、細かい碎屑物を多量に含んだ石材を有効に使用している。57～59は磨製石斧である。57の表面には敲打整形時に深く敲打した部分が、研磨されてほかの面よりもやや低く残っている。58は側面に自然面を残している。60は礫の片面に刃部を作りだした礫器である。61の礫器は粗割りの後に刃部を調整したものであるが、剥離面・稜ともにかなり摩滅している。62は敲打磨面はないが剥離整形され、底面には敲打痕が形成されていることから敲打磨石である。63は磨石、64は砥石、65は石皿で、63には全周をめぐる敲打痕が形成されている。64は全面に溝状の条痕が見られる。65の裏面には摺鉢状の凹が形成されている。

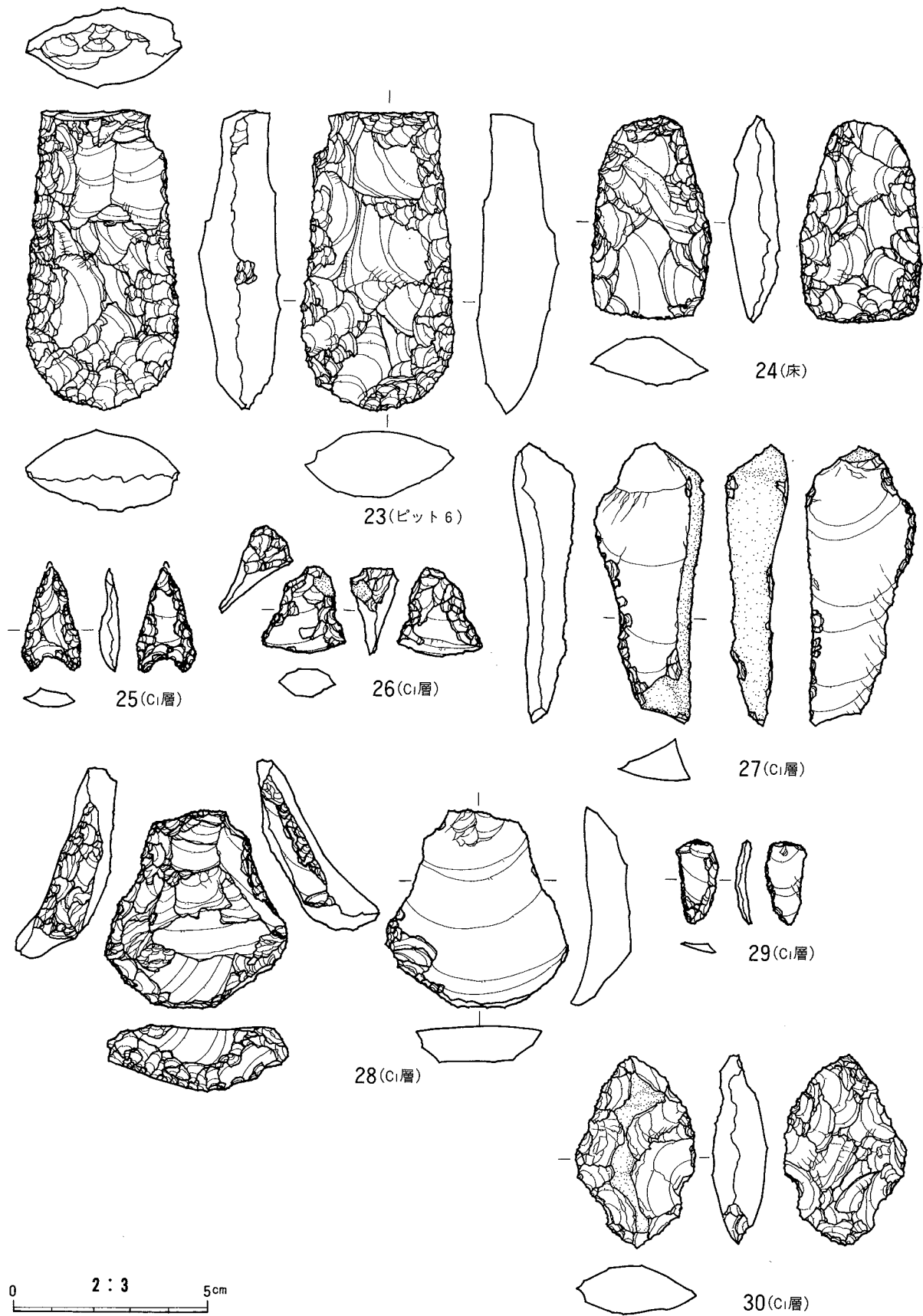
土製品 (第97図) 66は楕円形の土器で、底部は平底、長軸上に突起がある。67は土偶の上腕部で、沈線と刺突文が配される。68は土製円盤、69・70は土玉である。71・73も土製円盤、72は有孔土製品である。71は断面形がやや湾曲し、表面に調整痕があるのが特徴である。72は横位に沈線が施されている。74は土偶の上腕部、75は土製円盤、76は土偶の肩を含む上半部の破片である。



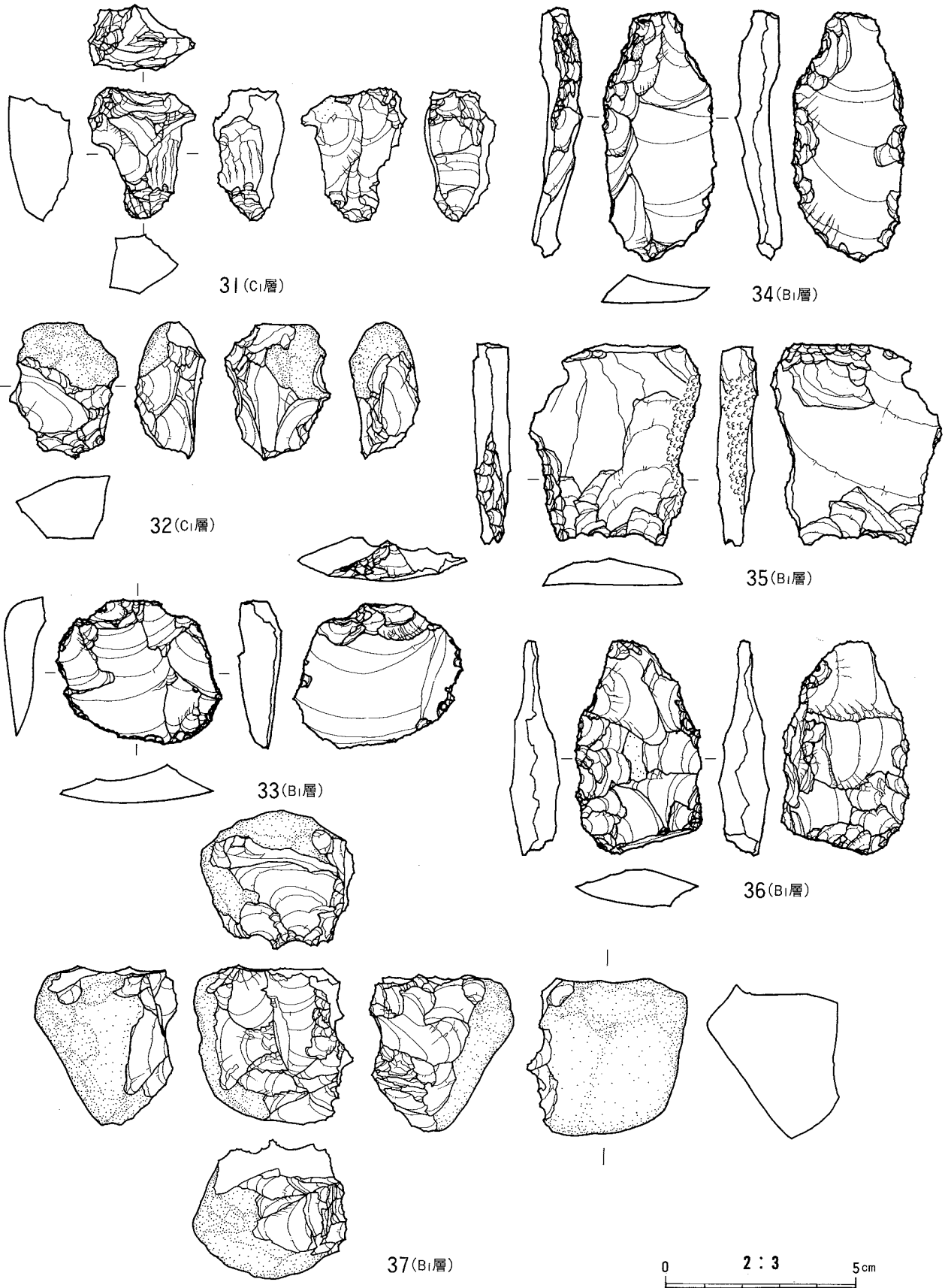
第87图 RA2185竖穴住居跡出土土器(1)



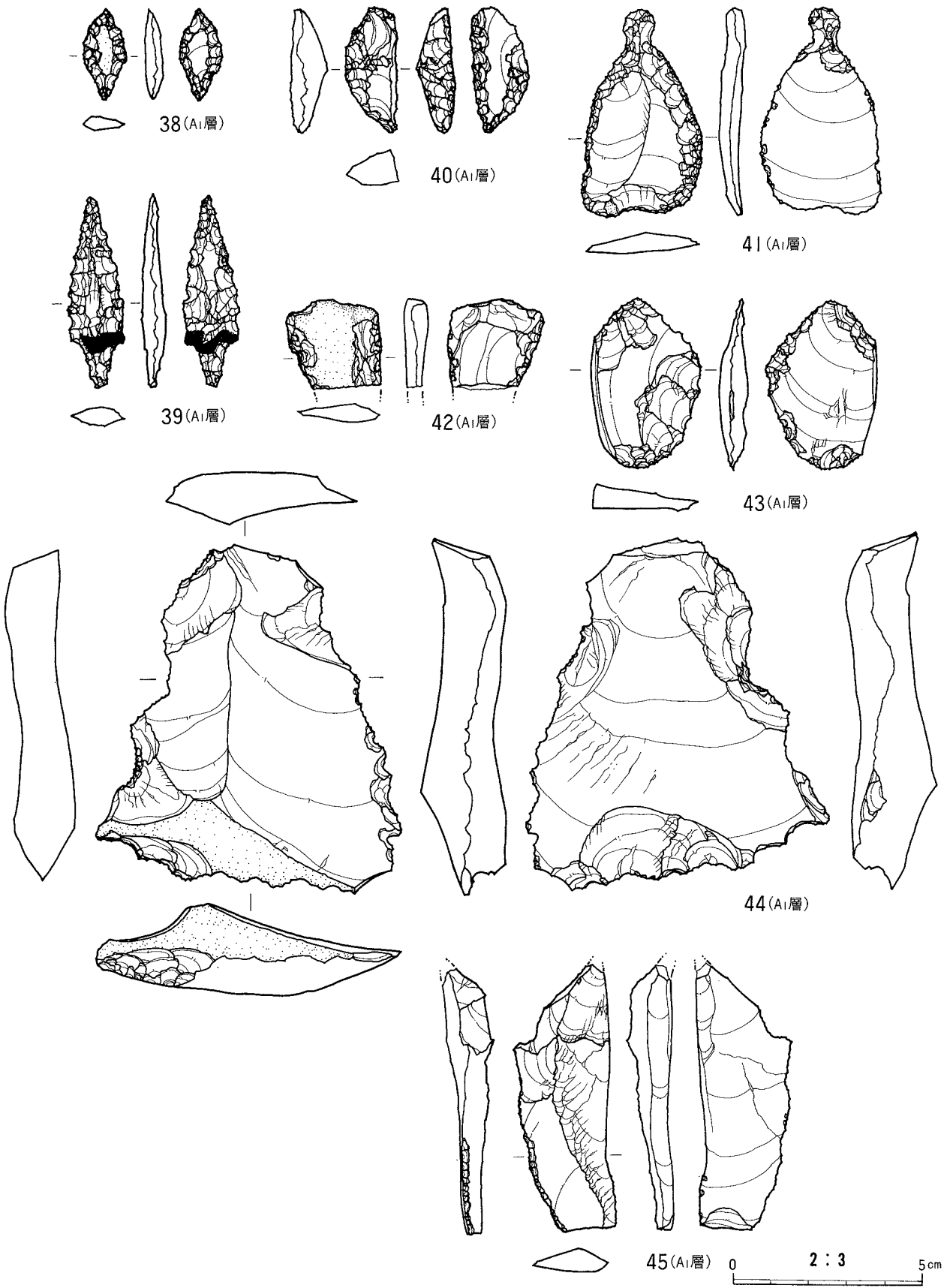
第88圖 RA2185豎穴住居跡出土土器(2)



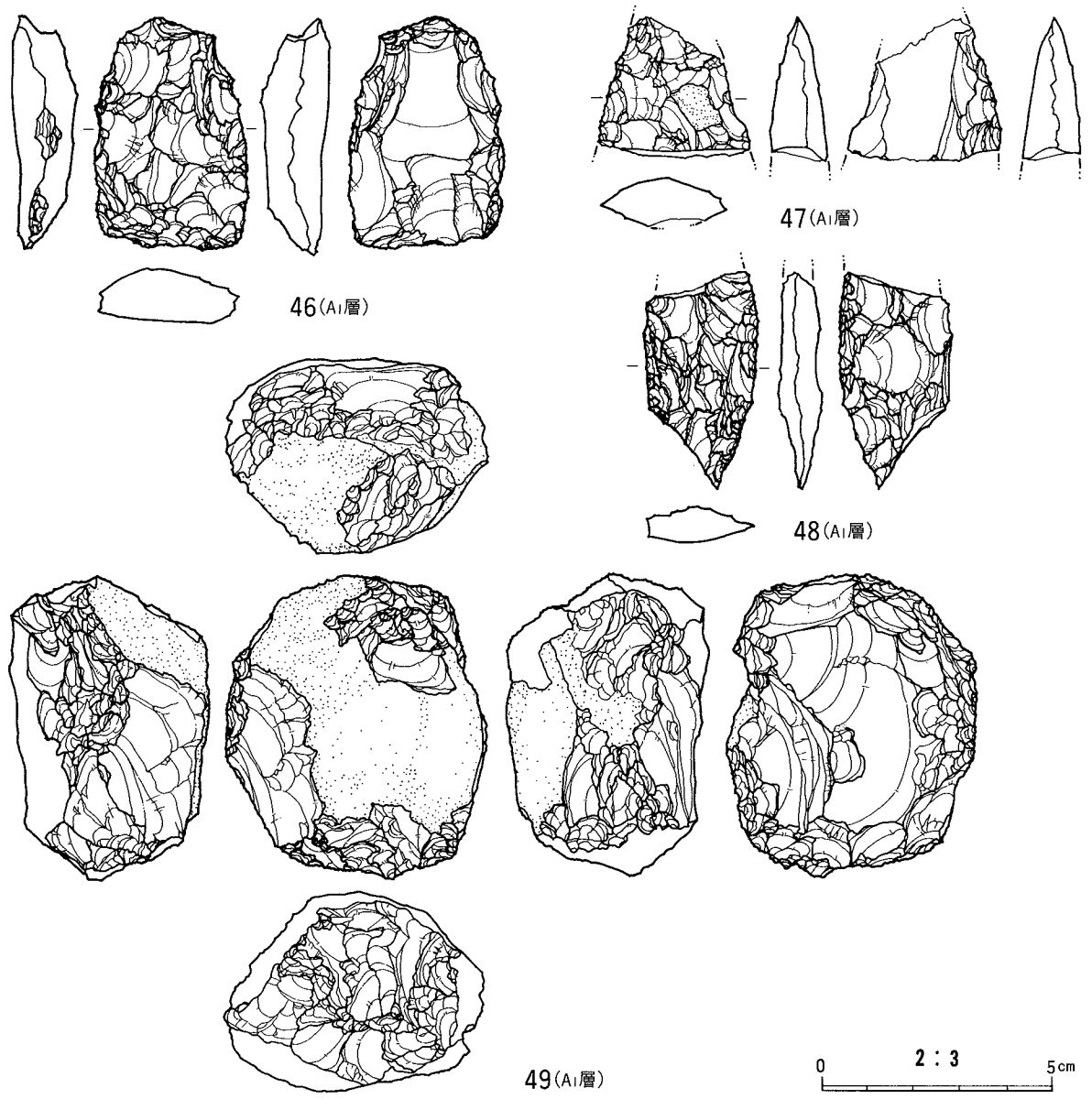
第89図 RA2185竪穴住居跡出土石器(1)



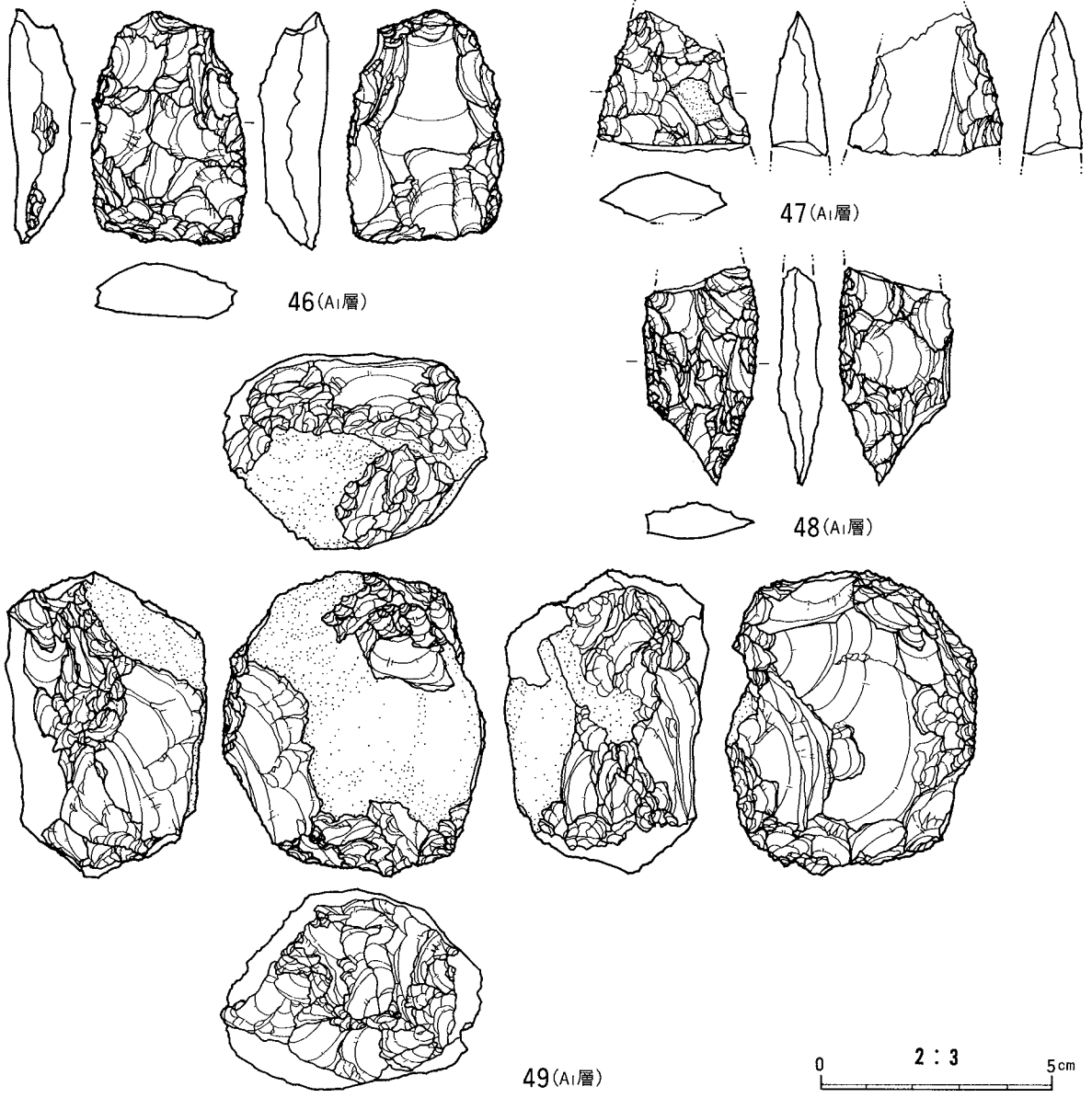
第90図 RA2185竪穴住居跡出土石器(2)



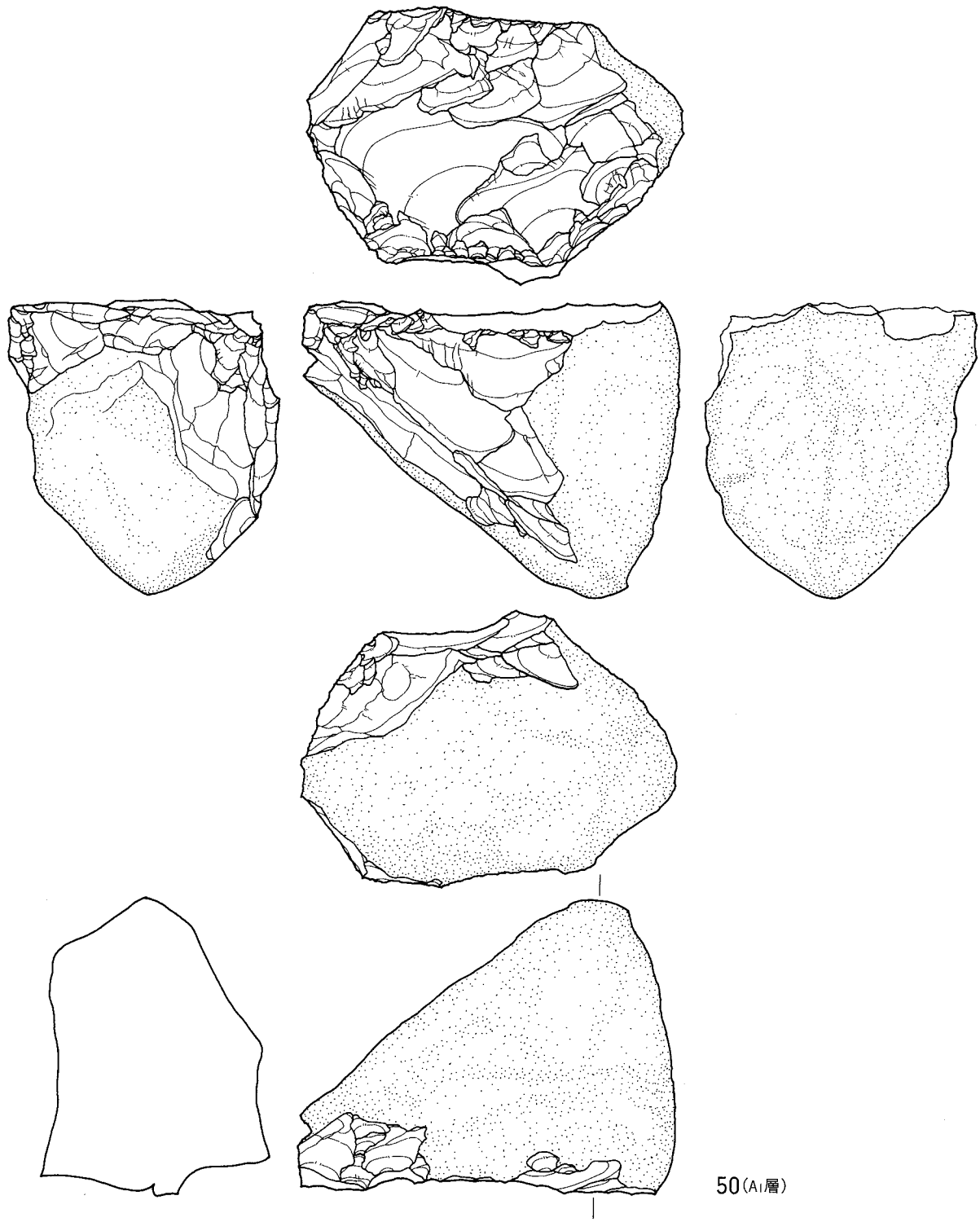
第91图 RA2185竖穴住居跡出土石器(3)



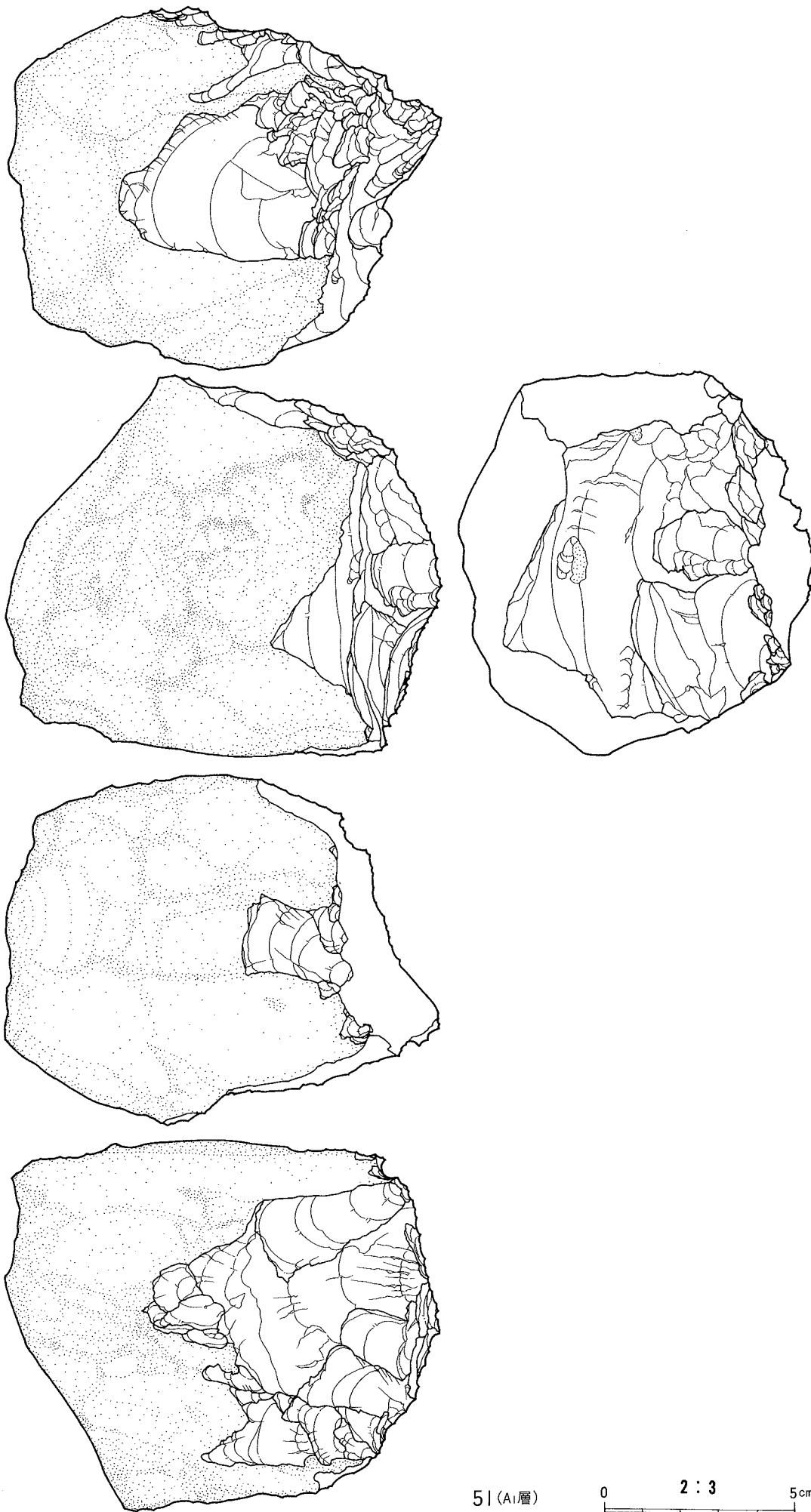
第92図 RA2185 竪穴住居跡出土石器(4)



第92図 RA2185豎穴住居跡出土石器(4)

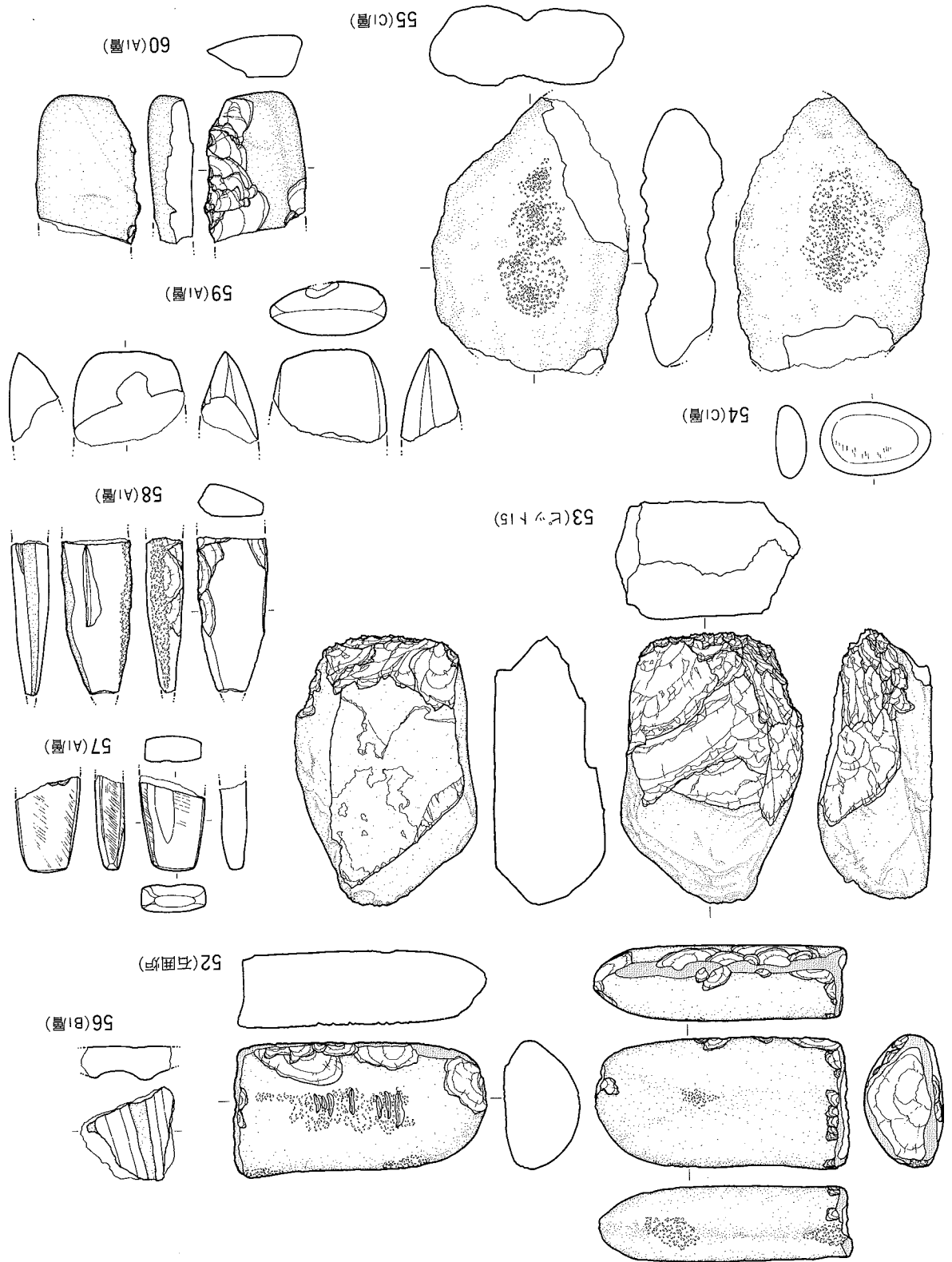


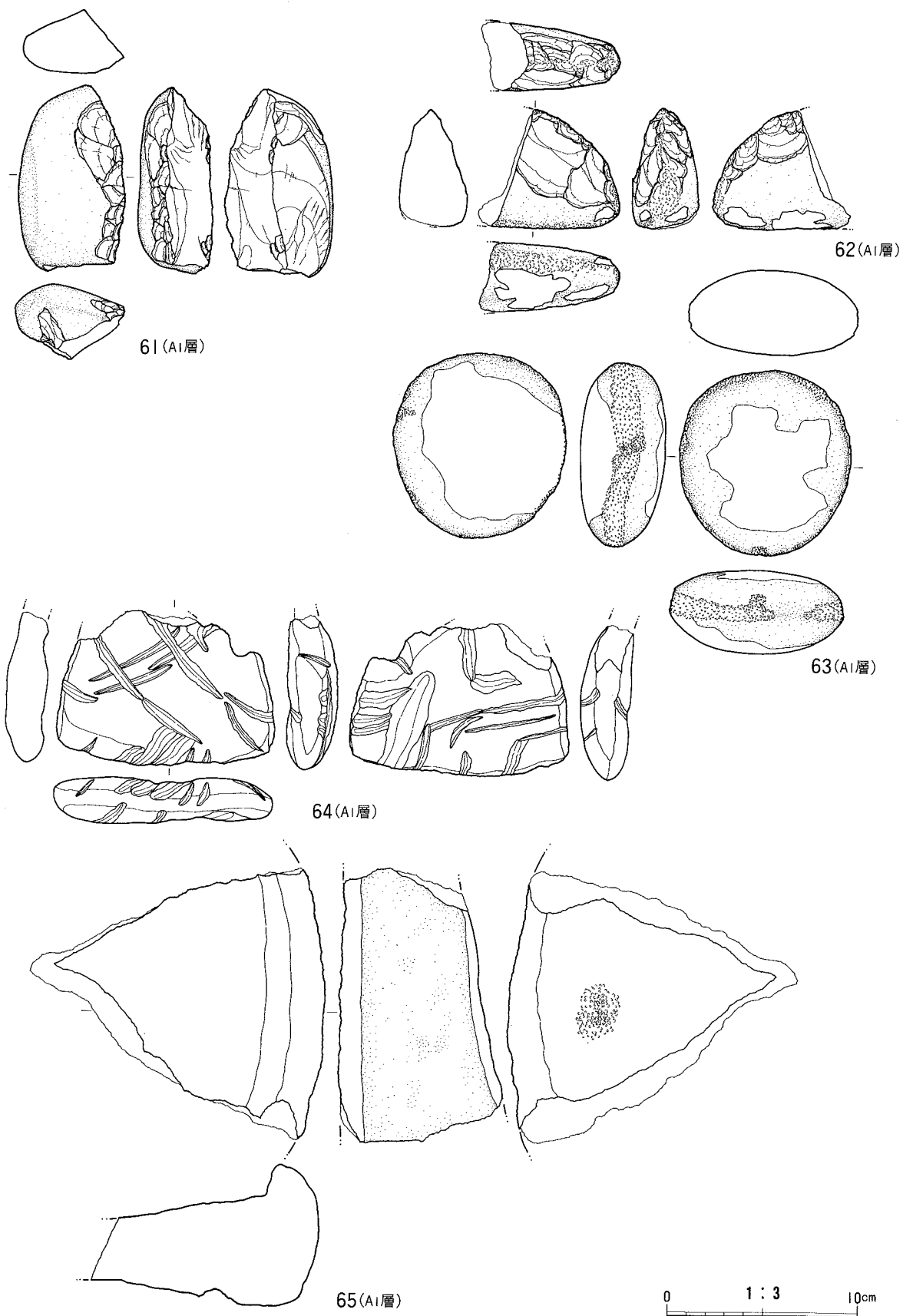
第93図 RA2185豎穴住居跡出土石器(5)



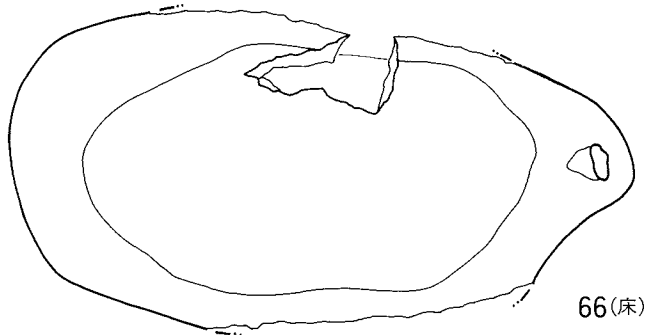
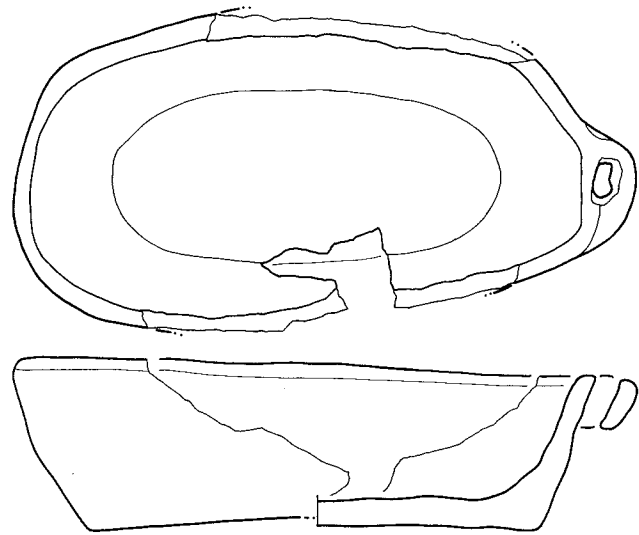
第95図 RA2185嬰穴住層跡出土石器(7)

0 1 3 10cm

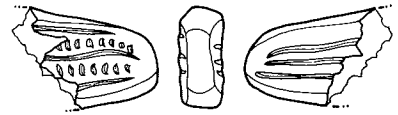




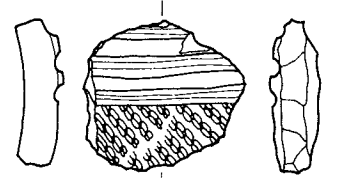
第96図 RA2185竪穴住居跡出土石器(8)



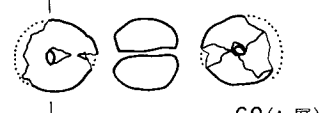
66(床)



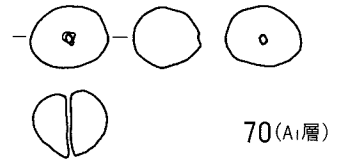
67(C2層)



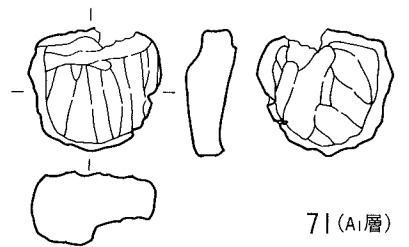
68(B1層)



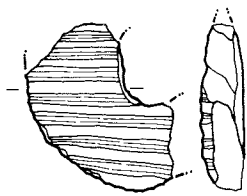
69(A1層)



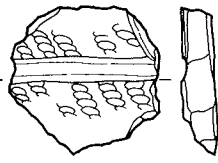
70(A1層)



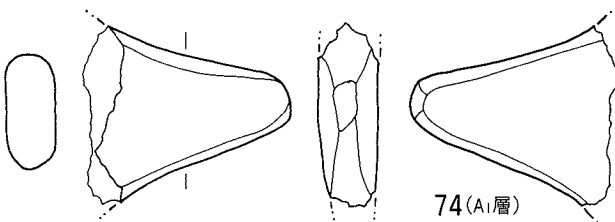
71(A1層)



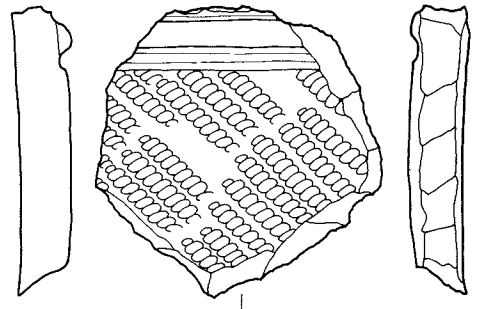
72(A1層)



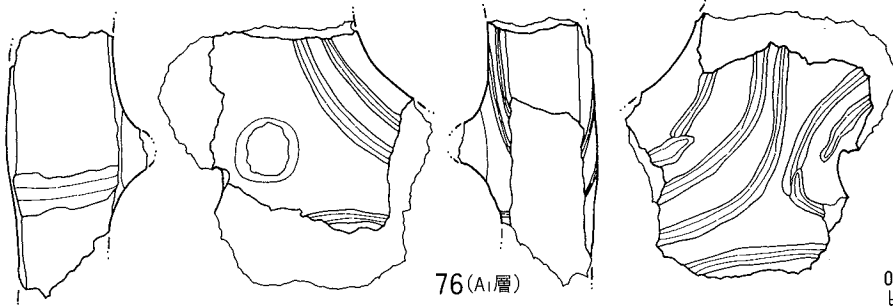
73(A1層)



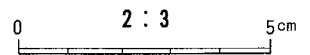
74(A1層)



75(A層)



76(A1層)



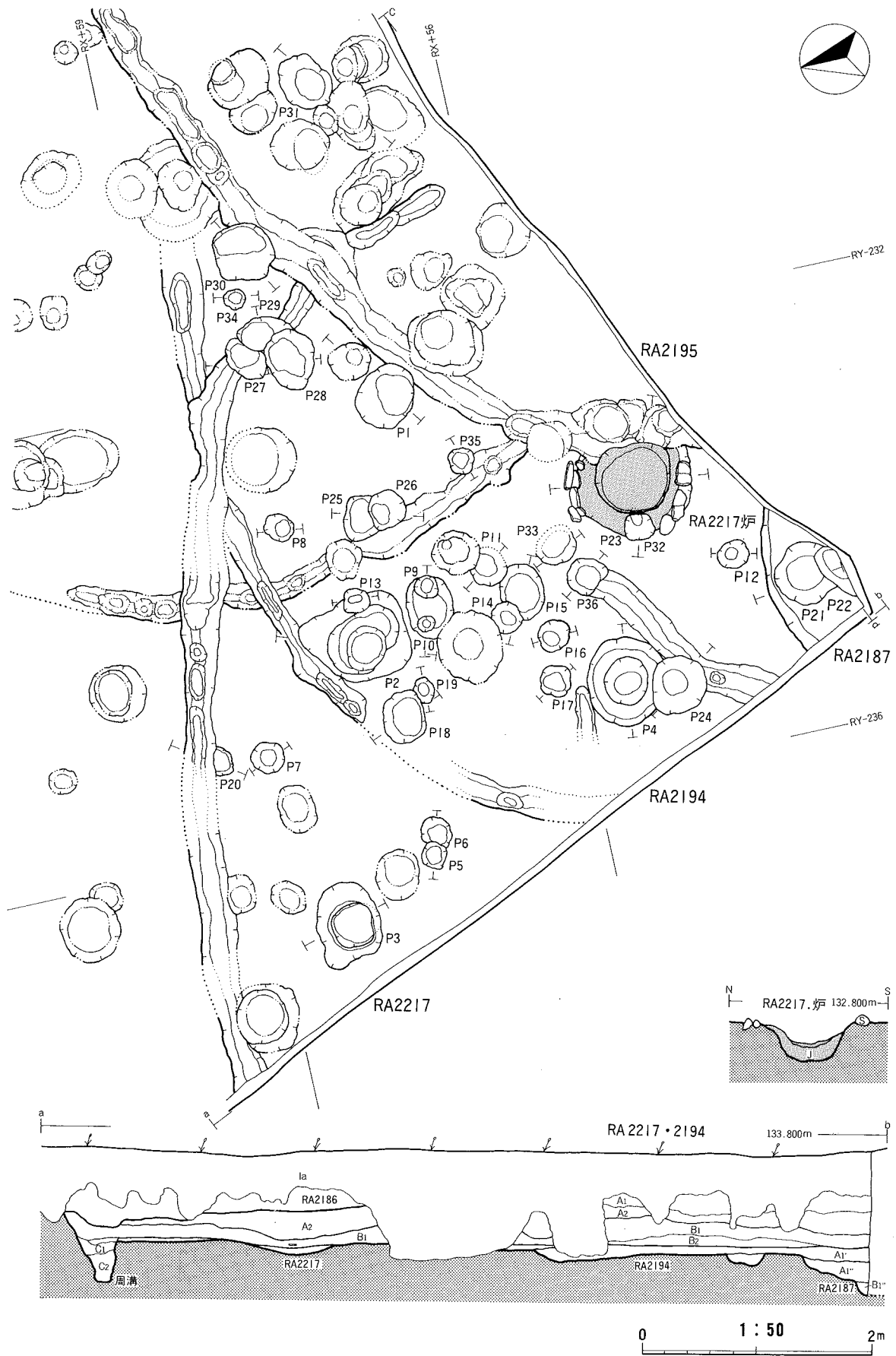
第97図 RA2185竪穴住居跡出土土製品

R A 2187 竪穴住居跡（第98～102図）

- 時 期** 縄文時代中期（大木 8 a - 1 式期）。
- 位 置** 調査区南西隅に位置する。
- 平 面 形** 全体形の大半が調査区外に広がるため不明。
- 主軸方向** 不明。 **規 模** 不明。
- 重複関係** R A 2194・2217に切られる。 **検出面** R A 2194床面。
- 埋 土** 自然堆積で A'・B' の 2 層に大別される。
A' 層 - 塊状の褐色土とスコリアを多量に混入する黒褐色土。
B' 層 - 粒状の褐色土と少量のスコリアを混入する黒色土で炭化物を多量に含む。
- 炉の状態** 未検出。
- 壁の状態** 床面から緩やかに立ち上がる。
- 床の状態** 不整形な起伏がある。
- 柱 穴** 床面上に 2 口のピット（P 21・22）を検出している。床面からの深さは P 21 - 0.64 m、P 22 - 0.37 m をはかる。
- 土 器（第100図）** 1 は C 字状の把手を有する深鉢で、口縁部文様帯に 1 条の刺突列、体部には R L 単節縄文を縦位に施す。
- 石 器（第101・102図11～13）** 2 は凹基無茎鏃で、両面周縁調整がおこなわれている。3 は横型の石匙で、残された打面とほぼ直交する角度につまみ部を作出し、急斜度調整によって刃部としている。4 ～ 8 は削器、9 は搔器である。6 は素材剥片の末端を刃部とし、弧状に調整を施している。10 は石核である。剥片の剥離がまだ可能と思われるの大きさを残して剥片剥離作業を終えている。
11 は敲打磨石であるが、小剥離は二つの敲打磨面のうち側面図に現れる小さい方の面に平行するかたちで形成されている。この部分の尖った形状に合わせた「敲く」という作業の結果ではないだろうか。12 は凹石、13 は砥石である。13 はそれぞれの面に残された溝の形状が異なることから、面によって違った使用がされていた可能性がある。
- 土 製 品（第102図14）** 14 は平底のミニチュア土器である。

R A 2194 竪穴住居跡（第98・99、103～105図）

- 時 期** 縄文時代中期（大木 8 b - 3 式期）。
- 位 置** 調査区南西隅に位置する。
- 平 面 形** 全体形の南側が調査区外に広がるため不明。楕円形か。
- 主軸方向** 不明。
- 規 模** 調査区内で検出した規模は、東西 6.9 m、南北 4.0 m をはかる。
- 重複関係** R A 2186・2195・2217に切られ、R A 2187・2193・2218を切る。
- 検出面** R A 2217床面。
- 埋 土** 自然堆積である。埋土（A' 層）は粒状の褐色土を多く混入する暗褐色土で、スコリア粒を多く含む。
- 炉の状態** 未検出。
- 壁の状態** 緩やかに立ち上がる。
- 床の状態** ほぼ平坦である。

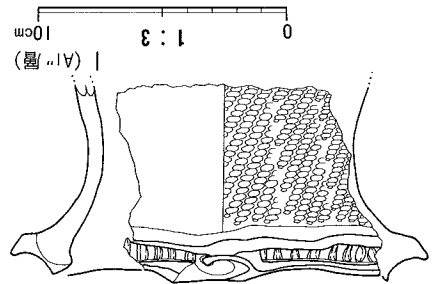


第98図 RA2187・2194・2217竪穴住居跡(1)

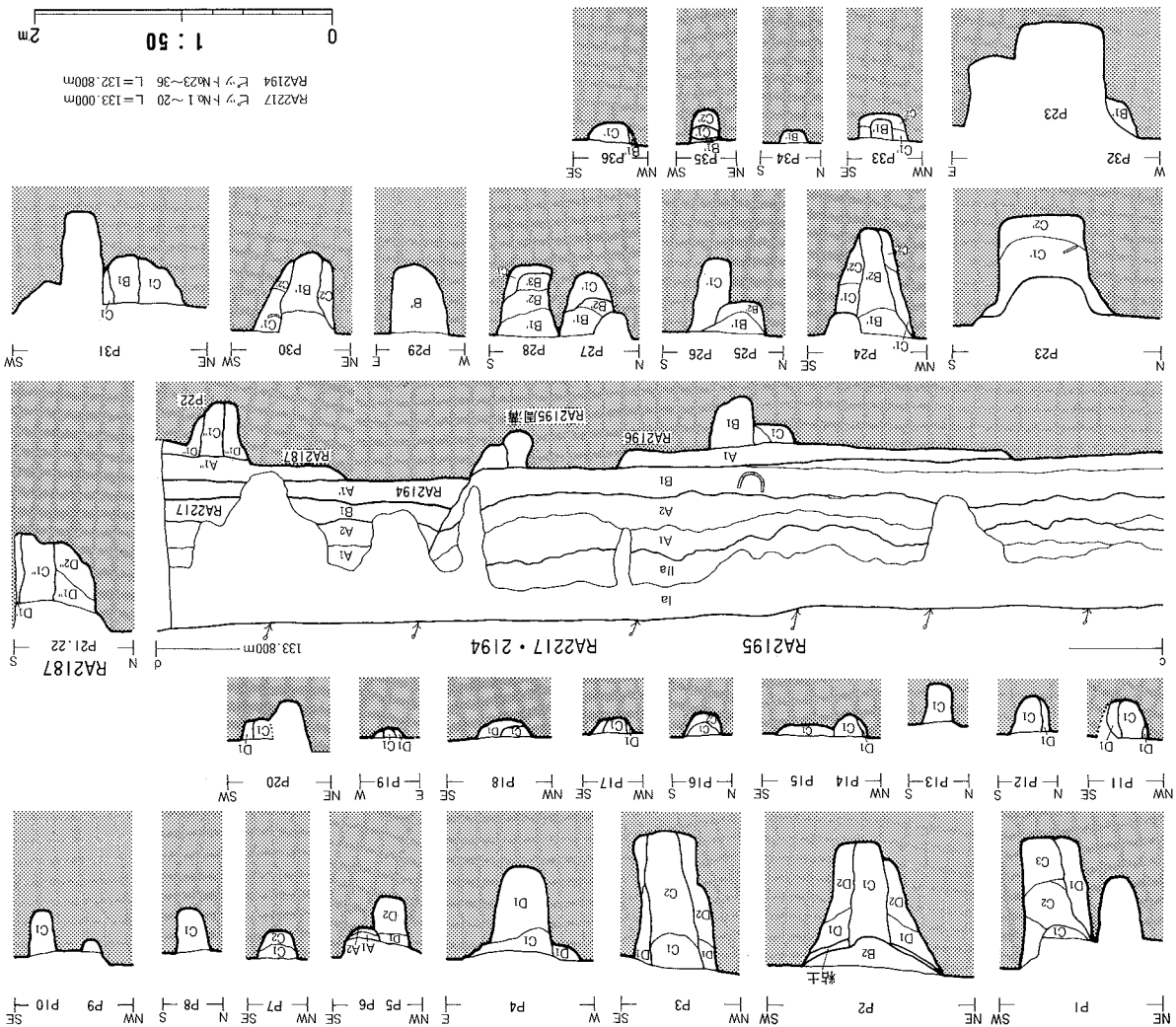
土器 (第103図) 1は口縁が大きく外反する深鉢で、外反部は無文帯となる。体部には隆沈線による渦巻文・懸垂文が連結して施文される。2・3は小形深鉢体部で、沈線による渦巻文・懸垂文が施される。4は隆沈線による有棘渦巻文が施された深鉢体部である。5は波状突起をもつ深鉢口縁部で、隆沈線による逆U字文が施される。地文はR L単節縄文を縦位に施すものである。6は隆沈線による大渦巻文が施された深鉢体部で、地文にR L R複節縄文を縦位に施す。7は口縁が大きく内湾する深鉢である。体部には沈線による逆U字文・楕円区画文が施文される。地文にはL R単節縄文を縦位に施す。8・9はR L R複節縄文が縦位に施される深鉢口縁部である。

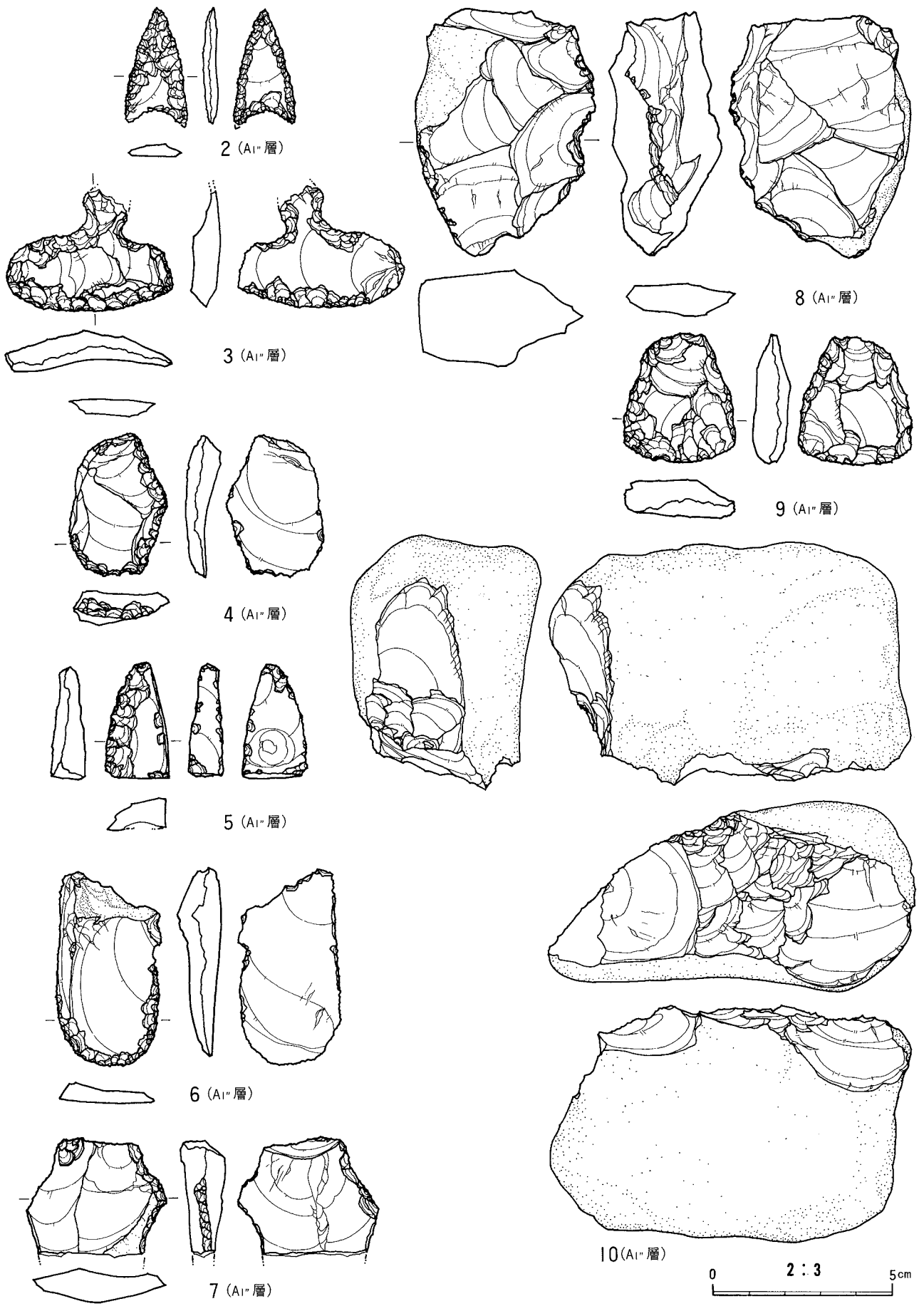
周溝 幅0.16~0.34m、深さ0.24~0.30mをはかる。
 柱穴 床面上に12口のピット (P25・26・27・28・29・30・31・32・33・34・35・36) を検出している。床面からの深さはP25-0.23m、P26-0.49m、P27-0.41m、P28-0.48m、P29-0.45m、P30-0.52m、P31-0.32m、P32-0.70m、P33-0.17m、P34-0.09m、P35-0.21m、P36-0.14mをはかる。

第100図 RA2187竪穴住居跡出土土器



第99図 RA2187・2194・2217竪穴住居跡(2)





第101図 RA2187 竖穴住居跡出土石器(1)

石器 (第104・105図18・19) 10は削器である。背面右側辺に調整を施している。剥離面の観察により、この素材剥片は打面を固定して剥離されたことがわかる。11の削器は背面を周縁調整している。13・14は欠損している部分が多いが、細かい剥離を施した削器である。15も削器であり、背面左側辺に連続した細かい剥離が並ぶ。

16は凹石であるが磨面も伴っている。17は打製石斧である。刃部を欠損しているが、短冊形の平面形をもつと考えられる。18は全面磨面の磨石、19は敲打磨石である。19は剥離整形され、表裏両面と側面に帯状に敲打痕をもつ。敲打磨面はわずかである。

土製品 (第105図20) 20は土製円盤であり、複節の縄文原体による斜縄文が施されている。

RA2217竪穴住居跡 (第98・99、106～111図)

時期 縄文時代中期 (大木8b-3式期)。

位置 調査区南西隅に位置する。

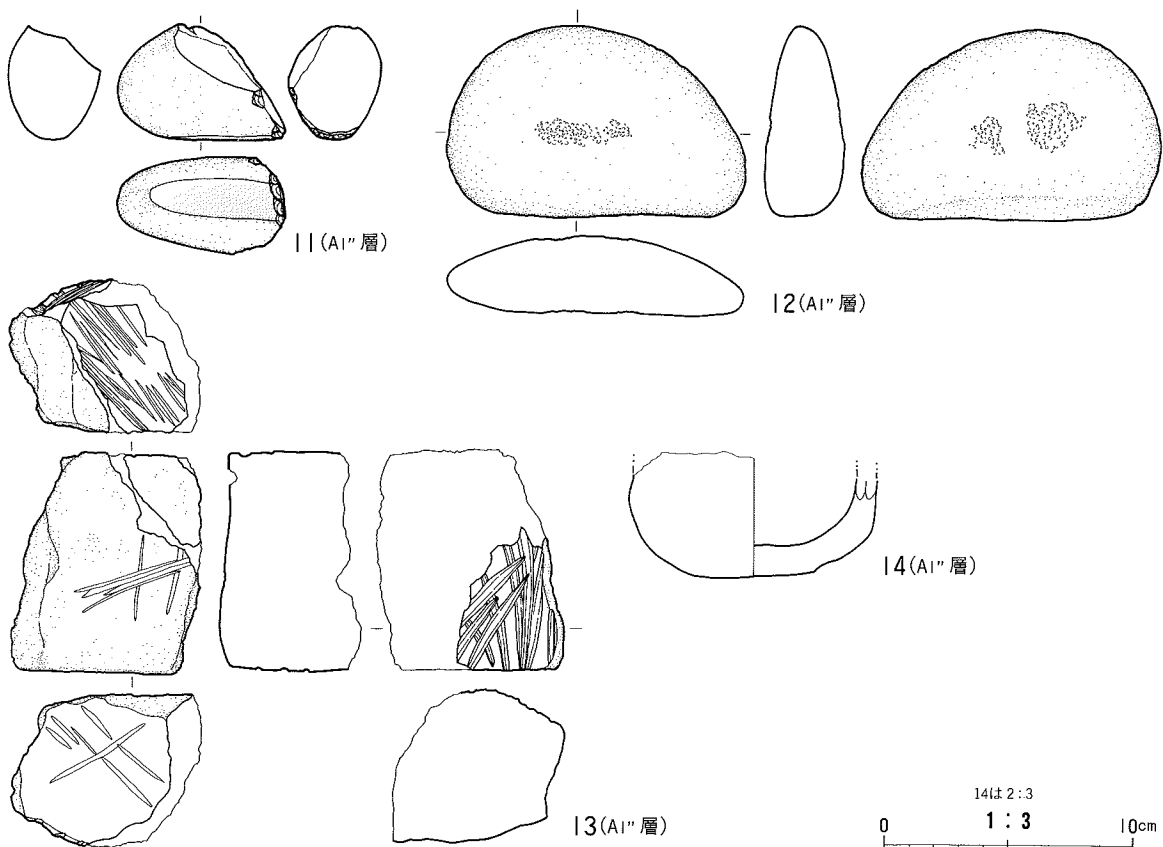
平面形 全体形の大半は調査区外に広がる。楕円形か。

主軸方向 支柱穴と炉から導き出される長軸 (東西) 方向はE14°Sを示す。

規模 調査区内で検出した規模は、東西7.90m、南北5.95mをはかる。なお、柱穴配置から復元される規模は、東西9.5m、南北8.7m程である。

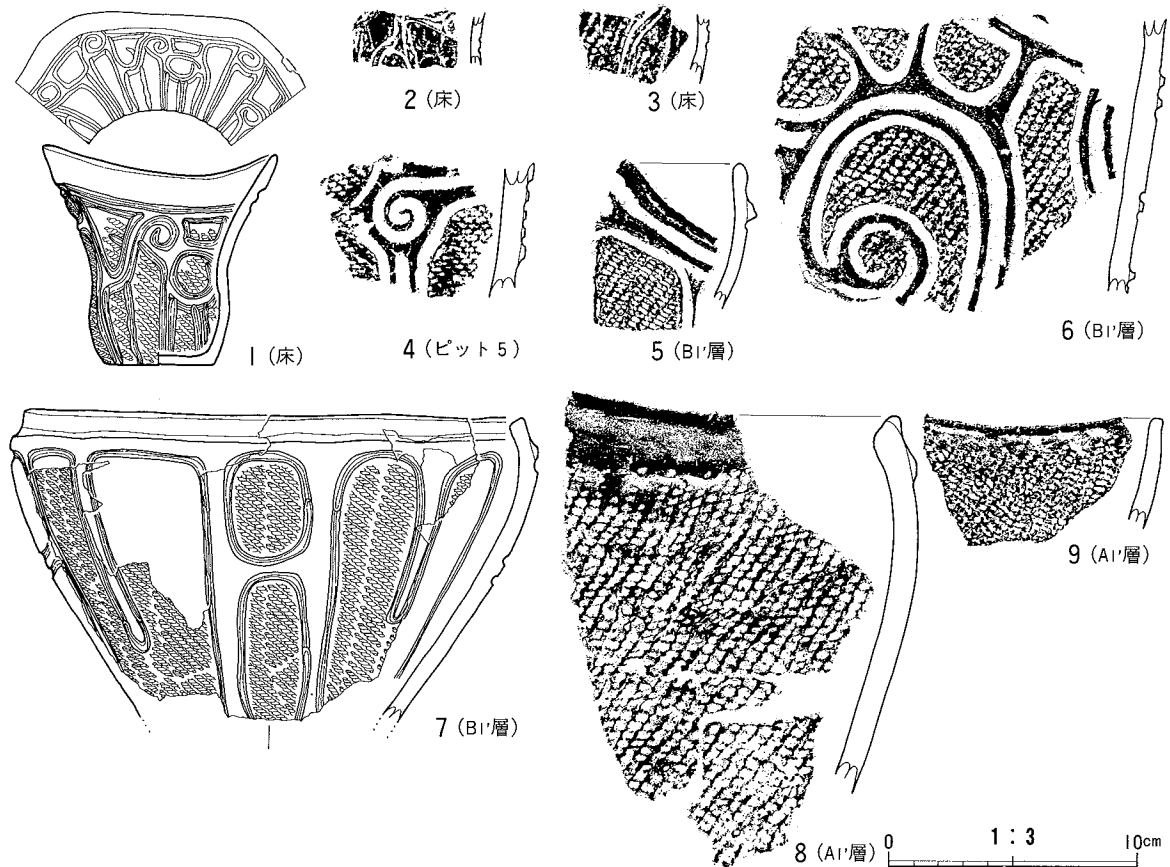
重複関係 RA2186・2195に切られ、RA2187・2193・2194・2196・2197・2218、RE2201を切る。

検出面 RA2186床面及び耕作土 (Ia層) 直下。

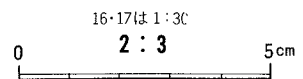
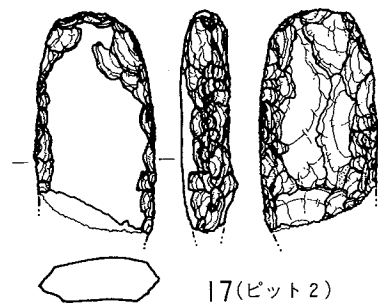
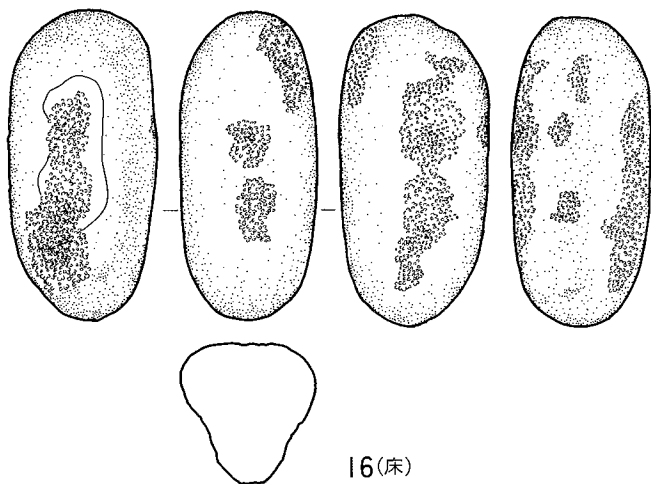
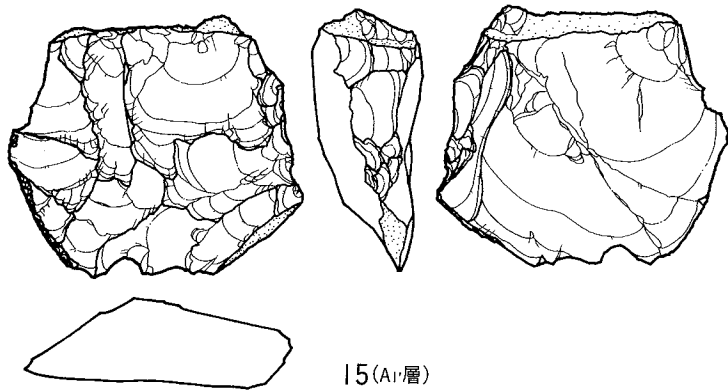
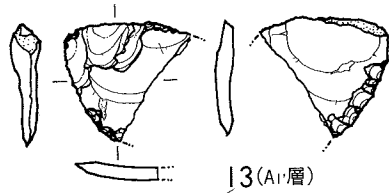
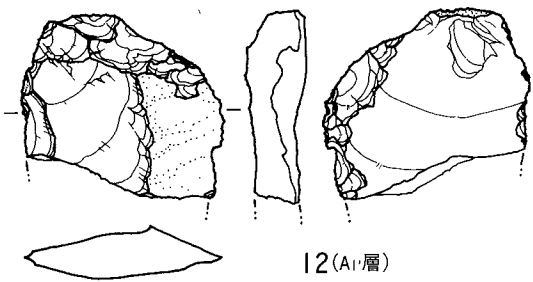
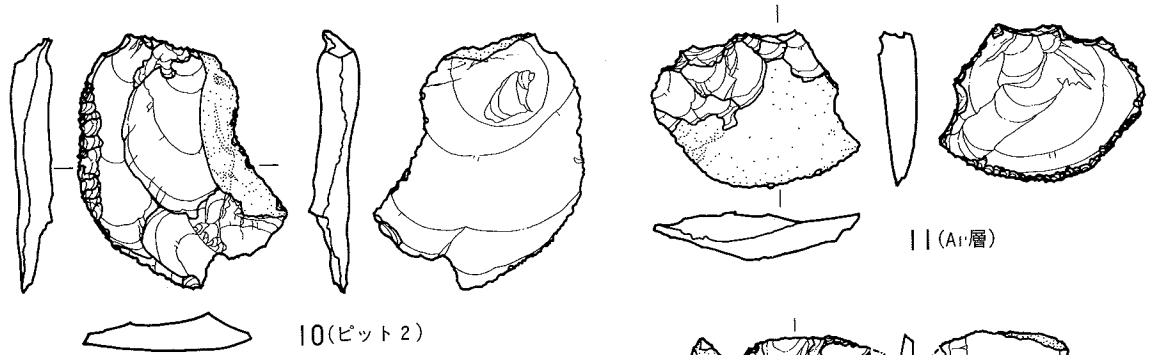


第102図 RA2187竪穴住居跡出土石器(2)・土製品

- 埋 土** 自然堆積で、層相の違いによりA・Bの2層に大別される。なお、周溝はC層である。
 A層-粒~塊状の褐色土をやや多く含む黒褐色土。スコリア粒は少量混入する。
 B層-塊状の褐色土を多く含む堅い黒褐色土。スコリア・カーボン粒を混入する。
- 炉の状態** 調査区の南端に石囲炉を1基検出している。平面形の東端はRA2195に切られており、炉石は自然円礫10個が残存している。平面形はほぼ円形を呈する。火床面の中央が大きく窪んでおり、住居跡埋土（B層）が堆積していた。熱浸透層の厚さは0.15m程をはかり、火床面は2時期ある。
- 壁の状態** 検出した北側の壁はほぼ直壁ぎみに立ち上がる。
- 床の状態** ほぼ平坦である。なお、部分的に床構築土（貼床）が認められる。
- 周 溝** 幅0.20~0.42m、床面からの深さ0.17~0.38mをはかり、埋土（C層）は、黒褐色土と褐色土の塊状混合土となっている。
- 柱 穴** 床面上に20口のピットを検出している。このうちP1~4は支柱穴を構成するピットである。床面からの深さはP1-0.67m、P2-0.84m、P3-0.92m、P4-0.58mをはかる。柱痕跡は0.22~0.32mをはかり、P4柱痕跡が他に比べて太い。なお、P4と石囲炉の中心を結ぶ長軸線はP1~3を結ぶ軸線と平行する。その他のピットはいずれも小規模で床面からの深さはP5-0.40m、P6-0.20m、P7-0.18m、P8-0.28m、P9-0.08m、P10-0.28m、P11-0.25m、P12-0.22m、P13-0.25m、P14-0.15m、P15-0.06m、P16-0.16m、P17-0.08m、P18-0.11m、P19-0.05m、P20-0.14mをはかる。

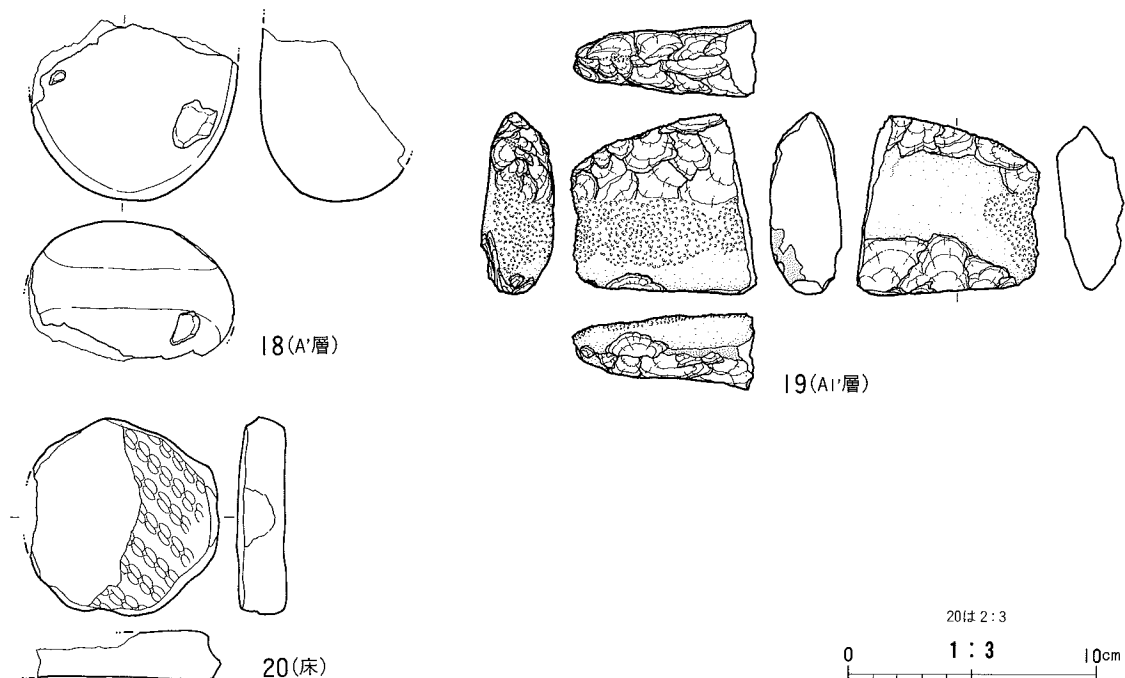


第103図 RA2194 竪穴住居跡出土土器

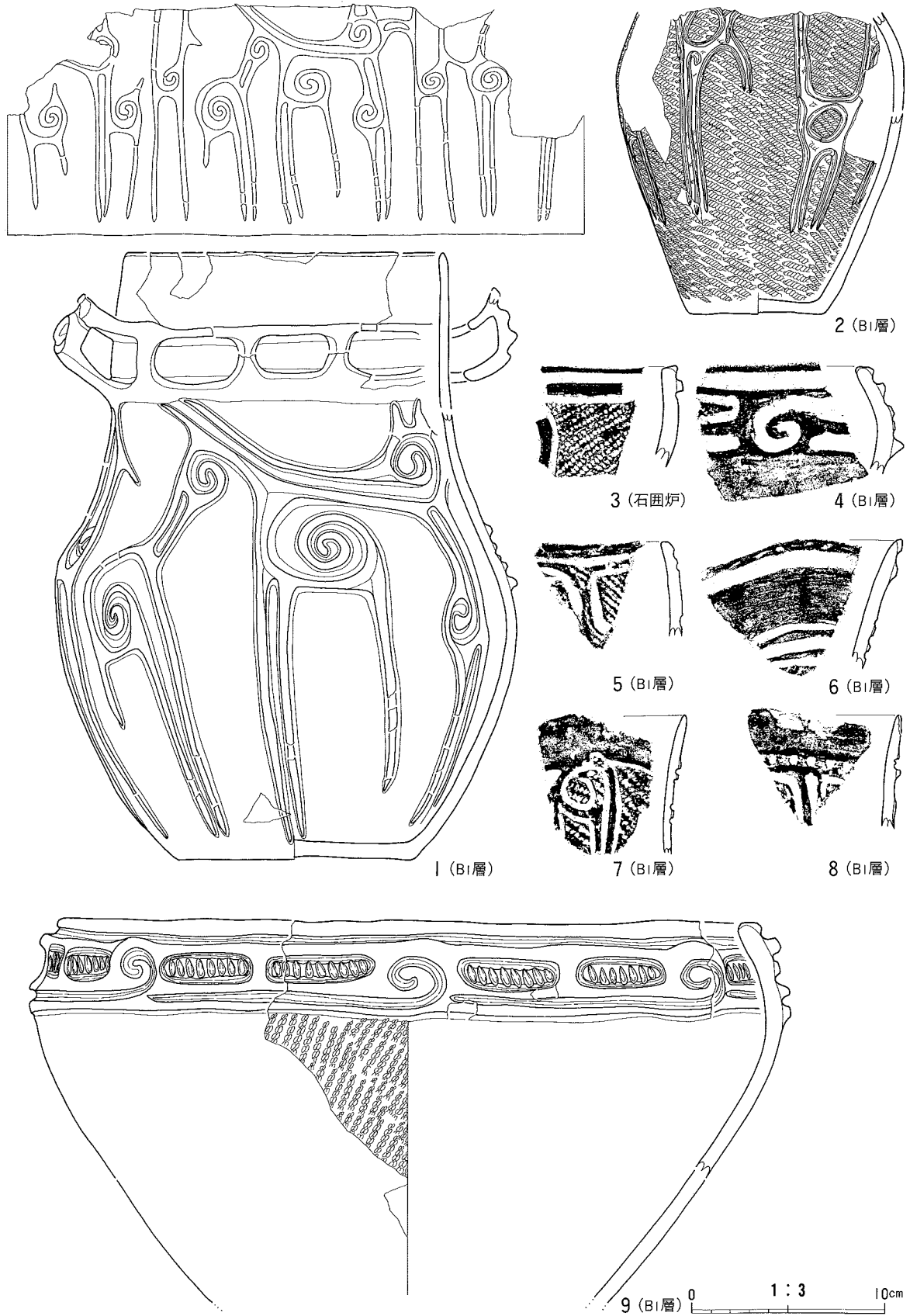


第104図 RA2194竪穴住居跡出土石器(1)

土器(第106・107図) 1は楕円状の透かしが入る把手をもつ樽形土器で、口縁部の無文帯には朱が塗られる。体部には隆沈線による渦巻文が施され、器面に描かれた各渦巻文は2条1組の隆沈線で連結される。2は口縁付近が窄まり、体部が膨らむ深鉢である。文様帯は縦位に割り付けられた文様帯内には円文・楕円文が施され、地文はLR単節縄文を縦位に施すものである。3・5は深鉢口縁部で、隆沈線による文様が施される。4はキャリパー形深鉢の口縁部で、隆沈線による渦巻文が施される。6～8は口縁が外反する深鉢である。外反部には無文帯が設けられ、体部上半部より隆沈線による渦巻文・懸垂文が施文される。9は口縁が内湾する浅鉢である。口縁部文様帯には規則的に渦巻文を配し、渦巻文間は刺突を充填させる楕円文が配される。体部はRLR複節縄文を縦位に施すものである。10～12は口縁が外反し、外反部に無文帯が設けられる深鉢である。10・11は沈線による文様が、12は隆沈線による小渦巻文・懸垂文が施される。13は連結する隆沈線を施したもので、地文はRLR複節縄文を縦位に施す。14は口縁部に3条の刺突列を施す深鉢口縁部である。15は隆沈線による渦巻文が施された深鉢で、16は浅鉢の口縁部である。17は隆沈線による逆U字文または楕円文が施された深鉢口縁部で、地文はLR単節縄文を縦位に施すものである。18は隆沈線による円文を施した浅鉢である。19は小波状口縁をもつ深鉢で、縦位に割り付けられた文様帯内に小渦巻文を配するものである。20は口縁部に渦巻文を施す深鉢である。21・22は口縁部に無文帯をもつ深鉢で、体部には沈線による有棘渦巻文・連結文が施され、地文はRL単節縄文を縦位に施すものである。23・24は口縁に無文帯をもつ深鉢である。体部文様帯には隆沈線による文様が施される。25は沈線による小渦巻文・連結文が施された深鉢下半～底部にかけての部位である。地文はRL単節縄文を縦位に施すものである。26は隆沈線による渦巻文が施される深鉢口縁部である。27は口縁部が内湾する深鉢で、隆線による区画内に刺突を充填するものである。28は屈曲のある深鉢体部で、隆沈線による渦巻文・懸垂文が施される。



第105図 RA2194竪穴住居跡出土石器(2)、土製品

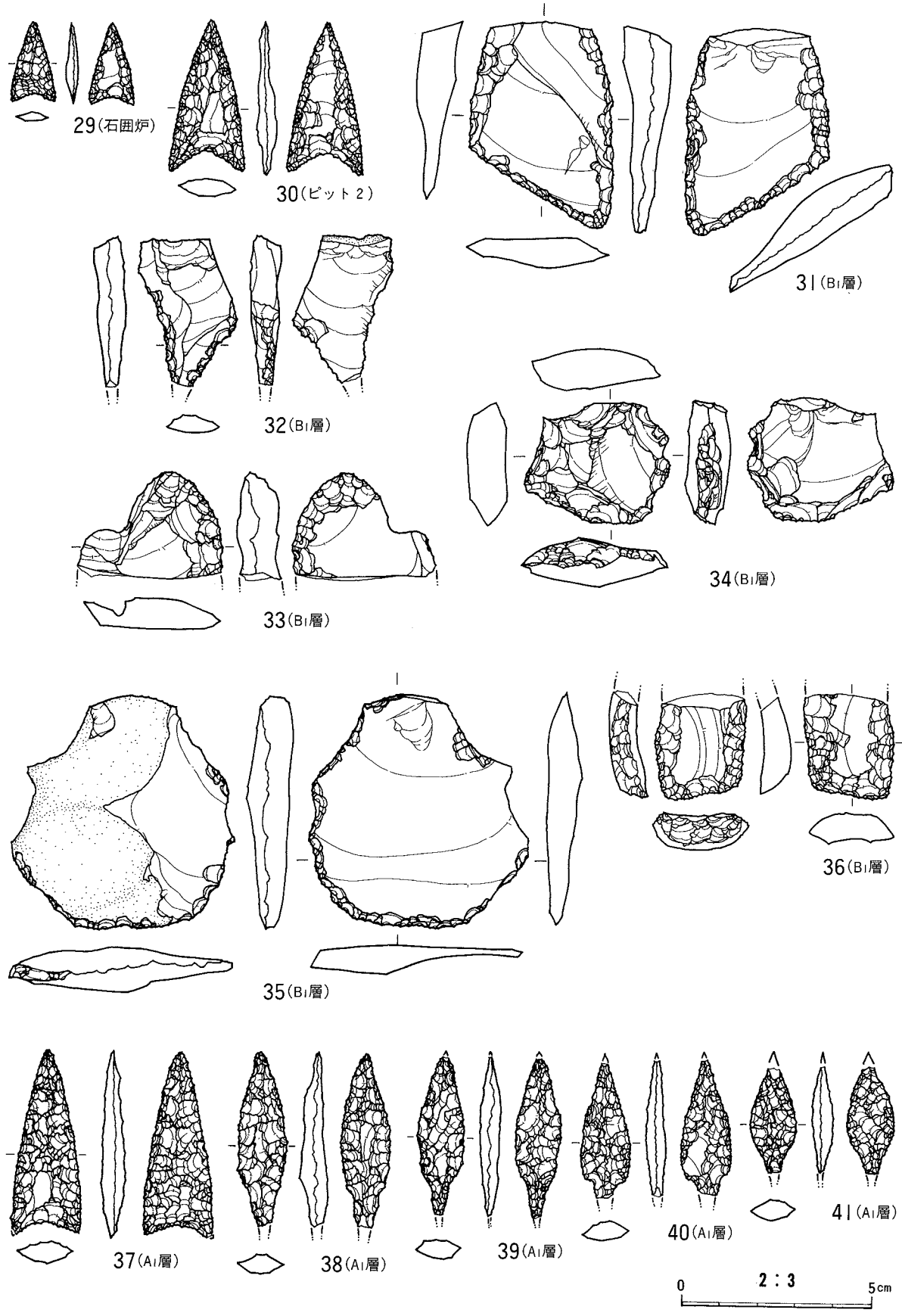


第106圖 RA2217豎穴住居跡出土土器(1)

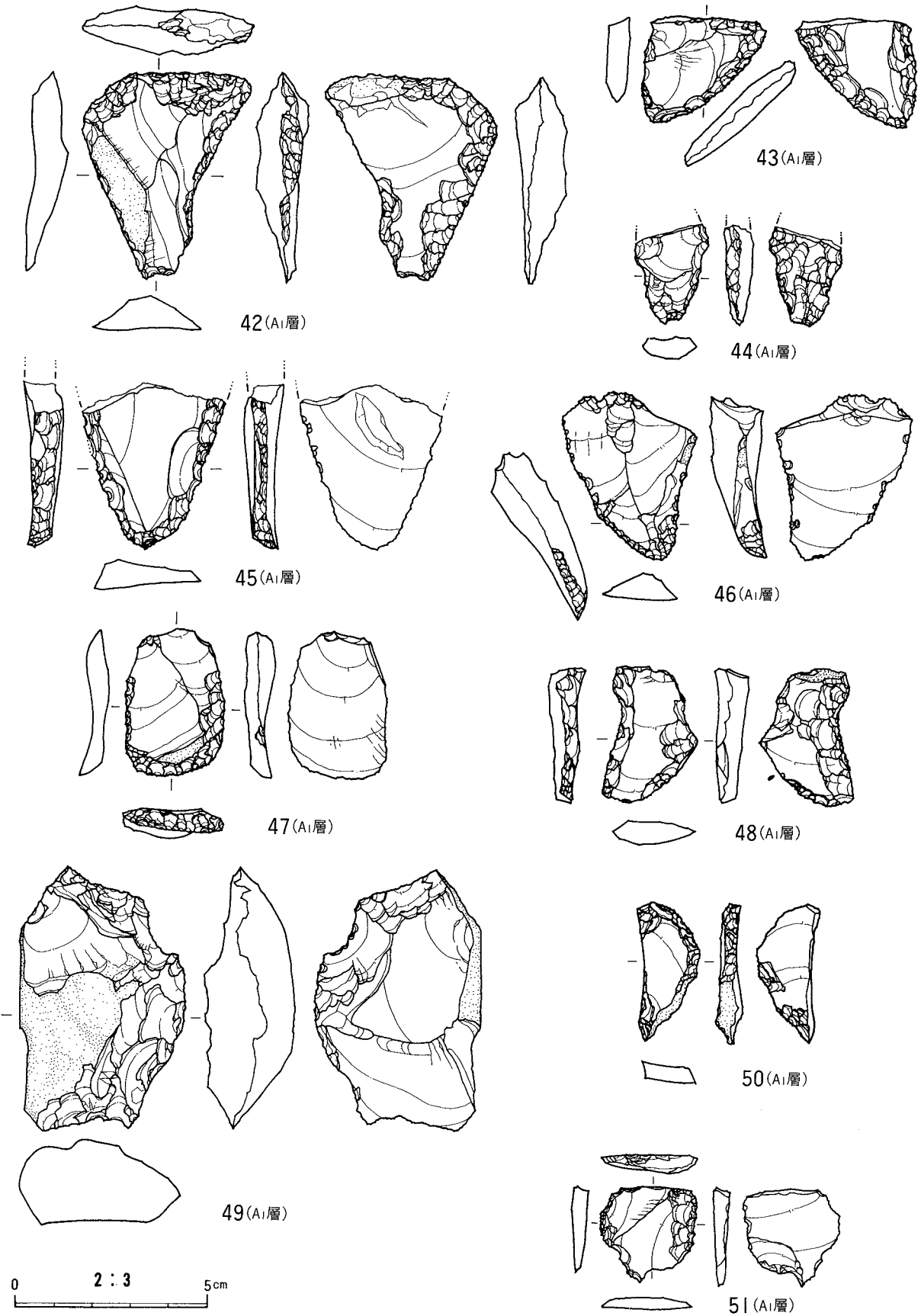
石器（第108～110図）29・30は凹基無茎鏃である。いずれも腹面は中央までは調整は及んでいない。31～34は削器である。31は打面以外を周縁調整している。33は素材剥片の打面方向を弧状に作出している。35・36は搔器で、35は縁辺に急斜度の細かい剥離がならんでいる。背面には自然面が残る。素材剥片の形状からはあまり形を変えていない。36は上半部を欠損しており、その他の三辺を両面から周縁調整している。37は凹基無茎鏃で、脚部をわずかに破損している。38～41は凸基無茎鏃で、細かい調整が施されているが平面形はややゆがんでいる。38以外は先端部を欠損している。42～51は搔器である。42は素材剥片の剥離の際打面調整されている。縁辺に施された調整は連続的になされている。44・45は両側辺から先端部を作出し、刃部としている。いずれも調整は急斜度で行われている。47は末端に弧状の刃部を作り出している。48は背面左側辺とその裏面を調整し、49は背面と側面に自然面を残し調整をおこなっている。腹面上半部の細かい剥離は刃こぼれである。50・51は小さい剥片を素材としているが、縁辺のみに調整を加えている。角度は



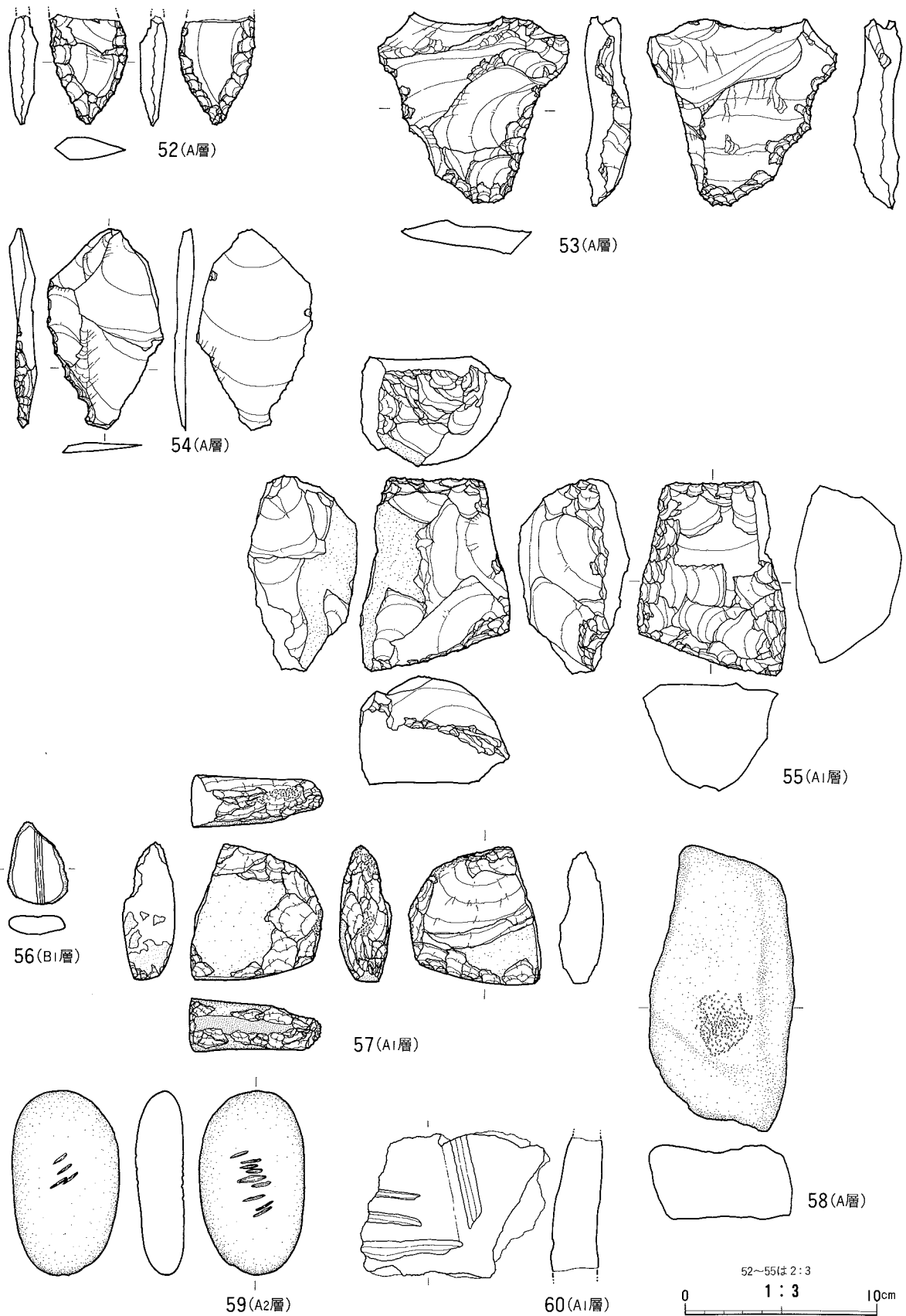
第107図 RA2217 竪穴住居跡出土土器(2)



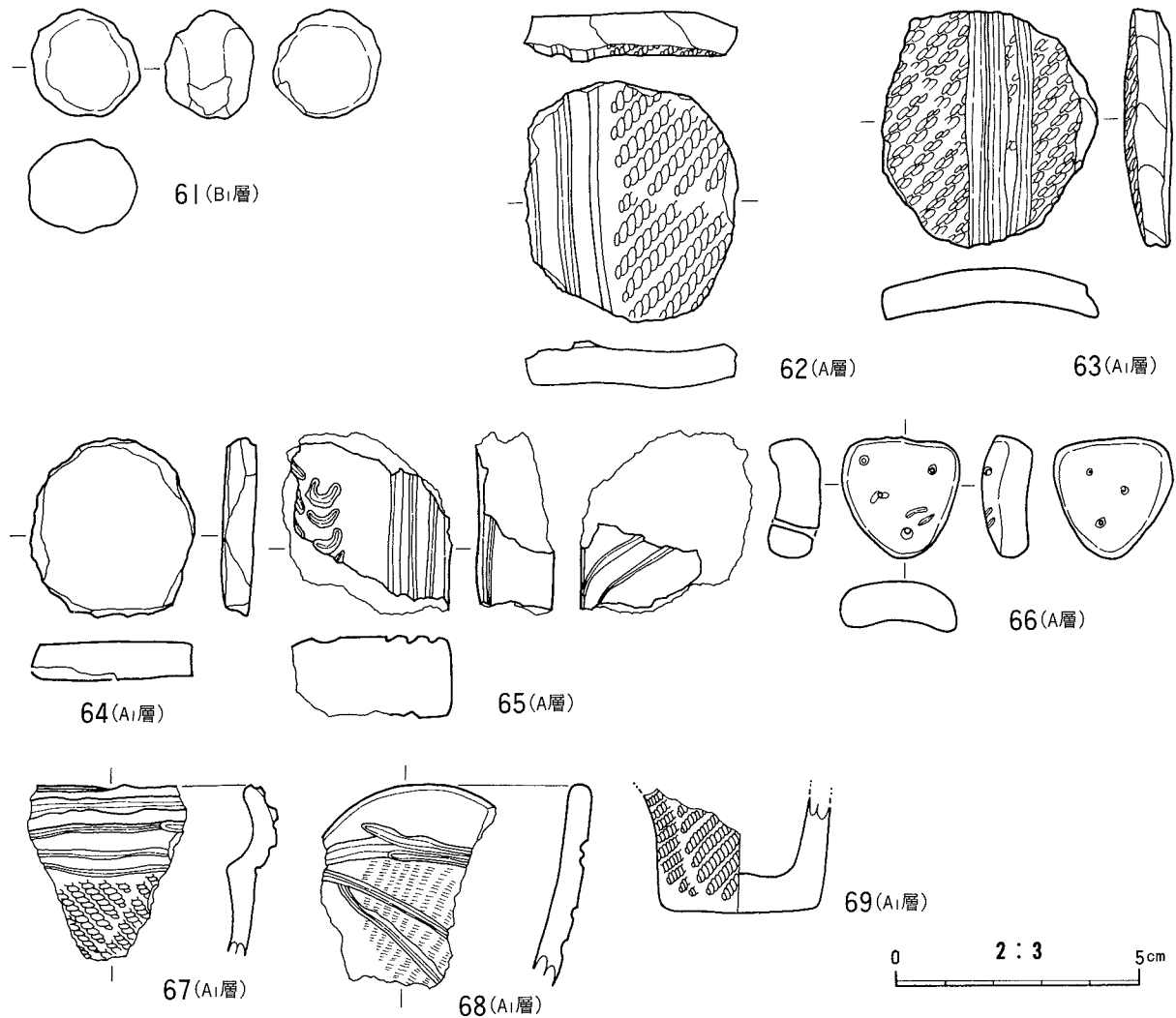
第108図 RA2217 竪穴住居跡出土石器(1)



第109図 RA2217豎穴住居跡出土石器(2)



第110図 RA2217 竪穴住居跡出土石器(3)



第111図 RA2217 竪穴住居跡出土土製品

急斜度である。52は石錐、53・54は搔器である。53は打面調整した面とは別の面を打面にして剥片剥離をおこなっている。54は背面左側辺に急斜度調整によって刃部を作出している。55の篋状石器は周縁を重点的に調整している。下面と側面の稜が摩滅し、つぶれていることからこの二辺を刃部として使用したものである。

56は砥石、57の敲打磨石は、破損後にその面を磨面として使用している。58の凹石の凹部は面的な広がりはあるが、深さはそれほどない。59・60は砥石である。

土製品 (第111図) 61は球状の土製品で、外形は歪みがあるが、磨きが施されている。62～64は土製円盤で、63は複節の縄文が施文されている。65は土偶の体部、66は穿孔されていることから垂飾品と考えられる。67～69はミニチュア土器である。

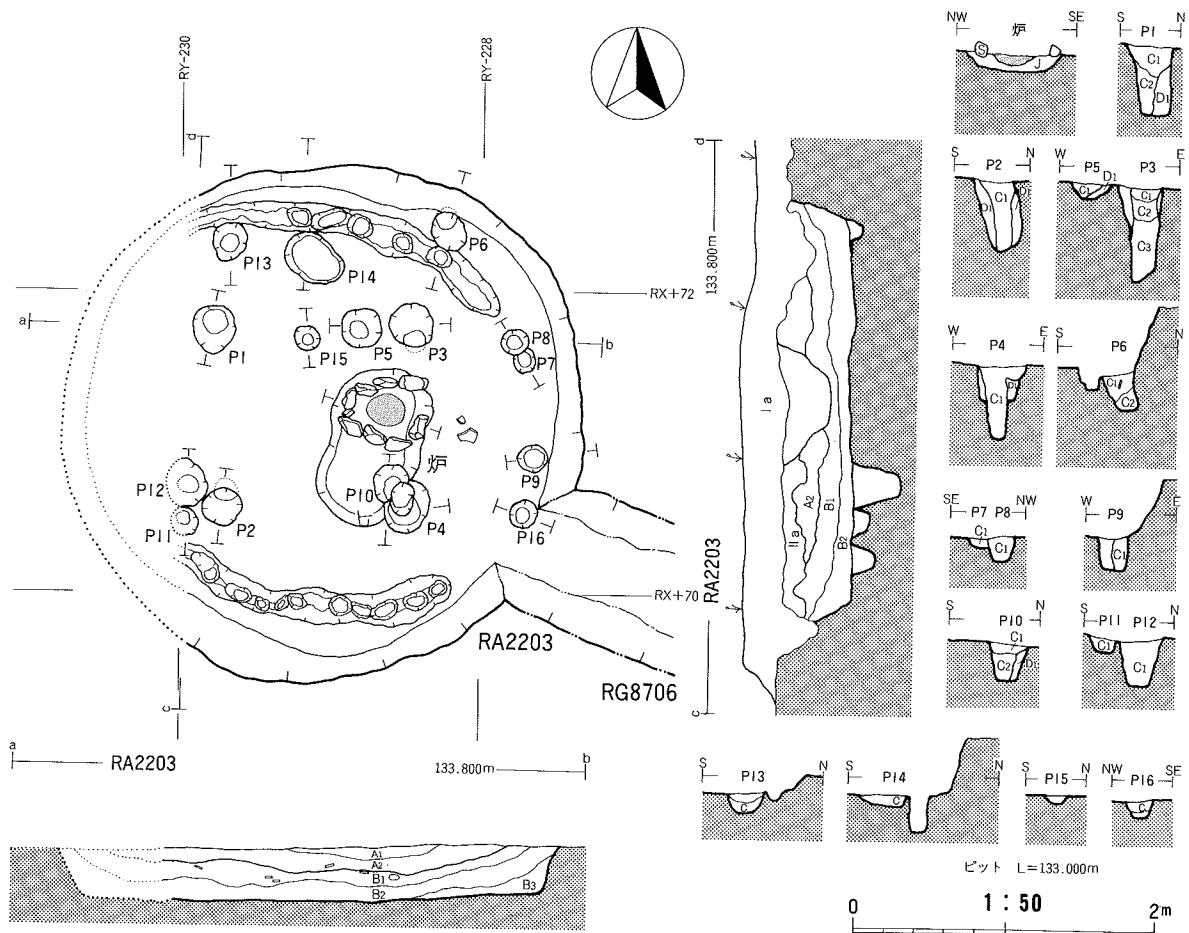
RA2203 竪穴住居跡 (第112～115図)

時期 縄文時代中期 (大木8b-2式期)。 **位置** 調査区北東に位置する。

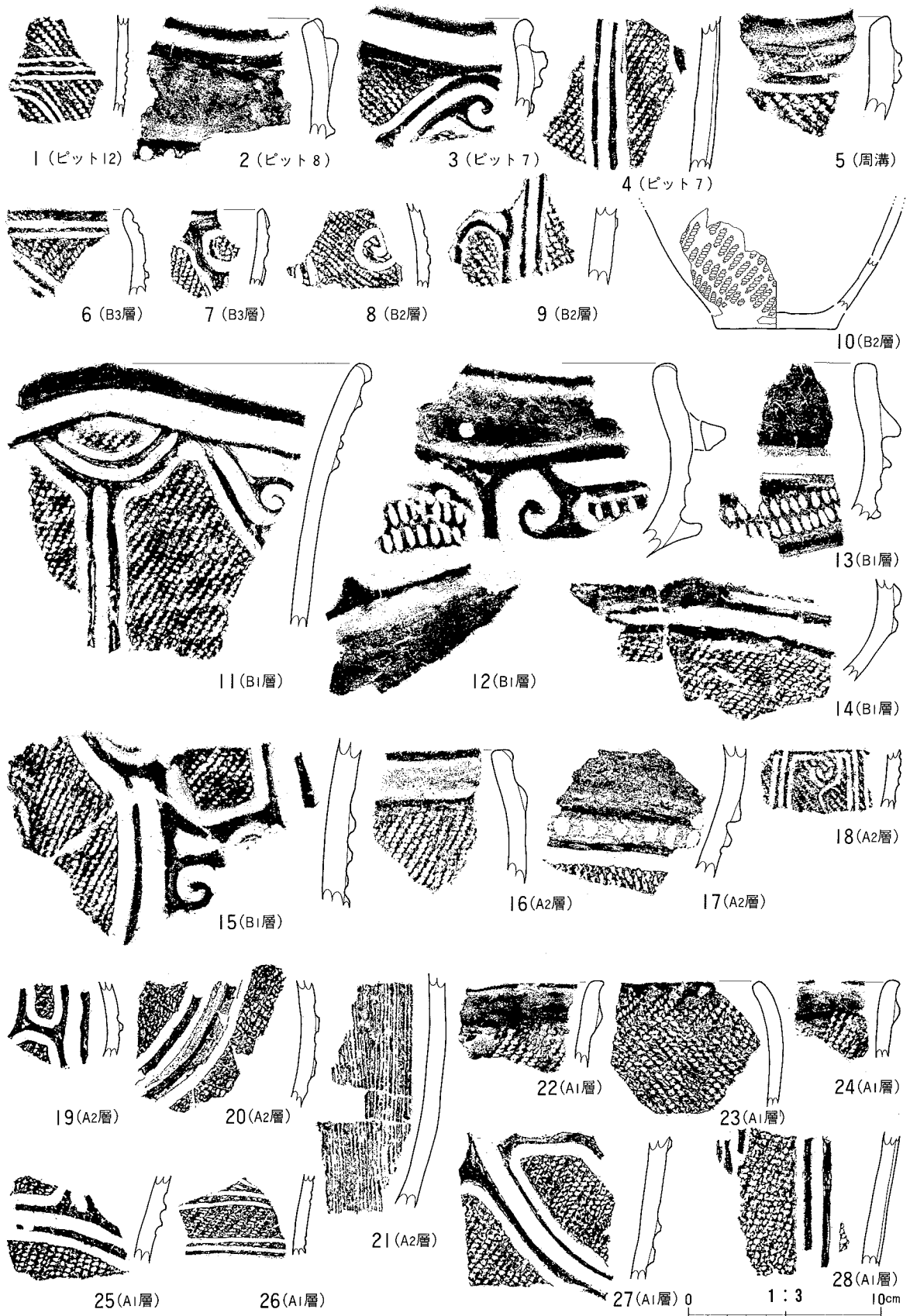
平面形 円形を呈する。 **主軸方向** 炉の長軸と主柱穴の配置から導き出される主軸はW7°Nを示す。

規模 直径3.46mをはかる。なお、平面形の西壁は6年度調査では確認されていない。

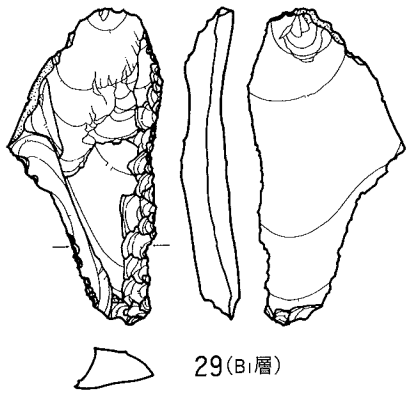
- 重複関係** RG8706に切られ、RA2198・2199を切る。
- 掘込面** 既に削平されている。 **検出面** 耕作土（I a層）及び遺物包含層（II a層）直下。
- 埋土** 自然堆積で層相の違いによりA・Bの2層に大別される。
 A層—粒～塊状の褐色土をやや多く含み、スコリア・カーボン粒を少量混入する黒褐色土。
 B層—粒状の褐色土をわずかに含み、カーボン粒を少量混入する黒色土。
- 炉の状態** 平面形中央よりやや東寄りに石囲炉を1基検出している。9個の自然円礫を台形状に配置しており、長軸を東西方向に持つ。なお、炉の東側の床面上に2個の焼けた石を検出しているが、本来は炉石を構成していたとみられる。火床面は0.20×0.25mの楕円形を呈し、厚さ0.07mの熱浸透層が認められる。炉から南側にかけて不整形な浅いピットが検出されたが、炉との関係は明確ではない。
- 壁の状態** 直壁ぎみに立ち上がる。 **床の状態** ほぼ平坦である。
- 周溝** 平面形北側と南側の床面に検出している。
- 柱穴** 床面上に16口のピットを検出している。このうち支柱穴を構成するものは規模からみるとP1～4の4口であるが、4本柱の配置からみるとP2よりP5が相当する。掘方の直径と床面からの深さなどの規模はP1—0.29×0.34・0.45m、P2—0.25×0.28・0.48m、P3—0.30・0.62m、P4—0.30×0.34・0.49m、P5—0.31・0.30mで、柱痕跡は0.15～0.18mをはかる。埋土は柱痕跡



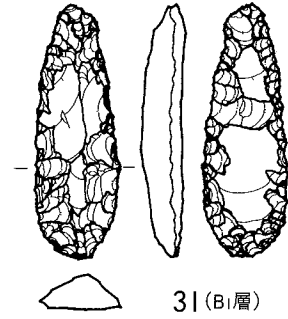
第112図 RA2203竪穴住居跡



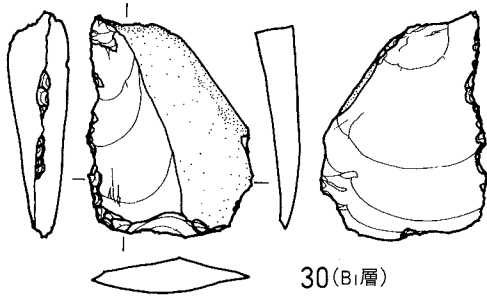
第113図 RA2203竪穴住居跡出土土器



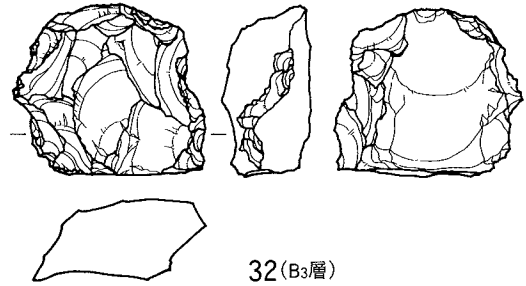
29(B₁層)



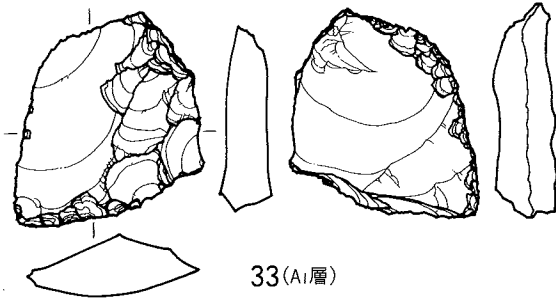
31(B₁層)



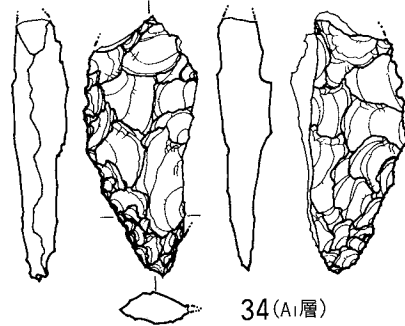
30(B₁層)



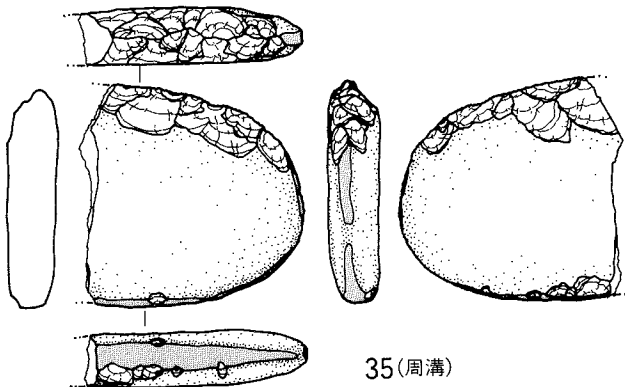
32(B₃層)



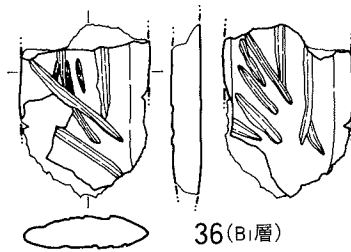
33(A₁層)



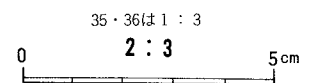
34(A₁層)



35(周溝)



36(B₁層)

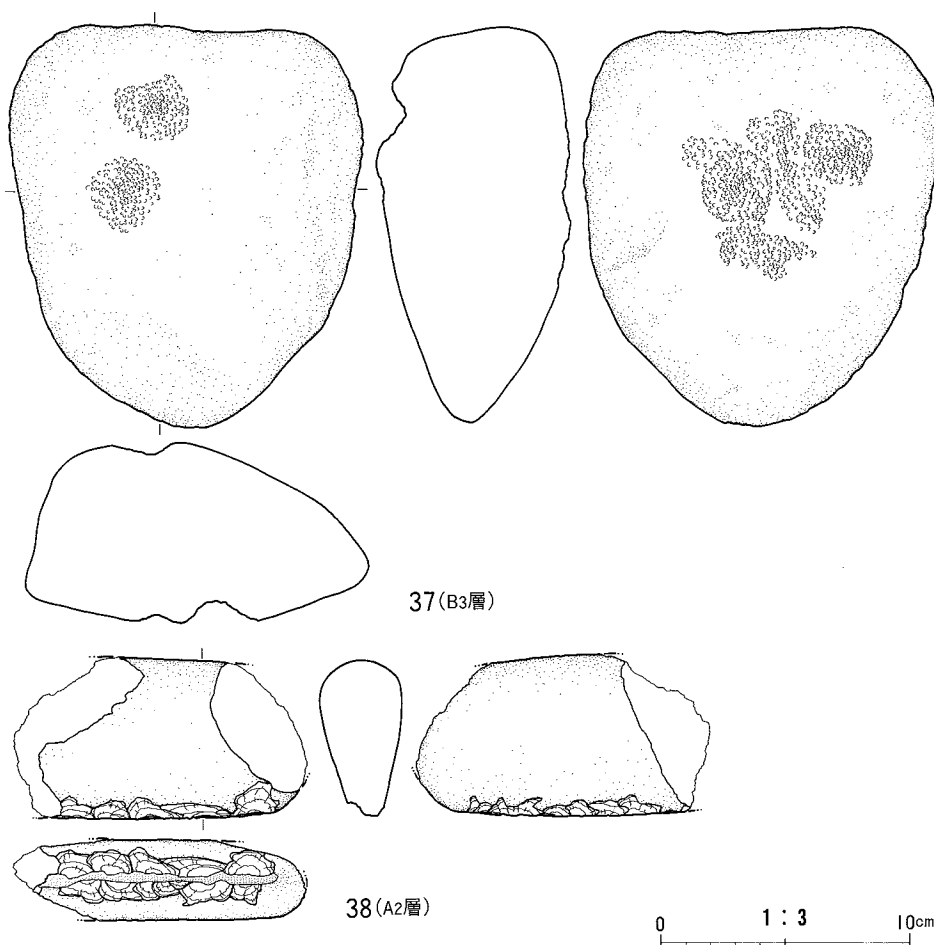


第114図 RA2203豎穴住居跡出土石器(1)

(C層)が暗褐色土を主体とし、掘方(D層)は黒褐色土と黄褐色土の塊状混合土である。なお、その他のピットの配置は不規則で小規模である。

土器(第113図) 1は沈線による文様が施される深鉢体部である。地文はLR単節縄文を縦位に施すものである。2は口縁部に無文帯を設ける深鉢である。3は波状口縁をもつ深鉢で、隆沈線による渦巻文を施し、地文はLR単節縄文を縦位に施すものである。4は深鉢体部下半の部位で、隆沈線による懸垂文を施す。地文はRLR複節縄文を縦位に施している。5は深鉢口縁部で1条の横位平行沈線が施され、地文はLR単節縄文を縦位に施す。6・7は口縁がやや内湾する深鉢口縁部で、7の口縁下には隆沈線による円文が施される。8は沈線による渦巻文が施される深鉢体部で、地文はLR単節縄文を縦位に施す。9は隆沈線による懸垂文が施される深鉢体部で、地文はLR L複節縄文を縦位に施す。10はRL単節縄文が縦位に施される深鉢底部である。11は口縁が外反する深鉢で、口縁形状は緩やかな波状を呈する。

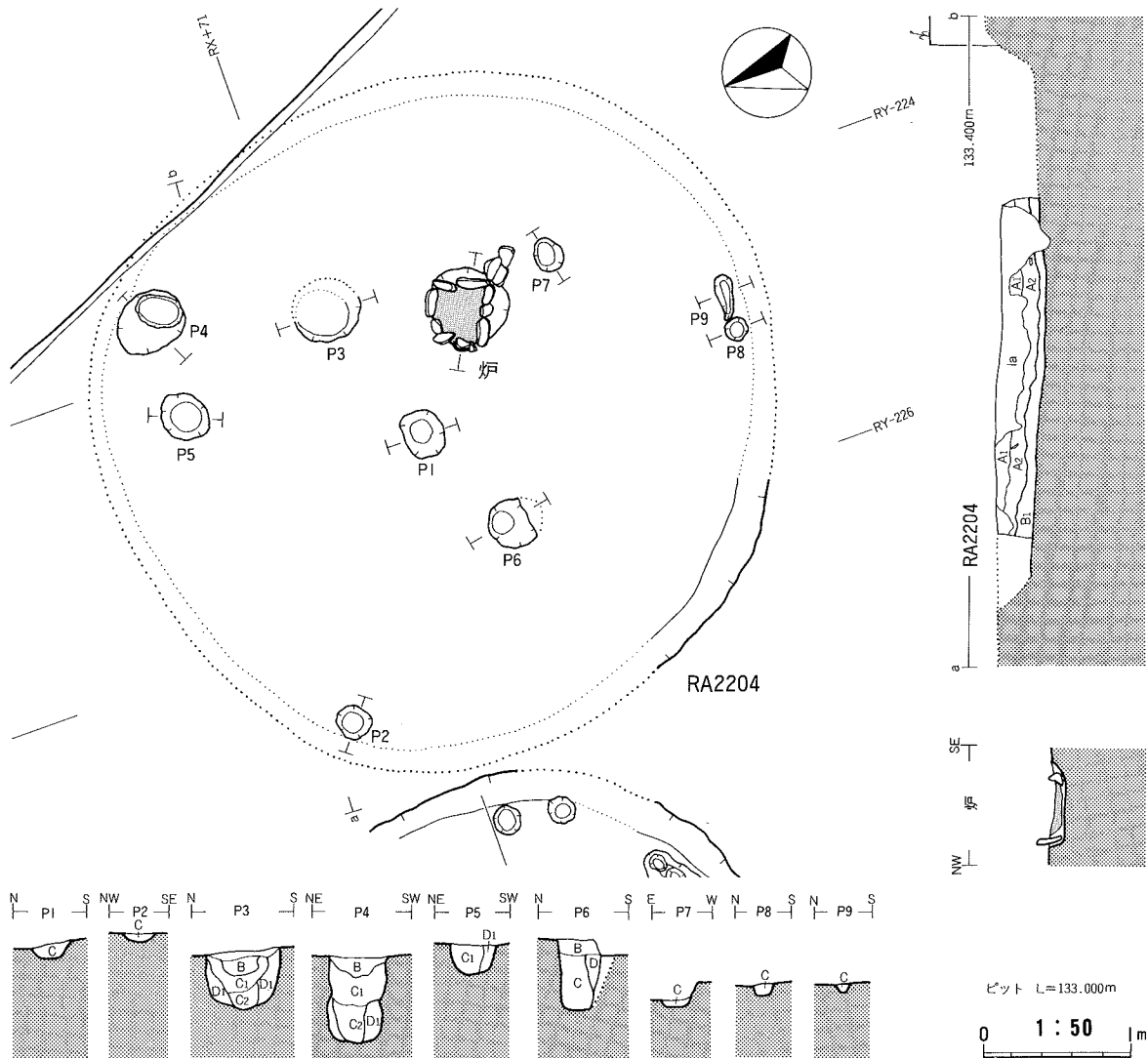
石器(第114・115図) 29~31は削器で、29・30は一側辺を背面から調整している。31は両面周縁調整を施し、背面中央に縦位に稜が形成されている。32の搔器は、腹面にはあまり調整を加えていないが、背面右側辺の縁辺に急斜度の剥離を施す。33は削器。34は両面調整石器の一部で、作り出した先端部から欠損している。35は敲打磨石。36は砥石で全面磨かれている。37は凹石で、凹部は摺鉢状を呈する。38は敲打磨石で、敲打磨面に沿って小剥離が形成されている。



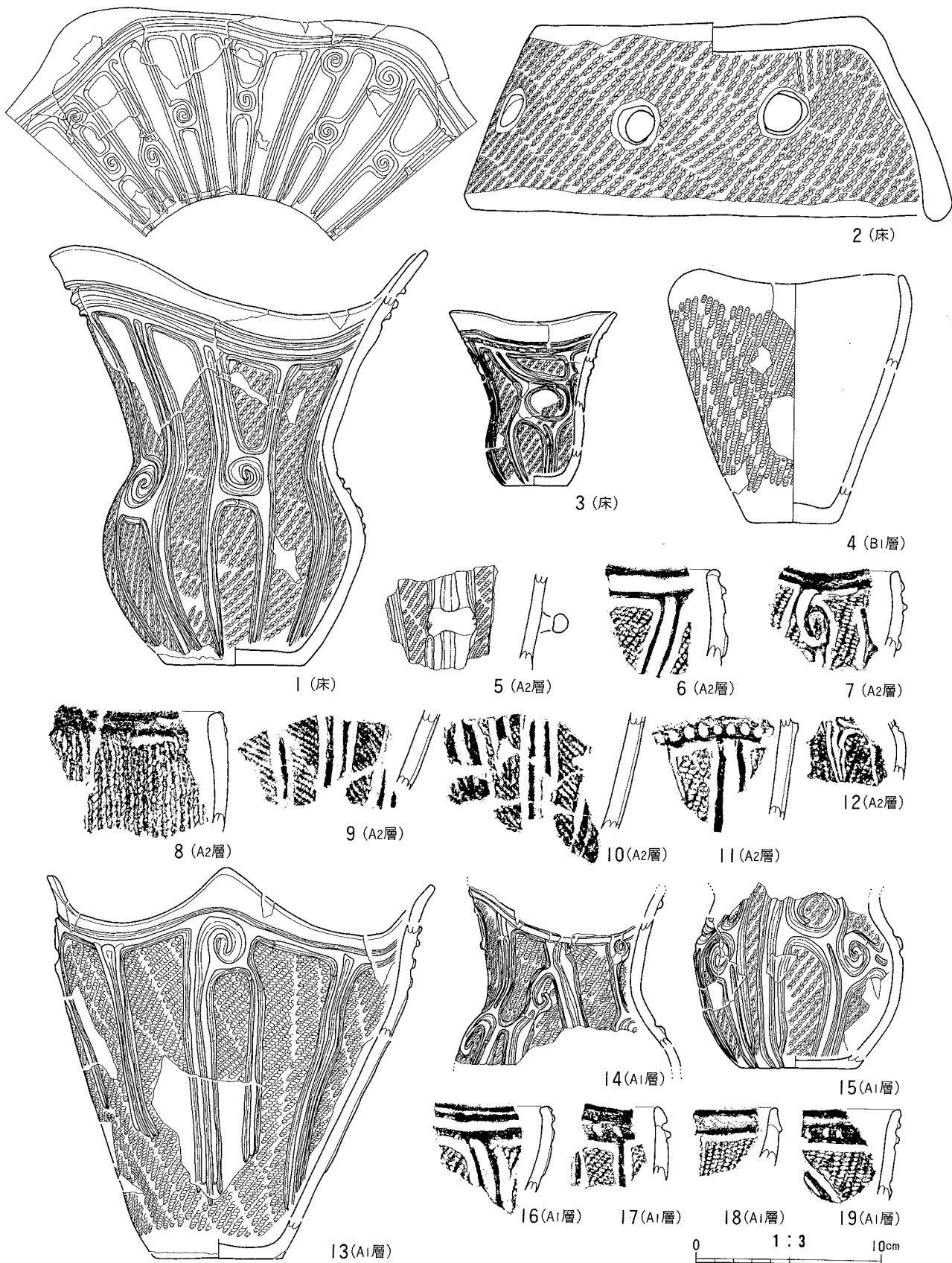
第115図 RA2203竪穴住居跡出土石器(2)

RA2204 竪穴住居跡 (第116~122図)

- 時期** 縄文時代中期 (大木 8 b - 3 式期)。 **位置** 調査区北東に位置する。
- 平面形** ほぼ円形を呈する。 **主軸方向** 炉の長軸を主軸とした場合 $W13^{\circ} N$ を示す。
- 規模** 推定直径 4.6~4.7m。
- 重複関係** RA2199・2200・2202・2215・2216・2219 を切る。
- 掘込面** 既に削平されている。 **検出面** 耕作土 (I a 層) 直下。
- 埋土** 自然堆積で層相の違いにより、A・B の 2 層に大別される。
 A 層 - 粒状の褐色土を微量に混入する黒褐色土で、カーボン・焼土粒を少量含む。
 B 層 - 粒~塊状の褐色土を微量に混入する黒褐色土で、カーボン・焼土粒を多量に含む。
- 炉の状態** 平面形中央からやや東寄りに石囲炉を 1 基検出している。自然円礫 10 個を方形に配置しており、焼けた炉石内部全面が火床面となっている。熱浸透層は厚さ 0.07m 程で強く焼けている。
- 壁の状態** 検出したのは南西側だけで、床面から緩やかに立ち上がる。



第116図 RA2204 竪穴住居跡

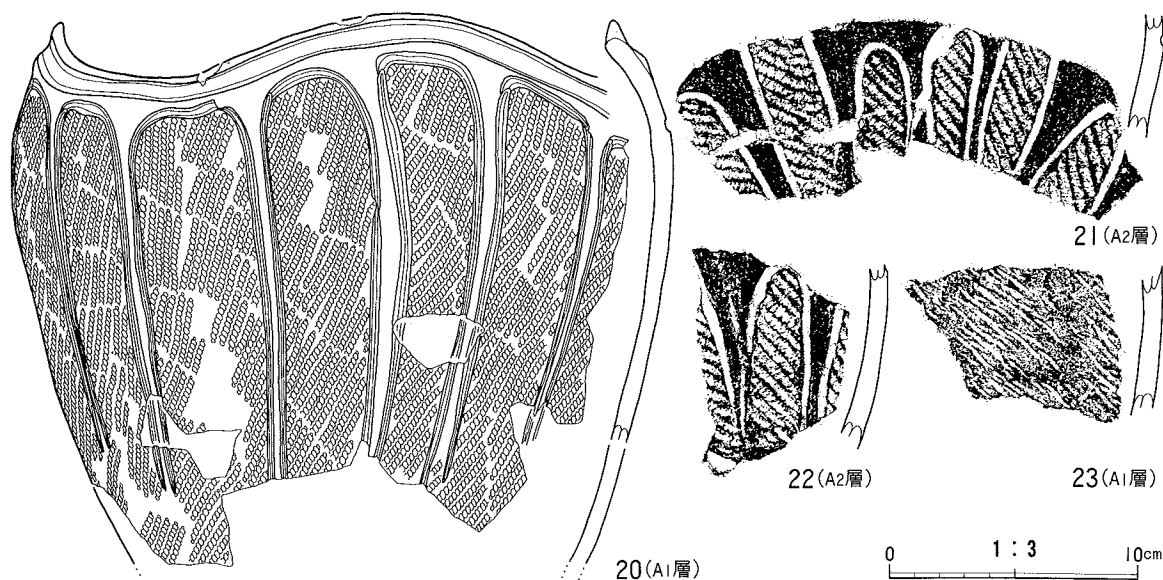


第117图 RA2204竖穴住居跡出土土器(1)

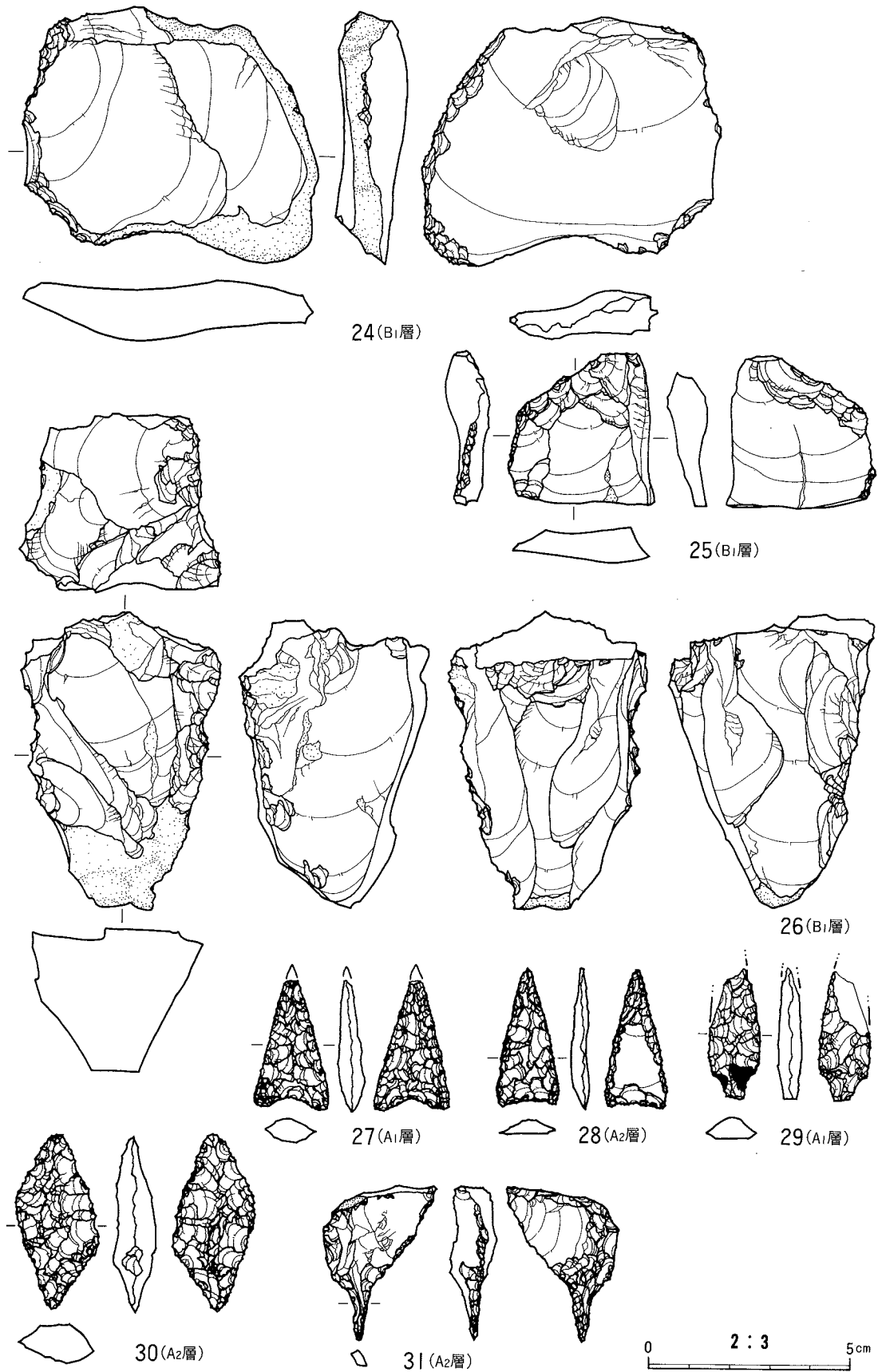
床の状態 ほぼ平坦である。

柱 穴 床面上に9口(P1~9)のピットを検出している。各ピットの床面からの深さはP1-0.12m、P2-0.05m、P3-0.41m、P4-0.57m、P5-0.19m、P6-0.37m、P7-0.04m、P8-0.08m、P9-0.05mをはかる。柱痕跡はP3~6に認められるが明確な柱配置は不明である。

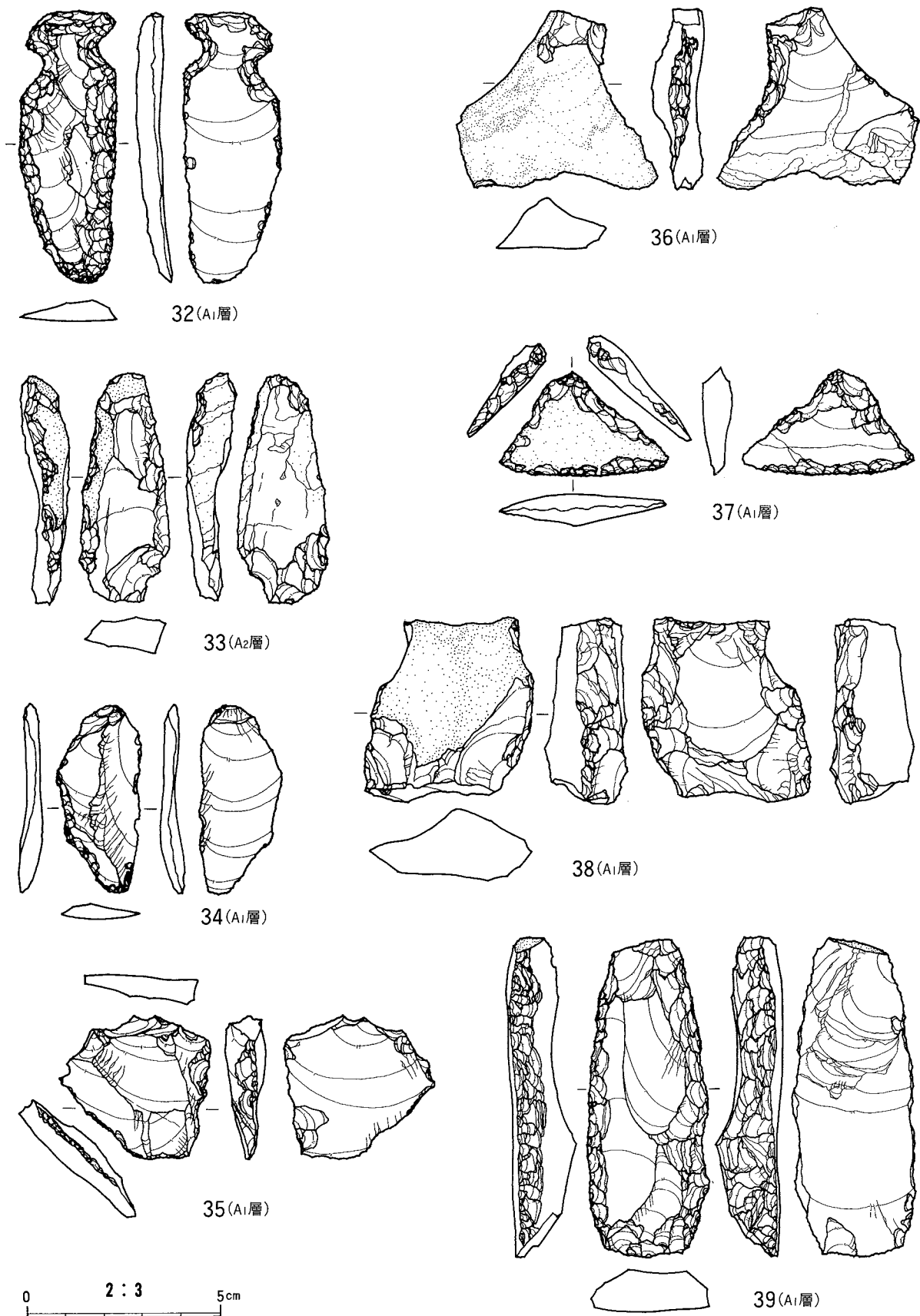
土 器 (第117・118図) は口縁形状が波状を呈し、口縁が大きく外反する深鉢である。口縁には無文帯が設けられ、隆沈線による縦位の文様帯が割り付けられる。文様は小渦巻文が中央部に施される他はなく、この類の土器としてはかなり簡略化されたものといえる。2はR L R複節縄文が施された器台で、台部には孔が穿たれる。3は口縁形状が波状を呈し、口縁が大きく外反する深鉢である。口縁には無文帯が設けられ、体部には隆沈線による円文と連結する懸垂文が施される。地文はR L R複節縄文を施すものである。4は波状口縁をもつ深鉢で、口縁が緩く内湾し体部にはR L単節縄文を縦位に施すものである。5は吊手状の把手がつく深鉢である。6・7は口縁が内湾する深鉢である。7には隆沈線による渦巻文が施され6・7ともにR L R複節縄文が施される。8はR絡条体を縦位に回転させた撚糸文が施される深鉢である。9・10は同一個体の深鉢体部下半で、隆沈線による懸垂文と地文にはL R L複節縄文が施される。11は垂下する隆沈線が施され、地文にはR L R複節縄文が施文される。12は沈線による渦巻文と連結する懸垂文が施される深鉢体部である。13はやや外傾する波状口縁をもつ深鉢で、波頂下に隆沈線による渦巻文を配し、底部にむけて懸垂文を垂下させるものである。地文はR L単節縄文を縦位に施す。14は体部の膨らみが口縁部よりも大きい器形である。体部には隆沈線による渦巻文と連結する懸垂文が施される。地文はR L単節縄文を縦位に施すものである。15は体部が膨らむ深鉢下半部で、隆沈線による縦位の文様帯には渦巻文などが加飾される。地文はR L R複節縄文を縦位に施す。16~19は深鉢口縁部である。17・19の口縁下には刺突列が施されるほか、全て隆沈線による文様を施すものである。20は緩い波状口縁をもち底部を欠く深鉢である。20~22は沈線による逆U字文が全面に描かれ、逆U字外の地文は磨り消され無文化する。23はL無節縄文を縦位に施すものである。



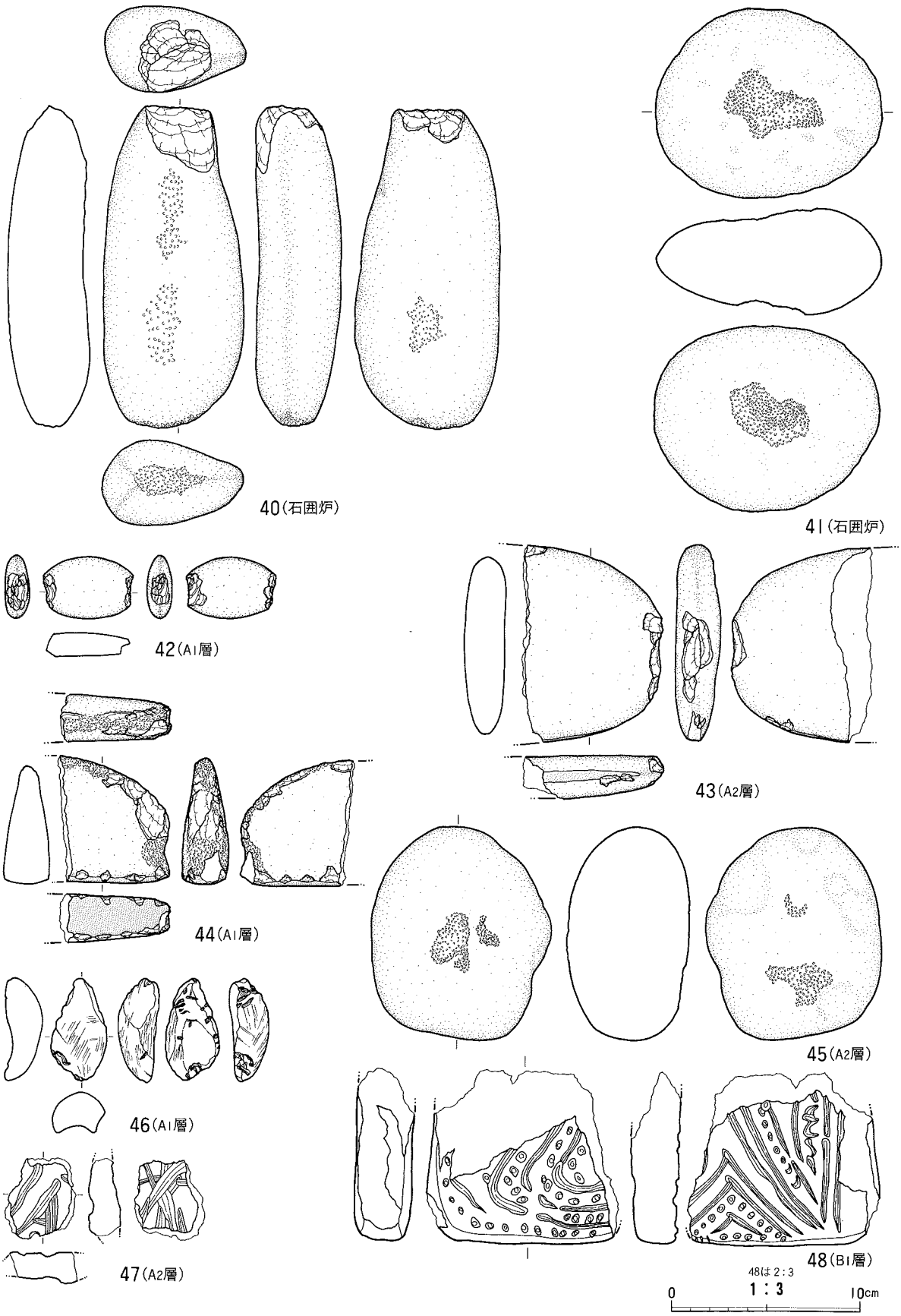
第118図 RA2204竪穴住居跡出土土器(2)



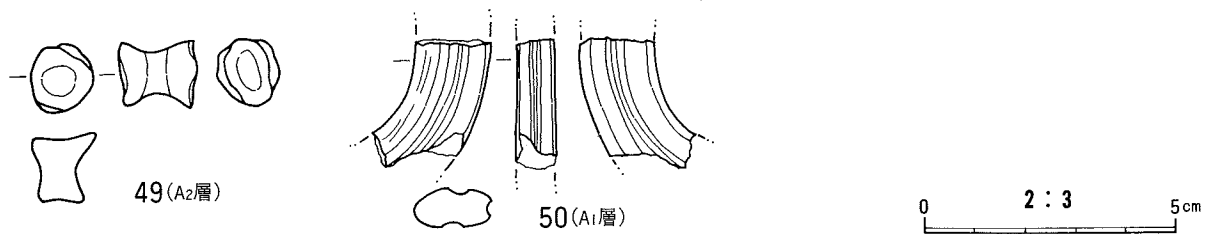
第119図 RA2204豎穴住居跡出土石器(1)



第120図 RA2204豎穴住居跡出土石器(2)



第121図 RA2204竪穴住居跡出土石器(3)・土製品(1)



第122図 RA2204竪穴住居跡出土土製品(2)・石製品

石器(第119~121図40~47) 24・25は削器、26は石核である。24は素材剥片の形状からあまり形を変えていない。打面調整を行っている。26は打面がかなり固定されて剥片剥離されている。27・28は凹基無茎鏃、29は凸基有茎鏃である。29の先端部は焼けはじけて破損し、基部にはアスファルトが付着している。30の石鏃は、側面図に示すように大きな剥離を残す未成品である。31は石錐で、棒状の錐部が発達している。32は縦型の石匙で、背面右側辺を直線状に調整し刃部を作出している。33~36は削器である。34は器厚の薄い背面右側辺ではなく、厚い左側辺に連続的に刃部を作出している。35の背面左側辺は細かい剥離、右側辺はひとつ一つの単位が大きい調整を施し、素材剥片の形状に合わせた調整がなされている。36は背面に自然面を残しているため、腹面の左側辺に調整をおこなっている。37の搔器は、両面ともに打点方向である上半部に調整が施され、つまみ部が作出されているので、石匙の未成品とも考えられる。38は両面調整石器、39は篋状石器である。39は刃部の調整のほかに、側面にも急斜度調整を加えて全体の形状を整えている。

40は敲石である。偏平な長礫の下端部に敲打痕が見られる。上端部の剥離痕も敲打の用途により形成されたものと思われる。表裏面に見られる敲打痕は顕著なものではない。41は凹石で、両面ともに凹み部が観察される。42は小形礫の長軸方向に剥離を加えた礫石錘で、側面は稜がややつぶれている。43・44は敲打磨石で、いずれも敲打磨面に小剥離を伴う。45は敲石である。46・47は砥石であるが、46は全体に擦痕が残っており、使用によって丸みがついた形状の全面を機能面としているのに対して、47は偏平な素材の平坦な両面をさまざまな方向から使用している。

土製品(第121図48・第122図49) 48は表裏面に刺突文や沈線文を施した土偶、49は耳栓である。

石製品(第122図50) 50は環状石製品で、環の内側にあたる面以外には溝が形成されている。

RA2205竪穴住居跡(第123~125図)

時期 縄文時代中期(大木8b-3式期)。

位置 調査区南東に位置する。

平面形 全体形の南側は調査区外に広がるが、およそ円形~楕円形を呈する。

主軸方向 炉の長軸を主軸とした場合、E9.5°Sを示す。

規模 東西4.2m、南北4.0m以上をはかる。

重複関係 RA2206に切られ、RA2207・2208・2212・2214・2220、RF2213を切る。

掘込面 既に削平されている。

検出面 耕作土(Ia層)下面の遺物包含層(IIa層)直下。

埋土 自然堆積で層相の違いによりA・Bの2層に大別される。

A層-粒~塊状の褐色土をわずかに混入する黒褐色土で、スコリア・カーボン粒を少量含む。

B層-粒状の褐色土を微量に混入するしまりのない黒褐色土で、スコリア・カーボン粒を少量含む。

炉の状態 住居跡の平面形中央からやや北西寄りに石囲炉を1基検出している。平面形は楕円形を呈し、14個の自然円礫で構成されている。規模は長軸（東西）0.69m、短軸0.54mをはかる。表層だけが焼けている火床面は楕円形を呈し、熱浸透層は厚さ4cm程をはかる。

壁の状態 床面から直壁ぎみに立ち上がる。

床の状態 ほぼ平坦である。

柱 穴 床面上に6口（P1～6）のピットを検出している。床面からの深さはP1-0.22m、P2-0.27m、P3-0.11m、P4-0.50m、P5-0.47m、P6-0.19mをはかる。P2・4・5が比較的深く構築され、太さ0.16～0.20mの柱痕跡をもつ。

土 器（第125図1～9）1は口縁が膨らみ底部が窄まる器形の深鉢である。器面にはRL単節縄文が縦位に施される。2はRLR複節縄文が施される深鉢底部である。3～5・8は口縁がやや内湾する深鉢口縁部で、隆沈線による文様が施される。7は隆沈線による縦位の文様帯には渦巻文などが加飾される深鉢体部で、地文にはRLR複節縄文が縦位に施される。9は隆沈線による縦位の文様帯にy字状の文様が加飾される。地文はRLR複節縄文が施されるものである。

石 器（第125図10～12）10は削器で、背面右側辺の連続した調整部分が刃部であり、下半部は被熱によりはじけている。11は敲石で側面に敲打痕がまとまって見られる。12は磨石であり、側面と裏面に磨り残された自然面が見られる。表裏面中央部には凹み部が形成されている。

土 製 品（第125図13）13は土偶の脚部と思われる。底面はやや丸底状を呈し、表面には縄文と沈線文が施されている。

石 製 品（第125図14）14は不定形の素材を全面研磨整形したものである。擦痕が多数残る。

R A2206竪穴住居跡（第123・124・126～128図）

位 置 縄文時代中期（大木8b-3式期）。

平 面 形 調査区南辺中央に位置する。

主軸方向 復元される長軸方向からN87°Eを示す。

規 模 不明であるが、東西（長軸）9～10m、南北5～6m程と推定される。

重複関係 RA2195・2213に切られ、RA2205・2208を切る。

検 出 面 耕作土（I a層）下面の遺物包含層（II a層）直下。

埋 土 自然堆積で層相の違いにより、A'・B'の2層に大別される。

A'層-粒～塊状の褐色土をわずかに混入する黒褐色土でカーボンを含む。

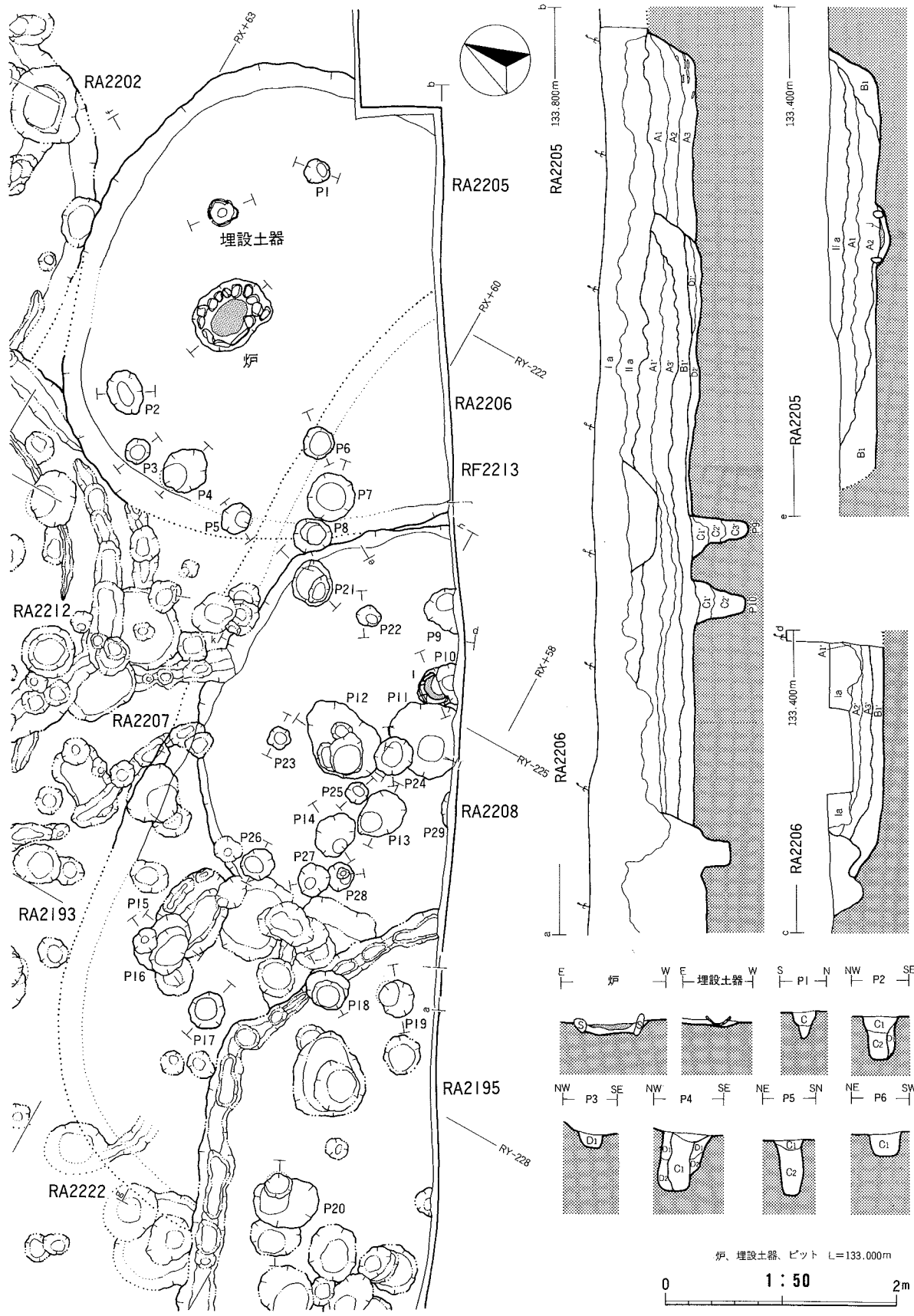
B'層-粒～塊状の褐色土を多量に混入する黒褐色土で多くのカーボンを含む。

炉の状態 未検出。

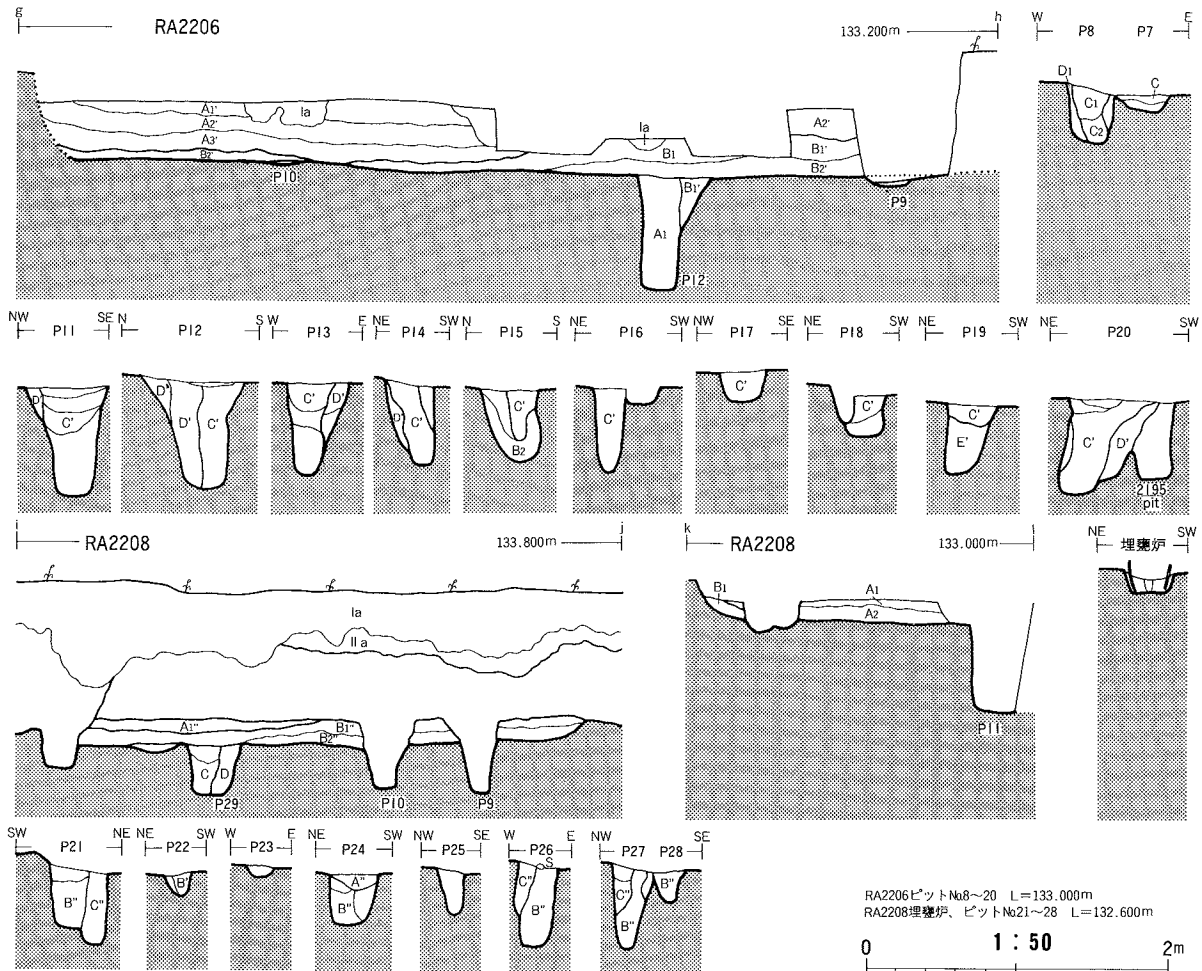
壁の状態 全体形の北壁の一部と調査区南壁で確認しており、床面から緩やかに立ち上がる。

床の状態 床下面の遺構埋土に影響され、やや起伏がある。なお、部分的に塊状の褐色土による貼床（D層）が構築されている。

柱 穴 床面上に14口（P7～20）のピットを検出している。床面からの深さは、P7-0.12m、P8-0.38m、P9-0.06m、P10-0.04m、P11-0.70m、P12-0.70m、P13-0.60m、P14-0.51m、P15-0.48m、P16-0.55m、P17-0.20m、P18-0.26m、P19-0.46m、P20-0.49mをはかる。柱痕跡はP7・9・10を除くピットに認められるが明確な柱配置は不明である。



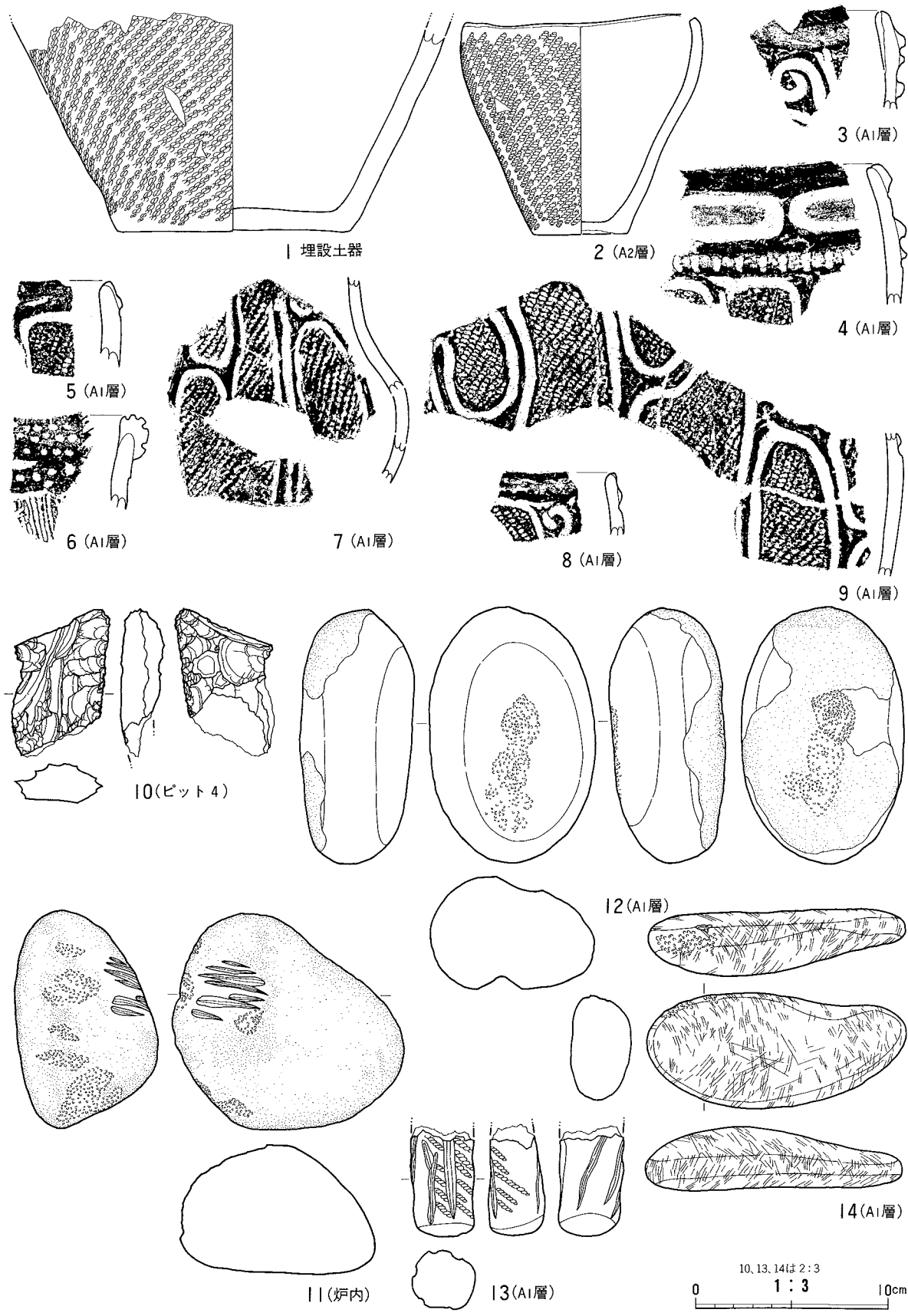
第123図 RA2205・2206・2208竪穴住居跡(1)



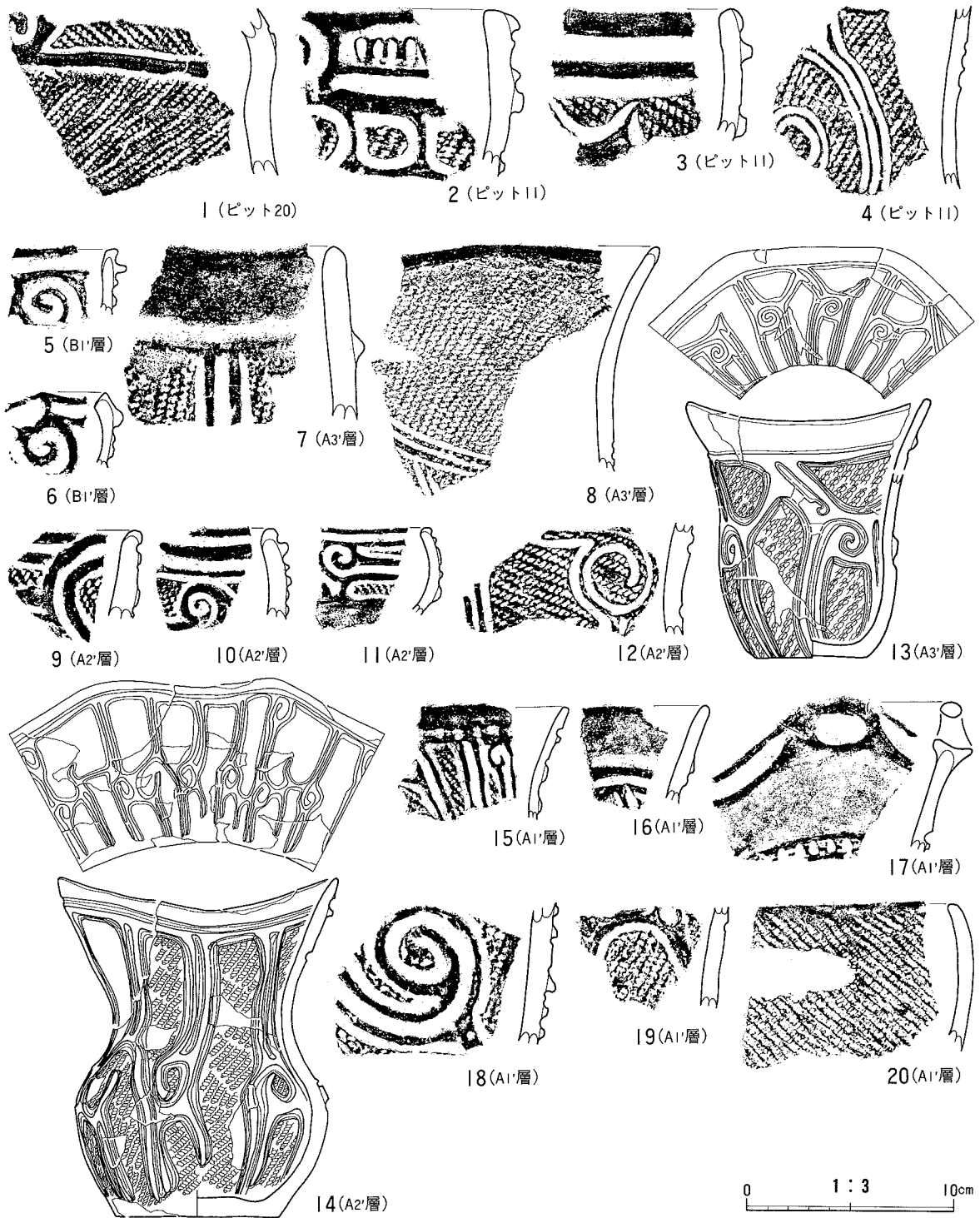
第124図 RA2205・2206・2208竪穴住居跡(2)

土 器(第126図) 1はキャリパー形深鉢の頸部である。体部はR L単節縄文を縦位に施す。2は隆沈線による文様が施される深鉢口縁部で、地文はR L R複節縄文を縦位に施したものである。3は口縁がやや内湾する深鉢口縁部で、棘のある隆沈線が施される。4は沈線による渦巻文が施される深鉢体部でR L R複節縄文が縦位に施される。5・6は隆沈線による渦巻文が施された深鉢口縁部である。7は口縁に無文帯をもつ深鉢口縁部で垂下する隆沈線を施し、地文はR L R複節縄文を施すものである。8は口縁が外反する深鉢で沈線による文様が施される。地文はR L R複節縄文を縦位に施すものである。9は隆沈線による円文が施された浅鉢である。10・11隆沈線による小渦巻文が施されたキャリパー形深鉢口縁部である。12は沈線による渦巻文と連結文が施された深鉢体部で、地文はL R L複節縄文を縦位に施す。

13・14は口縁が大きく外反する深鉢で口縁の波状下には無文帯が設けられ、体部には小渦巻文を取り込む縦位の文様帯が施される。地文は13がR L R複節縄文、14がR L単節縄文を縦位に施す。15・16は口縁が大きく外反する深鉢口縁部で、隆沈線による渦巻文・懸垂文が施される。17は突起をもつ深鉢口縁部でやや幅の広い無文帯が設けられる。18は隆沈線による渦巻文が施された深鉢体部で、地文にR L R複節縄文が施される。19は隆沈線による文様が施される深鉢体部で、地文にR L R複節縄文を縦位に施す。20は口縁が内湾する深鉢口縁部で、L R単節縄文を施す。

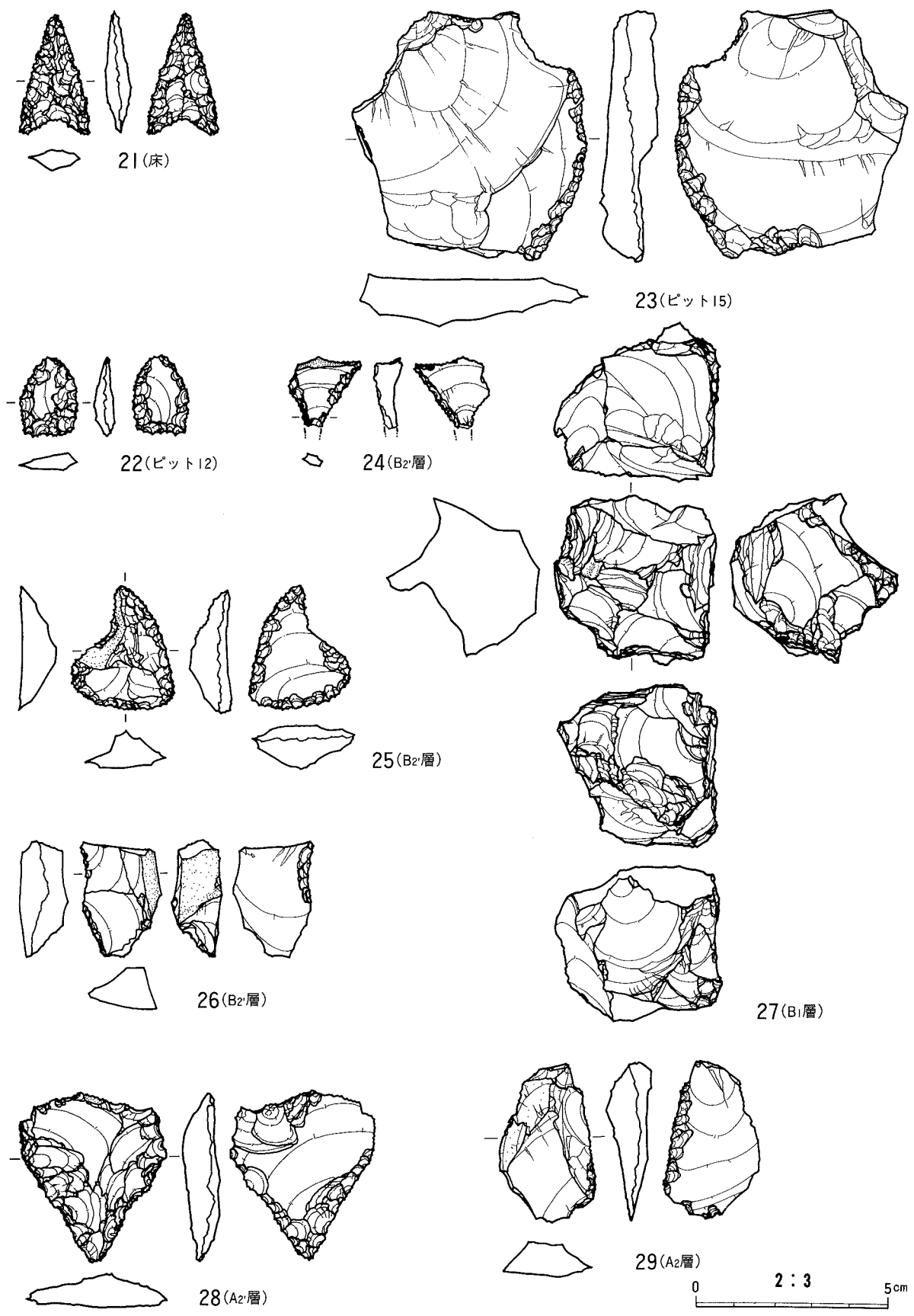


第125図 RA2205 竪穴住居跡出土土器・石器・土製品

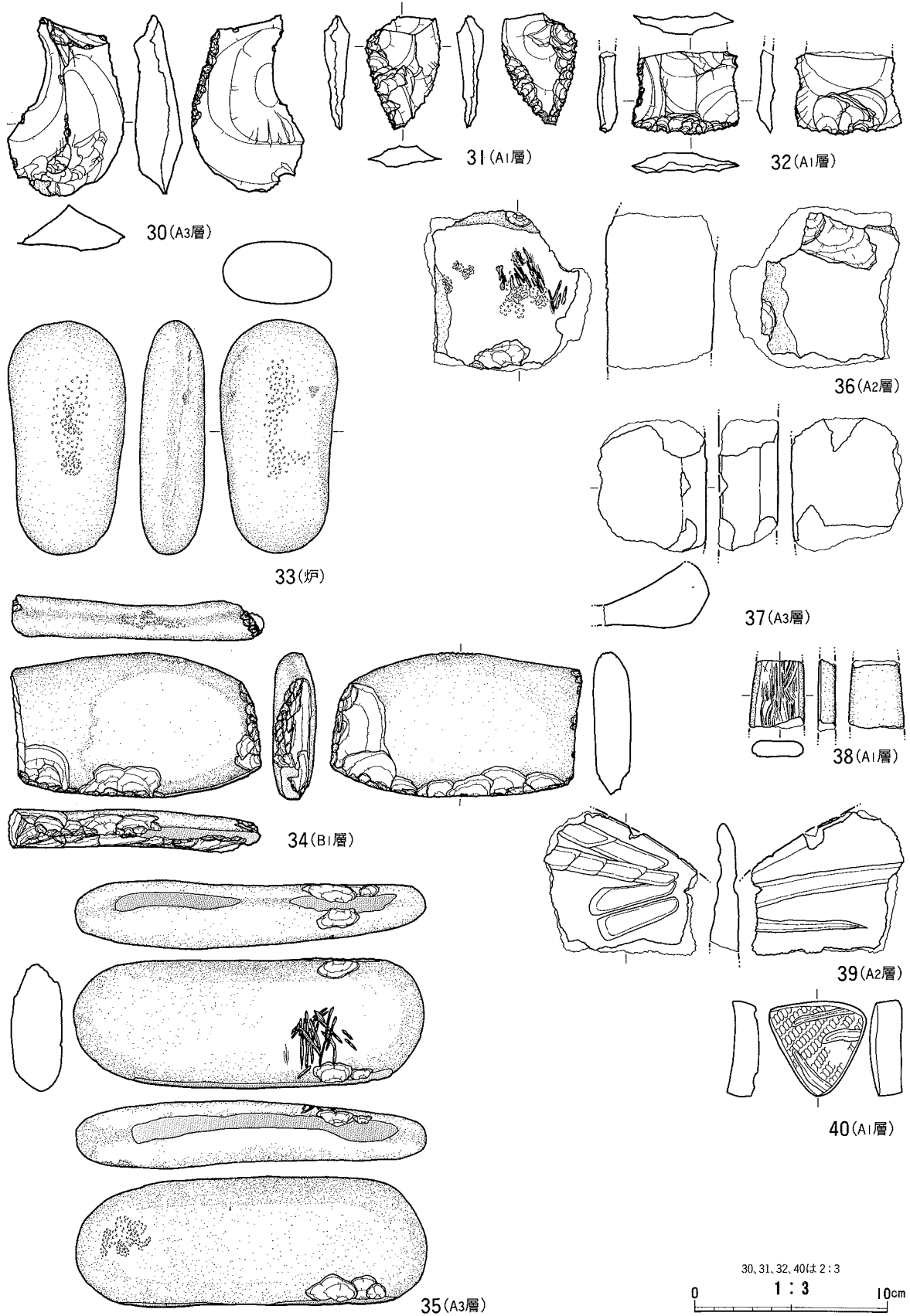


第126図 RA2206 竪穴住居跡出土土器

石 器 (第127・128図30~39) 21は両面調整の凹基無茎鏃、22は平基無茎鏃である。22は、基部の調整が急斜度でおこなわれている。23は削器で、一側刃を両面から弧状に整えている。24は錐部の大部分を欠損しているが、石錐と思われる。25・26は搔器であり、25は両面から周縁加工を施している。27は石核、28は石錐、29~32は削器である。28は尖端部を作出して錐部を形成している。30は背面・腹面の剥離痕により、打面を固定して剥離された横長の剥片を素材としており、連続的な調整で刃部を作出している。31は錐状の尖端部が見られるが、一側刃を両面から調整した削器



第127図 RA2206 竪穴住居跡出土石器(1)



第128図 RA2206 竪穴住居跡出土石器(2)・土製品

である。32は素材剥片の末端に調整し、直線的な刃部を形成したものである。

33は敲石を炉石に転用したものであるが、敲打痕はそれほど顕著ではない。34・35は敲打磨石で、35は敲打磨面が二面形成され、表面には溝状の条痕と擦痕が見られる。36・37は石皿で、36は全体のうち中央部付近が残存したもので、重量のある部厚な礫を素材としている。表裏面ともに使用されており、表面には鼠歯状痕や敲打痕も見られる。37はなだらかな縁が形成されている。38・39は砥石であり、38は小形偏平礫の表面に擦痕が多数見られる。使用の方向はほぼ一定である。39は裏面の中央部を横位に施した溝状の条痕に沿って破損したものが接合した資料で、表裏面ともに機能面である。

土製品（第128図40）40は三角形土製品で、土製円盤と同様、土器片を利用して作られたものである。

RA2208竪穴住居跡（第123・124・129図）

時期 縄文時代中期（大木8a-2式期）。

位置 調査区南辺中央に位置する。

平面形 全体形の南側は調査区外に広がるが、円形～楕円形を呈する。

主軸方向 柱配置と炉からN75°Eと推定される。

規模 全体形の南側は調査区外に広がり、さらに重複する遺構により切られるが、東西（主軸）3.9～4.2m、南北3.8m程と推定される。

重複関係 RA2195・2193・2205・2206に切られる。

掘込面 既に削平されている。

検出面 RA2206床構築土下面。

埋土 自然堆積で層相の違いにより、A''・B''の2層に大別される。

A''層—粒状の褐色土を微量に混入する堅くしまりのよい黒褐色土でスコリア粒を少量含む。

B''層—粒状～塊状の褐色土を多量に混入する黒褐色土。

炉の状態 想定される全体形の東西中軸線からやや東寄りに石囲炉1基を検出した。平面形はほぼ円形を呈し、南側をRA2206のP10に切られている。規模は直径0.32mをはかり、5個の自然円礫が残存している。熱浸透層の厚さは0.04m程である。

壁の状態 床面から緩やかに立ち上がる。

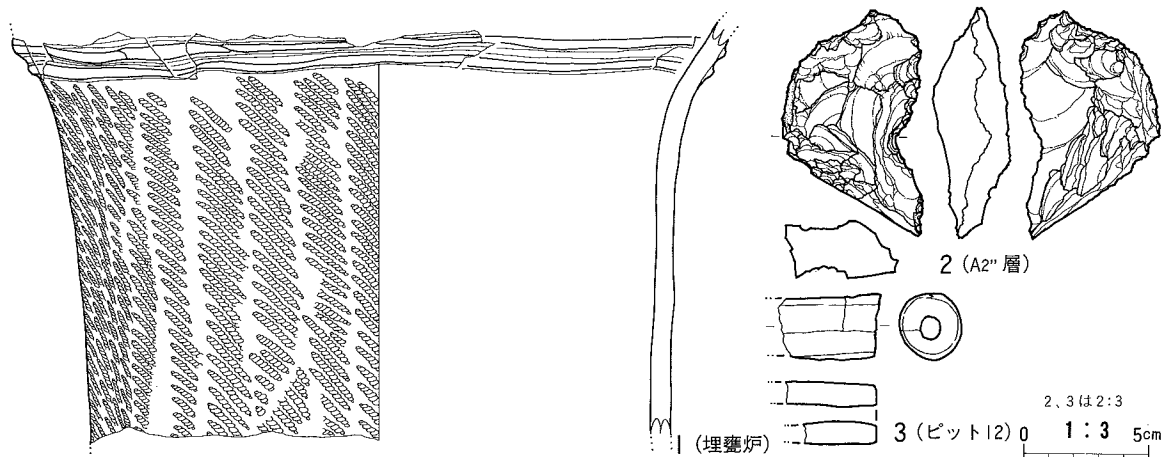
床の状態 やや起伏があるが平坦である。

柱穴 床面上に29口（P21～29）のピットを検出している。このうちP21・24・26は支柱穴を構成するピットで、4本の構成と考えられる。各ピットの床面からの深さは、P21-0.48m、P22-0.14m、P23-0.08m、P24-0.33m、P25-0.27m、P26-0.51m、P27-0.52m、P28-0.18m、P29-0.31mをはかる。埋土は、柱痕跡（B''層）は軟質で粒状の黒褐色土で、掘方（C''層）は、粒～塊状の黒褐色土となっている。

土器（第129図1）1はキャリパー形深鉢の頸部から体部にかけての部位で、頸部には2条の隆線が横位に施文され、体部はLR単節縄文を縦位に施している。

石器（第129図2）2は両面調整石器である。背面右側辺には細かい調整によりノッチ状の刃部が作出されている。背面に自然面が若干残っている。

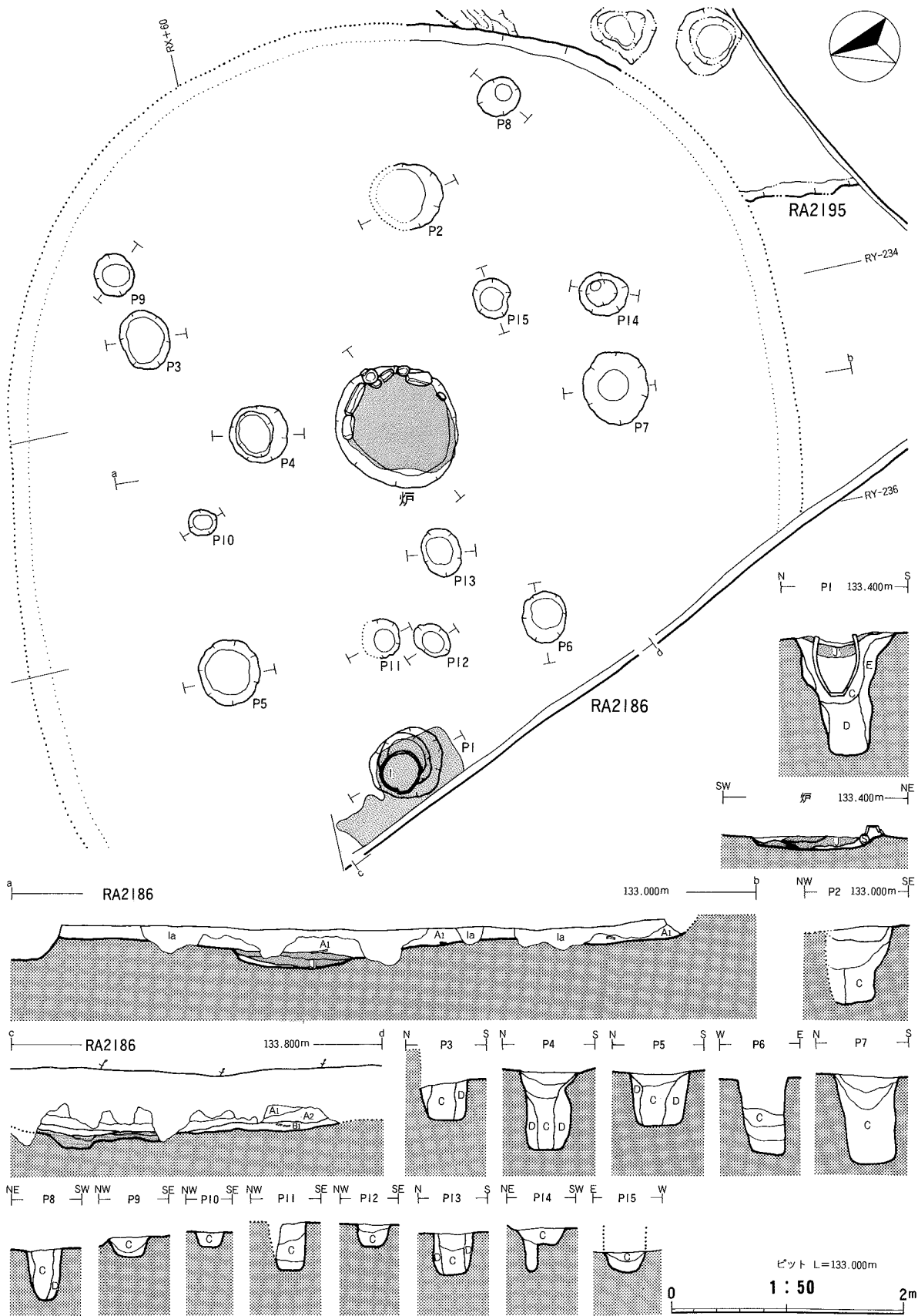
木製品（第129図3）3は円筒状の木製品である。



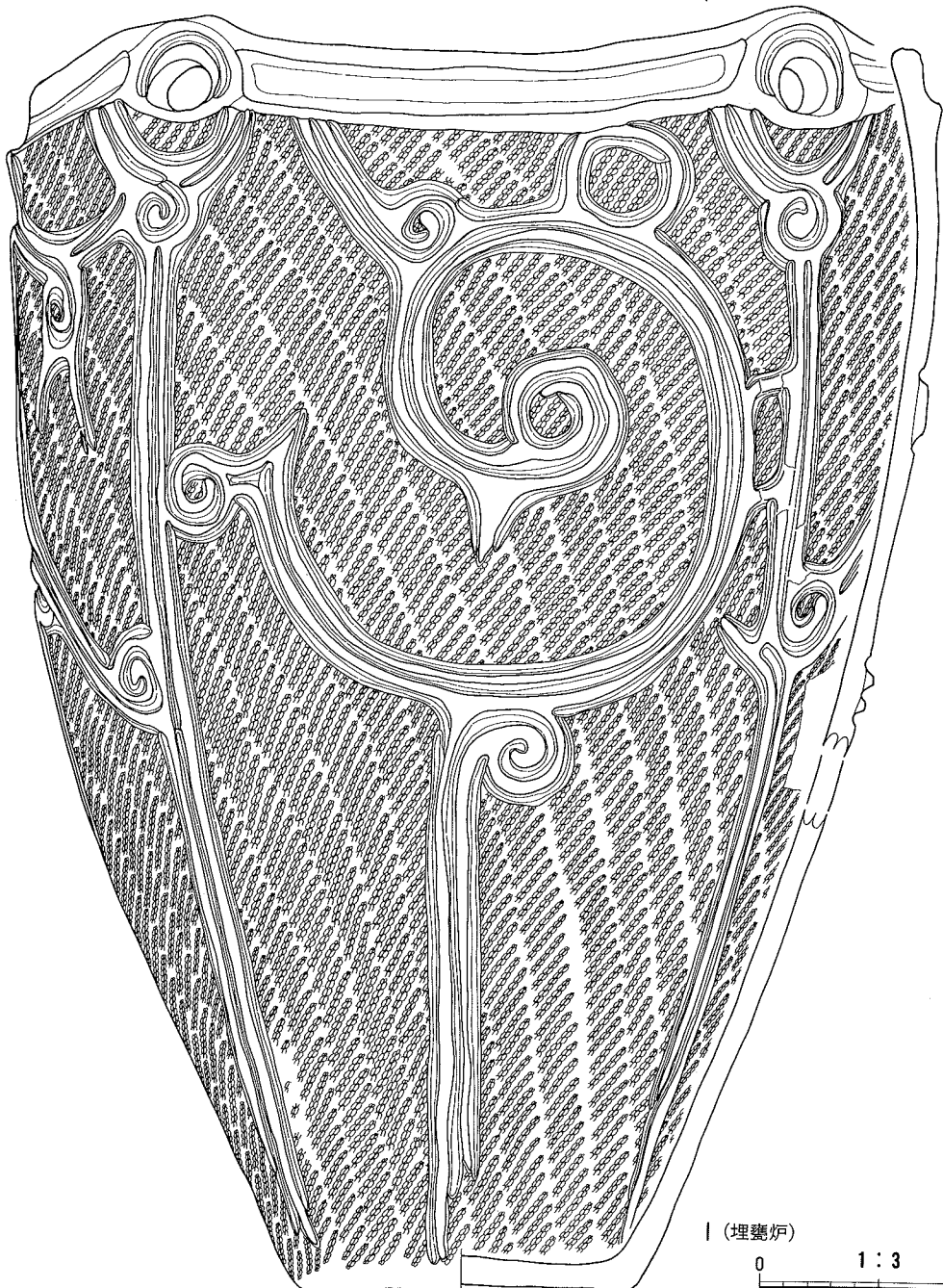
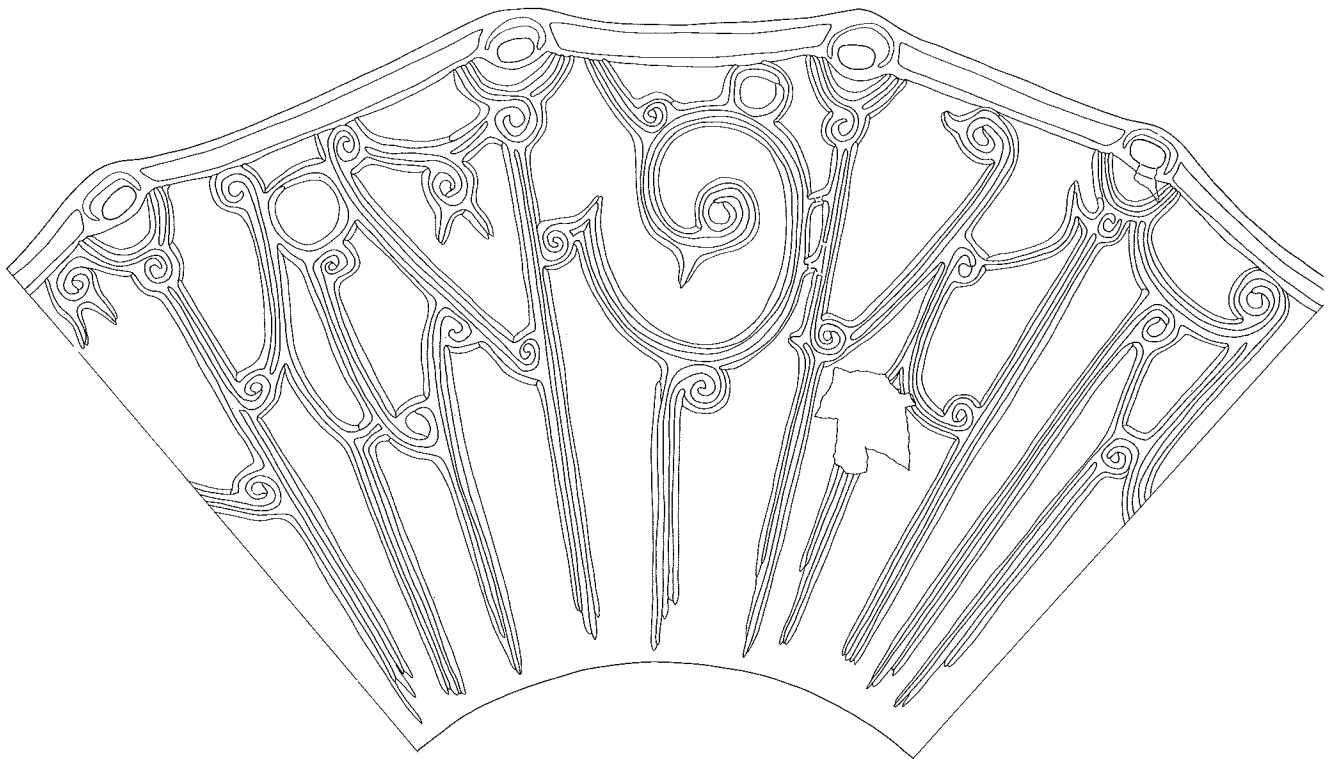
第129図 RA2208竪穴住居跡出土土器・石器・木製品

RA2186竪穴住居跡 (第130～137図)

- 時期** 縄文時代中期 (大木8b-3式期)。 **位置** 調査区南西に位置する。
- 平面形** 楕円形を呈すると推定される。平面形の壁は東側の一部だけ残存している。
- 主軸方向** 検出した石囲炉と埋甕炉を主軸とした場合、E12°Sを示す。
- 規模** 全体形は耕作土に大きく削平され、また東端は調査区外に広がる。柱穴配置から復元される規模は、東西 (長軸) 7.8m、南北6.8mをはかる。
- 重複関係** RA2185・2193・2194・2195・2197・2201・2218を切る。
- 掘込面** 既に削平されている。
- 検出面** 耕作土 (Ia層) 直下。
- 埋土** 自然堆積で層相の違いによりA・Bの2層に大別される。
 A層—粒状の褐色土をやや多く混入する堅い黒褐色土で、スコリア・カーボン・焼土粒を含む。
 B層—粒状の褐色土を微量に混入する黒色土で、スコリア粒は少量であるがカーボンを多く含む。
- 炉の状態** 床面上のほぼ中央に石囲炉1基と、この西側に埋甕炉1基を検出している。石囲炉の平面形は楕円形を呈する。炉石は平面形の東側だけに検出され、自然円礫8個を配置している。なお、西側には炉石の抜き取り痕跡が検出されない事から当初からないものと考えられた。平面形の規模は、1.12×1.0m、熱浸透層は厚さは11cm程をはかる。火床面は2時期認められる。埋甕炉は、P1を切って甕を正立に埋設した炉である。規模は、甕内部の熱浸透層の厚さは0.07mをはかる。
- 壁の状態** 全体形の東端の一部だけが残存しており、底面から緩やかに立ち上がる。
- 床の状態** やや起伏がある。
- 柱穴** 床面上に15口 (P1～15) のピットを検出している。このうち主柱穴を構成するピットはP1・2・3・5～7の6本柱で、六角形の配置であるが、P1は埋甕炉が切っている事から柱穴として機能せず、5本柱の配置に変遷している。なお、その他のピットは主柱穴より小規模である。各ピットの床面からの深さは、P1-1.05m、P2-0.65m、P3-0.32m、P4-0.66m、P5-0.44m、P6-0.67m、P7-0.75m、P8-0.42m、P9-0.16m、P10-0.11、P11-0.40m、P12-0.19m、P13-0.35m、P14-0.36m、P15-0.16mをはかる。埋土は、柱痕跡が粉～粒状の褐色土を微量に混入する軟質な黒褐色土 (C層)。掘方が塊状の褐色土を混入する黒褐色土 (D層) である。



第130図 RA2186竪穴住居跡

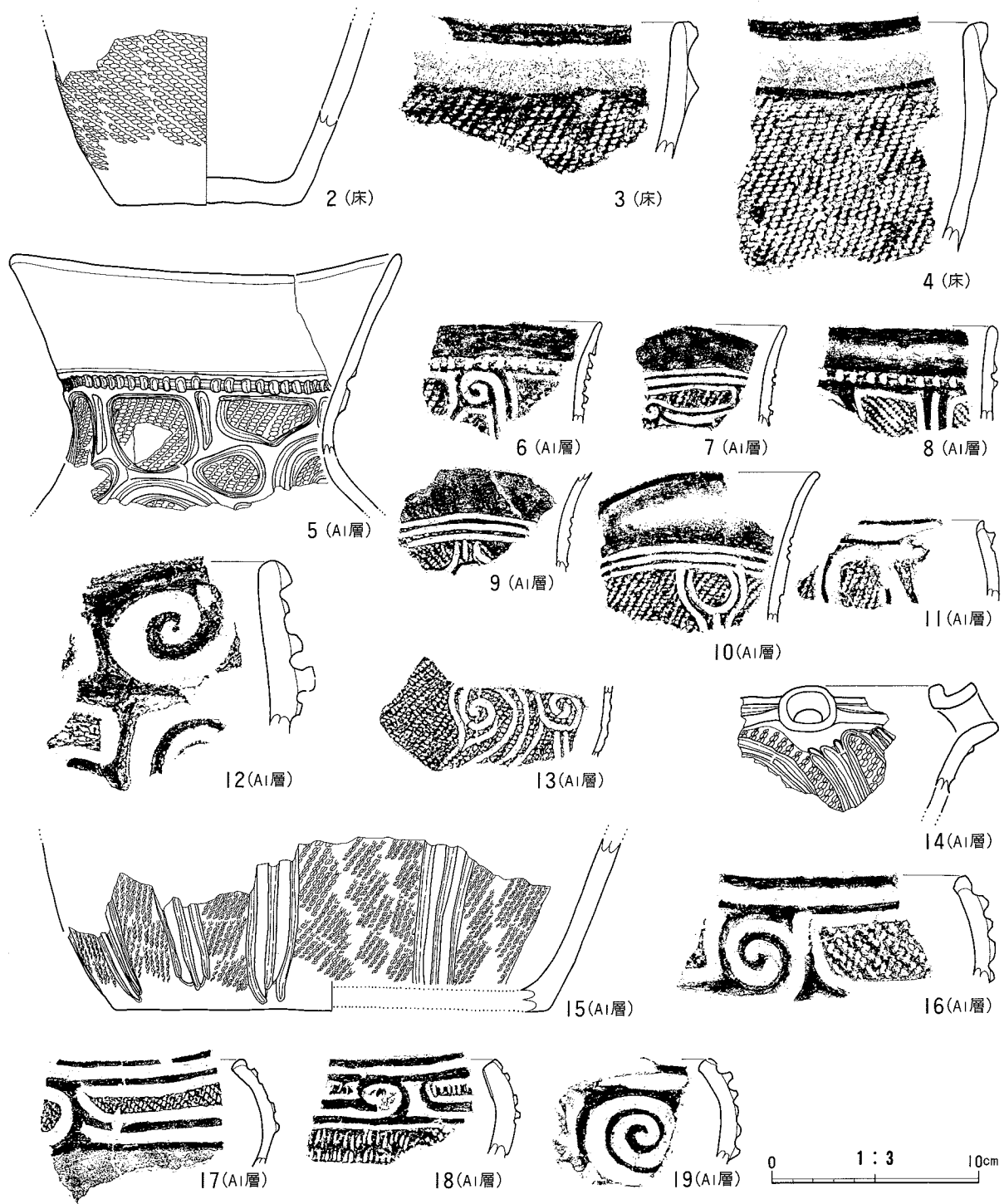


1 (埋甕炉)

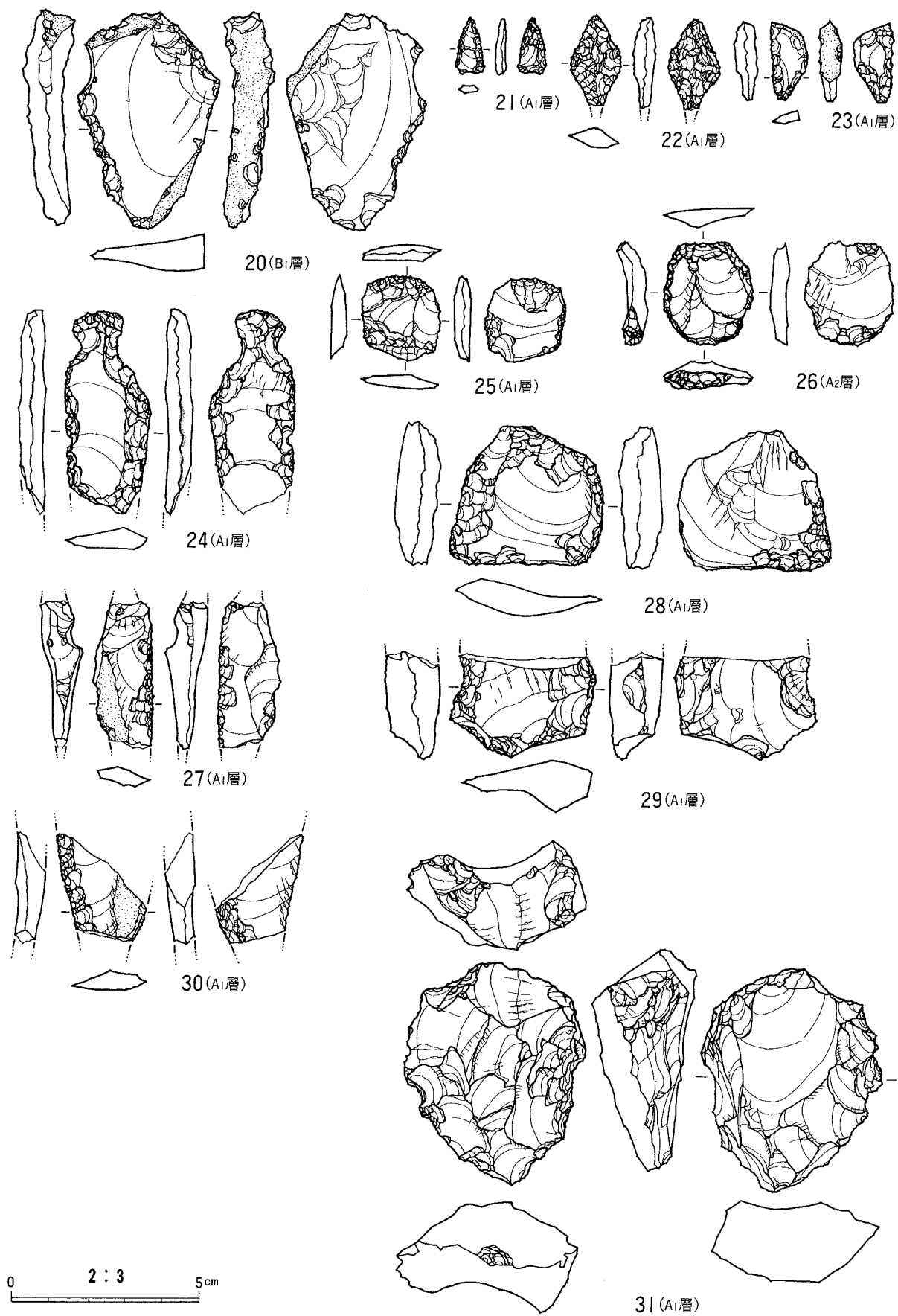
157

0 1:3 10cm

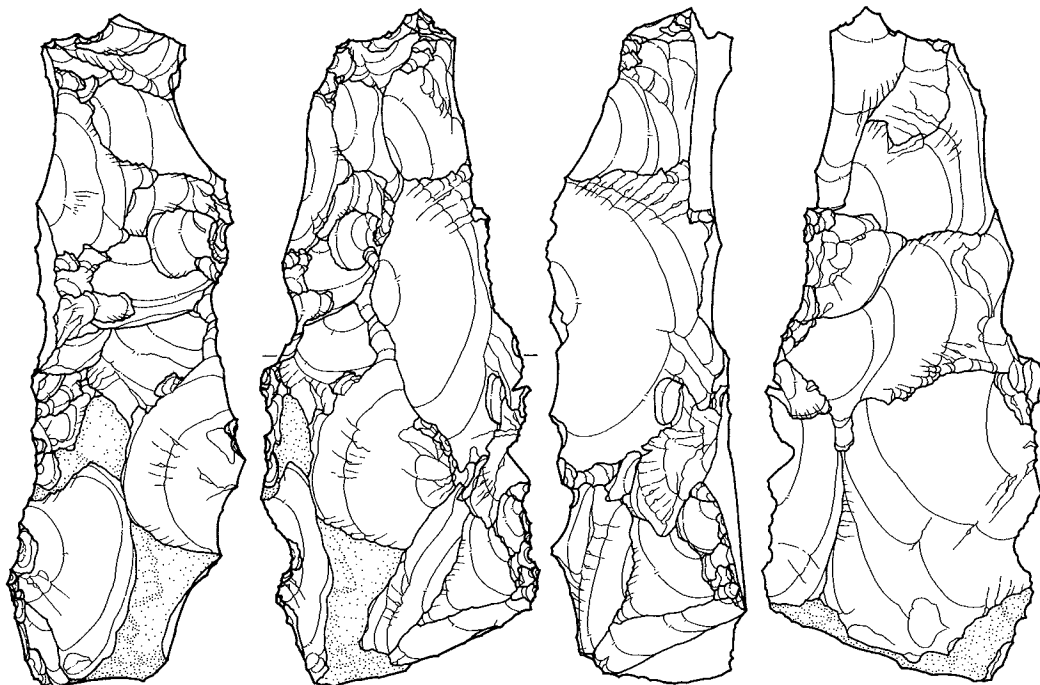
第131图 RA2186竖穴住居跡出土土器(1)



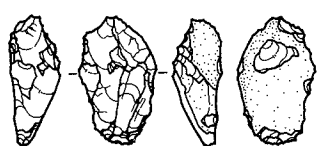
第132図 RA2186竪穴住居跡出土土器(2)



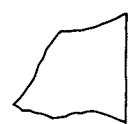
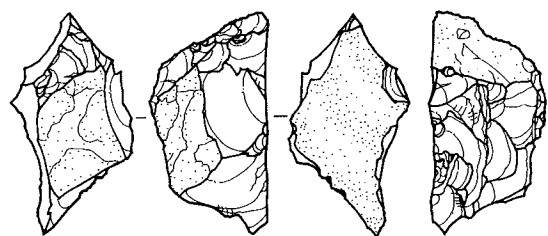
第133図 RA2186竪穴住居跡出土石器(1)



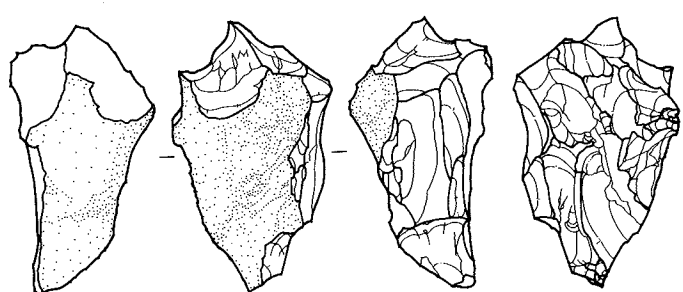
32(A1層)



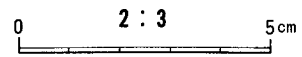
33(A1層)



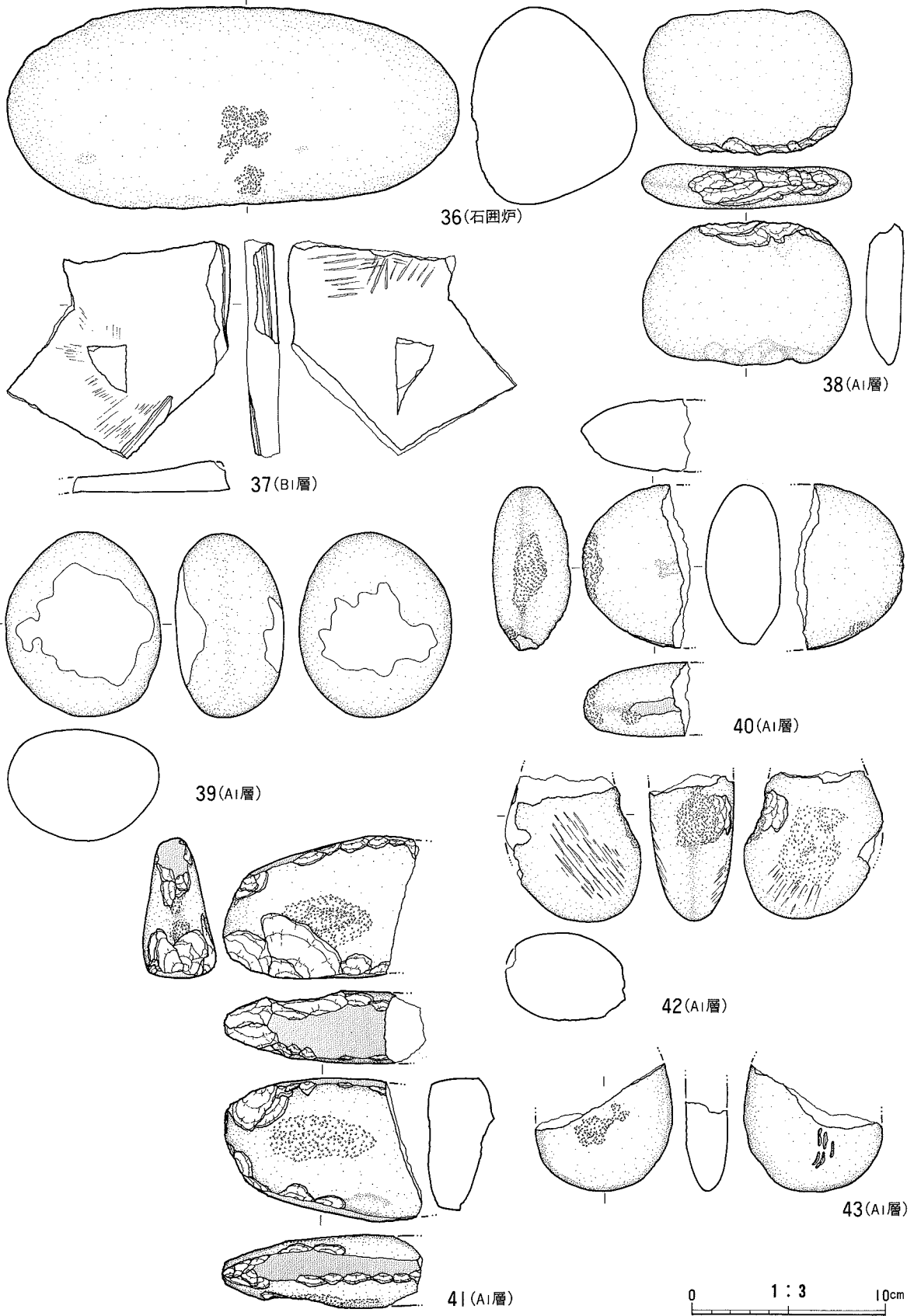
34(A1層)



35(A1層)



第134図 RA2186豎穴住居跡出土石器(2)

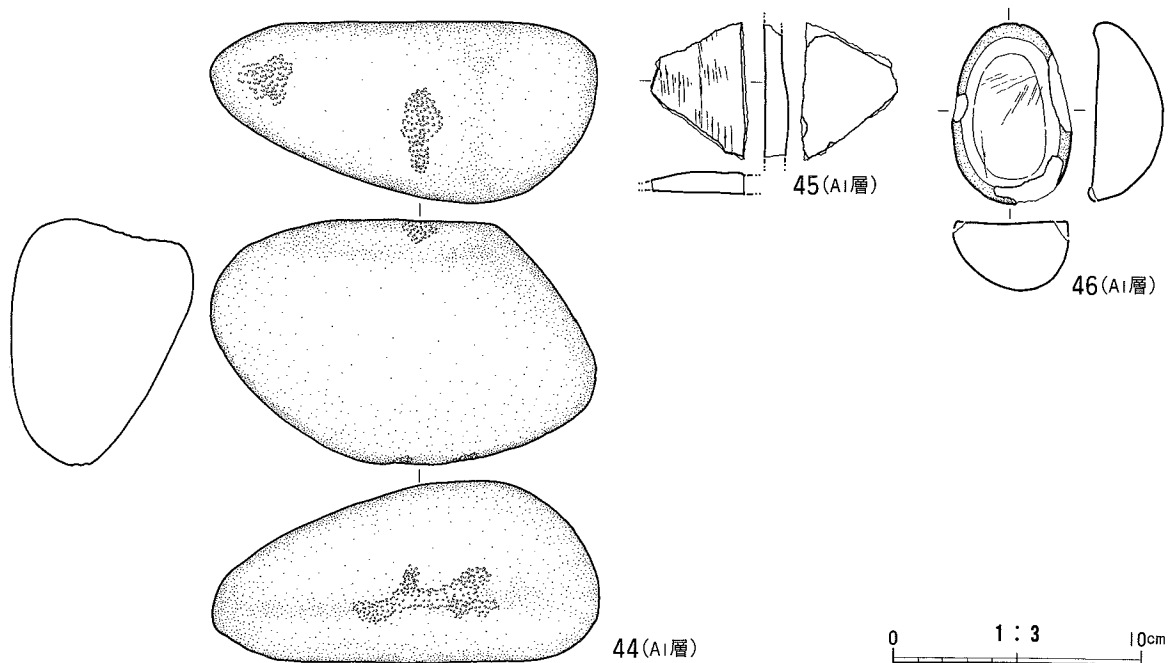


第135图 RA2186竖穴住居跡出土石器(3)

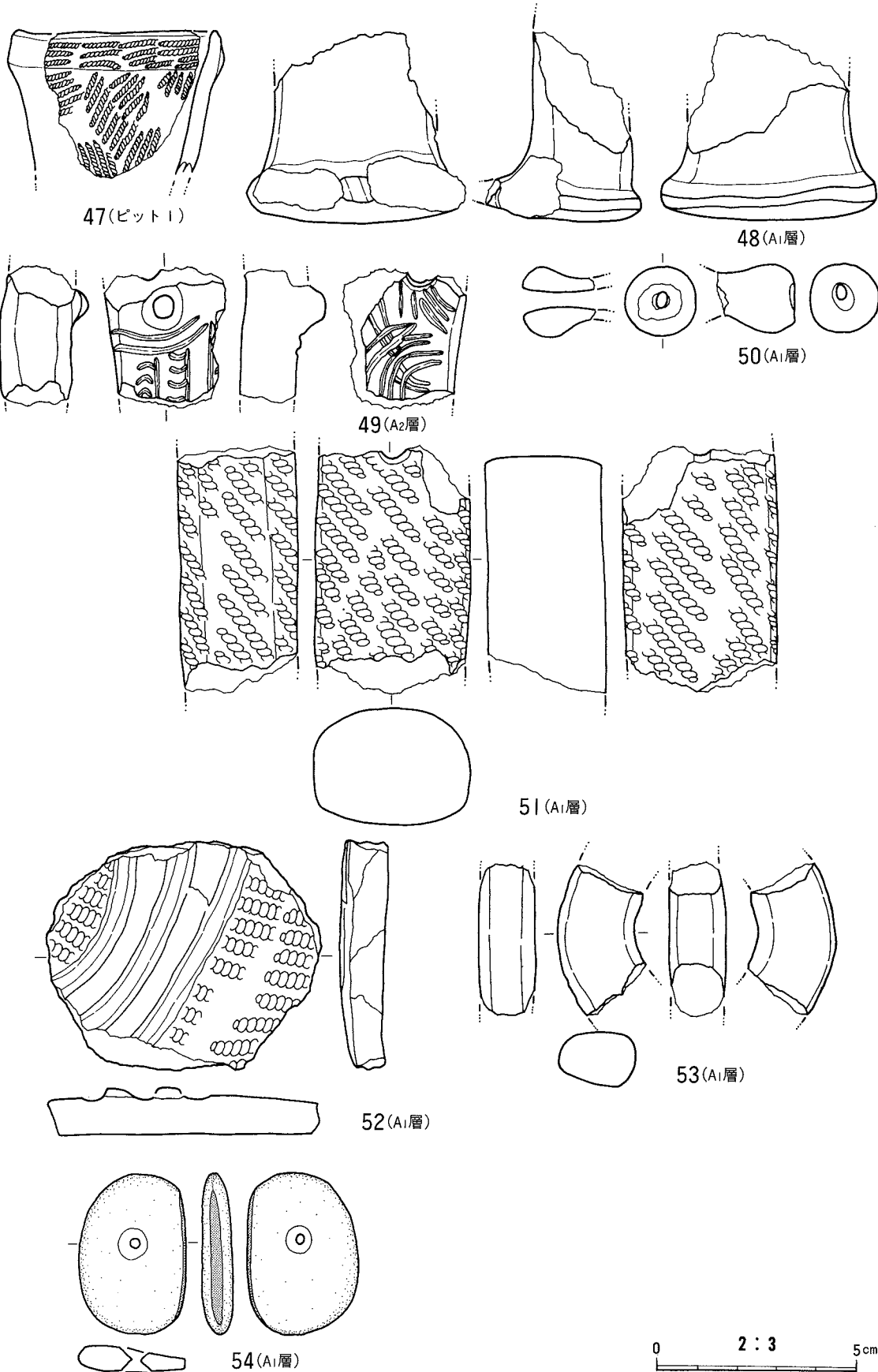
土 器 (第131・132図) 1は緩い波状口縁を呈し、波頂下に孔をもった深鉢である。体部上半には隆沈線による有棘大渦巻文を中心に小渦巻文・y字状文・円文が連結して施され、下半は上部文様帯から垂下する懸垂文が施される。地文はR L R複節縄文を縦位に施すものである。2はL R単節縄文を縦位に施す深鉢底部である。3・4は口縁に無文帯が設けられる深鉢口縁部で、R L単節縄文が縦位に施されるものである。5～10は外反する波状口縁を呈し、口縁に無文帯をもつ深鉢である。5は体部に隆沈線による円・楕円状の区画文をランダムに配置するもので、地文はR L単節縄文を斜位に施す。6は隆沈線による小渦巻文を起点に懸垂文を施し、地文にはR L R複節縄文を施すものである。7は弧状の隆沈線によって小渦巻文を連結させるものである。地文はR L R複節縄文を施す。8は隆沈線による渦巻文と考えられる文様が施されるもので、地文はL R単節縄文を施すものである。9・10は沈線による円文が施されるものである。9はL R L複節縄文、10はR L単節縄文を縦位に施すものである。

11は口縁が内湾する深鉢口縁部で、隆沈線による渦巻文が施される。地文はR L R複節縄文を施すものである。12は波状部に渦巻文を配し、波状下にも渦巻文を施すものである。13は沈線による有棘渦巻文が施される深鉢体部で、地文はR L R複節縄文を斜位に施すものである。14はやや上向きの注口部をもつ浅鉢である。体部は隆沈線による文様が施され、地文はR L R複節縄文を施すものである。16～19は浅鉢口縁部で、16・19は隆沈線による渦巻文、17・18は円文を起点に口縁部文様帯が構成される。

石 器 (第133～136図) 20は削器で横長剥片の末端に刃部を作出している。連続的な調整であるが、平面観では稜の出入りが大きい。21は凹基無茎鏃である。22は凸基無茎鏃で、先端部に未調整の部分が残っている。23の石錐は尖端部が摩滅している。24は縦型の石匙で、末端を欠損しており、側面に光沢が見られる。25・27～30は削器、26は搔器である。25・26は上辺の調整の方法はよく似



第136図 RA2186竪穴住居跡出土石器(4)



第137図 RA2186竪穴住居跡出土土製品・石製品

ているが、末端は25は第一次剥離面の鋭い縁辺をそのまま残しているのに対して、26は急斜度の調整を施している。27は縁辺にはより細かい剥離が並んでいる。31の両面調整石器は尖端部がややつぶれているので、敲く作業に使用されたものではないか。形状としては握槌に近いものである。32も両面調整石器であるが、自然面を残し、刃部と思われる調整も施されていないため、未成品と思われる。33は楔形石器と考えられる。34・35は石核で、ともに自然面を残している。

36は台石で、中央部に敲打痕が見られる。37は表裏両面と側面に擦痕がブロックをなして形成されている。38は礫器で、偏平な礫の一辺に両面から剥離を施し刃部としている。39は二面の磨面をもつ磨石、40・41は敲打磨石である。敲打磨石はどちらも表裏面と側面に敲打痕を持ち、破損している。42・43は敲石で、42は擦痕、43は鼠歯状痕を併せ持つ。44は台石、45・46は砥石である。46は、半球状の礫の平坦部を機能面としている。

土製品 (第137図47～52) 47はミニチュア土器で口縁部はやや内湾し、体部とともに縄文が施されている。48は土偶の脚部であり、かなり大形のものと思われる。49は土偶の上半部で、貼付による突起と、穿孔が施される。50は破損しているため、正確な形状は不明であるが、側面がくぼんだ管状の土製品と思われる。51は斧状土製品であり、上部に穿孔されている。他に出土したものに比して厚みがある。52は土製円盤である。

石製品 (第137図53・54) 53は有孔石製品で、丁寧に磨かれている。54は小形の偏平な礫に穿孔したもので、側面が磨かれている。孔は両側からあけられている。

RE 2188 竪穴跡 (第138～157図)

時期 縄文時代中期 (大木 8 b - 3 式期)。

位置 調査区中央に位置する。

平面形 不整楕円形を呈する。

主軸方向 支柱穴の配置から長軸線 (南北) は、 $W87^{\circ}N$ を示す。

規模 東西 5.97 m、南北 (主軸) 7.69 m をはかる。

重複関係 RF 2223 に切られ、RA 2185・2193・2197・2199・2207・2212・2222、RD 2140・2151 を切る。

掘込面 既に削平されている。

検出面 耕作土 (I a 層) 直下。

埋土 自然堆積で層相の違いにより、A・B・C・D の 4 層に大別される。

A 層 - 粒～塊状の褐色土をわずかに混入する黒褐色土で、焼土粒を含む。

B 層 - 粒～塊状の褐色土をわずかに混入する暗褐色土で、カーボン・焼土粒を多く含む。

C 層 - 粒～塊状の褐色土を微量に混入する黒褐色土で、カーボンを多量に含む。特に C 1 層はカーボンだけの層となっている。

D 層 - 粒～塊状の褐色土を微量に混入する黒褐色土で、カーボンとスコリア粒を少量含む。

炉の状態 なし。

壁の状態 平面形の北西側から南側にかけては、床面からほぼ直壁に立ち上がるが、その他は緩やかに立ち上がる。

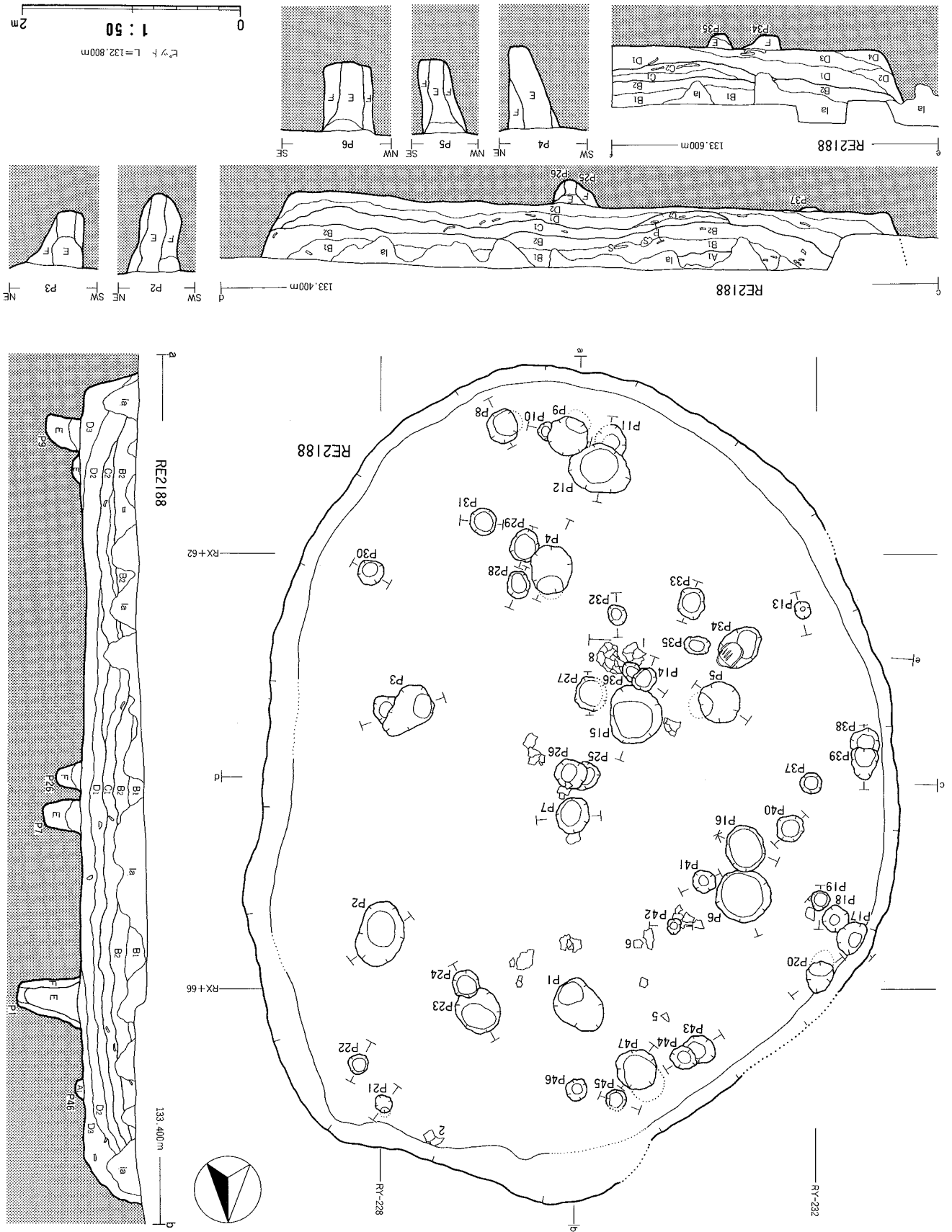
床の状態 やや起伏があるが平坦である。

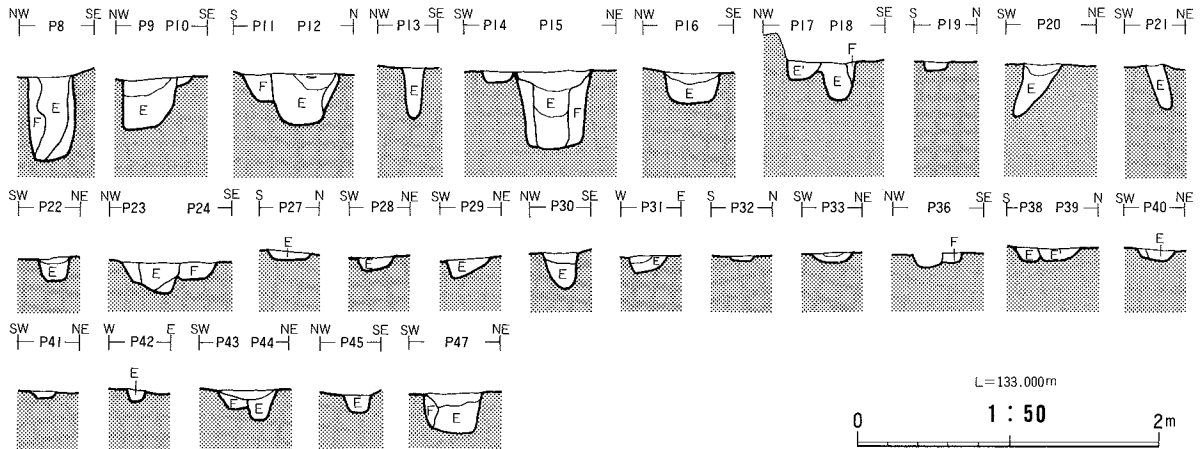
柱 穴 床面上に47口(P 1～47)のピットを検出している。このうち支柱穴を構成するピットは6口(P 1～6)で、6本柱による亀甲形の配置を示す。床面からの深さは、P 1-0.60m、P 2-0.70m、P 3-0.52m、P 4-0.75m、P 5-0.68m、P 6-0.62mをはかる。これらの柱痕跡は住居跡の中心から外側に傾いている。なお、P 7・8・9・12・15も比較的規模が大きいピットで床面からの深さは、P 7-0.35m、P 8-0.55m、P 9-0.31m、P 12-0.31m、P 15-0.50mをはかる。その他はいずれも小規模なピットである。埋土は、柱痕跡(E層)が軟質の暗褐色土。掘方(F層)が褐色～黄褐色土と黒褐色土との塊状混合土である。

土 器(第140～143図) 1は口縁形態が波状を呈し、波状部が無文となる深鉢である。体部は隆沈線による渦巻文・懸垂文が施され、地文にはR L R複節縄文が縦位に施される。2・4は口縁がやや内湾する深鉢口縁部である。3は隆沈線による渦巻文が施される深鉢体部上半部で、地文はR L単節縄文を縦位に施すものである。5は隆沈線による懸垂文が施された深鉢下半部で、R L R複節縄文が縦位に施される。6はR L R複節縄文が施される深鉢口縁部である。7は体部が膨らむ深鉢で、隆沈線による大渦巻文を中心に小渦巻文・懸垂文が連結して施される。地文はR L R複節縄文を縦位に施す。8は口縁が内湾し、口縁部下に1条の隆帯を巡らす深鉢である。体部はR L R複節縄文を縦位に施すもので底部付近では横位に回転させる。9は体部がやや膨らむ深鉢で、隆沈線による有棘渦巻文・懸垂文が施される。地文はL R単節縄文を縦位に施すものである。10は吊手状把手をもつ浅鉢で、体部には隆沈線による有棘渦巻文・懸垂文が施される。地文はR L R複節縄文を斜位に施したものである。11は口縁に渦巻文を施す突起をもつ浅鉢で、体部にはR L R複節縄文が縦位に施される。12は緩い波状を呈し、口縁が内湾する深鉢である。体部には隆沈線による渦巻文・小渦巻文が2条1組の隆沈線で連結されて施文される。地文はR L R複節縄文を縦位に施すものである。13～15は同一個体で、口縁は緩い波状を呈するものである。口縁下には渦巻文を起点とした狭い区画帯が設けられ、区画内は刺突によって充填される。体部は隆沈線による渦巻文・懸垂文が施され、地文は斜位の櫛目文を施すものである。16は隆沈線による有棘渦巻文を施すものである。17は口縁形態が波状を呈し、波状部が無文となる深鉢である。体部には隆沈線による渦巻文・懸垂文が施され、地文はR L R複節縄文を縦位に施す。18・19は深鉢口縁部で、19は孔のある突起をもち、突起下に渦巻文を施したものである。20は沈線による懸垂文が施された深鉢底部で、R L単節縄文が施される。21・22は口縁形態が波状を呈し、波状部が無文となる深鉢である。体部には隆沈線による文様が施され、21はR L R複節縄文、22はR L単節縄文が施される。23は隆沈線による渦巻文を横位に展開させるものである。24は隆沈線による渦巻文・懸垂文が施された深鉢体部で、25は沈線によるものである。地文は24・25ともにR L R複節縄文を施すものである。26・27は隆沈線による渦巻文を口縁部文様帯に配し、渦巻文を起点に横位に区画文を展開させるものである。28は隆沈線による懸垂文が施された深鉢底部で、地文はR L R複節縄文を縦位に施すものである。29は孔のある波状部をもつ深鉢口縁部である。波状下には隆沈線による渦巻文を配するもので、口縁部文様帯下は無文帯となる。30・31は隆沈線による渦巻文・懸垂文が施された深鉢底部で、地文はR L R複節縄文を縦位に施すものである。

32は口縁がやや外反して立ち上がる深鉢口縁部で、口縁下には幅の狭い無文帯が設けられ、体部には隆沈線による渦巻文が施される。地文はR L単節縄文を施すものである。33は孔のある波状部をもつ深鉢口縁部で、波頂下には隆沈線による渦巻文が施され、渦巻文より隆沈線が垂下す

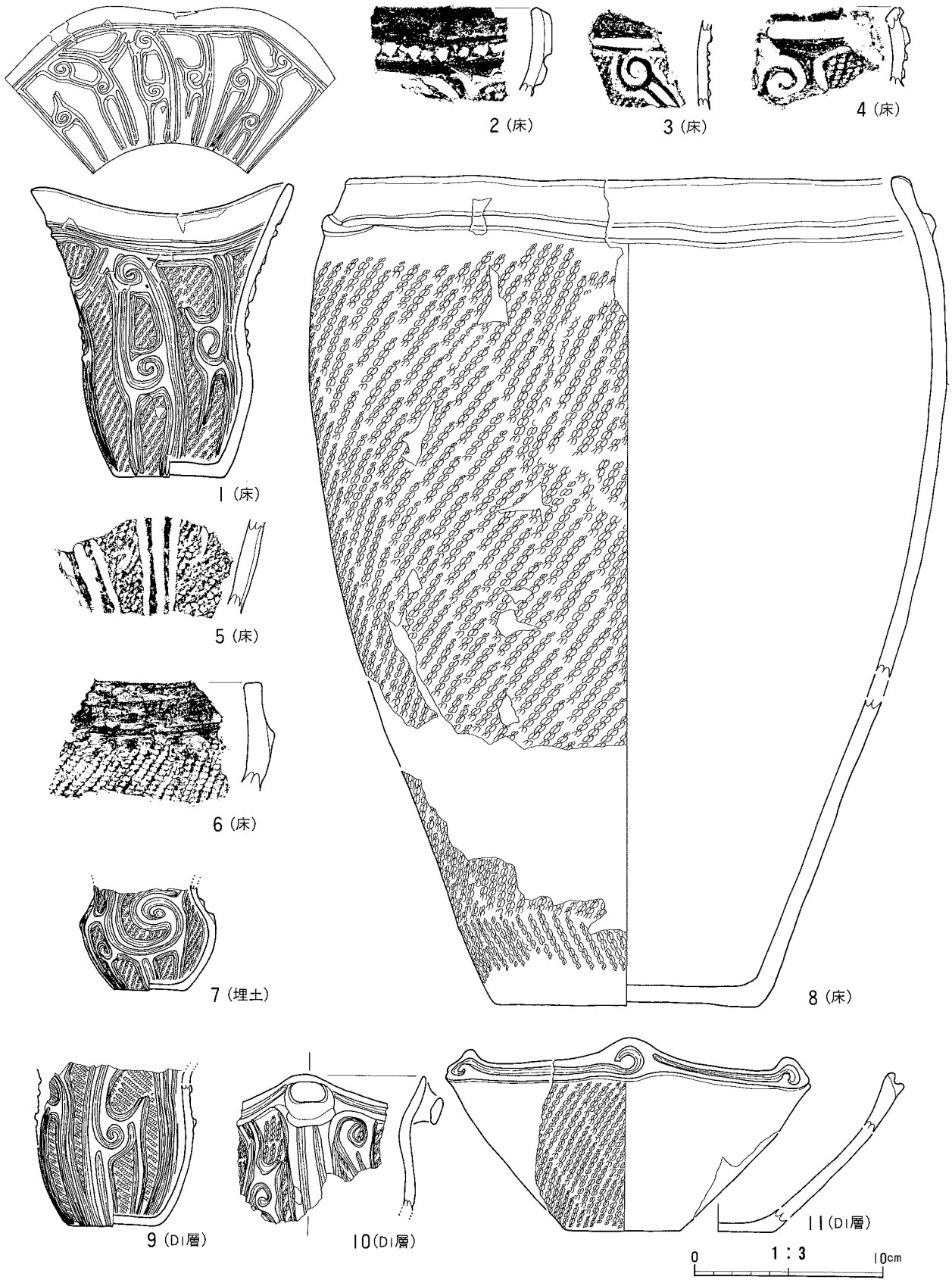
第138図 RE2188竪穴跡(1)





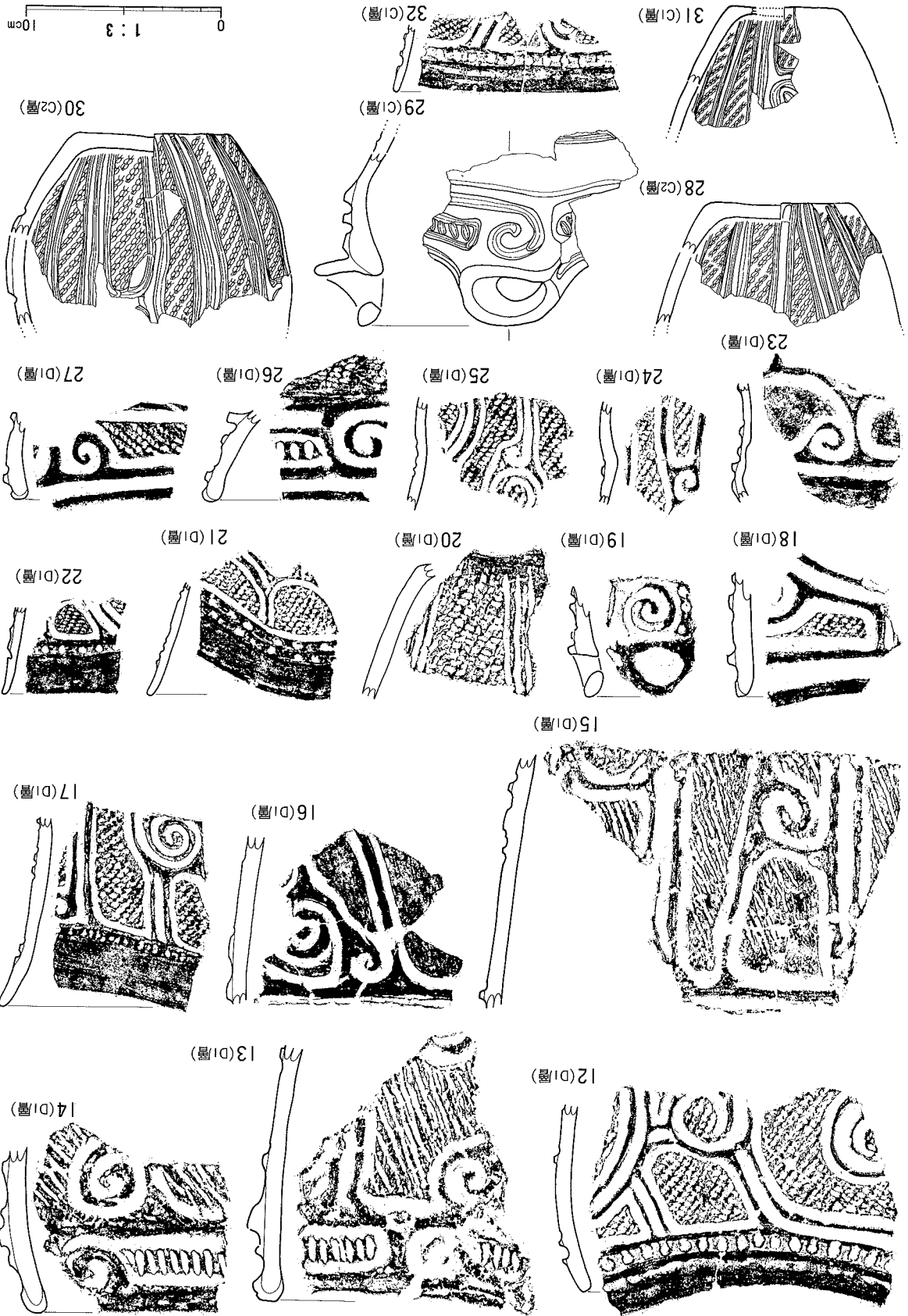
第139図 RE2188 竪穴跡(2)

るものである。地文はR L R 複節縄文を縦位に施すものである。34は渦巻文を加飾する突起をもつキャリパー形深鉢口縁部である。35～37は口縁がやや内湾する深鉢口縁部である。35は隆沈線による小渦巻文が連結するもので、36・37は口縁下に配された渦巻文を起点に懸垂文を施すものである。地文は35～37ともにR L R 複節縄文を縦位に施す。38・39は隆沈線による渦巻文を起点とした懸垂文・連結文が施される深鉢体部で、ともにR L R 複節縄文が縦位に施される。40～42は地文のみの深鉢口縁部で、40-R L 単節縄文、41-L R 単節縄文、42-R L R 複節縄文が縦位に施されるものである。43・44・46・47は屈曲のある深鉢体部から底部にかけてのもので、隆沈線による縦位の文様帯が発達する。文様帯は渦巻文・楕円文などから構成される。地文は43・44・46-R L R 複節縄文、47-L R 単節縄文が縦位に施される。45・48は底部を欠く深鉢で、45は隆沈線による渦巻文・楕円文から構成される文様帯と、連結部となる小渦巻文が施された深鉢である。地文はR L R 複節縄文を縦位に施すものである。48は沈線による渦巻文・楕円文から構成される文様帯がほどこされた深鉢で、地文はR L R 複節縄文を縦位に施す。49は口縁部文様帯に渦巻文と楕円文を交互に配置するもので、体部にはR L R 複節縄文を斜位に施すものである。50は口縁がやや内湾する深鉢口縁部である。器面に施された小渦巻文は2条1組の隆沈線によって連結され、地文にはR L R 複節縄文が施されるものである。51・52は口縁が外反する深鉢で、外反部に無文帯が設けられるものである。弧状に施文された隆沈線は渦巻文と連結し、渦巻文より隆沈線が垂下する。地文は51-R L R 複節縄文、52-R L 単節縄文が縦位に施される。53はL R 単節縄文が施される深鉢口縁部である。54・57は口縁がやや外反する深鉢口縁部で、沈線による渦巻文が施される。55・56は口縁がやや内湾する深鉢で隆沈線による渦巻文が施されるものである。ともにR L R 複節縄文が縦位に施される。58は隆沈線による渦巻文が施され、渦巻文より2条1組からなる懸垂文が垂下される。地文はR L R 複節縄文が縦位に施されるものである。59・61は隆沈線による渦巻文・懸垂文が施された深鉢底部で、地文はR 絡条体を縦位に回転施文するものである。60は屈曲のある深鉢体部から底部にかけての部位で、隆沈線による縦位の文様帯が発達する。文様帯は渦巻文・楕円文などから構成され、地文はR L R 複節縄文が施されるものである。62は口縁部文様帯に渦巻文・楕円文・円文を配置する浅鉢で、体部にはL R 単節縄文を斜位に施すものである。

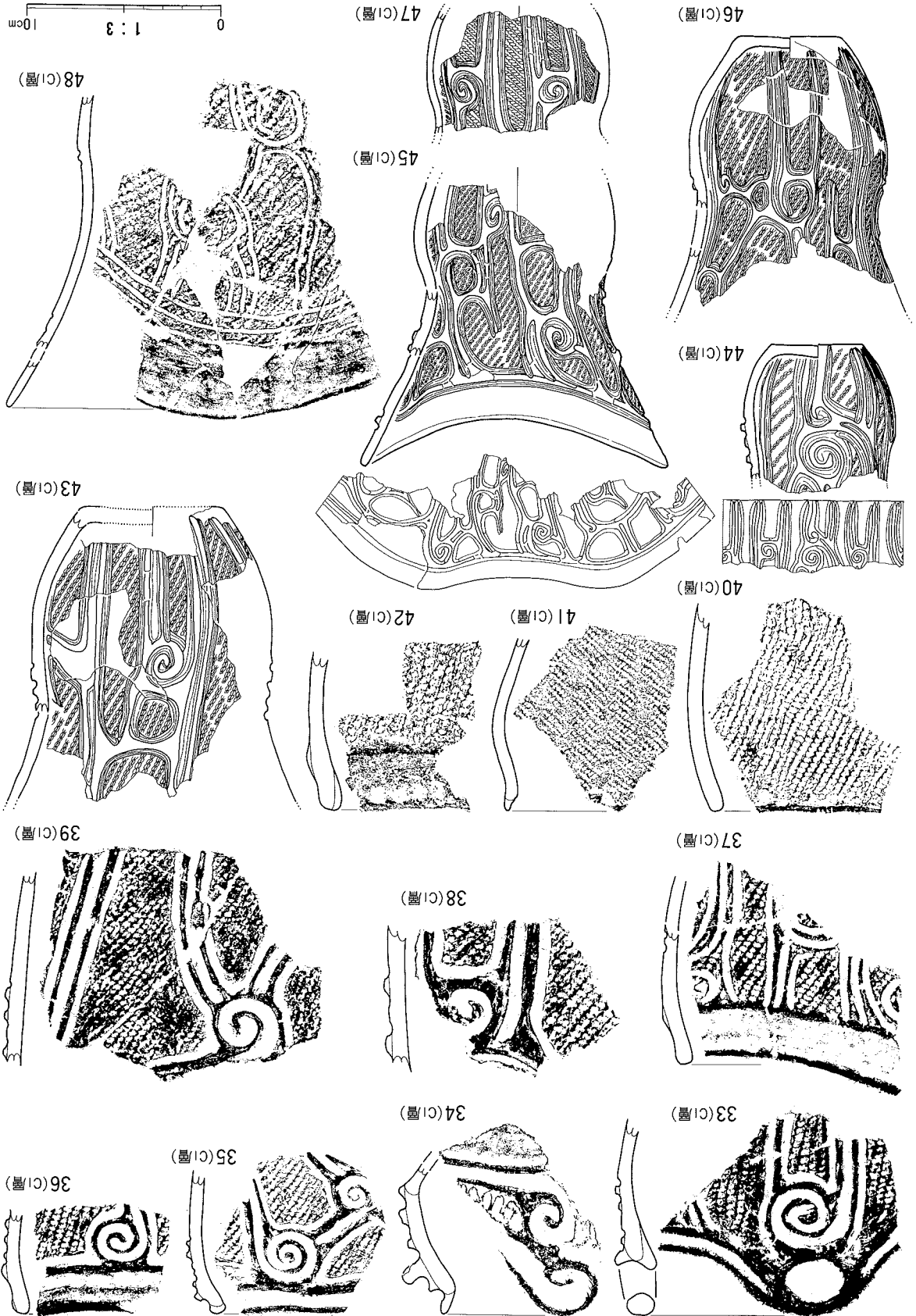


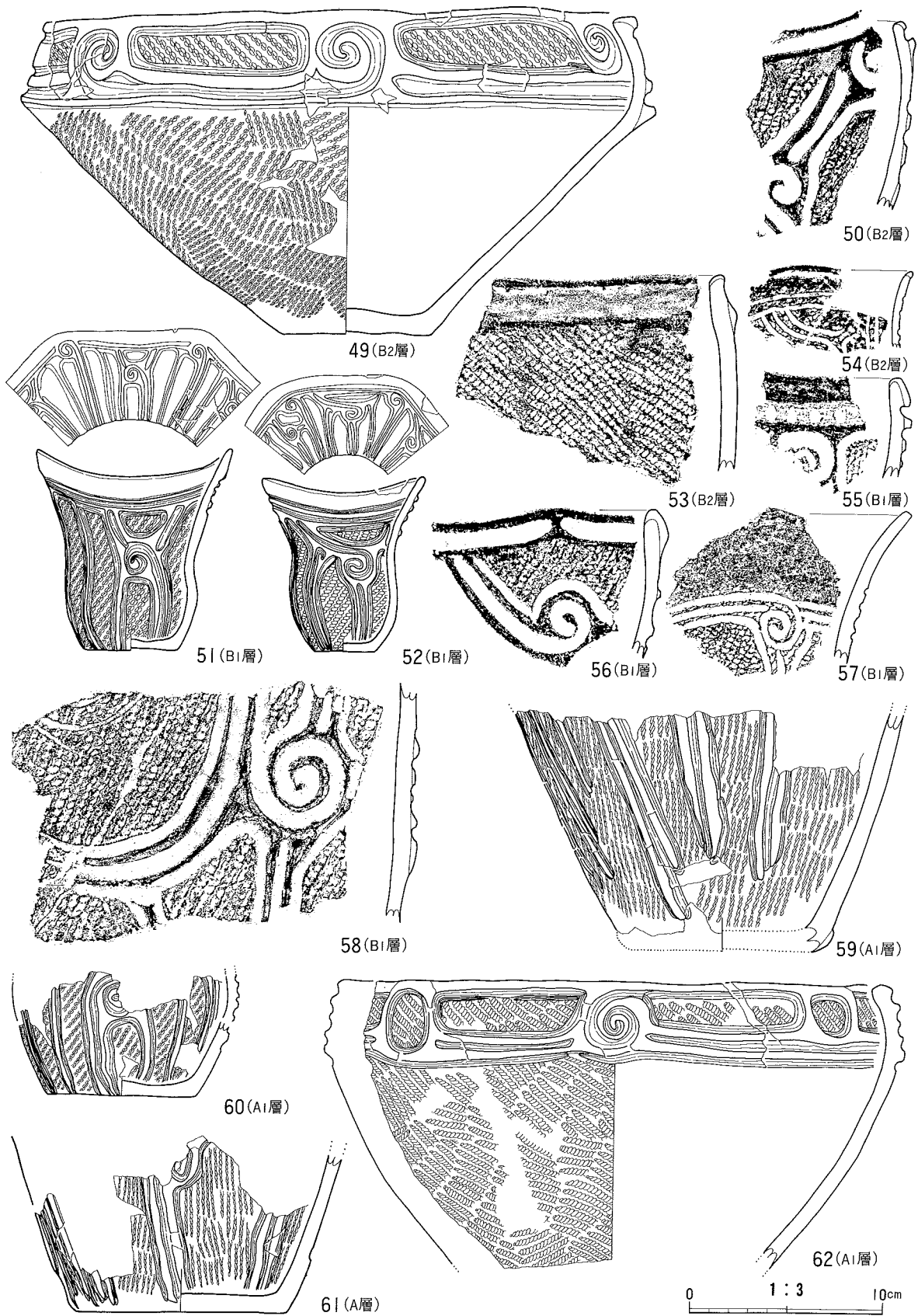
第140図 RE2188豎穴跡出土土器(1)

第141圖 RE2188 豎穴跡出土土器(2)



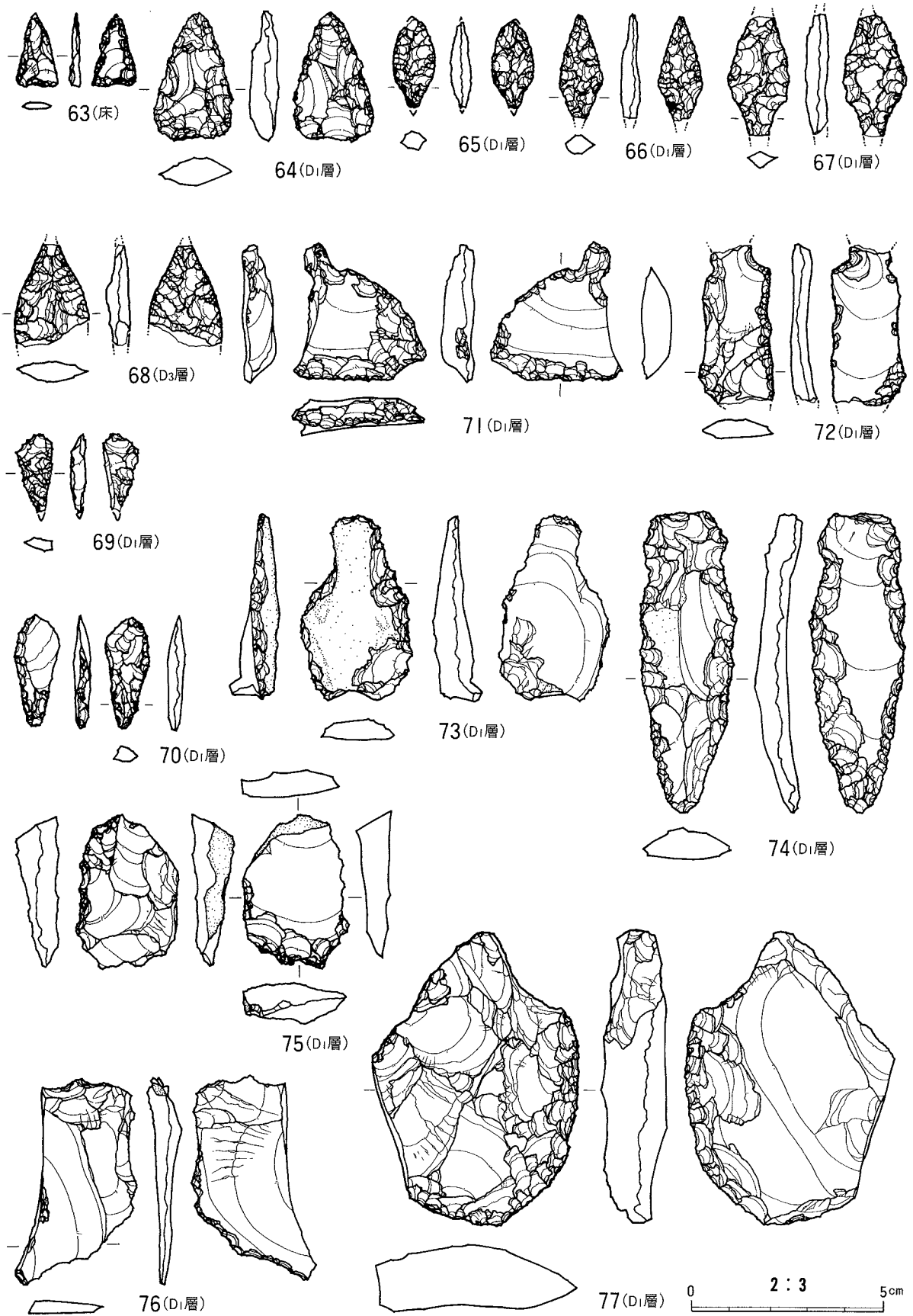
第142図 RE2188 竪穴跡出土土器(3)



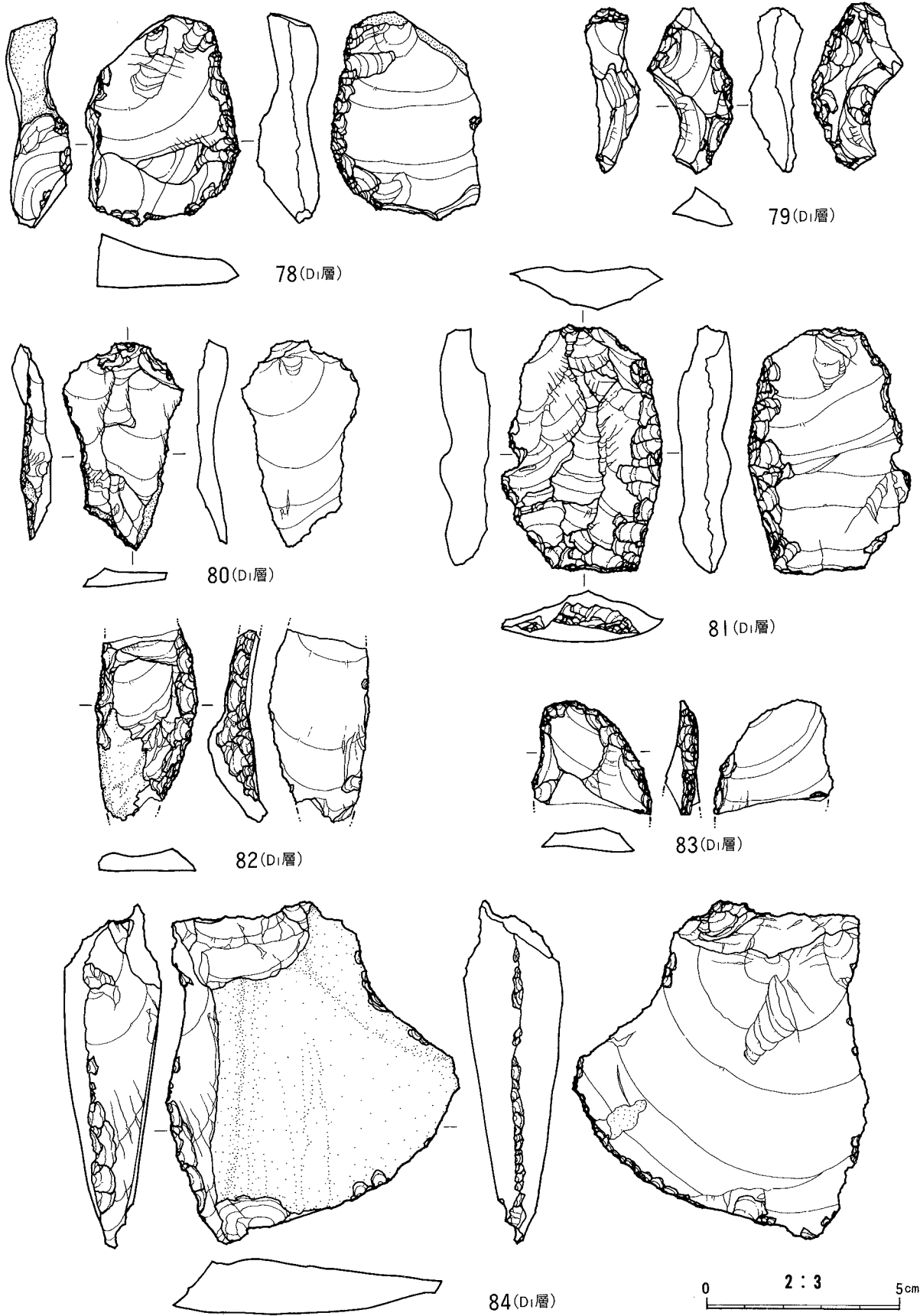


第143圖 RE2188豎穴跡出土土器(4)

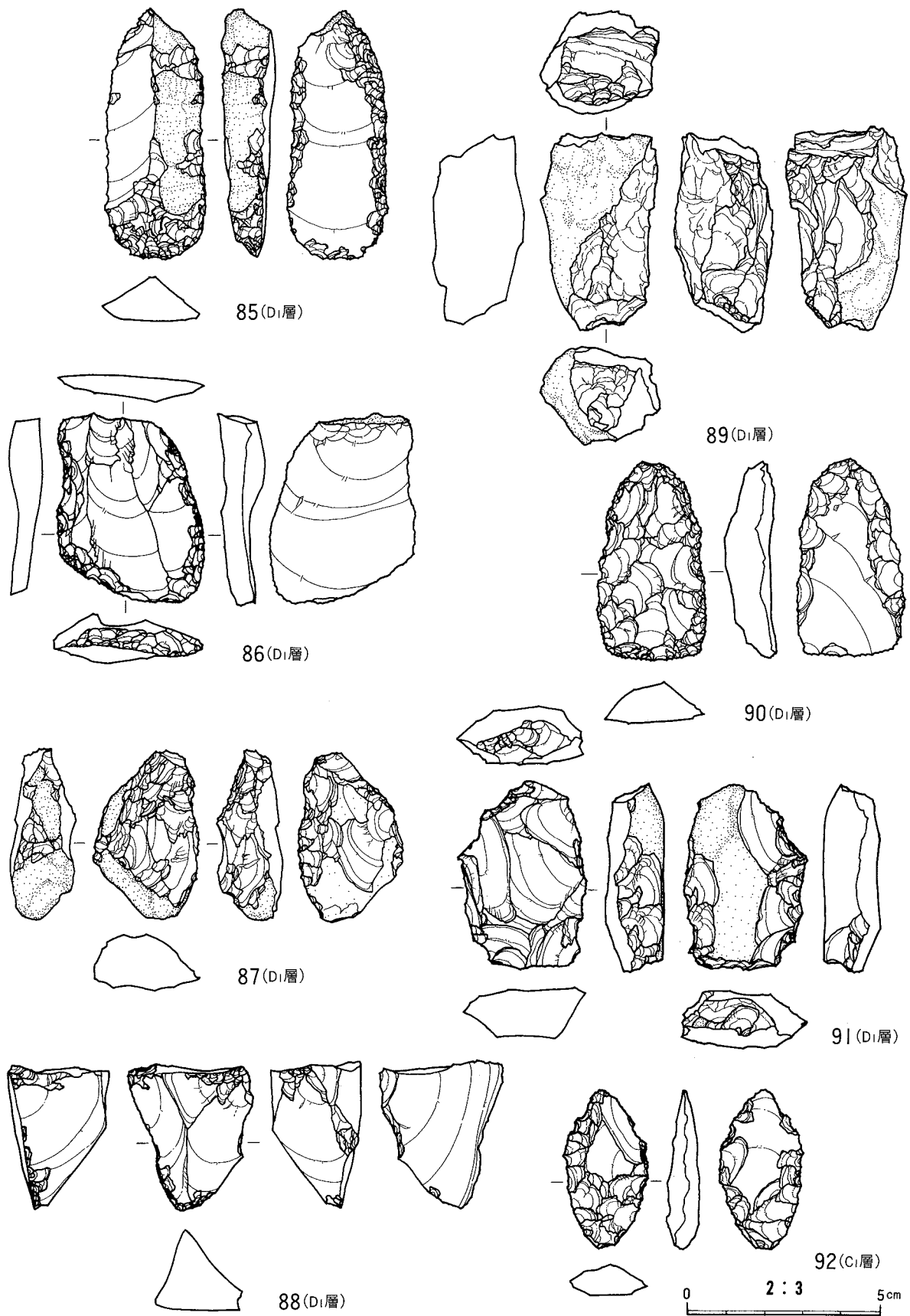
石器(第144~155図) 63~68は石鏃である。63は周縁調整を施した平基無茎鏃である。64も平基無茎鏃であるが、両面調整され断面形は凸レンズ状を呈する。65は凸基有茎鏃で、基部から茎部にかけてアスファルトの付着が見られる。先端部は破損している。66も凸基有茎鏃で、基部から茎部にかけてアスファルトの付着がある。68は基部と先端部が欠損しており、背面鏃身中央部の剥離し残された面が側面図にもある。69・70は石錐で、70は錐部先端が摩滅している。71~74は石匙である。71は横型の石匙で刃部は急斜度調整により作出されている。72は縦型の石匙のつまみ部と下端が欠損したもので、背面右側辺が刃部であるが、連続的な調整がされているものの稜の出入りが大きく、この右側辺を一つの単位として使用するには若干抵抗が大きいと思われる。73は未完成品であるが、背面が自然面で細かい調整を施すのに適当ではないこと、つまみ部にあたる部分が素材剥片の末端であり、抉りをつくりだす厚さが十分に残されていないため、製作途中で廃棄された可能性がある。74は縦型の石匙であり、両面から周縁調整がされているがつまみ部への調整はそれほど入念ではない。75~80は削器である。77は背面中央部まで調整が及んでおり、刃部は弧状に形成されている。79は両面調整の石器の一部を削器として使用したもの、80は自然面の残っていない背面左側辺を刃部としている。81~87は搔器である。81は第一次剥離面の湾曲が大きいが、側辺と端部の刃部のみ調整を加えている。83は背面右側辺に刃毀れが見られ、主要刃部と思われる。84は大型の剥片を素材としており、重量があることから、搔器としてだけでなく、石斧のような機能も果たしたと考えられる。85は縦長剥片の端部に刃部を作りだした典型的な搔器である。88・89は石核である。90は筥状石器で、刃部はフルーティングよりもひとつ一つが小さく細かい剥離面で形成されている。91は両面調整石器で、自然面が残す。92はやや大型であるが、凸基無茎鏃である。基部への調整は入念である。93・94は石錐である。いずれも錐部は両面調整を施されている。95は石匙で、ヒンジフラクチャーを呈する末端への調整は半分までで、刃毀れのある背面右側辺が主要刃部と考えられる。96~100は削器、101~103は搔器である。98は背面右側辺のノッチ状に作出した部分が刃部である。99は背面の斜めの辺が連続して調整されており、鋸歯状を呈している。101は面的な広がりをもって炭化物の付着が見られる。103の搔器の背面底辺には微小な剥離痕が並び、腹面にも及んでいる。104~106は楔形石器である。107は石核で打面転移を頻繁に繰り返して剥離作業がなされている。108は石槍で、両面とも中央部に古い剥離を残しており、それに伴い断面形も不定形を呈する。109・110は石錐、111・112は石匙である。石錐は小形の剥片を素材としたものである。石匙はどちらも縦型で、第一次剥離の際の打点方向をつまみ部として調整している。112はつまみ部の抉れの下に張り出す部分があるのが特徴である。また、側面には、底辺の斜めの辺には未調整の部分を残している。113~115は削器である。115は一側辺を両面から素材剥片の厚さをあまり減じないような薄い押圧剥離により刃部を作出している。また背面左側辺下半部と腹面右側辺下半部は、第一次剥離面の鋭利な縁辺をそのまま刃部として使用しているため、微小な剥離痕が断続的に見られる。116~118は搔器で、116は素材剥片の端部に調整が加えられており、その縁辺に使用痕と思われる微小剥離痕が見られる。119は両面調整石器である。120の石核は、打面転移を行ったうえで、ある程度打面を固定して剥片剥離をしている。121・122は凹基無茎鏃である。121の基部は比較的大きな剥離面で構成され、平面形も肩が残る左右非対称形、122は周辺調整を施されている。123・124は削器である。124は小さい単位で刃をいくつかに分解した刃部を形成している。125・126は石核の接合資料である。



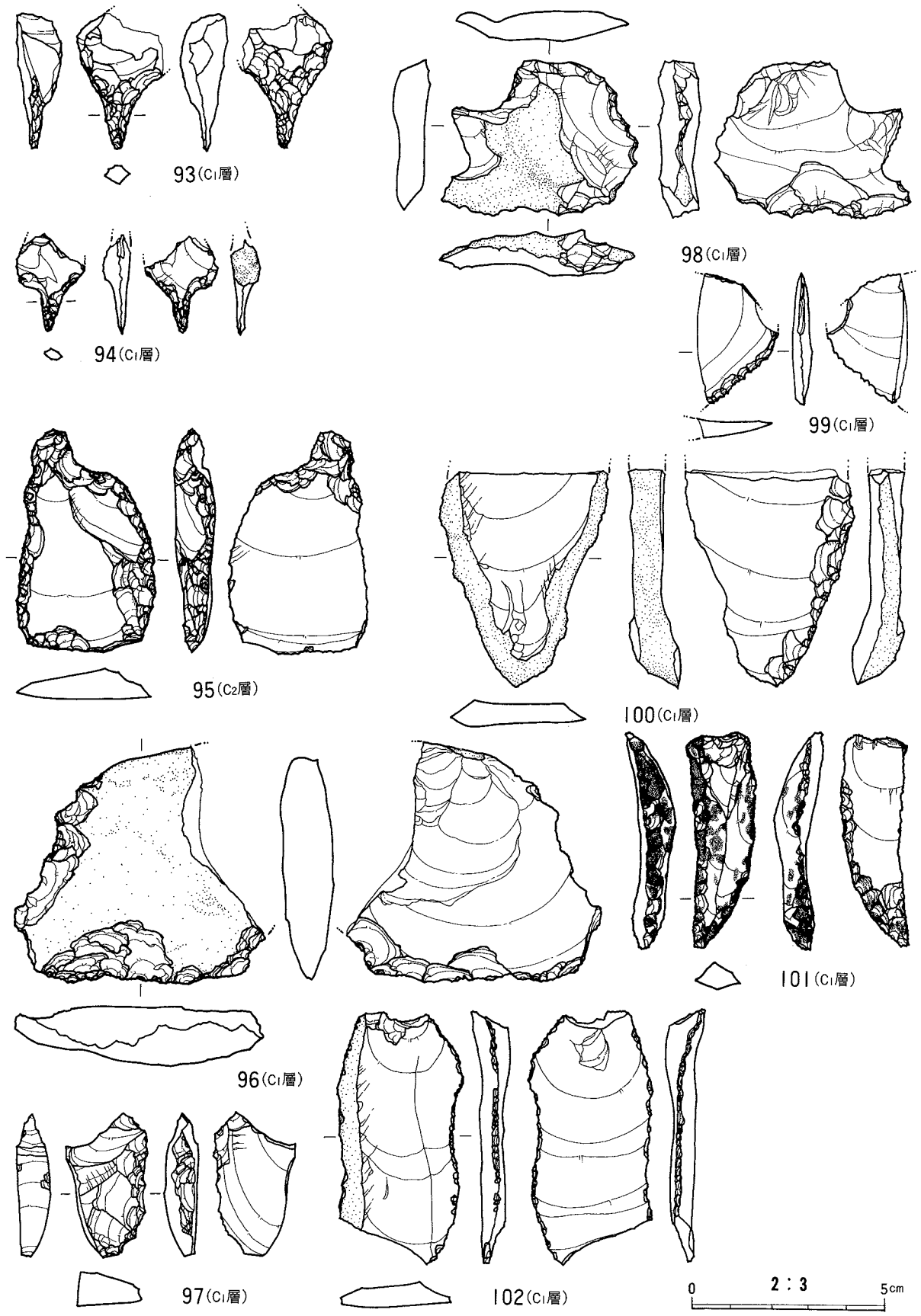
第144図 RE2188豎穴跡出土石器(1)



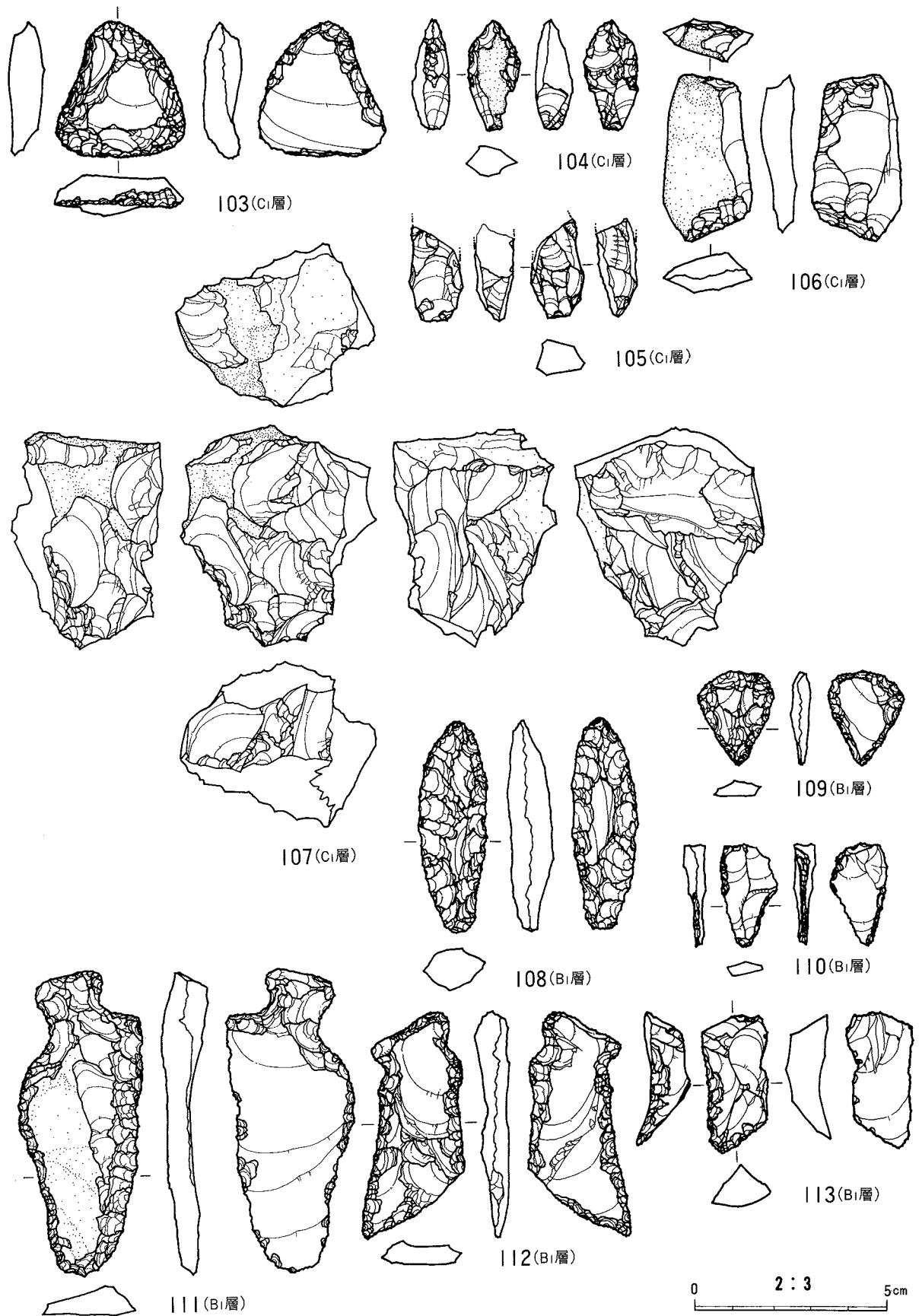
第145圖 RE2188豎穴跡出土石器(2)



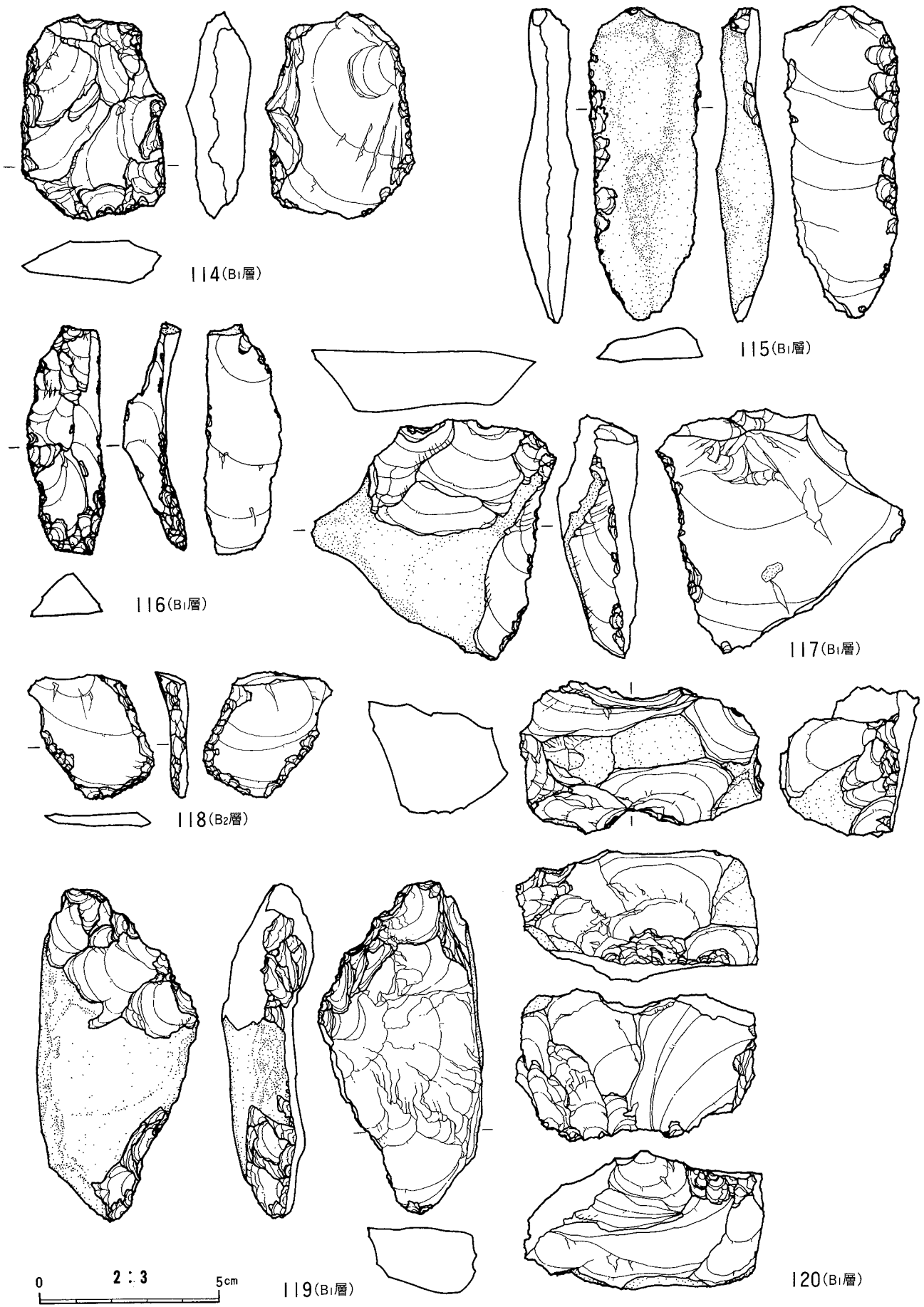
第146図 RE2188豎穴跡出土石器(3)



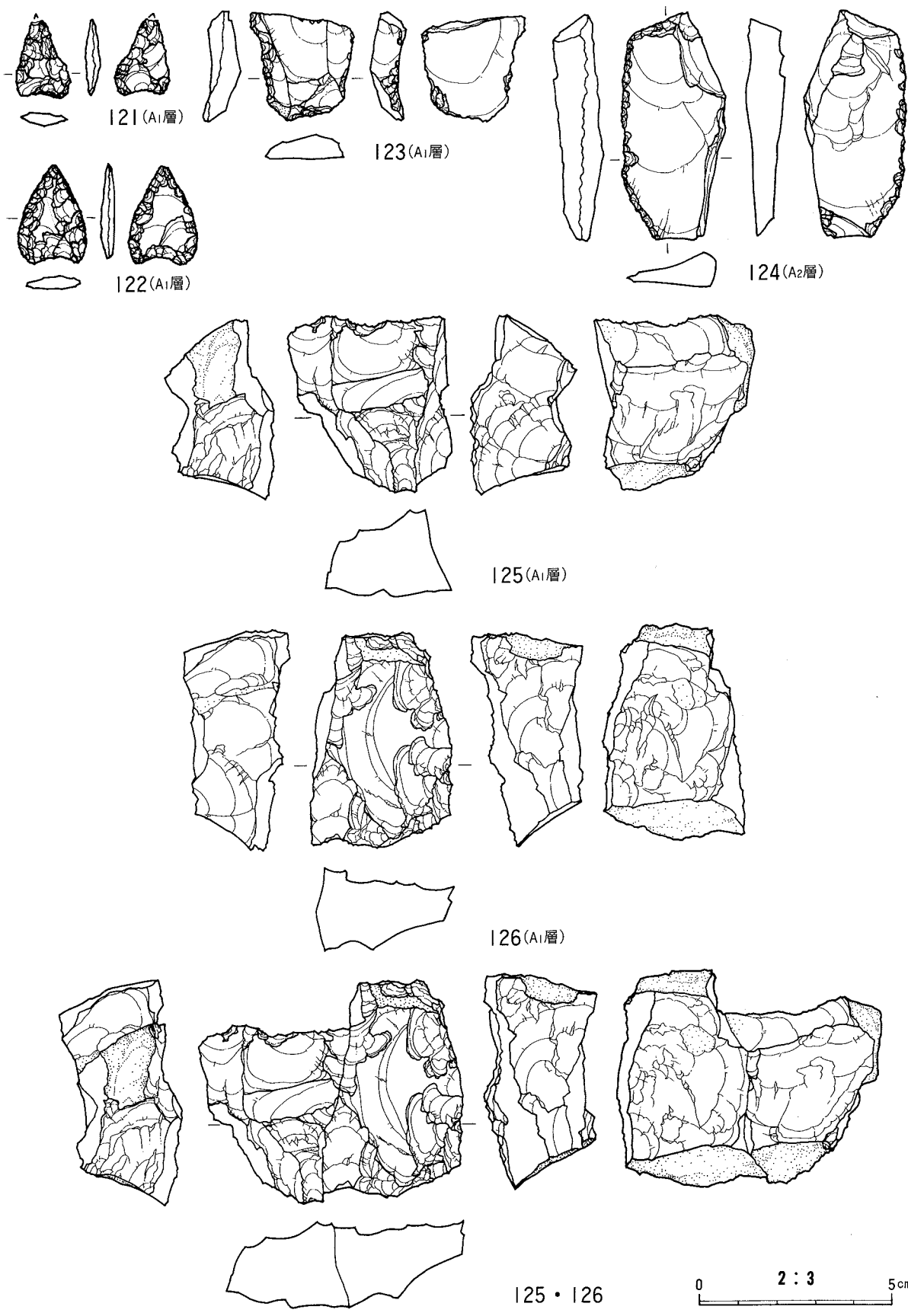
第147図 RE2188竪穴跡出土石器(4)



第148図 RE2188 豎穴跡出土石器(5)



第149図 RE2188豎穴跡出土石器(6)



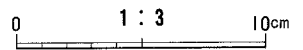
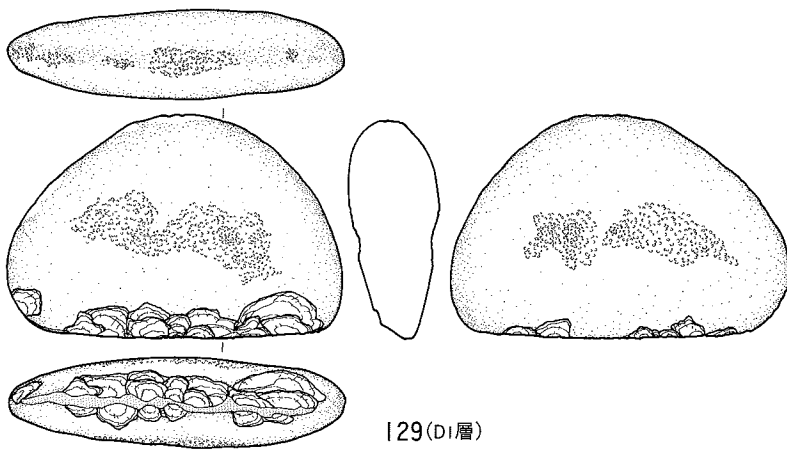
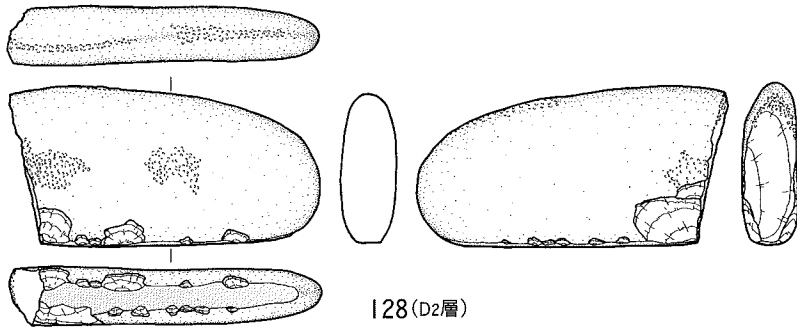
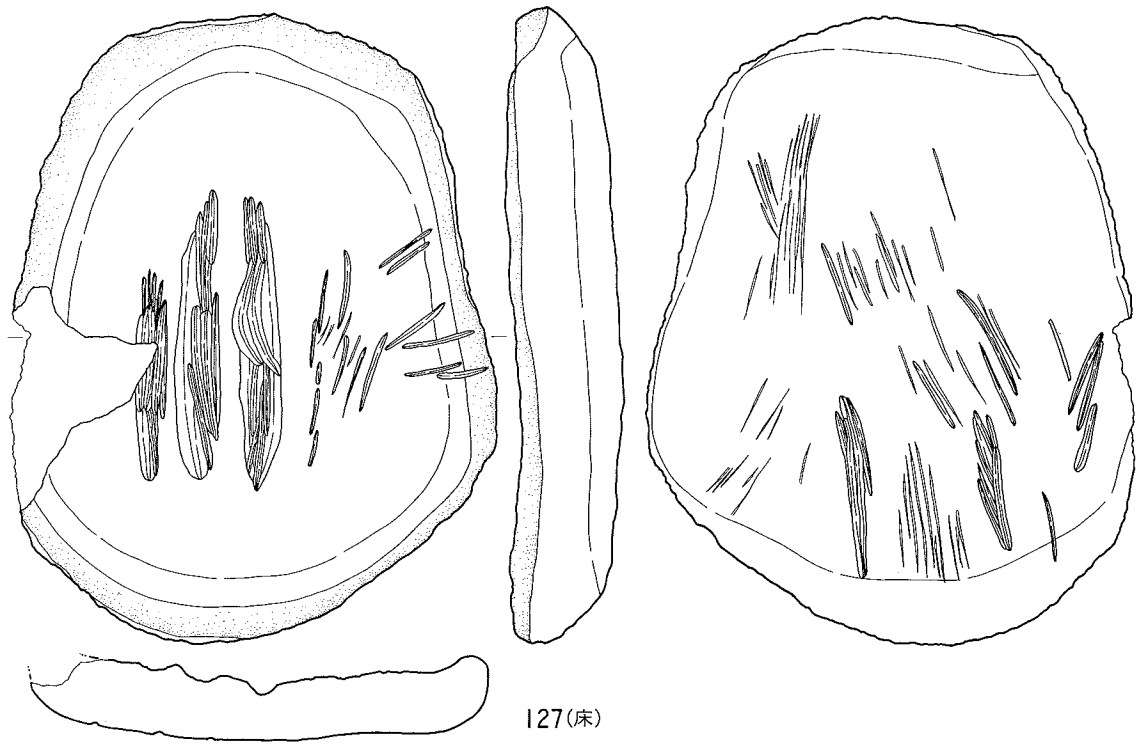
第150図 RE2188竪穴跡出土石器(7)

127は石皿で、両面ともに使用している。表面は縁を形成し、中央部分に見られる溝状の条痕は深い。一部欠損している。128～132は敲打磨石である。132以外は敲打痕も伴う。128は破損した面を敲打面として使用している。129は半円状の礫を素材に用いてその一辺を使用している。131は円礫を素材としたもので二面に敲打磨面が形成されている。132は破損した不定形の礫の端部を敲打磨面としたもので、帯状の機能面がめぐる。133・134は磨石で、いずれも破損しており、磨り残したかたちで自然面が残存している。135～137は敲石で、135は丸みを帯びた三角形の礫の三つの端部を使用しており、剥離痕と敲打痕が見られる。136は若干の自然面を残して表面を磨面としても使用している。138・139は砥石であり、138は表裏面と底面に、溝状の条痕と擦痕が見られる。140は磨製石斧の基部である。粗割りと剥離による整形時の器面の凹凸が残っているため、未成品と考えられる。141は敲打磨石であり、断面三角形の礫の二面に敲打磨面がある。142～144は磨製石斧である。142は刃部から基部へ向かって樋状に破損した剥離面が見られる。表裏面と側面は研磨の際形成された稜線ではっきり区画されている。143は基部が残存したもので、擦痕により表面は縦方向に、側面は斜めの方向に研磨されたことがわかる。144は表面は研磨整形後に破損しているが、裏面は自然面をもつ。145は小形偏平礫の長軸方向に打ち欠きをして礫石錘としたものである。縁辺には細かい剥離も見られる。146・147は敲打磨石である。148は磨石として使用した後で、敲石に転用したものである。149は凹石で、凹み部の断面はなだらかである。150は砥石でほぼ全面に溝状の条痕が見られる。151は石皿で、偏平礫の形状をあまり変えることなく使用している。裏面には擦痕が見られる。152は礫を利用した錘。153は敲打磨石、154は凹石である。

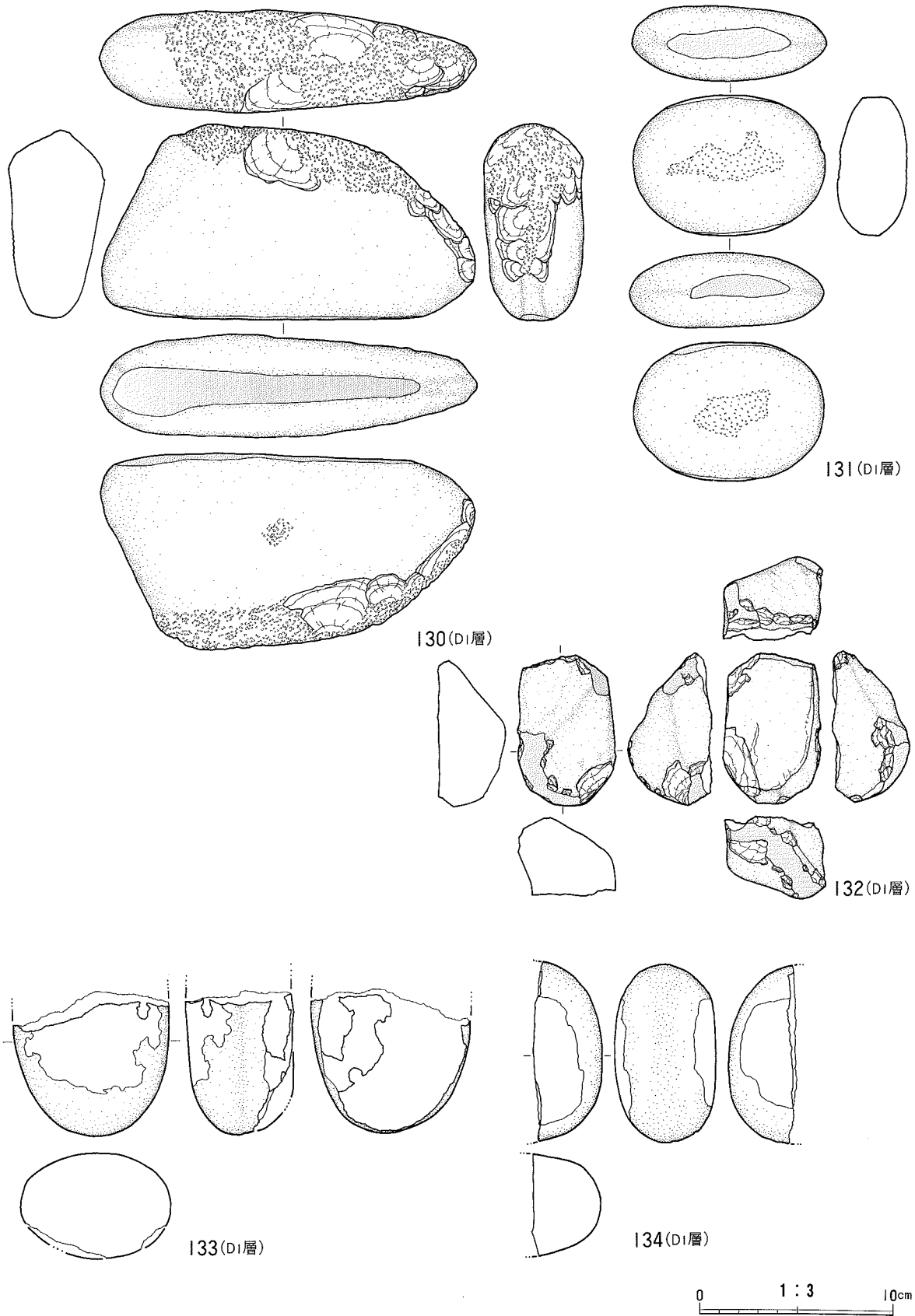
土製品 (第156図) 155・156は土製円盤、157は三角形土製品である。158～161はミニチュア土器、162～164は土偶の一部と思われる。162は上半部がくぼんでおり、下半部へつれてやや厚みを減じている。163は小型の土偶の下半部分、165は手または足と考えられる。165～167は土製円盤、168は斧状土製品である。

石製品 (第157図169～172) 169は火山噴出物(軽石か)と思われる非常に軽量の素材に穿孔したもの、170は全面が研磨整形され、側面に断面形がややV字状の溝を施したものである。171は破損しているが側面には整形時の敲打痕が残り、溝も途中で製作をとめていることから未成品と思われる。172は楕円形に近い円形の石製品で中央に径約1.8cmのくぼみがある。

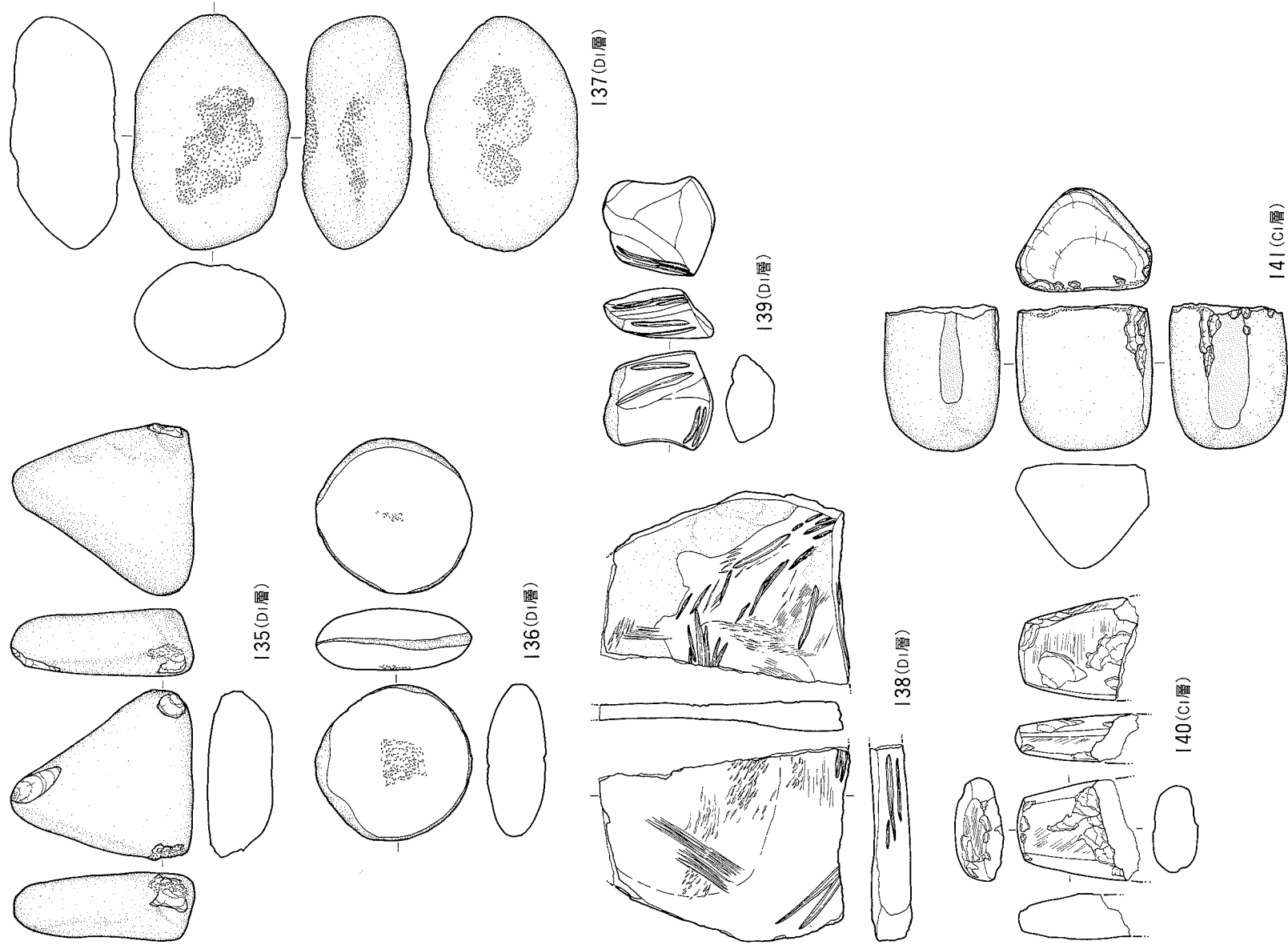
木製品 (第157図173) 173は長軸方向に穿孔された棒状の木製品である。



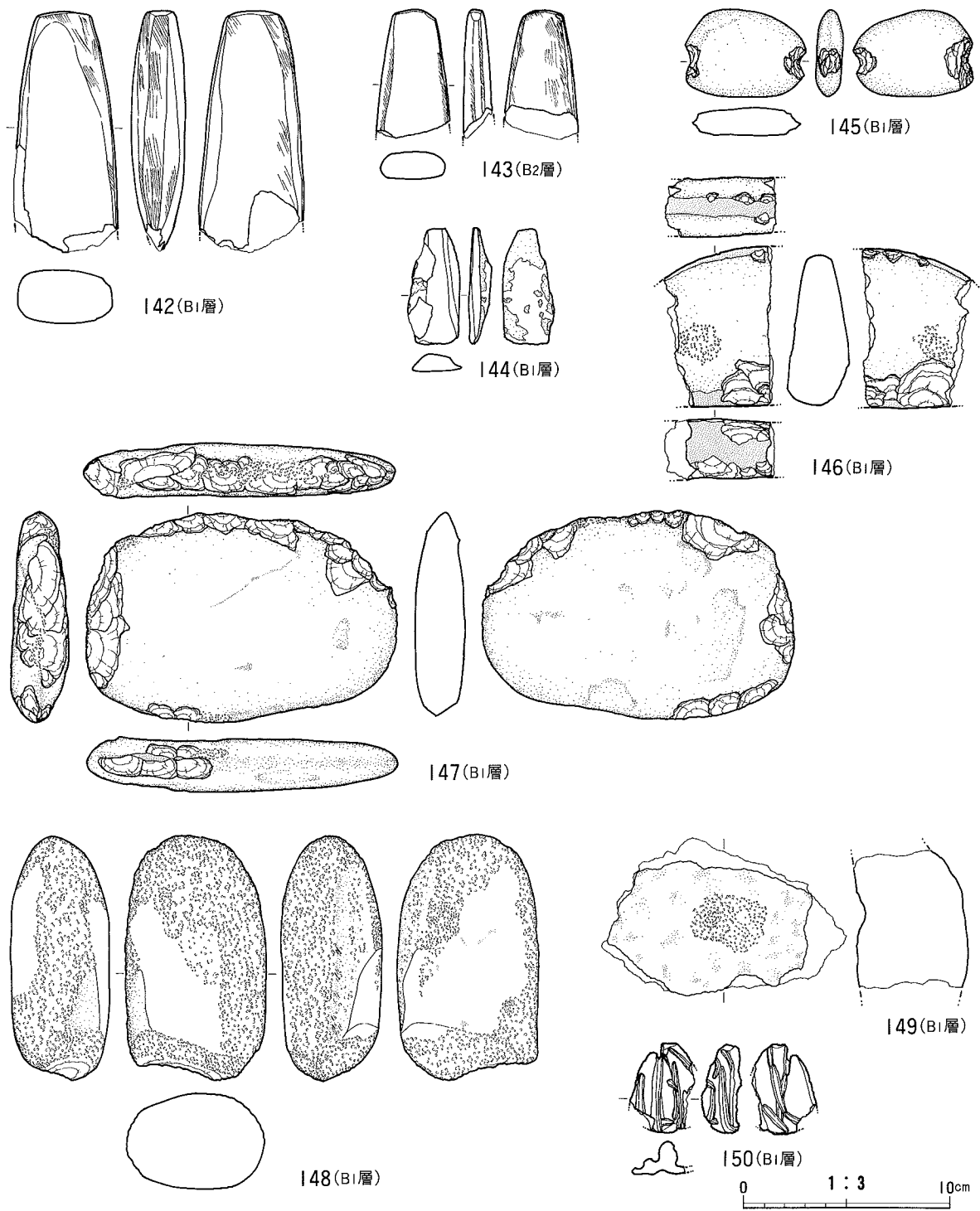
第151図 RE2188 豎穴跡出土石器(8)



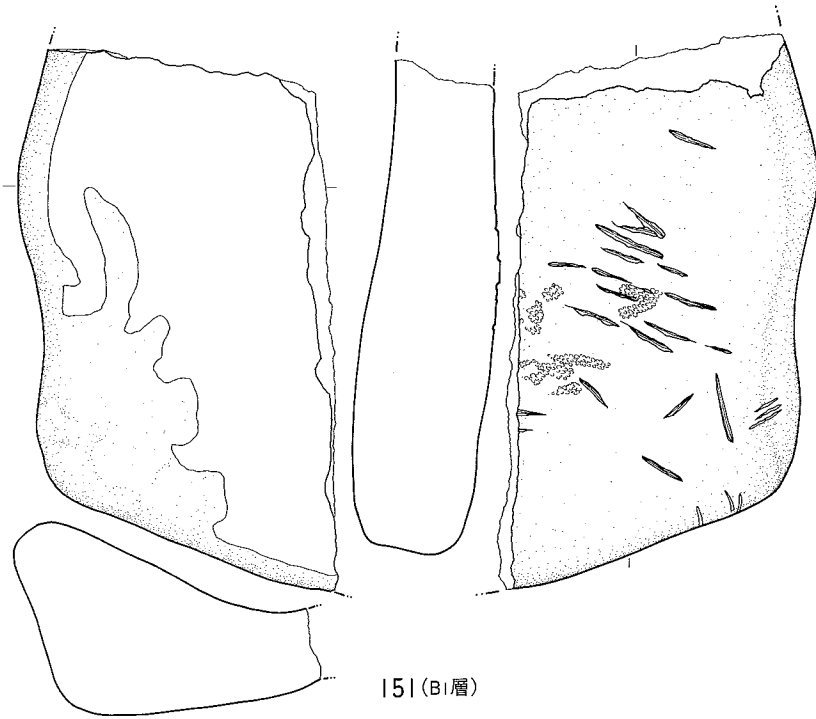
第152図 RE2188 豎穴跡出土石器(9)



第153図 RE2188竪穴跡出土石器(10)

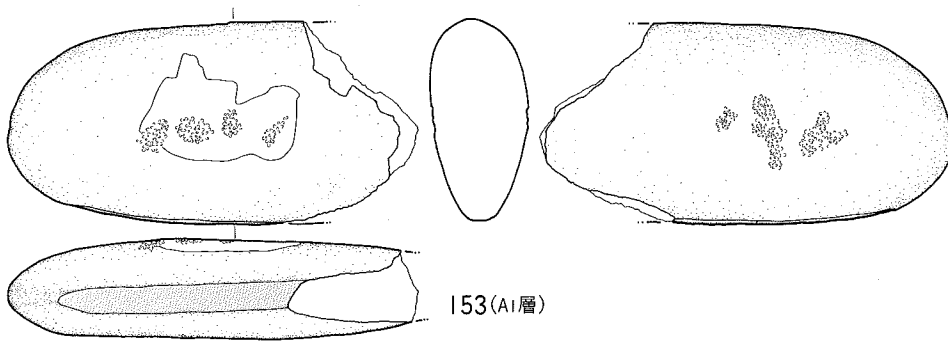


第154図 RE2188豎穴跡出土石器(11)

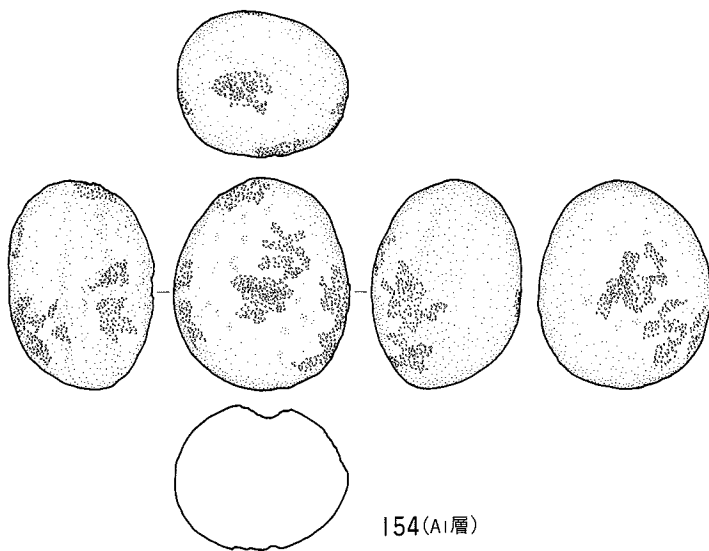


151 (B層)

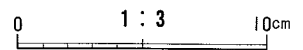
152 (A層)



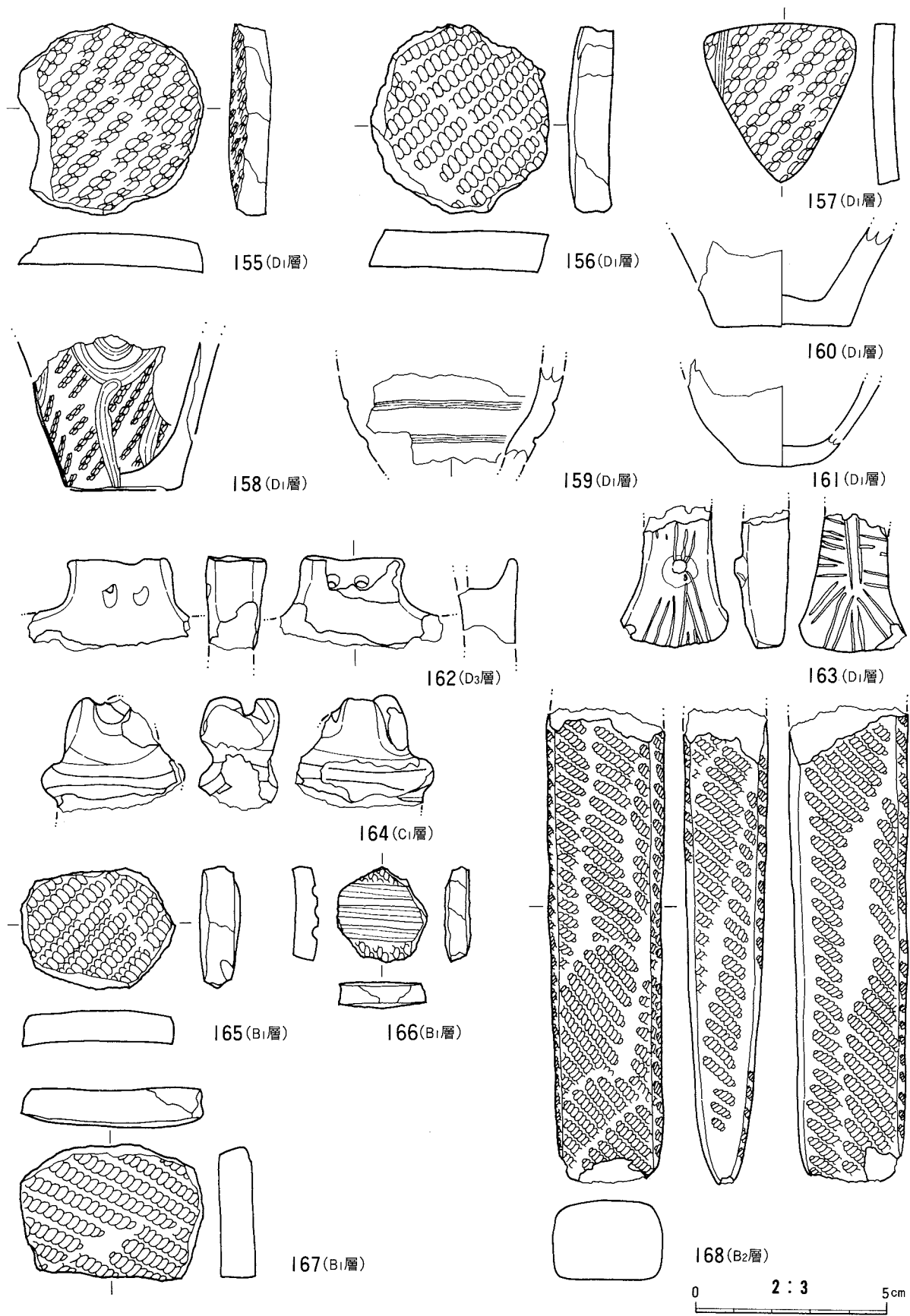
153 (A層)



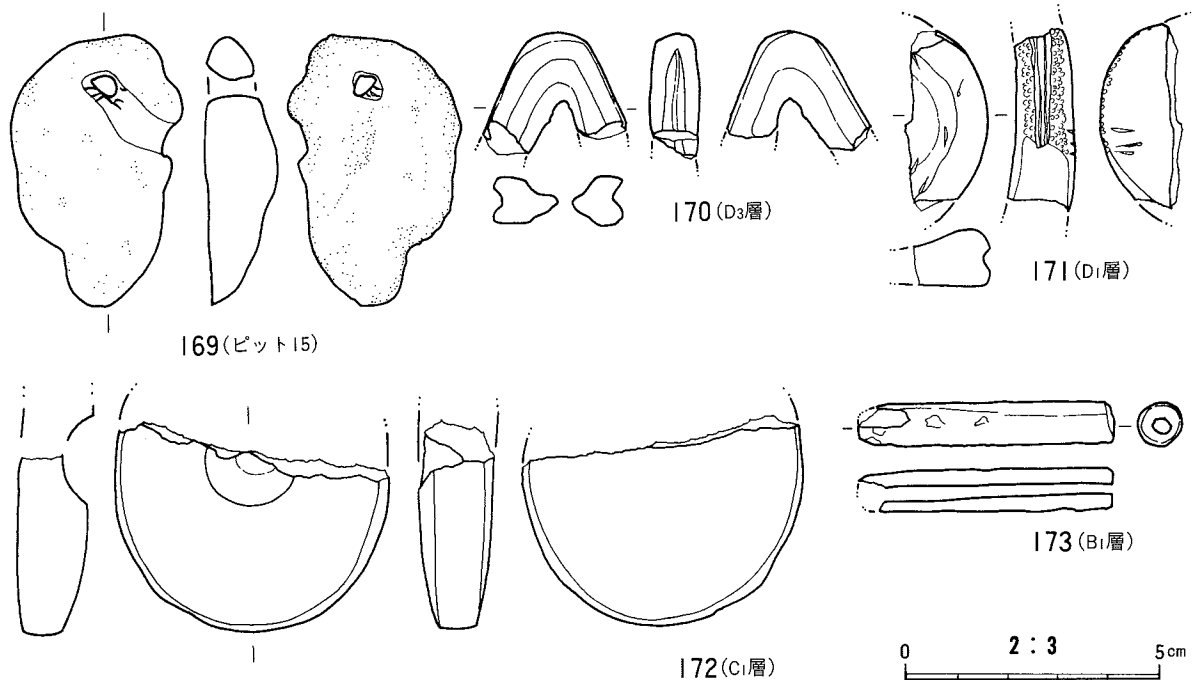
154 (A層)



第155図 RE2188 豎穴跡出土石器(12)



第156図 RE2188豎穴跡出土土製品



第157図 RE2188 竪穴跡出土石製品・木製品

R A 2189 竪穴住居跡 (第158～176図)

時期 縄文時代中期 (大木 8 b - 3 式期)。

位置 調査区北西部に位置する。

平面形 ほぼ円形を呈する。

主軸方向 N74.5° E を示す。

規模 東西6.55 (長軸) m、南北6.20mをはかる。

重複関係 R E 2188、R A 2191に切られ、R A 2185・2190・2192、R D 2141・2143～2149を切る。

掘込面 既に削平されている。

検出面 耕作土 (I a 層) 直下。

埋土 自然堆積で層相の違いにより、A・B・C・Dの4層に大別される。

A層—粒～塊状の褐色土を微量に混入する暗褐色土で、焼土粒を含む。

B層—塊状の黒褐色土を微量に混入する暗褐色土でカーボン粒を含む。

C層—粉～粒状の褐色土をやや多く混入する黒褐色土で、カーボン粒を含む。

D層—粉～粒状の褐色土を微量に混入するしまりのない黒褐色土。

炉の状態 平面形の長軸線上東寄りに石囲炉を1基検出している。

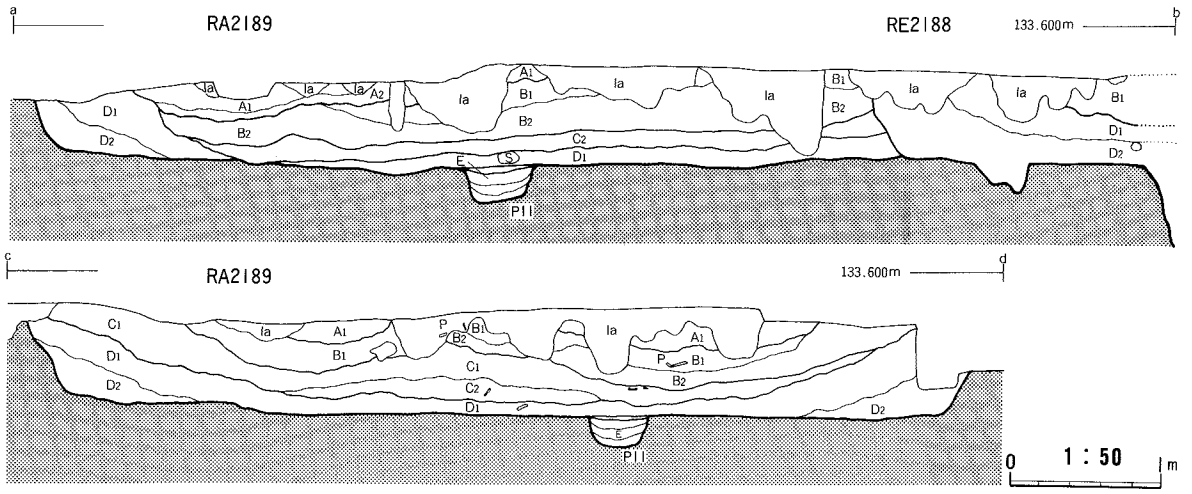
埋甕 平面形中央からやや西寄りに埋甕 (伏甕) を1基検出している。上端の直径0.45m内外、下端直径0.55m内外、床面からの深さ0.56mとフラスコ状を呈する円形のピットにキャリパー形深鉢を伏せて埋設している。甕周囲の埋土は人為堆積で、G層は黒褐色土と褐色土、H層は暗褐色土と褐色土の塊状混合土である。なお、H1層には塊状の白色粘土を含んでいる。

壁の状態 平面形南東側の壁は段を有する他は、床面から直壁ぎみに立ち上がる。

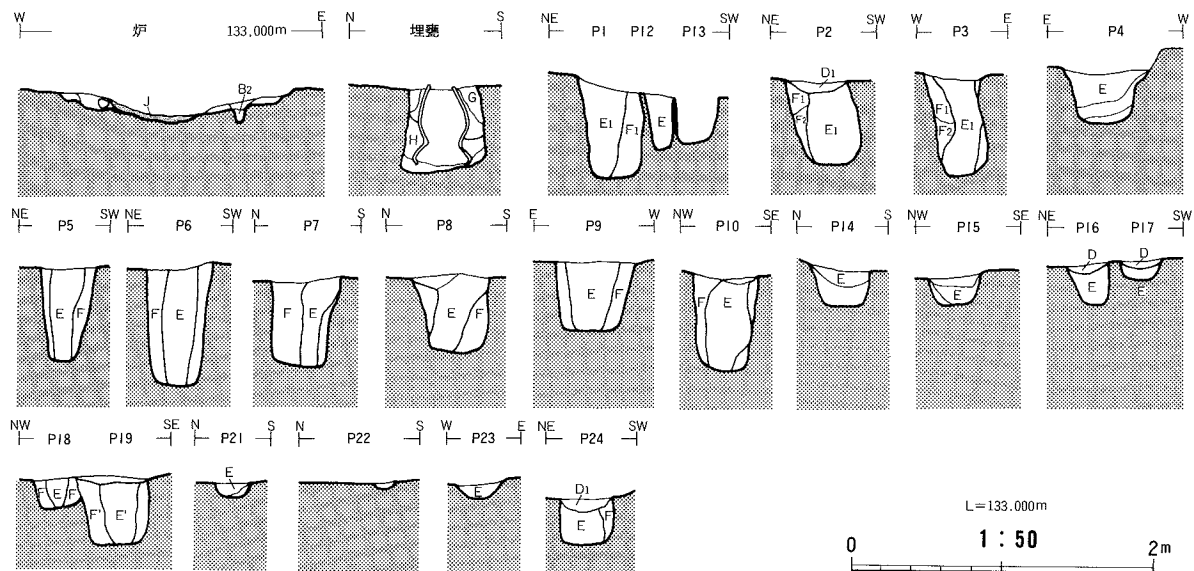
床の状態 やや起伏があるが平坦である。

柱 穴 床面上に24口(P 1～24)のピットを検出している。このうち支柱穴を構成するピットは8口(P 1～4・6・7・9・19)で、8角形の配置を示す。床面からの深さは、P 1-0.56m、P 2-0.56m、P 3-0.64m、P 4-0.33m、P 6-0.76m、P 7-0.55m、P 9-0.46m、P 19-0.40mをはかる。これらの柱痕跡はやや外側に傾いている。なお、P 5・8・10も比較的規模が大きい規模のピットで床面からの深さは、P 5-0.60m、P 8-0.52m、P 10-0.60mをはかる。その他はいずれも小規模なピットである。埋土は、柱痕跡(E層)が軟質の暗褐色土。掘方(F層)が褐色～黄褐色土と黒褐色土との塊状混合土である。

土 器(第160～163図) 1は口縁が大きく外反して内湾し、頸部が窄まり体部で再び大きく膨れるキャリパー形深鉢である。口縁部文様帯には横位に連結する渦巻文が施される。渦巻間には弧状の区画が見られ、区画内には刺突が充填される。体部文様帯には4単位の大有棘渦巻文が配され連結して小渦巻文・懸垂文が施される。地文はR L単節縄文を縦位に施すもので底部は埋設以前に打ち欠かされている。2は口縁が緩やかに内湾し、波状を呈する深鉢である。波頂部には渦巻文が施され、口縁下には横位2条の刺突列が施される。体部には大渦巻文が配され、さらに大渦巻文の四方に小渦巻文が、大渦巻文間の連結部にも小渦巻文が配される。大渦巻文下方の小渦巻文より2条1組の隆沈線を垂下させ、地文にはR L R複節縄文を縦位に施すものである。3・4は口縁がやや外傾する深鉢で、隆沈線による区画文が施される。地文は3-R L R複節縄文、4-R L単節縄文が縦位に施される。5～9・12～15・20～22は口縁が大きく外反する深鉢である。5・6は同一個体の深鉢で、口縁外反部が無文帯となるものである。体部には隆沈線による渦巻文が施され、地文はR L R複節縄文を縦位に施す。7・8は沈線による渦巻文を施すもので、地文はR L R複節縄文を縦位に施す。9は波頂下に渦巻文を配する深鉢で、地文はR L R複節縄文を縦位に施す。12・13は同一個体で、縦位に区画された文様帯に渦巻文・楕円文を配するものである。地文はR L R複節縄文を縦位に施すものである。14は口縁形態が波状を呈し、波状部が無文となる深鉢である。体部は隆沈線による渦巻文・懸垂文が施され、地文にはR L R複節縄文が斜位に施される。15は口縁部から体部上半にかけての部位で、隆沈線による渦巻文・弧状文が施される。20は口縁形態が波状を呈し、波状部が無文となる深鉢である。体部は沈線による渦巻文・懸垂文が施され、地文にはR L R複節縄文が縦位に施される。21は口縁形態が波状を呈し、波状部が無文となる深鉢である。体部は隆沈線による渦巻文・懸垂文が施され、地文にはR L R複節縄文が斜位に施される。22は口縁部から体部上半にかけての部位で、隆沈線による渦巻文・懸垂文が施される。10は浅鉢口縁部で隆沈線による楕円区画文が施される。11は隆沈線による文様が施される深鉢体部で、R L R複節縄文が縦位に施される。16・23・24は口縁がやや内湾する深鉢で、隆沈線による渦巻文が連結して施される。17は口縁が直立する深鉢で口縁下には無文帯が設けられる。18は隆沈線による文様が施される深鉢体部である。25は外傾して立ち上がる器形を呈する深鉢である。体部は隆沈線による渦巻文・弧状文・懸垂文が施され、地文にはR L R複節縄文が斜位に施される。26は口縁がやや内湾する深鉢口縁部で、口縁下には断続的な刺突列が施され、体部には隆沈線による小渦巻文が配される。27・28は隆沈線による2条1組の懸垂文が施された深鉢底部で、地文にはR L R複節縄文が縦位に施されるものである。29は波状突起を有する浅鉢で、波頂下には小渦巻文を配し、懸垂文を渦巻文より垂下させるものである。地文はR L R複節縄文を縦位に施すものである。



第158図 RA2189竪穴住居跡(1)



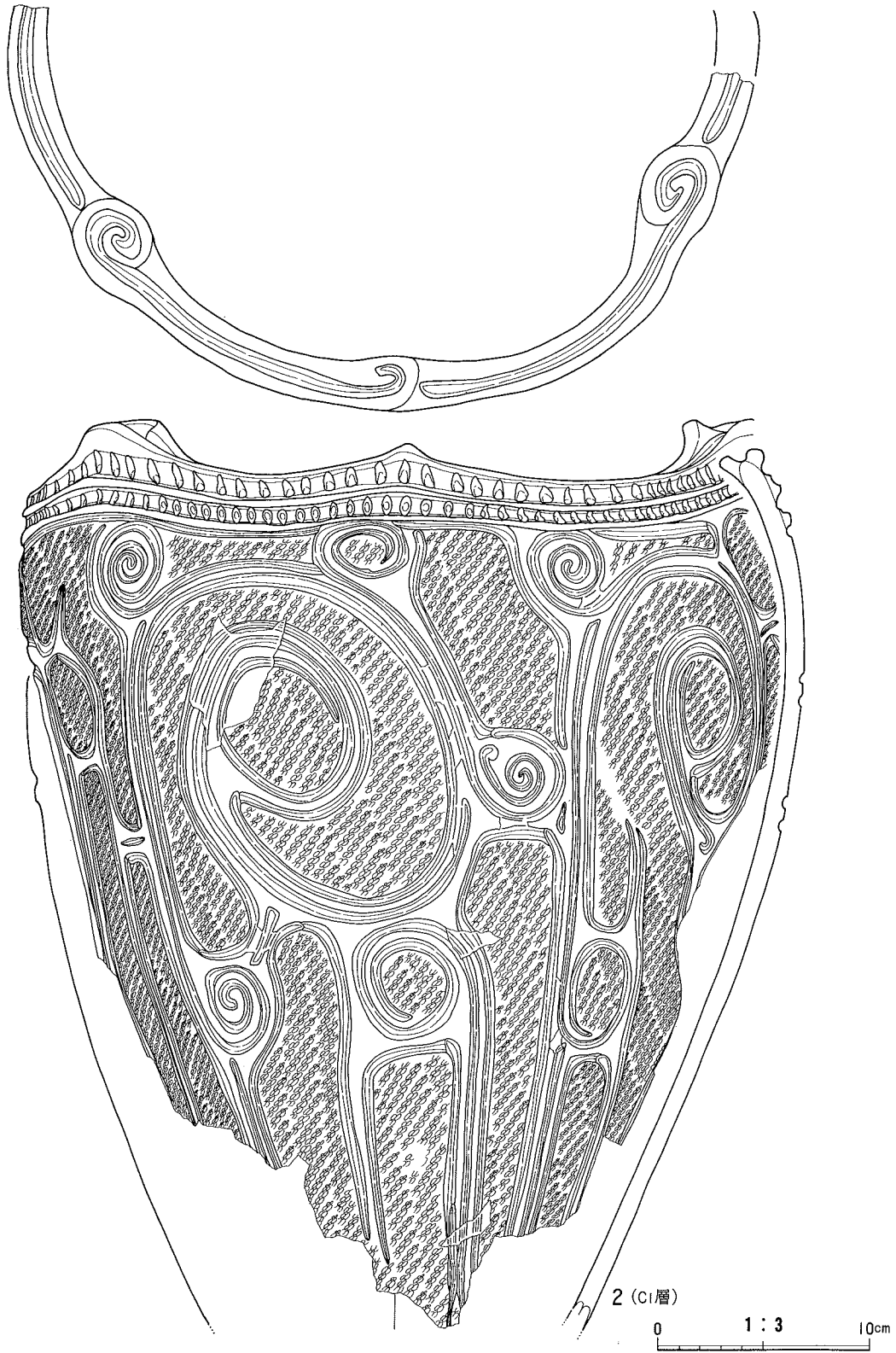
第159図 RA2189竪穴住居跡(2)

30は外傾して立ち上がる器形の深鉢で、L R単節縄文が縦位に施される。31は口縁が外反し外反部が無文となる深鉢で、地文はR L R複節縄文が縦位に施されるものである。32はL R単節縄文が横位に施される深鉢口縁部である。33は上向きの注口をもつ浅鉢である。口縁は緩い波状を呈し、波頂下に小渦巻文・注口部を配する。地文はL R単節縄文を横位に施すものである。

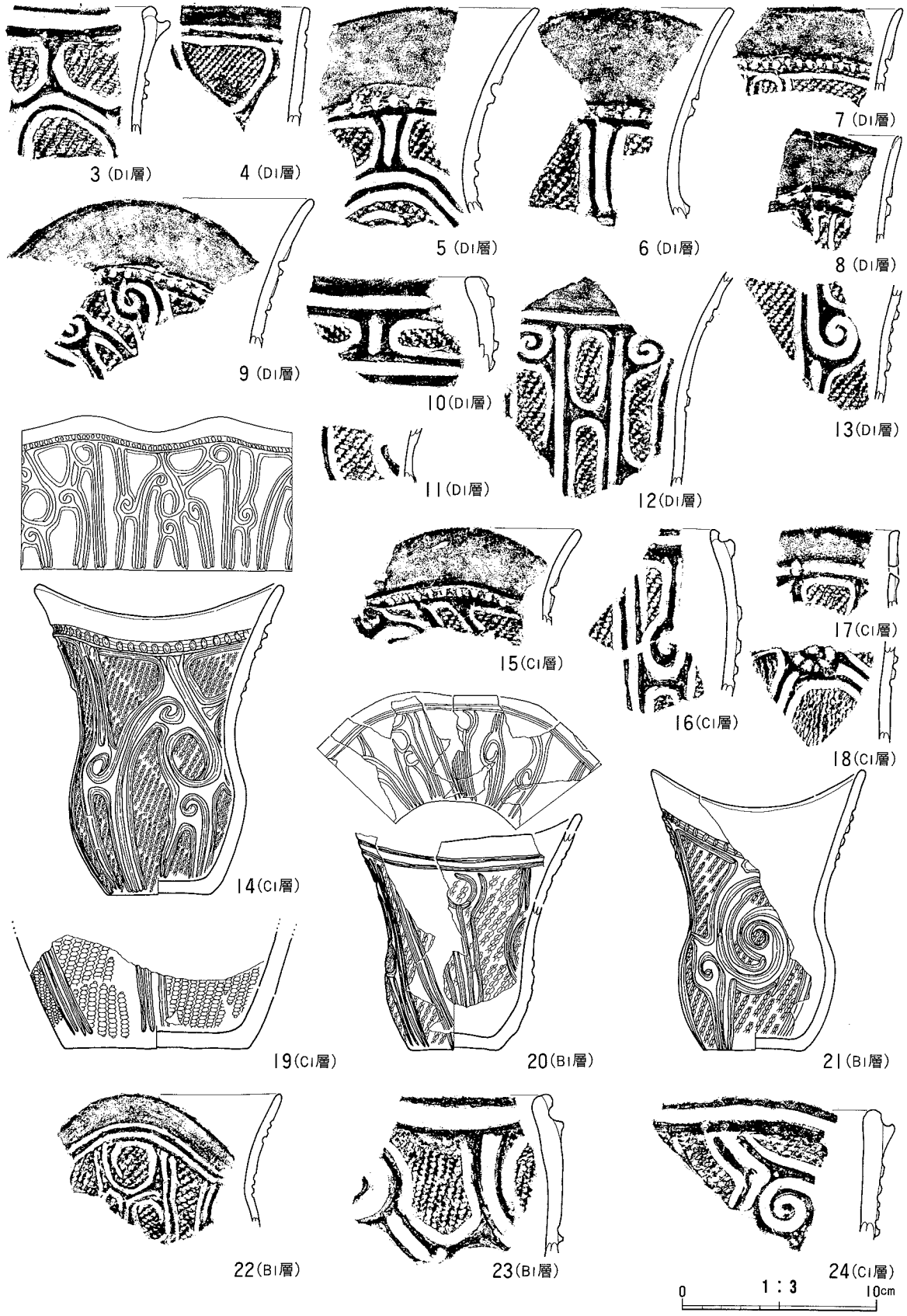
石器 (第164~174図) 34は片面調整の搔器で、背面右側辺の縁辺には階段状剥離が多数見られる。石匙の破損品の可能性も考えられる。35は凹基無茎鏃、36は凸基無茎鏃である。35は背面右側辺・腹面左側辺のほうが丁寧な押圧剥離がされている。先端と脚部は欠損している。36は周縁調整の石鏃で、背面に残る古い剥離が鏃としての全体のバランスを崩している。37は石錐で、棒状の錐部が一部欠損している。38は石匙、39~44は削器である。39・40・42のように刃部の平面観で稜の出入りが大きいものと、41・43・44のように刃部が一直線にそろうものがある。45~48は搔器である。45は横長の剥片の末端に刃部を作出したもの、46は素材剥片が大形であり、石核からの剥離の際、打面調整がおこなわれている。48は背面右側辺の下半部に調整が集中しており、この部分が主要刃部と思われる。49・50は石核である。49は打面をほぼ固定して剥片剥離が行われている。51は肩の張り出しのある平基無茎鏃である。52・53は石錐、54~56は石匙である。いずれも縦長の剥片をもちいて縦型の石匙に仕上げている。56はつまみ部の調整が比較的大きい剥離面で構成されており、他の部分に比べて薄くなっている。背面には自然面が残っている。57~64は削器、65~68は搔器である。62の背面右側辺にはノッチ状の抉りがある。63は素材剥片の末端がヒンジフラクチャーを呈する。64は腹面左側辺に細かい剥離痕が並ぶ。65は片面調整されているが、34と同様に石匙の破損品と考えられる。66は片面調整された石器の上半部と下半部が欠損したもので、両側辺とも急斜度調整されている。背面には自然面が残っている。67は刃部が弧状に形成されている。68は第一次剥離の際の打点方向に主要刃部を作出している。69は石核、70~76は石鏃である。70~74は凹基無茎鏃で周縁調整の72と背面に古い剥離面を残している。73以外は、入念な両面調整により断面形が凸レンズ状を呈する。70・71は先端部と鏃身部の角度に変化が見られる。75は平基無茎鏃、76は凸基有茎鏃である。



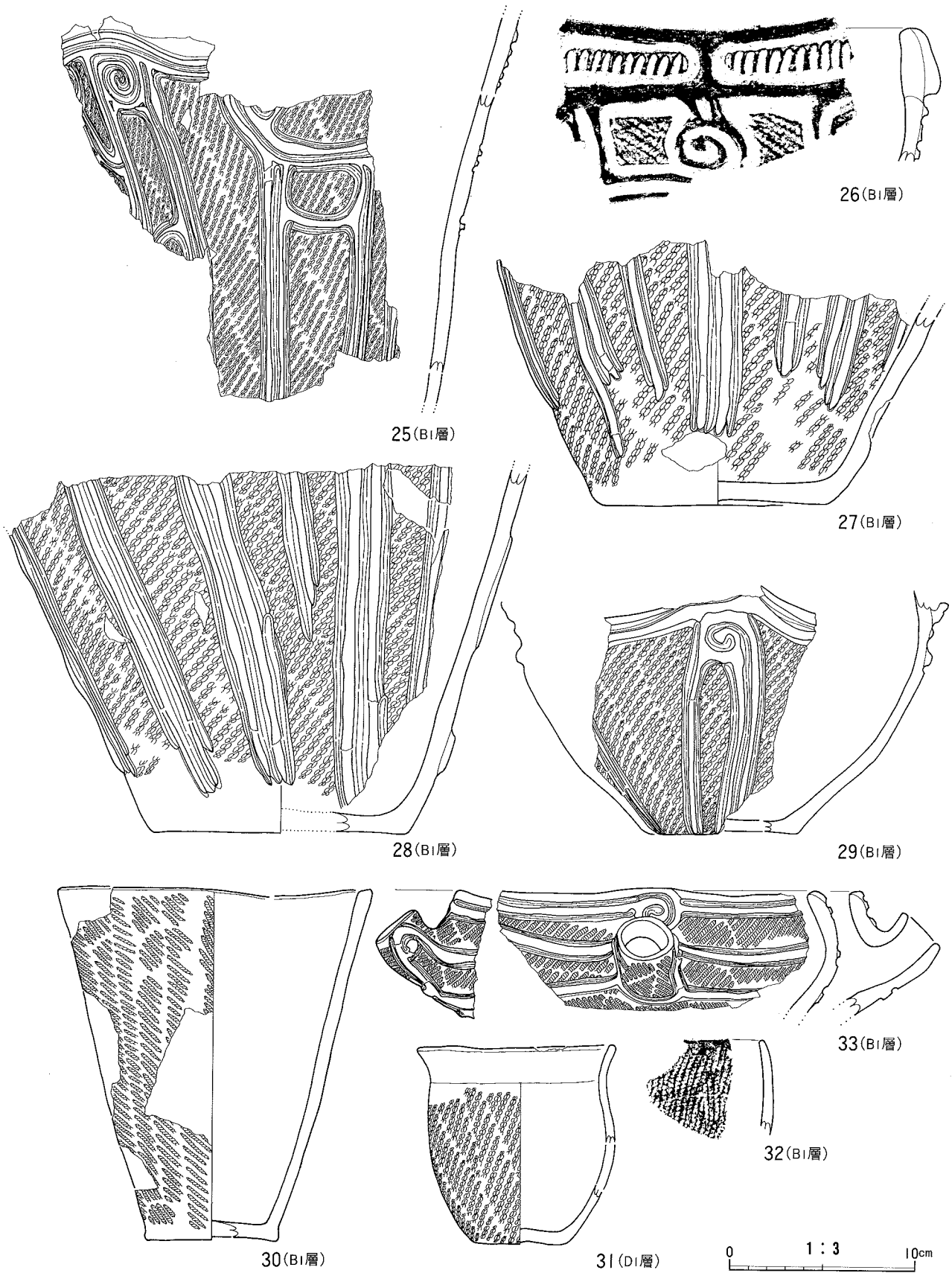
第160图 RA2189竖穴住居跡出土土器(1)



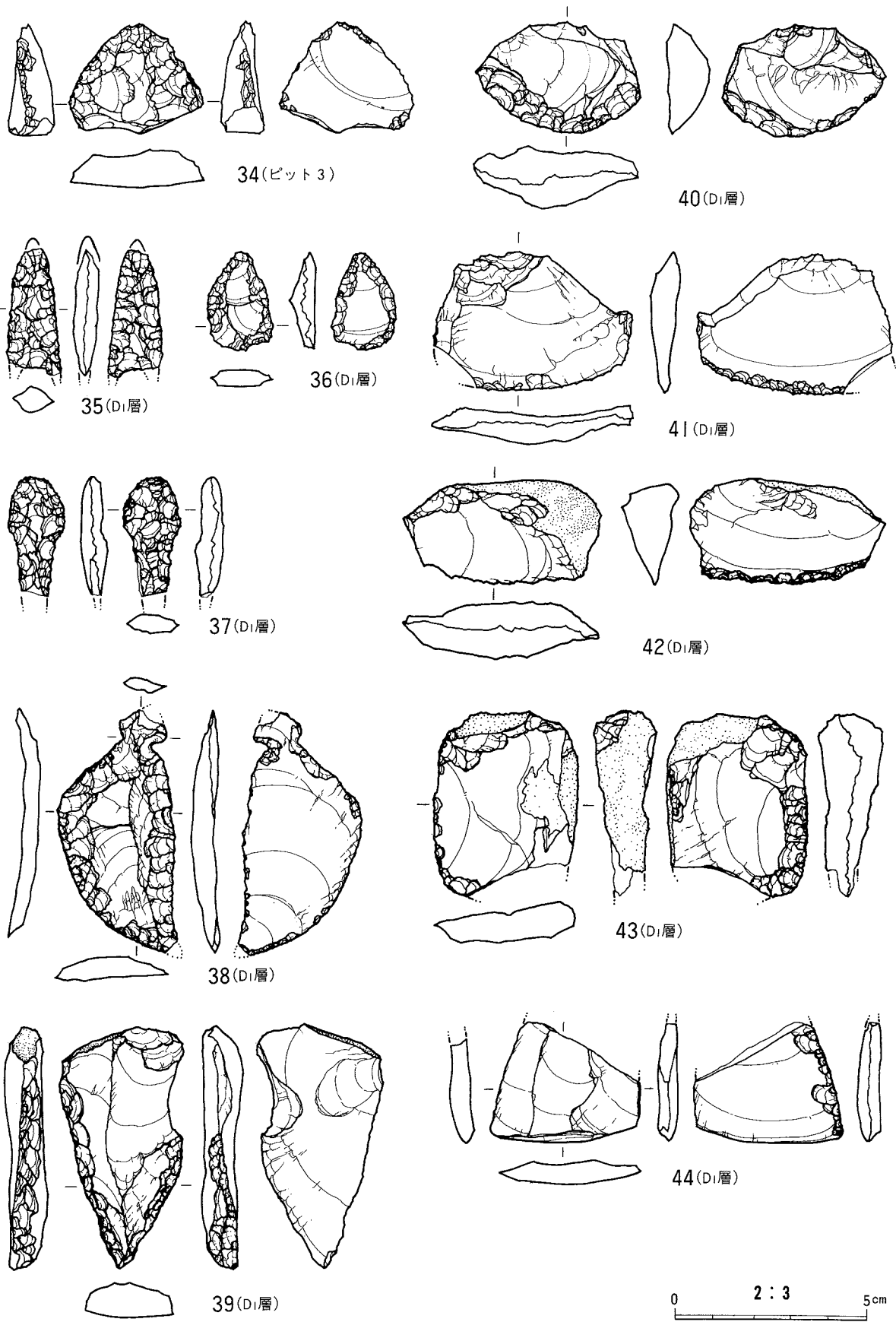
第161図 RA2189豎穴住居跡出土土器(2)



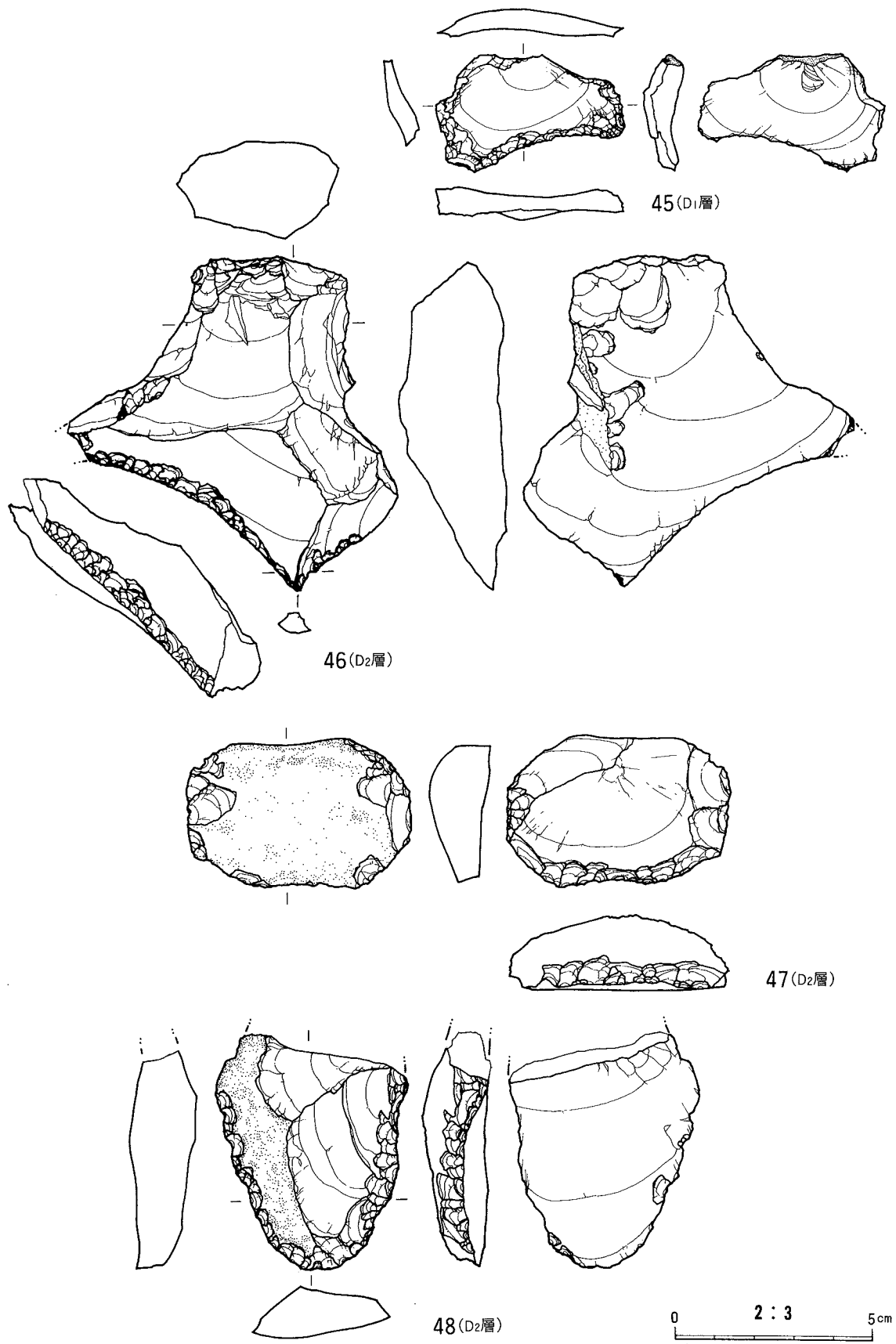
第162図 RA2189 竪穴住居跡出土土器 (3)



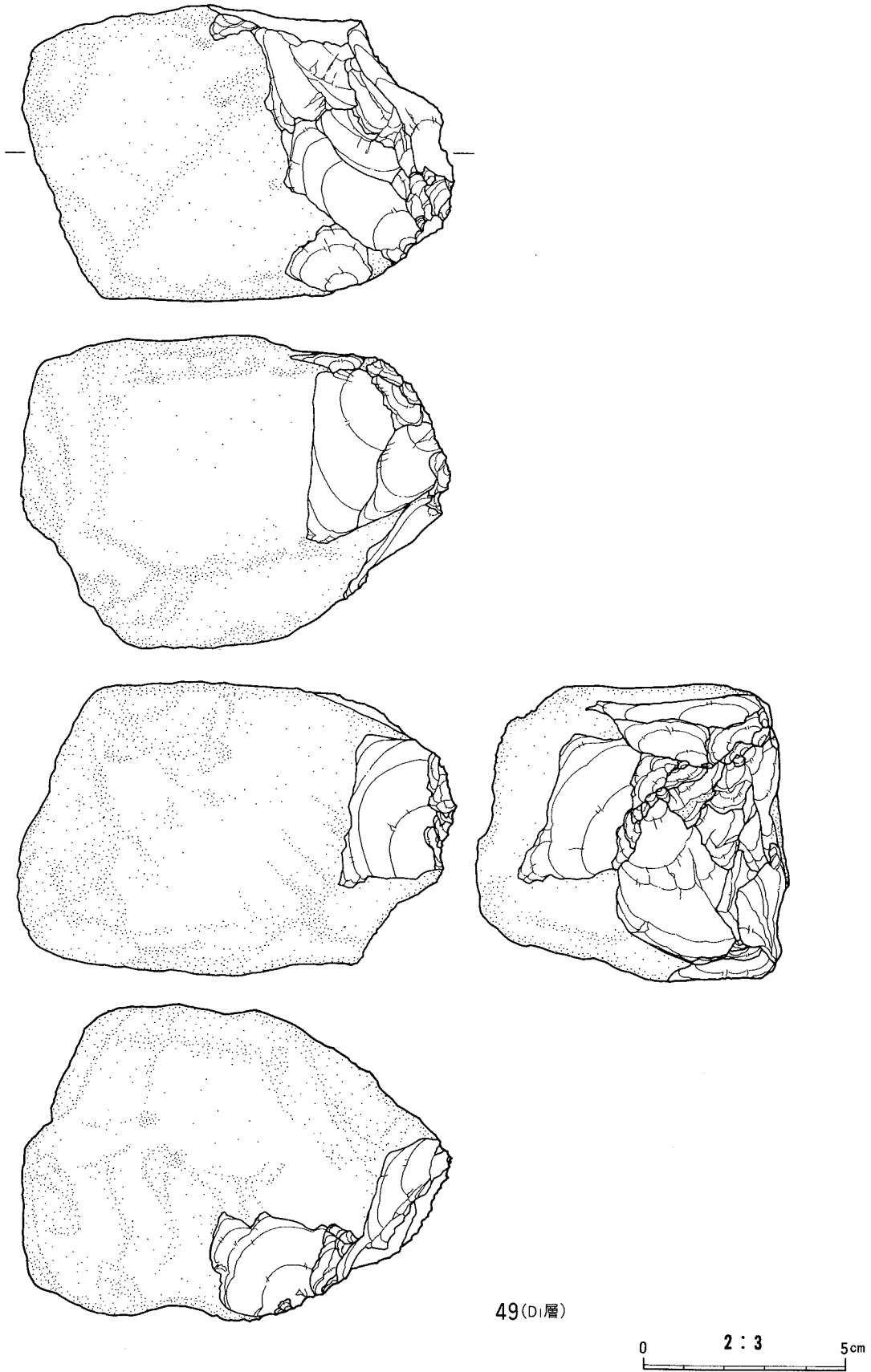
第163図 RA2189竪穴住居跡出土土器(4)



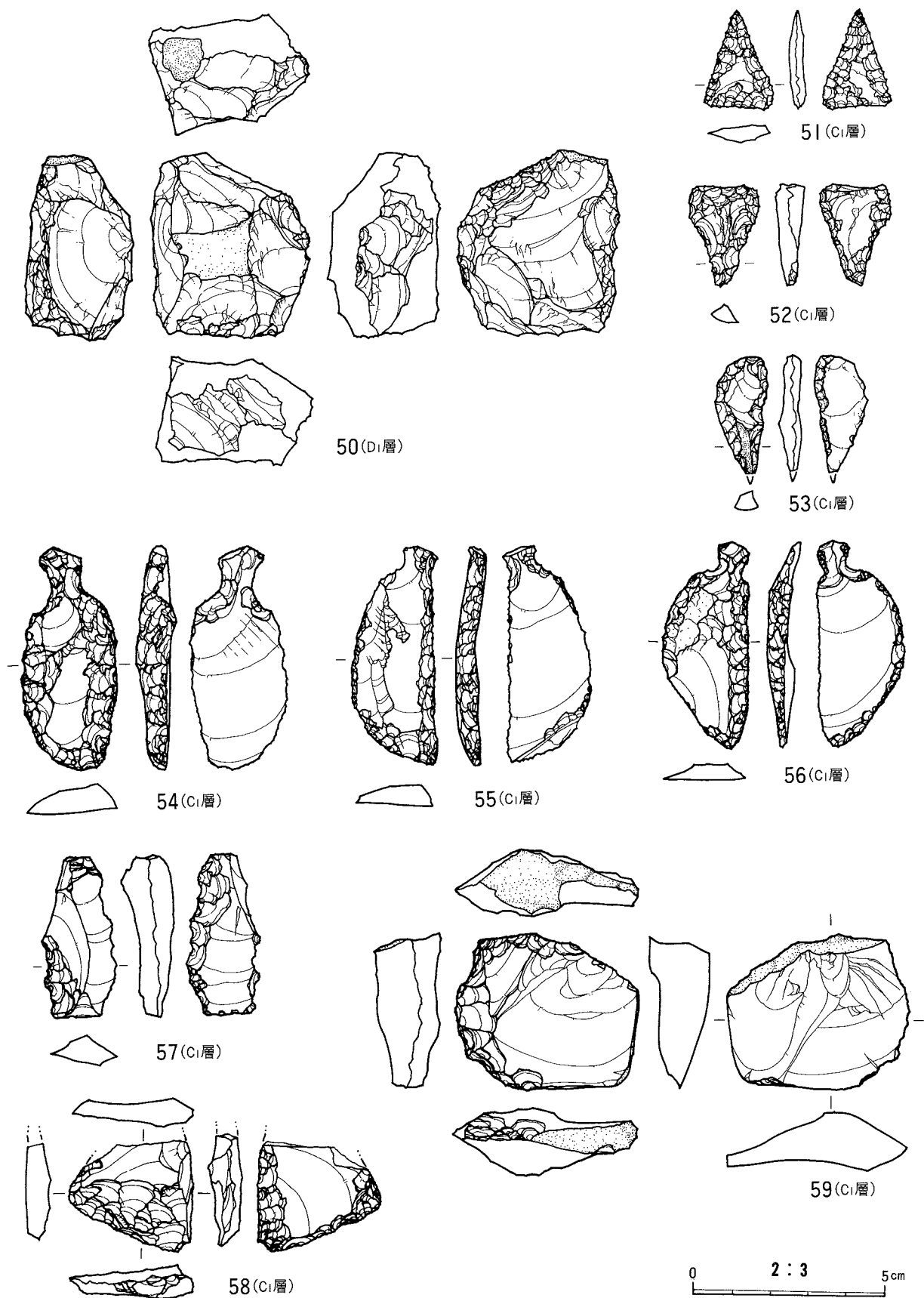
第164図 RA2189竪穴住居跡出土石器(1)



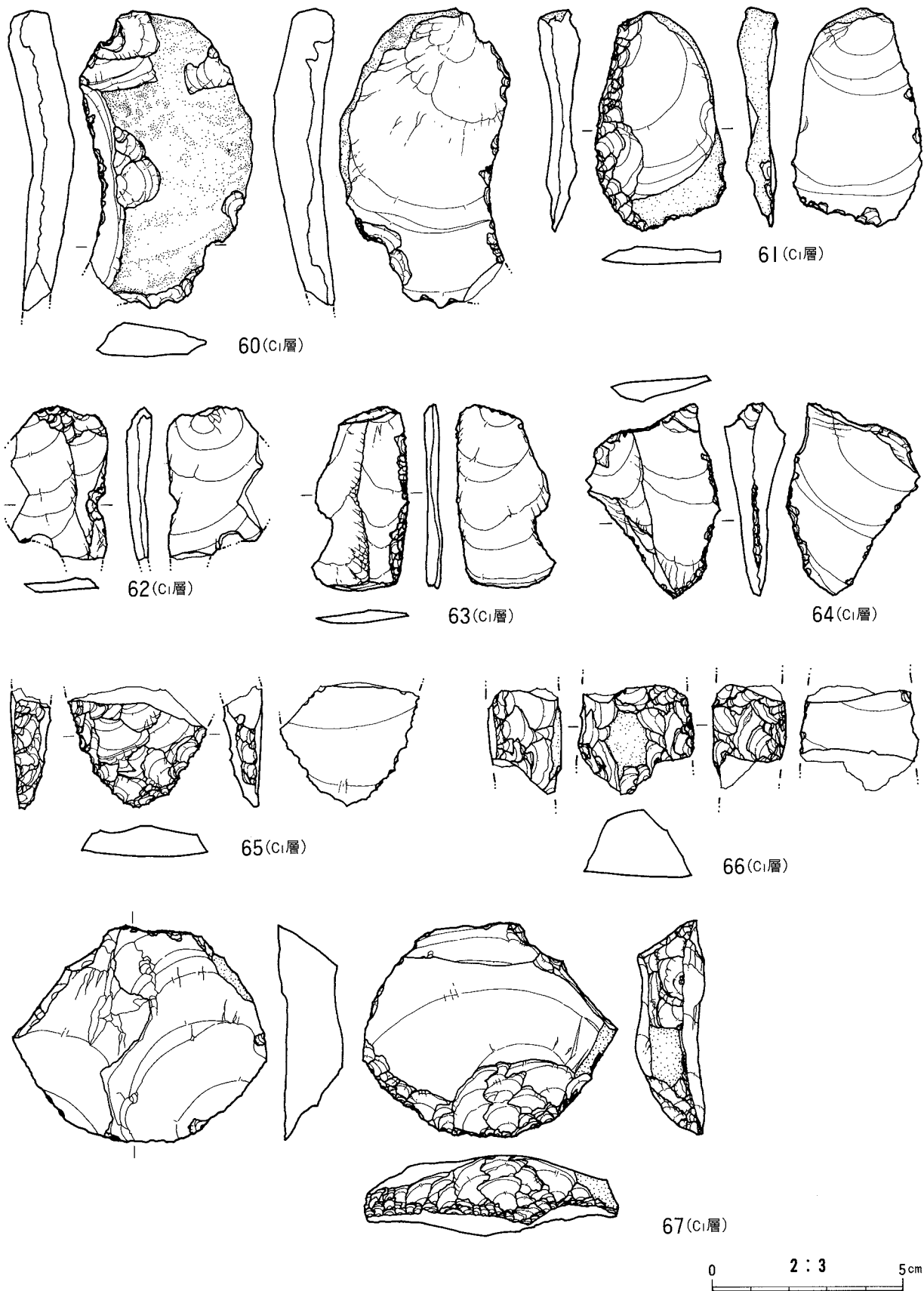
第165圖 RA2189豎穴住居跡出土石器(2)



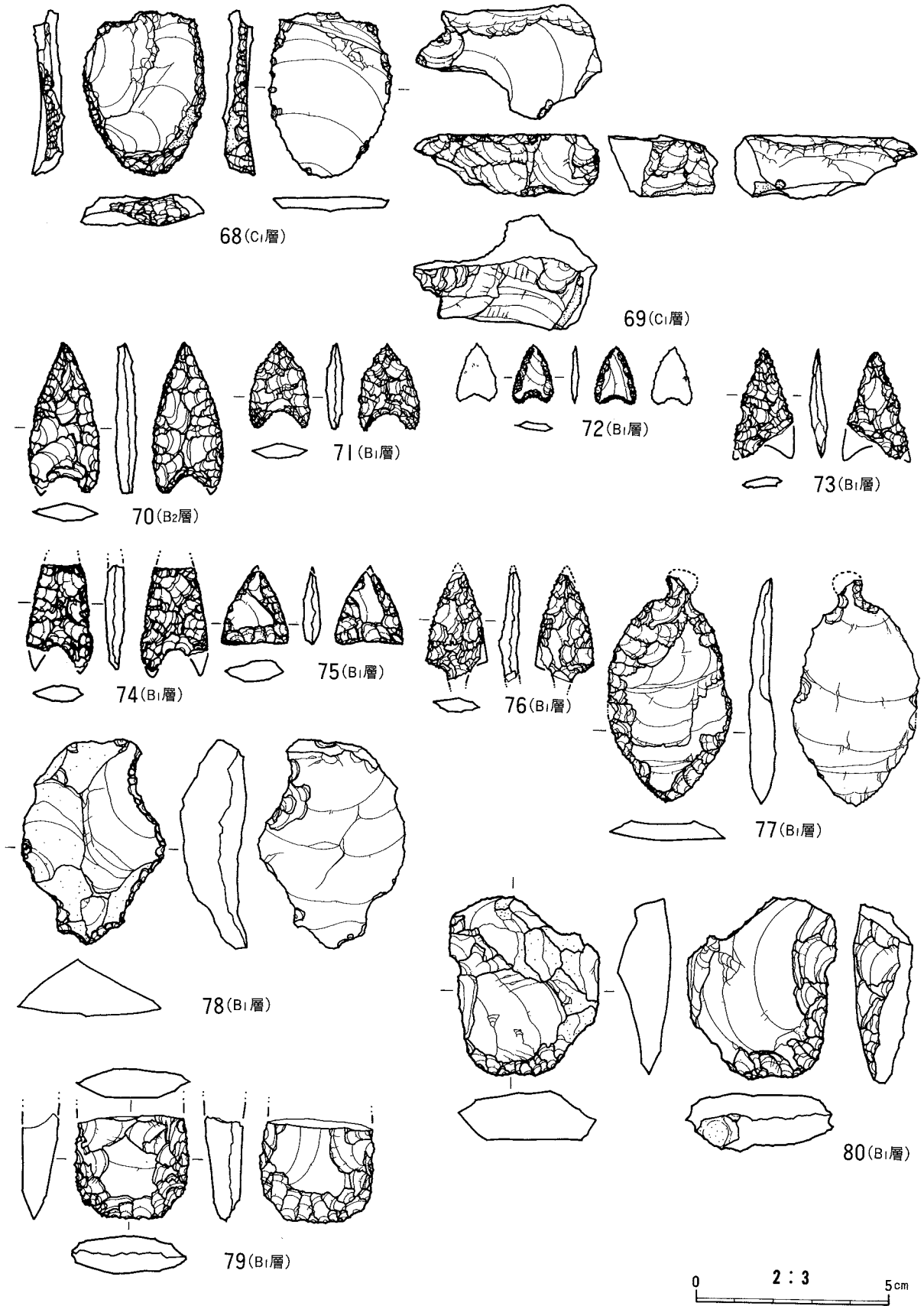
第166図 RA2189豎穴住居跡出土石器(3)



第167圖 RA2189竪穴住居跡出土石器(4)



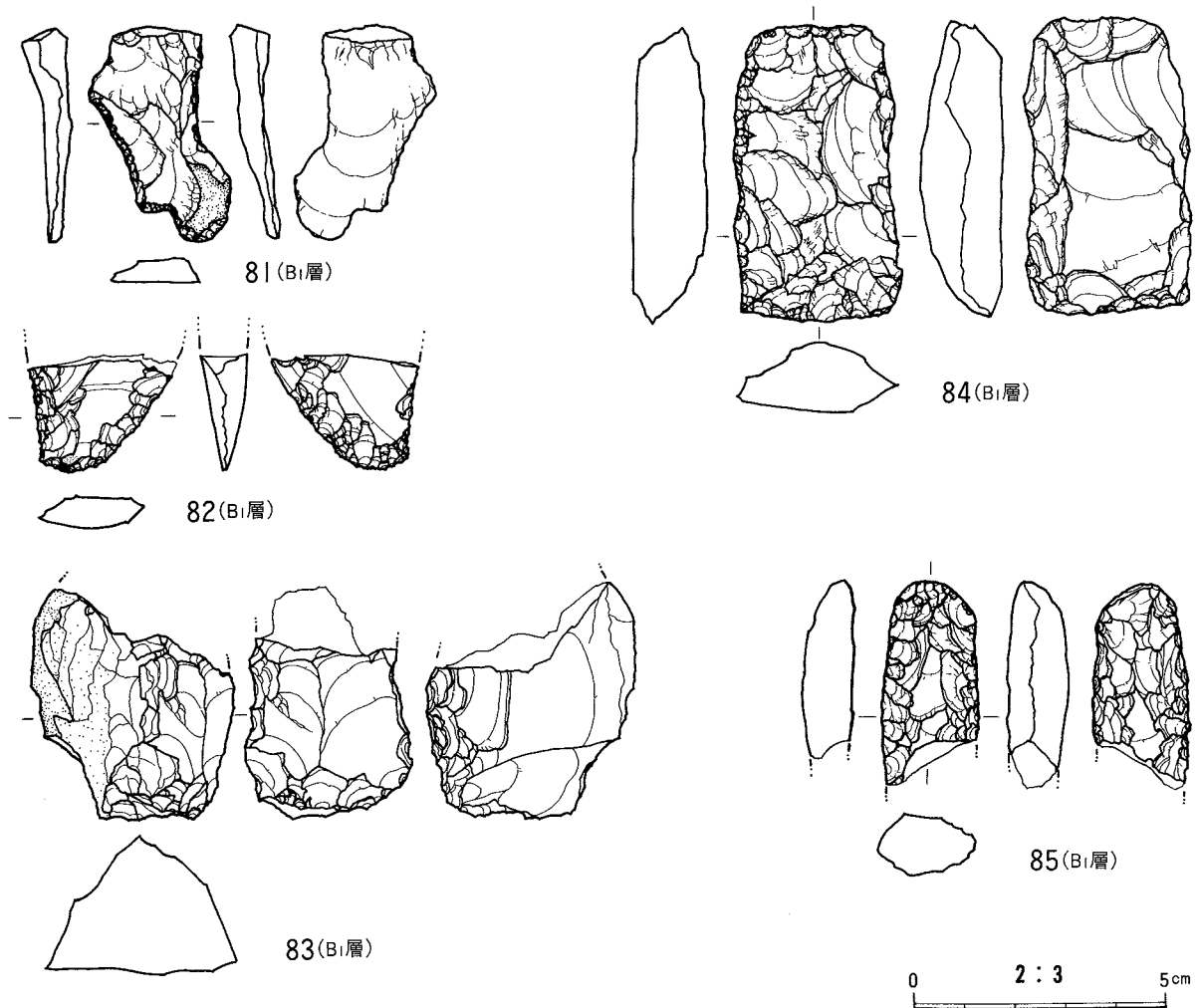
第168图 RA2189竖穴住居跡出土石器(5)



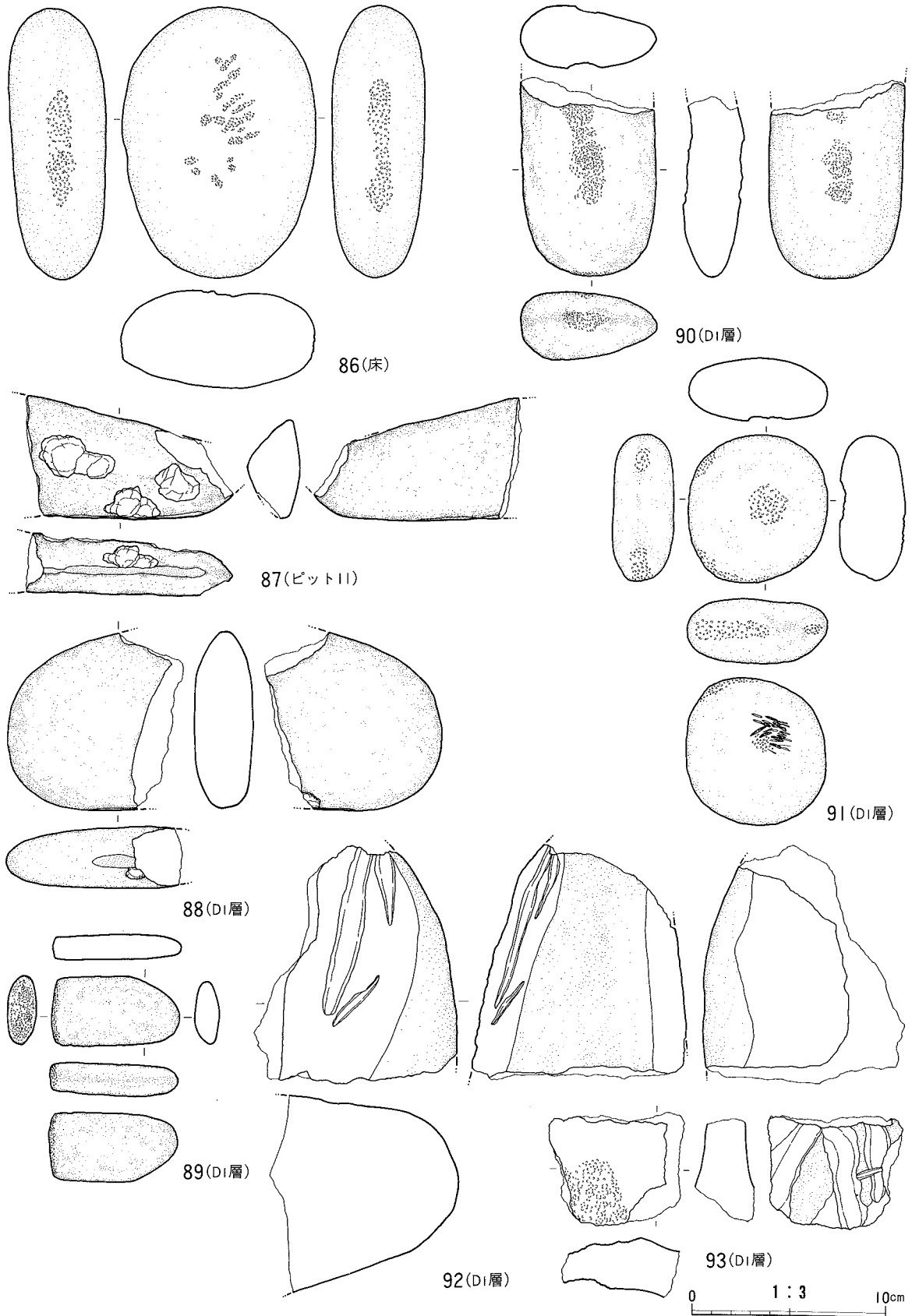
第169圖 RA2189豎穴住居跡出土石器(6)

77は石匙であり、つまみ部は欠損している。平面は木葉形で、主に背面に調整が加えられている。78～80は削器で、78は背面の平面で凹刃が形成されている。79・80は両面から調整された刃部を作出している。81・82は搔器で、81は背面の縁辺に急斜度の調整を施している。83は石核である。84・85は籠状石器で、84は刃部が直線状で、裏面はあまり調整が加えられていない。85は刃部が欠損しているが、小形の籠状石器と思われる。

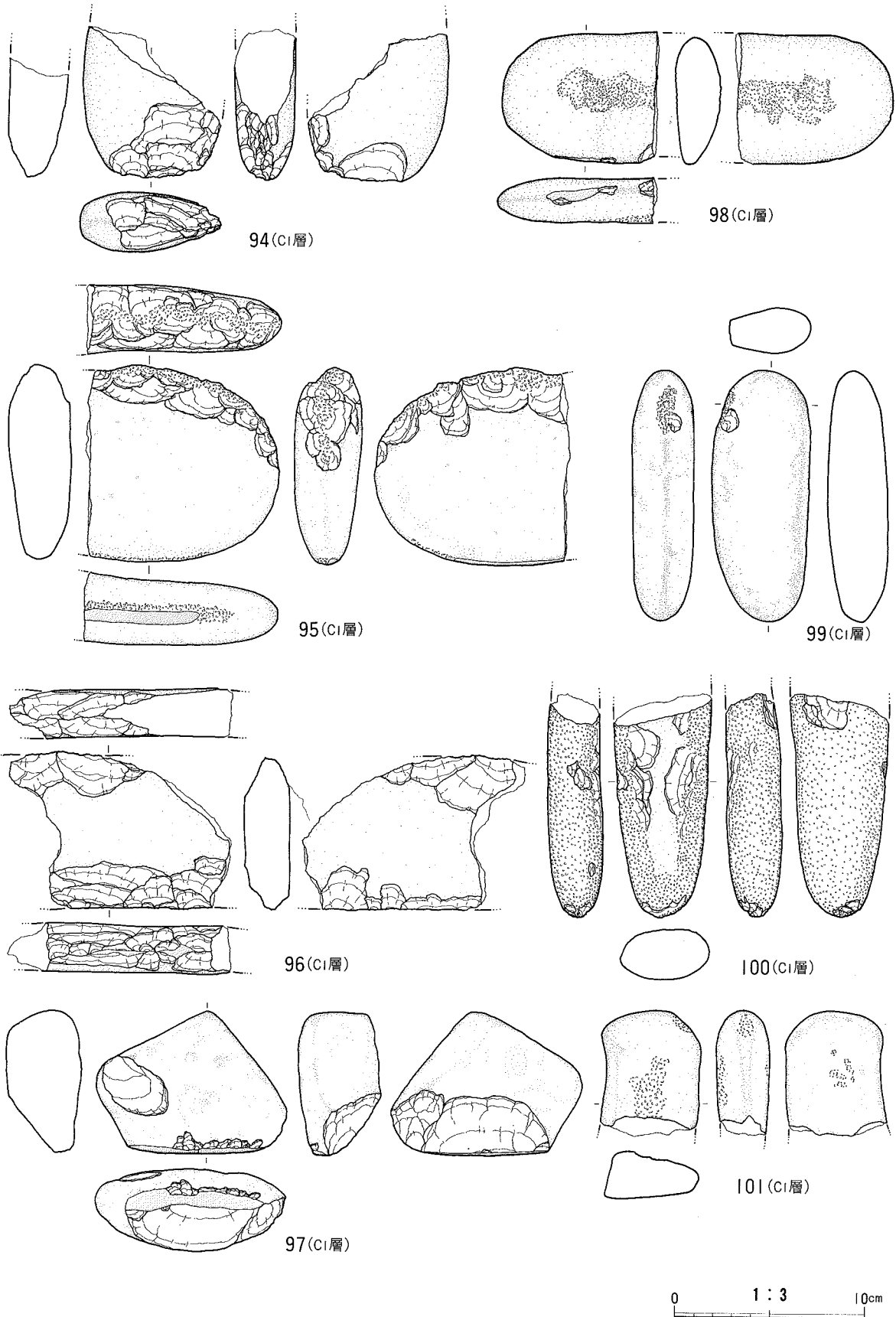
86は敲石で、表面よりも側面の方に敲打痕が顕著に見られる。87・88は敲打磨石である。いずれも敲打磨面の残存部分はわずかである。89はスタンプ状の敲石で、平坦な底面に敲打痕がまわって形成されている。90・91は凹石で、91は裏面に鼠歯状痕をもつ。92・93は砥石で、92は磨り残す自然面が残存している。94は礫器で、偏平礫の端部に両面から調整を施したもので、破損しているが、側面が主要な刃部と思われる。縁辺には細かい剥離は見られない。95～98は敲打磨石である。95は敲打磨面が形成されている刃の対辺は剥離整形されている。96は板状の礫を素材にしたもので、両側面は剥離面で覆われている。97は敲打磨面の一辺には小剥離が並ぶが、もう一方の辺にはほとんど見られない。98は表裏両面に敲打痕をもち、敲打磨面は僅かである。99～103は敲石である。99は長礫の端部に敲打痕をもち、100は全面に敲打痕を持つもので、下端は衝



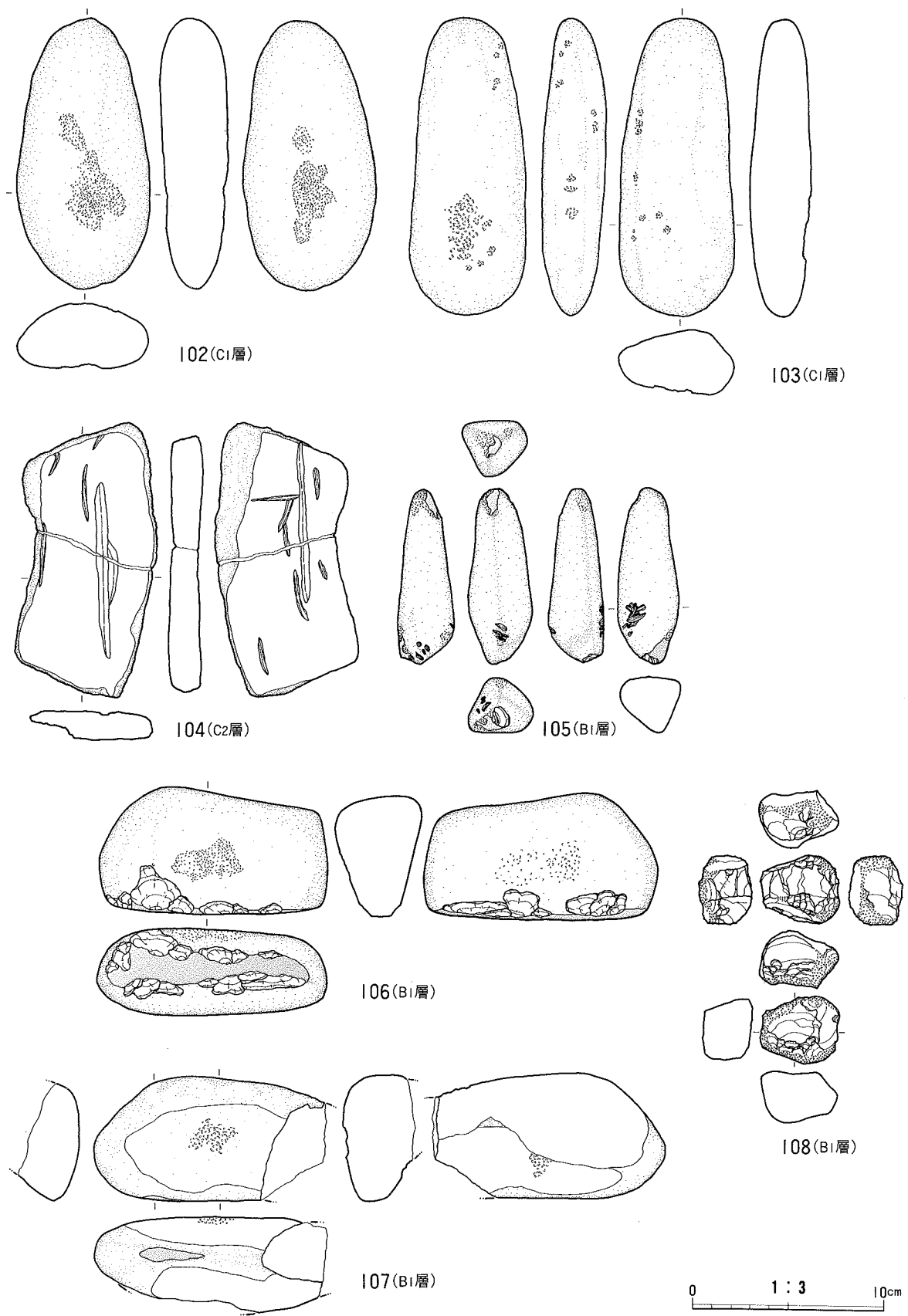
第170図 RA2189竪穴住居跡出土石器(7)



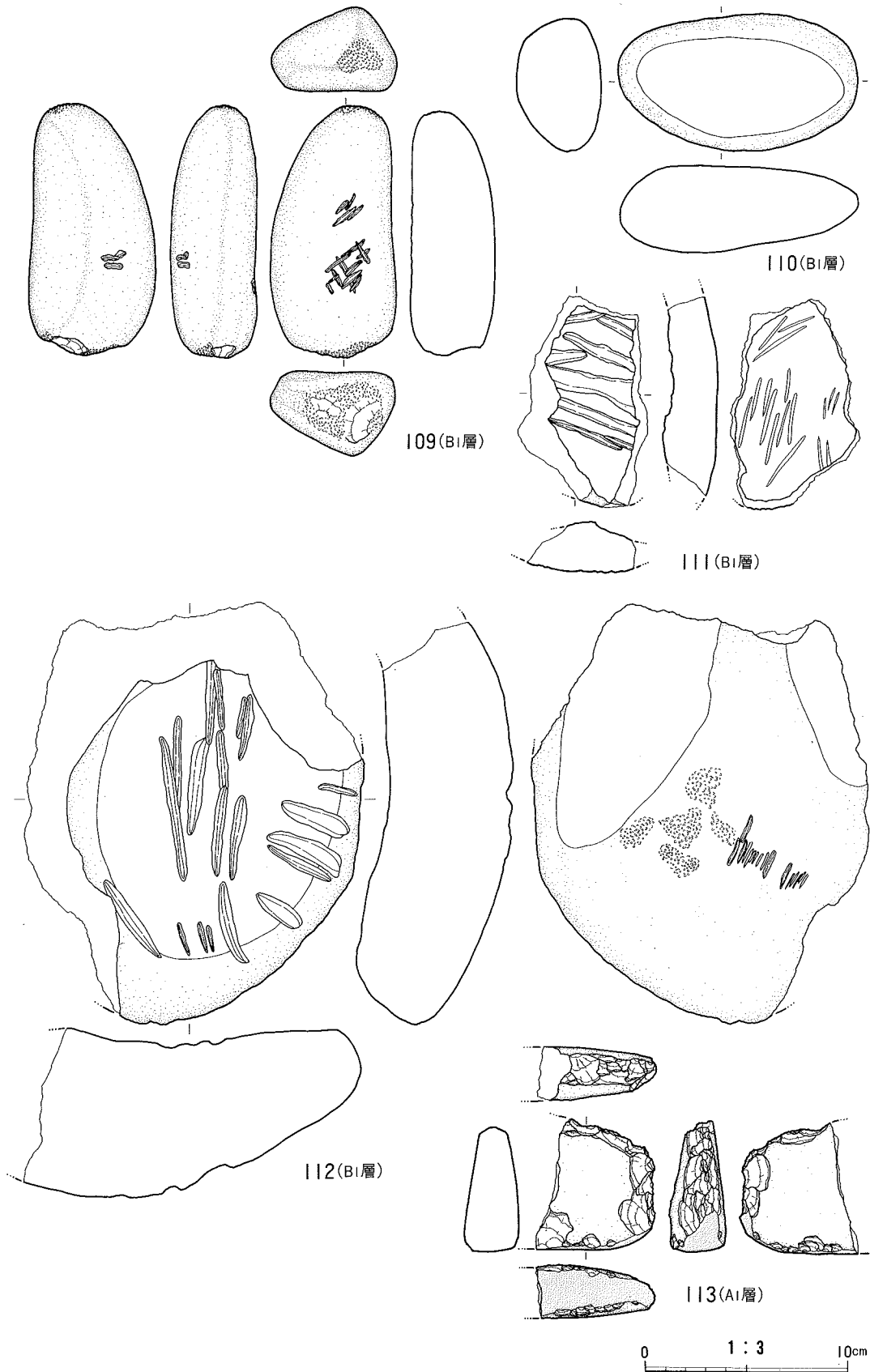
第171図 RA2189竪穴住居跡出土石器(8)



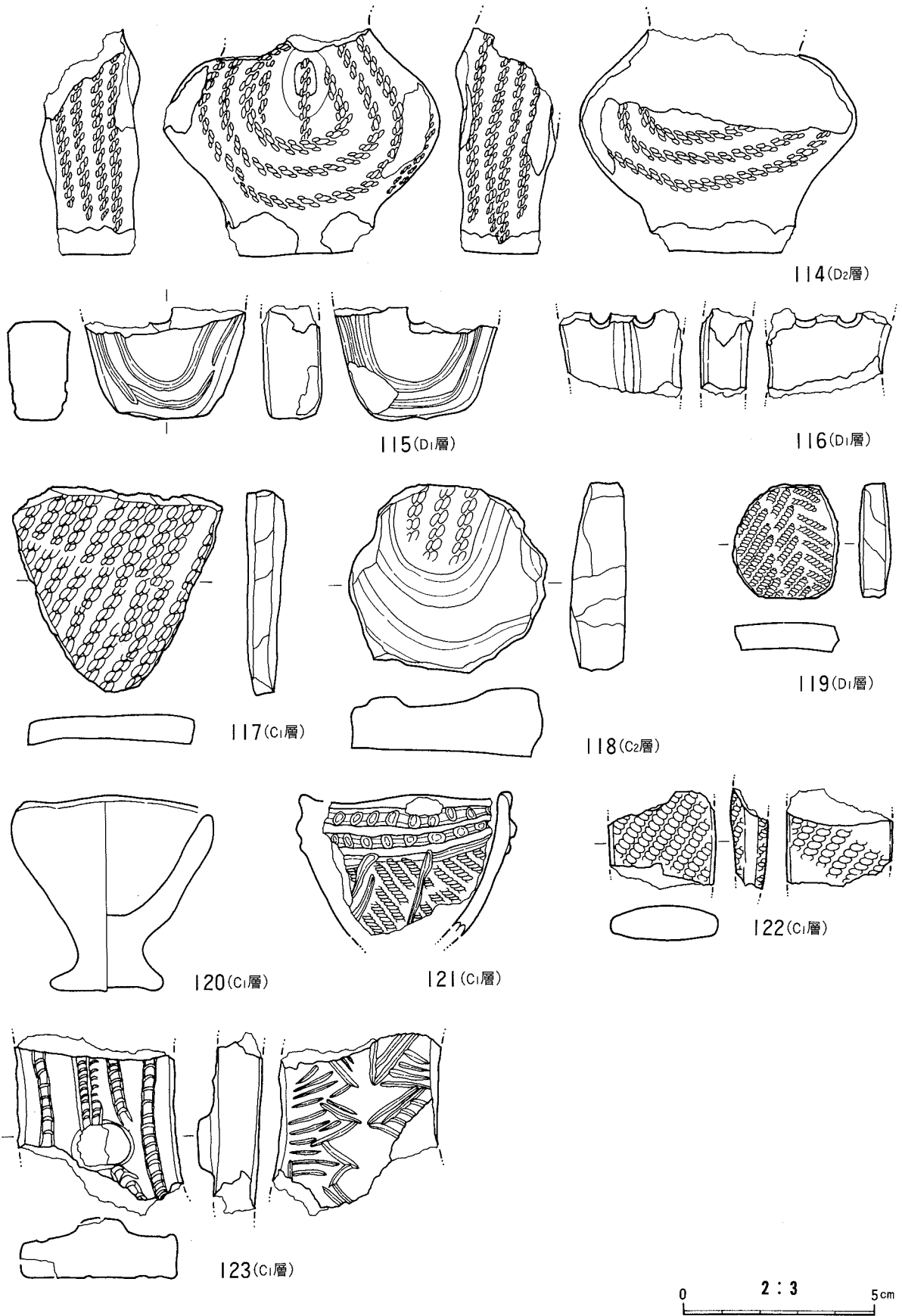
第172図 RA2189豎穴住居跡出土石器(9)



第173図 RA2189竪穴住居跡出土石器(10)



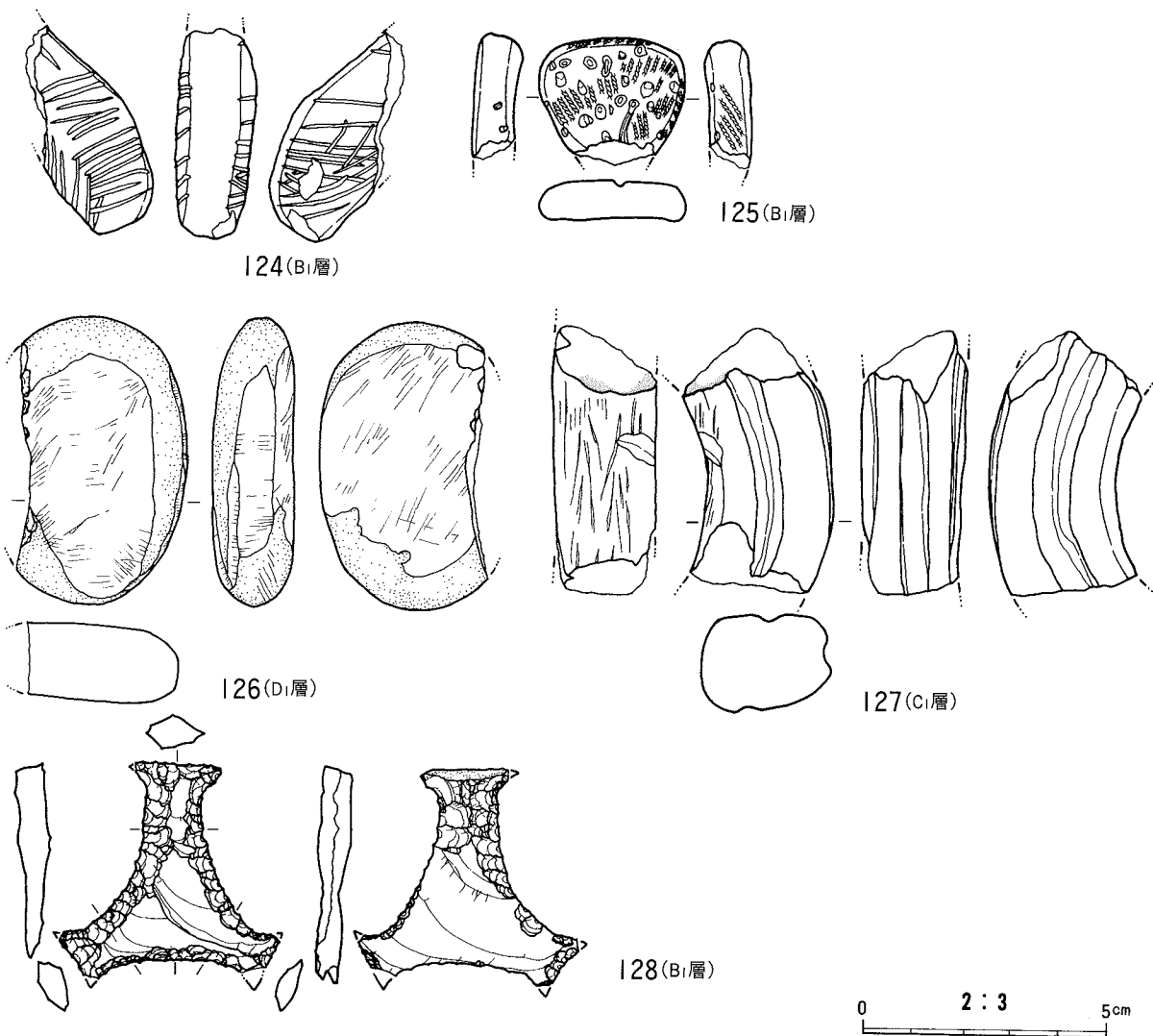
第174図 RA2189竪穴住居跡出土石器(11)



第175圖 RA2189豎穴住居跡出土土製品(1)

撃剥離と考えられる剥離が見られる。この敲打痕はほぼ全面にわたって平均的に見られ、磨製石斧の未成品とも考えられる。102・103は表裏両面に浅い敲打痕を持つ。104は接合した砥石、105～107は敲打磨石である。素材に用いている礫の形状はそれぞれ異なるが、いずれも敲打磨面を形成している。108・109は敲石、110は全面磨面の磨石である。108は小礫の縁辺部を使用したものである。109は敲打痕が形成されているのは礫の端部であるが、表裏両面に鼠歯状痕も見られる。111の砥石の表面の溝状の条痕は、断面形の底が平らで、裏面に見える擦痕は幅が狭く、浅いものである。112は石皿で機能面はそれほど深さを持つものではないが、縁に自然面を残し、溝状の条痕を有するものである。113は敲打磨石で、底面の敲打磨面が側面まで続いて形成されている。

土製品(第175・176図124・125) 114～116は土偶と思われる。114は表面に縄文原体圧痕によるループ文が施されている。115・116は穿孔されている。117～119は土製円盤、120・121はミニチュア土器である。122の斧状土製品は両端ともに欠損しているが、下半部は側面観で角度を狭めているため、尖端部分に近い方と考えられる。123・124は土偶である。123は体部であり、表面にはボタン状の貼付と半截竹管による押引文、裏面には短い平行沈線文と、鋸歯状を呈する沈線文が施されている。124は上腕部と思われる。125は土版であり、表面には刺突文が配される。



第176図 RA2189 竪穴住居跡出土土製品(2)・石製品

石製品(第176図126~128) 126は自然面を残して研磨整形された石製品、127は内側以外の三面の溝を施す環状の石製品の破損品で、内側にも整形時の擦痕をもつ。128は三方に張り出し部分をもつ製品である。

R A 2195 竪穴住居跡 (第177~183図)

時期 縄文時代中期(大木8b-3式期)。

位置 調査区南西に位置する。

平面形 全体形の南半部は調査区外に広がる。

主軸方向 不明。

規模 調査区内で検出した規模は、東西2.4m、南北(長軸)7.8mをはかる。

重複関係 R A 2186に切られ、R A 2193・2194・2196・2208・2217を切る。

検出面 耕作土(I a層)直下の遺物包含層(II a・b層)下面。

埋土 自然堆積で、層相の違いによりA・Bの2層に大別される。

A層-塊状の褐色土を多量に混入するしまりのよい黒褐色土で、カーボン・スコリア粒を含む。

B層-粒~塊状の褐色土をやや多く混入する黒褐色土で、多量のカーボン粒と少量のスコリア粒を含む。なお、B₃層はさほどしまりは良くない。

炉の状態 未検出。

壁の状態 周溝から直壁ぎみに立ち上がる。

周溝 幅0.12~0.43m、床面からの深さ0.25~0.31mをはかる。

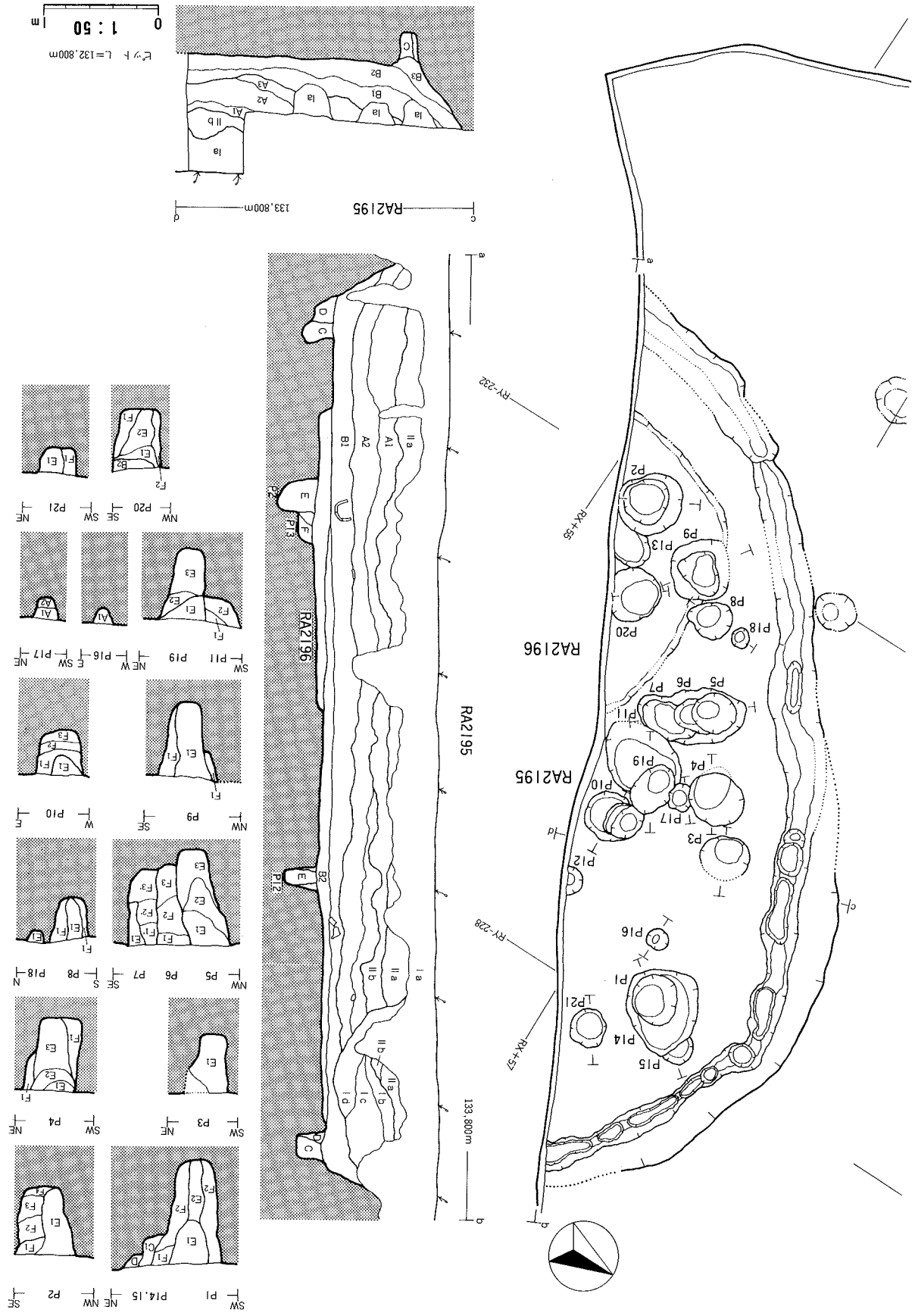
床の状態 平坦である。

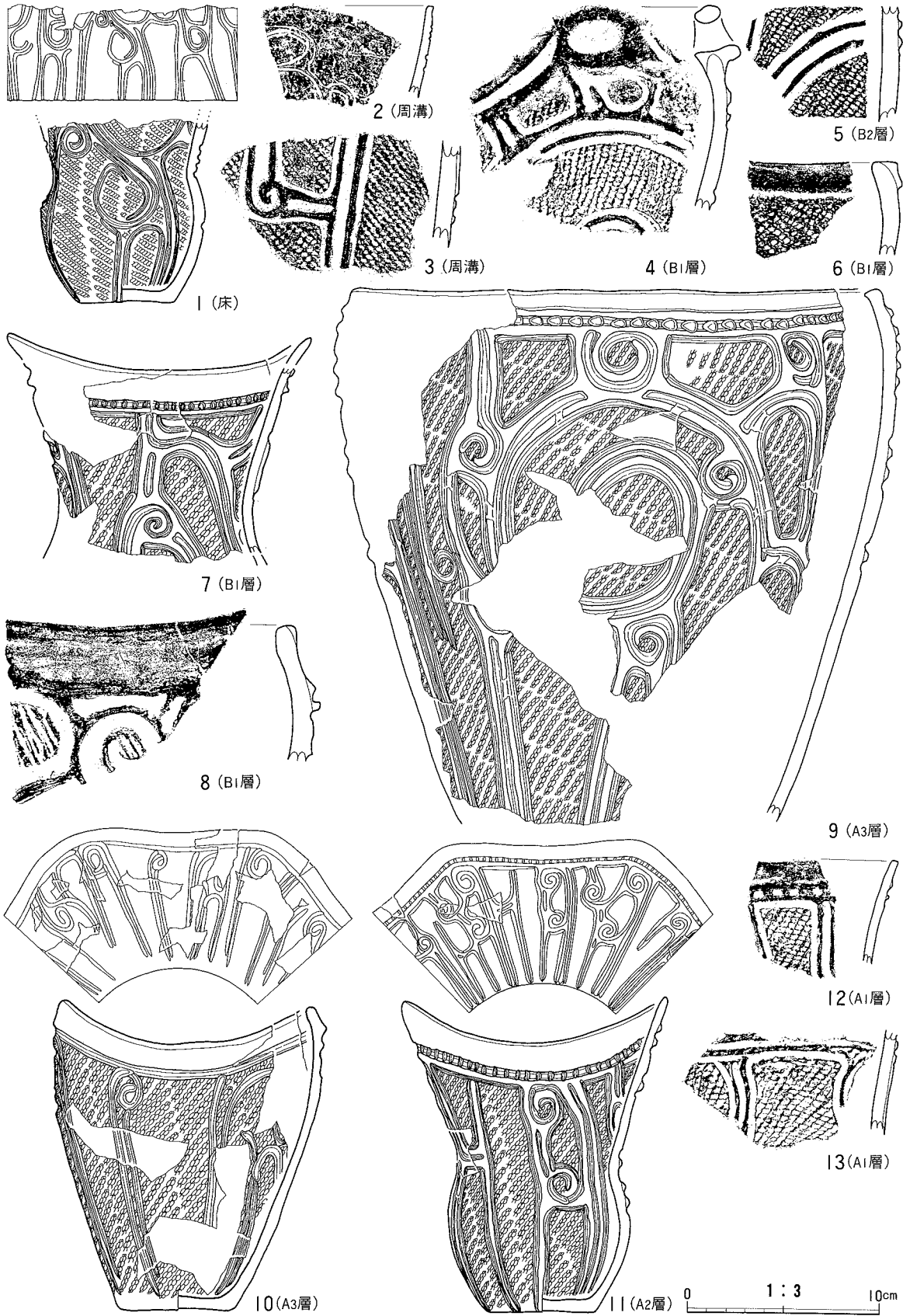
柱穴 床面上に21口(P 1~21)のピットを検出している。このうち、支柱穴を構成するピットは、規模の大きい12口(P 1~10・19・20)と考えられるが、その配置は判然としない。床面からの深さは、P 1-0.89m、P 2-0.59m、P 3-0.51m、P 4-0.63m、P 5-0.83m、P 6-0.69m、P 7-0.66m、P 8-0.36m、P 9-0.65m、P 10-0.39m、P 19-0.61m、P 20-0.51mをはかる。

なお、その他はいずれも小規模なピットである。埋土は、柱痕跡(E層)が軟質の暗褐色土。掘方(F層)が褐色~黄褐色土と黒褐色土との塊状混合土である。

土器(第178・179図) 1は屈曲のある深鉢体部から底部にかけての部位で、沈線による縦位の文様帯には渦巻文・弧状文が配される。2は口縁が緩やかに外傾して立ち上がる深鉢で、細沈線による文様が施される。3は隆沈線による小渦巻文と連結する懸垂文が施された深鉢体部である。4は孔のある波状突起をもつ深鉢口縁部で、波頂下には大渦巻文を配する。5は隆沈線による文様を施す深鉢体部である。6は深鉢口縁部である。7は口縁が外反し外反部が無文となる深鉢で、隆沈線による渦巻文・弧状文・懸垂文が連結して施される。8は隆沈線による渦巻文を施す深鉢口縁部で、地文は櫛目文を斜位に施すものである。9は口縁が内湾する深鉢で、口縁下には1条の刺突列が配される。体部には大渦巻文が施され、周囲には小渦巻文を四方に配し、小渦巻文より懸垂文を垂下させる。10は波状口縁をもつ深鉢で、沈線による小渦巻文を体部上部に配し懸垂文を垂下させるものである。11は口縁形態が波状を呈し、波状部が無文となる深鉢である。体部は隆沈線による渦巻文・懸垂文が施される。12は口縁に無文帯を設ける深鉢口縁部で隆沈線による懸垂文が施される。13は隆沈線による横位の文様と渦巻文の外周部が施された部位である。

第177図 RA2195嬰穴住居跡

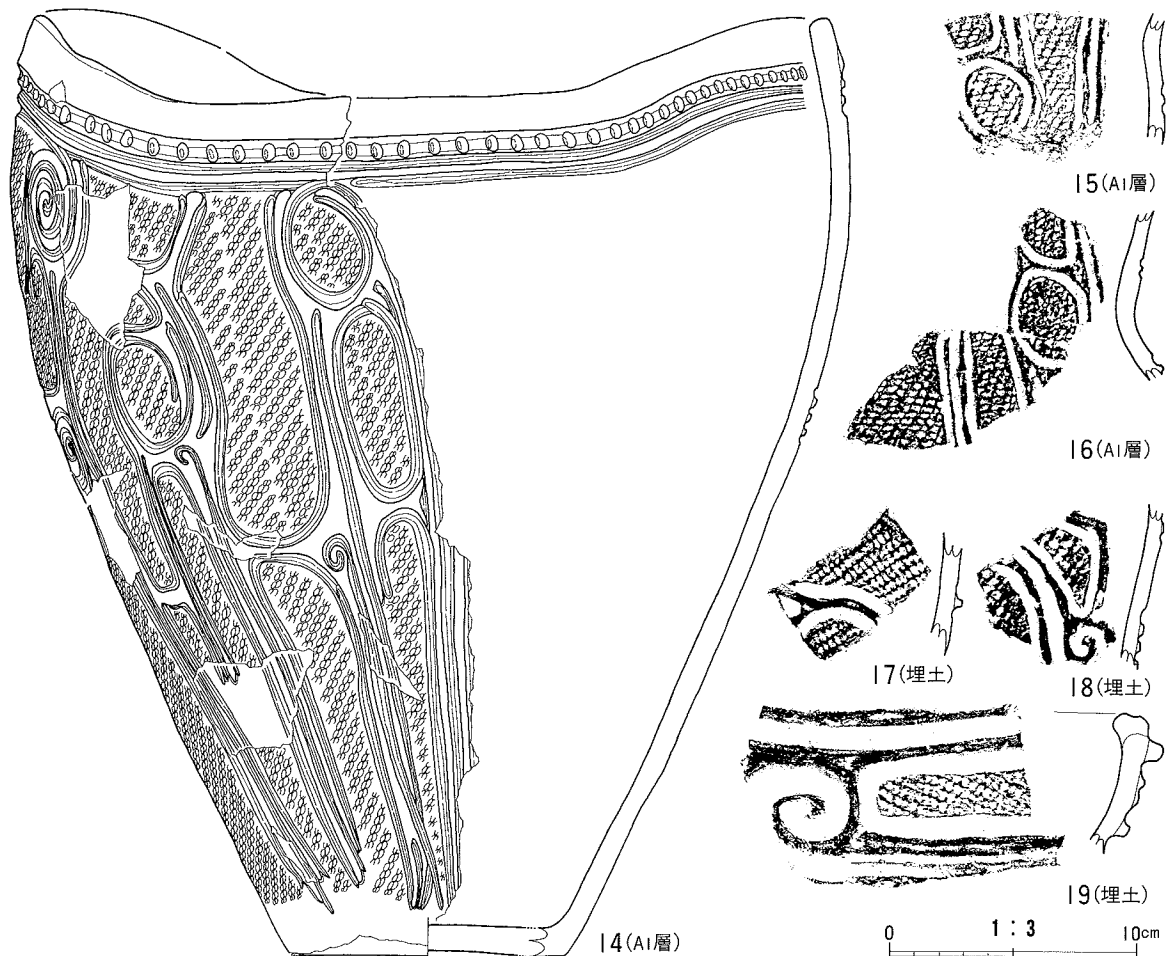




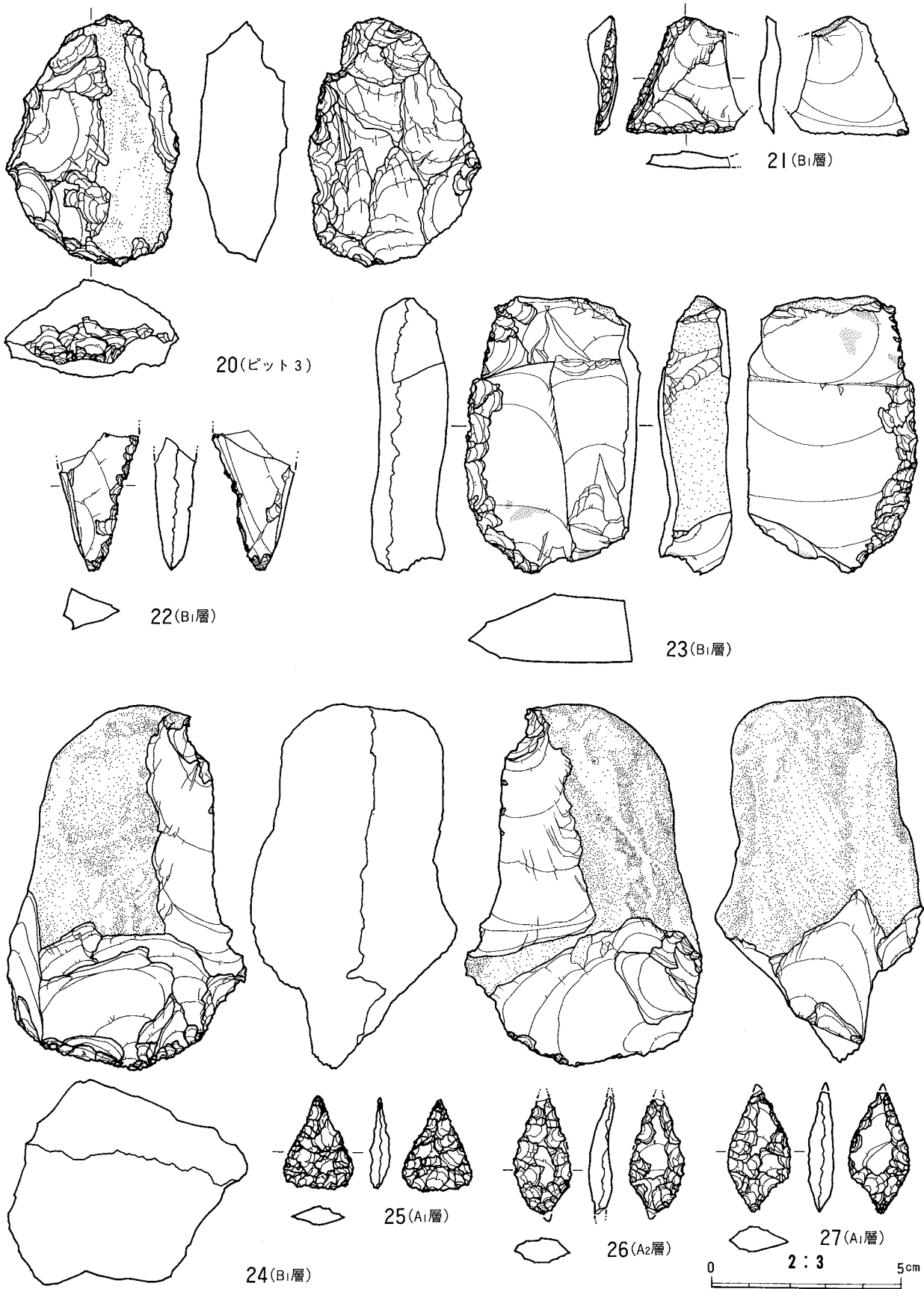
第178圖 RA2195豎穴住居跡出土土器(1)

14は口縁形態が波状を呈する深鉢で、隆沈線による円文・渦巻文などの文様は縦位の文様帯である15・16は屈曲のある深鉢体部で隆沈線による円文と連結する文様が施される。17・18は隆沈線による文様が施される深鉢体部である。19は隆沈線による渦巻文が施される浅鉢口縁部である。

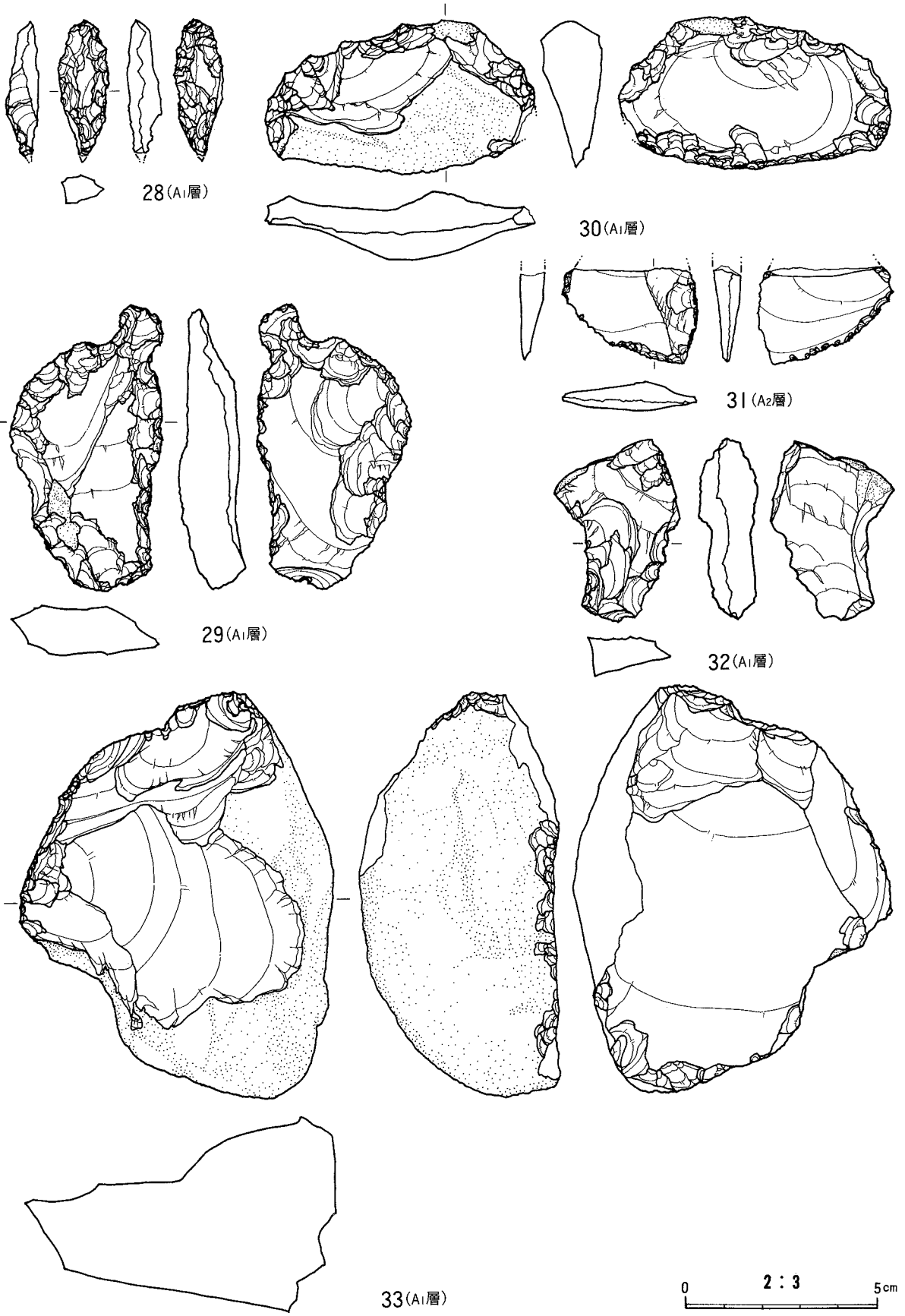
石器(第180~182図) 20は両面調整石器で、背面に自然面を残す。21~23は削器である。21は、刃部を作出した背面二側辺の接点部分の剥離の稜がやや摩滅している。23は上半部にこの削器を横切る方向で節理面が走っている。一側辺両面調整がなされている。24は石核である。25は平基無茎鏃、26・27は凸基有茎鏃で、25は細かい剥離で先端部の調整を行った後で、その部分を残してそれよりも大きい剥離面で構成される調整を鏃身部に施す順で調整を施す。26・27は基部から茎部にかけての調整が、それぞれを分けるようなものではなく、なめらかに続いて施されている。28は石錐、29は縦型の石匙である。横長剥片の打点方向がこの石匙の一方の突き出た辺にあたるため肉厚な部分を残すものの、主要刃部である背面右側辺は薄い押圧剥離で調整されている。30~32は削器である。30は横長の剥片の末端に連続的な調整を施している。31は末端に角度のきつい細かい剥離が並んでいる。33は石核である。34は磨製石斧である。側面はほぼ平坦に研磨整形され稜が明瞭に形成されている。35・36は敲打磨石で、いずれも小剥離を敲打磨面に持つ。なお、36は敲打磨面の長軸と平行に破損している。



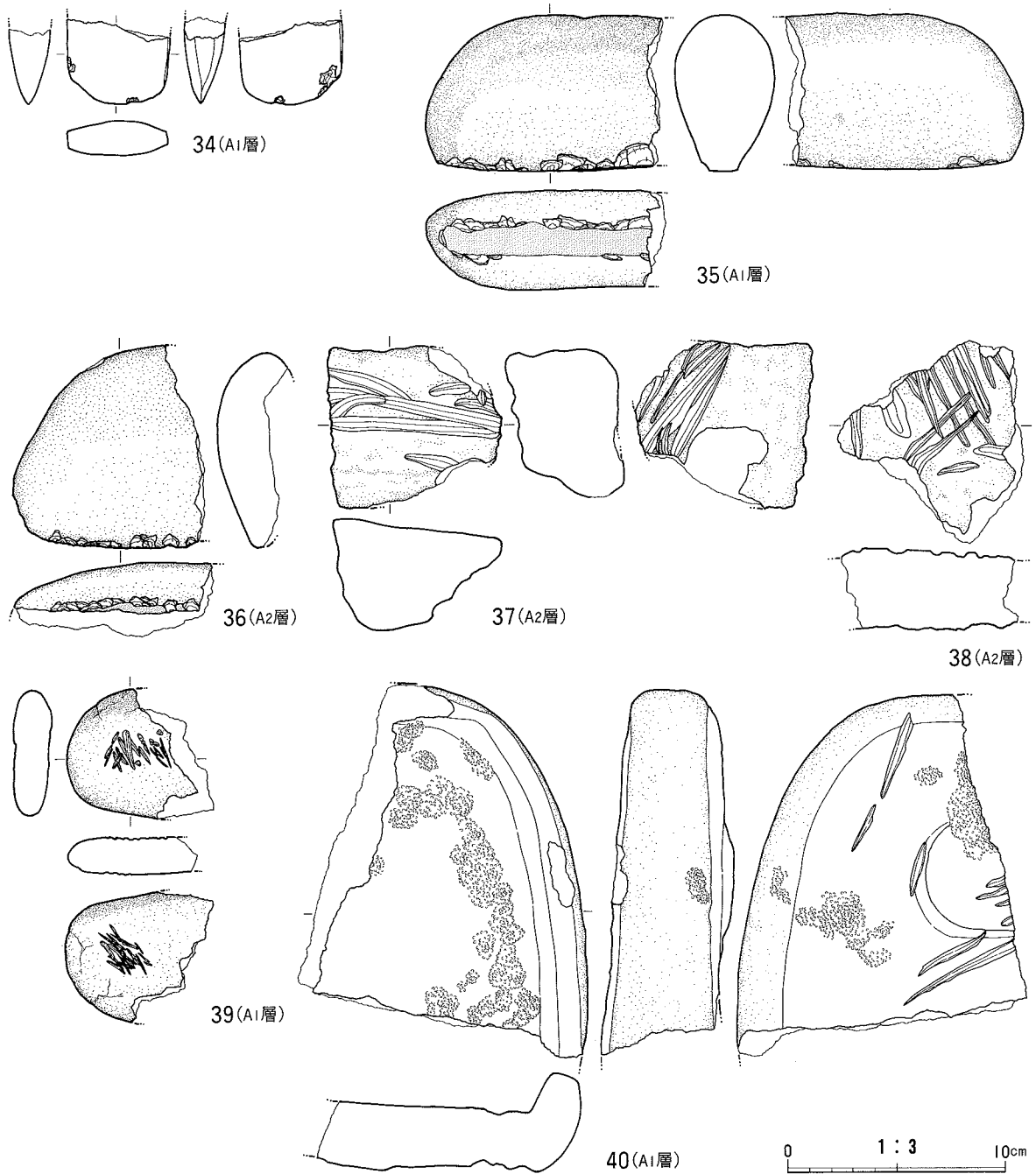
第179図 RA2195 竪穴住居跡出土土器(2)



第180図 RA2195 竪穴住居跡出土石器(1)



第181図 RA2195竪穴住居跡出土石器(2)

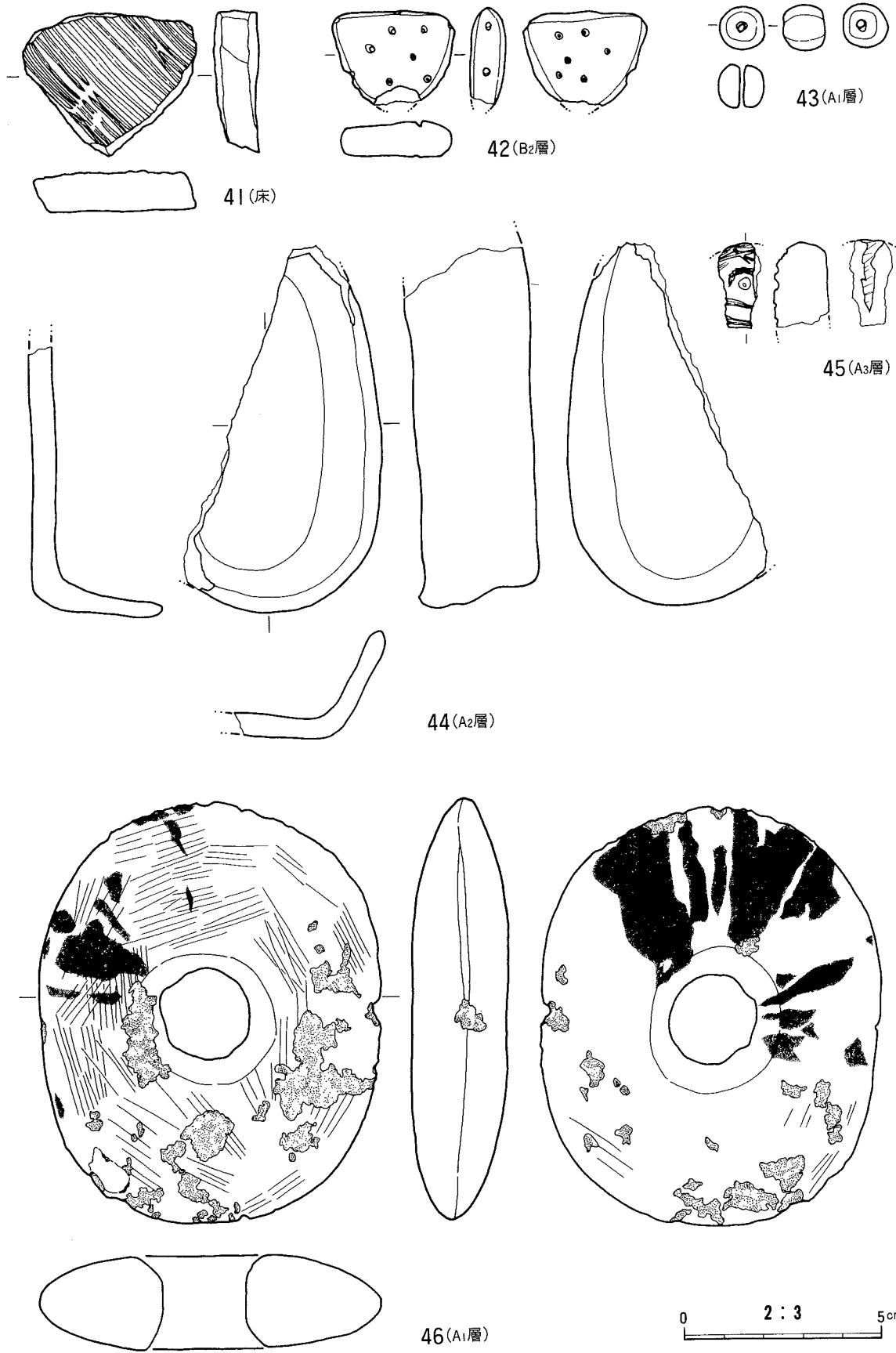


第182図 RA2195 竪穴住居跡出土石器(3)

37～39は砥石で、37は機能部である溝状の条痕の断面がなだらかであるが、38・39は角張っている。40の石皿は高さのある縁をもち、縁に沿う敲打痕を伴う。裏面も使用されている。

土製品 (第183図41～44) 41は土製円盤で、表面には平行沈線文が施される。42は三角形を呈する小形の土版である。表裏面・側面とも、円形の刺突が施されている。43は土玉、44は楕円形の平底土器である。

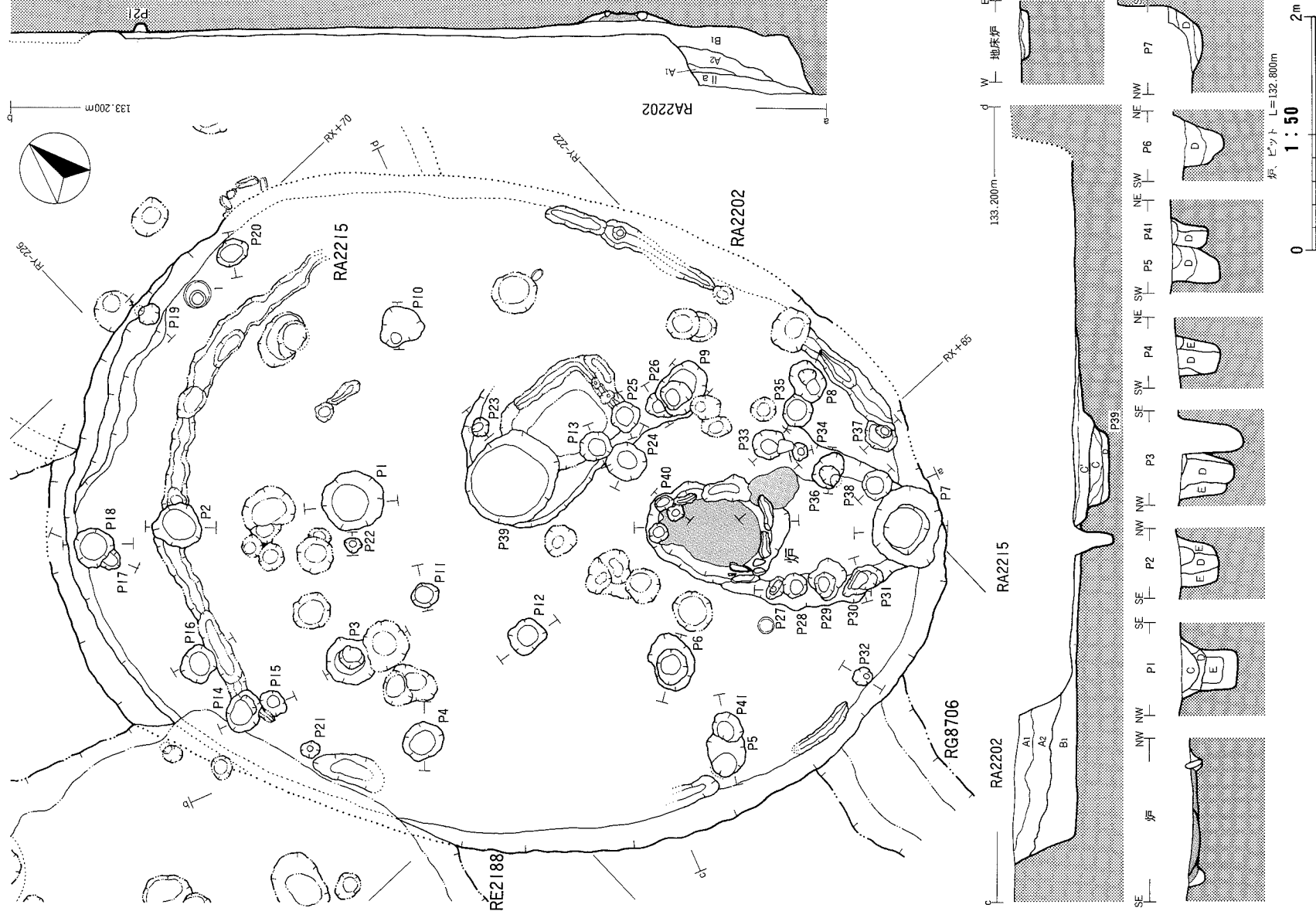
石製品 (第183図45～46) 45は残存部が少ないが岩版と思われる。刺突文、平行・弧状沈線文が配される。46は環状石製品である。表裏面に整形時の擦痕が不定方向に認められ、炭化物が付着している。



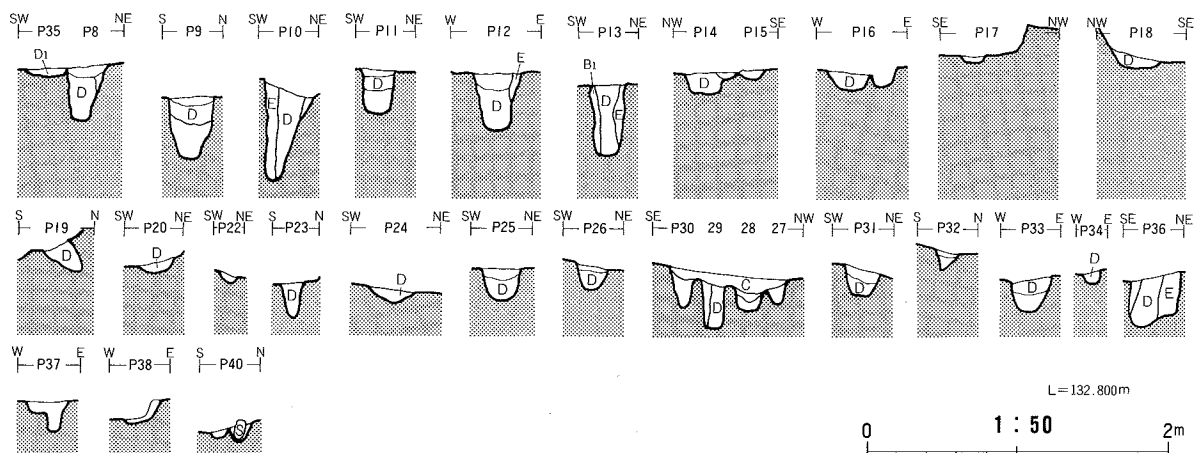
第183図 RA2195 竪穴住居跡出土土製品・石製品

R A 2202 竪穴住居跡 (第184~189図)

- 時 期** 縄文時代中期 (大木 8 b - 3 式期)。
- 位 置** 調査区東半部中央に位置する。
- 平面形** 楕円形を呈する。
- 主軸方向** W43° Eを示す。
- 規 模** 北西~南東方向に長軸を持つ。全体形の東寄側はR A 2215に切られているため判然としないが、規模は長軸7.66m、短軸5.70m程である。
- 重複関係** R E 2188、R A 2204・2215に切られ、R A 2199・2200・2207・2212を切る。
- 掘込面** 既に削平されている。
- 検出面** 耕作土 (I a 層) 直下及び遺物包含層 (II a 層) 直下。R E 2188、R A 2204・2215床面。
- 埋 土** 自然堆積で層相の違いにより、A・Bの2層に大別される。
A層一粒~塊状の褐色土をわずかに混入する黒褐色土で、スコリア粒を少量含む。
B層一粒状の褐色土をわずかに混入する黒色土で、スコリア粒と粘土塊を含む。
- 炉の状態** 全体形の長軸中軸線の南壁寄りに複式炉を検出している。規模は、長軸2.50m、短軸1.57m、燃焼部の南側には6個の自然円礫が残存しており、東側には炉石の抜き取り痕跡と思われるピットを検出している。火床面は長軸0.86m、短軸0.56mで、熱浸透層の厚さは0.06mをはかり、堅く焼けている。
- 壁の状態** 北側の壁は、壁中位に段を持って立ち上がるが、その他は床面から直壁ぎみに立ち上がる。
- 床の状態** 平坦である。
- 柱 穴** 床面上に40口 (P 1~40) のピットを検出している。このうち、支柱穴を構成するピットは、6口 (P 2・4・6・7・9・10) で、6本柱による亀甲形の配置を示す。床面からの深さは、P 2-0.32m、P 4-0.36m、P 6-0.32m、P 9-0.41m、P 10-0.65mをはかる。なお、P 1・5・7・8・11・12・13も比較的規模の大きいピットでP 1は棟持柱と考えられる。深さは、P 1-0.57m、P 5-0.40m、P 7-0.10m、P 8-0.36m、P 11-0.30m、P 12-0.37m、P 13-0.46mをはかる。その他はいずれも小規模なピットである。埋土は、柱痕跡 (D層) が軟質の暗褐色土。掘方 (E層) が褐色~黄褐色土と黒褐色土との塊状混合土である。
- 土 器 (第186図)** 1は口縁に隆帯を貼付し、器壁が大きく外反する深鉢である。体部には縦位の櫛目文を密に施すものである。2は隆沈線による渦巻文が施される深鉢体部で、地文はL R L 複節縄文を縦位に施すものである。3・5・9は浅鉢口縁部である。3の渦巻部は把手状に張り出すもので横位に文様帯が展開していくものと考えられる。5は渦巻文と円文が交互に施文されるものと考えられ、文様間は2条1組の隆沈線によって連結される。9は隆沈線による円文が施されるもので、地文はR L 単節縄文を横位に施したものである。4は口縁が内湾し、口縁上に波状突起をもつものである。波頂下には隆沈線による渦巻文が施され、体部にも隆沈線による渦巻文・懸垂文が施される。地文はL R L 複節縄文を縦位に施すものである。6は口縁下に刺突列を施し体部上部に小渦巻文を配する深鉢である。7・8・10は隆沈線による渦巻文が施される深鉢体部で、地文は7-L R L 複節縄文、8・10-R L R 複節縄文が施される。11・12・15は隆沈線による渦巻文が施されるもので、地文はL R L 複節縄文が施される。13は隆沈線による有棘渦巻文が施され、地文はL R L 複節縄文を縦位に施すものである。



第184図 RA2202 竪穴住居跡(1)

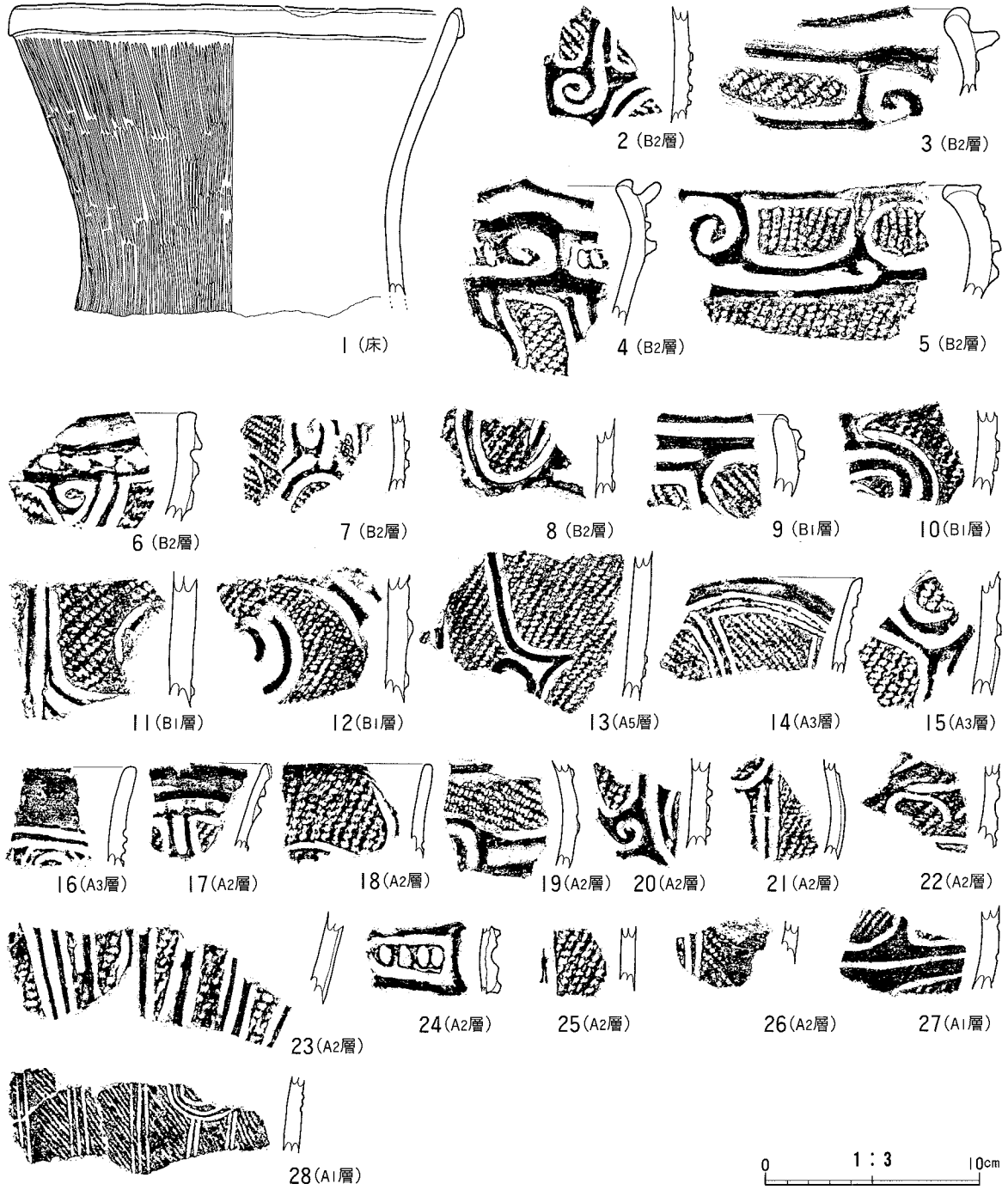


第185図 RA2202竪穴住居跡(2)

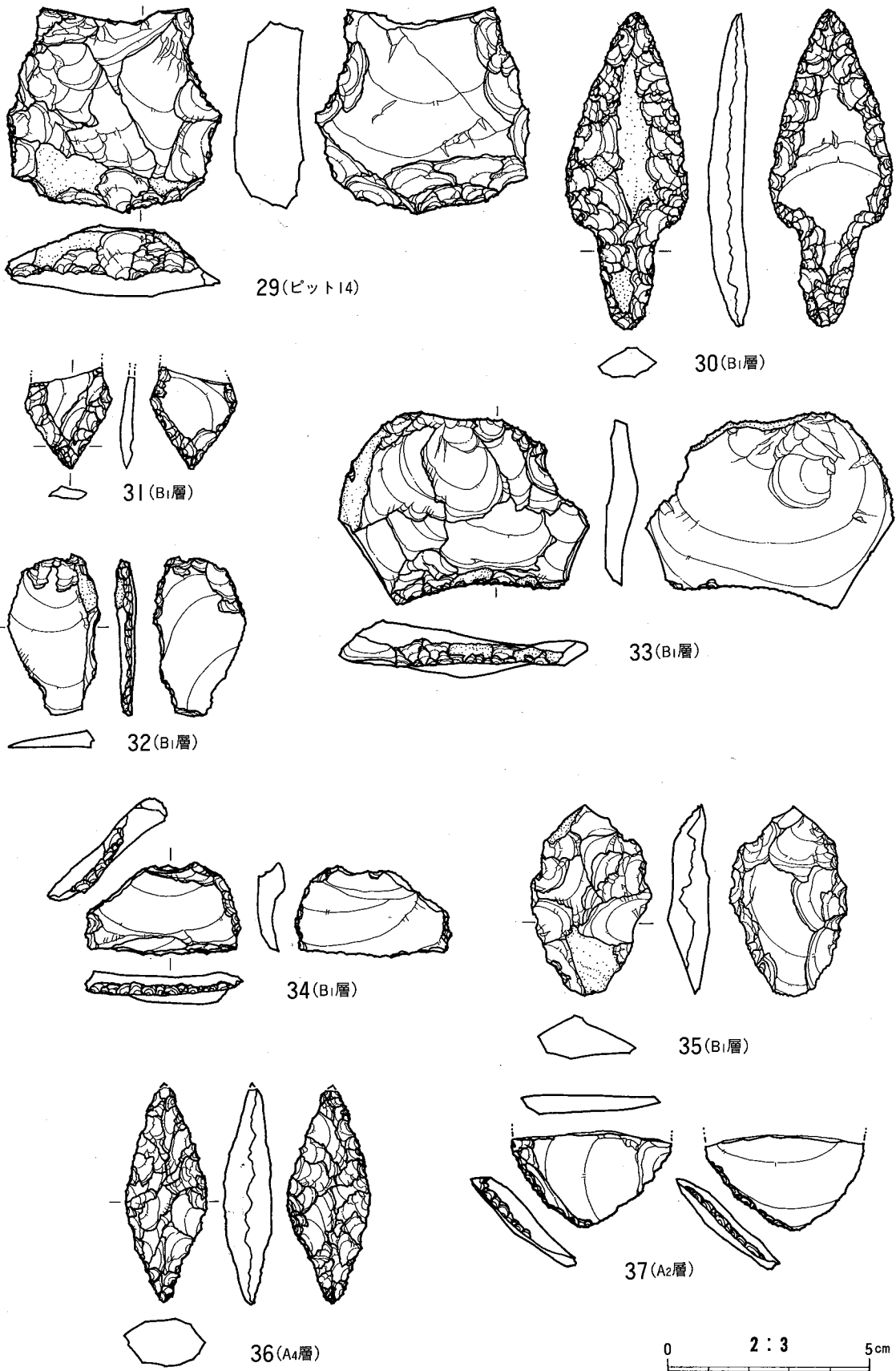
14は口縁が外反する小形深鉢で、沈線による懸垂文が施され、地文はL R L 複節縄文を縦位に施すものである。16・17は口縁に無文帯を設ける小形深鉢で、隆沈線による渦巻文が施される。18は口縁がやや外傾する深鉢で、沈線による有棘渦巻文が施され、地文はR L R 複節縄文が施されるものである。19は口縁が内湾する浅鉢で、隆沈線による渦巻文が配される。20・21は隆沈線による渦巻文が施された深鉢体部で、ともに地文はR L R 複節縄文が施されるものである。22は沈線による文様が施される深鉢体部で、地文はL R L 複節縄文を横位に施したものである。23は隆沈線による懸垂文が施された深鉢体部下半で、地文はR L R 複節縄文が施されるものである。24は隆沈線による区画内に刺突を充填させるものである。25・26は沈線による懸垂文が施された深鉢体部下半で、地文は25-R L R 複節縄文、26-L R 単節縄文が施される。27は沈線による文様が施された深鉢体部で、R L 単節縄文を斜位に施すものである。28は沈線による渦巻文・懸垂文が施された深鉢体部下半で、地文はL R 単節縄文が縦位に施されたものである。

石 器 (第187~189図46) 29は搔器である。背面の末端に調整を加え刃部としている。30は石槍で全長のおよそ3割が茎部である。周縁調整を施し、背面茎部左側にアスファルトの付着が見られる。側面観はそれほど湾曲がない。31は石錐で、腹面右側辺は刃部が摩滅している。32~34は搔器で、32は背面の右側辺に90度に近い刃部を作出している。左側辺には使用痕が見られる。33は背面の末端で凹刃を形成している。34は第一次剥離の際の打面の方向以外の辺に、片面からの調整を加えられた刃部があるが、厚さの厚い部分ほど90度に近い急斜度調整が行われている。35は両面調整石器であるが側面観の稜の出入りが激しく一定しないため、未成品と思われる。36は石槍で先端部を破損している。両面調整されているものの階段状剥離が残っているため、断面形は一定でない。37は削器であるが、刃部はやや摩滅している。38は削器で、大きく素材剥片の形状を変えなく、縁辺に細かい剥離を施して刃部としている。39は石錐、40は削器である。40は背面の二側辺と腹面の一側辺に調整を加えたものである。打面は自然面である。41は敲石で三面に敲打痕が見られる。42の敲石は、欠損した下半部も利用したスタンプ状のものである。43は砥石で、表裏面は研磨してから、側面は自然面まま使用している。44・45は石皿で、本来偏平な素材の平坦面を機能部としている。両面ともに自然面が残る。46は磨製石斧の未成品である。

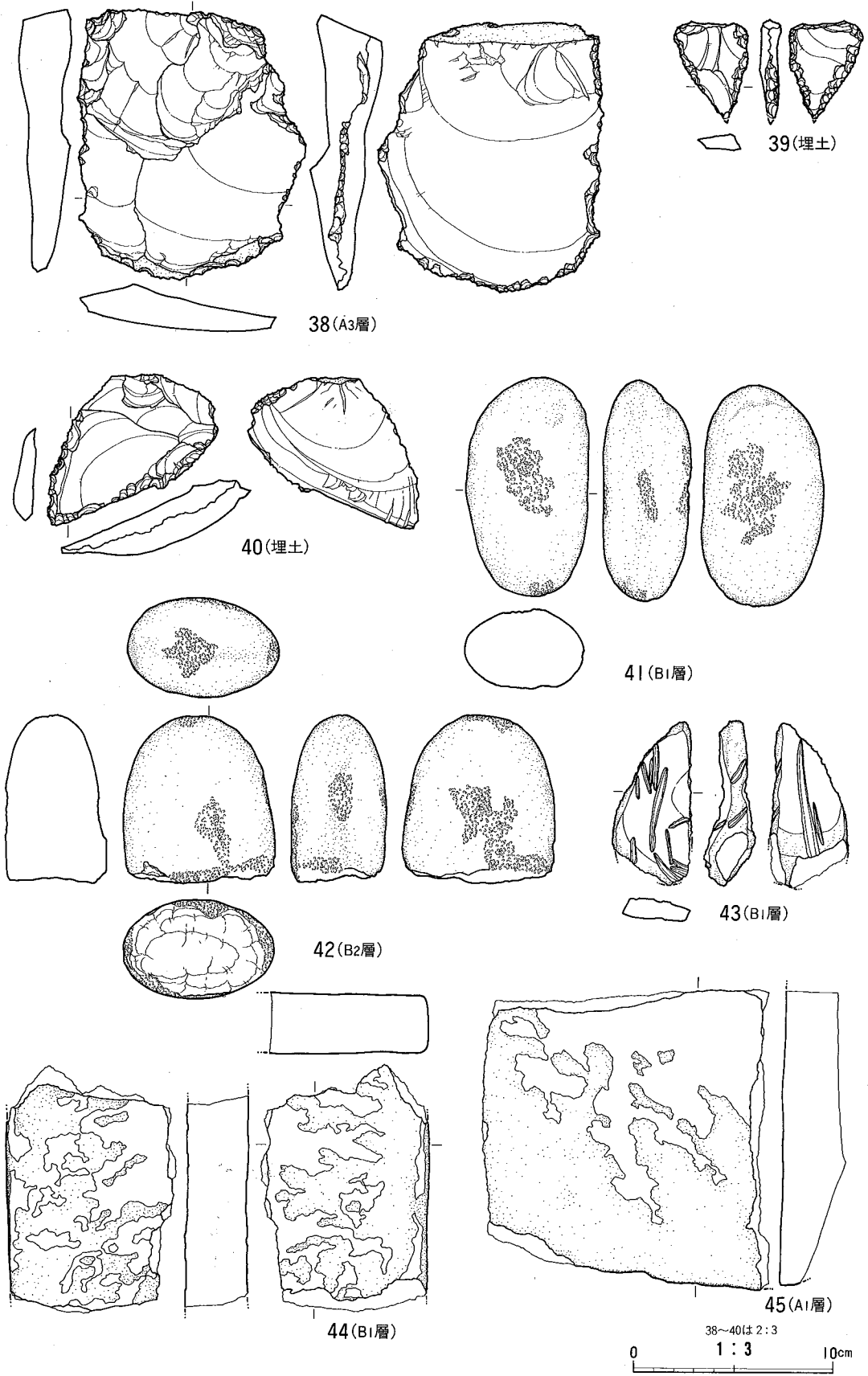
土 製 品 (第189図47・48) 47は楕円状の土製品であり、48は土製円盤で、無節の縄文が施されている。



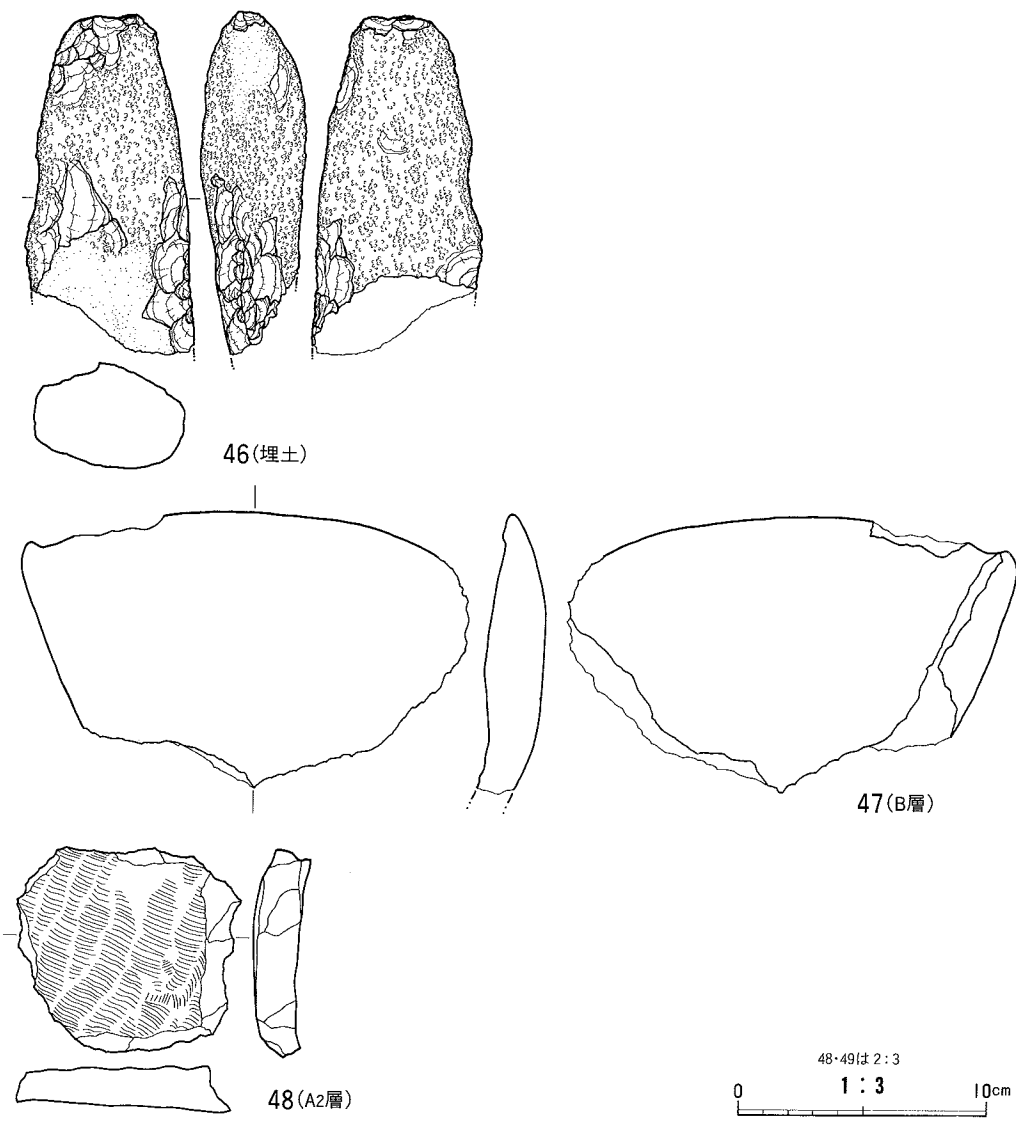
第186図 RA2202豎穴住居跡出土土器



第187図 RA2202竪穴住居跡出土石器(1)



第188図 RA2202竪穴住居跡出土石器(2)



第189図 RA2202竪穴住居跡出土石器(3)・土製品

R A 2215 竪穴住居跡 (第190～199図)

- 時期** 縄文時代中期 (大木 8 b - 3 式期)。
- 位置** 調査区東半部中央に位置する。
- 平面形** 楕円形を呈する。
- 主軸方向** E 16° S を示す。
- 規模** 全体形の大半は重複する遺構に切られ、また調査段階でのトレンチにより削平したため明確ではないが、炉と柱穴配置から南東～北西方向に長軸を持つと考えられる。規模は、長軸 5.9 m、短軸 4.2 m と推定される。
- 重複関係** R E 2188、R A 2204 に切られ、R A 2199・2200・2202・2207・2212 を切る。
- 掘込面** 既に削平されている。
- 検出面** 耕作土 (I a 層) 直下及び重複する遺構の床面。
- 埋土** 自然堆積で層相の違いにより、A・B の 2 層に大別される。C は構築土 (貼床) である。
A 層 - 粒～塊状の褐色土をやや多く混入する軟質の黒褐色土で、スコリア粒を含む。なお、A 4 層は焼土層である。
B 層 - 粒状の褐色土を混入するしまりの良い黒色土で、少量のスコリア粒と粘土塊を含む。
- 炉の状態** 全体形の長軸線上やや東寄りに石囲炉を検出している。平面形は台形に近い楕円形を呈し、17 個の自然円礫が残存している。規模は、長軸 1.03 m、短軸 0.88 m、熱浸透層の厚さは 0.06 m をはかり、火床面は炉石の内部全面が堅く焼けている。
- 埋設土器** 石囲炉の南東に検出したピット (P 1) に正立に埋設した埋甕である。ピットは円形を呈し、直径 0.20 m、床面からの深さ 0.14 m をはかる。
- 壁の状態** 床面から直壁ぎみに立ち上がる。
- 床の状態** 平坦である。炉を周辺として部分的に貼床が構築されており、南側に傾斜してやや深くなる。
- 柱穴** 床面上に 25 口 (P 2～26) のピットを検出している。床面からの深さは、P 2 - 0.34 m、P 3 - 0.56 m、P 4 - 0.41 m、P 5 - 0.40 m、P 6 - 0.37 m、P 7 - 0.25 m、P 8 - 0.52 m、P 9 - 0.58 m、P 10 - 0.56 m、P 11 - 0.52 m、P 12 - 0.50 m、P 13 - 0.20 m、P 14 - 0.30 m、P 15 - 0.16 m、P 16 - 0.28 m、P 17 - 0.17 m、P 18 - 0.04 m、P 19 - 0.05 m、P 20 - 0.12 m、P 21 - 0.14 m、P 22 - 0.11 m、P 23 - 0.11 m、P 24 - 0.12 m、P 25 - 0.24 m、P 26 - 0.15 m をはかる。このうち支柱穴を構成するピットは P 2～14・16 と考えられる。なお、柱痕跡 (D 層) が軟質の暗褐色土。掘方 (E 層) が褐色～黄褐色土と黒褐色土との塊状混合土となっている。
- 土器 (第191～193図)** 1 は屈曲のある深鉢体部から底部にかけての部位で、隆沈線による縦位の文様帯には渦巻文・懸垂文が配される。2 は口縁に無文帯を設ける小形深鉢で、沈線による渦巻文と連結する小渦巻文が体部上半に集中して施文される。3 は屈曲のある深鉢体部から底部にかけての部位で、頸部に横走する隆線より垂下する隆沈線は、体部中央で大渦巻文となり懸垂文へと移行する。4 は器壁が外傾する深鉢である。5～7 は屈曲のある深鉢体部から底部にかけての部位で 5・7 は沈線による渦巻文・懸垂文が、6 は隆沈線による渦巻文・懸垂文が施される。8 は口縁が内湾する深鉢である。口縁形態は波状を呈し、波頂部には渦巻文が加飾される。体部は隆沈線による渦巻文・懸垂文が縦位の文様帯に収められ、各文様帯は小渦巻文によって連結される。9 は孔のある突起をもつキャリパー形深鉢である。口縁部文様帯は両極に渦巻をもつ沈線と楕円区

画された刺突列によって構成される。体部は有棘渦巻文を幾何学的に配置、連結させるものである。10は口縁が内湾する深鉢である。11は隆沈線による文様が施される深鉢体部である。12は屈曲のある深鉢体部から底部付近にかけての部位で、隆沈線による小渦巻文・懸垂文が施される。13は器壁が外傾する深鉢である。隆沈線による渦巻文・懸垂文が連結して施される。

14はR L R複節縄文を施した口縁部である。15は沈線によるy字状文・円文が連結して施されるものである。16は屈曲のある深鉢体部である。沈線によるy字状文・円文が連結して施される。17は屈曲のある深鉢体部から底部にかけての部位で、隆沈線による渦巻文・懸垂文が施され有棘渦巻文によって横位に連結される。18は口縁が大きく内湾する深鉢である。隆沈線による渦巻文が施されるが、概して縦長い流線様のものである。19は隆沈線による文様が施される深鉢口縁部である。20は口縁が大きく外反し、外反部が無文帯となる小形深鉢である。体部には渦巻文を起点とした縦位の文様帯が施され、地文はR L R複節縄文を施す。21は外傾して口縁が内湾する深鉢である。地文はR L R複節縄文を施す。22は緩やかな屈曲をもつ深鉢で、沈線による逆U字文が施される。地文はR L単節縄文を施す。

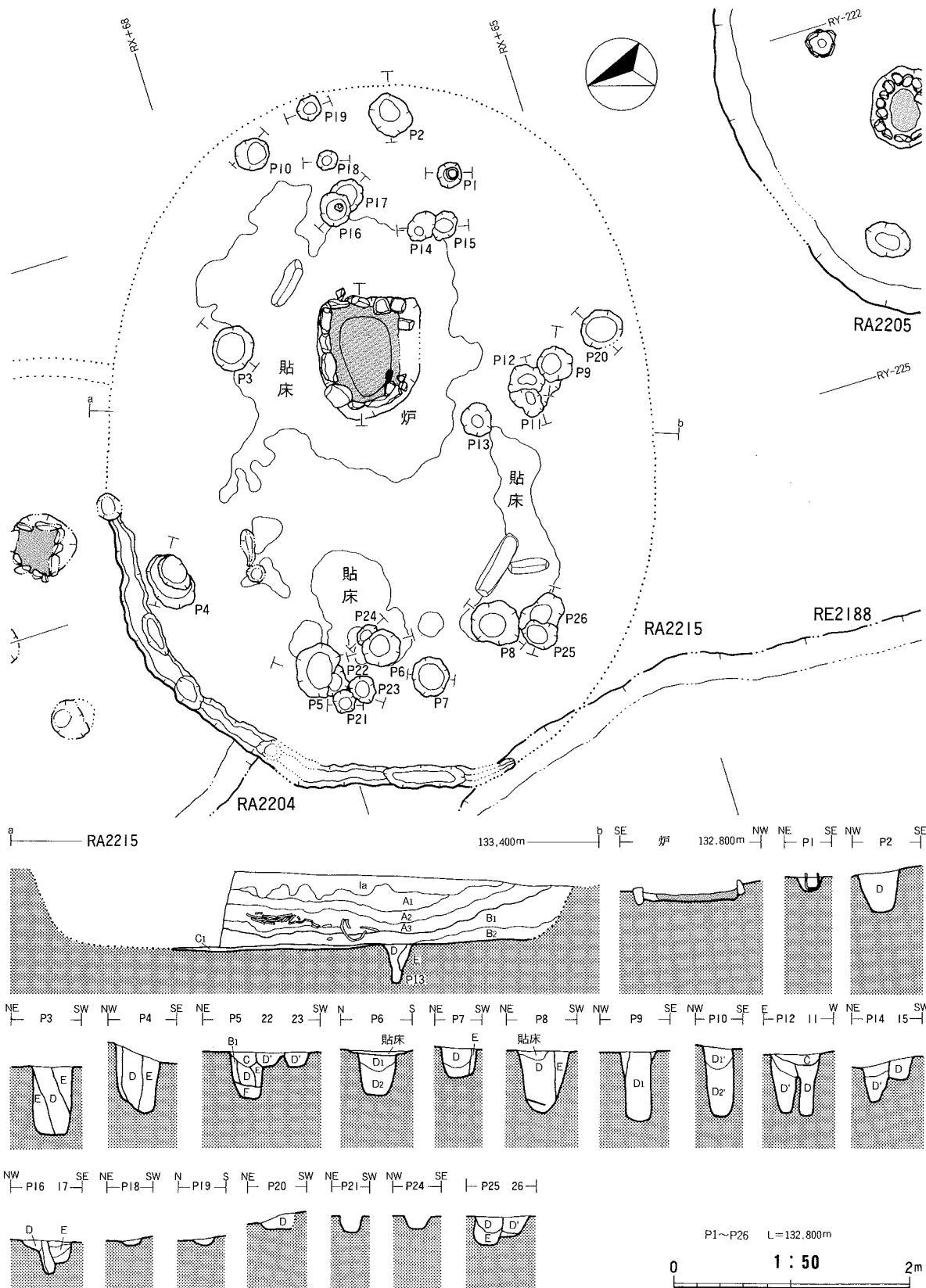
23・24は波状口縁を呈す深鉢である。波頂下には隆沈線による渦巻文が配される。25・26は隆沈線による懸垂文が施される深鉢体部下半である。27は口縁が外傾する浅鉢である。22は口縁が緩やかに内湾する深鉢で、L R単節縄文が縦位に施されたものである。29は口縁が大きく内湾する深鉢で、R L R複節縄文が縦位に施される。

石器 (第194~197図) 30は凸基有茎鏃である。両面調整され、断面形は凸レンズ状を呈す。31は凹基無茎鏃である。32~35は削器で、32・34・35は素材剥片の端部に調整が施されたもの、33は両面から周縁調整されたものである。36・37は搔器である。36は上半部を欠損しているが、弧状の刃部は急斜度調整により作出されている。37は縦長の剥片の末端と腹面右側辺に集中して調整がなされている。38は石核で、打面をかなり固定して剥片剥離が行われている。39・40は礫器で、39は扁平な長礫の端部に両面から刃をつけている。縁辺は、細かい剥離でノッチ状を呈する。敲打磨面も見られる。40は片刃の刃器である。41・42は敲打磨石で、平面形は半月形、または楕円形を呈し、側面に敲打磨面が形成されている。この敲打磨面には小剥離を伴う。43~45は磨石で、素材の平坦な面を機能面として使用している。いずれも自然面を残している。44は敲打痕も伴う。

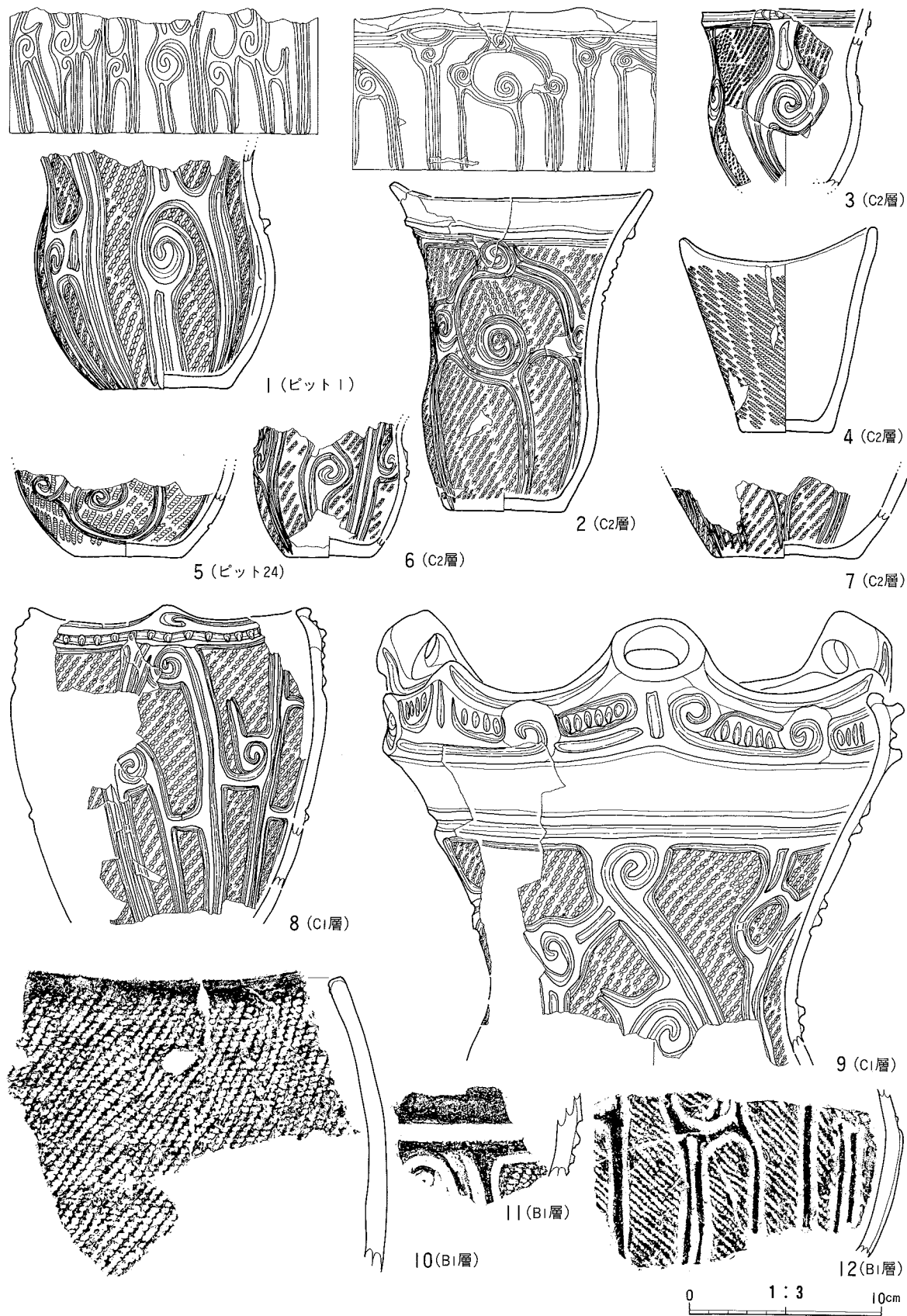
46は凹石で、裏面上半部には磨面、側面には敲打痕も見られる。47・48は砥石で、47は機能面となる平坦面をまず研磨し、その後砥石として使用している。49は磨製石斧で、表裏両面に残る剥離痕は研磨整形前のものである。50・51は敲打磨石で、50は剥離整形されている。52・53は磨石である。磨面は、平坦な面を使用しているが、磨り残された自然面との面的な段差はほとんどない。54・55は敲石であり、いずれも礫の端部を使用し、54は敲打痕、55は剥離痕を伴う。56は、砥石の小片で、浅い溝状のくぼみが形成されている。57~59は石皿で、いずれも破片である。なお、58は両面とも平滑に研磨されている。

土製品 (第198図) 60~62はミニチュア土器で、いずれも平底である。63~66は土偶である。64は胴部。65は上腕部と思われる。66は四カ所の穿孔があり、頭~胴部にかけてボタン状の貼付、半截竹管による押引沈線文などが配されている。

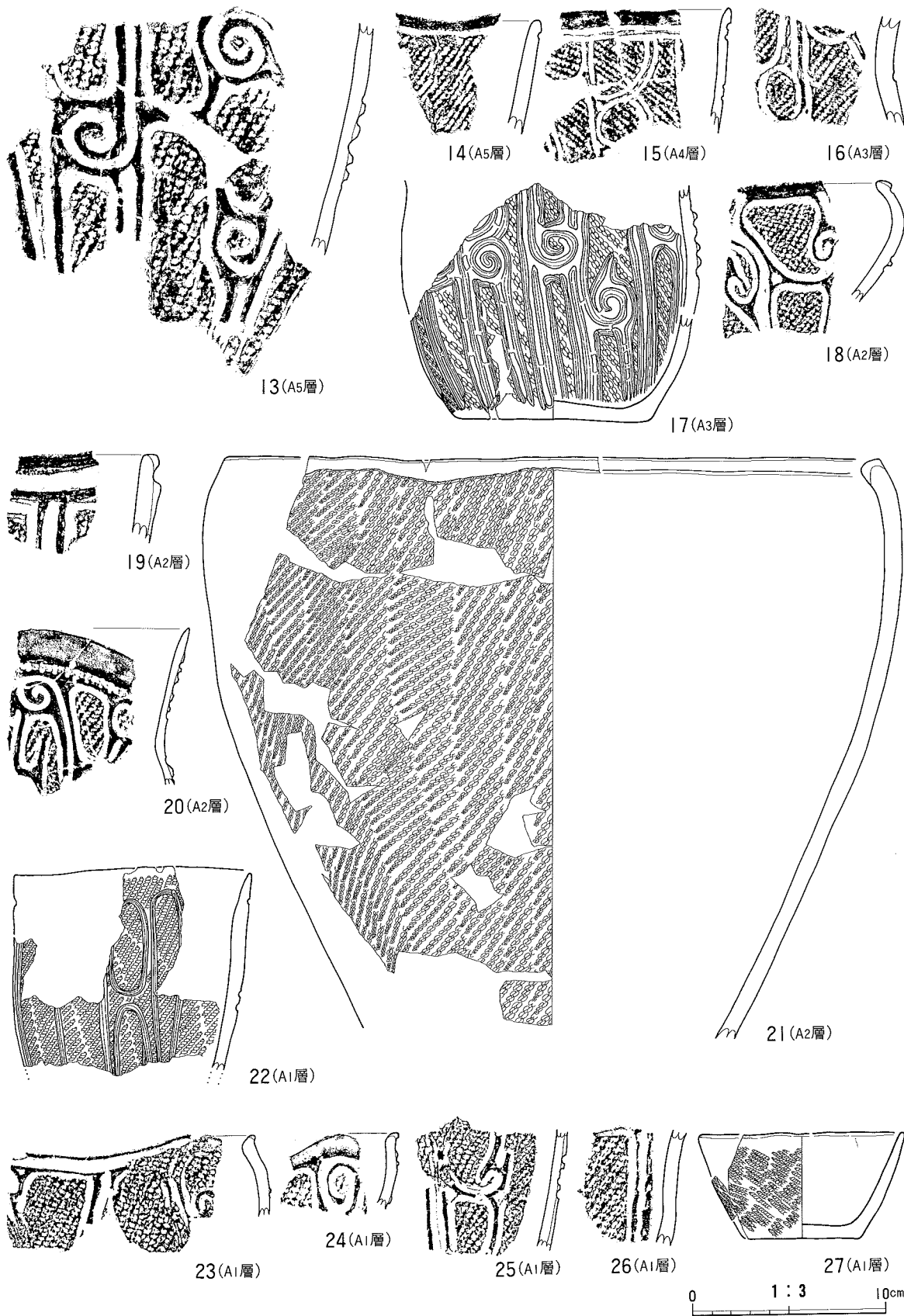
石製品 (第199図) 67は石棒で、大形で柱状に整形した礫を研磨したものである。棒長軸の両端は窪んでいる。



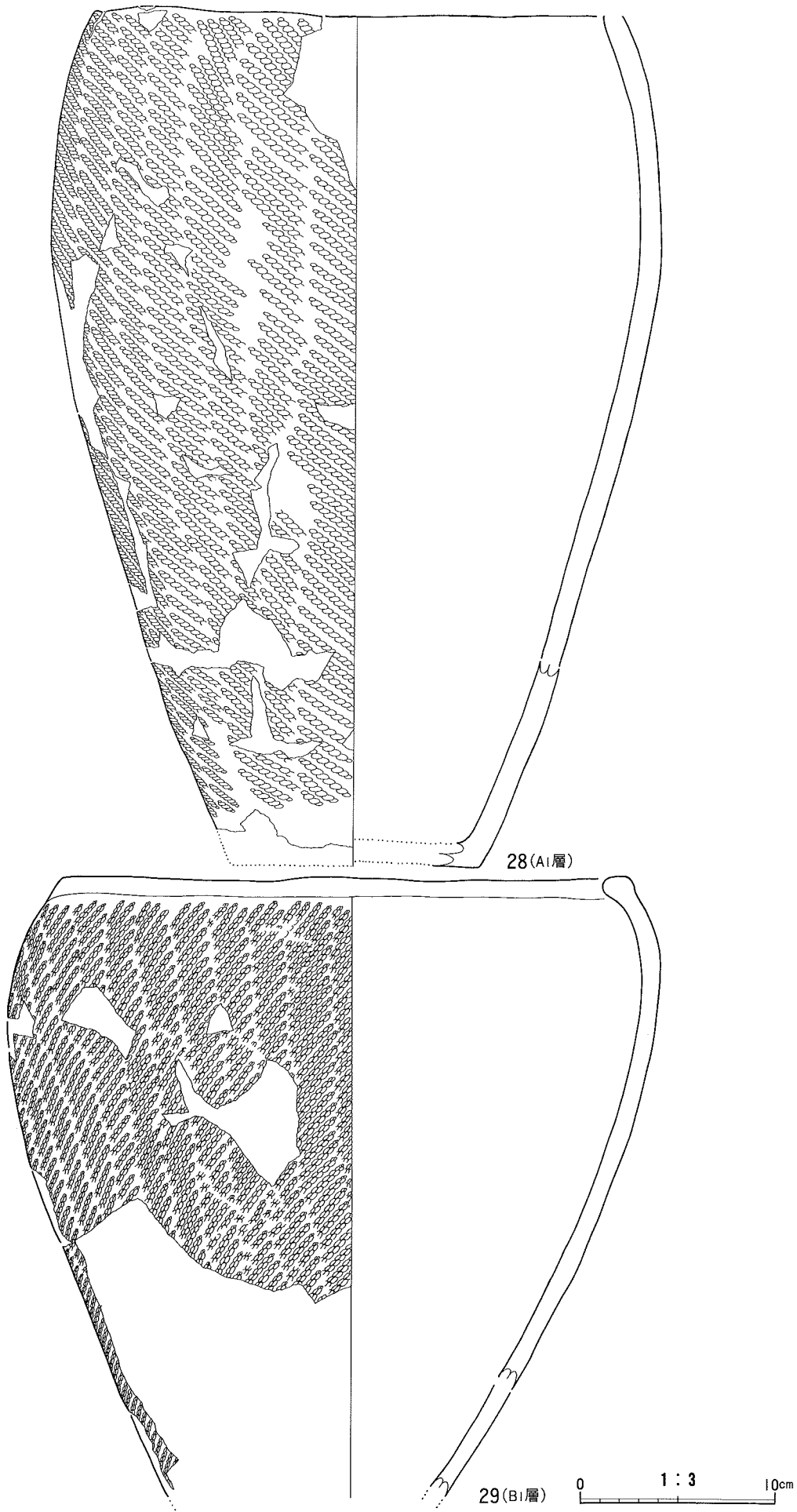
第190图 RA2215竖穴住居跡



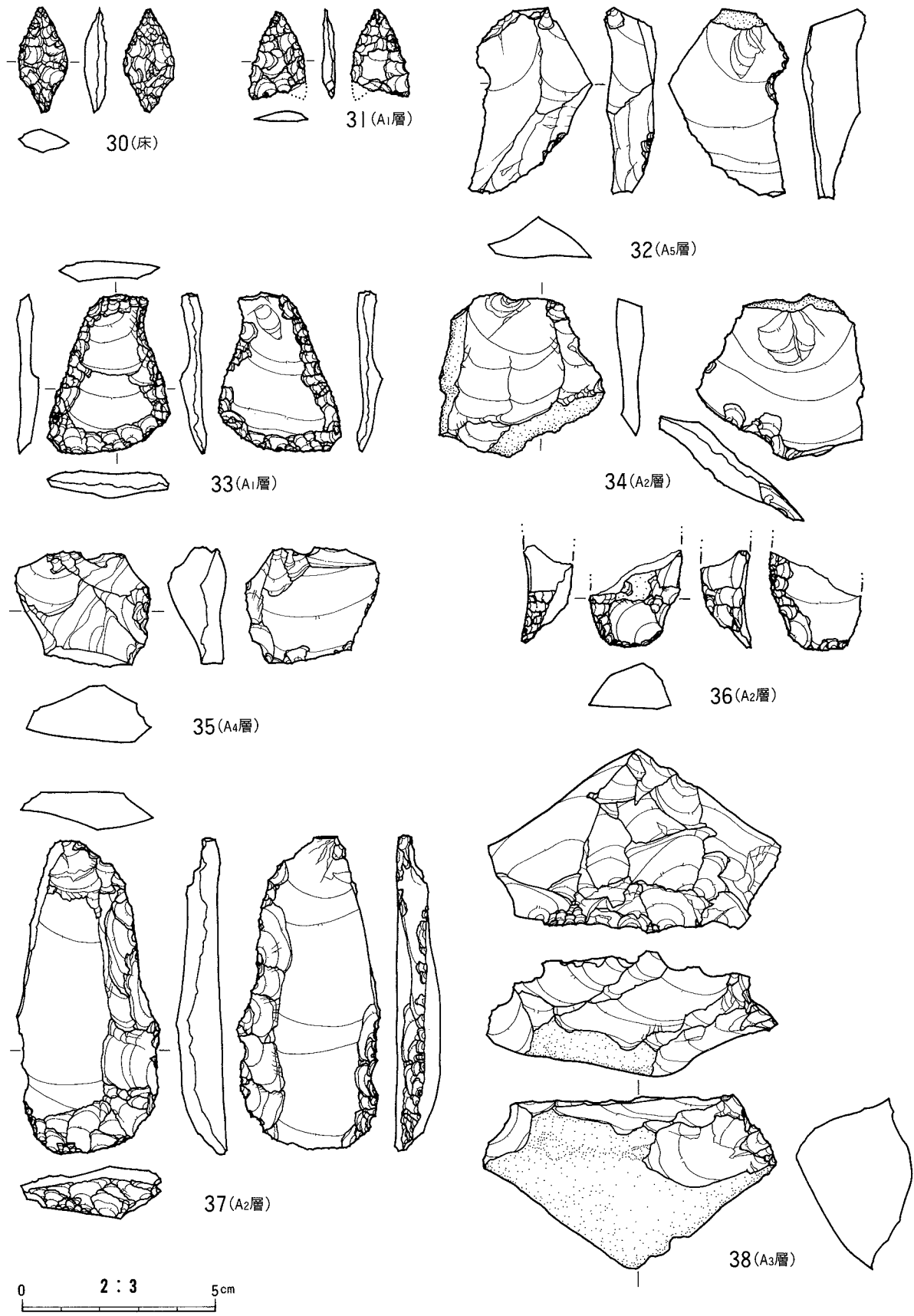
第191図 RA2215 竖穴住居跡出土土器(1)



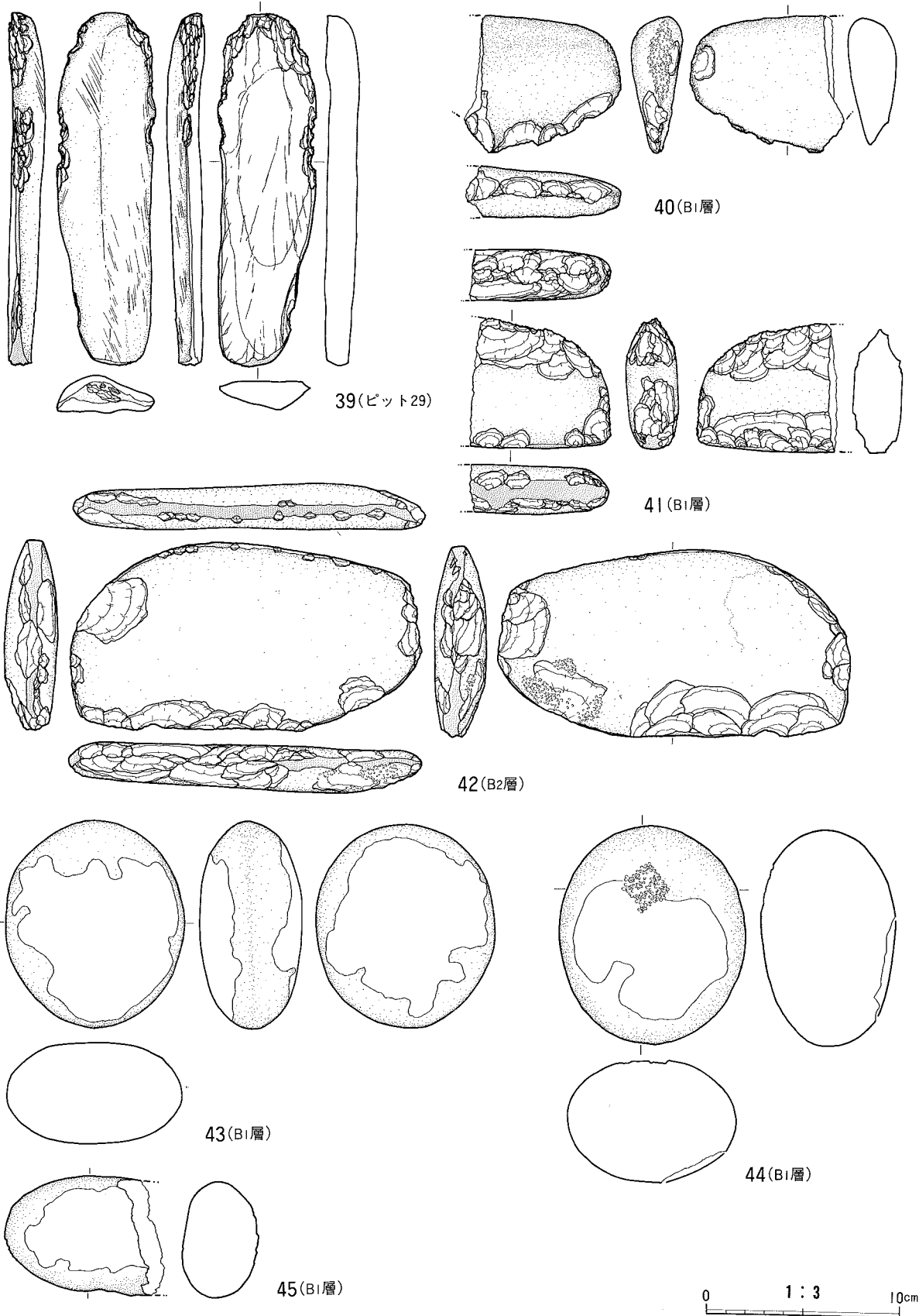
第192図 RA2215豎穴住居跡出土土器(2)



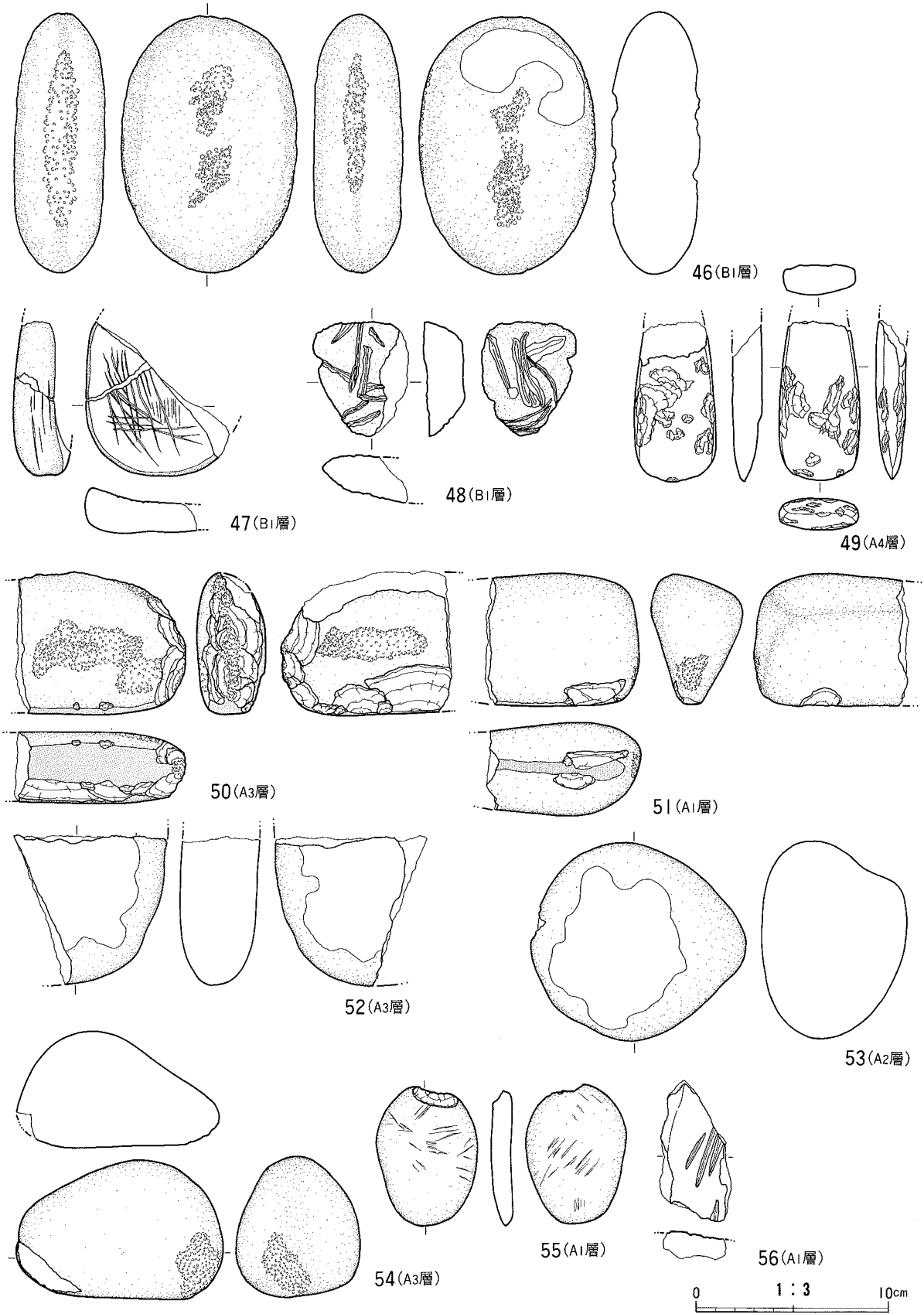
第193図 RA2215豎穴住居跡出土土器(3)



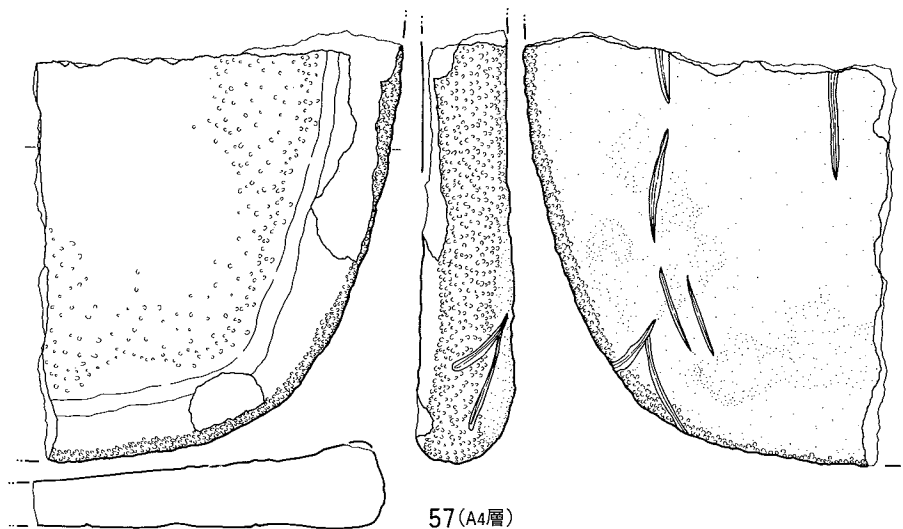
第194図 RA2215竪穴住居跡出土石器(1)



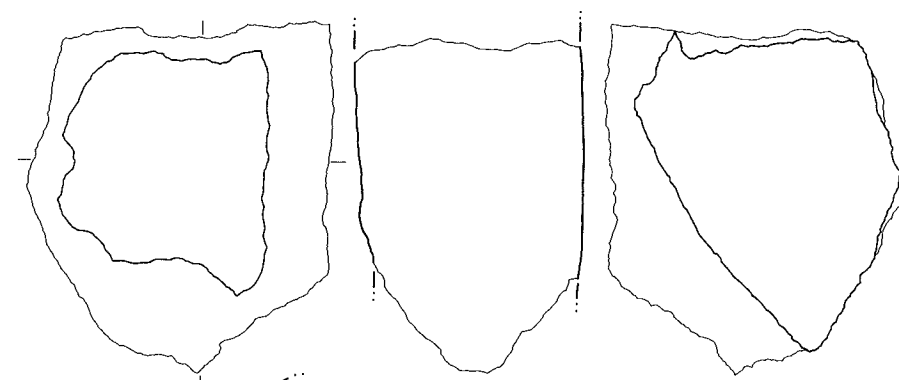
第195図 RA2215竪穴住居跡出土石器(2)



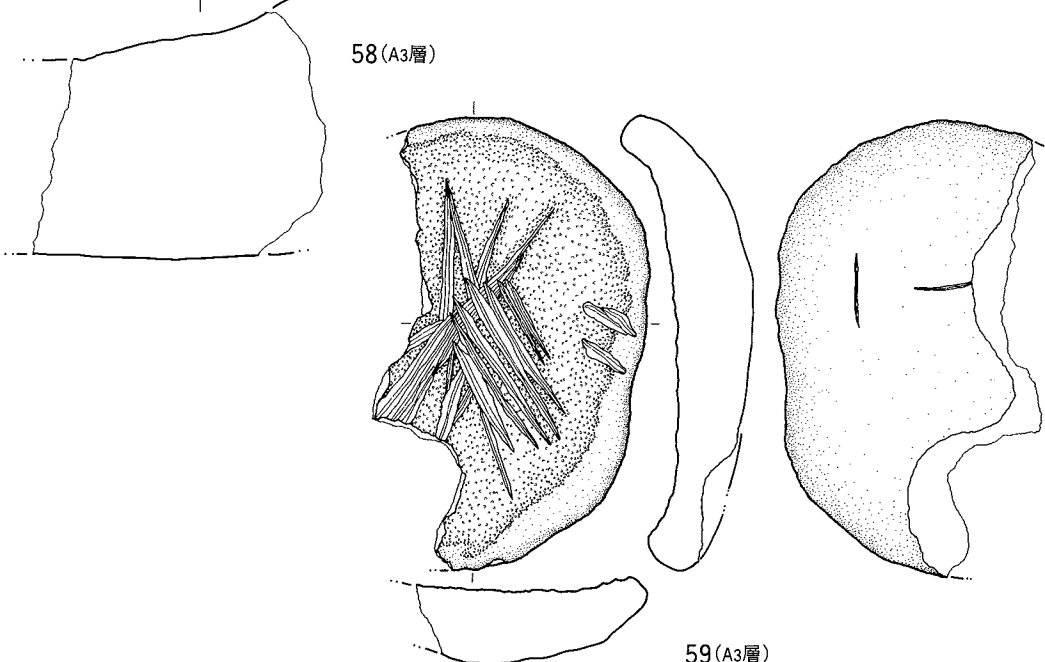
第196図 RA2215 竪穴住居跡出土石器(3)



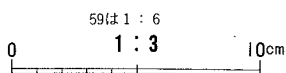
57(A4層)



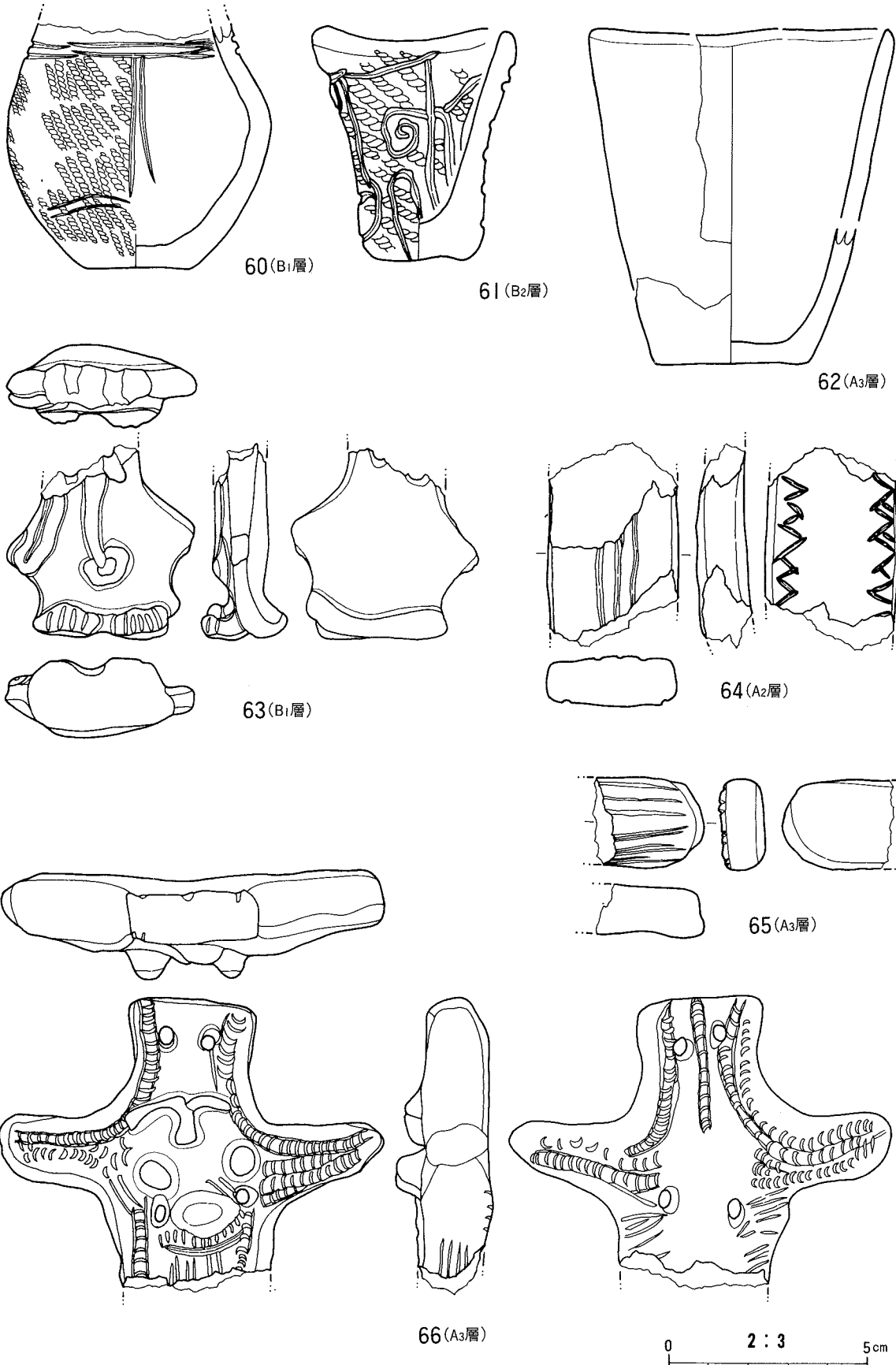
58(A3層)



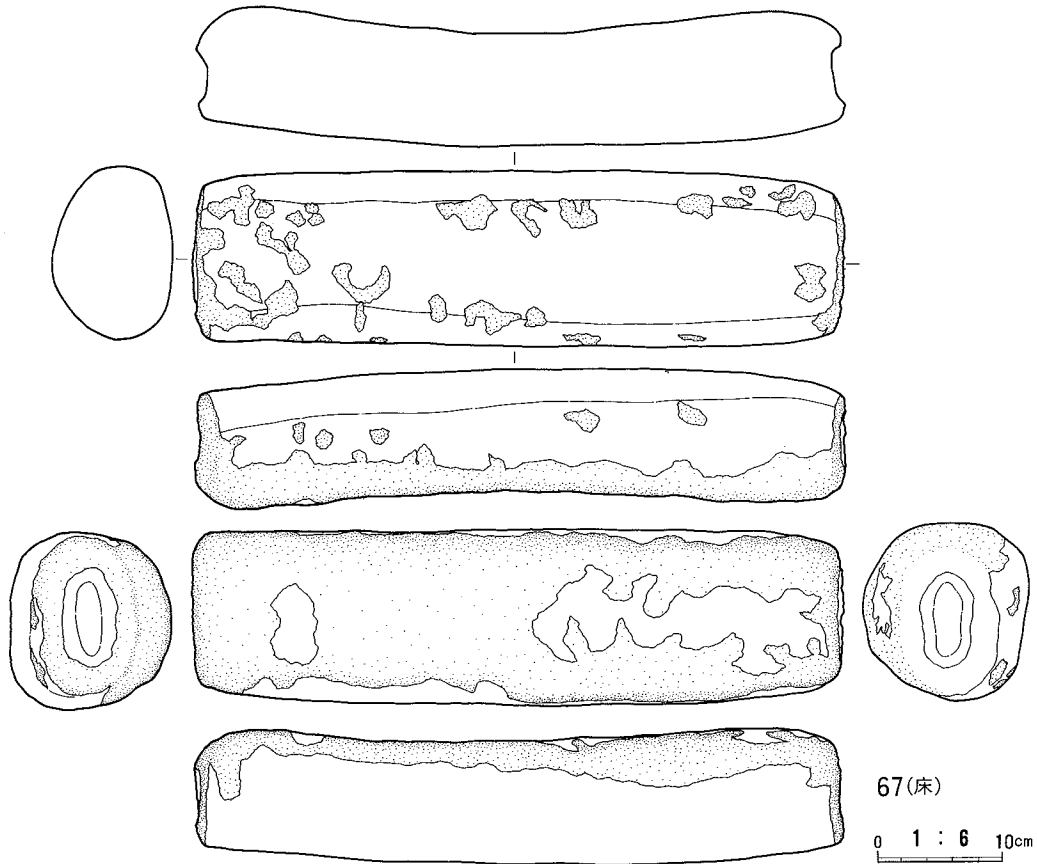
59(A3層)



第197図 RA2215竪穴住居跡出土石器(4)



第198図 RA2215竪穴住居跡出土土製品



第199図 RA2215 竪穴住居跡出土石製品

R F 2191 炉跡 (第200・201図)

時期 縄文時代中期 (大木 8 b - 3 式期)。

位置 調査区北半部中央に位置する。

平面形 楕円形を呈する。なお、炉平面形の北～北東側に 7 口のピットを検出しているが不規則な配置で炉に伴わないものと考えられた。

重複関係 R A 2189 埋土を切る。

掘込面 既に削平されている。

検出面 耕作土 (I a 層) 直下の R A 2189 検出面。

炉の状態 18 個の自然円礫で囲まれた石囲炉である。規模は長軸 (北西～南東方向) 0.95 m、短軸 0.80 m、熱浸透層の厚さは 0.08 m をはかり、火床面は炉石の内部全面が堅く焼けている。なお、石囲炉内部の南端には深鉢土器の体部下半を埋設しており、土器とその周囲が加熱を受け、堅くなっている。

埋設土器 (第201図) 1 は炉内部に埋設されていた深鉢形土器で体部位上半を欠く。地文には R L 単節縄文を縦位に施す。

R F 2213 炉跡 (第200図)

時期 縄文時代中期 (大木 8 b - 3 式期)。

位置 調査区南端から東寄りに位置する。

平面形 全体形の南側は調査区外に広がるが、正～長方形を呈すると考えられる。
重複関係 R A 2206に切られ、R A 2220を切る。
掘込面 既に削平されている。
検出面 R A 2206床面。
炉の状態 5個の自然円礫が残存する石囲炉である。規模は、東西0.59m、南北0.43m以上をはかる。火床面は炉石内部に検出しており、直径0.3m程の不整楕円形を呈している。熱浸透層の厚さは0.03m程をはかる。

R F 2223炉跡（第200図）

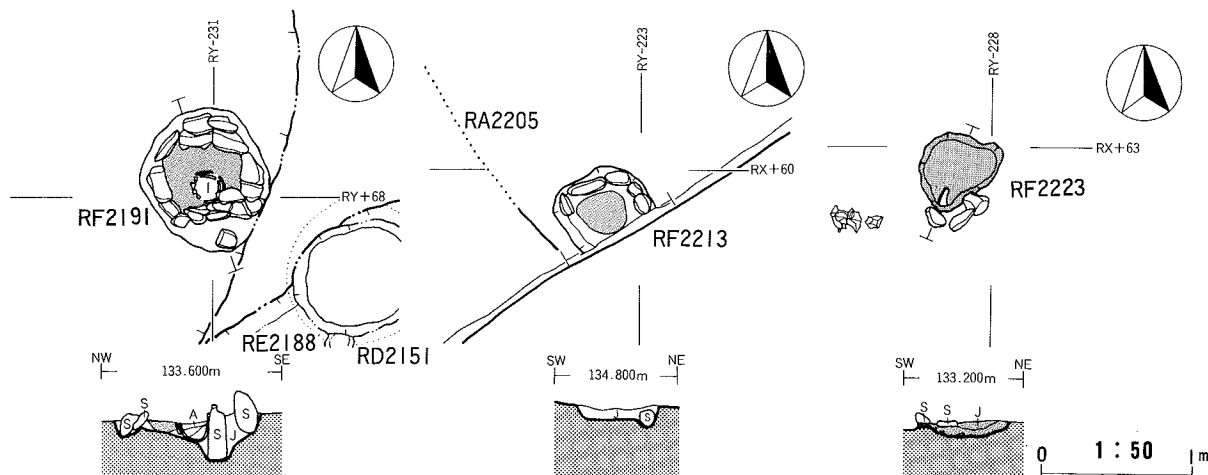
時期 縄文時代中期（大木8b-3式期）。
位置 調査区中央からやや南寄りに位置する。
平面形 不整形を呈する。
重複関係 R E 2188埋土を切る。
検出面 R E 2188埋土（C₁層）中。
炉の状態 火床面とこの南側に4個の自然円礫が散乱している。炉石の据えた痕跡が不明瞭ではあるが石囲炉と考えられる。規模は、長軸（北東～南西方向）0.53m、短軸0.49mをはかる。火床面は炉石の内部全面が堅く焼けており、熱浸透層の厚さは0.09mをはかる。

R D 2141土坑（第202図）

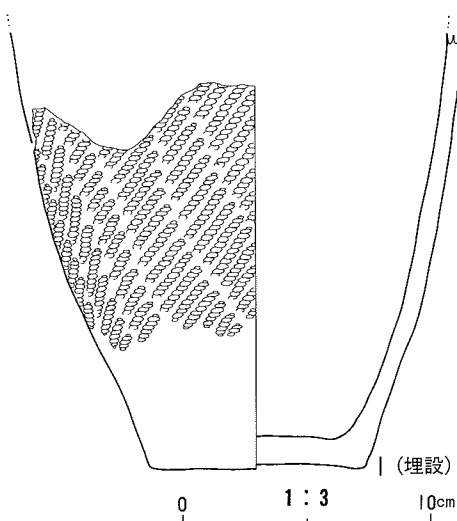
時期 縄文時代中期（大木8b-3式期以前）
位置 調査区北半部やや西寄りに位置する。
平面形 楕円形を呈する。
主軸方向 およそW40°Nを示す。
規模 長軸0.85m、短軸0.78m、検出面からの深さ0.60mをはかる。
重複関係 R A 2189に切られる。
掘込面 既に削平されている。
検出面 R A 2189床面。
埋土 A層は人為堆積（R A 2189床構築土）である。B層は自然堆積で、塊状の黒色土を混入する褐色土。
壁の状態 壁面に段を持って直壁ぎみに立ち上がる。
底の状態 起伏がある。
出土遺物 土器は隆沈線や沈線を施す深鉢体部の小片が3点、石器は自然礫7点と剥片が1点出土している。

R D 2145土坑（第202図）

時期 縄文時代中期（大木8b-3式期以前）
位置 調査区北半部やや西寄りに位置する。
平面形 全体形は楕円形で、断面フラスコ状を呈する。
主軸方向 およそN11.5°Eを示す。
規模 長軸（東西）1.23m、短軸1.02m、検出面からの深さ0.78～0.83mをはかる。



第200図 RF2191・2213・2223炉跡



第201図 RF2191炉跡埋設土器

- 重複関係 R A 2189に切られ、R D 2146を切る。
- 掘込面 既に削平されている。
- 検出面 R A 2189床面。
- 埋土 自然堆積で、A・B・Cの3層に大別される。
A層—スコリア粒を含み褐色土を主体とする。
B層—粘土を含み黒褐色土を主体とする。
C層—堅い褐色の粘土層である。
- 壁の状態 断面フラスコ状を呈する。
- 底の状態 平坦である。
- 出土遺物 なし。

R D 2146土坑 (第202図)

- 時期 縄文時代中期 (大木 8 b - 3 式期以前) 位置 調査区北半部やや西寄りに位置する。
- 平面形 全体形は不明で、断面フラスコ状を呈する。
- 規模 長軸1.04m、短軸は不明。検出面からの深さは0.94~1.03mをはかる。
- 重複関係 R A 2189、R D 2145・2147に切られる。
- 掘込面 既に削平されている。
- 検出面 R A 2189床面。
- 埋土 A層は人為堆積。B・C層は自然堆積である。
A層—塊状の黒褐色土を混入する堅くしまりの良い褐色土である。
B層—塊状の褐色土を多量に混入する黒褐色土で、スコリア粒を多く含む。
C層—塊状の褐色土を多量に混入する暗褐色土で、堅くしまりが良い。
- 壁の状態 断面フラスコ状を呈する。
- 底の状態 全体形の北東部は平坦であるが、中央部から南西部にかけて深くなる。
- 出土遺物 なし。

R D2147土坑 (第202図)

- 時 期 縄文時代中期 (大木 8 b - 3 式期以前)
- 位 置 調査区北半部やや西寄りに位置する。
- 平 面 形 全体形は不明で、断面は一部フラスコ状を呈する。
- 主軸方向 およそ N22.5° E を示す。
- 規 模 長軸1.06m、短軸は不明。検出面からの深さ0.85mをはかる。
- 重複関係 R A2189、R D2148に切られ、R D2146切る。
- 掘 込 面 既に削平されている。
- 検 出 面 R A2189床面。
- 埋 土 自然堆積。埋土 (A'層) は、層~塊状の褐色土を多量に混入する黒色土でスコリア粒を含む。
- 壁の状態 R D2146と重複部は壁が崩落しているが、残存状態が良い北東側では断面フラスコ状を呈する。
- 底の状態 全体形の北東部は平坦であるが、中央部から南西部にかけて深くなる。
- 出土遺物 なし。

R D2148土坑 (第202図)

- 時 期 縄文時代中期 (大木 8 b - 3 式期以前)
- 位 置 調査区北半部やや西寄りに位置する。
- 平 面 形 全体形は不明で、断面は一部フラスコ状を呈する。
- 主軸方向 不明。
- 規 模 長軸1.28m、短軸は1.05m。検出面からの深さ0.92mをはかる。
- 重複関係 R A2189に切られ、R D2147を切る。
- 掘 込 面 既に削平されている。
- 検 出 面 R A2189床面。
- 埋 土 A層は人為堆積。B・C層は自然堆積である。
A層-R A2189の床構築土。粒状の褐色土を混入する黒褐色土で、スコリア粒を多く含む。
B層-塊状の褐色土を多量に混入する黒褐色土で、スコリア粒を多く含む。
C層-塊状の黒褐色土を多量に混入する褐色土で、スコリア粒を多く含む。なお、B₃層には白色粘土塊を含む。
- 壁の状態 R D2146と重複部は壁が崩落しているが、残存状態が良い南東側では断面フラスコ状を呈する。
- 底の状態 ほぼ平坦である。
- 出土遺物 なし。

R D2149土坑 (第202図)

- 時 期 縄文時代中期 (大木 8 b - 3 式期以前)
- 位 置 調査区北半部やや西寄りに位置する。
- 平 面 形 楕円形を呈する。
- 主軸方向 ほぼ真北方向を示す。
- 規 模 長軸0.91m、短軸は0.85m。検出面からの深さ0.63~0.68mをはかる。

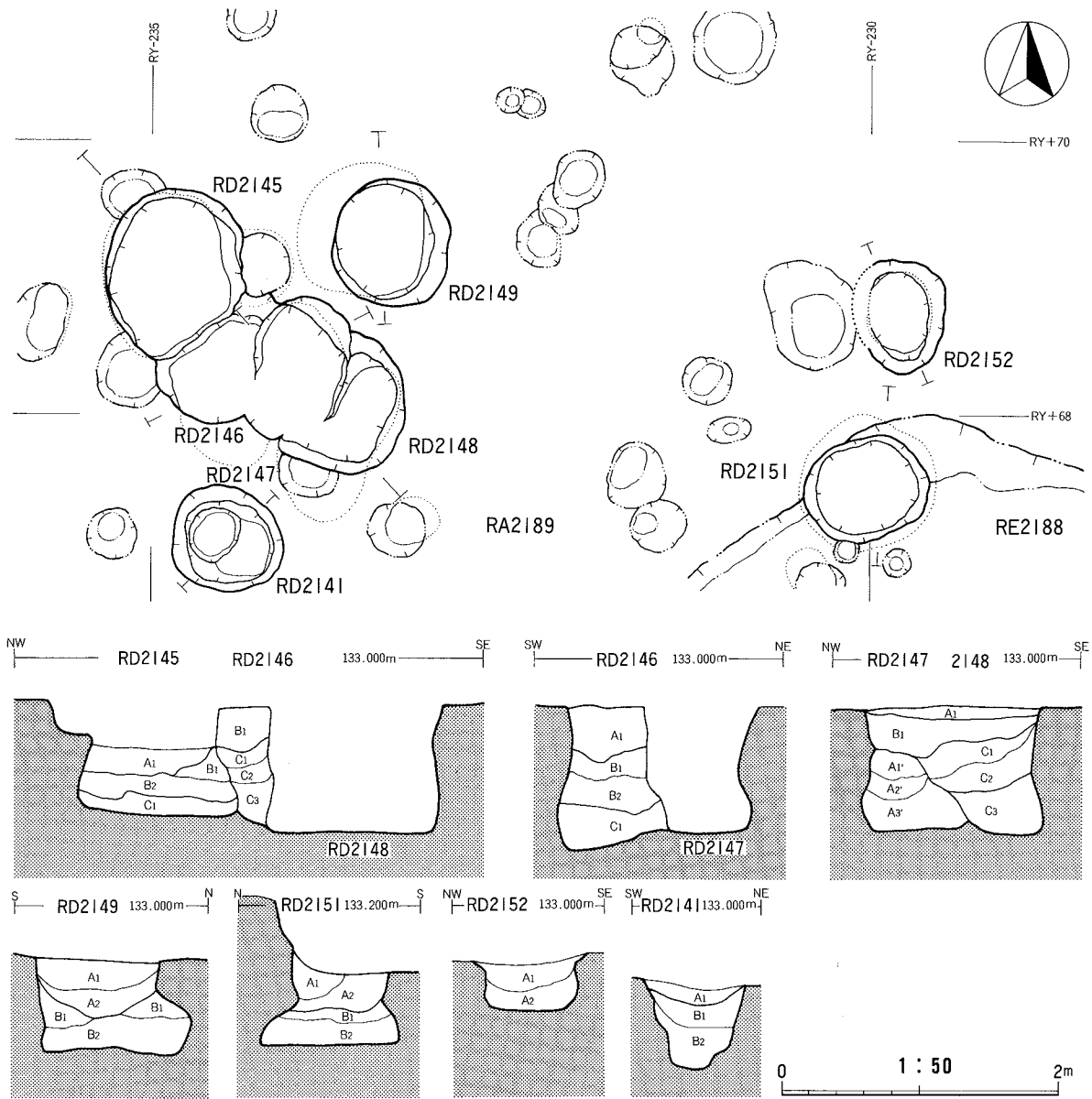
重複関係 R A2189に切られる。
掘込面 既に削平されている。
検出面 R A2189床面。
埋土 自然堆積で、埋土はA・Bの2層に大別される。
A層—塊状の黒褐色土を多量に混入する暗褐色土である。
B層—層〜塊状の褐色土を多量に混入する堅くしまりの良い黒褐色土である。
壁の状態 西半部は断面フラスコ状を呈する。
底の状態 中央部から底面周辺にかけてやや深くなる。
出土遺物 なし。

R D2151土坑（第202・203図）

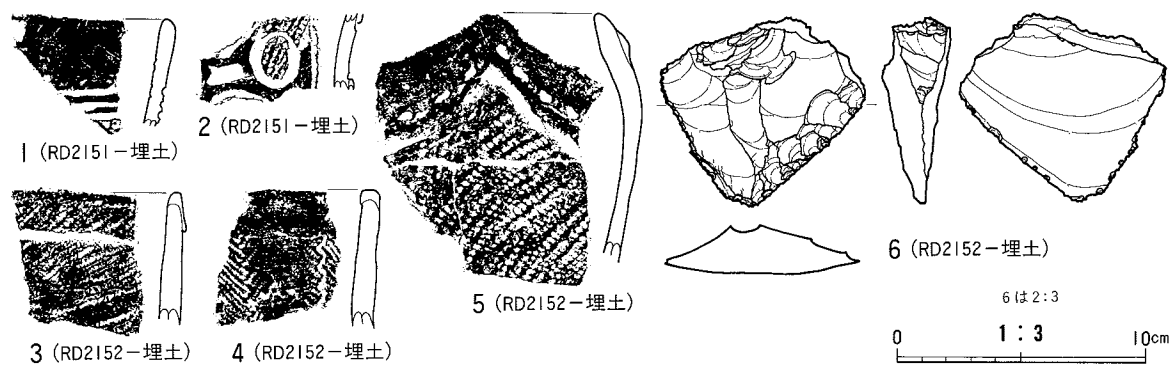
時期 縄文時代中期（大木8b-3式期以前）
位置 調査区北半部ほぼ中央に位置する。
平面形 楕円形を呈する。
主軸方向 およそN79°Eを示す。
規模 長軸0.90m、短軸は0.73m。検出面からの深さ0.52mをはかる。
重複関係 R E2188に切られる。
掘込面 既に削平されている。
検出面 R E2188床面。
埋土 自然堆積で、埋土はA・Bの2層に大別される。
A層—粒〜塊状の褐色土を微量に混入する黒褐色土で、スコリア粒を含む。
B層—塊状の褐色土を多量に混入する黒褐色土である。
壁の状態 断面フラスコ状を呈する。
底の状態 平坦である。
出土遺物 土器は縄文時代中期の小片が48点出土している。また、石器は剥片が1点出土している
土器（第203図1・2）1は口縁がやや外反する深鉢で、頸部には横位に沈線を施す小型深鉢である。外反部には無文帯が設けられている。2は隆沈線による円文が施された深鉢土器の体部である。地文はR L R複節縄文を施す。

R D2152土坑（第202・203図）

時期 縄文時代後期（門前式期以降）
位置 調査区北半部やや東寄りに位置する。
平面形 楕円形を呈する。
主軸方向 およそW76°Nを示す。
規模 長軸0.83m、短軸は0.69m。検出面からの深さ0.32~0.35mをはかる。
重複関係 なし。
掘込面 既に削平されている。
検出面 耕作土（I a層）直下。



第202図 RD2141・2145・2146~2149・2151・2152土坑



第203図 RD2151・2152土坑出土土器・石器

- 埋 土 自然堆積で、埋土（A層）は粉～粒状の黒色土である。
- 壁の状態 底面から直壁に立ち上がるが、上端はやや広がる。
- 底の状態 平坦である。
- 出土遺物 縄文時代中期の土器29点とともに、後期の土器が3点、石器は削器と剥片が各1点出土している。
- 土 器（第203図3～5）3は複合口縁をもつ深鉢で、R L単節縄文が斜位に施されるものである。4はL R結束縄文を縦位に施す深鉢である。5は口縁が波状を呈す深鉢で、波状口縁に沿って襷状に隆帯を施し、その上に刺突を列点状に施したものである。地文はR L単節縄文を縦位に施すものである。
- 石 器（第203図6）6は削器である。背面右側辺に調整を施し刃部としている。

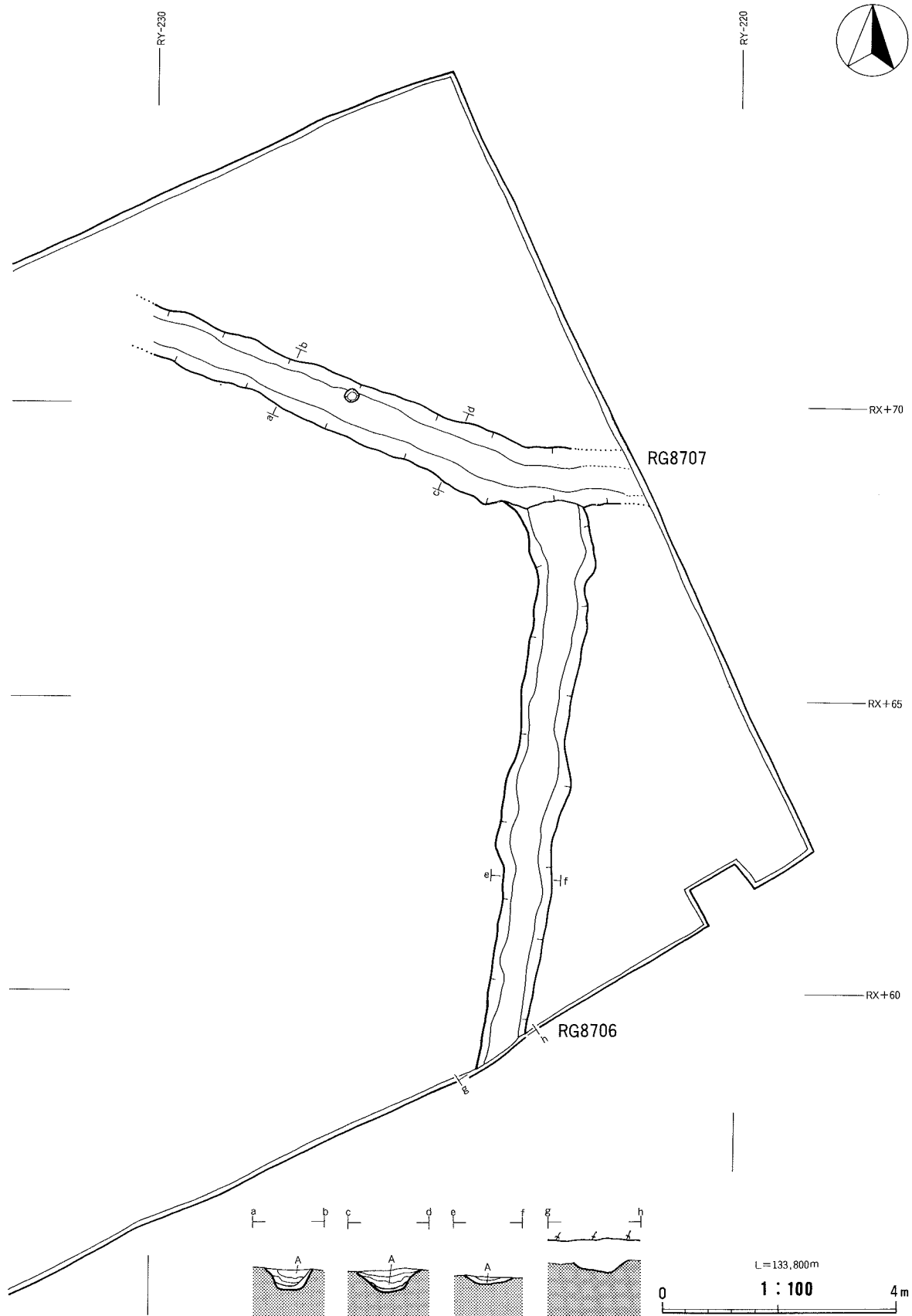
3. 古代以降の遺構

R G 8706溝跡（第204図）

- 時 期 奈良時代以降。
- 位 置 調査区東端部を南北に走行する。
- 主軸方向 およそN7° Eを示す。
- 規 模 幅0.71～1.12m、検出面からの深さ0.10～0.13mをはかる。
- 重複関係 R G 8707に切られ、縄文時代の遺構を切る。
- 掘 込 面 既に削平されている。
- 検 出 面 耕作土（I a層）直下。
- 埋 土 自然堆積で、A・B層に大別される。A層は褐色土粒を微量に混入する黒褐色土。底面だけに堆積するB層は塊状の褐色土と黒褐色土との混合土である。
- 壁の状態 底面から緩やかに立ち上がる。
- 底の状態 ほぼ平坦で北側に向かって深くなっており、比高差は0.06mをはかる。
- 出土遺物 縄文時代の土器とともに坏・甕などの奈良時代の土器が出土しているが、いずれも小片である。

R G 8707溝跡（第204図）

- 時 期 奈良時代以降。
- 位 置 調査区北半部を南東～北西方向に走行する。
- 主軸方向 平面形の西側からR G 8706との重複部まではE 12° S、これ以東はE 3° Sを示す。
- 規 模 幅0.79～1.20m、検出面からの深さ0.33～0.40mをはかる。
- 重複関係 R G 8706及び縄文時代の遺構を切る。
- 掘 込 面 既に削平されている。
- 検 出 面 耕作土（I a層）直下。
- 埋 土 自然堆積で、埋土（A層）は粒～塊状の褐色土を混入する黒褐色土である。
- 壁の状態 底面から直壁ぎみに立ち上がる。
- 底の状態 南東底面は北西底面に比べて0.10m程深く構築されている。
- 出土遺物 なし。



第204図 RG8706・8707溝跡

4. 遺物包含層

調査区 の状況

第54次調査調査で検出した遺構の検出面及び遺構下面から縄文時代早期から中期後葉にかけての遺物包含層を検出した。今回の調査区は遺跡の南西部に位置する。本調査区の標高値は133.90～133.50mをはかり、北西から南東にかけて緩やかに傾斜している。調査地の旧状は畑地で、長年耕作されていた。そのため根菜類などの作物などによる耕作土（表土・Ⅰa層）が全域かつ部分的に深く及んでおり、層厚は0.3～0.7mをはかる。耕作土の直下には、縄文時代後期の遺物包含層（Ⅱa・Ⅱb層）が形成されており、古代（奈良時代）以降の溝跡（RG8706・8707）と縄文時代後期の土坑（RD2152）はこの層の上面で検出している。なお、このⅡa・Ⅱb層は層理の違いにより区分され、調査区内ではどちらかの層が欠如する状況が部分的にみられる。Ⅱb層の遺物包含量はⅡa層に比べて希薄である。Ⅱ層の厚さは15～40cmをはかる。

遺物包含層 の状況

調査区における縄文時代の遺物包含層は後期完新世火山灰である小岩井浮石（kp=Ak-h）上部の堆積層中で確認されており、遺物を有する堆積土は、上層からⅡa・Ⅱb、Ⅲa・Ⅲb、Ⅳa、Ⅴaの6層となっている。なお、隣接する大新町遺跡では、さらに下層のⅥ層中から草創期の遺物（爪形文土器群）が検出されている。

Ⅰ層－耕作土（Ⅰa層）。

Ⅱ層－黒色～黒褐色主体土。Ⅱa・Ⅱb層－黒褐色土で、粒～塊状の褐色土をやや多く含む。スコリア粒も少量含まれ、やや軟質である。縄文時代中期～後期の遺物を包含するが、大半は削平されている。

Ⅲ層－黒褐色～暗褐色主体土。Ⅲa層－黒褐色～暗褐色土で、塊状の黄褐色土～褐色土をやや多く含む。スコリア粒及び炭化物も多く、多量の遺物を包含する。包含層の時期は、大木8a式期が半数以上を占めているが、地点によっては前後の大木7a式期を検出している。平均の層厚は0.3～0.4mをはかる。

Ⅲb層－粒～塊状の褐色土を含む黒褐色土である。スコリア粒及び炭化物も多いが遺物の包含量はⅢa層に比べてやや減少する。時期的には、上層とさほど変化はみられない。層厚は東半部でやや厚く30cm、他は平均して10～15cm程をはかる。

Ⅳ層－黒褐色土主体
(10YR1.7/1～2/1)

Ⅳa層－粒状の褐色土及びスコリア粒を含むやや軟質な黒色土を主体。層上位には少量であるが、大木7a・7b式期や前期初頭の遺物が包含されるが、層中位以下は条痕文土器が包含される。層厚は平均して10～20cmをはかる。

- IV b 層—粒～塊状の褐色土を多く含み、堅くスコリア粒を多く含む黒色～黒褐色土である。同層からは条痕文土器が出土している。層厚は平均して10～20cmをはかる。
- V 層—黒褐色～暗褐色土主体
(10Y R 2/2～3/3)
- V a 層—黒褐色～暗褐色土を主体とし、塊状の褐色土及びスコリア粒を少量含む漸移層。今回の調査区では縄文時代早期に属する押型文土器が出土した。隣接する大新町遺跡でも大量の押型文・沈線文土器が検出されている層位である。
- VI 層—褐色～にぶい褐色土主体
(10Y R 4/4～5/4)
- VI a 層—床（底）面が深く構築されている遺構はVI層を若干掘り込んでいる。粘性の褐色を呈し、塊状の黒褐色土を部分的に少量含む。層下位ほど含まれるスコリアの粒径が大きくなる。全体に堅くしまりがある。
- VI b 層—層上位に赤褐色の角張った粗粒浮石（層厚10～30cm）、下位には青灰色の粗粒浮石（層厚5～10cm）を伴う層で、秋田駒ヶ岳を噴出起源とする小岩井浮石である。従来の「分火山灰」に包括される。

土 器（第205～222図）

縄文時代草創期～前期初頭の土器 1～8は早期前葉の押型文土器群である。1～4は同一個体で、破片上（第V a 層）部には4条以上の横位平行沈線が施される。押型原体は長さ約1cm前後、直径約8mmの円柱状施文に斜位の陰刻を施した原体の可能性があり、器面には右下り・左下りの2種類の原体を交互横位多段に回転押捺させることにより矢羽状の文様を表現したとも考えられる。胎土には少量の繊維状混和材と石英粒が含まれる。5は直径約5mm前後の角柱状と思われる施文具を横位回転することにより、直線状の文様を表現するものである。押捺された陰刻部は下端または上端が次第に細くなる傾向がある。胎土には少量の繊維状混和材と石英粒が含まれる。6は重層V字状文が横位回転押捺されるものである。胎土には微量の雲母と石英粒が含まれる。7・8は焼成・胎土が前述した押型文土器に似ている。

9は早期後葉の条痕文土器である。多条の沈線が斜位に施され、器面には横位の条痕が見られる。胎土は雲母を多量に含むものである。10は前期初頭の縄文土器で、前々段反撚LR R複節縄文とも観察できるが、LR単節縄文を強く撚ったものとも考えられる縄文である。

（第IV b 層） 11～14・33は早期前葉の押型文土器群である。11は破片上位にLR 1単節縄文を横位に施し、下位に押型文（重層V字状文）を施すものである。縄文部には数条の横位平行沈線が施される。12・33は角柱状と思われる施文具を横位回転することにより直線状の文様を表現するものである。13・14には重層V字状文が施され、13の上端には横位平行沈線が施される。15はLR単節、RL単節縄文を交互に横位多段に施文するものである。16はLR単節・RL単節縄文を交互に置

換施文させた文様帯を横位多段に施すものである。17・18は口唇部に刺突が施される無文土器で、19・20は底部付近の無文部と考えられる。

21～25は早期前葉～中葉にかけての貝殻文土器群に含まれる土器である。21は単軸絡条体を横位に施すもので、22は横位に施された条痕を磨り消し、23～25は縦位の擦痕を残すものである。

26～32は早期後葉の条痕文土器である。表裏に条痕が施されるもので、26・28・30は縦位の沈線、27は横位・縦位の沈線が施されるものである。胎土はいずれも多量の雲母を含むものである。

34～46は繊維を多量に含む前期初頭の縄文土器群である。34～36は口唇部形態が内削ぎになるもので、34～36・38～46は所謂「組紐縄文」を施すものである。しかし、RL・LR単節縄文を強く反撚しても同様の文様が作出されることから「組紐縄文」についてはこれまでの論考を踏まえた検討を要するだろう。37は0段多条のRL単節縄文を横位に施すものである。

(第Ⅳ a 層) 47～69は早期後葉の条痕文土器である。表裏に条痕が施されるもので、47は斜位に施された沈線を組み合わせることにより格子目状の文様を表出するもので、48～52・56～62は縦位の沈線を施すもので、53は浅い沈線を格子目状に施すものである。54・55は縦位の短沈線を横位に展開させるものである。63～65は斜位の沈線を施し、66は横位平行沈線を施すものである。

70～72は繊維を多量に含む前期初頭の縄文土器群である。70はLR複節縄文を横位に施すもので、71・72はLR単節縄文を強く反撚したものである。

(第Ⅲ b 層) 73～77は貝殻文土器群に含まれる無文土器である。胎土には少量の石英粒が含まれる。78は早期後葉の条痕文土器である。表裏に条痕が施されるもので沈線・刺突が施される。

(第Ⅲ a 層) 79は前期初頭の縄文土器群に含まれる土器である。器面には正格子目状の押捺文が施される。80はLR単節縄文を強く反撚したものを横位に施すものである。

(第Ⅰ a 層) 81～85は早期前葉の押型文土器群である。81・83・84は重層V字状文を横位に回転施文するもので、85はV字内に横位の横線が充填されている。88は口縁部に4条以上の横位平行沈線を施す。

86は带状格子目文が施される沈線文土器である。87・89～94は早期前葉～中葉にかけての貝殻文土器群である。87は口唇部に刻目をもつもので、横位押圧の貝殻腹縁文を密に施す。89～91は横位の擦痕を残すもので、89には円形の刺突が施される。92・93は深鉢底部付近の部位である。

94は貝殻腹縁の連続圧痕による交叉文が施されるものである。95～107・109～116は早期後葉の条痕文土器群に属するものである。95・105・111は斜行沈線が施される深鉢口縁部で、96～99は縦位または斜位に施される沈線と円形刺突が施されるものである。100～102は斜位の沈線が施されるもので、103・112・114は縦位の沈線が施される。104・106・107は斜位の沈線を組み合わせた格子目文が施され、109・110・115は細隆起線による文様が施されるものである。116は底部で平底を呈するものである。108は前期初頭の縄文土器群に含まれる土器である。器面には正格子目状の押捺文が施される。

117～135は繊維を多量に含む前期初頭の縄文土器群である。117～119は口縁に不整撚糸文を横位に施し、118～124は結束のある羽状縄文が横位に施されるものである。125・126は口唇形状が平縁を呈すもので、133はやや内削となるものである。125～135の原体はLR単節縄文を強く反撚したものと考えられ、133の下端付近では撚が戻りLR単節になる部分がある。

(遺構外) 136・137は草創期の爪形文土器群と考えられるものである。136は口縁部で、137は横位多段に爪形状刺突を施すものである。138・139は口縁がやや肥大する無文土器で、器面には整形時の指

頭圧痕が残る。140～157・160は早期前葉の押型文土器群である。140は重層V字状文を施すもので、破片上部には横位平行沈線が横走する。141・142・144・145・148は重層V字状文を施すもので、148以外は数条の横位平行沈線が施される。143は破片上位にL R 1 単節縄文を横位に施し、下位に押型文（重層V字状文）を施すものである。縄文部には数条の横位平行沈線が施される。146・147・149は角柱状と思われる施文具を横位回転することにより、直線状の文様を表現するものである。151は横線V字状文が回転施文されるものである。150・152～154は重層菱形文が回転施文されるものであるが、154はV字状の文様が組み入られるものである。155～157・160は縄文が施文されるものである。155～157は横位の平行沈線が数条施され、160はL R 1・R L r 縄文を横位多段に原体を交互置換させて施文するものである。

158・159・161・162は早期前葉の沈線文土器群で、158は格子目文、159は斜位の平行沈線を施すものである。161は帯状格子目文、162は帯状平行沈線を施すものである。163～180は早期前葉～中葉にかけての貝殻文土器群である。163は口唇部に刻目、口縁部に刺突列を施す深鉢で、地文はR L 単節縄文を横位に施すものである。164～166は横位の撚糸文が施され、167は斜位の撚糸文を施すものである。168～171・175は口唇部に刻目を施すもので、体部に横位押圧の貝殻腹縁文を密に施すものである。176～178も横位押圧の貝殻腹縁文を密に施すものである。172は横位の条痕上に斜位の平行沈線を施すもので、173は横位の平行沈線、174は横位の平行沈線上に縦位の貝殻腹縁文を施すものである。179は貝殻腹縁の連続圧痕による交叉文が施されるもので、口唇部には円形の刺突を施す。180は口唇部がやや内削になるもので、縦位の貝殻腹縁文が横位に展開する。

181～226は早期後葉の条痕文土器群に属するものである。表裏に条痕を施し、胎土には多量の雲母を含むものである。181は幾何学状に施文された沈線間に短沈線・円形刺突を充填させるものである。182は正格子目の沈線と縦位の沈線を施すもので、183は縦位の沈線と円形刺突が施されたものである。184は口唇部に刻目が施されるもので、斜位の沈線が施文される。185～187は斜位の沈線が施され、188は横線を起点に羽状の沈線を施したものである。189は方向を異にした斜位の沈線を施すものである。190～192・200は横位・斜位の沈線を施すもので、193～199は斜格子目状に沈線を施したものである。201・202・204は斜位の沈線を施し、203は羽状に沈線を施すものである。205～207は横位の沈線を施すもので、208～216は斜位の沈線を施すものである。217は縦位の沈線を施すもので、218・219は地文のみの部位である。220～224は底部付近の部位で、密に斜位の沈線を施す。224は細隆起線文を幾何学状に施すものである。225・226は斜位に原体圧痕を施したものである。

227～260は繊維を多量に含む前期初頭の縄文土器群である。227は0段多条のL R 単節縄文を横位に施文し、228・229の器面には正格子目状の押捺文が施されるものである。

230～250は口縁部で、248～250の口唇部には刻目が施される。230～260の縄文の多くはL R 単節などの原体を強く反撚したものと考えられる。260は乳房状を呈する深鉢尖底部である。

前期～中期 261・262は縦位の沈線を、263は弧状の沈線・斜位の沈線を施すものである。264は口縁下に円形刺突を施し、下位に鋸歯状沈線を横位に施すものである。265は斜位の原体圧痕を施し、266は半截竹管による刺突を横位に施すものである。267は器形が直に立ち上がる深鉢で、口縁部文様帯に爪形状刺突を施すもので、半截竹管による刺突が加飾される隆帯によって文様帯が分断される。

268は口縁がやや外傾する深鉢で、口縁形態は複合口縁を呈し、指頭圧痕を加飾する隆帯が巡る

ものである。269は弁状突起をもち、頸部が屈曲する深鉢である。口縁部文様帯には3条1組の帯状沈線による鋸歯文が施される。270は口縁が大きく外反し、体部が丸胴状になる深鉢である。頸部には半截竹管による刺突が加飾される隆帯を巡らす。271は長楕円形の孔をもつ弁状突起を有す深鉢である。口縁部文様帯には絡条体圧痕が横位に施され、頸部には細い隆帯が巡らされるものである。272は口縁が大きく外反し、頸部より下位が直になる深鉢である。口縁部文様帯には2条1組の帯状沈線による鋸歯文が施され、頸部には半截竹管による刺突が加飾される隆帯が巡らされるものである。273は山形状の波状突起をもつ深鉢である。波頂部には刻目をもつ円形浮文が貼付され、円形浮文より襷状に沈線を施すものである。274は斜位の沈線を施し、275は沈線による鋸歯文・刺突が加飾される隆帯を施すものである。276は沈線による鋸歯文が施され、277は鋸歯状の隆線を貼付するものである。278は山形状の波状突起をもつ深鉢である。波頂部より頸部にかけて幅広の棒状浮文が貼付され、浮文部には絡条体圧痕が施される。279は頸部に絡条体圧痕を施す隆帯を巡らすもので、280は地文のみの深鉢体部である。281は長楕円形に区画された文様帯に縦位の隆沈線を充填するもので、282は口縁部に縦位の櫛目文を密に施し、283は櫛目文を渦巻状に施すものである。284は絡条体圧痕を加飾する隆帯を波状に施すもので、体部には襷状の隆線を施す。285は絡条体圧痕を加飾する渦巻状浮文を貼付するもので、286は隆線が連結したものである。287は沈線による文様が施される体部下半から底部にかけての部位である。

中期中葉 288は弁状突起をもつ深鉢で、口唇部には刻目が施されるものである。289は渦巻文が加飾される胸骨文が施される深鉢である。290・291・294はキャリパー形深鉢口縁部で、290は沈線による渦巻文が、291・294は隆沈線による文様が施されたものである。292・293・295・296は浅鉢口縁部で、292・293の把手部には原体圧痕による渦巻文が加飾される。体部は292が隆沈線による文様、293・295・296が原体圧痕による文様が施される。297は口縁に隆線を小波状に施し、体部は2条1組の横位平行沈線間に鋸歯文を施す文様帯を多段に施文するものである。298は口縁形状が波状を呈し、波頂下に弧状の貼付文を施す深鉢である。体部上半には無文帯が設けられ、下半は沈線を幾何学状に施すものである。299は頸部を欠くキャリパー形深鉢で、口縁部文様帯には隆線による波状文が施され、体部は沈線による渦巻文・懸垂文が施されるものである。300は口縁にS字状把手をもつ深鉢口縁部である。口縁部文様帯には縦位の原体圧痕が施される。301はキャリパー形深鉢体部で、沈線による渦巻文・懸垂文が施されるものである。302は隆線による懸垂文・有棘文が施される深鉢体部下半である。303は有段の口縁をもつ深鉢である。口縁下には横位の平行沈線が4条施される。304・305は頸部に隆帯を巡らすキャリパー形深鉢である。

306～311はキャリパー形深鉢の口縁部で、306・310はC字状、308は円状、311は変形S字状突起をもつものである。312は隆沈線による有棘文・懸垂文が施される深鉢体部下半である。313・314は隆線による幾何学文様が施される深鉢で、319・321は口縁がやや内湾する浅鉢である。315・317・318・320は橋状把手をもつ深鉢口縁部で、316はC字状の文様を組み合わせた立体的な突起部である。322は3条1組の帯状沈線を弧状に施したもので、323・329は3条1組の帯状沈線を多段に施すものである。324・325・328は体部が丸胴状になる深鉢で、沈線による渦巻文が施されるものである。326は地文が施された口縁がやや内湾する深鉢で、327は地文のみ施される底部、331は隆線による懸垂文が施されるものである。330はキャリパー形深鉢口縁部で隆線による渦巻文が施される。

中期後半 332・333は隆沈線による渦巻文が施されるもので、332は口縁部、333は体部である。334・336は橋状把手をもつ樽形土器口縁部で、335は吊手状把手をもつ深鉢口縁部である。337～342は口縁部が波状を呈す深鉢で、337～340は波頂部に渦巻文を施すものである。343・344は口縁下に刺突列を施すもので、刺突列に接する小渦巻文は2条1組の隆沈線によって各渦巻文と連結する。

345は隆沈線による大渦巻文が施され、346は隆沈線による小渦巻文・懸垂文と沈線による有棘文が施されるものである。347・348は隆沈線による渦巻文・懸垂文が施される深鉢体部で、349隆沈線による懸垂文が施される深鉢底部である。350は口縁が大きく外反し、体部が屈曲して膨れる深鉢である。体部には隆沈線による小渦巻文・楕円文が連結して施される。351は口縁部と底部を欠く深鉢で、隆沈線による大渦巻文・懸垂文が有棘の小渦巻文によって連結されるものである。352は隆沈線による渦巻文・懸垂文が施される深鉢体部で、353～355は体部が屈曲して膨らむ深鉢体部である。文様は隆沈線による小渦巻文が懸垂文と連結するものである。356は口縁が内湾する浅鉢で、隆沈線による円文を起点に横位の文様帯が構成されるものである。357は隆沈線による懸垂文が施された深鉢底部である。

中期後葉～晩期 358は沈線による逆U字文が施される深鉢体部である。359は吊手状把手をもつ深鉢で、沈線による逆U字文が施されるものである。362～364は口縁が波状を呈する深鉢で、波頂下より隆帯を襷状に施し、隆帯に沿って刺突を施すものである。365は口唇部より縦位に隆線を垂下させ、横走する隆帯と連結するものである。366は小突起をもつ深鉢で、367は口縁下に1条の沈線を横走させるものである。368はクランク状羊歯文が施される小形深鉢で、369は隆線による文様が施された注口部である。

石 器 (第223～228図)

遺物包含層の出土石器総数は239点を数える(剥片、使用痕のある剥片を含む)。最も多く出土したのは剥片・使用痕のある剥片で184点、層位ではⅡ a層で165点である。

剥片石器・石核石器 (第223～227図31～33)

(V a層) 1は石匙である。頁岩製で、背面中央に第一次剥離面を残しているが、周縁から丁寧に調整が施されている。つまみ部は器厚に対して薄く階段状剥離も見られることから、破損したり再調整されていることも考えられる。使用による刃こぼれは、腹面の全周にわたっている。

(IV b層・IV a層) 2～6は削器、7・8は搔器である。2は素材剥片の末端の形状(フェザーエンド)を生かした鋭い刃部を作出している。この素材剥片の剥離の際に打面調整を行って、使用時に手になじむ形に仕上げている。バルブは特に除去されることなく残存している。3は上半部が腹面側から破損している。背面にやや自然面を残し周縁を調整しているが、石質によるものか刃部の摩滅が激しく、稜線もはっきりしない。4は腹面に刃部を作り出している。底辺の左右からまず調整剥離を施し、そのうえで細部調整を行っている。右側辺上半部は第一次剥離の縁辺をそのまま刃部として使用している。5の底辺の調整は90度に近く搔器様であるが、両側辺は鋭い刃部を作出している。6も背面両側辺に調整が施され、末端部は弧状であり、とりわけ底辺は光沢も見られ主要刃部と思われる。7・8の搔器はともに石核から剥離されたときの形状からは大分変化している。8は背面右側辺の抉れた部分に最も調整を加えてある。9は籠状石器である。平面形は棒状を呈し、断面凸レンズ形をした肉厚のものである。側辺、底辺ともに稜の出入りが大きく、

底辺は階段状の剥離が集中している。10・11は両面調整石器で頁岩製である。10の背面右側辺は稜線がつぶれており、このちょうど裏側の腹面左側辺にも古い剥離が残っているため、この部分は刃器というよりも敲打器として使用されたと考えられる。11は両面ほぼ全面にわたって調整が施されているが、背面には階段状に破損している部分があり、10同様に打撃する作業に使われたとも考えられる。これらの両面調整石器は、第一次剥離のあとの整形も押圧剥離でおこなわれており、比較的丁寧に作られている。

(II b層・II a層) 12～17は石鏃である。12は黒曜石製の凹基無茎鏃で、基部への調整が入念に行われている。13も凹基無茎鏃で、背・腹両面に古い剥離を残している。先端部は12・13いずれも破損している。14～16は凸基有茎鏃で、14・15はほぼ完全な形で出土している。16は背面先端部が槌状に破損しているが、使用に際しての衝撃剥離と考えられる。基部も背面側から折れている。周縁調整であり、背面のほうが角度のきつい調整がされている。17は両面加工の凸基無茎鏃である。18は石錐で、錐部は破損しており、基部は幅広である。19～24は削器である。いずれも片の縁辺を加工しており、背面には自然面を残すものもある。25～32は搔器である。25は背面右側辺に急斜度調整を施し、末端にも尖端部を作出している。26の搔器は背面左側辺・腹面右側辺が交互剥離され、第一次剥離の際の打面にほぼ垂直な刃部となっている。27は細部調整によって刃部が作出されているのではなく、剥片の鋭利な縁辺を利用したもので細かい刃こぼれが認められる。28は摩滅が著しく、特に底辺の抉れた部分の稜線は判然としない。底辺以外の細かい調整は刃潰しであり、また抉れた状態はこの石器製作時の姿ではなく、使用により形を変えたものと思われる。石材から考えても、実用を目的としない石製品ではなく、道具として使われた石器である。29は第一次剥離の際の石核の下端が残る大型・肉厚の素材剥片を使用している。背面右側辺に使用による微小剥離と摩滅が観察されるが、腹面に見られる調整剥片を剥離し続けていたならば、両面調整石器が完成していたと考えられる。30の刃部は背面底辺であるが、平面形でこの部分の凹凸が大きいため、長さのある連続した刃部の使用というよりも、底辺の一部を使用対象物にあわせて断続的に使っていたと考えるのが適切と思われる。31は両面調整の石器の製作中に大きく破損したものを再利用している。腹面右側辺下半部の調整は、破損した面を打面にしており、この部分が刃部と考えられる。33は楔形石器で、上下端部の階段状剥離が発達している。典型的なものよりやや大きめであるが、楔としての機能を持つと考えられる。

礫石器 (第227図34～38・第228図39～43)

(IV b層・IV a層) 34・35は敲打磨石で、34は断面形が多角形で敲打磨面に小剥離を伴ったもの、35は被熱しており、端部に亀裂が入り表面が赤変している。36は自然円礫を利用しており、全面を磨いた磨石である。

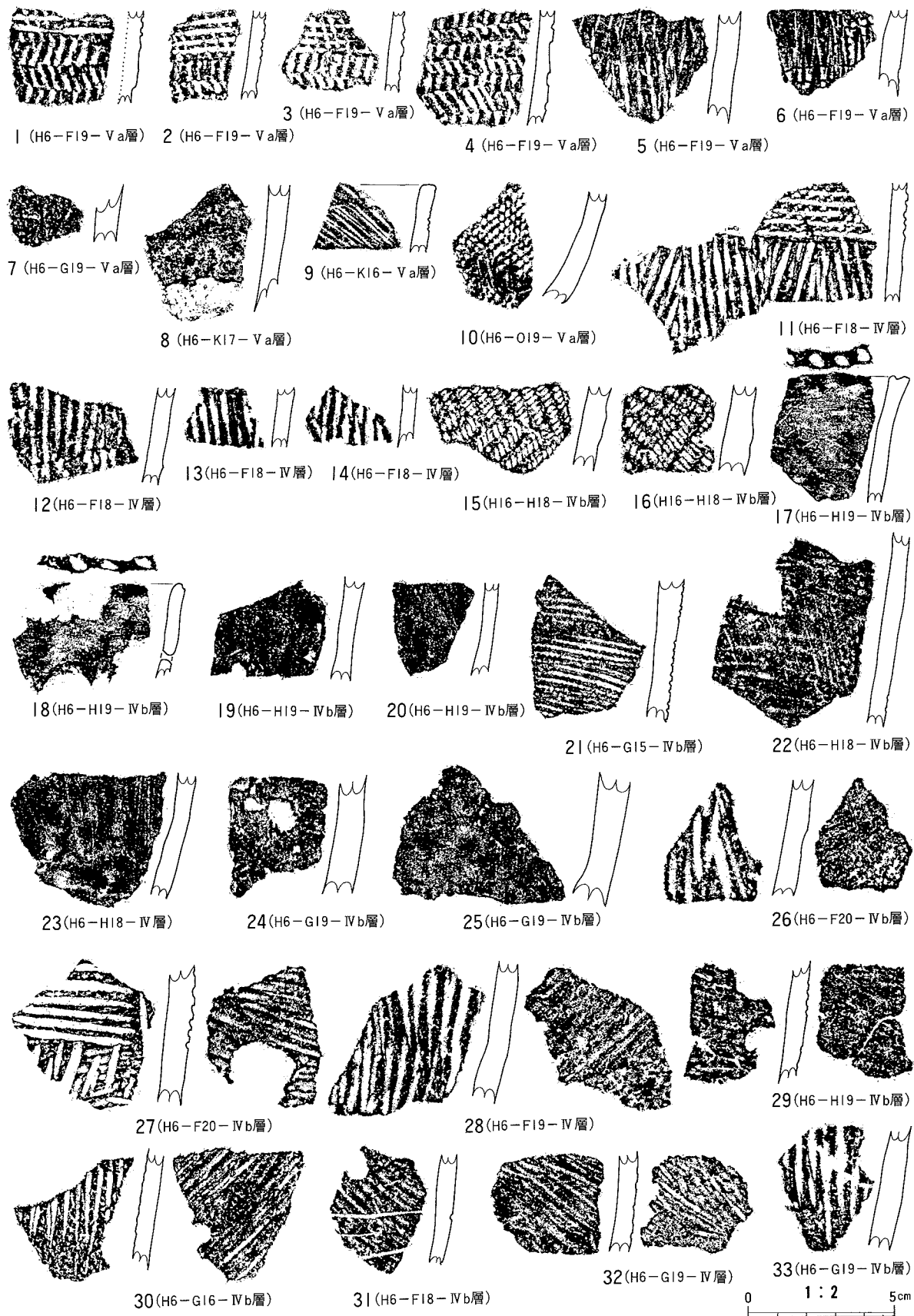
(III b層) 37は砥石で、破損しているが両面を使用し、側面は砥石としての機能以外をもち研磨整形している。

(II a層) 38・39は敲打磨石である。38の残存部に敲打磨面は形成されていないが、形状や礫素材を用いていることから、敲打磨石と思われる。39は中央部分に敲打痕があり、敲打磨面が発達している。

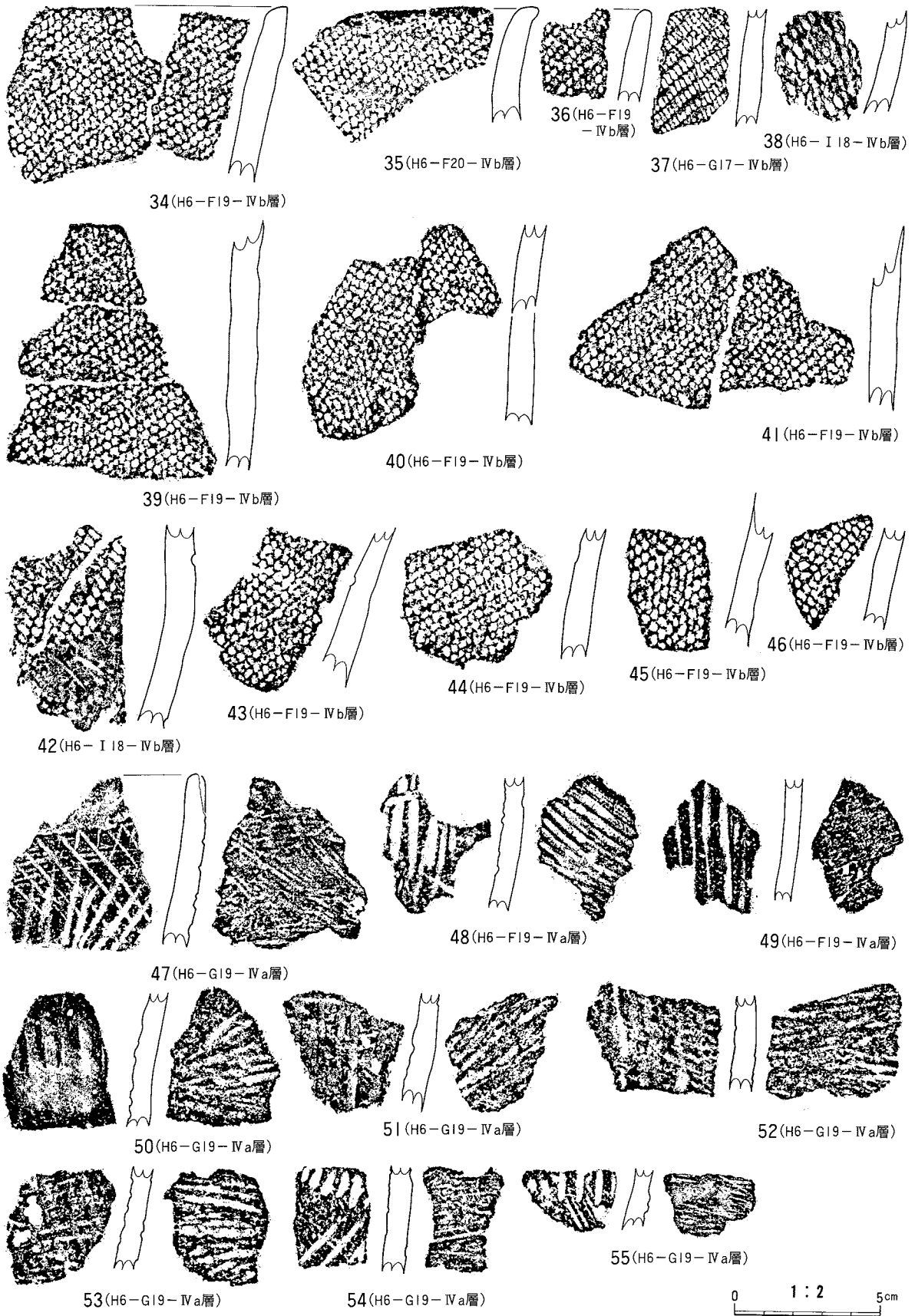
40・41は敲石である。42・43は砥石で、細い溝状の条痕が見られる。

3. 土製品 (第228図44～46)

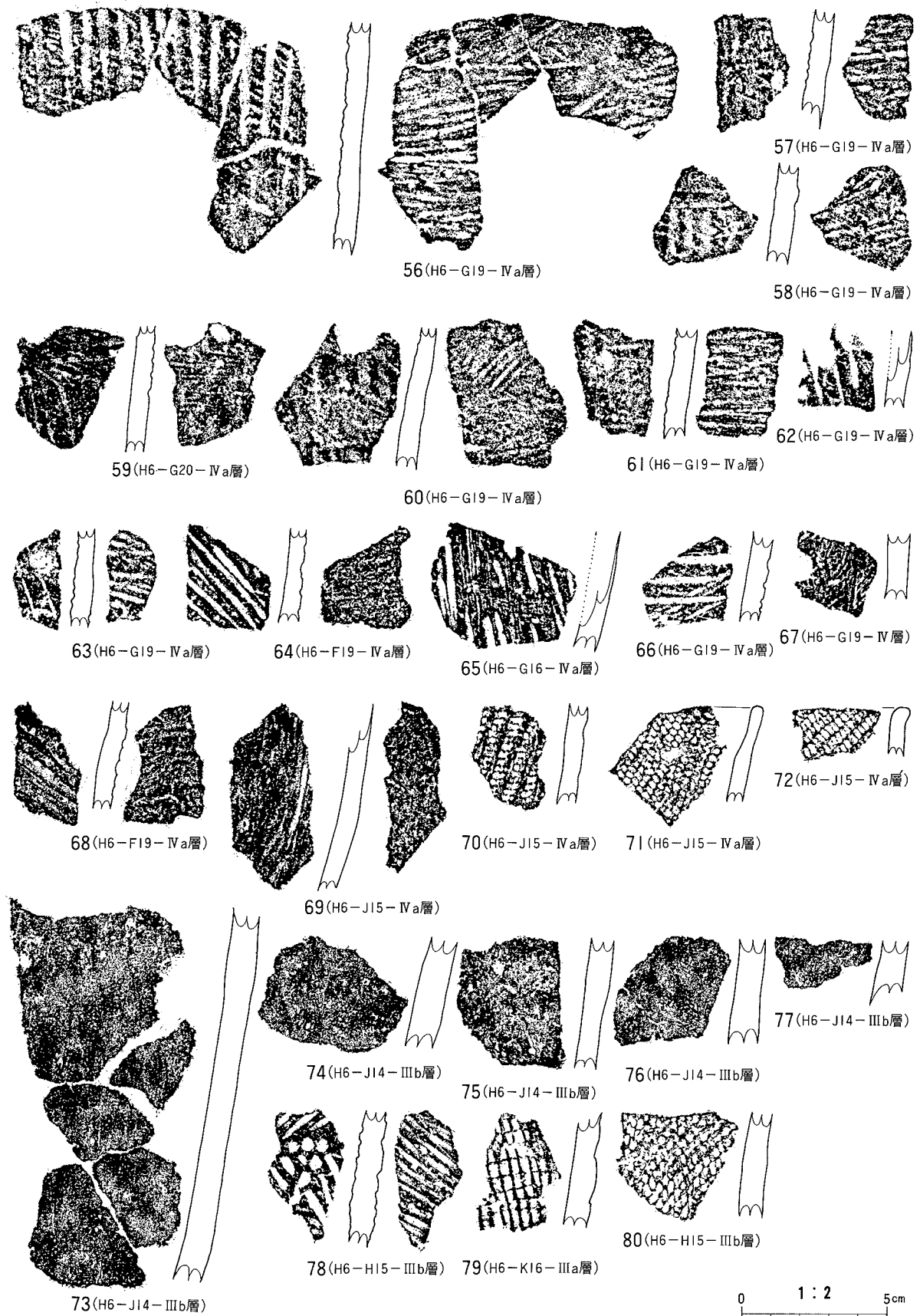
(II a層) 44・45はミニチュア土器、46は破損しているが環状の装飾品と思われる。



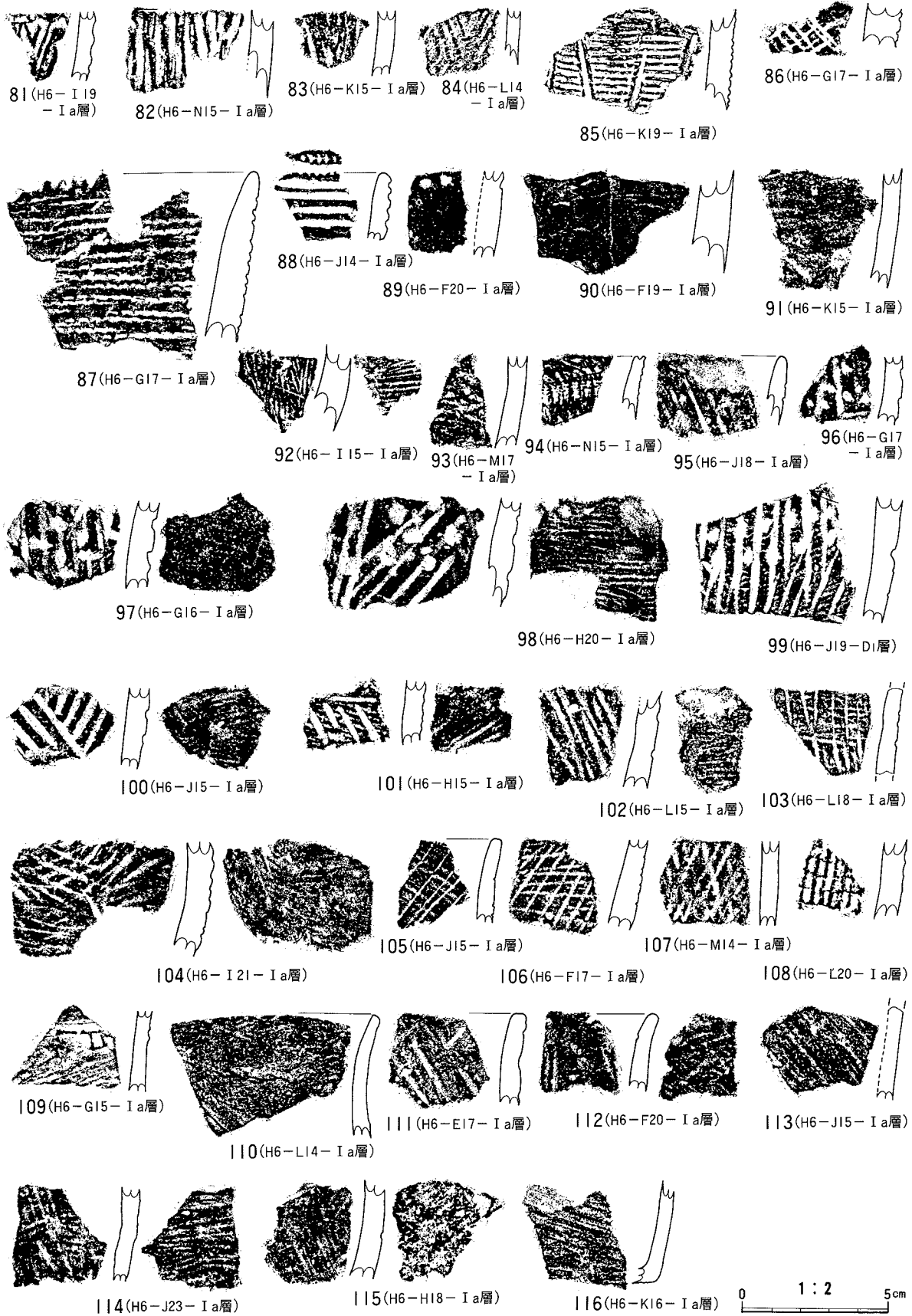
第205図 遺物包含層、遺構外出土土器(1)



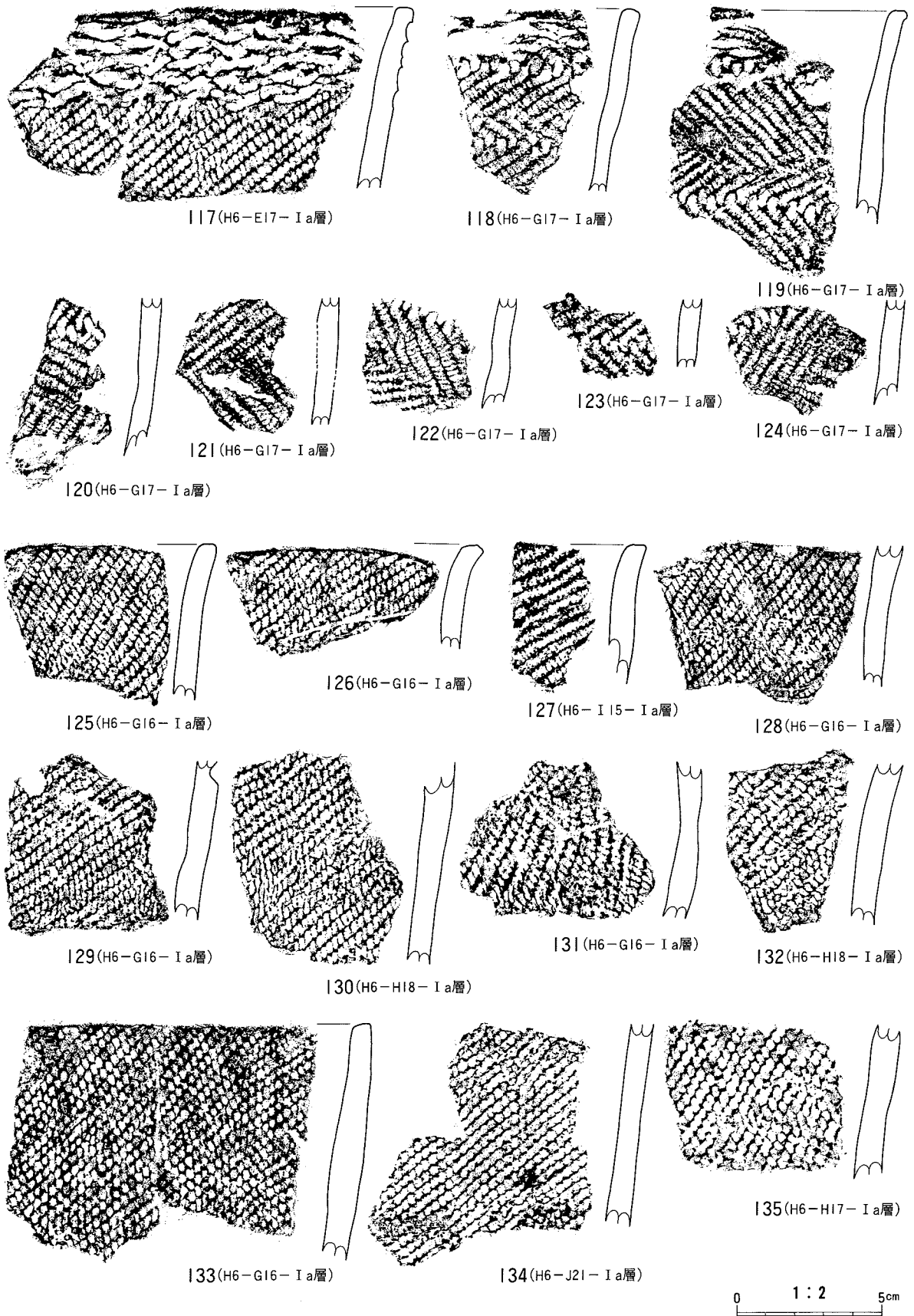
第206図 遺物包含層、遺構外出土土器(2)



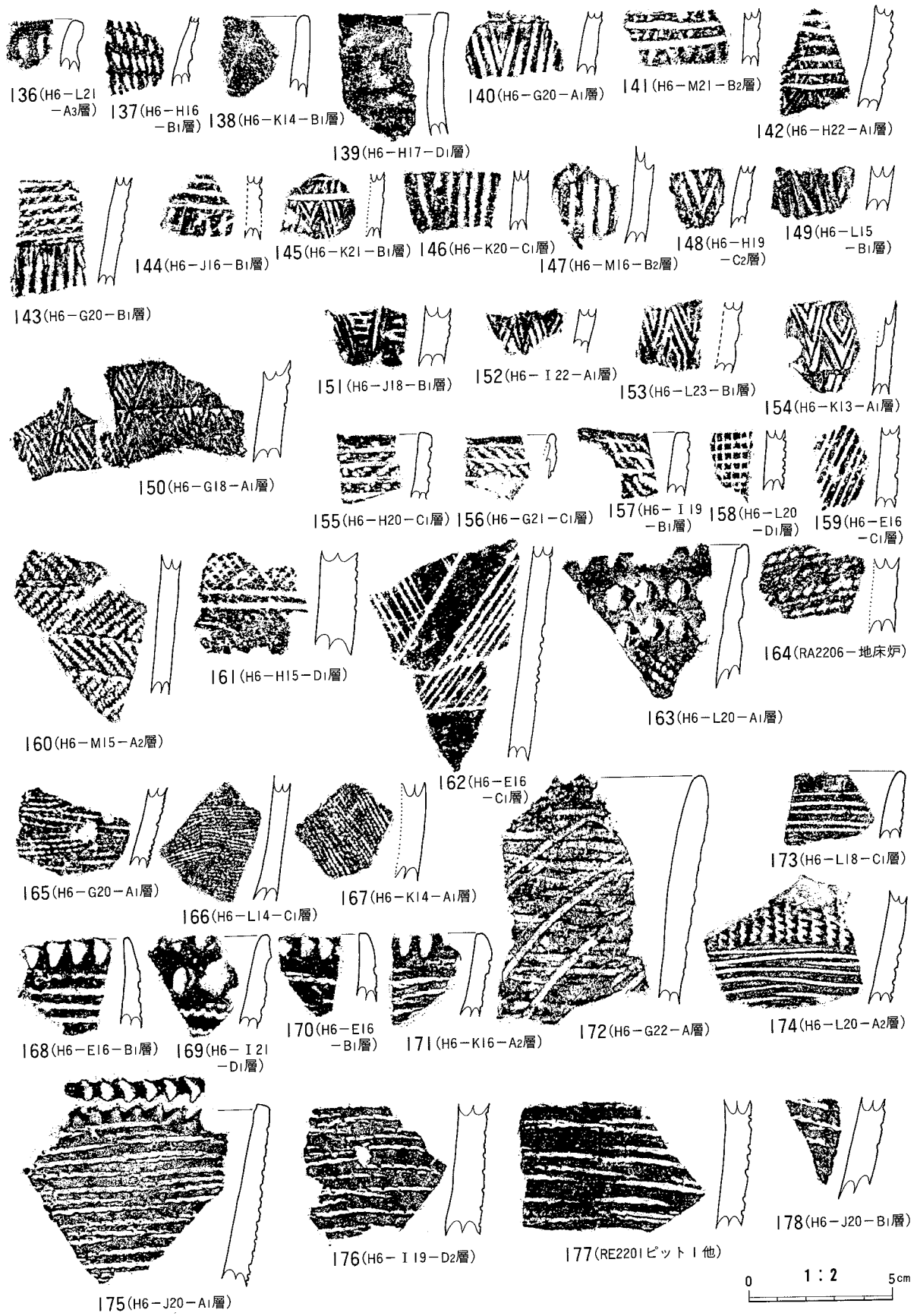
第207図 遺物包含層、遺構外出土土器(3)



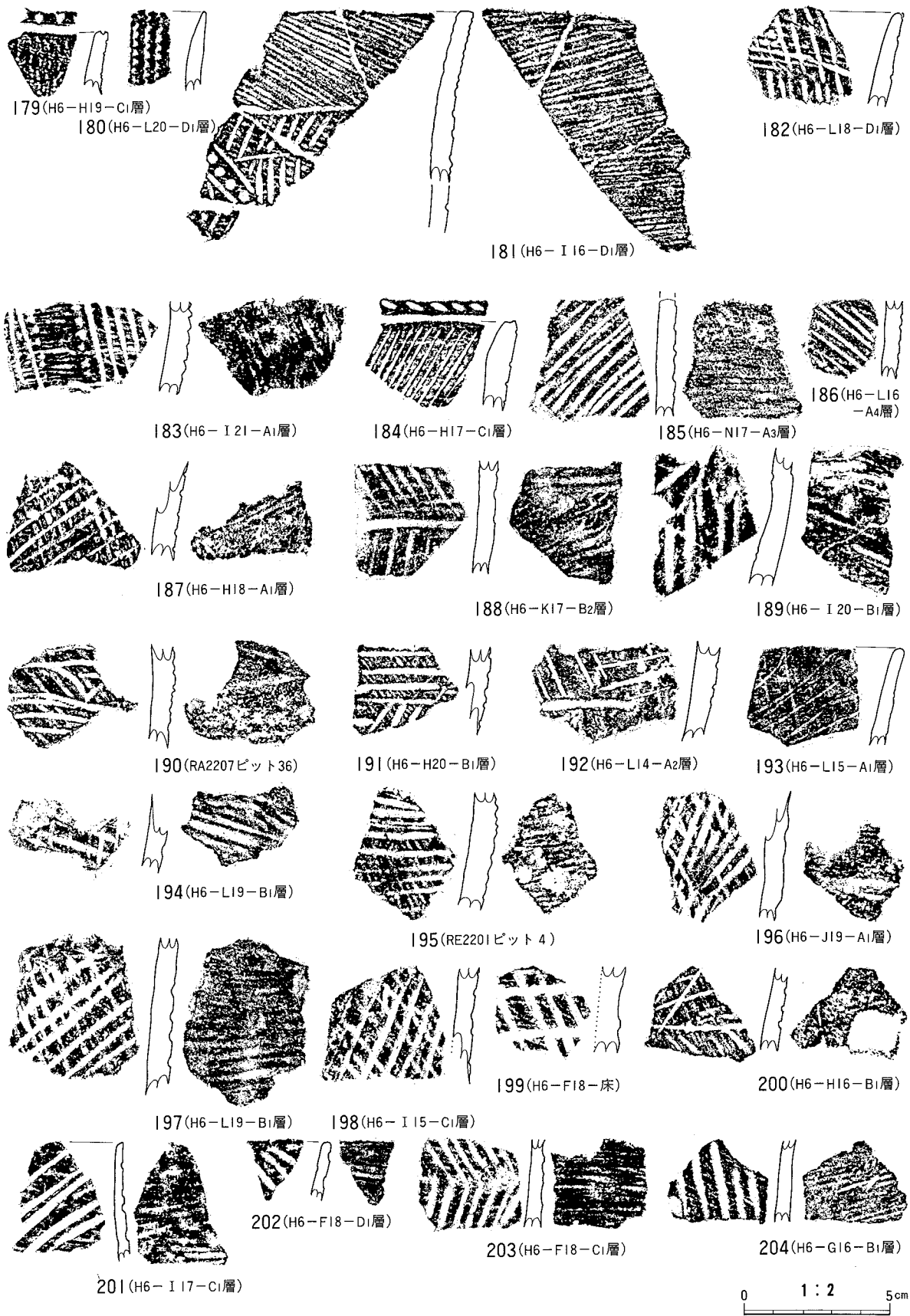
第208圖 遺物包含層、遺構外出土土器(4)



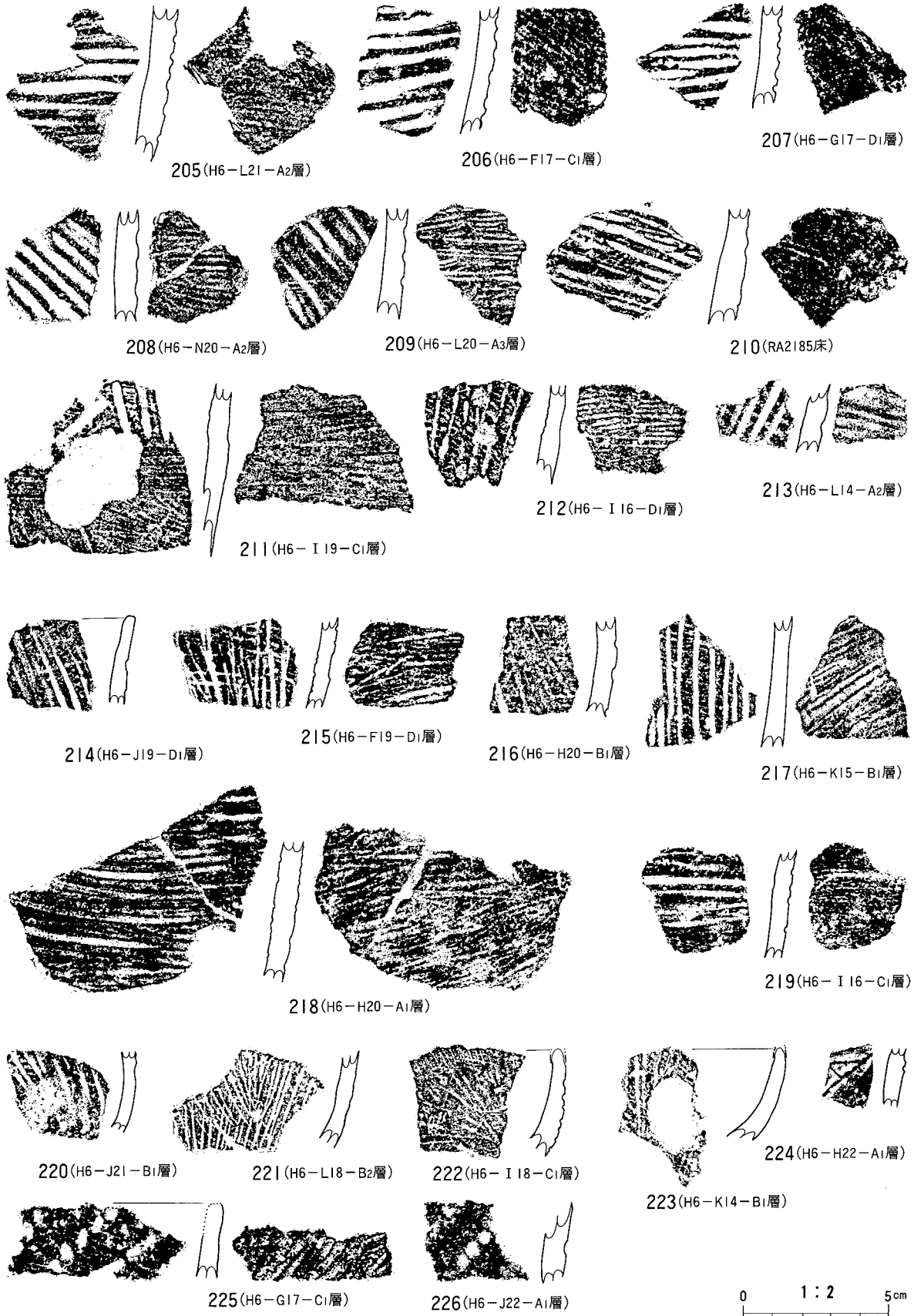
第209図 遺物包含層、遺構外出土土器(5)



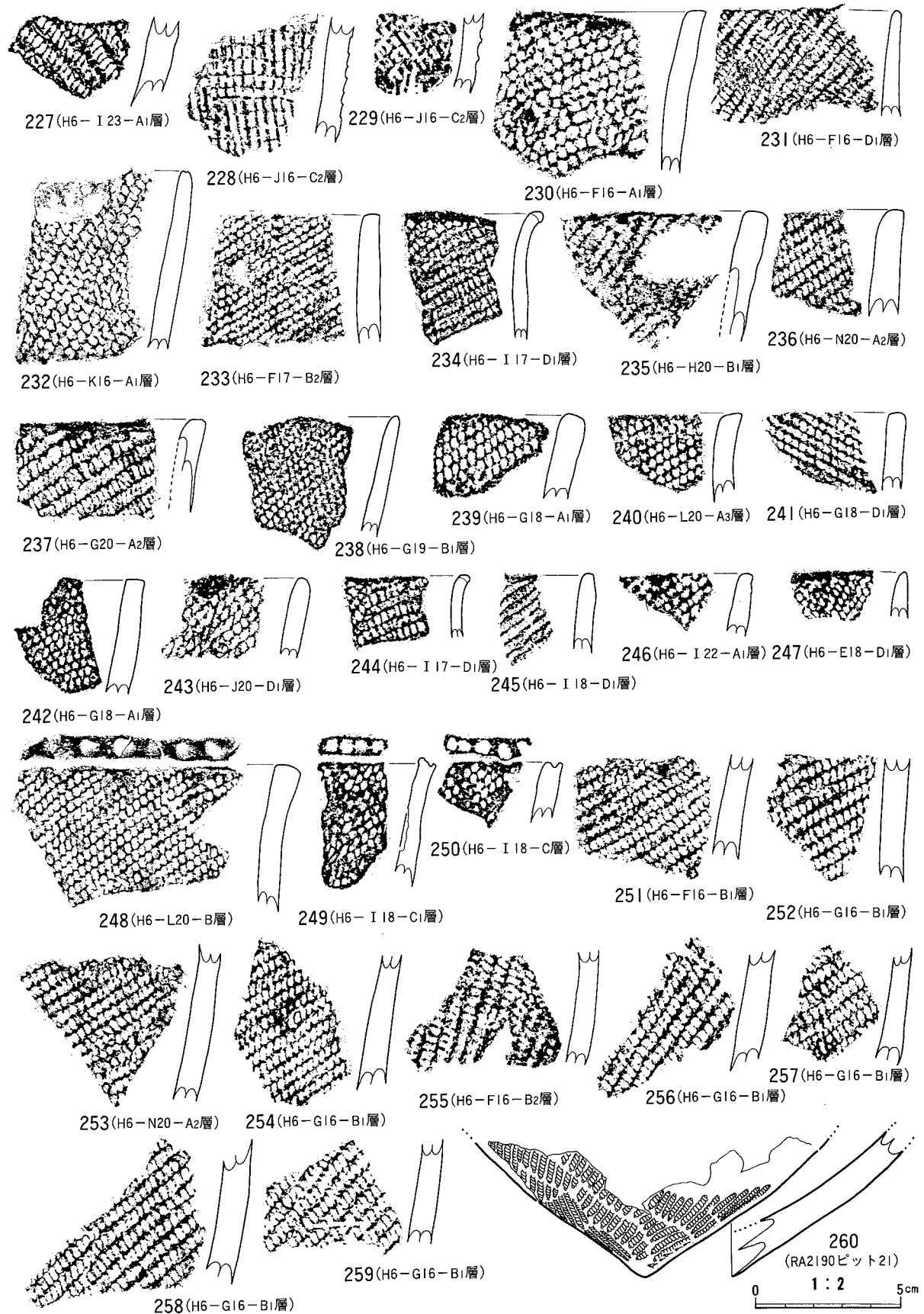
第210図 遺物包含層、遺構外出土土器(6)



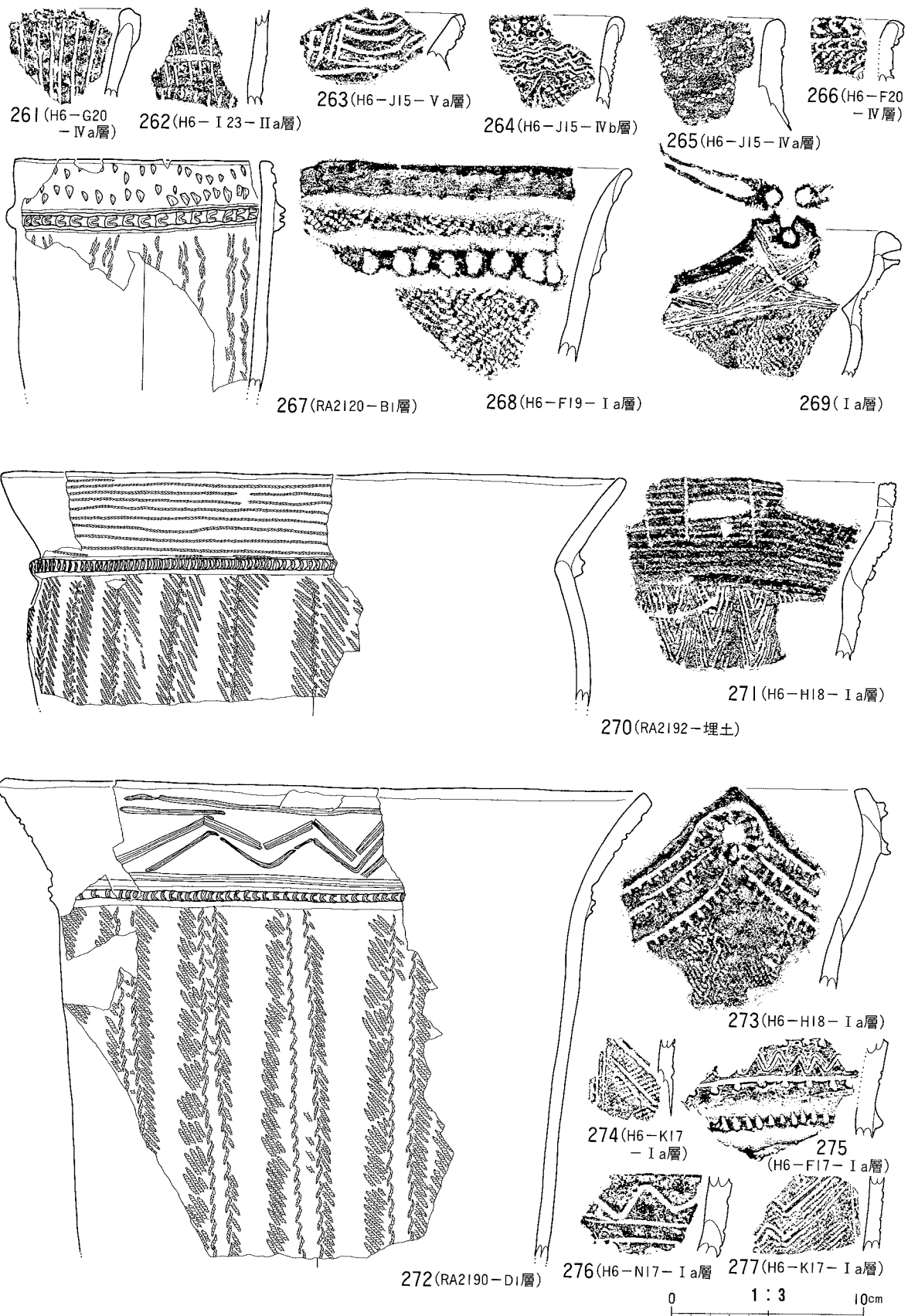
第211図 遺物包含層、遺構外出土土器(7)



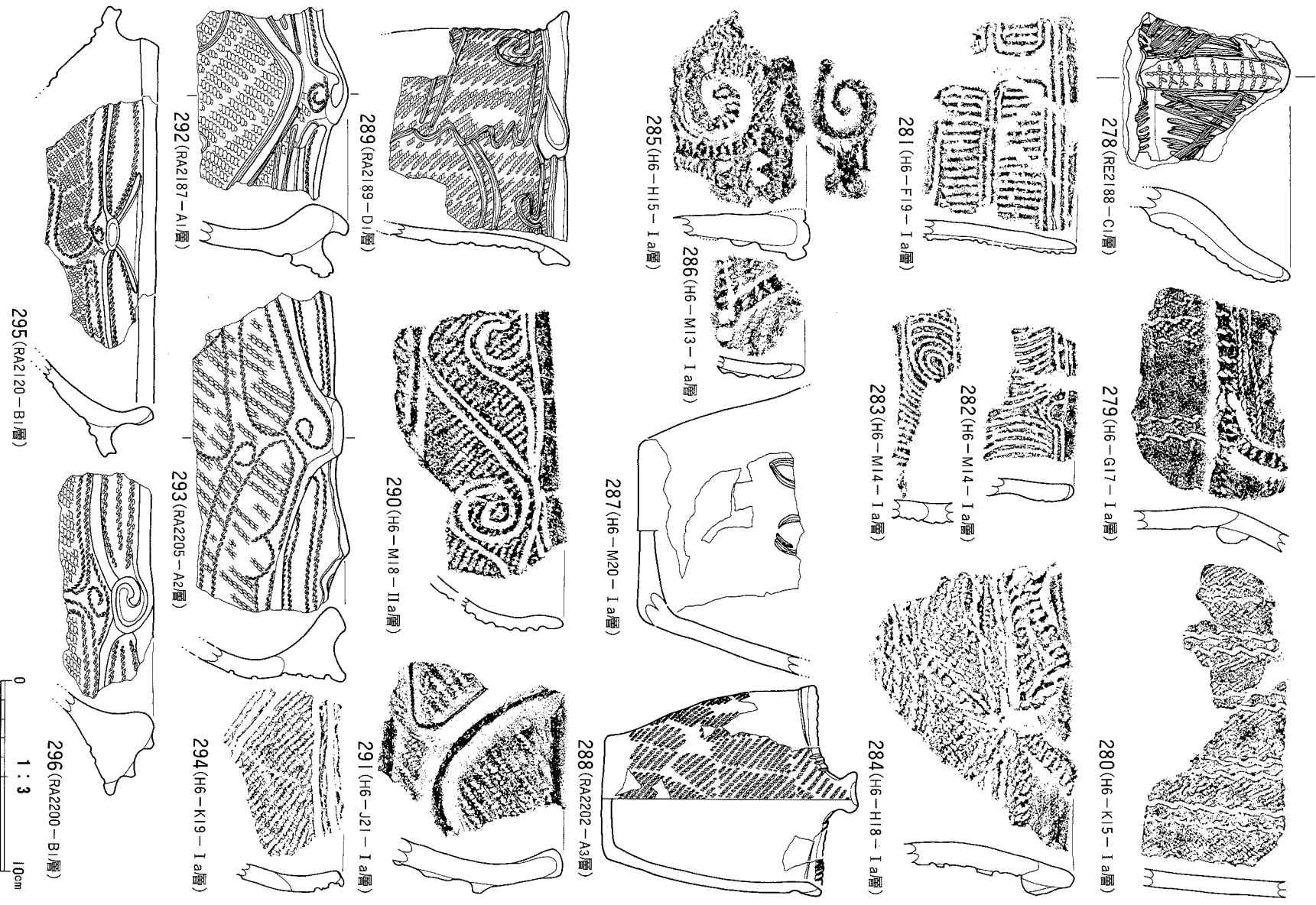
第212図 遺物包含層、遺構外出土土器(8)



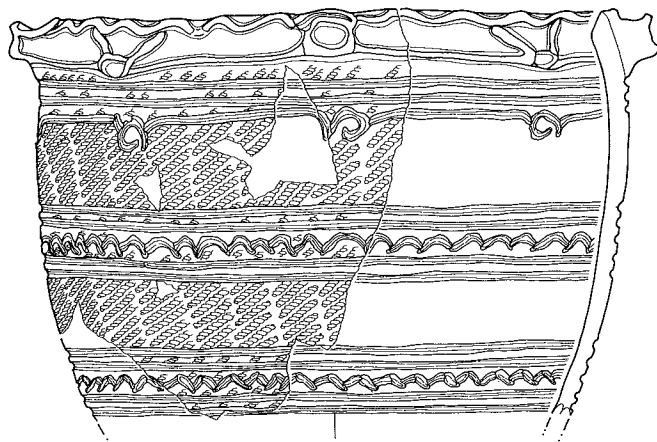
第213図 遺物包含層、遺構外出土土器(9)



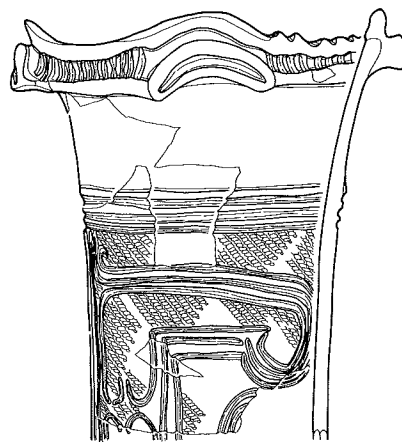
第214図 遺物包含層、遺構外出土土器(10)



第215図 遺物包含層、遺構外出土土器(11)



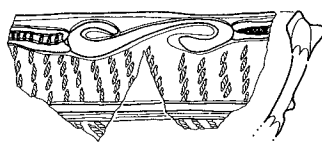
297 (RA2205-B1層)



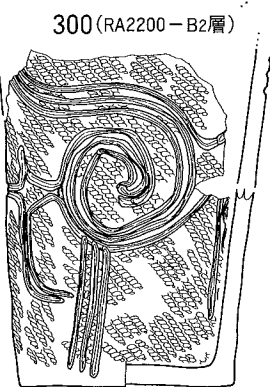
298 (RA2202-B1層)



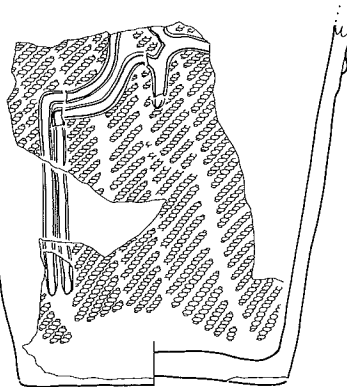
299 (RA2215-A4層)



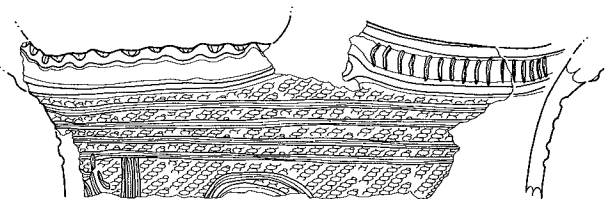
300 (RA2200-B2層)



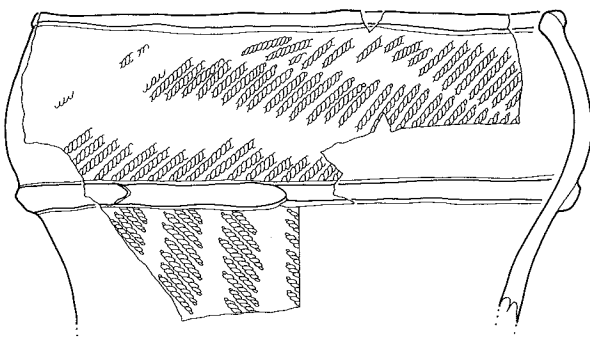
301 (RA2215-A3層)



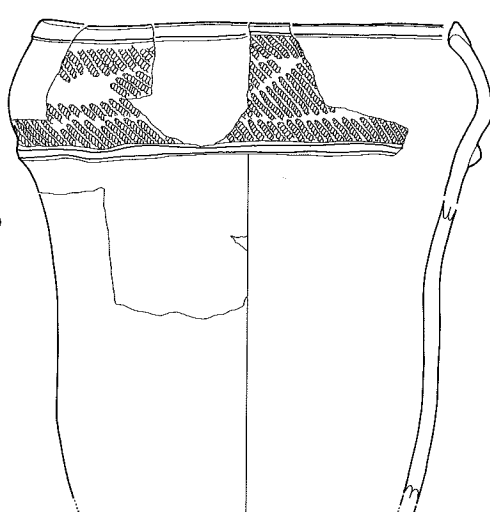
302 (RA2202-B1層)



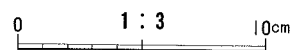
303 (RA2202-B1層)



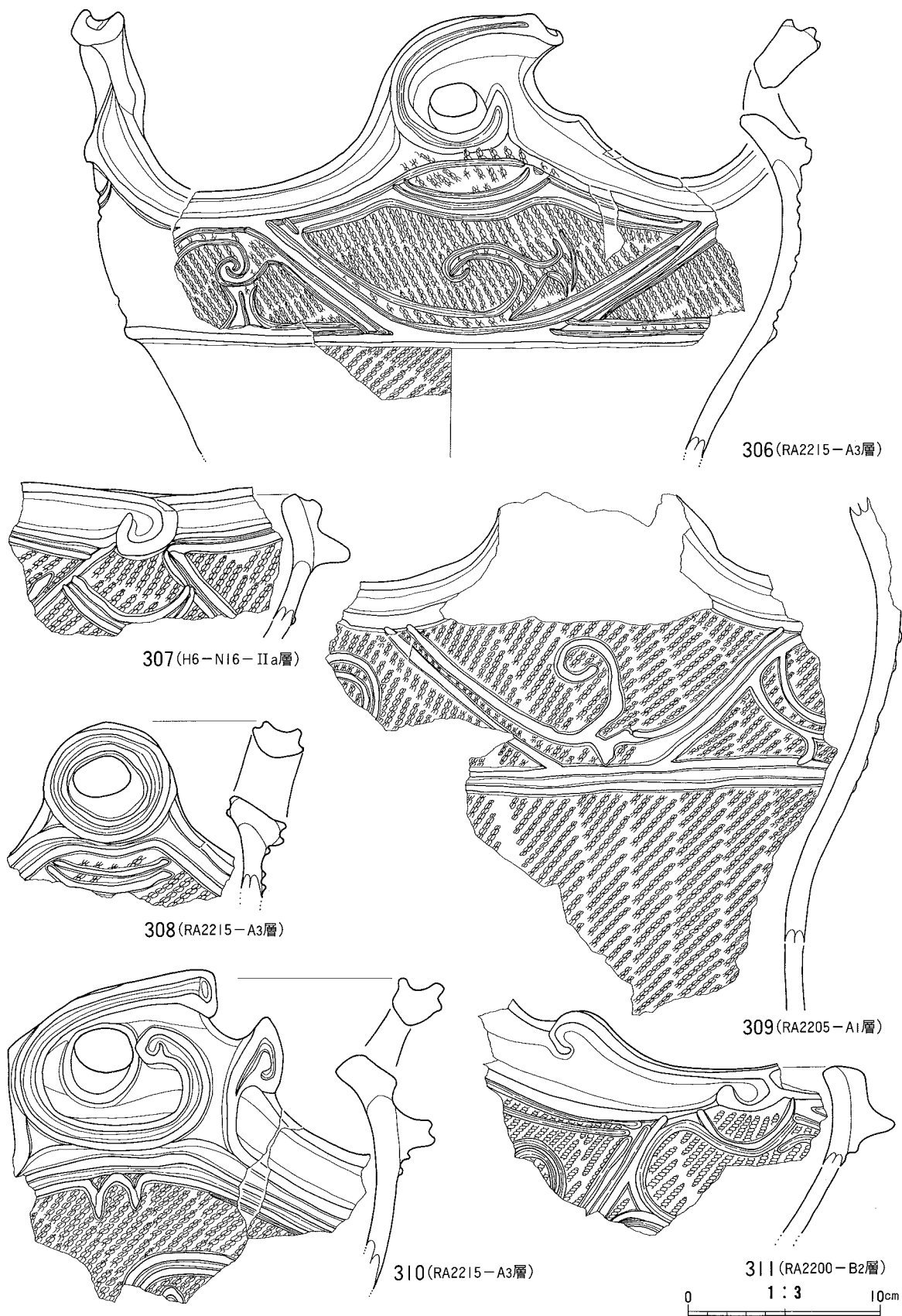
304 (RA2121-A1層)



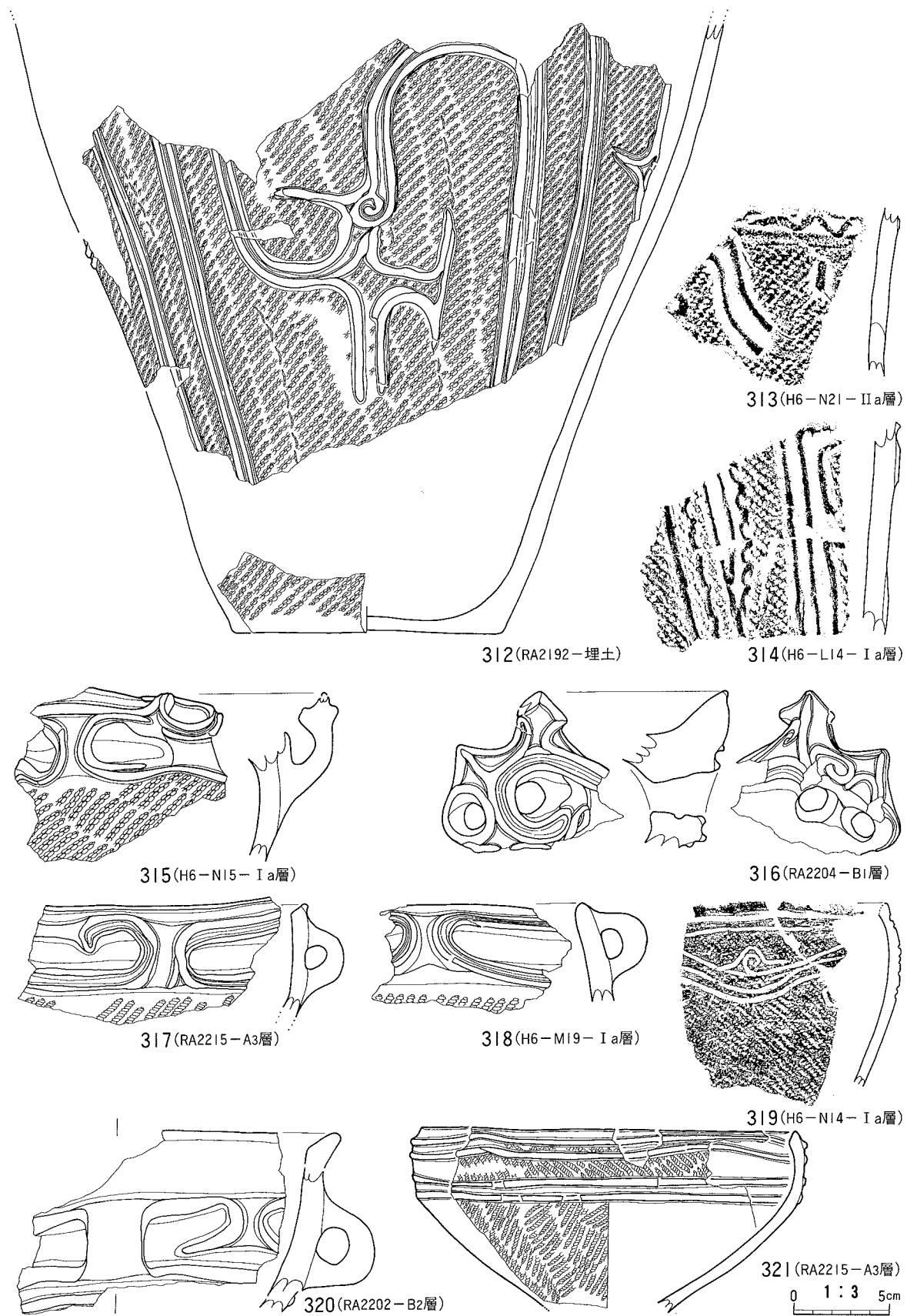
305 (RA2215-A4層)



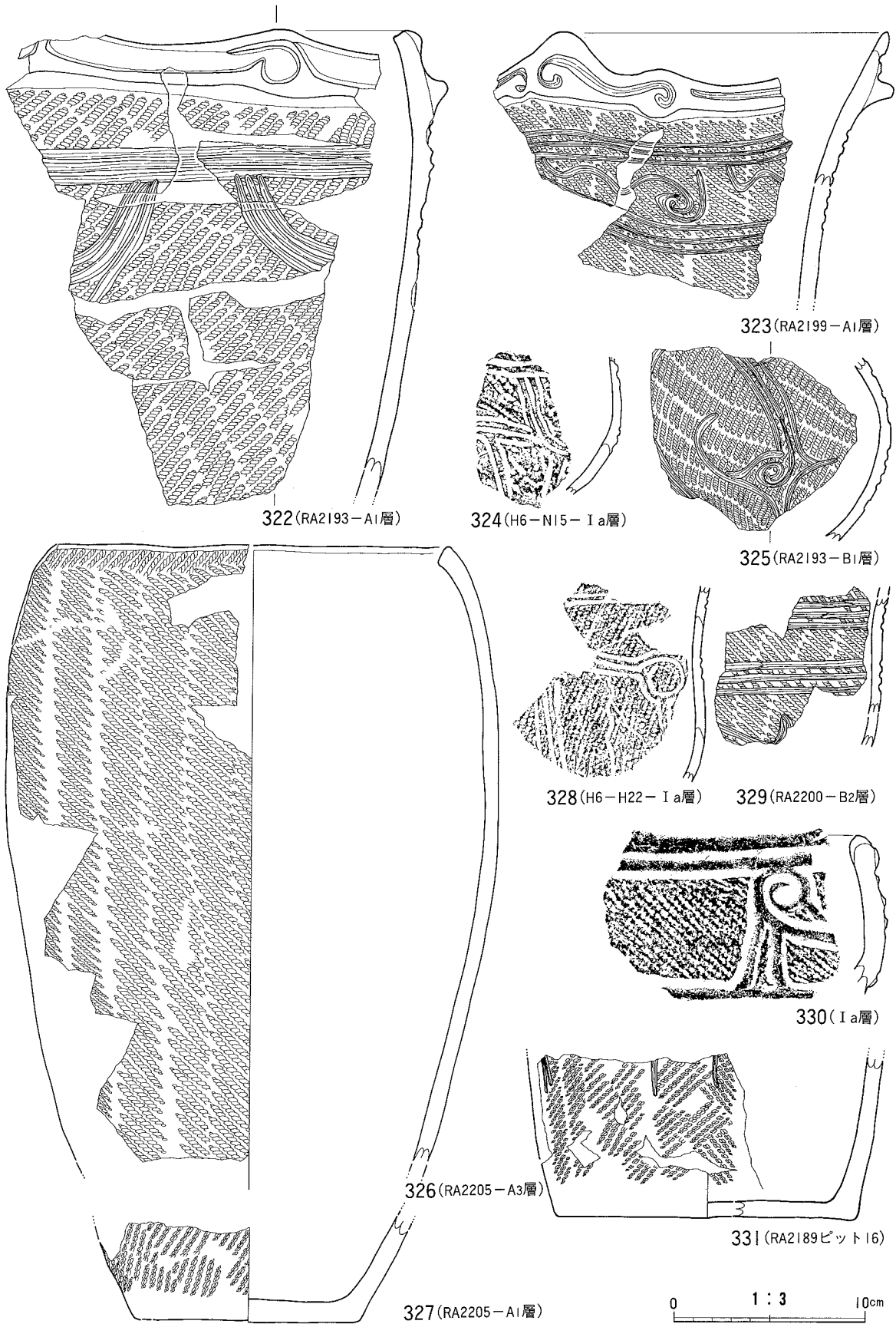
第216図 遺物包含層、遺構外出土土器(12)



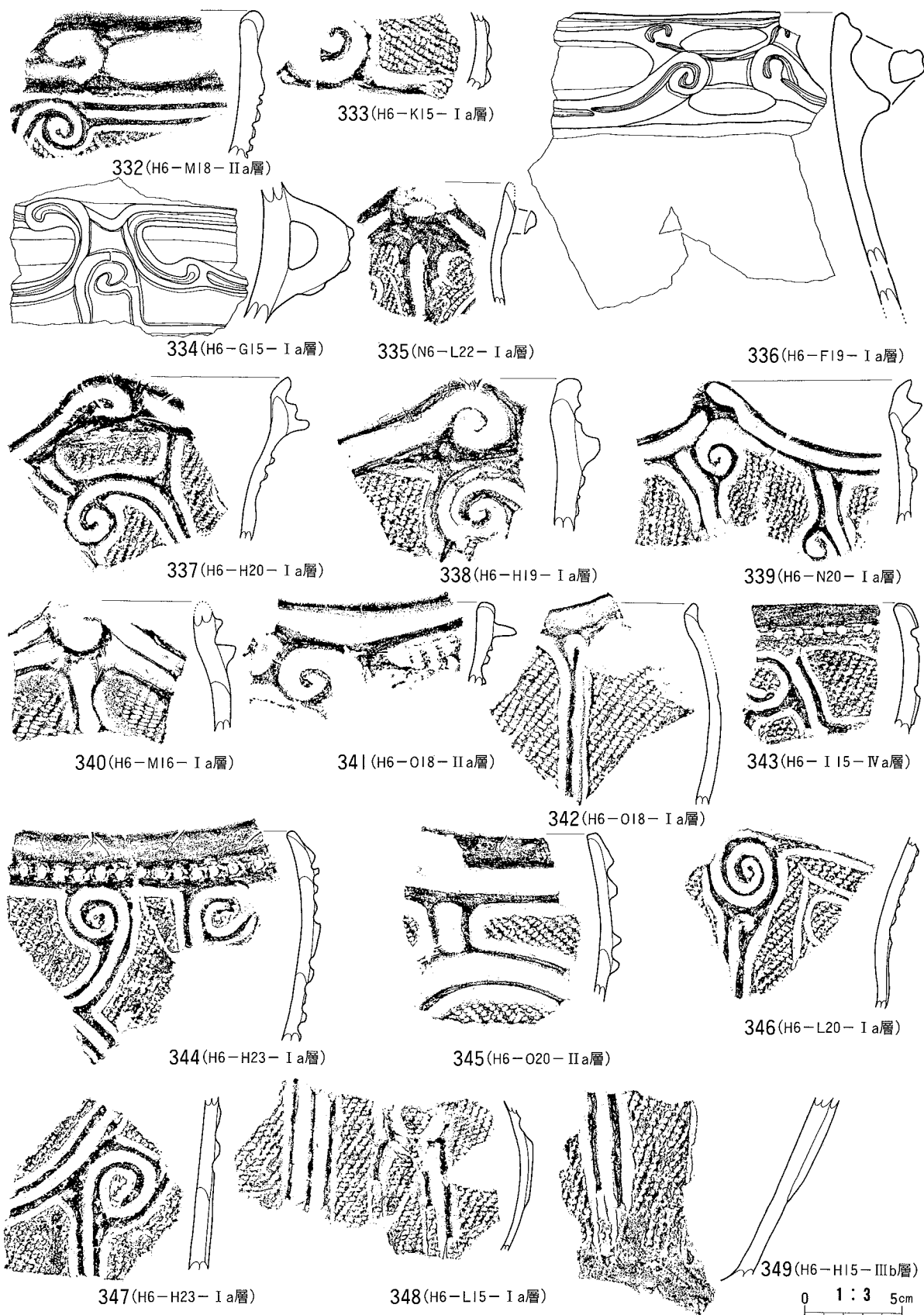
第217図 遺物包含層、遺構外出土土器(13)



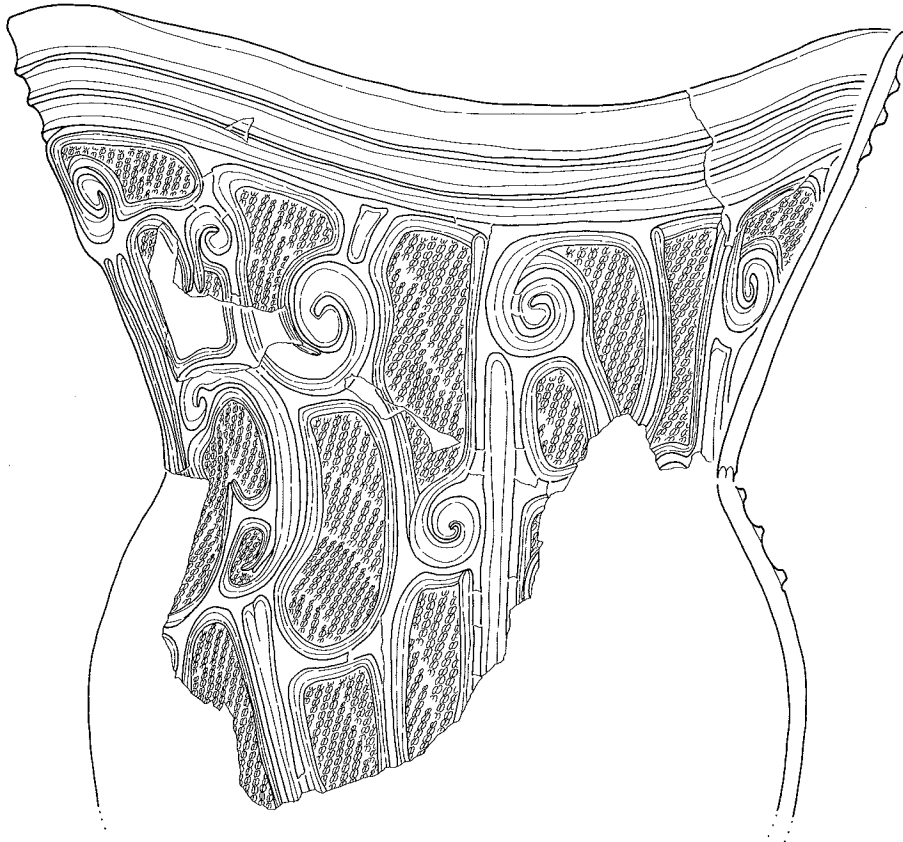
第218図 遺物包含層、遺構外出土土器(14)



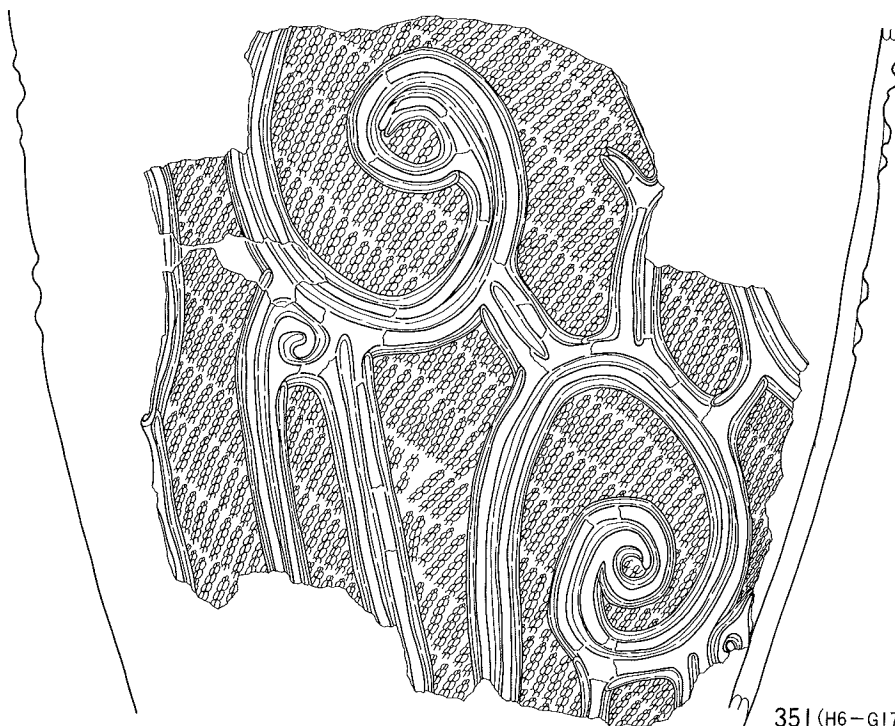
第219図 遺物包含層、遺構外出土土器(15)



第220図 遺物包含層、遺構外出土土器(16)



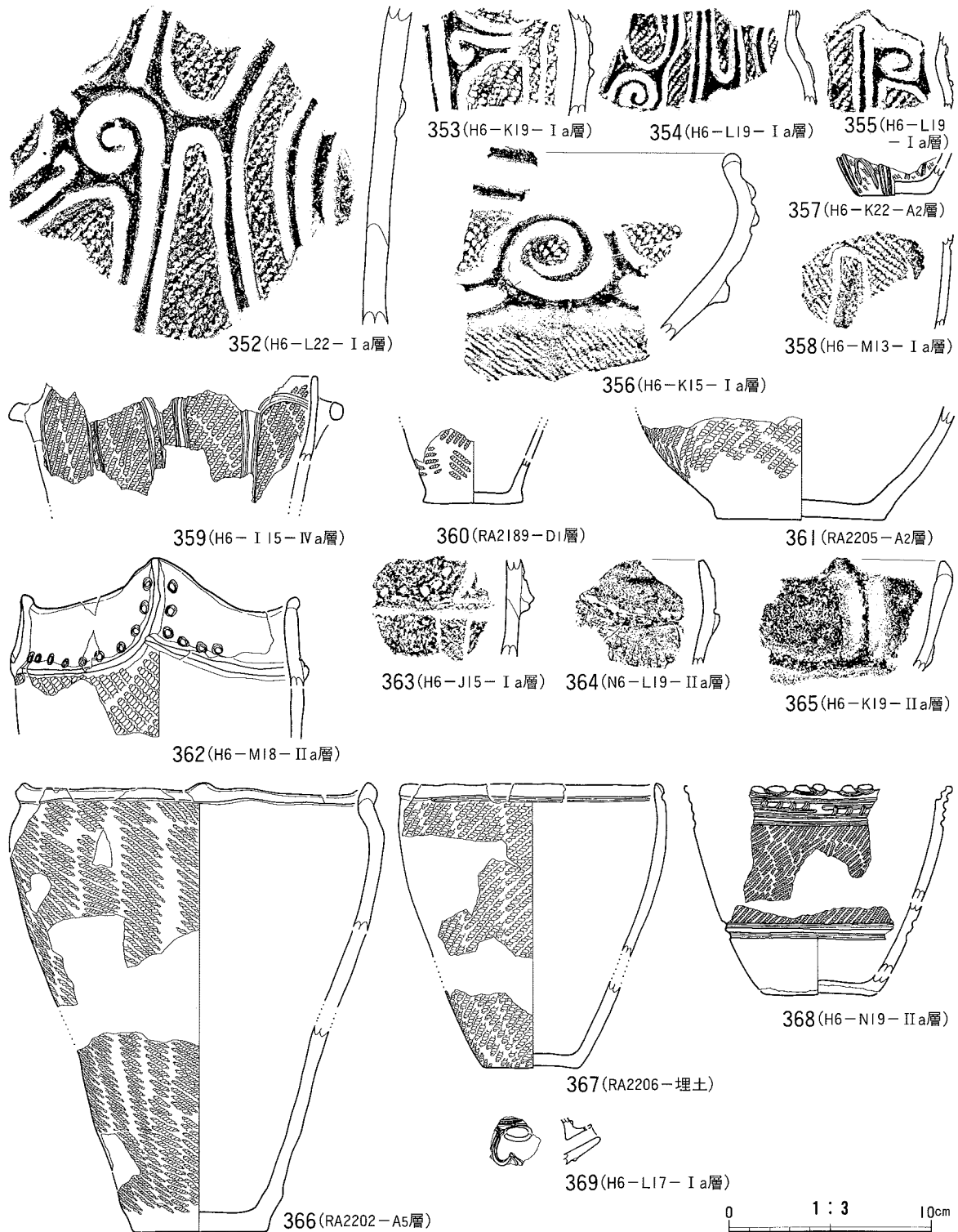
350(RA2199-埋土)



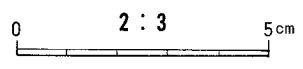
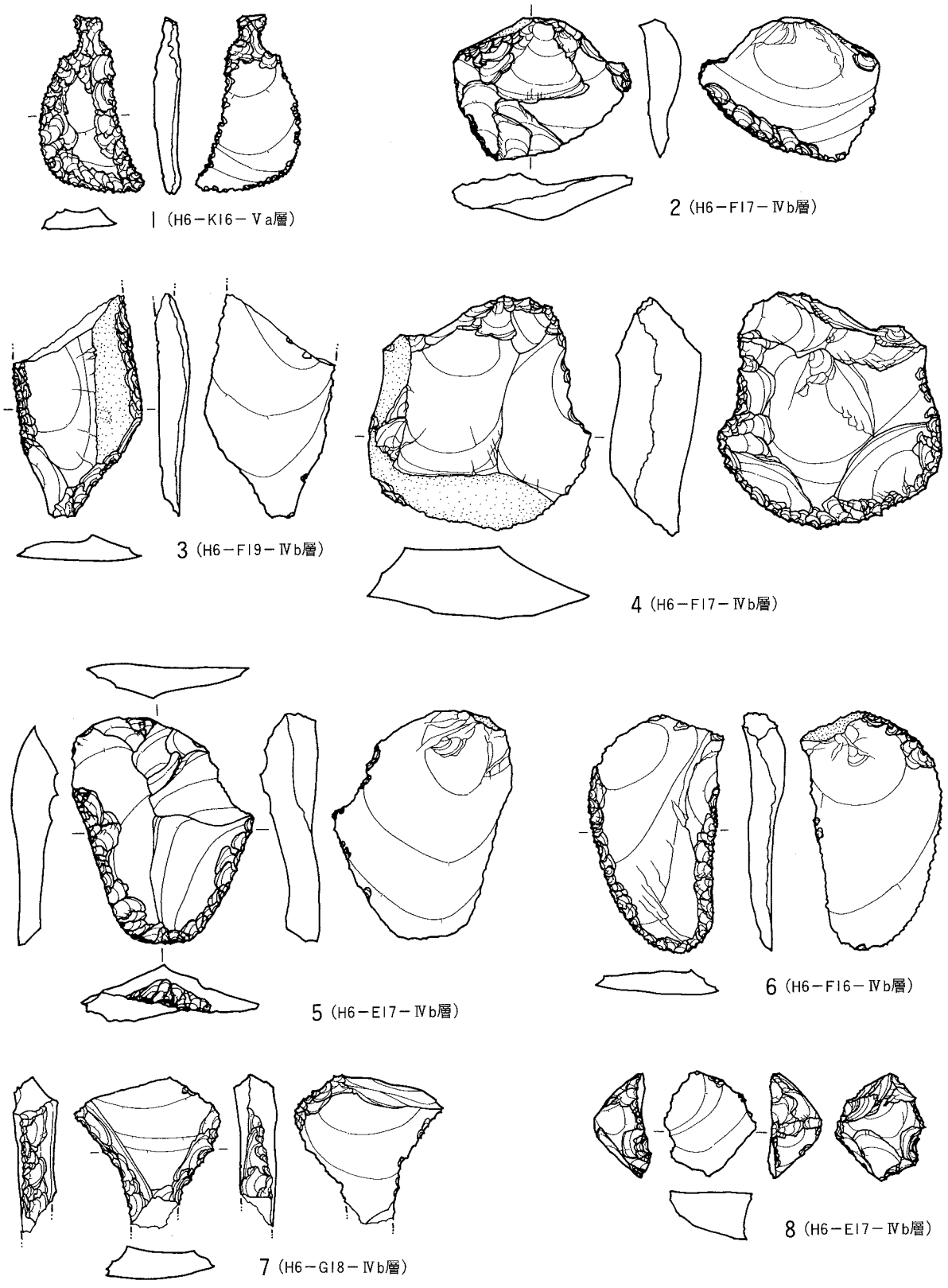
351(H6-G17-I a層)

0 1 : 3 10cm

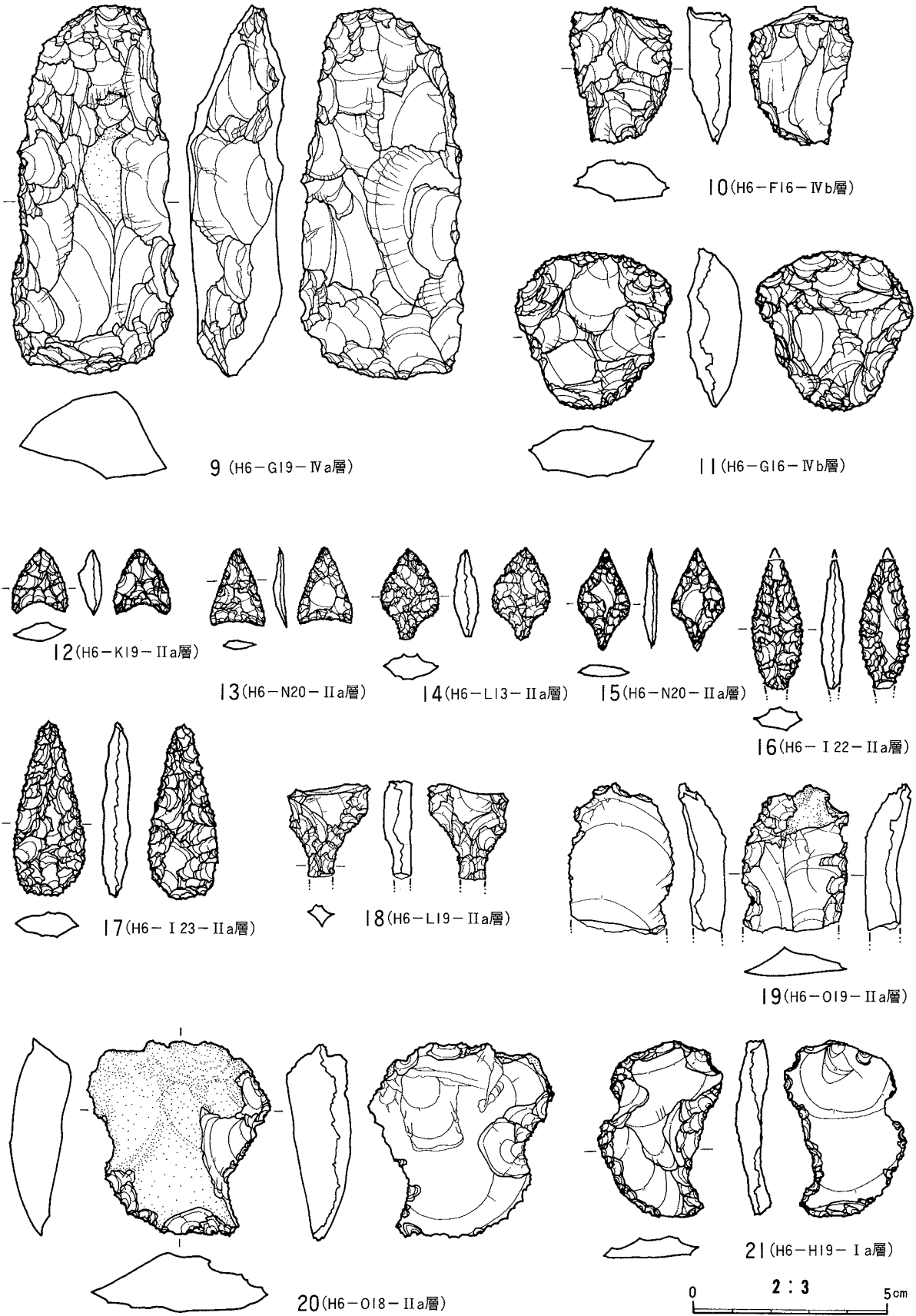
第221図 遺物包含層、遺構外出土土器(17)



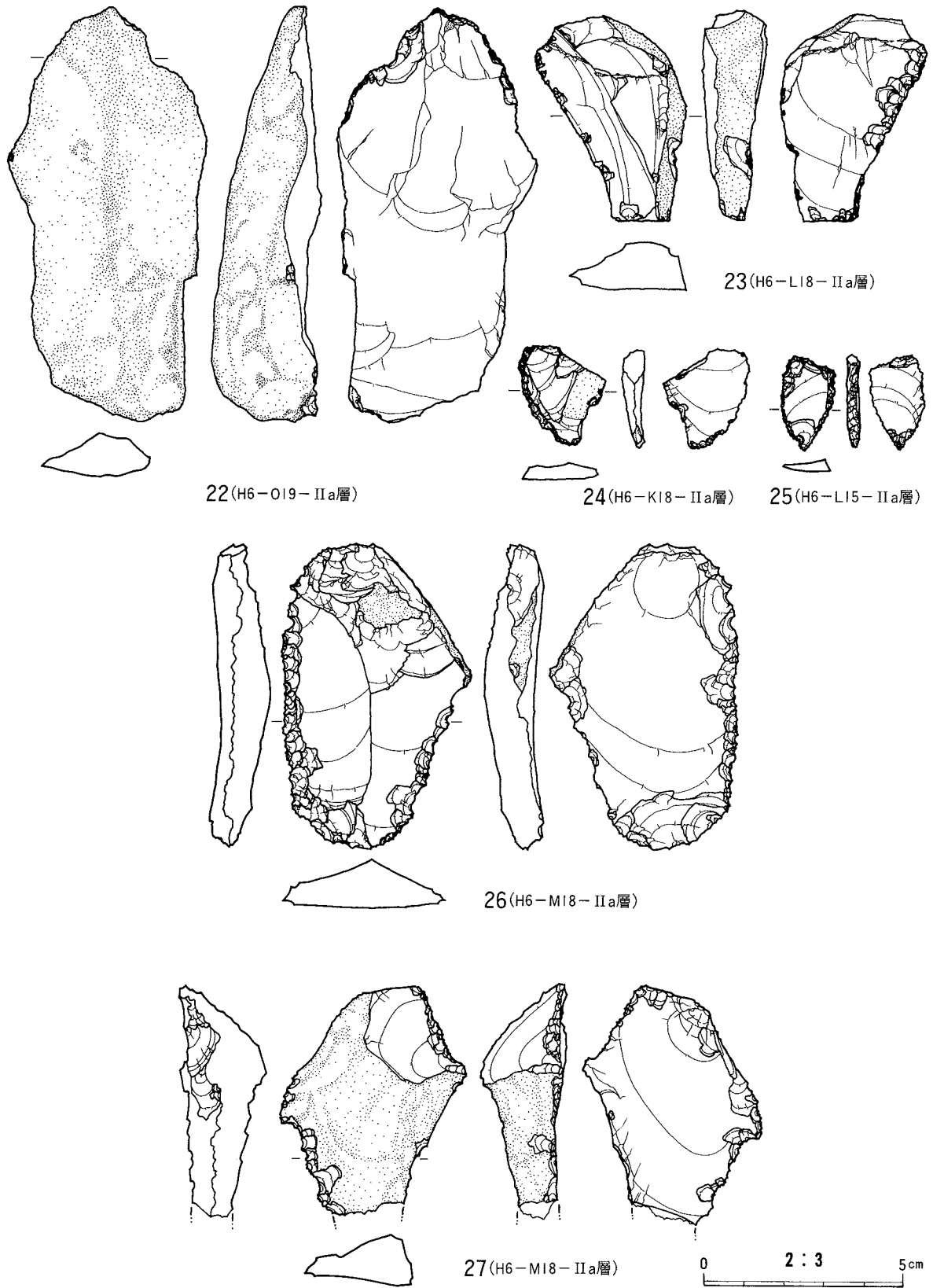
第222図 遺物包含層、遺構外出土土器(18)



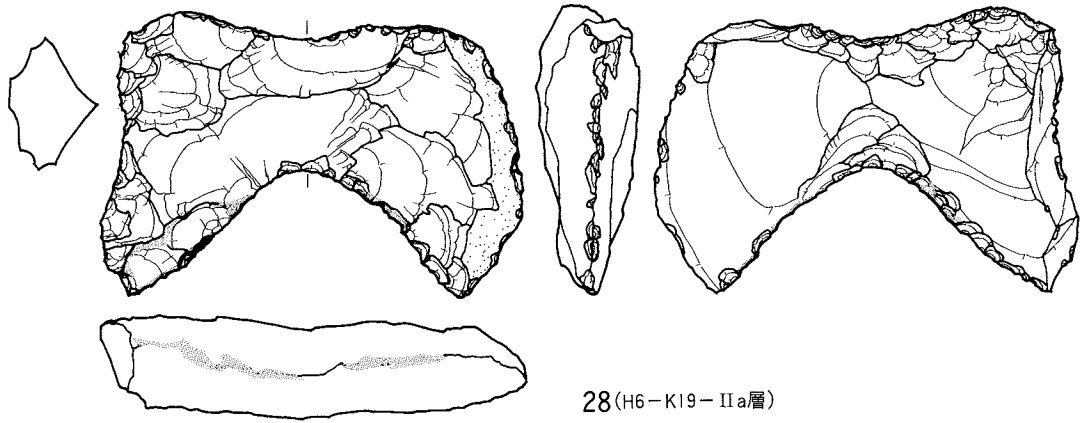
第223図 遺物包含層、遺構外出土石器(1)



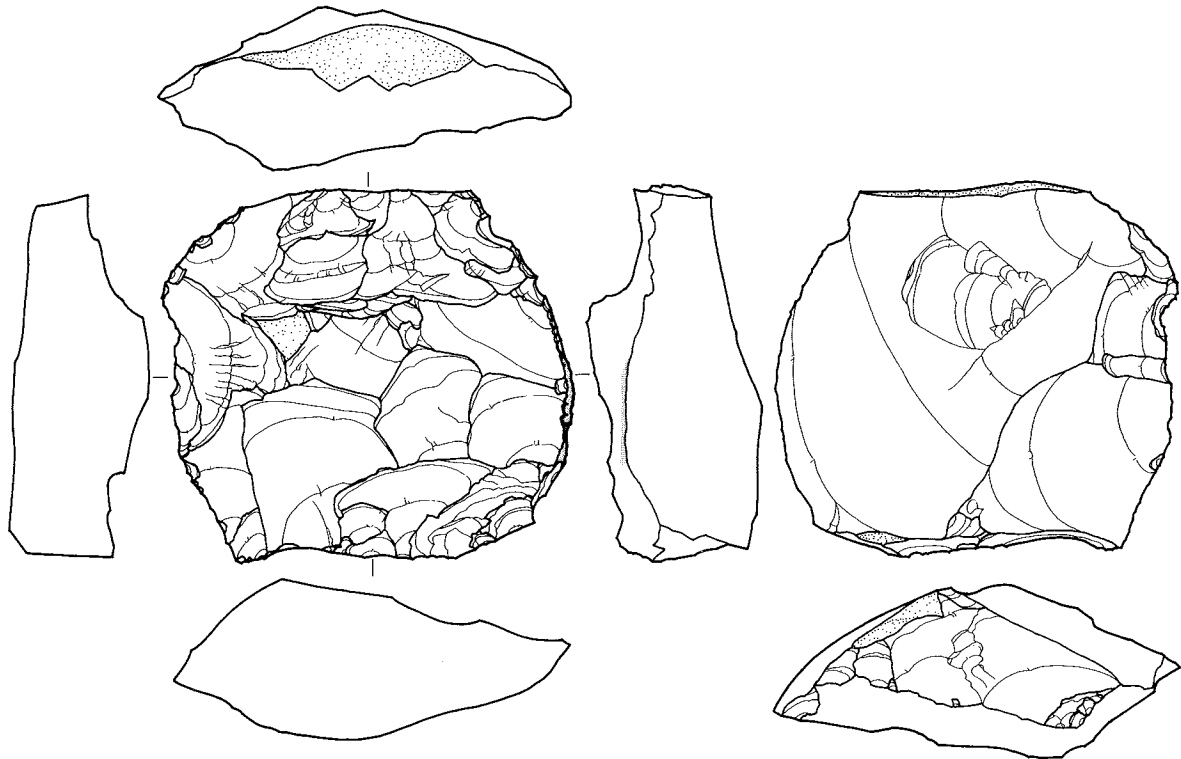
第224図 遺物包含層、遺構外出土石器(2)



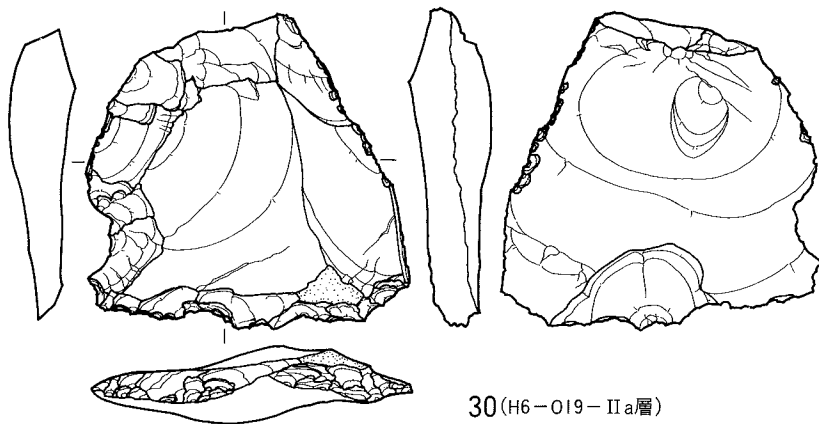
第225図 遺物包含層、遺構外出土石器(3)



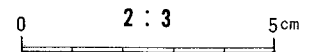
28(H6-K19-IIa層)



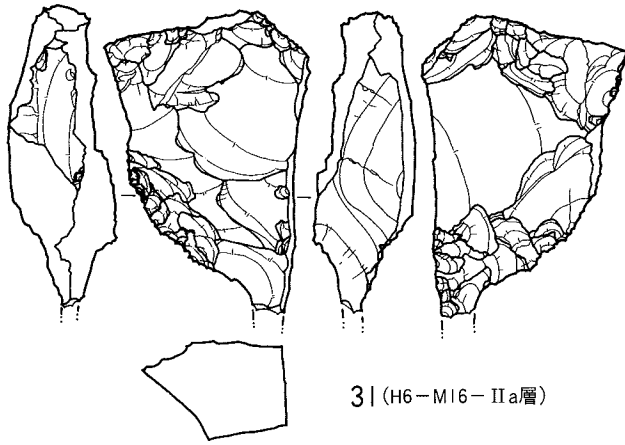
29(H6-J22-IIa層)



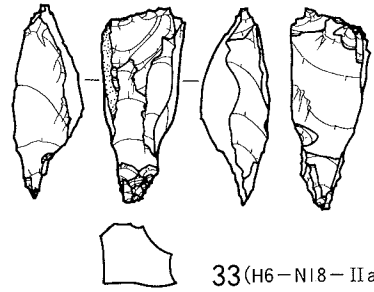
30(H6-O19-IIa層)



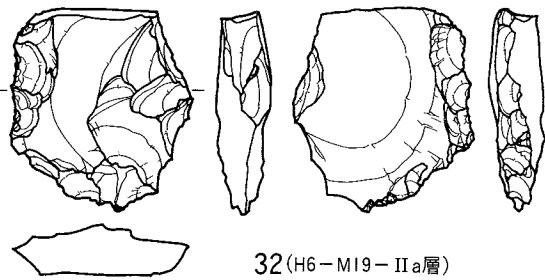
第226図 遺物包含層、遺構外出土石器(4)



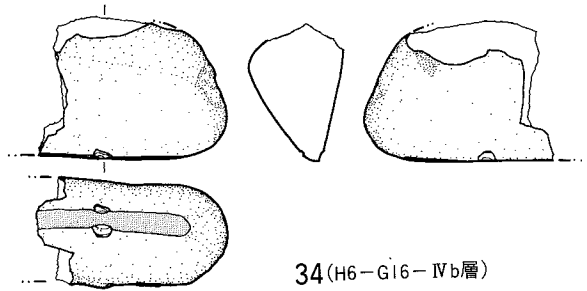
31 (H6-M16-IIa層)



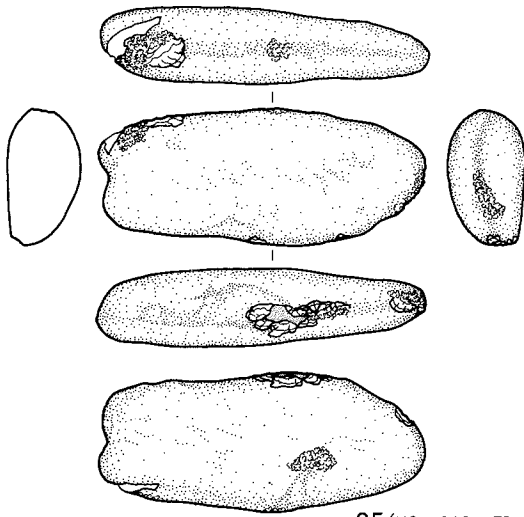
33 (H6-N18-IIa層)



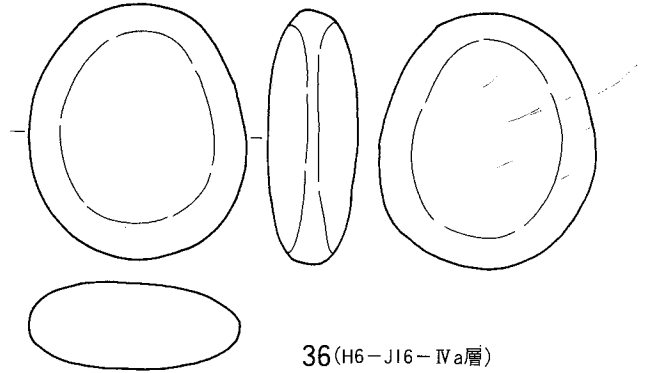
32 (H6-M19-IIa層)



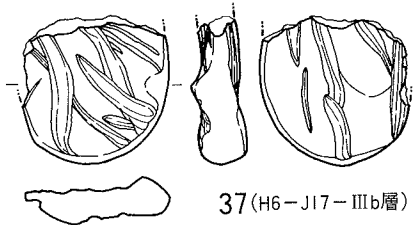
34 (H6-G16-IVb層)



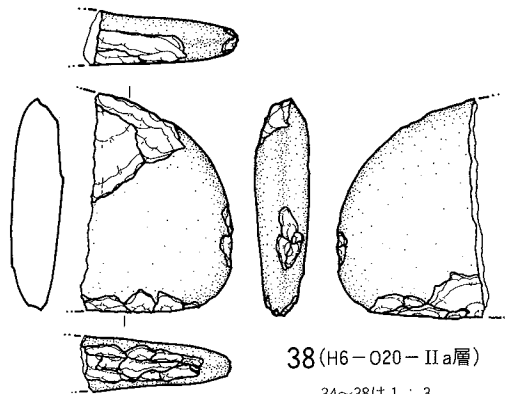
35 (H6-G19-IVa層)



36 (H6-J16-IVa層)

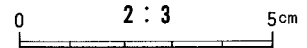


37 (H6-J17-IIIb層)

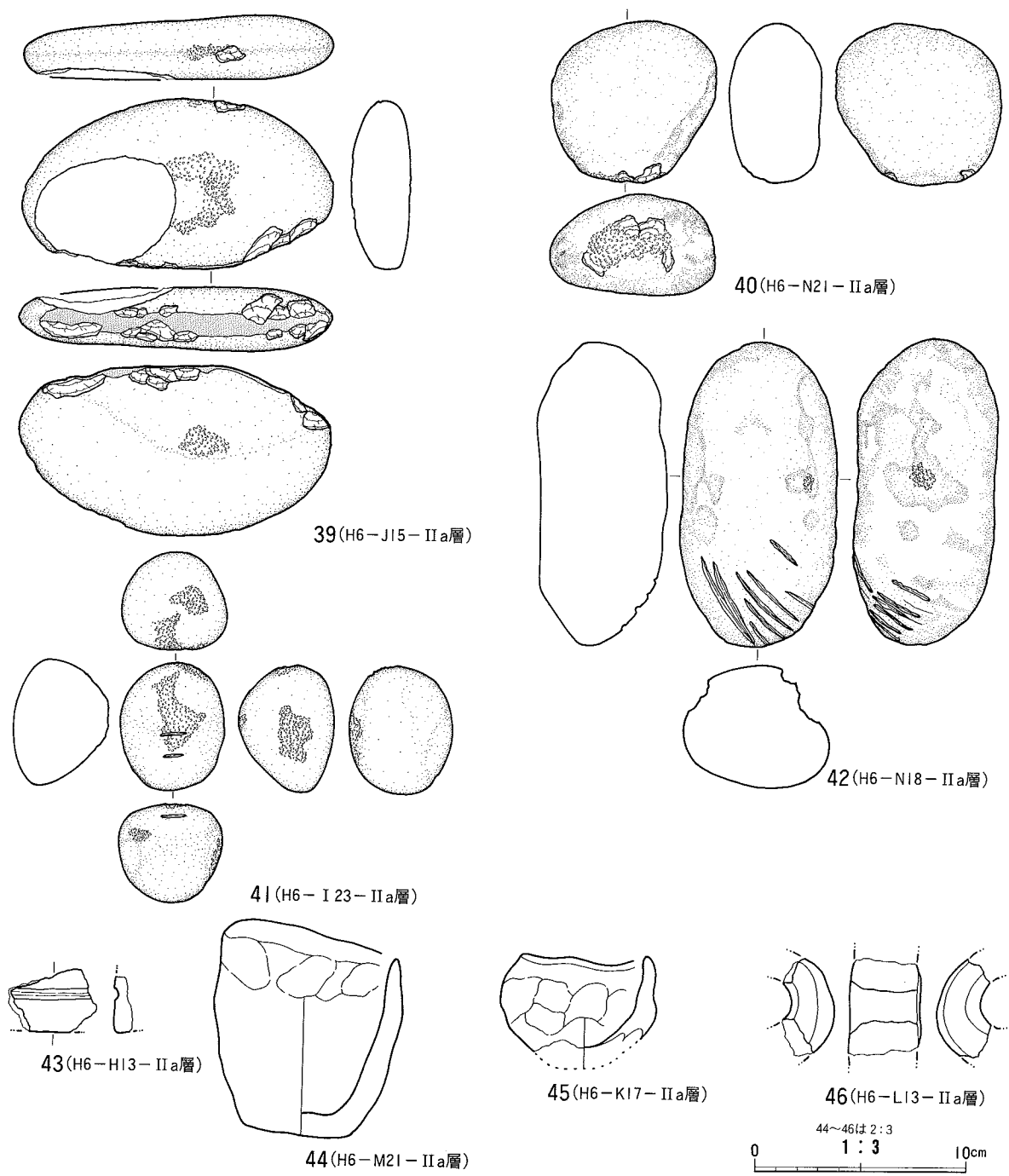


38 (H6-O20-IIa層)

34~38(1:3)



第227図 遺物包含層、遺構外出土石器(5)



第228図 遺物包含層、遺構外出土石器(6)・土製品

5. 調査のまとめ

(1) 検出遺構

今回、調査を実施した大館町遺跡は、縄文時代早期から晩期、さらに奈良時代から平安時代にいたる複合遺跡で、縄文時代中期（大木8a・8b式期）の集落を主体としている。

第54次調査で検出した遺構は、縄文時代早期の竪穴跡2棟（RE2201・2210）・土坑5基（RD2140・2142～2144・2150）、中期の竪穴住居跡33棟（RA2154・2185～2187・2189・2190・2192～2200・2202～2209・2212・2214～2222）・竪穴跡1棟（RE2188）・炉跡3基（RF2191・2213・2223）・土坑7基（RD2141・2145～2149・2151）、後期の土坑1基（RD2152）、奈良時代以降の溝跡2条（RG8706・8707）、及び縄文時代早期～中期を主体とした遺物包含層を検出した。

検出遺構

出土した遺物の総量は、遺物コンテナ（縦0.54cm×横0.34cm×深0.15cm）241箱で、約6.64㎡にのぼる。内訳は土器84.65%、石器13.69%、土製品・石製品が0.42%、古代の土器と他陶磁器などが1.24%となっており、縄文時代中期の遺物が主体を占める。

調査区は集落の南西部にあたり、集落の境界は南側が、54次調査区南端から約40m離れた第1・2・11・12次調査区の南半部、西側は未調査地区であるが約20m離れた低地が遺跡の境界となる。調査区内の微地形は北東側と南西側が若干高くなっており、北西側から南東側にかけて緩やかに傾斜している。調査区内の遺構の変遷（第229図）をみると、縄文時代早期の時期（A期）はRE2210が南東隅に位置する他は西端に集中している。

遺構配置

早期

中期前葉から中葉（大木7～8a式期・B期）のうち、調査区北東隅に集中して検出したRA2154やRA2219などの大木7式期以前の遺構は、隣接する第37次調査区では未検出である。さらに遺跡中央部で実施した52・53次でも土坑は存在するが、竪穴住居跡は未検出である。この希薄な分布状況は遺跡全域に共通するが、遺跡の中で最盛期を迎えた後続する時期の遺構により削平されたため、遺構埋土や包含層から大量に出土する遺物はこの状況を裏付けるものと考えられる。

中期前～
中葉前半

大木8a式期になると調査区内全域に展開する状況を示すようになる。遺跡全体を概観すると中央部ではやや希薄な状況を示し、むしろ遺跡の北側（第12次調査）や東側（第41次調査）に展開しているが、54次調査区ほどではない事から、今回の調査区付近が当該時期の中心とみる事が可能である。住居跡の平面形は8a-1式期段階ではRA2197・2199・2216にみられるように長方形～長楕円形を呈する大形の住居ものが多く、8a-2式期の段階に移行してRA2190・2208・2207・2214・2212のような円形を呈する住居跡が出現し、また棟数も増加している。

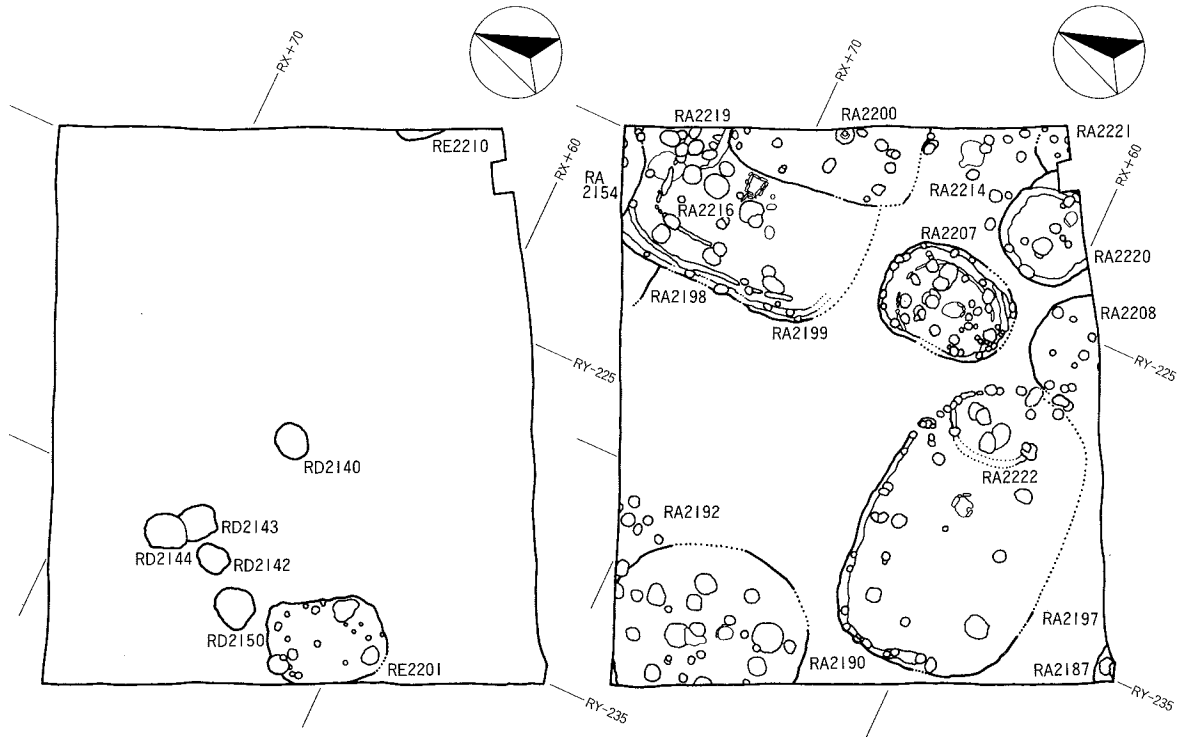
大木8b-1・2式期（C期）になると、調査区南西部に遺構が集中する傾向がみられる。8b-1式期では検出遺構はさほど多くないが、住居跡の平面形は、RA2202・2218にみられるように、8a式期段階を踏襲しつつも、比較的小さな規模を呈する遺構が多い。8b-2式期段階では後続する遺構により切られるため平面形は不明であるが、RA2193・2194のように規模の大きな住居跡とともに小規模で円形を呈するRA2203も存在し、8a式期の集落構成と基本的には変化しないものと看取できる。

中期中葉
～後半(1)

大館町遺跡第54次調査検出遺構の時期

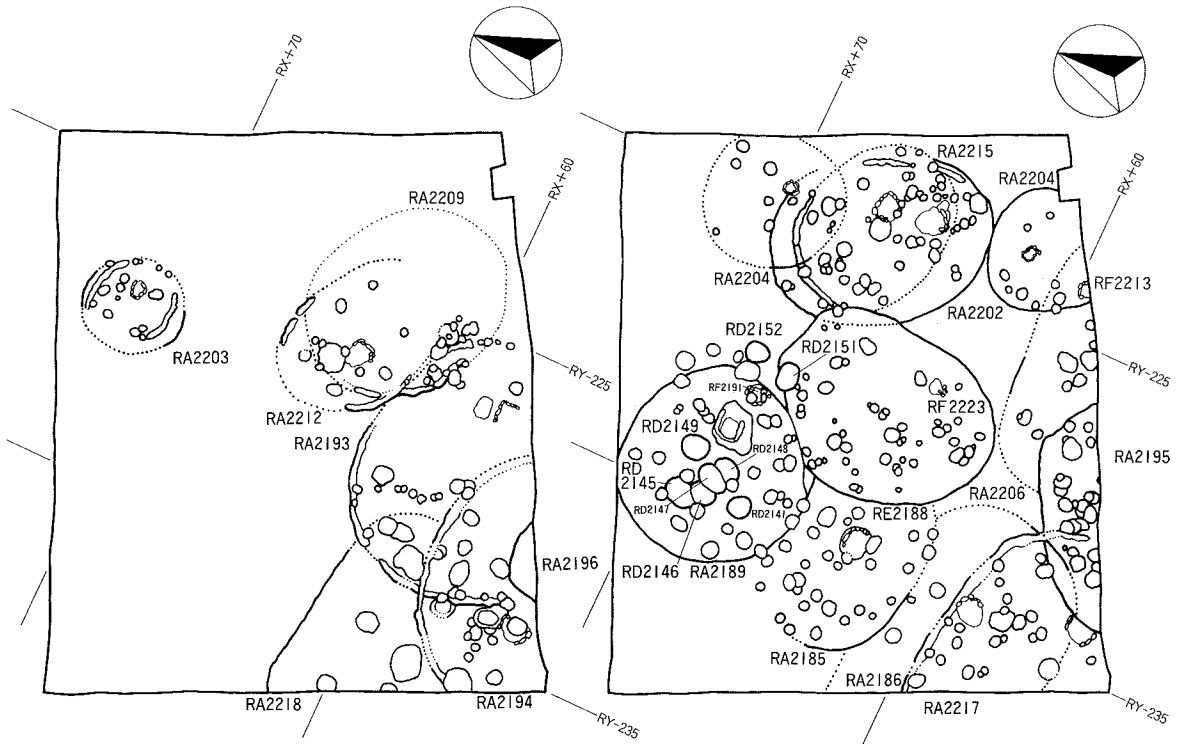
※（ ）は想定時期

縄文時代早期 前～中葉 (白浜式類似)	縄文時代中期 前葉 (大木7式)	縄文時代中期 中 葉 (大木8a-1式)	縄文時代中期 中 葉 (大木8a-2式)	縄文時代中期 後 半 (大木8b-1式)	縄文時代中期 後 半 (大木8b-2式)	縄文時代中期 後 半 (大木8b-3式)	縄文時代後期 前 葉 (門前式)	奈良時代 前～中葉 (国分寺下層式)
						RA2185		
	RA2154	RA2199	RA2190			RA2186		
					RA2193			
			RA2192			RE2188		
	(RA2219)				RA2194	RA2189		
	(RA2197)		RA2200			RA2195		
RE2201					RA2203			
			RA2208			RA2202		
	(RA2198)					RA2204		
			RA2212			RA2205		
				RA2196		RA2206		
RE2210	(RA2216)		RA2220			RA2215		
		(RA2187)				(RD2141)		
			(RA2209)			RA2217		
	(RA2222)					(RD2145)		
RD2140		(RA2207)				(RD2146)		
RD2142						RF2191		
						(RD2147)		
RD2143			(RA2218)			RF2213		
		(RA2214)				(RD2148)		
RD2144						RF2223		
						(RD2149)		(RG8706)
RD2150							RD2152	
		(RA2221)				(RD2151)		(RG8707)



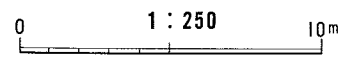
A 期 (早期)

B 期 (前期～中期中葉(1)・大木7・8 a 式期)



C 期 (中期中葉(2)・大木8 b - 1・2 式期)

D 期 (中期後半・大木8 b - 3 式期)



第229図 検出遺構時期別変遷

遺構名	平 面 形 等				新 新
	平 面 形	炉	埋設土器	柱穴配置	
RA2154	楕円形	石囲炉1、地床炉1	なし	8角形8本	2199
RA2185	長楕円形	石囲炉1、埋甕炉1	なし	亀甲7本	2188・2189
RA2186	楕円形	石囲炉1、埋甕炉1	なし	6角形6本	
RA2187	不明	不明	なし	不明	2194・2217
RE2188	不整楕円形	なし	なし	亀甲6本	2223
RA2189	円形	石囲炉	1	8本	2188・2191
RA2190	円形	石囲炉1、地床炉1	なし	9本	2185・2189
RF2191	—	石囲炉	炉内1	—	
RA2192	不明	不明	なし	不明	2189・2190
RA2193	楕円形	石1・地1・埋甕1	なし	亀甲6本	2185・2186・2188・2193・2194・
RA2194	不明。楕円形か	不明	なし	7～8本	2186・2195・2217
RA2195	隅丸方形	不明	なし	6～8本	2186
RA2196	方～長方形	不明	なし	不明	2193・2195・2217
RA2197	隅丸長方形	石囲炉	なし	7～8本	2185・2186・2188・2193・2117・
RA2198	不明	不明	なし	不明	2199・2203
RA2199	長方形	石囲炉1・地床炉1	なし	正方8～9本	2200・2202・2203・2204・2215
RA2200	長方形	石囲炉	なし	正方8本	2202・2204・2215
RE2201	長楕円形	なし	なし	不規則	2185・2186・2197・2217・2218
RA2202	楕円形	複式炉	なし	亀甲6本	2188・2204・2215
RA2203	円形	石囲炉	なし	正方4本	
RA2204	円形	石囲炉	なし	不規則	
RA2205	円～楕円形	石囲炉	床1	不規則	2206
RA2206	方形	不明	なし	不明	2195・2213
RA2207	楕円形	石囲炉	なし	長方形4本	2188・2202・2205・2215
RA2208	円～楕円形	石囲炉	なし	不規則	2195・2193・2205・2206
RA2209	楕円形か	石囲炉	なし	不規則	2188・2202・2205・2215
RE2210	不明	なし	なし	不明	2214
RA2212	楕円形	石囲炉	1	6本	2188・2193・2202・2205・2215・
RF2213	—	石囲炉	—	—	2206
RA2214	不明	地床炉	なし	不規則	2202・2205・2215・2220・2221
RA2215	楕円形	石囲炉	1	亀甲6本	2188・2204
RA2216	長方形	不明	なし	4～8本	2199・2200
RA2217	楕円形か	石囲炉	なし	6本	2186・2195
RA2218	長方形	地床炉	なし	9本	2186・2193・2194・2195・2217
RA2219	方～長方形	石囲炉	なし	不明	2154・2199・2216・2200
RA2220	長楕円形	石囲炉	なし	長方形4本	2205・2213
RA2221	不明	不明	なし	不明	2220
RA2222	不明	地床炉	なし	不明	2193・2197
RF2223	—	石囲炉	—	—	

※RD2140・2142・2143・2144・2150(早期)、RD2141・2145・2146・2147・2148・2149・2151(中期)、RD2152(後

表4 大館町遺跡第54次調査検

遺構名	旧 関 係		遺構時期
	旧	同時期	
	2219		大木7
	2190・2193・2197・2201・2218、RD2142・2143・2150	2188・2189が新	8b-3
	2185・2193・2194・2195・2197・2201・2218	2185・2195が新	8b-3
			8a-1
	2185・2193・2197・2199・2207・2212・2222、RD2140・2151	2185が古、2223新	8b-3
	2185・2190・2192、RD2141・2143～2149	2185古、2188・2191新	8b-3
	2192・RD2142・2150	2192が古	8a-2
	2189	2189が古	8b-3
			8a-2
2206・2209	2196・2197・2207・2208・2212・2218・2222		8b-2
	2193・2187・2218	2193が古	8b-2
	2193・2194・2196・2208・2217	2217が古、2186が新	8b-3
			8b-1
2218	2201・2222	2222が古	8a-1以前
			8a-1以前
	2154・2198・2216・2219		8a-1
	2199・2219		8a-2
			早期
	2199・2200・2207・2212	2188・2204・2215新	8b-3
	2198・2199		8b-2
	2199・2200・2202・2215・2216・2219	2202・2215古	8b-3
	2207・2208・2212・2214・2220・2213	2206が新	8b-3
	2205・2208	2205・2213古、2195新	8b-3
		2212新	8a-2以前
			8a-2
	2193・2207・2211・2212		8a-2-8b-1
			早期
2223	2207	2207古、2209新	8a-2
	2220	2206が新	8b-3
	2210	2221が新	8a-2以前
	2199・2200・2202・2207・2212	2202古、2204・2188新	8b-3
	2219		8a-1以前
	2187・2193・2194・2196・2197・2201・2218	2186・2195が新	8b-3
	2197・2201・2209	2209が古	8a-2-8b-1
			7以前
	2221		8a-2
	2214	2214が古	8a-2以前
		2197が新	8a-1以前
	2188	2188古	8b-3

期)、RG8706・8707(奈良時代以降)

出竪穴住居跡・竪穴跡等一覧

中期中葉～後半(2) 大木8b-3段階(D期)は最も検出遺構が多く、調査区内全域に展開するが、遺跡全体では少なく当該地区とこの南側の地区(第40・52・53次)など特に南半部に多い検出した遺構は既に表土や後期の遺物包含層によって削平されているが比較的残存状況は良好である。また、住居跡や竪穴は深く構築されているため、当該時期以前の遺構を大きく削平している。遺構の平面形はRA2189・2204・2205・2215のように円形を呈する住居跡とRA2185・2186・2195・2202・2206・2217、RE2188のように楕円形を呈する住居跡と複合している。なお、検出した土坑のうち、RD2141・2145～2149・2151の7基は、いずれも8b-3式期の住居に切られまとまった配置を示す。

後期の遺構はRD2152の1基を検出した。同じ後期の遺物包含層を掘り込んで構築しているが、本遺跡では竪穴住居跡など明確な居住施設は未検出である。

古代の遺構は奈良時代以降の溝跡(RG8706・8707)2条を検出した。

54次調査区は、縄文時代中期の環状集落の南西隅に位置し、中期の竪穴住居群が濃密な地区である事を確認するとともに、集落構造を知る上で貴重な情報を提供した。また、早期中葉の貝殻文土器を伴出する遺構は、これまで土坑は検出されていたが、竪穴跡は本遺跡で初めて確認したものである。これらの遺構群の検出は、この地域の縄文時代早期～中期の集落構造を考える上で重要な成果であるが、集落の中央部を対象とした第52・53次調査成果の検討を踏まえ、集落全体の構造を解明することが今後の課題となっている。

(2) 出土土器

大館町遺跡第54次発掘調査区からは、縄文時代中期の大木8a～b式期の遺構・遺物を中心に縄文時代草創期から晩期までの各時期、古代の土器が出土している。

- 草創期** 遺構外より爪形文土器が2点出土している(第210図136・137)。器面に対し右傾の米粒状文を斜位刺突したものを横位多段に施文する。昭和62年度調査でも近似する土器片が出土しており、施文方法に多くのバリエーションをもつ大新町遺跡例とは若干異なる様相を呈する。
- 早期** 包含層及び遺構埋土より多量の遺物が出土している。内容は早期前葉の日計式に類似した押型文土器群(第205図1～8, 11～20, 33, 第208図81～85, 第210図140～157, 160)、沈線による带状格子目文・带状文を特色とした三戸式類似の沈線文土器群(第208図86, 第210図158・159・161・162)、口唇部にD字状の刻目をもち、爪形状刺突・横位平行沈線を多用し、横位の撚糸文も併用する白浜式類似の貝殻文土器群(第205図21～25, 第207図73～77, 第208図87～93, 第210図)、表裏に条痕を施し、沈線・刺突・細隆起線・絡条体圧痕による文様を施すムシリI式類似の条痕文土器群(第205図26～32, 第206図47～55, 第207図56～69・78, 第208図95～116, 第211図181～204, 第212図205～226)などの土器が出土している。
- 前期** 前期の遺物は、繊維を多量に混和する「繊維土器」が大半である(第206図34～46, 第207図70～72・80, 第209図117～135, 第213図227～260)。繊維土器群の多くは、所謂「ぴっちり縄文」であるが、単節LR原体を強く振る(撚る)ことによって節が交互に並ぶ。その原体を回転施文すると所謂「組紐縄文」様の文様が施される。これが全てではないが、この時期の原体については今後の課題として残されるものであろう。
- 中期** 遺構及び包含層から多量に出土している。主体となるのは大木8a～8b式期であるが、8b-

1・2式は量的に多くない。ここでは堅穴住居跡出土の大木8b式について若干の説明をする。

昭和55年度発掘調査で検出されたRA102堅穴住居跡出土土器は、埋土からの層位的出土状況から大木8b-1式期(C・D層)、8b-2式期(A・B層)に細分され、その後遺跡や周辺の調査でもあらためて確認されている。

大木8b
式 期

RA102堅穴住居跡C・D層出土の土器は大木8a式に近似しているながらも、キャリアー形深鉢などの口縁部文様・体部文様帯に多くの変化が認められるものであった。口縁部文様帯は8a式段階が隆線・隆沈線などによる波状文・波頂部に小渦巻文が加飾される波状文が主体的であるのに対し、8b-1式期は波状文を多用せず、渦巻文を端に加飾する横位展開による隆線状の文様を施す。また渦巻文には棘をもつものが多い。体部は横位平行沈線による文様区画が頸部付近で見られ、体部は横位平行沈線より底部にかけて垂直の沈線が施されるようになる(第20図15)。

8b-1
式 期

8b-2式期段階になると短い隆沈線などで文様を連結・区画させるようになり、連結部は楕円状の区画になる。体部の文様帯には、沈線による大胆な渦巻文が描かれるようになり、精製された土器品に関しては隆沈線で渦巻文など主体となる文様を施す(第77図1)。

8b-2
式 期

口縁部が膨らみ内湾する深鉢で口縁が大きく外反して屈曲し、外反部が無文となる小形深鉢が主体となる段階。文様は隆沈線が多用され、体部に主体となる文様が施される。渦巻文は有棘のものも多く、体部中央付近に施された大渦巻文を中心に、連結する小渦巻文を施す(第131図1)。

8b-3
式(古)

RA2195・2215堅穴住居跡埋土より時期差を示すと思われる土器群が出土している。RA2195堅穴住居跡A2層より下層からは前述した大木8b-3式期の土器が出土し(第178図1~11)、A1層からは渦巻文が退化し、縦位の文様帯内に小渦巻文・楕円文などが収められる大木8b-3式期(新)が出土している(第179図14~18)。RA2215堅穴住居跡ではB層を境に下層より大渦巻文を配さず、小渦巻文のみで文様帯を構成する大木8b-3式期(第191図1~12)、上層に大木8b-3式期(新)が含まれる(第192図14~16・18・22~26)。また大木8b-3式期新段階では縦位の文様帯が簡略化し、逆U字状の文様を描くものも現れる(第192図22)。

8b-3
式(新)

盛岡市内における大木8b-3式期新段階の集落としては、雫石川南岸に位置する猪去館遺跡、中津川・米内川合流点付近に位置する柿ノ木平遺跡がある。特に猪去館遺跡は単独集落であるほか、住居跡床面・埋土より多量の土器が出土するなど、大木8b-3式期新段階の単独時期を考える上で重要な成果が得られている。

市内の
遺 跡

盛岡市内には大館町遺跡をはじめ数多くの縄文時代中期の集落が発見されている。しかしその多くは、多時期にわたる激しい重複により単時期の集落構造がつかめない状況であるのが実情である。ひとつの方法としては、各堅穴住居跡より出土する土器を細分化することが考えられるであろう。土器の所属時期から個々の堅穴住居跡等の所属時期を明らかにし、得られた情報から集落構造・変遷を捉えることが必要である。そのためにも、将来的には継続的に営まれる縄文時代中期集落として個々の遺構の変遷と遺物包含層の層位的区分が明確であり、かつ遺構・遺物量が多い大館町遺跡を基準とした土器編年作業が必要となるであろう。

土器細分
の必要性

遺物包含層より口縁が波状を呈し、口縁に沿って隆帯を襷状に施す土器が出土しているが、出土量が少ないため時期の言及は控える。

後 期

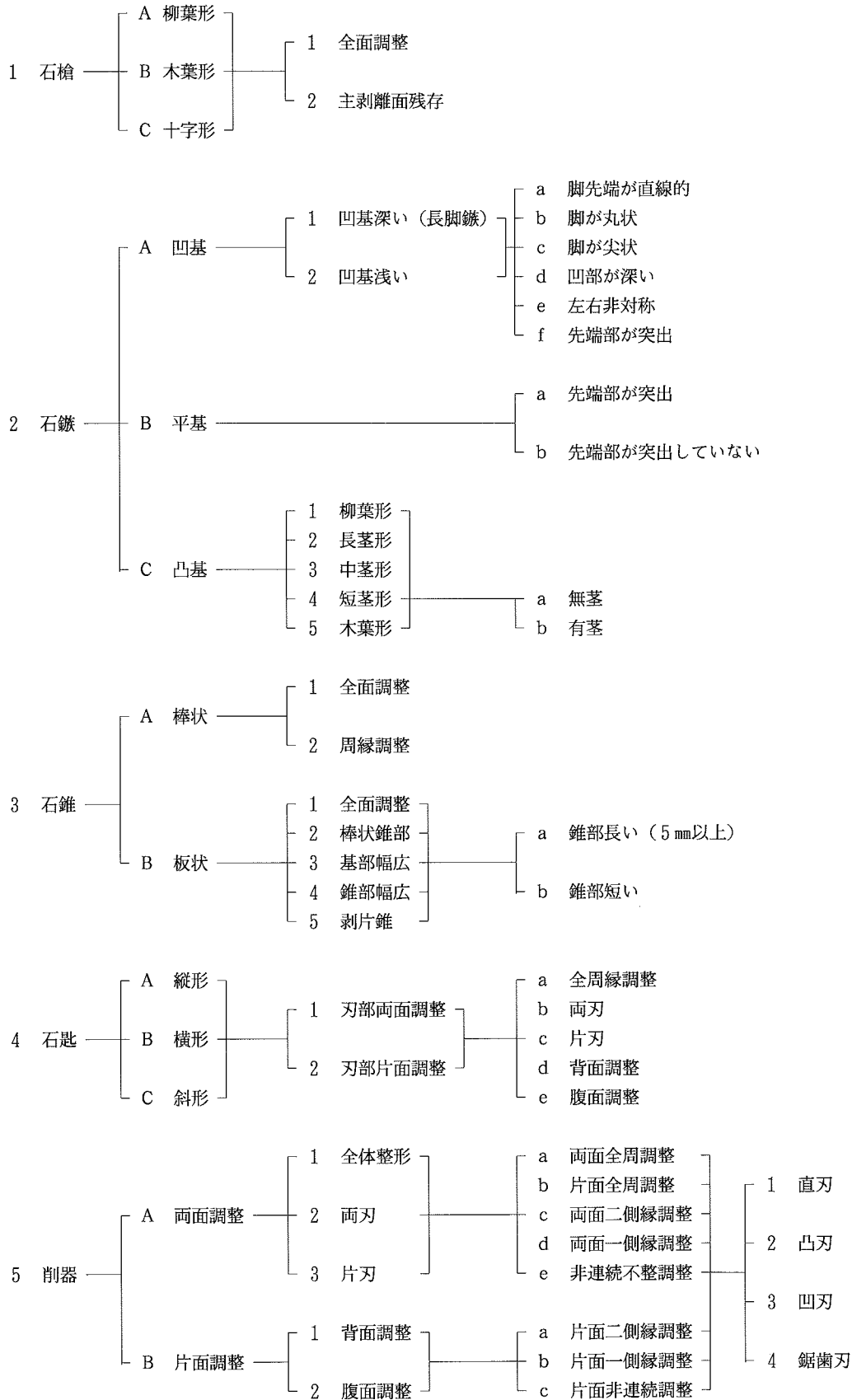
遺物包含層よりクランク状羊歯状文が施される小形鉢が1個体出土している。遺跡群全域でも晩期の出土遺物は少なく、遺構の検出は皆無である。

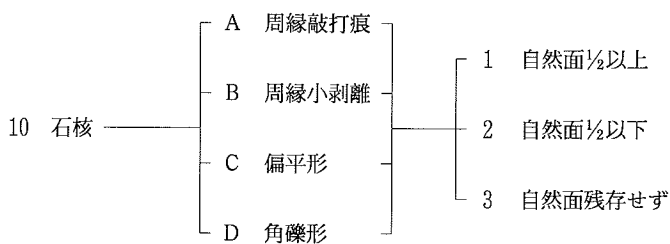
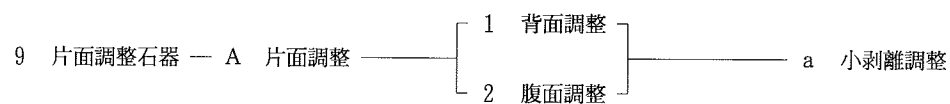
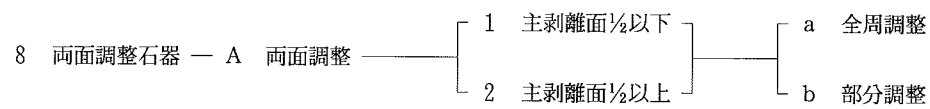
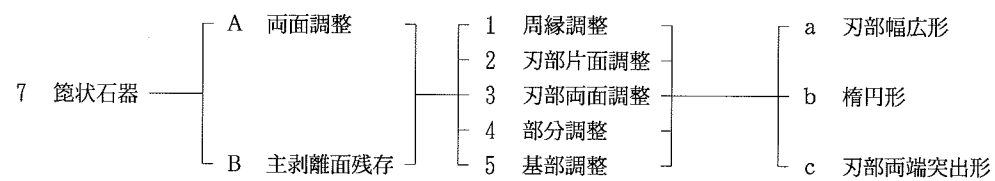
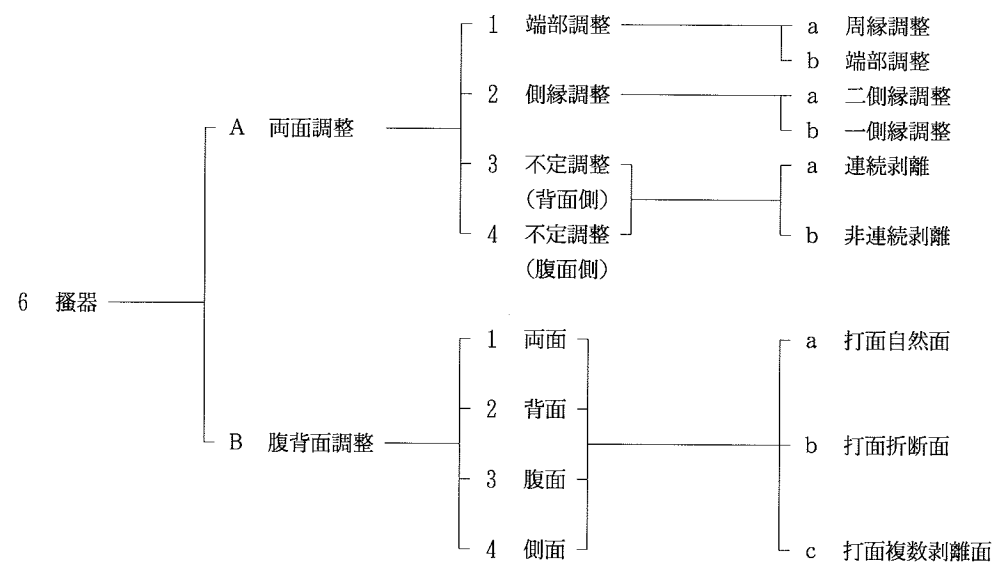
晩 期

(3) 出土石器

- 石 槍** 今回の出土石器の特徴を器種ごとにまとめると、以下のように概観できる。まず、石槍については、形状の異なる2点の出土があった。RE2188出土の石槍は若干腹面に古い剥離を残すものの、ほぼ両面調整され細かい剥離で全面が覆われている。先端部への調整は他の部分に比べて入念であり、基部は凸基で茎部との境は明瞭ではないが、やや幅狭に調整が施されている。対してRA2202の石槍は茎部を作出したナイフ状の尖頭器で、石器の機能としての槍先よりも短い茎に装着した剣の想定が考えられる。
- 石 鏃** 石鏃に関しては、量的な事柄について、凹基・凸基が多く平基が少ない。これは、これまでの大館町・大新町遺跡発掘調査における傾向と同様である。とりわけ平基有茎鏃は1点のみの出土で、過去の出土例でも極端に少ないことが挙げられる。凹基の石鏃はすべて無茎であり、また基部の抉れ方は様々である。逆刺が発達しているものや、脚部の末端が鋭いものは少ない。凹基のもので特徴的なものとしては、破損しているものの基部が根ばさみ状のものが出土した。凸基有茎鏃には、アスファルトの付着しているものが多い。石鏃の平面形については、左右非対象形の形態が数点ある。
- 石 錐** 石錐は、素材剥片の形状をあまり変えずに末端部から比較的短い錐部を作出するものと、つまみ部も調整を施し、長い棒状の錐部をもつものとの2種類に分けられる。前者は錐部が破損しているものが多く、そのため摩滅痕はあまり観察されない。後者はつまみ部の調整から、直接手に持って使う石器と考えられる。
- 石 匙** 石匙は縦型・横型を問わず、つまみ部以外は背面のみの調整のものが多い。背面調整が器面中央部まで及んでいるものは、刃部調整が急斜度で搔器様を呈する。つまみ部が破損しているものが数点見られるが、その薄さが原因と考えられる。
- 削器・搔器** 削器・搔器は最も多く出土しており、形状そのものや刃部形態などからさらに細分することは可能であり、そのような分類を通じて理解も深まることと思われるが、今後の課題としたい。
- 石 核** 石核の出土は少なく、石器の量的なボリュームを考えると不釣り合いであるが、剥片や使用痕のある剥片の多さや、出土した剥片石器の大きさ・バラエティを考慮すると、大館町遺跡という集落のなかで、盛んに石器製作が行われたことを示すと思われる。
- 敲打磨石** 礫石器は敲打磨石の形状のバラエティをまず指摘できる。断面形が三角形のものは素材礫の形状に大きく左右されているため機能磨面1面のものがほとんどで、縄文時代早期に特徴的な機能磨面が複数面ある敲打磨石とは事情が異なっている。最も多いのは扁平礫を素材としたもので重量もある。また、角礫の稜線上を機能磨面として使用したものも出土し、これも使用により機能磨面の幅が広がり、断面形が多角形になる種類のものとは区別される。
- 石 皿** 石皿は縁が形成され、断面形が弧状を呈するものが多い。
- 石 錘** 特別な分類は行っていないが、礫石錘の出土も特記に値すると思われる。両端の打ち欠きによる抉れはいずれもあまり発達してはいない。
- 敲 石** 敲石は大きさの大小を含め、さまざまな形態のものが出土した。片手で使用するには過重量のものや、石器全面に使用痕跡が観察されるものなどである。敲石・凹石・磨石はその使用痕跡が重複して各器種に残されていることが多いので、分類上不都合な点は修正する必要がある。

◎石器の形状分類について



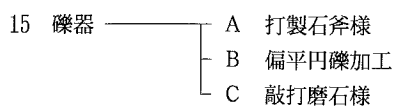


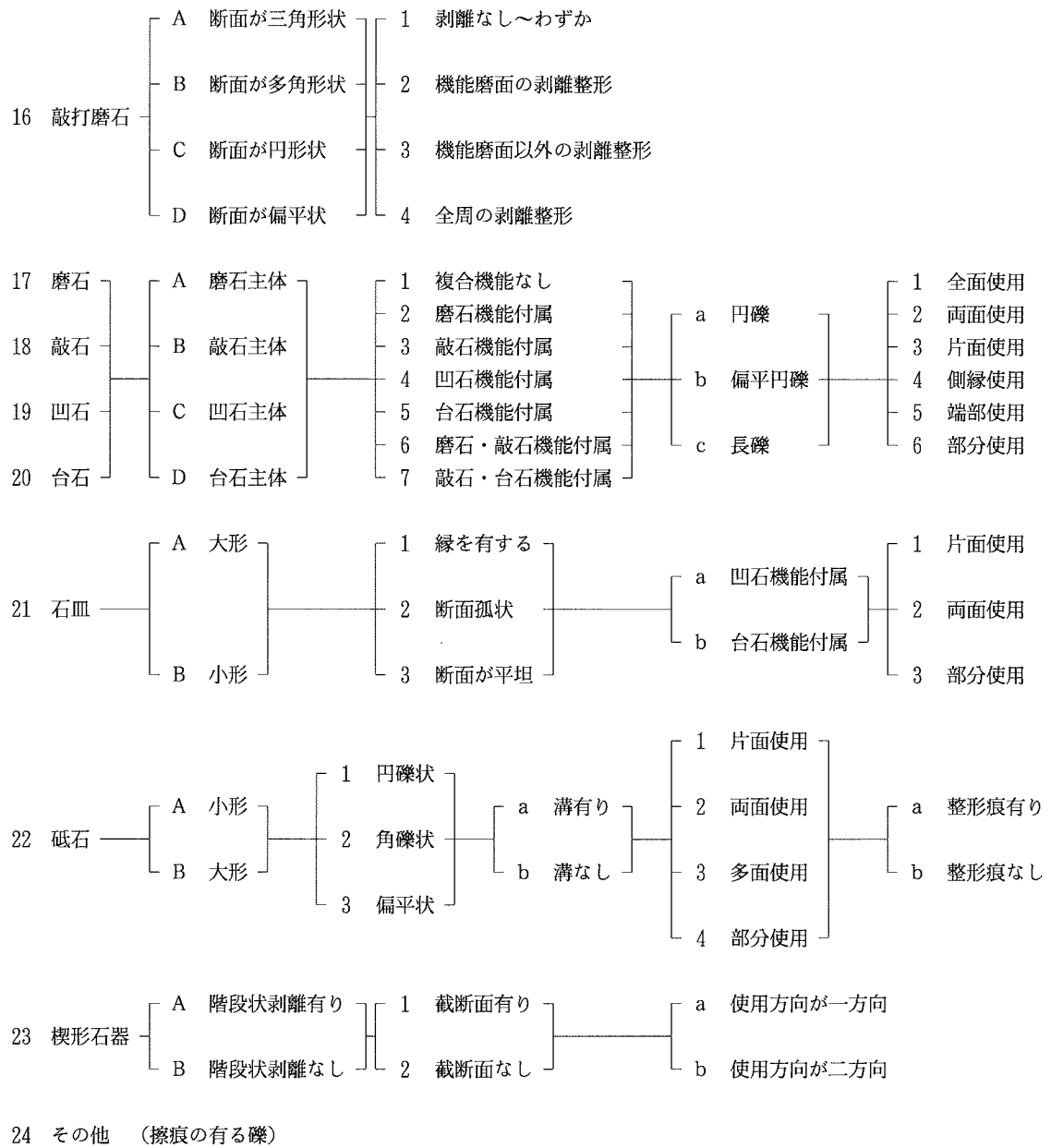
11 磨製石斧

12 打製石斧

13 石鋤

14 石錘





※()は欠損、破損を表す

挿 図	遺 構	層位・施設	長さ (mm)	幅 (mm)	重量 (g)	器 種	分 類
9- 56	R E2201	床	32	63	15.3	削器	5A3e2
9- 57	R E2201	C ₁	33	18	1.6	石鏃	2A2a
9- 58	R E2201	B ₁	30	13	1.8	石鏃	2A2a
9- 59	R E2201	A ₁	36	36	11.9	搔器	6A1b
14- 15	R A2197	床	47	37	17.0	搔器	6A2a
14- 16	R A2197	B ₁	42	13	1.9	石錐	2C1
14- 17	R A2197	B ₁	(43)	(28)	10.5	石錐	3B5b
14- 18	R A2197	B ₁	(25)	12	2.0	搔器	6A2b
14- 19	R A2197	B ₁	21	18	3.1	楔形石器	23
14- 20	R A2197	B ₁	59	93	31.9	石核	10D1
15- 21	R A2197	A ₁	(16)	16	1.0	石鏃	2A2a
15- 22	R A2197	A ₁	40	27	8.5	石匙	4B2c d
15- 23	R A2197	A ₁	60	27	13.6	石匙	4C2c d
15- 24	R A2197	A ₁	(48)	23	6.0	石匙	4A2c
15- 25	R A2197	A ₁	(54)	(33)	22.8	籠状石器	7A3b
15- 26	R A2197	石囲炉	(327)	(87)	2337.7	敲石	18B1c5
15- 27	R A2197	ピット 8	85	170	596.3	敲打磨石	16D23
16- 28	R A2197	ピット25	103	63	153.6	凹石	18B1b25
16- 29	R A2197	周溝	11	235	114.7	敲石	18B1c5
16- 30	R A2197	B ₁	(80)	(67)	449.3	磨石	17A1a1
16- 31	R A2197	B ₁	105	86	147.5	砥石	22A3a2b
16- 32	R A2197	A ₁	47	35	43.3	磨石	17A1b1
16- 33	R A2197	A ₁	83	189	851.9	敲打磨石	16D1
19- 5	R A2198	B ₁	55	37	31.8	両面調整石器	8A1b
19- 6	R A2198	A ₂	(17)	11	0.2	石鏃	2A2b
19- 7	R A2198	A ₂	47	33	8.5	削器	5B1a1
24- 41	R A2199	ピット16	40	32	10.5	削器	5A2c4
24- 42	R A2199	ピット27	69	50	57.5	削器	5A2e1
24- 43	R A2199	C ₁	53	27	9.6	削器	5A2d4
24- 44	R A2199	B ₁	(30)	28	5.6	削器	5B1b4
24- 45	R A2199	B ₁	74	32	34.7	削器	5A2d2
24- 46	R A2199	B ₁	43	13	5.6	楔形石器	23
24- 47	R A2199	B ₁	72	34	39.2	籠状石器	7A5b
25- 48	R A2199	B ₁	83	36	29.1	籠状石器	7B2b
25- 49	R A2199	B ₁	47	31	46.1	石核	10D1
25- 50	R A2199	A ₁	37	15	1.8	石鏃	2A1c
25- 51	R A2199	A ₁	16	12	0.7	石鏃	2C5a
25- 52	R A2199	A ₂	(24)	14	1.6	石鏃	2C5b
25- 53	R A2199	A ₂	27	23	2.4	削器	5A3e2
25- 54	R A2199	A ₁	68	45	55.0	削器	5B2b4
25- 55	R A2199	A ₂	(38)	13	3.8	削器	5A1a4
25- 56	R A2199	A ₂	40	35	12.3	削器	5B1a2
25- 57	R A2199	A ₁	(40)	32	8.9	削器	5B2b4
26- 58	R A2199	A ₁	79	65	159.9	搔器	6A2a
26- 59	R A2199	A ₁	51	51	30.6	搔器	6A2a
26- 60	R A2199	A ₂	20	13	2.5	楔形石器	23

表 5 大館町遺跡第54次調査遺構出土石器一覧(1)

※()は欠損、破損を表す

挿図	遺構	層位・施設	長さ(mm)	幅(mm)	重量(g)	器種	分類
26- 61	RA2199	A ₂	60	55	131.7	石核	10D1
27- 62	RA2199	床	63	(113)	186.6	敲打磨石	16D2
27- 63	RA2199	床	(416)	(210)	2689.5	石皿	21A1a2
27- 64	RA2199	石囲炉	118	135	1394.9	磨石	17A3b6
27- 65	RA2199	B ₁	(146)	58	489.9	磨製石斧	11
27- 66	RA2199	B ₁	70	110	534.7	敲打磨石	16B2
28- 67	RA2199	B ₁	58	(101)	334.4	敲打磨石	16B1
28- 68	RA2199	B ₁	91	68	473.0	敲石	18B1a5
28- 69	RA2199	B ₁	86	61	410.8	敲石	18B1a4
28- 70	RA2199	B ₁	(87)	(83)	396.0	敲石	18B1b3
28- 71	RA2199	A ₁	(107)	104	323.1	礫器	15B
28- 72	RA2199	A ₂	(120)	89	924.6	磨石	17A3a6
29- 73	RA2199	A ₁	60	133	410.6	敲石	18B1c4
29- 74	RA2199	A	86	150	890.0	敲石	18B1b6
29- 75	RA2199	A ₁	(70)	47	129.0	敲石	18B1b5
29- 83	RA2154	A ₁	50	14	2.7	石匙	4A2d
34- 17	RA2190	床	36	42	8.8	石匙	4B2d
34- 18	RA2190	床	44	26	11.8	削器	5B1b4
34- 19	RA2190	床	67	90	90.2	搔器	6A2b
34- 20	RA2190	ピット21	22	16	1.4	石鏃	2C5a
34- 21	RA2190	ピット1	68	35	13.7	削器	5B1b4
34- 22	RA2190	ピット22	29	37	14.8	削器	5B1b4
34- 23	RA2190	ピット5	64	30	20.6	石核	10B2
34- 24	RA2190	D ₁	25	18	1.2	石鏃	2A2c
34- 25	RA2190	D ₁	28	13	1.3	石鏃	2B
34- 26	RA2190	D ₁	42	15	5.4	石鏃	2C5a
35- 27	RA2190	D ₁	72	40	294.4	石匙	4A2c
35- 28	RA2190	D ₁	67	53	49.5	削器	5B1c4
35- 29	RA2190	D ₁	(51)	28	11.4	削器	5A2a1
35- 30	RA2190	D ₁	32	24	5.1	削器	5A1a2
35- 31	RA2190	D ₁	56	32	12.6	籠状石器	7B5a
35- 32	RA2190	D ₁	(86)	43	72.9	籠状石器	7A5b
35- 33	RA2190	C ₁	30	17	3.0	石鏃	2A2a
35- 34	RA2190	C ₁	(29)	21	3.3	削器	5A2d1
36- 35	RA2190	C ₁	51	47	15.4	削器	5B1b2
36- 36	RA2190	C ₁	46	43	3.1	搔器	6B2
36- 37	RA2190	C ₁	46	32	18.2	籠状石器	7A3b
36- 38	RA2190	B ₁	(27)	20	1.5	石鏃	2A2a
36- 39	RA2190	B ₂	36	11	1.9	石錐	3A2
36- 40	RA2190	B ₁	43	26	12.2	削器	5A2d1
36- 41	RA2190	B ₁	41	41	12.8	削器	5A3d1
36- 42	RA2190	B ₂	38	45	15.8	削器	5B2b4
36- 43	RA2190	B ₁	55	36	22.6	削器	5B2b4
36- 44	RA2190	B ₂	34	53	26.1	搔器	6A2a
37- 45	RA2190	B ₁	78	49	180.4	片面調整石器	9A2
37- 46	RA2190	ピット10	103	82	577.6	磨石	17A3b1

表6 大館町遺跡第54次調査遺構出土石器一覧(2)

※()は欠損、破損を表す

挿 図	遺 構	層位・施設	長さ (mm)	幅 (mm)	重量 (g)	器 種	分 類
37- 47	RA2190	D ₁	84	68	195.0	磨石	17A3b6
37- 48	RA2190	D ₁	123	68	332.7	敲石	18B1b5
37- 49	RA2190	D ₁	73	141	739.5	敲打磨石	16D1
38- 50	RA2190	B ₂	(81)	43	154.1	磨製石斧	11
38- 51	RA2190	B ₂	73	(102)	242.6	敲打磨石	16D4
38- 52	RA2190	B ₁	(90)	100	315.5	砥石	22A3b1b
38- 53	RA2190	B ₁	(78)	(103)	262.1	砥石	22A2b1b
38- 54	RA2190	A ₁	(80)	37	80.4	磨製石斧	11
40- 5	RA2192	ピット1	36	42	14.8	削器	5A2d2
40- 6	RA2192	B ₁	87	42	123.5	敲石	18B1c5
53- 82	RA2200	C ₂	60	42	26.6	削器	5A2b2
53- 83	RA2200	C ₁	27	22	5.1	搔器	6A1b
53- 84	RA2200	C ₁	(36)	37	21.2	籠状石器	7A3b
53- 85	RA2200	B ₁	45	11	2.7	石錐	3B5a
53- 86	RA2200	B ₁	67	29	10.8	石匙	4A2c
53- 87	RA2200	B ₁	58	33	14.4	削器	5A2d4
53- 88	RA2200	B ₁	44	26	6.9	削器	5B1b2
53- 89	RA2200	B ₁	59	41	28.9	削器	5A2e2
53- 90	RA2200	A ₁	41	42	16.6	削器	5A2d1
54- 91	RA2200	A ₁	81	123	822.4	石核	10D1
55- 92	RA2200	床	102	72	247.0	凹石	19C3b1
55- 93	RA2200	ピット3	(67)	(61)	91.8	砥石	22A3a3b
55- 94	RA2200	石囲炉	68	65	341.6	敲石	18B1a1
55- 95	RA2200	C ₁	77	149	491.0	敲打磨石	16D1
55- 96	RA2200	C ₁	69	(133)	439.4	敲打磨石	16D1
55- 97	RA2200	C ₂	58	(104)	309.1	敲打磨石	6D1
56- 98	RA2200	C ₂	78	(87)	311.9	敲打磨石	16D1
56- 99	RA2200	C ₁	(80)	18	96.7	敲石	18B1c5
56-100	RA2200	C ₂	80	78	278.2	敲石	18B1b2
56-101	RA2200	C ₂	(106)	108	958.2	敲石	18B1b2
56-102	RA2200	C ₂	73	68	168.4	凹石	19C1b2
56-103	RA2200	C ₁	76	63	254.3	凹石	19C1b2
56-104	RA2200	C ₁	121	67	341.4	擦痕をもつ礫	24
56-105	RA2200	C ₁	51	50	140.7	擦痕をもつ礫	24
57-106	RA2200	B ₁	62	(66)	164.4	敲打磨石	16D3
57-107	RA2200	B ₁	61	86	264.0	敲打磨石	16D1
57-108	RA2200	B ₁	77	(67)	173.2	敲打磨石	16A1
57-109	RA2200	B ₁	127	42	225.5	敲石	18B1c5
57-110	RA2200	B ₁	(99)	(90)	390.1	敲石	18B1b5
57-111	RA2200	B ₁	(213)	(231)	2585.6	石皿	21A2c2
57-112	RA2200	B ₂	(69)	(55)	109.6	石皿	21B3c2
58-113	RA2200	A ₂	81	147	645.5	敲打磨石	16D1
58-114	RA2200	A ₂	79	(172)	530.3	敲打磨石	16D3
58-115	RA2200	A ₁	82	87	598.2	敲打磨石	16D3
58-116	RA2200	A ₂	(110)	87	300.2	敲石	18B1b2
58-117	RA2200	A ₁	(131)	(137)	891.7	石皿	21B3b2

表7 大館町遺跡第54次調査遺構出土石器一覧(3)

※()は欠損、破損を表す

挿図	遺構	層位・施設	長さ(mm)	幅(mm)	重量(g)	器種	分類
63- 12	RA2214	A ₁	62	55	26.0	石匙	4B2c
63- 13	RA2214	A ₂	48	37	16.5	削器	5B2b2
63- 14	RA2214	A ₁	48	46	22.8	削器	5A2c1
63- 15	RA2214	A ₂	48	43	12.6	削器	5B1a1
63- 16	RA2214	ピット2	120	88	523.9	磨石	17A1b2
63- 17	RA2214	A ₂	98	114	1051.7	敲石	18B1b3
63- 18	RA2214	A ₁	94	52	153.8	敲石	18B1b2
63- 19	RA2214	A ₂	87	(92)	240.5	敲打磨石	16D1
64- 8	RA2220	B ₁	(62)	(47)	68.4	礫器	15C
64- 9	RA2220	A ₁	(55)	(40)	48.8	磨製石斧	11
64- 10	RA2220	A ₁	(65)	72	264.3	磨石	17A1b1
64- 11	RA2220	A ₁	(56)	29	26.0	敲石	18B1c5
64- 12	RA2220	A ₂	(35)	(34)	9.2	砥石	22A3a1b
65- 1	RA2221	A ₁	55	38	28.1	削器	5A2c4
65- 2	RA2221	A ₂	160	73	581.1	敲石	18B1c5
68- 14	RA2207	ピット11	38	22	9.2	両面調整石器	8A1b
68- 15	RA2207	ピット11	37	23	8.4	両面調整石器	8A1b
68- 16	RA2207	C ₁	23	12	0.9	石鏃	2C5b
68- 17	RA2207	C ₁	60	47	40.0	削器	5B2b1
68- 18	RA2207	床	119	122	317.7	石皿	21B1a1
68- 19	RA2207	床	(210)	(137)	1165.2	石皿	21B2c2
69- 20	RA2207	石囲炉	74	140	450.3	敲打磨石	16D4
69- 21	RA2207	ピット4	(97)	72	403.1	敲石	18B1b1
69- 22	RA2207	ピット13	126	84	844.0	敲石	18B1a5
72- 5	RA2209	C ₁	33	44	9.1	削器	5B1a4
72- 6	RA2209	B ₁	41	48	40.7	搔器	6A1b
72- 7	RA2209	B ₁	63	39	29.1	搔器	6A1b
72- 8	RA2209	A ₁	(37)	13	2.1	石鏃	2C1b
72- 9	RA2209	A ₁	(33)	13	2.2	石鏃	2B
72- 10	RA2209	A ₂	(42)	27	4.7	石匙	4A1b
72- 11	RA2209	A ₁	57	54	37.8	削器	5B2b2
72- 12	RA2209	ピット18	89	(167)	861.3	敲打磨石	16D23
74- 8	RA2212	石囲炉	420	150	2349.2	凹石	19C1c6
74- 9	RA2212	周溝	105	67	171.6	砥石	22A3b3a
78- 13	RA2193	床	48	47	28.6	搔器	6A1b
78- 14	RA2193	周溝	36	17	3.6	搔器	6A1a
78- 15	RA2193	ピット7	54	46	17.2	削器	5A2c1
78- 16	RA2193	ピット7	62	47	63.8	籠状石器	7A3b
78- 17	RA2193	ピット11	65	83	86.0	削器	5B2a4
78- 18	RA2193	D ₁	(29)	(13)	2.0	石鏃	2C5b
78- 19	RA2193	D ₁	52	33	19.5	削器	5A1d1
78- 20	RA2193	C ₁	30	14	1.5	石鏃	2C5b
78- 21	RA2193	C ₁	27	35	4.2	石匙	4B2a
78- 22	RA2193	C ₁	29	28	9.8	搔器	6A1b
79- 23	RA2193	C ₁	58	34	20.1	削器	5A2d4
79- 24	RA2193	C ₁	66	38	35.6	両面調整石器	8A2b

表8 大館町遺跡第54次調査遺構出土石器一覧(4)

※()は欠損、破損を表す

挿図	遺構	層位・施設	長さ (mm)	幅 (mm)	重量 (g)	器種	分類
79- 25	RA2193	B ₁	38	18	3.0	石鏃	2B
79- 26	RA2193	B ₂	54	36	16.6	削器	5A2d2
79- 27	RA2193	B ₁	56	43	20.3	削器	5A2d4
79- 28	RA2193	B ₁	44	28	8.1	削器	5B2c
79- 29	RA2193	B ₂	32	35	12.2	搔器	6A1b
79- 30	RA2193	A ₁	(28)	11	2.2	石鏃	2C1b
79- 31	RA2193	A ₃	(25)	13	1.0	石鏃	2C1b
79- 32	RA2193	A ₁	43	55	27.9	削器	5B1a1
79- 33	RA2193	A ₁	37	22	7.8	両面調整石器	8A1a
80- 34	RA2193	A ₁	58	31	22.6	片面調整石器	9A1
80- 35	RA2193	埋土	(32)	(32)	5.8	石匙	4
80- 36	RA2193	床	97	176	804.8	敲打磨石	16D4
80- 37	RA2193	床	81	50	175.0	磨製石斧	11
80- 38	RA2193	石囲炉	95	(174)	1231.3	敲打磨石	16A1
80- 39	RA2193	D ₁	(63)	46	96.6	磨製石斧	11
80- 40	RA2193	D ₁	108	47	67.5	砥石	22A3a3b
80- 41	RA2193	C ₁	(42)	(50)	71.3	敲打磨石	16B1
81- 42	RA2193	C ₁	63	91	229.3	敲打磨石	16A2
81- 43	RA2193	B ₂	64	91	395.0	敲石	18B1b4
81- 44	RA2193	B ₁	55	33	31.3	礫石錘	14
81- 45	RA2193	B ₁	96	56	199.7	敲石	18B1b6
81- 46	RA2193	A ₁	(65)	(56)	113.1	磨製石斧	11
81- 47	RA2193	A ₁	93	62	231.8	敲石	18B1b5
81- 48	RA2193	A ₁	(85)	64	231.2	敲石	18B1b6
81- 49	RA2193	A ₁	(88)	(65)	174.8	石皿	21B1b2
81- 54	RA2196	床	123	38	119.1	搔器	6A2a
84- 12	RA2218	ピット 2	43	56	22.8	搔器	6A2a
84- 13	RA2218	ピット 5	54	44	26.7	両面調整石器	8A2b
84- 14	RA2218	床	(29)	14	2.0	石鏃	2C5b
84- 15	RA2218	A ₁	35	49	12.4	石匙	4B1a
84- 16	RA2218	A ₁	45	28	14.1	削器	5A2d1
84- 17	RA2218	ピット 3	92	77	543.0	磨石	17A3b3
84- 18	RA2218	ピット 2	95	94	600.7	磨石	17A3b6
84- 19	RA2218	ピット 3	(136)	74	493.3	凹石	19C1c3
85- 20	RA2218	A ₂	63	135	257.4	敲打磨石	16D4
85- 21	RA2218	A ₁	78	84	341.9	敲打磨石	16D3
85- 22	RA2218	A ₁	141	51	384.5	敲石	18B4c5
89- 23	RA2185	ピット 6	77	50	68.5	籠状石器	7A1b
89- 24	RA2185	床	53	31	21.1	籠状石器	7A2b
89- 25	RA2185	C ₁	(27)	15	1.6	石鏃	2A2b
89- 26	RA2185	C ₁	23	22	3.8	石匙	4B
89- 27	RA2185	C ₁	72	28	22.5	削器	5B1b
89- 28	RA2185	C ₁	51	47	32.0	搔器	6B2c
89- 29	RA2185	C ₁	22	11	0.6	削器	5B1b1
89- 30	RA2185	C ₁	50	31	17.6	両面調整石器	8A1a
90- 31	RA2185	C ₁	34	29	14.2	楔形石器	23

表 9 大館町遺跡第54次調査遺構出土石器一覧(5)

※()は欠損、破損を表す

挿図	遺構	層位・施設	長さ (mm)	幅 (mm)	重量 (g)	器種	分類
90- 32	R A2185	C ₁	36	29	17.6	両面調整石器	8A1b
90- 33	R A2185	B ₁	37	44	15.2	削器	5B1c
90- 34	R A2185	B ₁	66	29	17.6	搔器	6A2a
90- 35	R A2185	B ₁	53	45	21.2	搔器	6A1a
90- 36	R A2185	B ₁	57	33	21.0	籠状石器	7A2a
90- 37	R A2185	B ₁	42	43	74.1	石核	10D1
91- 38	R A2185	A ₁	24	11	1.0	石鏃	2C5a
91- 39	R A2185	A ₁	51	15	3.6	石鏃	2C1b
91- 40	R A2185	A ₁	34	14	4.2	石錐	3B5a
91- 41	R A2185	A ₁	55	32	8.7	石匙	4A2c
91- 42	R A2185	A ₁	23	25	4.8	削器	5B1a1
91- 43	R A2185	A ₁	45	29	8.6	削器	5A1e4
91- 44	R A2185	A ₁	93	81	8.7	削器	5A1e4
91- 45	R A2185	A ₁	70	28	16.2	削器	5A3e4
92- 46	R A2185	A ₁	50	34	25.2	籠状石器	7B2b
92- 47	R A2185	A ₁	(31)	33	9.6	籠状石器	7
92- 48	R A2185	A ₁	47	25	9.4	両面調整石器	8A1a
92- 49	R A2185	A ₁	66	56	179.2	石核	10D2
93- 50	R A2185	A ₁	73	92	430.2	石核	10D1
94- 51	R A2185	A ₁	115	99	1135.2	石核	10D1
95- 52	R A2185	石囲炉	66	123	531.1	敲打磨石	16C2
95- 53	R A2185	ピット15	135	92	920.2	礫器	15A
95- 54	R A2185	C ₁	37	56	38.1	磨石	17A1a1
95- 55	R A2185	C ₁	(140)	97	437.6	凹石	19C1b2
95- 56	R A2185	B ₁	(48)	(48)	28.6	砥石	22A3a1b
95- 57	R A2185	A ₁	(49)	33	35.9	磨製石斧	11
95- 58	R A2185	A ₁	78	35	55.6	磨製石斧	11
95- 59	R A2185	A ₁	(47)	56	71.4	磨製石斧	11
95- 60	R A2185	A ₁	75	52	94.2	礫器	15B
96- 61	R A2185	A ₁	97	56	232.9	礫器	15B
96- 62	R A2185	A ₁	(62)	(74)	149.6	敲打磨石	16A1
96- 63	R A2185	A ₁	96	90	562.0	磨石	17A3b2
96- 64	R A2185	A ₁	(81)	113	138.4	砥石	22A3a3b
96- 65	R A2185	A ₁	(141)	(155)	517.4	石皿	21B1a2
101- 2	R A2187	A ₁ "	33	17	1.9	石鏃	2A2a
101- 3	R A2187	A ₁ "	(34)	46	10.1	石匙	4B1b
101- 4	R A2187	A ₁ "	40	27	7.0	削器	5B1c1
101- 5	R A2187	A ₁ "	32	17	4.8	削器	5B1b2
101- 6	R A2187	A ₁ "	54	29	11.3	削器	5B1a2
101- 7	R A2187	A ₁ "	(34)	39	11.9	削器	5B1a3
101- 8	R A2187	A ₁ "	69	50	98.0	削器	5A1
101- 9	R A2187	A ₁ "	36	32	10.8	搔器	6B1c
101- 10	R A2187	A ₁ "	101	67	402.9	石核	10D1
102- 11	R A2187	A ₁ "	46	67	134.3	敲打磨石	16C1
102- 12	R A2187	A ₁ "	77	120	391.6	凹石	19C1b2
102- 13	R A2187	A ₁ "	(89)	(77)	287.2	砥石	22A2a3b

表10 大館町遺跡第54次調査遺構出土石器一覧(6)

※()は欠損、破損を表す

挿図	遺構	層位・施設	長さ(mm)	幅(mm)	重量(g)	器種	分類
104-10	RA2194	ピット2	50	41	12.0	削器	5B1b2
104-11	RA2194	A ₁ '	30	42	9.1	削器	5B2b2
104-12	RA2194	A ₁ '	(37)	40	14.7	削器	5A2d2
104-13	RA2194	A ₁ '	(23)	(25)	1.7	削器	5B2b2
104-14	RA2194	A ₁ '	(12)	(26)	0.8	削器	5A2d1
104-15	RA2194	A ₁ '	52	58	57.9	削器	5B1b2
104-16	RA2194	床	123	59	533.1	凹石	19C3c1
104-17	RA2194	ピット2	(87)	48	117.9	打製石斧	12
105-18	RA2194	A'	(72)	(83)	443.5	磨石	17A1a1
105-19	RA2194	A ₁ '	72	74	195.7	敲打磨石	16D4
108-29	RA2217	石囲炉	21	11	0.2	石鏃	2A2a
108-30	RA2217	ピット2	40	19	2.7	石鏃	2A2a
108-31	RA2217	B ₁	54	38	19.4	削器	5A2c1
108-32	RA2217	B ₁	(39)	27	6.5	削器	5B1b4
108-33	RA2217	B ₁	(28)	38	9.7	削器	5A2d2
108-34	RA2217	B ₁	37	38	14.4	削器	5A1e4
108-35	RA2217	B ₁	61	58	31.7	搔器	5A2d2
108-36	RA2217	B ₁	(27)	23	6.6	搔器	6A1a
108-37	RA2217	A ₁	48	17	3.9	石鏃	2A2a
108-38	RA2217	A ₁	(46)	13	3.1	石鏃	2C1b
108-39	RA2217	A ₁	(42)	13	2.2	石鏃	2C1b
108-40	RA2217	A ₁	(36)	13	1.5	石鏃	2C1b
108-41	RA2217	A ₁	(28)	12	1.2	石鏃	2C5b
109-42	RA2217	A ₁	53	44	17.9	搔器	6A2a
109-43	RA2217	A ₁	27	32	5.9	搔器	6A2a
109-44	RA2217	A ₁	(27)	19	3.1	搔器	6B3
109-45	RA2217	A ₁	(44)	38	11.6	搔器	6A1a
109-46	RA2217	A ₁	44	35	13.3	搔器	6A1b
109-47	RA2217	A ₁	38	26	6.7	搔器	6A1b
109-48	RA2217	A ₁	36	25	5.3	搔器	6A2a
109-49	RA2217	A ₁	68	43	60.5	搔器	6A3a
109-50	RA2217	A ₁	36	16	2.9	搔器	6A1b
109-51	RA2217	A ₁	25	25	2.5	搔器	6A2b
110-52	RA2217	A	(28)	20	3.2	石錐	3B5a
110-53	RA2217	A	49	49	18.6	搔器	6A1b
110-54	RA2217	A	52	30	5.7	搔器	6A2b
110-55	RA2217	A ₁	50	38	56.1	籠状石器	7B3a
110-56	RA2217	B ₁	43	32	11.2	砥石	22A3a1b
110-57	RA2217	A ₁	70	68	161.6	敲打磨石	16D4
110-58	RA2217	A	148	76	580.2	凹石	19C1c3
110-59	RA2217	A ₂	95	55	184.5	砥石	22A3a2b
110-60	RA2217	A ₁	(76)	(97)	121.8	砥石	22A3a1b
114-29	RA2203	B ₁	64	31	11.7	削器	5B1b4
114-30	RA2203	B ₁	43	33	11.2	削器	5A2d4
114-31	RA2203	B ₁	50	17	6.1	削器	5A1a2
114-32	RA2203	B ₃	33	37	24.4	搔器	6A2b

表11 大館町遺跡第54次調査遺構出土石器一覧(7)

※()は欠損、破損を表す

挿 図	遺 構	層位・施設	長さ (mm)	幅 (mm)	重量 (g)	器 種	分 類
114- 33	R A 2203	A ₁	43	37	16.1	削器	5B2b2
114- 34	R A 2203	A ₁	(52)	(23)	9.2	両面調整石器	8A1a
114- 35	R A 2203	周溝	87	(88)	274.4	敲打磨石	16D3
114- 36	R A 2203	B ₁	(68)	(52)	36.8	砥石	22A3a2a
115- 37	R A 2203	B ₃	158	141	1216.0	凹石	19C1b2
115- 38	R A 2203	A ₂	64	(118)	290.0	敲打磨石	16D2
119- 24	R A 2204	B ₁	63	73	74.1	削器	5B2b2
119- 25	R A 2204	B ₁	37	37	74.1	削器	5A2d2
119- 26	R A 2204	B ₁	73	50	151.6	石核	10D2
119- 27	R A 2204	A ₁	(32)	18	3.0	石鏃	2A2b
119- 28	R A 2204	A ₂	33	16	1.8	石鏃	2A2a
119- 29	R A 2204	A ₁	(33)	13	2.3	石鏃	2C1b
119- 30	R A 2204	A ₂	43	21	7.5	石鏃	2C5a
119- 31	R A 2204	A ₂	38	28	6.8	石錐	3B5a
120- 32	R A 2204	A ₁	70	25	11.1	石匙	4A2c
120- 33	R A 2204	A ₂	59	23	16.4	削器	5A1e
120- 34	R A 2204	A ₁	48	23	4.6	削器	5B1b
120- 35	R A 2204	A ₁	37	38	12.4	削器	5B1a
120- 36	R A 2204	A ₁	46	53	21.3	削器	5B2b
120- 37	R A 2204	A ₁	27	44	7.5	搔器	6A1a
120- 38	R A 2204	A ₁	47	44	44.0	両面調整石器	8A2a
120- 39	R A 2204	A ₁	82	32	46.4	籠状石器	7B1b
121- 40	R A 2204	石囲炉	170	74	927.5	敲石	18B1c6
121- 41	R A 2204	石囲炉	120	101	725.0	凹石	19C1b2
121- 42	R A 2204	A ₁	32	48	23.8	礫石錘	14
121- 43	R A 2204	A ₂	104	(74)	274.7	敲打磨石	16D1
121- 44	R A 2204	A ₁	66	(59)	128.7	敲打磨石	16D3
121- 45	R A 2204	A ₂	113	95	887.4	敲石	18B1b2
121- 46	R A 2204	A ₁	54	30	14.9	砥石	22A3a3b
121- 47	R A 2204	A ₂	(43)	(37)	15.0	砥石	22A3a2b
125- 10	R A 2205	ピット 4	38	26	8.7	削器	5A1d1
125- 11	R A 2205	炉内	112	120	1133.8	敲石	18B1a6
125- 12	R A 2205	A ₁	132	86	822.0	磨石	17A3b1
127- 21	R A 2206	床	32	18	2.1	石鏃	2A2a
127- 22	R A 2206	ピット12	21	15	1.3	石鏃	2C5a
127- 23	R A 2206	ピット15	64	60	34.3	削器	5A2d2
127- 24	R A 2206	B ₂ '	(18)	19	1.2	石錐	3B5b
127- 25	R A 2206	B ₂ '	32	26	5.9	搔器	6A1a
127- 26	R A 2206	B ₂ '	30	21	7.2	搔器	6A2b
127- 27	R A 2206	B ₁ '	42	43	71.8	石核	10D3
127- 28	R A 2206	A ₂ '	44	38	11.6	石錐	3B4a
127- 29	R A 2206	A ₂ '	41	25	7.7	削器	5B2b1
128- 30	R A 2206	A ₃ '	46	30	9.8	削器	5B2b1
128- 31	R A 2206	A ₁ '	28	19	2.4	削器	5A2d2
128- 32	R A 2206	A ₁ '	(21)	27	2.8	削器	5B1b4
128- 33	R A 2206	炉	121	61	406.8	敲石	18B1c2

表12 大館町遺跡第54次調査遺構出土石器一覧(8)

※()は欠損、破損を表す

挿 図	遺 構	層位・施設	長さ (mm)	幅 (mm)	重量 (g)	器 種	分 類
128- 34	RA2206	B ₁	74	(130)	300.9	敲打磨石	16D23
128- 35	RA2206	A ₃	66	182	721.7	敲打磨石	16D1
128- 36	RA2206	A ₂	(84)	(86)	569.2	石皿	21B3b2
128- 37	RA2206	A ₃	(57)	(68)	113.0	石皿	21B1c2
128- 38	RA2206	A ₁	(35)	28	10.0	砥石	22A3b1b
128- 39	RA2206	A ₂	(75)	(80)	79.8	砥石	22A3a2b
129- 2	RA2208	A ₂ "	45	28	13.6	両面調整石器	8A1a
133- 20	RA2186	B ₁	58	38	21.1	削器	5B1b4
133- 21	RA2186	A ₁	15	7	0.3	石鏃	2A2a
133- 22	RA2186	A ₁	25	13	1.5	石鏃	2C5b
133- 23	RA2186	A ₁	21	10	1.1	石錐	3B34a
133- 24	RA2186	A ₁	55	23	8.6	石匙	4A1a
133- 25	RA2186	A ₁	23	21	2.2	削器	5A2d
133- 26	RA2186	A ₂	27	24	4.2	搔器	6A1b
133- 27	RA2186	A ₁	40	16	4.9	削器	5A2d1
133- 28	RA2186	A ₁	37	41	15.1	削器	5A2d1
133- 29	RA2186	A ₁	28	38	13.0	削器	5B1c4
133- 30	RA2186	A ₁	29	24	31.0	削器	5A2d1
133- 31	RA2186	A ₁	60	48	64.5	両面調整石器	8A2a
134- 32	RA2186	A ₁	134	55	227.7	両面調整石器	8A1b
134- 33	RA2186	A ₁	25	15	3.3	楔形石器	23
134- 34	RA2186	A ₁	44	24	18.4	石核	10D2
134- 35	RA2186	A ₁	54	32	33.0	石核	10D2
135- 36	RA2186	石囲炉	234	104	1254.3	台石	20D1b2
135- 37	RA2186	B ₁	(112)	(116)	134.1	擦痕をもつ礫	24
135- 38	RA2186	A ₁	108	74	268.1	礫器	15B
135- 39	RA2186	A ₁	95	80	587.0	磨石	17A1a2
135- 40	RA2186	A ₁	84	56	222.1	敲打磨石	16D1
135- 41	RA2186	A ₁	73	(101)	292.6	敲打磨石	16D4
135- 42	RA2186	A ₁	(75)	(70)	312.6	敲石	18B1b1
135- 43	RA2186	A ₁	(66)	71	213.6	敲石	18B1b2
136- 44	RA2186	A ₁	98	155	1427.5	台石	20D1a4
136- 45	RA2186	A ₁	55	38	17.1	砥石	22A3b1b
136- 46	RA2186	A ₁	72	48	53.2	砥石	22A1b1b
144- 63	RE2188	床	(18)	11	0.5	石鏃	2A2a
144- 64	RE2188	D ₁	33	20	4.8	石鏃	2B
144- 65	RE2188	D ₁	(24)	11	1.0	石鏃	2C5b
144- 66	RE2188	D ₁	27	12	1.0	石鏃	2C5b
144- 67	RE2188	D ₁	(31)	17	2.3	石鏃	2C5b
144- 68	RE2188	D ₃	(27)	19	2.0	石鏃	2
144- 69	RE2188	D ₁	(20)	10	0.6	石錐	3A1
144- 70	RE2188	D ₁	28	11	1.2	石錐	3B3a
144- 71	RE2188	D ₁	37	35	8.7	石匙	4B1b
144- 72	RE2188	D ₁	42	19	4.3	石匙	4A2c
144- 73	RE2188	D ₁	48	29	10.8	石匙	4A2c
144- 74	RE2188	D ₁	74	25	14.9	石匙	4A1a

表13 大館町遺跡第54次調査遺構出土石器一覧(9)

※()は欠損、破損を表す

挿図	遺構	層位・施設	長さ(mm)	幅(mm)	重量(g)	器種	分類
144-75	RE2188	D ₁	40	27	10.0	削器	5A3e4
144-76	RE2188	D ₁	53	32	10.2	削器	5B2b4
144-77	RE2188	D ₁	76	53	71.7	削器	5A2d2
145-78	RE2188	D ₁	54	39	29.5	削器	5A2d2
145-79	RE2188	D ₁	43	22	7.9	削器	5A2d2
145-80	RE2188	D ₁	53	32	7.5	削器	5B1b4
145-81	RE2188	D ₁	64	42	34.2	搔器	6A2b
145-82	RE2188	D ₁	50	27	11.8	搔器	6A2a
145-83	RE2188	D ₁	30	31	5.8	搔器	6A1a
145-84	RE2188	D ₁	88	76	126.5	搔器	6A2b
146-85	RE2188	D ₁	65	25	22.9	搔器	6A1a
146-86	RE2188	D ₁	48	38	19.1	搔器	6A1a
146-87	RE2188	D ₁	44	27	1.9	搔器	6A2b
146-88	RE2188	D ₁	39	32	21.6	石核	10D3
146-89	RE2188	D ₁	51	30	41.4	石核	10D2
146-90	RE2188	D ₁	52	28	15.7	籠状石器	7B2b
146-91	RE2188	D ₁	48	32	25.8	両面調整石器	8A1b
146-92	RE2188	C ₁	43	22	6.0	石鏃	2C5a
147-93	RE2188	C ₁	35	(23)	6.6	石錐	3B3a
147-94	RE2188	C ₁	26	18	1.7	石錐	3B3a
147-95	RE2188	C ₂	58	36	19.4	石匙	4A2c
147-96	RE2188	C ₁	(62)	(67)	52.1	削器	5A2d4
147-97	RE2188	C ₁	38	21	6.7	削器	5B1b4
147-98	RE2188	C ₁	40	51	19.5	削器	5B1b4
147-99	RE2188	C ₁	34	21	2.7	削器	5B1b2
147-100	RE2188	C ₁	57	44	23.5	削器	5B2b2
147-101	RE2188	C ₁	66	33	16.8	搔器	6A2a
147-102	RE2188	C ₁	56	19	16.8	搔器	6A2a
148-103	RE2188	C ₁	36	34	9.9	搔器	6A1a
148-104	RE2188	C ₁	29	13	2.9	楔形石器	23
148-105	RE2188	C ₁	26	13	3.3	楔形石器	23
148-106	RE2188	C ₁	43	23	9.7	楔形石器	23
148-107	RE2188	C ₁	57	51	106.5	石核	10D2
148-108	RE2188	B ₁	55	17	9.8	石槍	1A1
148-109	RE2188	B ₁	24	20	1.9	石錐	3B4a
148-110	RE2188	B ₁	26	14	1.6	石錐	3B5a
148-111	RE2188	B ₁	80	33	18.9	石匙	4A2b
148-112	RE2188	B ₁	58	26	9.9	石匙	4A1a
148-113	RE2188	B ₁	36	18	4.7	削器	5B1c4
149-114	RE2188	B ₁	57	40	36.3	削器	5A2d1
149-115	RE2188	B ₁	82	32	38.9	削器	5A2d1
149-116	RE2188	B ₁	64	22	11.2	搔器	6A2b
149-117	RE2188	B ₁	67	68	79.9	搔器	6A2b
149-118	RE2188	B ₂	34	34	7.1	搔器	6A1a
149-119	RE2188	B ₁	93	46	92.4	両面調整石器	8A2b
149-120	RE2188	B ₂	43	68	103.7	石核	10D2

表14 大館町遺跡第54次調査遺構出土石器一覽(10)

※()は欠損、破損を表す

挿 図	遺 構	層位・施設	長さ (mm)	幅 (mm)	重量 (g)	器 種	分 類
150-121	R E 2188	A ₁	(21)	14	0.7	石鏃	2A e
150-122	R E 2188	A ₁	26	18	1.3	石鏃	2A e
150-123	R E 2188	A ₁	28	27	4.4	削器	5B2 a 12
150-124	R E 2188	A ₂	59	27	14.8	削器	5A2 d 1
150-125							
150-126	R E 2188	A ₁	57	68	104.0	石核	10D1
151-127	R E 2188	床	253	(194)	1697.5	石皿	21A1 c 2
151-128	R E 2188	D ₂	64	125	290.6	敲打磨石	16D1
151-129	R E 2188	D ₁	89	135	309.8	敲打磨石	16D2
152-130	R E 2188	D ₁	103	193	356.1	敲打磨石	16D1
152-131	R E 2188	D ₁	73	99	379.7	敲打磨石	16D1
152-132	R E 2188	D ₁	77	50	222.6	敲打磨石	16B2
152-133	R E 2188	D ₁	(75)	80	403.6	磨石	17A1 b 2
152-134	R E 2188	D ₁	(92)	(36)	350.1	磨石	17A1 b 2
153-135	R E 2188	D ₁	91	85	331.9	敲石	18B1 b 5
153-136	R E 2188	D ₁	78	78	332.6	敲石	18B2 b 6
153-137	R E 2188	D ₁	117	78	589.7	敲石	18B1 a 2
153-138	R E 2188	D ₁	(125)	(98)	200.3	砥石	22B3 a 3 b
153-139	R E 2188	D ₁	54	50	89.6	砥石	22B1 a 3 b
153-140	R E 2188	C ₁	(61)	(51)	107.6	磨製石斧	11
153-141	R E 2188	C ₁	63	(73)	426.8	敲打磨石	16A1
154-142	R E 2188	B ₁	117	(50)	351.0	磨製石斧	11
154-143	R E 2188	B ₂	(62)	(35)	119.6	磨製石斧	11
154-144	R E 2188	B ₂	56	25	62.3	磨製石斧	11
154-145	R E 2188	B ₁	43	58	88.6	礫石錘	14
154-146	R E 2188	B ₁	77	53	175.9	敲打磨石	16D2
154-147	R E 2188	B ₁	101	150	449.3	敲打磨石	16D12
154-148	R E 2188	B ₁	118	68	636.9	敲石	18B2 c 1
154-149	R E 2188	B ₁	(76)	(118)	220.3	凹石	19C1 b 3
154-150	R E 2188	B ₁	(43)	(32)	36.9	砥石	22A1 a 3 a
155-151	R E 2188	B ₁	(214)	(127)	2699.3	石皿	21A3 c 2
155-152	R E 2188	A ₁	57	33	59.3	礫石錘	14
155-153	R E 2188	A ₁	81	(165)	366.9	敲打磨石	16D1
155-154	R E 2188	A ₁	85	71	269.2	凹石	19C3 a 1
164- 34	R A 2189	ピット 3	29	34	10.2	搔器	6B2
164- 35	R A 2189	D ₁	(34)	14	2.5	石鏃	2A1 c
164- 36	R A 2189	D ₁	26	17	2.2	石鏃	2C5 a
164- 37	R A 2189	D ₂	30	15	2.8	石錐	3B1 a
164- 38	R A 2189	D ₁	(64)	31	11.6	石匙	4A2 d
164- 39	R A 2189	D ₁	63	32	18.5	削器	5B1 a 1
164- 40	R A 2189	D ₁	28	43	12.5	削器	5A2 d 2
164- 41	R A 2189	D ₁	37	52	11.8	削器	5B2 b 4
164- 42	R A 2189	D ₁	27	51	16.3	削器	5B2 a 1
164- 43	R A 2189	D ₁	(48)	38	23.8	削器	5B2 b 1
164- 44	R A 2189	D ₁	(31)	38	6.0	削器	5B1 a 3
165- 45	R A 2189	D ₁	29	48	6.2	搔器	5B1 b 3

表15 大館町遺跡第54次調査遺構出土石器一覧(1)

※()は欠損、破損を表す

挿 図	遺 構	層位・施設	長さ (mm)	幅 (mm)	重量 (g)	器 種	分 類
165- 46	RA2189	D ₂	84	(83)	92.0	搔器	6A2b
165- 47	RA2189	D ₂	38	57	40.1	搔器	6A2b
165- 48	RA2189	D ₂	(59)	48	39.8	搔器	6A2a
166- 49	RA2189	D ₁	108	73	787.6	石核	10AD2
167- 50	RA2189	D ₁	49	42	64.6	石核	10D2
167- 51	RA2189	C ₁	26	18	1.3	石鏃	2B
167- 52	RA2189	C ₁	27	18	3.1	石錐	3B34a
167- 53	RA2189	C ₁	(31)	14	1.7	石錐	3B5a
167- 54	RA2189	C ₁	58	25	10.9	石匙	4A2c
167- 55	RA2189	C ₁	57	22	7.9	石匙	4A2c
167- 56	RA2189	C ₁	54	23	5.9	石匙	4A2c
167- 57	RA2189	C ₁	42	19	7.4	削器	5A2e4
167- 58	RA2189	C ₁	33	(29)	7.4	削器	5A2d1
167- 59	RA2189	C ₁	41	48	29.9	削器	5B1b2
168- 60	RA2189	C ₁	78	45	48.2	削器	5A2d3
168- 61	RA2189	C ₁	57	34	14.5	削器	5B1b2
168- 62	RA2189	C ₂	41	(25)	5.5	削器	5B1b4
168- 63	RA2189	C ₁	48	25	5.0	削器	5B1b1
168- 64	RA2189	C ₁	50	35	12.6	削器	5A2d4
168- 65	RA2189	C ₁	32	36	10.7	搔器	6B2
168- 66	RA2189	C ₁	(28)	31	14.8	搔器	6B2
168- 67	RA2189	C ₁	56	67	68.5	搔器	6B2
169- 68	RA2189	C ₁	42	32	10.0	搔器	6A2a
169- 69	RA2189	C ₁	16	47	18.5	石核	10B3
169- 70	RA2189	B ₂	38	18	3.2	石鏃	2A2c
169- 71	RA2189	B ₁	23	16	1.1	石鏃	2A2f
169- 72	RA2189	B ₁	15	11	0.2	石鏃	2A2b
169- 73	RA2189	B ₁	(28)	15	1.2	石鏃	2A2
169- 74	RA2189	B ₁	(25)	17	2.0	石鏃	2A2
169- 75	RA2189	B ₁	(19)	17	1.2	石鏃	2B
169- 76	RA2189	B ₁	(28)	(14)	1.6	石鏃	2C
169- 77	RA2189	B ₁	(57)	33	9.1	石匙	4A2c
169- 78	RA2189	B ₁	54	37	20.9	削器	5A2d3
169- 79	RA2189	B ₁	(27)	29	8.8	削器	5A2a1
169- 80	RA2189	B ₁	46	37	25.8	削器	5A2d1
170- 81	RA2189	B ₁	42	28	5.7	搔器	5B1b3
170- 82	RA2189	B ₁	(23)	29	5.0	搔器	5A2d2
170- 83	RA2189	B ₁	46	40	44.2	石核	10B3
170- 84	RA2189	B ₁	58	33	35.0	籠状石器	7B3b
170- 85	RA2189	B ₁	(41)	18	10.2	籠状石器	7A5
171- 86	RA2189	床	140	100	971.9	敲石	18B1b34
171- 87	RA2189	ピット11	68	(107)	339.5	敲打磨石	16B1
171- 88	RA2189	D ₁	91	(86)	383.5	敲打磨石	16D1
171- 89	RA2189	D ₁	37	66	59.9	敲石	18B1b5
171- 90	RA2189	D ₁	(103)	70	349.1	凹石	19C3b2
171- 91	RA2189	D ₁	72	76	286.6	凹石	19C3b2

表16 大館町遺跡第54次調査遺構出土石器一覧(12)

※()は欠損、破損を表す

挿図	遺構	層位・施設	長さ(mm)	幅(mm)	重量(g)	器種	分類
171-92	RA2189	D ₁	(123)	104	1008.8	砥石	22A1a2b
171-93	RA2189	D ₁	(58)	(70)	45.6	砥石	22A3a1b
172-94	RA2189	C ₁	(84)	73	201.3	礫器	15C
172-95	RA2189	C ₁	103	(102)	592.1	敲打磨石	16D2
172-96	RA2189	C ₁	82	(117)	304.6	敲打磨石	16D4
172-97	RA2189	C ₁	74	101	546.0	敲打磨石	16C2
172-98	RA2189	C ₁	69	(84)	192.1	敲打磨石	16D1
172-99	RA2189	C ₁	131	51	363.7	敲石	18B1b5
172-100	RA2189	C ₁	(117)	52	255.9	敲石	18B1c1
172-101	RA2189	C ₁	(65)	52	158.2	敲石	18B4b2
173-102	RA2189	C ₁	142	68	451.9	敲石	18B1b2
173-103	RA2189	C ₁	155	60	407.5	敲石	18B1c6
173-104	RA2189	C ₂	143	74	172.7	砥石	22B3a2a
173-105	RA2189	B ₁	92	33	101.6	敲打磨石	16B1
173-106	RA2189	B ₁	66	117	449.3	敲打磨石	16A2
173-107	RA2189	B ₁	65	(120)	501.6	敲打磨石	16B1
173-108	RA2189	B ₁	40	34	46.7	敲石	18B1a1
174-109	RA2189	B ₁	124	63	446.2	敲石	18B1c6
174-110	RA2189	B ₁	120	68	359.7	磨石	17A1a3
174-111	RA2189	B ₁	(105)	(64)	181.0	砥石	22A3a2b
174-112	RA2189	B ₁	(208)	(169)	2237.6	石皿	21A1a2
174-113	RA2189	A ₁	65	(59)	127.5	敲打磨石	16D4
180-20	RA2195	ピット3	67	45	63.3	両面調整石器	8A1a
180-21	RA2195	B ₁	31	(32)	4.6	削器	5B1a1
180-22	RA2195	B ₁	(37)	22	4.6	削器	5A2d4
180-23	RA2195	B ₁	73	47	81.0	削器	5A2d2
180-24	RA2195	B ₁	96	63	262.6	石核	10B1
180-25	RA2195	A ₁	24	18	1.5	石鏃	2B
180-26	RA2195	A ₂	(30)	15	2.1	石鏃	2C5b
180-27	RA2195	A ₁	(32)	17	2.9	石鏃	2C5a
181-28	RA2195	A ₁	(32)	13	3.5	石錐	3A1
181-29	RA2195	A ₁	75	40	28.3	石匙	4A1b
181-30	RA2195	A ₁	40	71	36.8	削器	5A1b1
181-31	RA2195	A ₂	(25)	35	4.7	削器	5A2d2
181-32	RA2195	A ₁	48	33	15.1	削器	5B1a4
181-33	RA2195	A ₁	106	83	422.7	石核	10B2
182-34	RA2195	A ₁	(38)	48	46.5	磨製石斧	11
182-35	RA2195	A ₁	72	(107)	556.1	敲打磨石	16C2
182-36	RA2195	A ₂	93	(88)	302.7	敲打磨石	16D2
182-37	RA2195	A ₂	75	80	190.9	砥石	22A3a2b
182-38	RA2195	A ₂	(85)	(93)	151.2	砥石	22B3b1b
182-39	RA2195	A ₁	58	(67)	95.4	砥石	22A3b2b
182-40	RA2195	A ₁	(171)	133	761.2	石皿	21A1a2
187-29	RA2202	ピット14	51	53	50.1	搔器	7B1a
187-30	RA2202	B ₁	78	25	15.6	石槍	1D2
187-31	RA2202	B ₁	(25)	21	1.7	石錐	3B3b

表17 大館町遺跡第54次調査遺構出土石器一覧(13)

※()は欠損、破損を表す

挿図	遺構	層位・施設	長さ(mm)	幅(mm)	重量(g)	器種	分類
187- 32	R A 2202	B ₁	40	23	3.4	搔器	6A2b
187- 33	R A 2202	B ₁	47	62	26.5	搔器	6B2a
187- 34	R A 2202	B ₁	23	37	4.6	搔器	6A2a
187- 35	R A 2202	B ₁	47	30	10.4	両面調整石器	8A2a
187- 36	R A 2202	A ₄	(53)	20	10.4	石槍	1A1
187- 37	R A 2202	A ₂	(24)	40	5.0	削器	5B1a4
188- 38	R A 2202	A ₃	67	57	50.0	削器	5B2c4
188- 39	R A 2202	埋土	(23)	18	2.0	石錐	3B5b
188- 40	R A 2202	埋土	38	42	13.3	削器	5B1b1
188- 41	R A 2202	B ₁	108	61	398.4	敲石	18B1c1
188- 42	R A 2202	B ₂	83	76	423.4	敲石	18B1b1
188- 43	R A 2202	B ₁	(82)	(39)	46.8	砥石	22A1a3b
188- 44	R A 2202	B ₁	(123)	(84)	590.8	石皿	21B3c3
188- 45	R A 2202	A ₁	(144)	(150)	1134.0	石皿	21B3c3
189- 46	R A 2202	埋土	(135)	68	511.9	磨製石斧	11
194- 30	R A 2215	床	27	13	1.5	石鏃	2C5a
194- 31	R A 2215	A ₁	23	15	1.1	石鏃	2A2a
194- 32	R A 2215	A ₅	48	32	11.8	削器	5B2c3
194- 33	R A 2215	A ₁	42	32	6.9	削器	5Aa1
194- 34	R A 2215	A ₂	43	43	13.9	削器	5B2c4
194- 35	R A 2215	A ₄	30	35	15.1	削器	5B1c4
194- 36	R A 2215	A ₂	(24)	(24)	5.3	搔器	6A1a
194- 37	R A 2215	A ₂	80	33	34.2	搔器	6A2a
194- 38	R A 2215	A ₃	45	76	76.3	石核	10D2
195- 39	R A 2215	ピット29	183	52	215.1	礫器	15A
195- 40	R A 2215	B ₁	71	(81)	179.5	礫器	15C
195- 41	R A 2215	B ₁	67	(73)	202.6	敲打磨石	16D4
195- 42	R A 2215	B ₂	96	182	648.7	敲打磨石	16D4
195- 43	R A 2215	B ₁	107	93	744.1	磨石	17A1b2
195- 44	R A 2215	B ₁	113	97	1066.8	磨石	17A3c2
195- 45	R A 2215	B ₁	(83)	61	285.6	磨石	17A1c3
196- 46	R A 2215	B ₁	133	91	737.5	凹石	19C3b34
196- 47	R A 2215	B ₁	(79)	(75)	56.3	砥石	22A3a1b
196- 48	R A 2215	B ₁	59	(49)	37.2	砥石	22A3a2b
196- 49	R A 2215	A ₄	(83)	42	93.5	磨製石斧	11
196- 50	R A 2215	A ₃	74	(88)	399.4	敲打磨石	16D2
196- 51	R A 2215	A ₁	68	(80)	360.0	敲打磨石	16A1
196- 52	R A 2215	A ₃	(77)	(79)	352.4	磨石	17A1b3
196- 53	R A 2215	A ₂	112	102	1116.1	磨石	17A1a3
196- 54	R A 2215	A ₃	107	73	663.7	敲石	18A1a5
196- 55	R A 2215	A ₁	72	53	50.3	敲石	18B1b5
196- 56	R A 2215	A ₂	(73)	(38)	35.5	砥石	22A3a1b
197- 57	R A 2215	A ₄	(173)	(149)	902.8	石皿	21A1c1
197- 58	R A 2215	A ₃	(131)	(120)	1289.5	石皿	21A3c2
197- 59	R A 2215	A ₃	(364)	(222)	2344.6	石皿	21A1c1
203- 6	R D 2152	埋土	37	41	14.6	削器	5B1b1

表18 大館町遺跡第54次調査遺構出土石器一覧(14)

※()は欠損、破損を表す

挿図	グリッド	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	重量 (g)	器種	分類
223- 1	H6-K16	V a	44	26	11.2	石匙	4A2c
223- 2	H6-F17	IV b	36	44	16.9	削器	5B2b2
223- 3	H6-F19	IV b	(55)	32	9.9	削器	5B1b1
223- 4	H6-F17	IV b	58	55	16.6	削器	5B2b2
223- 5	H6-E17	IV b	56	45	12.5	削器	5B1a2
223- 6	H6-F16	IV b	59	34	9.5	削器	5B1a2
223- 7	H6-G18	IV b	(37)	36	7.7	搔器	6A2a
223- 8	H6-E17	IV b	26	23	3.1	搔器	6B2
224- 9	H6-G16	IV a	95	43	31.8	篋状石器	7A3b
224- 10	H6-F16	IV b	35	26	9.9	両面調整石器	8A1b
224- 11	H6-G16	IV b	40	40	9.8	両面調整石器	8A1a
224- 12	H6-K19	II a	17	14	1.0	石鏃	2A2c
224- 13	H6-N20	II a	20	13	0.6	石鏃	2A2a
224- 14	H6-L13	II a	23	15	1.4	石鏃	2C3
224- 15	H6-N20	II a	26	13	0.9	石鏃	2C3
224- 16	H6-I 22	II a	(33)	13	2.3	石鏃	2C4
224- 17	H6-I 23	II a	45	18	4.6	石鏃	2C5a
224- 18	H6-L19	II a	(24)	21	3.1	石錐	3B4a
224- 19	H6-O19	II a	(38)	27	9.1	削器	5B1a4
224- 20	H6-018	II a	50	47	34.1	削器	5A3e2
224- 21	H6-H19	II a	45	32	7.9	削器	5A2d3
225- 22	H6-O19	II a	105	50	102.5	削器	5B2b3
225- 23	H6-L18	II a	53	38	25.0	削器	5B2b1
225- 24	H6-K18	II a	25	22	2.1	削器	5B1b4
225- 25	H6-L15	II a	24	13	0.9	搔器	6A2b
225- 26	H6-M18	II a	77	47	44.5	搔器	6A2a
225- 27	H6-M18	II a	(57)	46	35.6	搔器	6A2b
226- 28	H6-K19	II a	56	84	80.1	搔器	6A1b
226- 29	H6-J 22	II a	74	81	165.1	搔器	6B2a
226- 30	H6-O19	II a	63	64	51.6	搔器	6A1b
227- 31	H6-M16	II a	60	41	40.6	搔器	6B1
227- 32	H6-M19	II a	40	36	16.1	搔器	6A2a
227- 33	H6-N18	II a	39	17	7.4	楔形石器	23
227- 34	H6-G16	IV b	56	(75)	244.8	敲打磨石	16A1
227- 35	H6-G19	IV a	54	131	344.6	敲打磨石	16D2
227- 36	H6-J 16	IV a	101	87	426.5	磨石	17A1b2
227- 37	H6-J 17	III b	(57)	(58)	54.6	砥石	22A3a2b
227- 38	H6-O20	II a	86	(60)	129.5	敲打磨石	16D4
228- 39	H6-J 15	II a	80	147	422.9	敲打磨石	16D1
228- 40	H6-N21	II a	76	78	374.7	敲石	18B1b5
228- 41	H6-I 23	II a	60	50	170.3	敲石	18B1a1
228- 42	H6-N18	II a	148	73	609.0	砥石	22B3a1b
228- 43	H6-H13	II a	(41)	(30)	9.2	砥石	22A1a3b

表19 大館町遺跡第54次調査遺物包含層・遺構外出土石器一覧(1)

写真図版



大館遺跡群全景（南から）

第2図版



大館町遺跡第
54次調査全景

平成6年度
調査区西半
全景
(北から)



平成7年度
調査区東半
全景
(南から)

RA2185・2199
2203
竪穴住居跡
RE2188竪穴跡



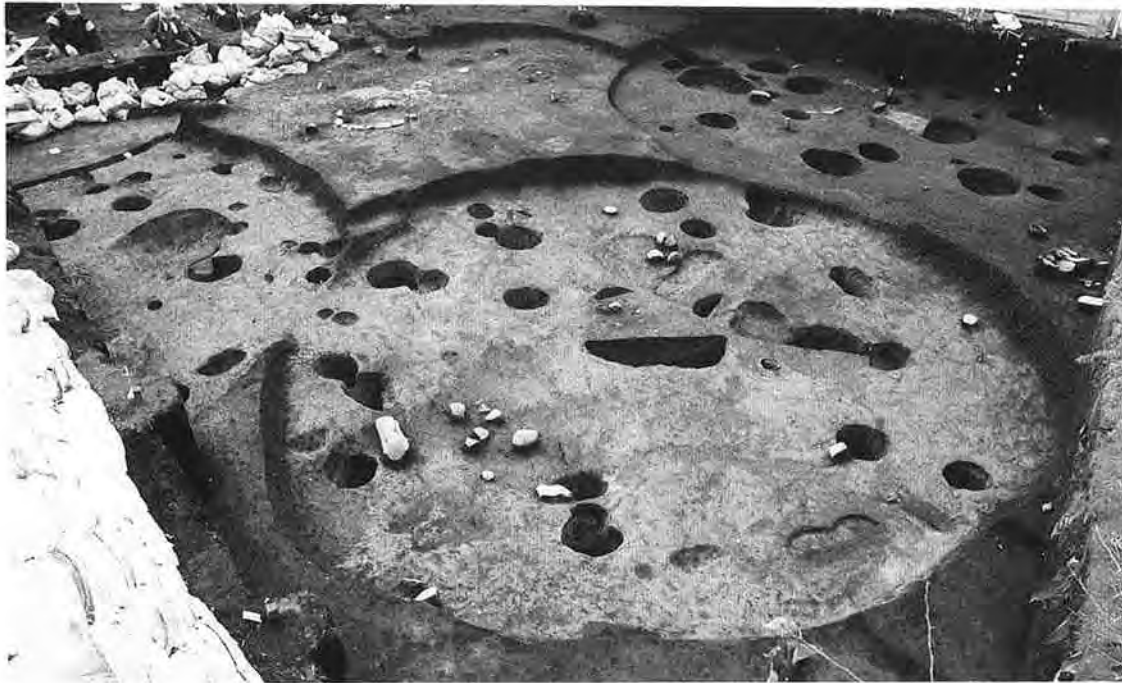
RA2185
(北から)



RA2199・2203
(西から)



RE2188
(南東から)



RA2189
(東から)



RA2189
伏甕



RA2190
(南から)

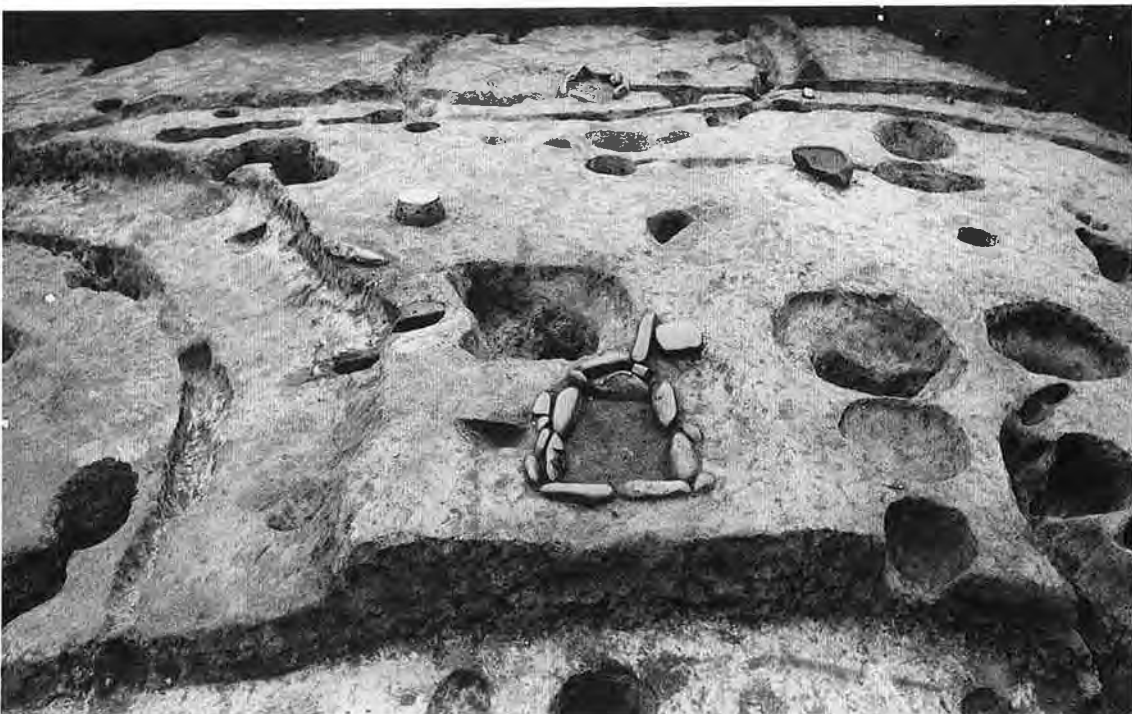
RA2185・2193
2197・2199
竪穴住居跡



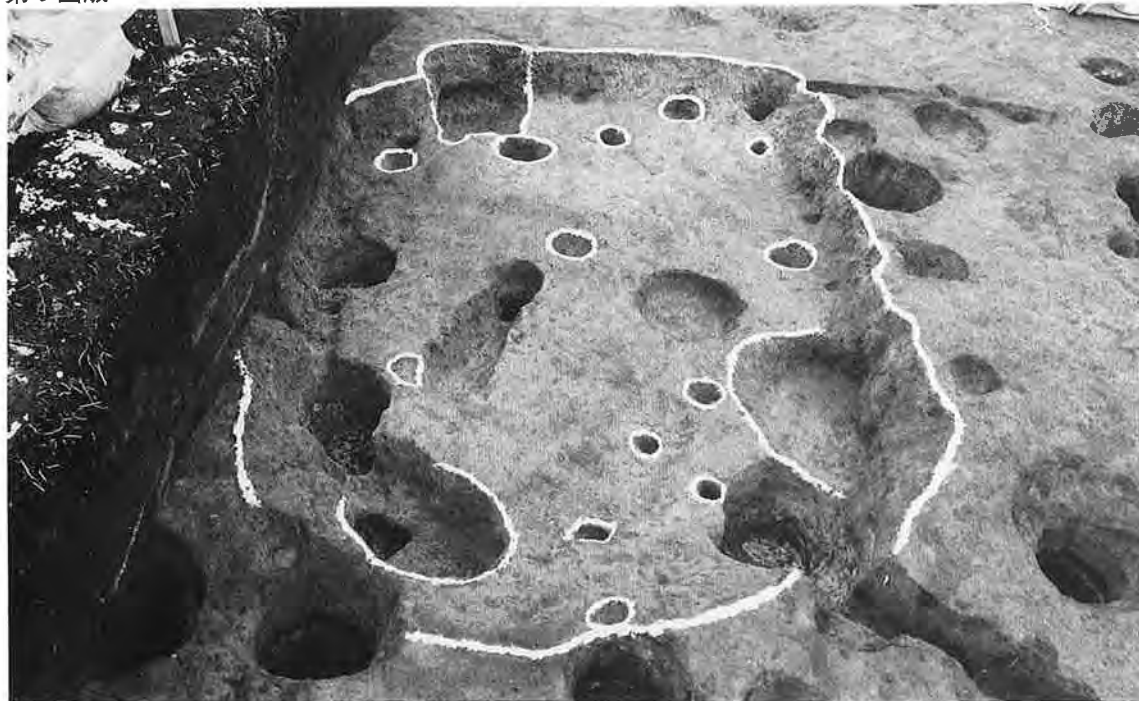
RA2195
(北西から)



RA2193・2197
(北から)

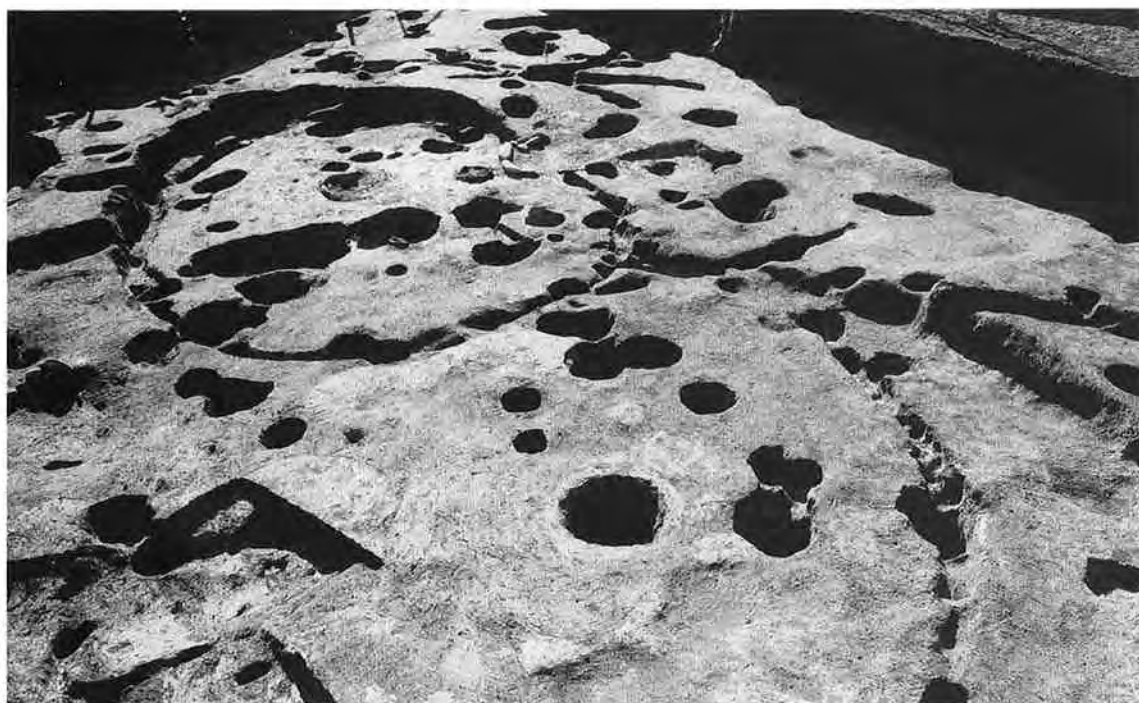


RA2199
(東から)



RE2201 竪穴跡
RA2202・2215
竪穴住居跡

RE2201
(南東から)



RA2202
2215
(北東から)

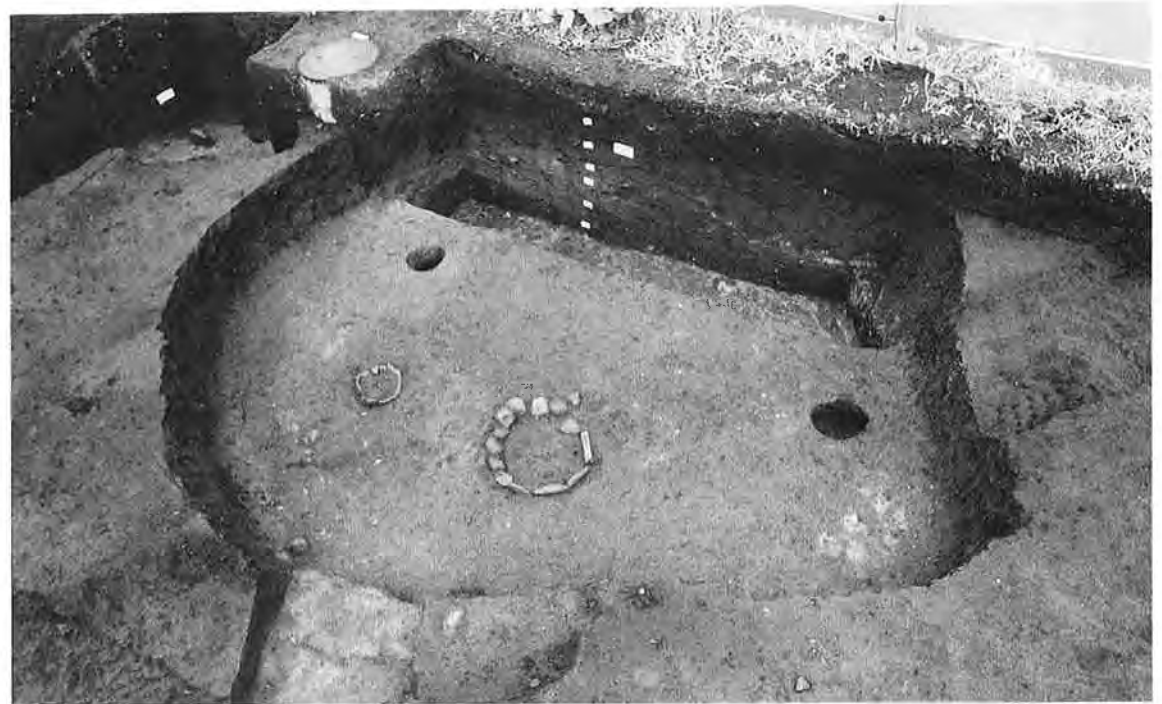


RA2202・2215
(北西から)

RA2204・2205
2207・2212
竪穴住居跡



RA2204
(東から)



RA2205
(北西から)



RA2185
2212
(北から)



RA2185・2209
2212・2215
2220
竪穴住居跡
RG8706・8707
溝跡



RA2207・2209
2212・2215
(西から)



RA2220
(北西から)

RG8706・8707
(南から)

報告書抄録

ふりがな	おおだていせきぐん おおだてちょういせき							
書名	『大館遺跡群－大館町遺跡－』							
副書名	平成6・7年度発掘調査概報							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	似内啓邦・太田代由美子・神原雄一郎							
編集機関	盛岡市教育委員会							
所在地	〒020 岩手県盛岡市津志田14地割37番地2 TEL 019-651-4111 (内線 7353)							
発行年月日	1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	番号					
おおだてちょう 大館町遺跡	いわてけんもりおかし 岩手県盛岡市 おおだてちょう 大館町143-3	03201		39° 42' 42"	141° 7' 1"	1994.10.11 ～ 12.09 1995.10.05 ～ 12.05	295㎡	個人専用 住宅新築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大館町遺跡	集落	縄文時代早期	竪穴跡	2棟	土器	早期中～末葉 ・貝殻文 ・条痕文		
			土坑	5基	石器			
		縄文時代中期 ～ 後期	竪穴住居跡	35棟	土器			
			竪穴跡	1棟	石器			
土坑	8基							
炉跡	3基							
		遺物包含層			後期中葉 ・十腰内I式			
		古代以降	溝跡	2条	・国分寺下層 式以前			

大館遺跡群

(大館町遺跡)

——平成6・7年度発掘調査概報——

平成9年3月31日発行

発行 盛岡市教育委員会

〒020-0835 盛岡市津志田14地割37番2

印刷 川口印刷工業株式会社

〒020-0841 盛岡市羽場10-1-2